收容書目

增補田園類説
縣令須知
大學養老篇
都鄙問答
齊家論
上言
民間備荒録

書刊行會會報

日發行　第九號

1698－1769

とす可きを誤て

1769－1840

とせり謹で訂正す。

又(三五七頁)騰は謄の誤、(三七一頁)邏羅は暹邏。

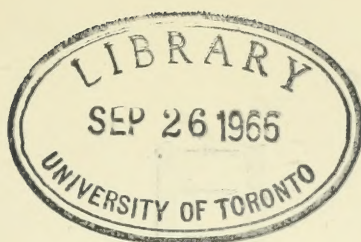
目次の商人夜話草丁數(五二九)は(五二七)の誤植なり。猶會員諸彥よりの誤植指摘は本會の歡迎する所なり。本會は微細なる誤も必ず之を訂す可し

三、大正四年を迎ふ

諒闇軍國の大正四年を迎ふるに方り偏へに會員諸

日本經濟叢書

卷八

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷八目次

解題

增補田園類說

田園類說は、古來地方に關する、最も精確なる著作の一として、學者間に尊重せらるゝ所なり、然るに本書は、久しき以前より、谷本教の著作として傳へられ、古き田法書、若くは農事參考書解題、幷に國書解題等、何れも本教を以て著作者とするも、其實原著作者は江戸の人小宮山杢之進にして、本教は之を增補したるに過ざることは、本叢書收容本の序文に依て明なり、斯る重要の書籍が、他人の著作として傳へられ居るは、其例二三に止まらざるべきも、本書の如き、偶然に其眞著者の發見せられたるは、編者の大に滿足する所なり、小宮山杢之進、名は昌世、字君延、謙亭と號す、太宰春臺の門に入て、古學を修め、大に經濟の才あり、曾て幕府の命に依り、佐倉小金の地

を開墾、若くは植樹して功勞あり、時服を賜ふ、享保年中代官に擧げられ、頗ぶる良吏の名ありと雖も、惜らくは其歿年を詳にせず、著す所は、本書の外に、享保通鑑二十卷、享元聞見志十二卷、東都事略四卷、有職玉の枝一卷、謙亭漫筆六卷、同遺集四卷あり

本書の增補者谷本敎は下記「縣令須知」の著者にして、其の小傳は、同書の下にあり、大石久敬は、夫の有名なる「地方凡例錄」の著者にして、其傳は追て本叢書に收むべき同書の下に揭載すべし、增補校正者、山內董正は、幕府の吏なり、字は治卿、鴻谷と號す、性溫厚にして學を好み詩を善くし、最も心を民事に用う、嘉永の初、幕府之を擢でて眞岡の代官となす、桑名直行、二宮尊德の二人、其の屬吏となりて、大に治績を擧ぐ、安政中駿州府中に轉任し、萬延元年、七十二にして歿せりと云ふ

本書の原本は、早稻田大學圖書館長市嶋謙吉氏の好意に因り、同圖書館本を借寫したるものなり、原本は文學博士萩野由之氏の舊藏本にして、博士は此

原本の表紙に「田園類説」、其書世に乏しからず、然れども此の増補校訂者は、尚に少し、況や其人皆傳ふべきをやと附記せられたり、編者は茲に市嶋氏の好意を謝し、併せて萩野博士の注意を多とするものなり

縣令須知

著者谷本教は、本書に序して曰く、「予縣吏となりて、常々是を思ふ、間暇あれば世に傳ふる覺書を尋ね求めて、心得の端ともなりなん事を、分類拔粹し、檢地に始、種藝に終り、凡て五篇、假りに之を名附て縣令須知外篇とす云々」と、以て本書の性質を推知すべし。前記「増補田園類説」の序文に依れば、著者の家にありたる本書の原本は、燒失したる爲め、世に傳はりしや否明ならず、自分（山内董正）も未だ其書を見たることなしと記しあれば、本書は從來餘り多く、世上に流布せざるものと思はる、但明治十九年有隣堂より發行したる勸農叢書中に収載しある由なれども、編者未だ之れを見ず

谷本教、通稱は猶右衛門、南湖子と號す、舊と近江の人なり、麓谷先生（名は本脩）の父にして、畫家文晁の祖父なり、少くして民事に通達し、大津の代官某の手代となりて、治績あり、延享元年新規御直抱被仰付て、江戸に召され、寬延二年御普請役被仰付、御勘定所詰を命ぜられ、寶曆二年歿す、著す所、本書の外に、地方一樣記辨解ありと云ふ

大學養老篇

本書は禮記にある、支那上古の養老制度を講述したるものにして、此制度は、支那に於ける禮教の最も大なるものなり、凡年五十よりは、此の養老の禮に與るものなれども、七十以上は、特に之を重じて、大學校に於て之を行ひたるものなり、故に之を大學養老と稱す、近世歐洲の國に行へる貧老保護の制度とは、固より其の主意を異にする所ありと雖も、其老て困窮する人を憫むも、亦大學養老の目的の一なれば、本書は東洋に於ける社會政策を研究する

者の、必一讀すべきものなり、著者入江忠囿は、江戸の儒にして、通稱は幸八、字は子園、南冥又滄浪と號す、徂徠の門に入て、古學を脩め、塾を開きて生徒に教授す、明和二年、年八十八にして歿せり

都鄙問答

本書は所謂心學書にして、專ら通俗的に人間の義務を詳說したるものなり、其中商人の心得となるべき事柄を論じたる點も鮮なからざれば、茲に之を收容せり、著者石田勘平は、有名なる心學者にして、名は興長、梅巖と號す、丹波の人なり、帷を京師に下して、熱心に孝弟の教を講說し、四方より來て聽講する者、實に數千人に及べりと云ふ、亦盛なりと云ふべし、延享元年、六十にして歿せり

齊家論

本書も亦心學書にして、家を齊ふるには、儉約を守らざるべからざることを說きたるもの也、本書は延享元年の自序あるを見れば、蓋著者絕筆の著作なるべし

上言

本書は何人の上言なるや明かならざれども、文中江刺郡云々の言あるを見れば、按ふに必、仙臺の人が、其藩主へ差出したる上言書なるべし、書中、民政に關する弊害を忌憚なく指摘して、其矯正法を痛論したる廉々は、頗ぶる見るに足るものあり、畑中荷澤の貨殖論(本叢書の後卷に收載す)林子平の建言書(同上)等と參照して、好個の經濟資料たるべし

民間備荒錄

本書は備荒に關する諸法を、記述したるものにして、著者が寶曆五年の自序

に「今茲霖雨破稼、米粟不登、農夫菜色アリ、予之レヲ見ルニ忍ビズ、自ラ才ノ拙キヲハカラズ、民間備荒ノ術ヲ錄シ、邑長保正ニ與ヘテ、夫ノ天恩ニ報イント欲スルノミとあり、以て其の內容の如何を知るべし、著者淸庵は、名を由正と云ひ、字を元策と云ふ、淸庵は其の號なり、奧州一ノ關、田村侯の侍醫にして、其著作は、本書の外に、備荒草木圖二卷あり

大正四年一月　瀧本誠一

解題終

増補 田園類說

小宮山昌世著
中山董正増補

増補田園類說　序

田園類說なるものは、享保年間之御代官小宮山杢進が著述する所也、杢進は、御勘定組頭小宮山友右衞門が養子にして、御勘定吟味役辻六郎左衞門が次男也、凡世上に流布する所之地方之書あまた有といへども、田園類說にまさるは不ㇾ可ㇾ有焉、本朝古來相傳之舊說をあげて、其本原を糺明し、先吏之近例を引て、其證據を辨別す、實に農政之要書と云べし、元來此書第一、檢地、第二、石盛、第三、根取より次第して、取上田地の條に終る、通計二十一ヶ條にして甚疎也、則家藏之書なるもの是也、一本二十六ヶ條なるあり、谷猶右衞門本教增補せしものにして、則其姓名を記せり、又別本三十條なるもの有、大石猪十郎久敬が再增せしものなれ共、いかなる故にや、其名を錄せず、多くは谷本教輯と記せり、谷本教は享保中之御代官上坂安左衞門手代より、延享元年新規御直抱被㆓仰付㆒、同人手代を勤、其後小野三太夫手代を勤め、寛延二年に御普請役被㆓仰付㆒、御勘定所詰を勤め、寶曆二年に死す、著述の書、縣令須知、地方一樣記辨解等有ㇾ之といへども、其家之原本燒失す、世に傳はりしや否、いまだ其書を見ず、大石久敬は松平右京亮殿領分上州高崎之郡代にて、七十餘歲にして寛政六年に歿す、地方凡例錄拾壹卷を著す、右凡例錄之内にも、處々小宮山氏が田園類說之文を引けり、又朽木文庫之田園類說

之奧書に言、此書は家父歿して、寶暦之はじめ、石君之懇需に應じて寫す、此本秘藏に年積り鼠蝕之ために文字磨滅之所あり、再其斷簡を脩補せんとの厚志を感じ奉り、其事を遂ぐ、田藩前橋郡令谷十次郎本脩と記せり、谷十次郎は、本教が子にして、父時の如く御普請役を勤め、安永年中田安殿の代官と成、其子谷文晁、（譜名世に高し）其子谷直右衞門、當時田安奧詰也、谷本脩は、大石久敬と同時之人にして、石君と書るは大石氏也、再其斷簡を補ふといへるは、再增したる證也、其上谷本脩は上州前橋之代官、大石久敬は同國高崎之郡代なれば、親しかりし事成べく、又此書中に草廬雜談之說をひけり、草廬雜談は青木文藏著述なれば、谷本教が集に引用すべき樣なし、是則大石久敬が增補に疑なき事證とすべし、扨又家藏之書に依て是を閱すれば、檢地石盛は地方之綱領、是を以開卷第一とすべし、然るに他書之惣目錄には、間竿之條を第一とし、町反畝步を第一とし、撿地を第八とし、石盛根取を九、十とす、首卷間竿八條よりして七ヶ條を加へ、又卷末に至て、撿見坪刈古今租稅之二ヶ條を加ふ、是則二子之增補なる事知べし、因て今度訂正する所は、小宮山氏が舊本に隨ひ、撿地第一とし、撿地に屬するものを附錄とし、石盛を第二とし、石盛に屬するものを附錄とす、他皆此格也、通計四拾ヶ條、且標目之注解と按書とは、二子が增注たりといへども、其姓名を記さざれば何れを本教とし、何れを久敬とせん事をしらず、余が加ふる處も、皆是古人功者之舊說を考へ正して、董正按と記せり、尤余が追補する所の疎陋にして、行屆かざらむをば、後之博達必是を校正し給はん事を冀ふものなり

天保十三年壬寅夏五月

島谷　山内董正識

増補田園類説 巻之上目錄

附錄

一 厘附之事

附錄

增補田園類說 卷之下目錄

附錄

原文貳拾壹ヶ條
附錄拾九ヶ條
通計四拾箇條

增補田園類說 卷之上

小宮山昌世著
谷本教
大石久敬　增
山内董正增補

撿地之事

撿地は、土地經界を改正するの惣名なり、農政において尤念入べき事也、古へ田畑之再撿に成は、地廣、地狹、落地、二重打、位違或は川欠、山崩、切添立出し等多く、百姓の小前入狂ひ、又は名主百姓出入ある歟、隱田の訴人有かにての事也、然る時は間竿に心を附て、土性を能辨へ、間違位違のなき樣專一なるべし

一　地方答問書曰、検地入候を、繩入候とも、竿入候とも申候、検地と申は、田畑上中下に段々の位附いたし、高石盛を附候儀にて候

菫正按地方答問書は、辻六郎左衛門（鶴翁と號す）が筆記之由申傳ふ、此書の認方を考ふるに、貴邊の御尋に依て御對申上る書に可レ有レ之、左候はゞ、地方對問書と改め申度事に候、但此書其子孫辻富次郎に尋れども、傳來無レ之、諸家に傳り有やらん、いまだ其全書を見ず

一　又曰、検地帳は、田畑竪横之間を記し、上中下之反別、銘々地主之名を書付、畝字も銘々肩書に記し申候、検地帳には、第一畝名附を大切に仕事に候、田畑地續の筆順違はざる樣に仕候て、帳に書附申候、検地帳之田畑屋敷都合書之末外書に、御朱印地に續候て、除地の無年貢地を記候、除地と申は、重き儀にて候、寺社境内、并免除田畑等證文有レ之類、又は前々より検地帳之末外書に、除地と記來候は、除地と記申候、其外の無年貢地は、何地にても、見検地と記置申候法にて候

按、見捨地之事、堂、宮、橋、干場、土取場、墓所、死馬捨場等之類、竿外とも見捨ともいふて、前方は間數をも改ず、検地帳に不レ記も多し、今は間數を改て、検地帳に外見捨長何間横何間何尺と一廉記置也

一　又曰、在々墓所、死馬捨場（損馬捨場共云）は、入會之定法に候、一分持に不レ為レ仕候定法にて候

一　又曰、新田と申候得ば、田畑屋敷等之惣名にて候、細かに申候得ば、田新田、畑新田、差別有レ之

候

一　地方一樣記曰、檢地位附は、上中下三段、五段、七段、九段に極たる地も有と云、然共田畑位附は、上中下、下々之三四段之外は不ㇾ可ㇾ有、此三四段は功者之入檢地也、不功者不鍛練にては可ㇾ難ㇾ動也、七段九段之位付は、宜とは見へず、何れも口傳にも不ㇾ及儀也、地面上中下之並は、大抵極るものなれども、其内上には少々惡敷、中にはよしといふ地有もの也、中並之地も、下並之地も、其通成もの也、依ㇾ之功者之了簡には、上には少々あしくといへども、所柄上並之地也、中には打がたし、扨は上に可ㇾ折と了簡をして、然上は極上は三度打詰也、是は少々惡敷程に、餘計を廿歩も三拾歩も加へ、釣合を可ㇾ打と、了簡之上其通に勤る也、不功者は縱令了簡は左樣成共、餘計之程を不ㇾ辨、貳拾歩三拾歩加る事は成がたかるべし、然ば平均三百歩を打べし、扨は此地主は位まけの地とて、累年之迷惑に及也、中並下並の地にも、其通なる地多かるべし、功者の繩之地は、檢地するに、上並之地内少し惡き出來たりとも、上並に勤て、迷惑及ばぬもの也、地之廣狹に心を附る事肝要也、大檢地、又は耕地限之檢見抔には、猶以歩之廣狹、檢地之善惡に心を附る事肝要也、古來より檢地は、强くなく弱なく、上並之地に中少々有ㇾ之分は、上たるべし、中並之地に、上少々有とも、中成べし、下並も其通りたるべし

一　又曰、檢地年久敷、石盛も定かならぬ所も有、左樣成地は近鄉隣鄉の盛を以て、其並に高を結び

たる地も有といへり、如レ此儀は地方は暗にて、不案内不穿鑿之沙汰成べし、先検地改といふ事は、其所の検地年久敷、百姓も數代替り、或は田畑を子孫に配分し、或は分賣抔にいたし、水帳も不分明なり、又は新田、新畑、荒間、畳地之切添、又は田成畑、又は畑成田、川欠起返等有レ之、諸事不埒に、兎合取箇納所も不レ宜、其上百姓所持之田畑不分明なれば、兎合頓路たりとも、困窮に及ものなり、然ば此類旁了簡して、吟味の上検地改るもの也、されば四五十年目には、場所により必検地可レ改事也

董正按、検地之秘事とて、竿心縄心といへる事は、古今深く心を用たる儀也、前件に所謂一様記と兩説の外に、竿心縄心の秘事口傳は有間敷也、然共横竿の秘事と申事有レ之、縦令ば一反の歩積、横十間竪三十間を定法とす、扱地位を能々考れば、上之下に中之上を交へたれども、惣體上並の田地なれば、是非共上の位にせねばならずと了簡して、横竿三尺打延し候得ば、拾五歩の迫に相成申候、一間打出し候得ば、三拾歩之加に相成申候、又川欠に可レ成場所の検地も其通也、然ば上の取を附置候ても、痛煩有レ之間敷也、又地境に芝畑荒地等有レ之場所は、縦令打詰にいたし置候も、苦しかる間敷也、是は後年追々切添出來て、歩數は年々增ものなれば、是を横竿の秘事と可レ申候、惣て検地百姓の永續を第一に考ふる事、古人功者の深く意を用る事と知べし

一 地方答問書曰、隱田と申は、検地入候時案内不レ致殘置候田畑検地入候後も、所務致候て、地主より訴不レ出候を隱田と申候て、罪に被レ行申候定法にて候、但検地候ても所務仕候上、一兩年過候と、

下には落地有レ之旨注進候得ば、落地と申候て、科に行はれざる事に候、新田開發切添等の地所も、三年四年不ニ申出一候共、隱田と申筋にては無之候

一　或覺書云、御料之檢地にも、苧高、眞菰高、具高抔云有、是を野高と名付、取は五ッ定免也、漆、桑、楮、或長さ三尺廻り三尺一束に付、米一升と極取、永一束に定免二文取に極も有レ之、此品に引合せ見候ても、皆五ッ取之定法也、國に依り漆畑、桑畑、楮畑、檢地致し候處もあり

按、取に五ッ定免といふ事、年貢を米にて取と見るゆへ、定免五ッに當り候、籾納と見る時は、直に年貢之高なり、美濃國慶長年中之檢地帳に、桑高、楮高有、何れも檢地を一束として、桑は一束を、分米一升五合より二升六合、楮は一束を、三升、三升六合迄有レ之、一定ならず、其村桑楮之善惡を以て付候ことにや、楮高を紙木高と記せしも有、一束といふも、一把といふも、長何尺廻り何尺繩〆といふ事しれず、尤定五ッ取とも、定四ッ取ともなく、信州筋慶安年中の比之檢地帳に野手米山手米抔と、小物成に高を付て、本途高內へ結置を、都て色高を記せり、是は定四ッ取も定五ッ取もあり

董正案、紙木高之事、但但馬國弘安八年之田文に、（今之水帳之事なり）朝來郡田道庄定勝之御紙田五反（皇嘉門院之御）物部庄八條院御紙田五町七反百四十歩抔と記せる有、今之楮畑可レ成、但馬石見之邊、昔より紙木高楮畑多し

一　或覺書言、多少によらず、檢地といへば、御代官所之内にても、自分計にて不ㇾ致、御勘定所へ相伺候上、地之御代官立合候て、檢地する例也、少々之儀は手代計立合候、地詰之儀は自分の手代計りにても致し候事

一　或覺書云、種々屋敷、牢屋敷、藏屋敷は前々より高外に候共、高に入候筈之事に候間、高外にて反別不分明に候は、此度相改高に可ㇾ入、右之品前々より之水帳に除置候共、高に可ㇾ入之品之分割付候て、年貢は引可ㇾ申候事

又云、村々相改候得ば、名主給、堰守渡守給等之類、新田開發人高除致二所持一候もの有ㇾ之候得共、前前水帳に記有ㇾ之、又は年久く除來候に迷ひ、其儘差置候類多有ㇾ之、當時はヶ様の除は、不ㇾ殘御取上被ㇾ成候、無二容赦一可ㇾ相二改之一

一　或覺書云、水帳といふもの、村々に有ㇾ之、御簡牒と書べし、民部省に大圖帳といふ事有

一　或覺書に、檢地野帳之折目を向にするは風のためや、按、檢地帳を水帳と書來る事、或說に、土地を水土といふを以て、水土之下略也、又或說に田は水を第一とする故也と云々、檢地は其位反別を分ち、經界を紀すものなれば、取土之下略といふも、事たらぬ說也、田は水を以第一とすといふも、檢地は田計之事にあらず、何れも附會之說也、御個と水と、和訓同じき故、いつとなく云違たる成べし、東鑑には、田文とかけり、或覺書に、江州にて水帳之事をあせはしりと唱候者有ㇾ之、何之義なるか

未ㇾ知候

一　或書云、地方には習無ㇾ之と先士中傳候事、久津間淸裕が筆記に、凡地方は治民の事也、故に聖人賦稅之法を立るといへ共、世々に變革して、當時の地方は往古之法を用ずして時之宜に從、如何ぞ習あらん、孔子之大聖すら、吾老農にしかずと仰せられ候、頑愚之老夫も、數年地方見習候はゞ功者にも至べし、又發明成ものにても年功少く、平生之心掛淺くば、不功者と知べし

董正按、地方に習なしといふべからず、此書に擧る所は、地方の大意起立を論ぜし迄にして、日用當時に迂遠なるに似たり、然ば今の役儀を勤るものは、當用をさへ辨へぬれば事濟と心得るにより、當用の外に地方の本を講習議論する人稀也、地方の道に志深き人と常に講習議論せざれば、其道窮めがたかるべし、如何ぞ習なしといふべけんや、況や御代官は勤向甚多端なり、凡此書は地方一と通りの大意を記すのみ也、此外公事裁許、寺社取扱、川除用水、御普請御廻米廻船浦觸、諸國御關所、宗門改、鐵砲改、御林山御鷹方、宿場助鄕之類、其外數多可ㇾ有ㇾ之、勿論先規の仕來に於て取計ふといへども風水旱損、天地の變災に從ひ、臨時急救之取扱は必有ㇾ之事なれば、其時遠國數百里の外に在て、如何ぞ伺之御下知を相待、空日數を過すに暇あらんや、總て取扱之行違ざらん樣にこそ可ㇾ有也、常に古書により老吏に尋、農政之事講習議論せずんば有べからず

董正按、檢地は梵天さいとの竹の立樣、見盤の見通し、野帳の付かた、竿の打方、繩引樣、何れも流

儀有レ之候て、功者に無レ之候ては、村方永續いたし兼る事の由也、尤檢地御用度に勤たる功者の人の物語に、檢地は、先第一其國柄、村柄、人柄を考へ、第二は其場所に臨で、山川の地形、水旱の樣子を考へ、第三村慥に分り、境論起らざる樣を考へ、第四野帳の番附に念を入、一番より二番へ見通し、二番より一番へ見返し、番附毎に見通り見返を慥にすれば、間違ふ事なし、第五には合野帳の淸帳上り候て、石盛を考へ相伺候事也、先檢地の心得、大法如レ此なれ共、檢地は活物にして、席上の論には辨じがたしといへり、至極の論ともいふべき也、地方答問書、地方一樣記等より要に載る所は、惣て檢地石盛の一端を記すのみにして、しかも當時に合ざる事も有レ之也、尤檢地に口傳ありて、書傳に盡し難しとはいへ共、近世江坂氏の檢地二葉草を熟覽すれば、大に益ある事也

地押之事

一　地方答問書云、地押と申は、田畑上中下之位も、有來通りにて、位附直さず、地所の廣狹を改候て繩竿を入候て、高石盛も以前の通りにて差置候、是を地押共、地詰共申候

一　勸農固本錄云、居檢地といふ有、古檢にて地味よく廣地ゆへ地押いたし候と、打出し可レ然場所にて前々より割増高請來る所を、無地增高ともいふ也

董正按、檢地に輕重大小有レ之事也、廻り檢地とは、先檢地の内の手輕き事にて候、居檢地といふは、高も盛も位共、前々の通居へ置、檢地請候事故、居檢地にて可レ有レ之候、古檢地廣之場所にて、打出し

可レ有といふは、一村地押にて候、又論所檢地といふは、多分は廻り檢地にて、事濟可レ申候得共、夫にて分り兼候へば、一村地押、或は二ヶ村三ヶ村も地押に成申候、又前々より割增高受來候を、無地增高と申は、古檢地廣之場所計の儀には有レ之間敷候、其村農業の外、助成之品柄、稼之次第を見込、格外の高盛を附置たる場所をも、無地增高と唱可レ申候

一　或書に、地押と申は、位付石盛在來通にて、繩竿を入候て、田地を改候儀にて候、是を地押地詰と申候、帳面は地押帳と申候

又田無地高は、只今迄の割附高に、石盛高不足故、不足之分を仕來通に爲レ納候を、無地高といふ、所により石盛懺成所に、無地高有レ之候

一　凡例錄に云、廻り檢地は、其地所計分間いたし、繪圖を引出歩法にて反別を改る事なり

一　二葉草に云、地押之仕樣は、新田檢地之通也、併年を經、或切畝歩に致し、畔を附替、質地等にて地主も替り、容易に分り難きを考へ、先年檢地之筆順に合せ押事なり

董正按、勸農固本錄に、無地增高の事有、何れの書にも無地高と計有レ之、無地高は國々有レ之候得共、無地增高他書に見當らず、無地高は一村一統の負高にて、總高へ還二納之一

間竿之事

一　檢地に用る間竿は、往古より曲尺之六尺壹間と定たる法也、然に工匠之間竿に紛れて、古來之間

竿に長短有レ之樣に思ふは、誤也と知べし

一　制度通曰、古ハ五尺ヲ一歩トシ、今ハ六尺ヲ一歩トスル異同ナリ、然ドモ土地ニテ五尺ト云ハ、即今六尺ナリ、殊別古ハ度量衡トモニ大小二樣アリテ、田地米穀ヲ量ルニハ、大桝長尺ヲ用ユ、度量ノ下ニ論ズル通ニテ、土地ノ廣サヲ積ニハ、一尺二寸ノ尺ヲ用テ一尺トス、是大尺ト云、五尺內ニテ二寸ヅヽ延レバ、一歩ニテ六尺也、然レバ古五尺爲レ歩ト云モ、今ニテハ六尺一間ナリ

按、本文之通、大尺之五尺は、小尺之六尺にして同數なれ共、後世にては、大尺小尺之斷なき時は紛敷故に、六尺一分之間竿と記して尤なれ共、一間に一分づゝ加へ來る故、六尺一分之間竿と記事通法なり

一　三器攷略曰、中葉以來、以二曲尺六尺五寸一爲レ歩、此歩法未レ審二其所一レ始、或謂、昔者量レ地之竿、長一丈三尺、併二二歩一計レ之、人立提レ竿、中間兩端迭昂低、逐レ點レ地以進行、首尾接續以度レ之、蓋取二其簡捷一也、今攷レ之、人立提竿在二腰間一、去レ地以二二尺五寸一爲レ股、地歩六尺爲レ勾、而依レ術求レ之、其弦適得二六尺五寸一、故制竿兩頭、各六尺五寸、通長該二十三尺一、後人誤用二此竿一、就レ地而度レ之、竟以二六尺五寸一爲レ歩、而丈三之竿、迄レ今尚未二之改一耳、元和以降、新田之法、六尺五寸爲レ歩、三十歩爲レ畝、十畝爲レ段、十段爲レ町、計二方面一以二六尺五寸一爲二一間一、六十間爲二一町一也、此書今攷茲用二此法一、近歲又檢レ地、用二六尺之竿一、他加二舊法一以二其未一レ久故此不レ取レ之

按、中葉以來六尺五寸を歩とすといへるは、上方筋には、古撿之村とて、六尺五寸竿又は六尺三寸竿之場所と申傳へたる所の有レ之を以かくいへ共、其村に撿地帳は勿論、何にても記たるものなし、畢竟地面之歩廣成故申傳へたると見へたり、依レ之慥成事共せず、或說を擧て土地を量るには、六尺一間の積りなれ共、量地之捗行樣に、竿を一丈三尺にして、擧迄大概二尺五寸計と見て、六尺五寸を弦とし、二尺五寸を鈎とし、算法によりて股を出せば、地面六尺之もの二ッあるをもて捗行、ために一丈一尺竿を製したるを、後人誤て六尺五寸一間の所も有と思へるは、左も可レ有レ之事也、信州飯山に仕し人に知れる有、そのかみ城主に仕へ、撿地又は地改抔に度々出し事有、間竿之尻を兩手に持、胸に竿尻を當て、竿先を地に附て印をつけ、二間、四間、六間とかぞへさせたるといへり、是右之說に同じく、一丈三尺を弦とし、地より胸迄を二尺五寸計と見て、是を鈎として股を出せば、地面一丈二尺二分內となれば、手廻し之ため、一丈三尺竿を用ひしと見へたり、又元和以來、新田之法に六尺五寸を歩とすといふ事、是は開發以來新田地を割渡時之事也、夫を心得違て斯いへり、最初之割渡には、其節役人の心にて用し事也、享保年中、南北武藏上總國千町野新田抔最初之割渡には、何れも六尺五寸竿を以て渡置、開發成て本撿地之節は、御定之六尺竿を以て撿地極る事なり

董正按、間竿歩法之事は、近來越後黑田玄鶴が著す田畝里程考に、和漢古今之法を委く論ぜり、引合可レ見

一　地方答問書曰、家作等之積には、六尺三寸、又は六尺五寸も用ひ候、田畑之歩積にも、中古天正年中以前頃迄は、六尺五寸を用候と申傳候、文祿年中之頃、秀吉公之命にて、諸國檢地の時は、六尺三寸之竿を用候と申傳候得共、右何れも書記候儀も無ㇾ之事故、難ㇾ信用ㇾ候、慶長元和之比より、檢地竿は一丈二尺二分を用來候、一間を六尺一分に定候、一間に一分宛餘計を加來候は、前々より之格例に候、今以公儀之御條目に、一丈二尺二分竿を以檢地可ㇾ仕旨、書載有ㇾ之候事

按、古天正年中以前比迄は、六尺五寸を用候と申傳ふる檢地の場所は、いづれも地面の廣きを疑、工匠家作之間竿を押あてがいにて云傳ふる事も有べし、扨檢地竿一丈二尺二分にて、一間六尺一歩に定たると云事、元祿年中美濃國御檢地之節、御條目にも間竿之儀、六尺一間之積可ㇾ爲二一間竿一、但一間に一分づつ加來候條、長一丈二尺二分竿を以可ㇾ打、勿論一段可ㇾ爲二三百坪一事と有ㇾ之上は、一間といふは、古來御定にて、一分づつ加來と見へたり、余若き時知る老人のいへるは、往古は五尺一分といふ事有ㇾ之を以、六尺一歩之間竿を以檢地するといふ事を、いつとなく歩字を何寸何分之分之字之誤て、今は六尺一歩通法となれりといへり、左も可ㇾ有ㇾ之事也、然共六尺一歩とする事も通法に成て、檢地帳奥書にも六尺一歩の間竿を以て、一反三百歩の積御檢地相極候と書來れり、或役人の奥書に、六尺一歩と書て渡せし檢地帳も有と、大和國にて聞し事有、扨右之通にて、六尺一間といふは、古今の通法成に、其所の申傳にて、六尺五寸竿の古檢之場、六尺三寸竿の古檢之所といふ

を、今更論ずるも無益之事也、其村々傳への儘にして、取箇をも積り可㆑然、美濃國堤間數之竿は、古來よりの引付にて、六尺五寸を一間とす、今更改べきにもあらず（董正、美濃國郡代支配之地役人に、堤方と唱へ候役名のものあり、夫が取扱ふ間竿は、今以六尺五寸也と、凡例錄にも見へたり）

董正、間竿之考、凡田畑量地の法、古代何間と稱せず、惣て六尺を壹歩と唱へし也、然るに當時量地にも家作にも歩と稱せず、何間といふ尺杖を間竿といふ、小瀨甫菴が筆記に、永祿元年織田信長尾州樂田の城中に、高サ十二間餘に壙を築き、其上に五間に七間の矢倉を二階に造り、是を殿守と名付と云云、此時旣に間數の事有㆑之、夫より七八十年も以前の頃は、敷地に間數無㆑之事にて、政所賦名引附に

文明九、十、十七　松平遠江入道道慶申狀

所々永代買㆓得屋敷㆒、安堵御奉書之事

一所三條坊門室町と、烏丸御面子貝北頰間口三丈九尺、奥口三尺、三尺代三貫五百文、賣主鷹司中將伊春賣劵云々

文明十三、十一、貳拾貳　高野山安養院雜掌申狀

寺領冷泉洞院事頰南西、四方各拾五丈敷地之事、任㆓買得㆒相傳、可㆑被㆑成㆓安堵㆒御奉書云々

右之通敷地には丈尺を用ひ、田畑には町步を唱し事成に、永祿の頃より、田地敷地家作道橋の差別な

く、一樣に間數を唱ふる事と成し也、然ば間竿之名は、太閤檢地之時より始りし事成べし

町段畝步之事

一步は六尺四方、一畝は三十六步、一反は三百六十步、拾段を一町とする事は、上古之定也、中古以來三百步を一段とし、其後大半小と云事起り、今之石高に成て、三拾步を一畝とし、拾畝を一反とする事、一統之通法と成たる也

董正按、此條に、上古中古其後といへる、次第混雜相違せり、後に之を辨ず

一　制度通曰、本朝之古制、凡田長三十步、廣十二步爲レ段、十段爲レ町、日本紀曰、孝德天皇三年春、班田既訖、凡田長三十步爲レ段、十段爲レ町、本朝古之步制ハ唐ニ準ジ、五尺ヲ一坪トス、一段ハ三百六十坪也、一町ハ十段ニテ、三千六百坪也、町ハ唐ノ頃ニ準ジ、段ハ唐ノ畝ニ準ジテ廣狹アリ、今ハ三千坪ヲ町トシ、三百坪ヲ段トス（是ハ天正年中ヨリ如レ此トイヘリ、又一段ヲ割テ一畝ト云コト、イツノ比ヨリ始リシコトヲ知ラズ）

案、五尺を一坪とすとは、前條に記す通り、大尺之小尺にて、則六尺一間也、扨往古三百六十坪一段成しが、今は三百坪一段とすと有て、いつの頃より變ぜし事を論ぜず、又畝といふ名目、いつの頃より始る事を知らずといへり、予が臆見には、三百步一反になりては、貫高の頃より始り、畝といふ名目は、石高に成て起れりと見へたり、京都將軍家以來、貫高永高大半小抔いへる名目出來て、其內大半小は一反三百步之積にて、其半分百五拾步を半とし、三分二貳百步を大とし、三分一百步を

小とす、畢竟一反之小割之名也、畝といふも、一反之小割なれば、石高起てより始ると見へたり、古に六貫一疋といふ事有、是は田坪千坪を貫とし、六千坪を六貫とす、此六貫の地より軍役一騎を勤る事也、然に古來の積三千六百坪を、一町之積にして、六貫之地一町六反二百四十坪なれば、其積り六ヶ敷也、三百坪を一反とし、三千坪を一町とすれば、二町にて直に六貫目成を以、早速積り知れ安きにより、斯成し也、鎌倉將軍家より、國々守護庄園に地頭有て已來、段々古法も失て貫高永高大半小に出來て、終に今之石盛とは成たる也、貫高永高の譯、末に見へたり

董正案、此案甚杜撰也、六貫一疋といふは、鎌倉時代の古語にして、勿論古檢の時は田賦也、然を古檢の百六十步にては、反步積りむつかしとて、新檢の三百步に取合たるは、小野道風がかける和漢朗詠集の類にて、埒もなき事也、昔は取箇もゆるやかに、後世次第財用不足し、年貢諸役の取方强く、新檢地打出すべきため、三百步に定たる成べし、大半小の說、六貫一疋の辨、末に詳也

一　唐ノ步畝頃、本朝ノ步段町ニ準ズ、田地二段ト云フ、漢土ノ積リ見當ラズ、然ドモ一シキリヲ段ト云コト、後世迄モ多ク見ヘタリ、田地二町ト云コト遂見當ラズ、左傳襄公二十五年ニ町原防云々、杜氏集解曰、隄防間地不レ得ニ方正一、如ニ正田一則爲ニ小頃町一、賈逵曰、原防之地、九夫爲ニ三町一、當ニ一井一也、此說ヨリ外ニ本ヅク所ナキニヨリ、先儒モ所用セラレズ、然共町ヲ以田地ヲ量ルコト是ニアラハル、本朝町反ノ名モ是ヨリ出ル成ベシ、字彙ニ、町字ヲ解シテ田區ノ畔埒トアリ、田地ノシキリヲ

段字ト相通ジ用フト見ヘタリ

拾芥抄曰、凡田以二方六尺一爲二一歩一、三十六歩爲二一段一、頭注曰、三百六十歩爲二一段一、積七十二歩爲二十代一、百四十歩爲二二十代一、二百六十歩爲二三十代一、二百八十歩爲二四十代一、五十代爲二一段一、式曰、代者頭也

按、往古三百六拾歩一反之小割と見へたり、扨七十二歩を十代とし、五十代を一反とする積なれば、廿代は百四十四歩也、四歩の落字あり、三拾代は二百拾六歩にて、六之字拾之字顚倒せり、四拾代は貳百八十八歩成を、八之字落字と見へたり、本文書寫之誤成へしと思ひ、拾芥抄を校するに、是亦本文の通なれば、拾芥世に行はるゝ時よりの誤と見へたり

一歩一段ノ積リ、拾芥ニ載ル所、令ノ文ト異ルコナシ、其内令ニハ五尺四方ヲ歩ト云、拾芥ニハ六尺ヲ歩トスルノ別アレドモ、令ハ長尺ヲ以積リタルモノニテ、是又替ルコトナシ、但代ト云フコト、式ニハ見ユレドモ、令ニハ顯ハレズ、五十代ヲ一段トスル時ハ、十代ハ今ノ二畝バカリニ當ル、古ノ詞ニ十代田ト訓ズ、則此事也、又段字今ハ反ヲ用ルモ、是段字ノ艸書反ニ似タル故、訛傳シテ如レ斯

拾芥抄曰、一段爲二一町頭一、十段爲二一町積一、三十六町爲二一里一、三十六里爲二一條一、又曰、條起從レ北行二於南一、（限二三十六條一）里起從レ西行二於東一、（限二三十六里一）町始艮終乾、（但以上可レ准二圖例一）右ノワケ又令ニ見ヘズ、其後ノ制法ト見ヘタリ、是ハ今ノ三十六町一里四方ノ所ヲ、西ヨリカゾヘ始テ、一里二里ト云、一里ゴトニ方一町ノモノ三十六箇アリ、然幅一町ニ長三十六町ナリ、又是ヲ北ヨリカゾヘ出、一條二條ト云、一條ゴトニ

方一町ノモノ三十六箇アリ、幅一町ニ長三十六町也、里ト云モ、條ト云モ同事ニテ、縱ト横トヨリ積ル迄ノ替リ也、古ヘ田地ヲ分ツ定法ト見ヘタリ、今ニ至テ鄕村ノ名ニ、東條西條等ノ名アリ、又古文書ニ、某ノ條ト云フコト多ク云リ、古ヘ通ジ行レタルコトニテ、中古以來其法廢絶スト見ヘタリ、拾芥ニ又曰、條里ノ坪可レ隨ニ國例一ト、是ニテ知ベシ、本朝中古、國法ニテ一里ノ內ニ小名ナシ、何里何町ト云フコト見ヘズ、拾芥ニ、三十六町爲ニ一里一ト云フコトアリ、是ハ上ニ合ズル通ニテ、田地ノ積リ方一町ノ田ヲ三十六並ベタルヲ云、路程ノコトニアラズ、（黄正按、雜令ニイヘル路程ノ法、田地ノ積[illegible]例スルナカランカ、此說ニテハ、[illegible]ワカラザルニ似タリ）三十六町一里ト道法ヲ積ルハ、是等ヨリ轉ジタル成ベシ、總別本朝ノ里ト云フコト三樣アリテ、戶令ニ五十戶ヲ一里トスト云ハ、土地ノ廣狹ニカマワズ、竈數ヲ以テ一在所ヲ立ル名ナリ、雜令ニ、凡三百步ヲ一里ト云ハ、路程ノ法也、三十六町爲ニ一里一ト云ハ、田地ノ積ナリ、其ワケ同カラズ

按、唐之步畝頃と云より、是迄制度通之文也、三百六拾步一反、三百步一反と成事は、既に前條に辨ず

黄正按、本朝の步畝頃町、唐之步畝頃に準ずと云說はきと不レ致說也、唐の食貨志に、唐制度曰、以レ步其濶一步、其長二百四十步爲レ畝、百畝爲レ頃、〇六典曰、凡天下之田五步爲レ步、二百四十步爲レ畝爲レ頃云々、隋唐の時、二萬四千步を一頃とす、今の四町六反二畝二步四厘に當る、古の周尺は、今の七寸六分に當る、六尺を以乘ずれば、四尺五寸六分と成、是一步之制也、百步を畝とし、百畝を頃と

すれば、周の百畝は、今の步法五千七百七十六步に當る、田法三にて除レ之、今之一町九反二畝に當る、然ば周の世と、隋唐の時とは、百畝の積りも斯様に廣狹相違有

本朝にも田制古今相違有習なり、況海外異域の制を引較べん事をや、的當せざる道理なり

大半小之事

大半小は、田地壹反三百步を三ツに分し小名にて、今之石高より以前に行れし事也、然に其後地改をして地廣成故、往古之三百六十步に取合せ、大半小を附し所も有、今懸案を記す

一　地方答問書曰、世上に太閤檢地と申、文祿年中頃には、田畑反別を大步小步半步と記候水帳も有て、大步は貳百步、小步は百步、半步は百五十步之事に候、三百步此時も壹反に候

按、世上に太閤檢地は、三百六十步と云事誤也、既に大半小も三百步壹反成事分明也、越後國蒲原郡の內新發田檢地は、三百六拾步壹反にて、反別を大小半に用來候、大は貳百四拾步、半は百八拾步、小は百貳拾步と云、余其所に至らざれば、委敷は事論じ難しといへ共、是譯も有る事也、檢地も多くは承應之頃なれば、其時地改をせしに、步廣成ゆへ、往古の三百六拾步へ取合せ、反別直せしものと思はる、去によりて租納之時の如く、米納に成ても、矢張取米入辻を、直に其村の高とせしも、步廣き故なり

一　或覺書に、天正十九年檢地奉行寺田左京、下野國足利郡羽田村水帳之內に

一　中田五反半四拾貳歩
一　下田三反大拾壹歩
　　田合九反小三歩

右位反別有て、高石盛なし、此時代は關東にて、永高專行はれし事なれば、如ㇾ此中下の位も有ㇾ之、壹反三百歩之積にて、惣成撿地帳もあれば、永高は年貢辻を永樂錢に積りて、今之根取と云ものの如く成ると知べし

堇正案、大半小之事、新發田撿地に譯有事にあらず、又地廣の場所を、文祿承應の頃よりして、後の新檢の取合せたるにもあらず、鎌倉時代にも、既に大半小の制度あれば、夫より以前、何れの代より始りし事を不ㇾ可ㇾ知、先例の古きものを爰に記す

但馬國太田文　太田太郎左衛門尉政賴　弘安八年之注進

　　朝來郡

當國二宮領家染殿法印跡　地頭島津常陸入道
粟鹿大社定田　五拾二丁小四拾五歩
常荒流失　二丁二反六十歩
人給　十四丁四反大外略

證菩提院領

久世田庄拾九丁八反半外略

右田文と云は、今之水帳にて、弘安八年は北條貞時が初代之事にして、此時にも大半小之名目あれば、其始詳ならず、又江州高島郡朽木家の古今書に

奉沽却　田畠地之事

合三百弐拾四歩者（字此田作大三拾四歩、畠五十歩、右近谷藤太夫作也）

右件田畠等は、字藤太夫先祖古傳私領也、雖レ然依レ有ニ直要用一現米三石三斗、（庄之升判隨かくて）沙彌蓮法に銀永代所レ奉ニ沽却一明白也、更に不レ可レ有ニ相違一候、若子孫實有下請ニ返見一之輩上ば、以ニ一倍一沙汰可ニ請返一候、將以雖レ爲ニ公家沙汰一一塵不レ可レ申ニ他妨一、但此地は三尾大明神依レ有ニ夢想一、沙彌蓮佛畳田之帖、所レ奉ニ寄進一候、社頭明白也、更雖レ經ニ未來際一、不レ可レ申ニ他妨一、依賣券之狀如レ件

字藤太夫判

嫡子藤助判

建武二年十月十一日

右建武二年は弘安八年より五十年後也、後醍醐帝即位二年之事也、此沽券に記す所の大三十四歩と云るは大は貳百四十歩之事にて、半は百八拾歩小は百貳拾歩、都て此頃は古撿三百六拾歩之時代なるを、新撿三百歩に成るも新撿に取合せ、大半小を附し也、然るを古撿に取合たるといふ舊按は甚誤也

又按、前條に畝と云事、昔は無レ之、石高に成て出來たるといへる舊按も、妄說也、是又朽木家之古文書、其外にも多見へたり、依て其古きものを一ヶ條こゝに記す、尤拾芥にいへる條里之證據也、爰に見へたり

讓與　私領畠之事　　拾芥抄　北より南へ行を条と云　西より東へ行を里と云

合三畝は　在二高島郡一、尤も鄕內五条七里貳拾坪也　但救急庄へ年貢壹升、外無二公事一者也

右件畠は、雖レ爲二明智禪尼相傳一、六郞女仁讓與處實正也、然ば手繼本文書添べく候得共、依レ有レ類二地裏破一、讓與上は爲二子孫妨一有レ之者、盜人と號、所レ有二罪科一者也、依爲二後證一、讓狀如レ件

實德三年九月五日　　明智禪尼印

右證文にて、反別步之名目有事明也、此證文を案ずるに、反別有て、位石盛なし、壹畝三拾六坪にて、三畝八百八坪也、畑方米取にて、救急庄へ年貢壹斗出るよしなれ共、惣て此時代の證文を見るに、壹反に付幾ツと定りたる盛はなし、田畑の位もはきと定らず、年貢所當出擧米定得分等之事有といへ共、鎌倉室町兩時代戰國之時之法は後世考べからず

入步之事幷步詰畝引

一　或覺書に、檢地之節竪横共に、間數に半を記候事無レ之候、前々より兩半と申不レ記事に候、兩半と申譯、何之譯に候哉、未レ致二了簡一候、入步と申事、水帳に記候時心得違にて、內何步入と記候帳面

有レ之心得違に候、古來より入步と申事に候間、入何步と記レ之候古法に候、若何步と申事合點なく候は、無二是非一候間、外何步入と記可レ然候

按、入步と申事、如何樣之所、入步といふと不レ記故、初心之者は合點不レ行候、是又元祿年中之御條目に、惣て田畑廻りに、北堀田有レ之は、遂二詮義一本步之內へ入步いたし、水帳へ可レ記事と有レ之、然ば堀田之所之步數を、畝步之內へ積り入て、其譯を地株之脇書に記置事也、其外入步に可レ成場所何程も可レ有レ之、又込步といふ事有レ之、是は地面之惡敷所は改レ之、步數を減じて不レ記、是を捨步共云也、又木陰引畝有レ之、木陰引は新田御條目に、東南に高畦を請候場所、并往還道筋、並木有レ之場所、田畑陰引可レ爲二見計一と有レ之、畝引御定は、畔際壹尺も可レ除レ之、但類地も畔際壹尺宛之積たるべし、高畦等は見計可レ引レ之と有レ之、能々會得せざれば、畝引三尺宛之積に心得違ふ事有レ之、あぜ引壹尺五寸宛之積たるべしにて可レ考

畝步請加捨之法

二步 四步	三步	五步 七步	六步	八步 十步	九步
十一步 十三步	十二步	十四步 十六步	十五步	十七步 十九步	十八步
廿步 廿二步	廿一步	廿三步 廿五步	廿四步	廿六步 廿八步	廿七步

右貳步は壹步加へ、四步は壹步捨、三、本之都合とす、他皆此定法也、是を步請之法といふ

一　二葉草に入歩之仕樣、横間へ簡入時は、長間にて入歩之何歩を除、夫へ六を乘じ、何尺何寸何分と成、夫を横間へ足し、端寸を切捨る也、長間へ入も術同じ

長拾間三尺
横五間六寸　此坪五拾六坪半

入歩貳分半

貳歩半	壹歩	壹歩	半歩
	拾間三尺		

五間六寸

如此少々はなれたる少分之地面を、元歩の内へ足すを、入歩といふ

長拾間三尺、入歩貳分半

横五間貳尺貳寸八厘七五分成　此坪五拾六坪四厘九毛

但端歩を去故坪數少々減るといへ共不苦

端寸切捨、横五間壹尺八寸と極る

端寸切捨定法六寸、壹尺貳寸、壹尺八寸、貳尺四寸、此積を以て壹尺八寸を極る事にて候

董正案、入歩之事、二葉草にいへる、上の圖の如く割入る計を入歩といふにもあらず、一樣記の說を

考るに、一畝分より内の小歩成田畑は、一筆に帳面に、記事如何なれ、近所の田畑の肩書に、右歩数を記し、入歩として結ぶ也、然共地主替りたるは、格別なるべし、然ば四十歩五十歩入抔認る事は誤り可ㇾ成と云に、又前條或覺書に載る所の入何歩と記事、古法に候へ共、若合點なく候はゞ、外何分入と記可ㇾ然と有ㇾ之、又元祿年中の御條目には、本歩の内へ入歩いたし、水帳へ可ㇾ記と云々、右按書には、歩数を積り入て、地株の肋書に記置といふ、又肩書に記候共いふ、諸書にて少々宛の相違は有ㇾ之候得共、元祿の御條目通り相心得、地株の肋書に相記事にて、難は有ㇾ之間敷事也

石盛之事

石盛は、地面之位を定め、年貢之石数を盛附る事也、計代分米石盛共に、同體異名なりと知べし

一 地方算法前集曰、石盛といふは、壹間四方之稲を刈て籾壹升あれば、米にして五合有、壹畝にて壹斗五升、一反壹石五斗、壹町拾五石之有米を、拾五之盛と定たる也、壹町より百千萬と次第するゆへ、壹町に付拾五といふ事にて、拾五之盛と云・米ハ石より百千と算する故に、石をさして壹ッといふ也、盛を上田にて立るも有、中下にも立る有、時宜に寄何方にても次第位毎に、二ッ違ひの定也

按、是廻り遠き說也、壹町拾五石之有米を、拾五之盛と定といはゞ、壹反には壹ッ五分とか、壹ッ半とか可ㇾ謂ものなれば、先以算不ㇾ合、其上壹町に付拾五之割也といへ共、斷書に記置年は不ㇾ聞、

元來何之入組たる事もなく、壹斗を壹とする故、壹石を拾としたるもの也、又石盛とは、地面に石數を盛附置といふ儀也、斗代とは、地面何斗に當る所と云事也、扨石盛極樣上中下之位を極る事も出來かたを本として、古性を陳蹟にせず、石盛之吟味、土性第一之儀にて、出來かたは第二たるべし

一　地方答問書曰、新田檢地入候て高を附候事、三年之耕野道、正敷竿入候て、石盛之考は、壹坪之稲を外報に致し、壹升有之時は、五合摺りの積り、壹反三百步に懸候得ば、米壹石五斗と成、是を拾五之盛と致候、然共是は大法之儀にて、一向種々此積を以石盛候と申には不限候、地所之樣子を考、又は近邊地積之石盛をも見合候て極候儀にて候、但右坪外之仕方、事之外能成にくき事に候、功者之者之入候儀にて候

斗代分米之事

一　地方答問書曰、壹反三百步之高は、石盛と唱申候、斗代と申も、石盛之異名に候得共、百姓等壹反之反取をも、斗代と唱違候て、紛敷候故、斗代と唱候は不宜事故、石盛と唱へ候也、石盛といひ、穀盛と申儀は無之事也

一　地方算法前集曰、分米と云は、高といふ事也、上中下田畑夫々之分之高と云心にて、分米と認るなり

扱、百姓反取をゝ斗代と唱違、今にては斗代反取大きに別物なれども、永盛と云も、斗代同意にして、元反取之樣成ものなれば、關東筋にては、昔之名殘りて唱る事有と見へたり

一　地方一樣記云、地方盛之次第、先關東は田方之反取米を、四を以割れば斗代と成、中田下田は、上田之斗代に貳ツ下り成べし、然共前に所レ記地面土性取箇に可レ依、大方は段々下り也、畑方斗代は田方に六分違成べし、關東は貳石五斗替、田畑六分違と云法也、先中田を上畑に引當て用る法也、依レ之中田に六を懸て上畑に用、下田に六を懸て中畑に用、下々田に六を懸て下畑に用る、其位如何程し、有といへ共、心得同前也、如レ此を中樣之法にして、地面地性甲乙により上田を上畑に用る事も有べし就レ夫免相取箇も、たとへ反取たりといふ共、斗代を考事田畑同然也、其內畑方は貳石五斗替と云法有、此法を以永にして極る也

一　又曰、上方に三上銀納と云法有、是は田畑五分違と云也、上田之取米を倍して上田斗代に用、中田下田は上田の貳ツ下り前に同じ、畑方は上田之斗代に五を懸て、上畑斗代に用、中田之斗代に五を懸て中畑に用、下田の斗代に五を懸る下畑に用心得、關東同然也、然共關東は中國を上畑に用、是貳石五斗替之法也、上方は上田を上畑の直段に用、是之分一銀納之法也、田畑上地下地に心得、是又關東同然也、田畑共に米取にして加合、其內三分一銀納にして、是を畑方として極たるとみへたり

今按、斗代石盛分米抔いふ事、いづれもまち〳〵の說有共、高といふ事、元來如何樣之儀といふ事會

得せずして讓故難ㇾ分、壹分之籾壹升あれば、五合摺にして壹反壹石五斗、壹町十五石の有米を、拾五の盛を定と有、又斗代は石盛の異名也と云事、今にては同事の樣なれ共、石盛は石盛にして、米代は斗代にて、一事にてはなし、元來石盛といふは、地面に石數を盛付て置事也、分ていはゞ、石盛は惣名にして、斗代は其盛かた也、古き撿地帳に斗代四斗代抔書、又石盛三石盛四石盛等書も有、いづれも壹斗を一之位、壹石を十之位、壹石五斗を十五とす、平日の詞にては斗歩石以上へ通じて、壹石三斗代、壹石五斗代抔といふ、地方一樣記に、斗代一ッ下りの外は有べからずと云に心を附べし、斗代盛之樣の口傳有よし、其口傳を聞ざれば、其譯しれざれ共、此作者貫高、永高、石高之譯有事を知らず、村高といふもの、往古本朝において、井田の法を考へ、國郡の高を定たる抔と譯もなき妄說を記せり．取に足ざる類說也、口傳といふも、左迄の事も有間敷也

又分米之事、田每に夫々之分に高と云事をいひ、又は小以〻に石盛を寄合せて附事との兩說、共に同意にて、無稽之說也、夫々三分の高ならば分高とこそ可ㇾ云、分米と記は、高は元來年貢に取所の積辻成を以、米に分て何分何斗之米有と云儀成べし、又上方は田畑五分違、關東は六分違と云說を立て、田畑の段違といへ共、古來相傳の說とも思はれず、土上中下を定る事、地方鑑、勸農固本錄、其外之覺書にも有ㇾ之、詮ずる處土之上中下成事なれば、出來形といふ内に、土の吟味も考ふべし、されば田畑作物の外、德用の品に助成の有無をも考へて、盛を附る事也、元來其年貢に納る程を見積りて、村高

に極しものなれば、昔は左も有べけれど、今既に納取辻と高は高、取箇は取箇とつかれて、又別に根取といふ事出來し故、元來之高は噂ものなれば、田畑作物之外迄を積りといふ事、今にては有間敷也、勿論高により取箇に高下を見合、且諸役懸りの本なれば、檢地の分て大切成ものにて、尤可ニ吟味一事也、別に覺書も記置けり、略レ之

董正按、右分米の條、上方田畑五歩違の條共に地方一樣記之說を論ずる成べし、扱斗代一といふに心を附べしといへる、衆書を校合するに、皆其通りにて解すべからず、因て原本に戴て、又分米の事諸說あり、村總反別にて村高何程、是を上中下の反別丈分てみれば、一筆の分れにて米何程に成といふを、分米といふ也、たとへば

上田何町何反步　　十五

此分米何程

此町步の分て、何石何斗といふ心也、此分米といはずして、此分の米と心得て能分る也、右は菊田盛風が說に隨ひ、能聞へたり

名寄帳之事

一　地方箬問書云、名寄帳と申は、百姓の田畑壹人限之持反別を、一所に寄候て記申候

一字何　上田何反何畝步　　何右衛門

一同　中田何反何拾歩　同　人
一同　下田何町何反歩　同　人
一同　上畑何反何畝歩　同　人
一同　中畑何反歩　同　人
一同　下畑何畝歩　同　人
一同　下々畑何反歩　同　人

以小

何町何反何畝歩

分米何拾何石何斗

右は年貢諸般之勘定割付るに付、百姓名壹人分之持反別を、帳面に記置事也

董正按、檢地帳水帳無レ之村々は、名帳を水帳の代りに用事也、檢地帳水帳有レ之候ても、村方に私に當地主を別に名寄帳に仕立候村も有レ之、且一村分鄕に成候節は、最初公儀より渡り候分鄕名寄帳を、其地頭にては水帳同樣に用候定法のよし

家抱分附之事

一　勸農固本錄云、家抱分附百姓といふは、親之代高、或は四五拾石目も有レ之を、子孫或は家來に分

讓り、其以後檢地入候節、水帳へ惣領、或は名を肩書に仕、何右衛門分誰と記す、是を分附と云、家來に讓りたるを家抱といふ、勿論年貢諸役共に、惣領或□の方へ相渡、分附の名のもの手前分と一緒に、年貢諸役相勤申候

一　地方答問書に云、百姓之譜代のものを、百姓に仕付置候儀、家抱と申候、門屋敷庭子共申候

菫正按、分附と申は、本文問本錄の說にて埒明申候、家抱といふは、下人へ田畑讓り、肩書に誰分誰と認候所は、分附同樣に候へ共、身代は百姓譜代之下人也、尤子孫をも家抱にするものあれど、是は子孫を家事にする心にて、家抱にする也、門屋と唱は、百姓居屋敷地の內に致し、別居いたさせ置を申候、庭子と云は、譜代の家來の內妻子を爲ㇾ持、自分居宅の內臺所などへ別に部屋をしつらい、住居爲ㇾ致候を申候、委敷は凡例錄に見へたり

根取之事

根取は、直に村高の事にして、石高の始には、此名目なし、籾納止て米納に成、籾高をば米高とし是を取箇の目當にせしより、根取の名目始りしなり、今の樣取とするもの、本文に記す

一　地方答問書云、御取箇の儀に付、根取と申來候事は、關東方にては、上田壹反步の石盛拾五と申は、分米一石五斗にて候を、四ツ取の積にて、取米六斗に當るを、是を根取と申候

按、根取と云事は年貢辻之事にて、直に村高の事なれ共、籾納止で厘附起り、高は高、取箇は取箇と分れたる故、村高は噂ものゝ様に成て、根取と云事起り、又四分取、五分取の說になりたり

一　又曰、理屈を申候得ば、元來檢地の石盛極候時、上田壹步の坪刈、籾壹升可レ有地所は、三百步壹反にて、籾三石取の積を以、五合摺の有米壹石五斗を、拾五の盛と極候、然ば有米の五分は、七斗五升に候間、是を根取にいたし、七斗五升迄は輙く可レ被レ取筈に候間、是を定格の根取に立御取箇の本に可レ仕儀は、勘定合の理屈一筋立候事の様に候へ共、如レ此取候儀は難レ成候故、理屈取にては、百姓甚困究仕候、石盛極候本は、先坪刈籾の積にて候へ共、一槪に左様には難レ極候、古來石盛極様、並國法も有之郡限に石極候處も有レ之候故、實に坪刈籾を以石盛極候共難レ申候、左候得ば、石極を本に致し根取に用候儀も決定難レ成候、田畑に始て高盛を附候時は、坪刈籾の積を以考極候得共、再檢に至り候ては、村高の様子により、山方里方海邊町場、其外田畑に作候米穀の外、德用有レ之もの作り候場所、並品々は、考を以坪外籾の積之外、石盛高を附候勘辨有レ之候、上方五畿内の內にても、大國抔は一反の石盛廿五六、關東方甲斐國抔廿七八、北國越前國抔卅七八迄は石盛有レ之、國々坪刈籾の積にて植候、石盛に無レ之候、如レ此甚高き石盛を、五分取之根取可レ用様無レ之事に候故、根取の沙汰、御取箇吟味之憶に正事は、定めがたく候

按、石盛の本意は、村高は直に年貢の籾辻なれば、國に依浮所務多き所は、其見込にて石盛に積り

込し所も有べし、又厘附といふもの始りて、高と取箇と別物に成し故、其地頭の心々にて、石盛を上し所も有べし、右之趣成を以、今にては厘附反取のみ、見合に成べくして、高は見合がたき事有べし

董正按、甲州石盛廿七八といへる事、或書に、甲州は梨、ぶどう、栗、柿、椎茸、藥種類、木綿、絹紬、煙草、蠶等の助成多き國故、取箇石盛餘國より格別高し、尤田方の米は不足成故、空米の石盛にて取立る也といへり、大和國越前國にも、定て正米之外餘分之助成を見込て、盛を附し事ならんか、又は村高を其儘反別へ懸て取立る村も有べし、然ば前條石盛十五の分米四分取六斗、五分取七斗五升抔は、自餘の國國の事にて、右三ヶ國の石盛等は、根取之定格に不レ成事に候、近年越後新發田領の内村替被二仰付一、御料所に成候て、以前の草高を並高にならしたる事有レ之、又古き覺書に山城國八條九條は石盛二十五、此田に藍を作る檢見の仕様、上は一石、中は八斗、下は六斗を穀に替て見る、取箇は八ッ十にあたると云々、是は小堀仁右衛門手代西村彌左衛門が留書に見へたり

村高之事

村高は、往古は戸數を以何百何拾戸と唱ふ、貫高に成て何百何拾貫と唱へ、關東永高にて何百何拾貫文と唱候故、後世貫高永高相紛る事多し、今の石高に成て何百何拾石と唱ふ、則年貢之籾辻也、世上にて此村高を、往古より有來事と思ふは、誤也と知べし

董正按、根取は、一體此村高貫高永高より割出したるものにして、附錄する所、則根取之基立と知べし

一　鈐錄（荻生惣右衛門著述、全廿卷）曰、大名之身上を幾千萬石と云、平士之身上を幾千幾百石といふ事、古法にあらず、大方信長秀吉の時より起ると知べし、古へ領知之書物を見るに、何郡何鄕何村にて何拾町、何百町などゝ有て、石高はなし、武士の知行を何百貫何拾貫と云も、是法也、扨俸祿を石高に定たる事は、其起浪人衆より出たり、浪人衆といふは、本領を離れ他國に仕ふるものをいふ、當時の無祿人と云の類にはあらず、甲州の浪人衆名和無理之助が類也、昔は本領安堵を士之本意とする習はし成故、其國を切取手に入て後本領安堵さすべきといふ事にて、當分廩米を與ふ、是よりして士の祿に、石高を以定る事起れり、信長秀吉が子孫に至ては、日本國中之士皆本領を離れて、家々へ散亂したる故、一面に石高に成たる也、當時も古き家々にては、新參衆へ、廩米を與へ譜代に成て知行を與ふる事、此違法也、且又四ッ物成、三ッ五分物成といふ、元來百石は籾百石也、米にして四拾石有もあり、又三拾五石有もある也、四斗俵、三斗五升俵抔いふ事出來せり、古へは皆籾納也、兵粮を貯へ置には、籾にて貯置事古法也、ゆへに東照宮御筆之物を、御旗本衆之家に持傳へたるを見に、誰々籾何拾何俵と書給へるが多き也

按、今之村高は、文祿慶長之頃より始りし事也、然に世上之人多は往古より有來る事と思へるは誤

也、すべて其時代之移り替りたるを辨へざれば、本も末も一ツに成て、身分明ならず、先往古は田地長サ卅歩横拾貳歩を反として、三百六拾歩壹反にて是に上中下之位有て、年貢高も定あり、村高を戸數とて、家員にて何拾戸何百戸抔稱し、田地は何町何反と稱す、鎌倉將軍家之頃よりして、古法も廢り、夫より京都將軍時代には、軍役より貫高起り、田地千坪を壹貫として、知行領知抔に此貫高を用ひ、其頃よりして、古之三百六拾歩壹反を、三百歩壹反に變じ、其後東國にては、年貢辻を永樂錢を以積て永高起る、然其永高は田地の坪數には不ㇾ拘、今之根取帳と云もの丶如し、其時には最早古法も失て、地頭四分百姓六分、又地頭三歩百姓三歩二、又は地頭三歩二百姓三歩一抔云、收納之法行はれし所に、文祿慶長之頃より檢地改りて、地面之上中下を以て年貢之石數を定む、是を村高として、百石は直に籾百石之積り也、今世籾遣ひ無ㇾ之故、籾納と云事を不審と思へども、いにしへは民間に金銀の通行なく、籾遣迚諸物之賣買にも、錢に籾を取交遣ふ事也、此故年貢も籾納也、然に慶長已來、金銀通用自由に成て、籾遣ひ止し故、隨て籾納も米に摺らせて取により、籾納之穿鑿より厘附起て、畢竟村高は噂もの丶樣に成たる也

一　集義外書（熊澤了介著、十六卷）云、今之俗に、粟之字を誤れり、俗に畠に作るあわの字は粱也、粟字は籾之事也、米になしてそこね易く、蟲に成て捨り多き故に、古は籾にて納、萬之賣買も籾にてせしと云々

按、古へは籾遣にて、籾納成を以、村高は籾高成事知べし

一　又曰、兎角在々へは、人之入込程穗惡く侍り、毛見といふこそ大に惡しき事也、土免極にしかざるべし

按土免は、本高之事也、檢見取にせんより、矢張元來定之通にせらるべしといふ詞也、是又元來村高は、年貢高成事知べし

董正案、此一ヶ條は、元來村高の事をいふにあらず、年々檢見役人入籠めば、村方物入も多、其上百姓は損毛を申立て、年貢をへらしたがり、役人は賄賂に汚れて、上を暗ますものも有、自然直なるものも、不直に成の害生ずれば、檢見取より定免にて指置にしかずとなり、但土免極之三字に泥み、村高が元來年貢高にて有事と思へるは心得違の按也

一　或覺書に、土免之事本高を云、但西國にて右之通唱ふる也

董正按、土免之事本高をいふは、義において通ぜず、土免は其土地より出す處之年貢物成之事也、免と高とは別物なり、余が免考に論レ之

一　日本分形圖に云、日本之貢數貳千貳百五拾貳萬九千貳百八拾三石

董正按、是は惣國高也、村高之事にあらず、此年貢之惣辻は石高に成て以後定る、大數と見るべし

一　或覺書に、信州水內郡權堂村、問御所村、荒木村、千駄村、栗田村右五ヶ村、往古より稻四拾束を壹反に極、高何石此刈何拾束と書出候、右四拾束を以刈を割、反別に成、其反別を以て高を割、平均石

盛に成也、合毛差加へ、右當り合にて差引割也

右五ヶ村

高五百八拾九石四斗七升三合

此刈壹萬九千六百四拾九束壹分

此反別四拾九町壹反貳畝八歩二五

但四拾束刈を以壹反と極る

按、此五ヶ村無反別にて、檢見之節合毛之勘定難ㇾ成故、古來よりの引付に、稲之束數を以反別を仕出し、石盛を割付勘定する也、村高はいつの頃より付しや、所のものに尋れ共不ㇾ知、稲之束數を以用る事は、古き事也、往古は上田壹反五拾束、中田壹反四拾束、下田壹反三拾束と云定有、此所都て往古中田之場所と見へ、村の束數年傳りて書出し來と也、先はつかみ高成べし、年久敷事故其譯はしれず、つかみ高と云は、此所何程有べしと、小前より積らずして、一抓に高をつくるといふ心にて、つかみ高といふ、又色高といふは、是は野手米、山手米、其外漆、桑、楮之類高を付て、本途高内へ結置をいふ

貫高之事

鎌倉將軍家之末、京都將軍家の始より、田地に貫と云事始りて、知行領知抔直に此貫高を用て、束

國西國一統に行れし事也、其後關東にて永高と云事始りしが、世上にて此貫高と一ッ事と思ふは誤なり

一　太平記曰、相摸守近國之大庄八ヶ所自筆に補任を書て、青砥左衞門にぞたびたりける、青砥左衞門補任を啓き見、大に驚き、是は如何成事にて、三萬貫に及大庄を給はり候やらんと問と云々

按、此相摸守は、北條時宗（龜山院弘長元年、執政と成）之事也、然ば貫高は、時宗が時代より起りたる樣に見れ共、東鑑に、貫と云事見えず、太平記に、如ㇾ此あれば、時宗時代より漸始りて、京都將軍家の時代專行れし事と見へたり、或人云、太平記の趣は、前代之事を跡より云々、其補理の地、今の三萬貫之地程に當る所をさしていふ事も可ㇾ有ㇾ之、但貫の事末に見へたり

一　西國太平記曰、爰に征夷將軍義晴公の世に、毛利元就と云人有、源賴朝卿の執事大膳大夫大江廣元の末葉とぞ聞へし、中頃零落して、一所懸命にして世を送りけり、然に尊氏將軍西國下向、石州佐波を退治せらるゝに、江の川の先陣したる忠節にて藝州太田三千貫を給はりける、又應仁の亂に、毛利小早川藝州より京都に登り、室町御所を警固しけり、大永年中毛利廣元といふ人、男子二人有、嫡子興元安藝國吉田郡吉田城に居て、三千貫を領す、其弟元就同國多治比にて三百貫の世帶なり云々、又言、後柏原院御宇とかや、一條關白右大臣殿の子息權大納言房家卿、始て土佐國に下向し、畑郡に屋形を建、土佐の御所と申なり、則壹萬五千貫所領して、當郡に居城せられけり、其外津野五千貫、

吉良五千貫、大比良四千貫、本山五千貫、安喜五千貫、香曾我部四千貫、長曾我部三千貫、此外小給人は不レ及レ記、皆一條家に附屬しけるとなり

按に、貫高は、東國西國四國共に一統行はれしと見へたり

一鈴録云、武士の知行を幾拾貫幾百貫と云、當時も百姓の詞に殘りて有、田壹坪に苗壹把種る事にて、百坪には百把種る、是を百目と云、千坪には千把種る、是を壹貫目といふ、此積りにて、大抵拾貫は百石、百貫は千石に當れ共、上中下によりて一定せず、是れ古法也

按に、貫高は、軍役を田地の坪數へかけて割付しより起り、六千坪宛にて軍役一騎の積なり、是を六貫壹疋といふ、たとへば所領三百貫を領するものは、五拾騎の軍役と定たる者にして、知行領知抔にも此貫高を用ふ、此節より往古の三百六拾歩壹反を、三百歩壹反に直せし成べし、今時は積にては貳町歩計にて、壹騎の軍役勤べきにあらずと思へども、昔は兵農わかれず、武士土着の時事は、當時の算用には引合がたし、大抵拾貫は百石百貫千石に當れ共、上中下によりて一定せずといふ事、壹坪に籾壹升積にしては、壹貫の地拾石、拾貫の地百石、百貫の地千石に當る積なれ共、其田地に上中下の品有故に、其積の通には一定せざるなり、元來年貢積にあらず、軍役を田地の歩數に懸し故なり、今も國々に百刈千刈といふ事、大概百刈は壹反、千刈は壹町の事をいへども、既に今檢地も石高に改る上は、民間に用るのみなり、然共是又古へ貫高時代の詞殘り云傳へしと見へたり

扨世上に貫高永高一樣に思へ共、一事にあらず、貫は田地千坪の事なり、錢の數も百を百文、千を壹貫文と云故に、相紛て誤れり、貫高は旣に鎌倉將軍家の末より名目あり、永樂錢は夫より百年も後に異國より渡りし物にして、貫は田地の坪數、永は錢數なれば、旁以一事にあらずと知べし

董正按、此條貫高之事を委敷論じたる樣なれ共、古人も此貫高の義に付ては、不審も多有と見へ、天野信景が鹽尻物語、谷眞潮が俗說贅辨、岡村思達が知行貫考、行餘隨筆、草廬雜談、其外箚錄の說と覺しき論も無レ之、余ゝ年來業書により、諸家の舊記、古券、古文書等に就て考るに、中古通知の法、廿貫百石、百貫五百石、千貫五千石といへる糓高を、先當然之說と定て、昔の貫積を推量して極置可レ然也、但柳直陽が（奥州會津之藩士なり）知行貫高に、太古は、天朝より令制下り、郡部一面に其法に從ひ、賦稅も租庸調之三ッに歸し、過不及なく貢しぬる事成しに、年序を經るに隨て令條亂れ、國主の得失により、課役年々に彌增ぬる上に、右大將家守護地頭を置て、其費用を正稅公廨之外に民より納させ、貢法日日に紛亂し、いつとなく國司の威を失しより、貢法自然に廢し行て、只守護地頭と費用のみ殘りたるに依て、己が思ふ儘に租稅の法を立、田畠山川の利をも收取樣に成たれば、東國の法西國に便ならず、北陸の規矩南海に利あらぬ事に成て、一國一郡の主の纔初に出したる制を、其所々に取傳へ、天正の末年迄、海內一統に貢法之大經はあらぬ事に成たれば、亂たる時代之貢法は、今考るに據不レ可レ有、強て是に考を設れば、牽合附會の穿鑿に涉る事多かるべしと云々、此說を先的論と云べし、余も此說

に從て、索捜せず、乍ㇾ去一ツの證據とすべき有て、爰に略記す、余が免考に委し

承久亂後之宣旨式目ニ出

左大臣　宣奉ㇾ勅、庄公之田畠地頭十町、別賜ニ免田一町一段一、別宛加徴五升、於ニ自今以後一者、嚴ニ守制符一、宜ㇾ令ニ遵行一者、諸國承知、依ㇾ宣行ㇾ之

貞應二年六月十五日　　左大史　小　槻　宿　禰

左　辨　藤　原　朝　臣

今度御上洛之間、百姓等所事段別百文、五町別官駄一匹、夫二人可ニ宛行ニ云々

弘長三年癸亥六月

又按、貞應二年は北條義時執權也、弘長三年は貞應より四拾年後にて、時宗時代也、扨前條舊案六貫一疋といへるを軍役と見て、貳町步の田地より馬上一騎を出す時には、若黨壹兩人、物持壹人、主從四五人は定りたる人數也、此割合を以三百貫の地より、馬上五拾騎を出すといへる說は、たとへ古へ農兵わかれず、武士土着の時にも、六千步の地より騎馬壹人は勿論の事、三百貫に十騎も覺束なし、中々勘定に不ㇾ合說にて、信用すべからず、余が憶見には、六貫一疋といへるは、弘長三年の格に、五町別に官駄一疋より起りたる事にて、六貫知行より役傳馬一疋ヅヽ差出す事にもあらん歟

又按、反別百文の高懸り物も、弘長之式目始り、定役の公事錢に相成、是を反錢共、又地頭錢共唱へ、後ニ諸國一統の役錢に成申候、朽木古文書の内に

永代賣渡申田地之事

合壹段者　在高島郡三重生鄉の内、十条七里、十一坪字狐塚北繩本也、公方年貢は、三重生鄉五番領へ數年貳斗、四年三度、段錢百文、此外萬雜公事なし、德分壹石なり

右件田地は、雖レ爲ニ眞如庵寺領一、依レ有ニ直用一、以ニ高直一能米限、永代岩神殿に賣渡申處實正也、雖レ可ニ本證文相副申一、先年眞如庵回祿の時失候間、以ニ新劵文一賣渡申者也、然間檀那加判仕候上、末代無ニ相違一、可レ有ニ御知行一者也、萬一違亂煩申輩出來候はゞ、爲ニ公方御沙汰一、堅可レ被レ處ニ罪科一者也、依爲ニ永代證文一、新劵文如レ件

文明十一年己亥四月五日

賣主　眞如庵祖仲（花押）

檀那　中村秋祐（花押）

又按、足利九代義尙文明十一年は、弘長三年より二百拾六年後の事なれ共、反錢の法は猶現存せしと見へ、又加徵米五升宛取立る事は、貞應二年に始り、反別五升の增米は過分の事に相見へ、其後諸國の古證文にも加徵米の事有レ之候得共、反別五升には無レ之、其場所柄により多少の差別有レ之事

又按、物茂卿が鈐錄に、百坪に苗百把種るを百目とし、千坪に千把種るを壹貫目とするの説を證據として、諸書に引けりといへ共、物茂卿より前代の人の説に、いまだ見當らず、信用しがたき事なり、元來貫字は緡（サシ）を以錢を穿つの義にて、何貫と申は、錢に限りたる事なれば、當時の石代、金納の如く錢にて納させたるより、貫高貫代之名目始り、一般の知行高と成たるに相違有間敷なり、太平記にも、長崎四郎左衛門が刀は、來國俊が百日精出して、百貫にて鍛へたる事見へたり、是相撲入道が時の事なり、室町家東山殿よりして、太刀折紙といふ事始り、代何貫何百貫と有レ之、茶器の價も貫代なり、然ば貫高貫代却て錢通用時代の名目也、元來苗何百目何貫目と唱ふる事不審也、若百姓の詞に、苗百把程も植る田を百目の田、或は貳百目の田抔申所も有レ之にや、田の大小を量りて畝歩をいはず、三升蒔五升蒔抔、名附來る村方所々に有レ之、千坪の地を壹貫目とするの説は、何れの書に出るといふを記さず、恐らくは附會の説ならん歟、但我朝往古よりして歩、畝、段、町、條、里の外に、千歩貳千歩と唱るは、田制に無レ之事なり

永高之事

永高は貫高とは別にして、石高以前關東諸國にて、年貢辻を永樂錢に積りて、知行領知抔に、直に此永高を用ふ、今も東海筋、又は鎌倉抔に永高の處有をいへ共、何れも古來の儘なるはなし、今一統石高の世と成て、永高時代のわけ分明ならずと知べし

一　或覺書に、尾州熱田大宮司所持の書物を載す

當知行分之事

百七貫貳百拾文　八屋鄉の内

六拾八貫百四拾文　須賀鄉之内

百三拾貳貫七拾貳文　熱田之内

百貫四百七拾八文

都合四百八貫文、右之趣御朱印之旨、所務等之儀如二先々一可レ被二仰付一候、中納言樣御座次第御書相調重て可レ遣レ之候、如レ件

天正十八年九月十日　田中兵部大輔　判

熱田

社人中參

按、此外寺領社領等の古き書物を見しに、いづれも何百何拾貫文と有、永の字なし、貫高成や、永高成や、今にては分り難し、然共關東の諸國、東海道筋永高之遺法の有所は、都て永高成べし、此書付も貫高歟永高歟、不分明といへ共、三州には今以永高の遺法有り、尾州は隣國なれば、永高成べき歟。扨永高と云は、田も畑も永樂錢に積りて、知行領地抔直に此貫數を用ふ、今の根取と云ふも

の丶如し、依レ之永高時代の撿地帳にも反別あり、大半小といふ小判もあり、又上中下の位もあれば、永高迚別に撿地をしたる事もなし、然に世地面の貫と錢數貫と、紛れて一事と思故、合點ゆかず、永高は則今の反取の如く、田壹反に永何程、畑壹反に永何程と、其地面の位に從ひ永盛をつけて、都合何百何拾貫文と、一村の永高を極るなり、此故に永高は其土地の位に從て、壹貫文の地に廣も狹も有レ之定數なし、是を永別永盛抔といふ、其前に貫代の定法あり、譬ば關東の田方壹貫文は籾五石取、畑方直に錢にて取事也、尤此時代は專ら籾遣ひにて籾納也、其後米納と成て、今は米貳石五斗代といふもの、關東畑永一統の通法也、元は諸國貫代之內之一ッ也、此故今猶諸國引附の貫代有て、奧州筋半石代、甲州の大切小切の類、皆是永續の遺法なり

並正按、此條にも、後世地面の貫と錢と一事と思ふにより、合點ゆかずといへり、是鈐錄の說に泥みて云也、元來地面の貫高貫代は、錢納の儀より起るなれば、當時の定免金納、畑方反取の類と心得たるが宜也、前條熟田の知行も、決て永にては無レ之、並錢の收納也、永別永盛等の詞は、永錢通用停止後、石高に成ての唱也、天正年間は、關東永錢實用の時節の事を論ずるに、永の虛名を引當つるは、了簡違成べし

一　或覺書に、遠州榛澤郡永高の事、撿地の三百歩壹反、田畑共上中下の石盛を以、餘國並に分米に附高に直、其高壹石に村寄永三百七拾文、三百六拾文、三百五拾文、貳百文、是を永盛と云、但右永

盛は、田畑上中下の差別なく同位にて候、譬ば永盛三百七拾文と定候時は、畑方も上中下の構なく、押なべて三百七十文にて候、右の三百七拾文を、其村の撿地高合懸候得ば、其村の永高に成、其永高壹貫文を五石替にして、高に成候を役高と申候て、諸懸り物を割懸取立申候、又元來の撿地高を納所高と申候間、年貢は納所高にて納申候、但田方は幾ッ何分、畑方は永高壹貫文に、鐚何百文取と致取付申候、免狀にも納所高を用ひ出置候得ば、御勘定所へ鄉帳差出候等迄、役高に直し記上申候、然處近年は紛敷候故、免狀等も役高に直し、村方へ差遣候由

按に、是は永高の場所を、石高の撿地に改たれ共、故有て此邊又永高にせし所と見へたり、然共古來の永高にはあらず、田畑永盛に上中下の差別なきわけは、其撿地高壹石といふに反別不同成故に、永盛は無差別の筈也、此永高は田畑を幾ッ何分と屆附にするゆへ、畑方にも永高何程此取とせん爲に割合を以永盛を增て、割合を附し所と見へたり

一　又曰、同國豐田郡周智郡三洲八名郡代方、譬へば上畑壹反に付永百四拾文、中畑壹反に付永百貳拾文、下畑壹反に永百文抔と、上中下の差別有レ之、田方も同前に用ひ、元來の撿地高は用ひ不レ申、右の通村々にて永盛は違ひ候得共、永高の譯は大方如レ此候、但五百石高成候儀は、何年以前誰時分、五石高に成候と申候儀不二相知一、慶長年中、伊奈備前守撿地帳に永盛記有レ之候、其時分より五石高に成候哉、村々にても覺候もの無レ之候

按、是又前條の通石高に改り候譯有て、永高を用しとみへたり、元來の撿地高を用ひずとは、慶長年中の撿地高をば不用にして、永盛の上畑百四拾文、中畑百貳拾文抔を反別へ懸て都合したる永高へ、五石代を以高を出して用るとなり、上畑壹反は永何程、中畑壹反は何程と、上中下の差別有は何れも壹反に付ての事成故、其地面之位に隨て、永盛の高下は有筈なり、田方同前に用るとは、永高を用る迄の事にて、取箇は永高積りの仕方にあらず、元來永積りといふは、壹貫文の田方なれば籾五石取、貳貫文拾石と極しものなり、然に前條幷此段の田方は壹貫文を高五石として、此高に幾ツ何分と厘附にして取故に、古來の仕方にはあらずと知べし、扨代方といふも、永盛永別同意なり

一　又曰、古來永壹貫文を五石に極るを見るに、今以鎌倉中には永高有、鎌倉の永高と申が、古來の永高にて可ㇾ有ㇾ之候、今東海道筋に永高之所多有ㇾ之候得共、鎌倉と違ひ、是は其以後の永高成べし、鎌倉永高壹貫文といふは、壹貫文の所を千坪の積とも申傳ふ、爰を以見る時は、五石代と極て起り、浮役永高に結ものは定納もの故、石盛大概拾五といふは、中より上の場所故、上田の位に見て、壹貫文に十五を掛、三を以われば五石と詰る、然ば鎌倉永高の積を以本にして、古來五石と極たるべし

按、鎌倉の永高と云は、永壹貫文を五石に極る本にして、千坪の貫より起りたるとは、附會の說也、五石に極る本は、古來關東永高の法、壹貫文は籾五石の定法なり、米納に成て、壹石五斗代に直せしものにして、何の入組たる事もなし、尤東海道筋の永高は、前條の通一旦石高に檢地ゟ改りしか

どゝ、譯有て又永盛を附置せしものなれば、古來の永高にてはなし、鎌倉の永高には、又石高の檢地はなき故、古來の永高の様にみゆれども、鎌倉の割附に畑方何貫何百文、此取何程、下に三ッ取、又は四ッ取抔と有からは、古來の永高にてはなし、是も永盛をば附直したると見へたり、又鎌倉の永高は、壹貫文の所を千坪と申傳るとは、前條に辨解する如く、貫高永高壹ッ事と思ふが誤り也、既に今鎌倉の村鑑に、延寶二寅年成瀨五郎衞門御代官の節、永百文を壹斗八升七合の積りを以て、石高を附し有、又壹斗八升八合に付しも有、何れも無反別也、壹貫文の地千坪ならば、直に永高により反別をも附べきなれ共、地面に廣狹不同有を以難ㇾ付故也、勿論浮役は、物成の定納壹貫文を五石に結ぶ所、野にても山にても、廣狹均しからず、又海川漁獵の定納、其漁獵の多少を以永高を積て、其場所廣狹の事なり、且上の場所石盛大概拾五と見て積抔といふ事、是又無稽の說也

一　續和漢名數曰、本邦都鄙、采地永樂錢貫數、畿內近國、稱二百貫一者、充二千石之地一、關東遠國、百貫有下當二八百石一者、當二七百石一者、當二六百石一者上、蓋采地近二京都及廣邑一、則運送容易、而穀價貴、故錢數漸多矣、采地在二僻遠一、則運送艱難、而穀價賤、故錢數漸少矣、奥州古者、以二十貫一充二百石一、今世五貫充二百石一、五十貫充二千石一、是近世河渠漸開、而舟楫之利濟ㇾ不ㇾ通之故也

董正按、續和漢名數之此一節、都鄙の采地のみに限るべからず、采地が當時は役知役料也、廣邑といへるも不ㇾ可ㇾ解、永錢通用は、關八州に專行はれし事にて、三河遠江駿河尾張邊迄は、暫時通用した

れ共、畿内近國上方筋に永遣ひ有事を聞かず、なま物知とやらんの妄説にて、此一節は削除かんと思へ共、猶舊本によりて此說を信ぜん人もあらん事を恐れて爰に斷る、尤舊按にも心得違ならんとは心附たれ共、舊按の論にも相違あれば、是を洩す

永之事

永は、永樂錢の事也、今時の了簡にては、日本に澤山なる錢を差置、何を以永樂錢を貴むと不審に思へ共、太古天武天皇の御宇に、銀錢銅錢始りてより、世々鑄錢司の官有ㇾ之、錢を鑄る事國史に見へたり、然に中古より國表兵亂に陷り、戰を繁多にして錢を鑄る事なく異國へ金銀を渡し、錢を買來らしめ、又は使を遣して求て國用を足す、其內明の永樂通寳勝れたり迚、關東にては是を上品の錢とし、年貢には此錢を元に立て、其外の錢四錢と、永樂壹錢と同樣に通用する事に成たり、今は右の永樂錢を永と計唱へ、金の異名となし、勘定の一ッになれり、異國へ錢を乞ふ書翰、善隣國寳記に見へたり

董正按、永樂錢本朝へ渡りしより、天文の末より百四五十年なり、其の間倭錢唐錢へ永錢をも取り交ぜて通用したること、中古治亂記にも見へたり、其の頃は永も鐚もともに、一錢通用なり、關東永錢計通用して、他錢用を禁じたるは、北條氏康天文十九年の事なり、御當家に成つては、矢張其の遺法を以て永錢計通用せし處、一向に鐚を捨つべきにもあらずとて、永樂一錢を鐚四錢に當て、可ㇾ致ニ通用一

旨被ニ仰出一たるは慶長十年正月なり、此の時よりして永樂一貫文に鐚四貫文、金一歩に永二百五十文替、鐚一貫文替の御定の相場始て立る也、去共市中の取遣には、永錢の間へ並錢を交へ、鐚には惡錢を多入交へ善惡を撰び、賣買の暇たやすからず、諸人迷惑に依て、同十一年十二月八日、大久保忠隣本多正信に被ニ仰付一、永錢を禁ぜられ、鐚計通用可レ致旨被ニ仰出一也、此儀下の條にも委敷見へ申候、然る處永錢通用の始より、鐚四錢に當る通用也と、舊按に迄も記置、惣て應永より以來、永錢を右樣心得違たるにより、永一貫文は鐚四貫文の相庭に當る勘定にて、永高、永盛、永別抔、推量都て相違すれば、引當勘定合不レ申候事にて候、足利之末年迄は、金銀世上澤山にては無レ之、中々民間抔にて金銀取遣等は決て無レ之、惣て錢計にて候、其頃之錢は、當時の樣成賤き事に無レ之候、錢貴き事にて、銀は猶更の事に候

一　中間衆の木綿三拾五疋買取、御役舟彦三に上せ申候、可レ有ニ御請取一候、小妻木綿は、今程壹疋に付壹匁六分七分の賣買にて候、是も小つまにおとらぬ木綿にて御座候、壹匁三分ヅヽに定申候間其心得可レ有レ之候

一　御局はした衆の切米、拾貮石賣拂可レ申被ニ仰越一候、此頃兵庫の賣買壹石に付六匁三分五厘の由、すいたや新右衞門申候、御心得可レ有レ之候、以上

天文九年也

十二月二日　　　　　　　　　　　　林甚五郎

岡村忠右衛門殿

佐野權之助殿

飯尾五左衛門殿

董正按、木綿一疋に付一匁三分米一石に付六匁五分、銀遣ひの勘定かと見へ候得共、天文九年は、天下一統佩僅之事は、舊記にも見へ申候、然れば銀にはいかにも相當せず、此頃之金相庭にも可ㇾ有ㇾ之哉、可ㇾ考

又同斷日記之内

御借用料足合百貫文者

御下女衆御中間衆小者衆へ御扶持方に遣候也、御返辨の儀者、來秋拾七所之内を以加之文字利御藏納の前に返辨可ㇾ申候、若御公物於㆓相違㆒は、他領を以可ㇾ合㆓納所㆒者仍如件

天文十二年十二月三日　　　　　　加持權佐久勝

　　　　　　　　　　　　　　　　鹽田若狹守高景　各在判

櫛屋町
小島屋
堺大小路
柏　屋
淡路屋
堺日白町
笠原宗印

參

董正按、此頃之銀相庭は、當時の金の位にも當るべし、錢は銀の位にも近かるべし、扨公方の御借用も錢也、諸向の扶持方渡しも錢也、然ば知行貫高は、錢之數成事推て知べし、此の外に千疋萬疋抔いへるも、古き詞にて、惣て錢之數也、但青刺一貫文を以百疋とする事は、錢相庭金一兩に付四貫文替の定に成てより始りたる事也、關東の永錢も、上方にも通用すれば、金錢に替る事有るべからず

一　草廬雜談曰、中古治亂記曰、應永十年八月大風、二日未刻ヨリ三日ノ巳ノ剋迄吹、其ノ風前代未聞ナリ、其日ノ申ノ剋、相州三崎浦ヘ漂船一艘來ル、足利滿兼下知シ、印東次郎左衛門、梶原能登守、三浦備前守奉行シテ點檢ス、惡風ニ放タレ來ル由ヲ申ス、船中ノ雜物ヲ改シニ、中ニ永樂錢數百萬貫ヲ積來レリ、則船ヲ抑留シ、使者京都ニ上セ、道義義持卿ヘ申サレシニ、唐船關東ヘ着岸スルハ、足利滿兼ガ

德分タルベシト仰下サレケレバ、船中ノ財寶殘ラズ止メ、唐人ニハ歸國ノ日積リ其餘分ヲ考、粮米味噌薪等、其外色々アタヘテ歸船サセラレタリ、（敦書按ニ、本朝寶貨通用事略ニ云、慶長十四年上總大多喜浦ヘ黒船着シ事アリ、關東ニハ漂着多シト見ユ）其後滿兼評議シテ、若干ノ永樂錢關東ヘ此錢ヲ賣買サスベシト議シテ、頓テ法ヲ定テ永樂錢ヲ用ラル、然ルニ此錢年ヲ經テ後、天文十九年ノ頃、關東ノ諸民永樂錢ニ鐚ト云惡錢ヲ交テ、同直段ニ通用セシカバ、賣買市町惡錢ヲ論ジ爭鬪出來タリ

敦書按、此頃關東ハ永樂錢ヲ貴デ、京錢ヲスベテ鐚ト云トミヘタレドモ、近頃令條記ヲ見レバ慶長十一年七月廿三日ノ令ニ下總國佐倉ヨリ東ニ於テ「シカミ錢」取ヤリスベカラズ、ワレ錢カゲ錢新惡錢エラビ不レ可レ申ト、コレニテ見レバ、關東ニテ此頃ヒソカニ惡錢ヲ鑄ルナルベシ、又寛永二年八月廿七日ノ令ニ、大カゲワレ錢カタナシコロ錢新惡錢（一本鐚錢ノ下鉛錢アリ）此六錢ノ外エラブベカラズ、若エラビ候モノ、又六錢ヲ押テツカフモノアラバ、其面ニ火印ヲ押ベシ云々、惡錢イロイロアル事明ナリ、然レバ、關東ニテハ京錢及此六錢等ヲスベテ鐚ト云ト見ヘタリ、京錢トハ、西土ヨリ渡リシ歷代ノ錢ヲ云也、本朝寶貨通用事略ノ太宗ノ時鹿苑院公方義滿ヘ送リシヲ、永錢我國ヘ來ル始トス

董正按、此頃關東ニテ、京錢並ニ六錢トモスベテ鐚トイフノ考ハ誤リ也、京錢ト唱ヘシハ、西土ヨリ渡リシ錢バカリニモ非ズ、倭錢モ多アリ、中ニモ和同開珎ノ類、又唐ノ開元通寶、洪武通寶ナド、其外

和漢ノ古錢、今ニ存スルヲ見ルニ、何レモ最上ノ古銅ニテ其位中々永樂新錢ノ及所ニアラズ、此頃取交通用セシ上錢ナルベシ、鐚ト云ハ、鐵錢、當時俗ニ云鍋錢ノ類ニテ、銅錢ノ事ニアラズ、鐚ハ、字書甲ノ事ニテ、錢ノ縁ナシ、其頃惡錢ニ多キユヘ、鐚ノ字ヲ拵ヘタル俗字ナルベシ

天文ノ末北條氏康八州ヲ下知シ、家臣山角信濃守、笠原越前等ヲ招テ、氏康評シケルハ、鳥目ニ品々アレドモ永樂錢ニハシカズ、自今以後永樂一錢ヲ用ヒ他錢ヲ用ベカラズ、一ニハ錢ノ善惡、日ヲ同シテ言ベカラズ、二ニハ民ノ鬪爭ヲ止ンガタメ、三ニハ商賣ノ隙ヲ弊サヾルタメ也トテ、右ノ趣ヲ高札ニ立タリ、自レ是後永樂ヲツカヒテ鐚ヲエリ出シケル故、鐚ハ自ラ廢リテ上方ヘ上リシ故、此後ハ鐚ヲ京錢トモ申セシトカヤ、其後天正十八年七月十一日北條家滅テ、東八州ハ德川殿ノ預リトナル、其後關ケ原陣以後、慶長九年正月ヨリ永樂錢ヲ用ケリ、然レドモ一向ニ鐚ヲ捨ベキニモアラズトテ、鐚四錢ヲ以永樂一錢ノ代リトス、去ドモ其錢ノ善惡ヲ撰六カシカリシカバ、神祖慶長十一年十二月八日、大久保相摸守、本多佐渡守ニ命ゼラレ、永樂錢ヲ停止シテ鐚計リヲ用ユベシト、武州江戸日本橋ニ高札ヲ立ラレタリ、是ヨリ長ク永樂錢捨レタリ（敦書按、此時永錢停止セラル、ヨリ、此後ハ諸錢トヒトシクツカフトミヘタリ、）凡永樂錢ハ、天文十九年ニ秀テ鐚ニマサリ五十七年ニシテ鐚又秀ケリト云々

敦書按、四家合考ニ、慶長十五年永樂錢ヲ止テ京錢ヲ用ユ、神祖駿府ニ御座有テ、一夕城ヲ換ルト夢見玉フ、覺テ夢ヲ本多佐渡守ニ告玉フ、佐渡守曰、是思ベキニアラズ、シロ相換ル事也、甚安シ、

京錢ヲ用テ永樂錢ニ換ヨ、神祖其事ニ從ヒ玉ヒ、此ノ如シ、俗ニ錢ヲ代物ト云、シロトヨム故ナリトゾ

按に、京都將軍家時代錢を鑄る事なく、異國へ使を遣し求めしにより、毎度贈り來るなり、其時節は專異國の錢を用國用を足す故に、異國商人も多く錢を交易せし事にて、此漂船も異國より表向の使にてなく、交易の爲に積來れる成べし、扨本文の通り、永樂錢も興廢有て、一旦鐚同樣に成けれ共、終に永と云名は殘て、今にては永勘定と云ものに成たるなり

董正按、本文應永十年に永樂錢始て渡りし事右に委し、され共其應永十年は明之太宗即位元年にて、永樂九年始て錢を鑄たる事歷史に詳也、然れば應永廿年にもあらん歟、又鎌倉管領滿兼は同十七年に卒去すと、中古治亂記に有レ之此說も亦疑べし

一 善隣國寶記に東山義政公寬正五年は明の英宗天順八年なり、此年書籍と銅錢とを求に遣す事を載す、其後文明七年にも書籍と錢を乞し書翰、橫川和尚の製と有レ之、京華集にも此事を載す、其書に成化十四年制書、並給賜等物一々拜納、無レ堪ニ感荷之至一、抑弊邑久承ニ焚蕩之餘一、銅錢掃レ地而盡、官庫空虛、何以利レ民、今差ニ使者一入朝、所レ求在レ此耳、聖恩廣大、願得ニ一十萬貫一、以滿ニ其所レ求、賜莫レ大レ焉、謹奏上、 俞容惟望、（董正按、國朝舊章錄ニモ此事ヲ論ズ、新井白石モ甚國家恥ナリトイヘリ）

董正案、永樂錢本朝へ渡りし事、前件にいへる如く度々有レ之、其已前明之太宗の節、洪武通寶之錢を送

り、永樂以後宣德、宣德通寶の錢も渡り、大永三年にも商船を明朝へ渡し、錢其外諸物を求し事有レ之、往古本朝鑄錢之官廢せしより以來、唐朝より開元通寶錢を夥敷渡し、宋朝には太宗の時より、數代の鑄錢を贈りし故、本朝寛永通寶の錢を鑄ざる以前は、都て唐錢を用ひし事と見へたり、然れば何錢と限りたる事は無レ之、當時替り錢と唱る錢は、取交通用せし事也、就レ中永樂錢多く關東へ持渡りし故、異國の錢を一種に限り通用せしは永樂錢許なるべし

又按、敎書と申は、青木文藏が別號なり、扨此人之按に、寛永二年八月二十七日御觸書を載す、玉露叢に載る所は、元和二年と同八年と兩度の御觸書有レ之、前々御觸書とは、文面も相違すれば、爰に記す

定

一　大かけ　　一　われ錢　　一　かたなし

一　ころ錢　　一　新惡錢　　一　なまり錢

右六錢の外ゑらぶべからず、若ゑらぶもの押てつかふもの有レ之ば、其町過料として年寄五貫文、其外家一軒より百文づゝ可レ出レ之、然ば金壹兩に四貫文の賣買たるべし、自然御定の高を背き、高下の賣買仕もの有レ之ば、其賣買金錢双方より可レ出レ之、言上過料右同斷たるべき事

元和八年二月　日

革正歟、右前條の寛永二年は間違成べし、元和二年五月十一日と武德編年集成東武實錄にも見へたり、又大判小判一歩判も、天正十年之十二月より後藤德乘に被ニ仰付一關東通用のため鑄るとも見へ、又慶長六年被ニ仰付ニ共いへり、通用金其時分より世上に流布せし事にて、京錢鐚錢へ永錢をも取交通用の時分ゆへ、金は一兩、永は一貫文に付鐚四貫文之相場定りたる也、然を天正文祿より百四五十年以前の地方に迄、右の相場を推當て勘定する事故、貫高永高を共了簡にて勘辨せば、何程考ても混亂して分りがたかるべし、縱令强て穿鑿する共、當用に無益の事也、只道理の大意を辨へ置べき事なり

一　永法說集曰、金壹兩を永壹貫文と云事、中古算數の上にて立たる定法なり、譬ば金壹兩に銀六拾目替といへる時、此六拾目を六拾に割候得ば、壹と成なり、是壹兩を壹貫文と名付たる根本也、如此法を立るゆへんは上方西國筋は都て銀子の員數を以、萬事勘定を何千何百何拾匁何分と知れ候得共、關東は金子の員數を以、何百何拾兩銀何匁、或は何錢文と三色に分り候故、勘定やかましく、品々にては手間を取、且錢銀は其時の兩替相庭甲乙有て、一樣ならざる故、差支候故を以て此法を立、金何拾何兩、永何百何拾何文と致置、此端永に相場を懸け、其時々の錢銀何程と云事知れやすからん爲なり

按に前條の通永は永樂錢より起りし名也、然るを中古算數の上にて立たる法にて、六拾目の銀を相場の六拾目にて割ば壹と成、是壹兩を壹貫文と名付たる根元也と云は無稽の說ならん、凡其物有つて其數有り、其物なき時は、數を置べき樣なし、金銀有てこそ、其相庭も可レ有事なれ、古へ民間に

は金銀の通用なくして、專ら錢計なり、金銀有といへ共、砂金竿金板金にて、たがねを以切り遣ふ、又甲州に碁石金といふて、其形丸き金有、信玄時代より始りて、甲州にて通用すといへども、他國へ出る事なし、今の極印を打し小判歩判（一本作二一歩小判一）は慶長の頃より始りて、段々民間にはびこり、其内にも專關東は金と錢と、西國は銀と錢を通用す、其始關東にて壹兩は、永壹貫文にひとしき故、其引付にて金共錢共いはず、永といへば形なく、噂に成て何文何分何厘迄も通るを以、永樂もびたも同樣に成たれ共、永壹貫文は、金壹兩の異名に變じ用也

董正按、永法說集の妄說は、此按書に能分りたり、關東の一兩は、永一貫文にひとしきといふ事、少少屆かざるに似たり、慶長年中は御當家いまだ天下を一統し給はず、關東領國之內、永錢通用の國々への被二仰渡一に、永樂一錢鐚四錢に替通用可レ致之旨御定出て、無レ程永遣ひ停止に成候得共、元和二卯年金一兩に錢一貫文替たるべきの旨御觸出、同八年に金一兩に四貫文替の賣買可レ爲候、自然御定を背候輩は、過料錢可レ被二仰付一旨嚴重の御觸出、又無レ程寬永通寶の新錢鑄立被二仰出一、世上に流布せし古錢は、追々鑄直に相成、天下一統寬永の新錢計に相成候得共、錢相場は元和年中の御觸通、其儘すはりて不レ崩、其後錢相場は次第に下直に成候得共、後世迄永之虛名をば縱し用ひて、金之勘定を割出し、便利なるも不思議の事ならずや

厘附之事

厘附は、石盛の最初には無レ之事なり、籾納止て米に摺らせて取しより、年々豊凶に従ひ、籾摺の増減出來、終に厘附と成て、取箇善悪の見合に用る通法とは成たる也

一　鈴録云、四ツ物成、三ツ五分物成抔いふ事、元來百石と云は、籾百石なり、米にして四拾石有も有、三拾五石有もあるなり

按、厘附は、籾摺より始りたり事と知べし

一　地方答問書曰、厘附と申は高にて取米を割候て高は幾ツ幾分幾厘と極候て、厘迄を用候事故、厘附と申候得共、いつの頃よりか、幾厘幾毛迄も用候、是は取箇極候時、毛迄を用候得共、右高へ懸り候時、取米の員數増申候故、毛をも捨不レ申相用申候、古法には無レ之事に候

按、厘附に毛をも捨不レ申相用るは、古法には無レ之事、元來只幾ツ何分限にて、厘を用ざる事なり、其時は厘附共いふ間敷歟、古來は大まかにして、毛帳と云ふものもなかりしに、慶安二丑年より諸御代官郷帳、御勘定所へ可ニ差出一旨被ニ仰渡一、夫より年々差出すと或覺書に見へたり、然ば其頃よりして厘迄も割付て、厘附と唱來る成べし

華正按、寛永の頃の古き書面には、關東の御取箇三ツ五分などゝ計有て、厘と申事見當らず、慶安以

後より始りしにや、其後毛迄をも用候事は、全く興利の役人の始る事に候はんか、古き人の中には、元祿の末寶永の始の頃より、取箇に毛迄を取しといへり、また享保の頃の書物の中に、厘附の事を書たる有、左に記

一　當時御取箇の法は、先一統五分〳〵取なり、然ば厘附は不レ殘五ツに可レ有レ之處、一ツ二ツの厘附も有レ之、又六ツ七ツの厘附も有レ之、是は檢地の節、石盛の考強弱による事なり、但厘附は尋分厘毛迄なり

尋（斗）　分（升）　厘（合）　毛（勺）

右之通、尋は斗なり、分は升なり、厘は合、毛は勺に當り候故、尋斗、分升、厘合、毛勺と連續して覺居候得ば、位を取時調法なり云々

董正按、右尋之字を用る事、別の意味なし、寸字と同意也、寸も本音はソン也、然ば寸分厘毛といふべきなれ共、寸字を用る時は、尺寸の度法に紛はしき故、文字を替て、尋字を用ひしと見へたり、田畑一尋違などゝ、古く書來る村方も有也、十分の一を一割といへるも同じ譯にて、一分といへば、度量に紛はしきゆへ也

虛厘實厘之事

厘附より毛附に迄成たるに付、追々取箇細密におよび、厘附に虛實の說起れり

一　地方答問書曰、實取厘附は、永壹貫文に貳石五斗代、平常取厘附は、永壹貫文に貳石五斗代、右古來よりの定法也

按、是又定法（一本作郷帳）始りてよりの說成べし、是關東郷帳の永を米にして厘を附るに、畑取永をば、貳石五斗代を以て厘（一本厘下有附字）を出し、五ヶ年平均の永をば、壹石貳斗五升代を以（一本以下有厘附を三字）出す也、享保の頃暫五ヶ年平均を壹石代にして、厘附を出す事有しが、程なく元の通壹石貳斗五升代に成、實厘虛厘の事次に記す

董正按、關東米直段の儀、古來は永一貫文米二石五斗替の處、元祿三午年より一石二斗五升替に成、享保七寅年より一石替被仰出、同廿卯年より元祿度之通り、一石二斗五升替被仰出、今以定法也

一　地方算法前集曰、關東は虛厘也、上方は實厘也といふ、近來關東永壹貫文に壹石貳斗五升代と成たれ共、今年の厘附を知るは貳石五斗也、五ヶ年拾ヶ年平均には、各壹石貳斗五升代にして見る也、貳石五斗を懸る替りに四にて割、壹石貳斗五升を掛る替りに八にて割、是を四もみ八もみの法といふ、四もみを實厘といひ、八もみを虛厘と云

按、虛實の說前條と表裏也、算法集の意は、壹石貳斗五升代は、五ヶ年拾ヶ年の平均には用ゆれ共、其年の厘附には不用故に、虛實の名あり、當時の米直段に引合の近き方を、實と立たるものなれば、壹石貳斗五升代を實厘とし可然歟、扨厘附といふも、免といふも同事に成たれ共、元來厘附は複摺

より起り、免は古き詞にて、是程年貢に出すべし、其餘は百姓の取分にゆるしてやるといふ義也

董正按、關東畑方永取之定法に付て、取方に見當無レ之故、中田の石盛を上畑の盛と定候得共、元來廿貫百石免五ッ取之古法にて百石の五ッ取五拾石也、其內を田畑半によみて、田之取米二十五石は貫匣也、畑の取二十五石は塩匣也、田畑六歩違一五之法と云事有レ之、畑米二十五石へ六分を乘じ一五と成、是を元拾五石として、田畑高合四十石也、是へ五十石の殘拾石を貫とし、四十石にて除ば二五と成、是則外貳割半也、古き覺書に見へたり

匣取反取之事

上方は取箇を匣取とし、關東は取箇を反取とする事、上方は高を主とし、關東は反別を主とするより分れたる也

一　地方答問書曰、總て關東は御年貢取方、田方は米取、畑方は永取の定法にて、反取と申候て、譬ば上田壹反七斗取、中田壹反六斗取、下田壹反五斗取と、大法反物上中下の間壹斗飛に仕候、上畑壹反永貳百五拾文取、中畑壹反永貳百三拾文取と、下畑壹反永貳百拾文取と大法永取上中下の間廿文飛に仕候、如レ此候得ば、上中下の間飛樣取箇の考の上段に作田各有レ之、先定法は書面(一本作レ樣)の格に候、總て上方は御年貢取方、田畑共米取の定法にて、匣附取と申候て、譬ば上田壹反の石盛拾五にて候得ば、壹反の高壹石五斗にて候、五ッ取の時は壹反七斗五升取也、中田壹反の石盛拾三にて候へば、壹反の高

壹石三斗に候故、五ッ取の時は六斗五升取也、下田壹反の石盛拾壹に候得ば、壹反の高壹石壹斗に候
故、五ッ取の時は五斗五升取也、右石盛上中下の間壹斗違に候故、高にては貳斗違に成候、上中下下
下の模様、段々此格に候

扨、上方は厘取、關東は反取と分りし事、上方は貫高より起りて、今の石高に成し故、高を主とせ
し、引附にて厘取に成、關東は永高より石高に成し故、反別を主とせし引附にて、終に反取と成たり

一 又曰、關東方の內、私領抔には前々よりの取癖にて、田畑米取に致し來候て、反取に不レ仕、厘取
にいたし候も稀には有レ之候へども、御料の法には無レ之事に候、上方の內私領抔には、田畑反取に致
し、關東流に致し來候も稀には有レ之候得共、御料の法には無レ之事に候

董正按、關東は反取、上方は厘取と申は、御料之定法にて候得共、當時關東の御料所、畑方米取の場
所も間々有レ之、上總國は八幡村の類、私領引附の事にも可レ有レ之哉、私領上知村抔等にて、入犯候事
と相見へ申候、常州筑波、河內、[illegible]の內、仙臺領野州芳賀郡之內、佐竹領抔は都て田畑米取にて候

增補田園類說 卷之上 終

增補田園類說 卷之下

田畑名目之事

田畑名目は、土地の位也、往古上中下下々の四名ありて、外の名目見當らず、品々の名有事は石高已後始りし事と知べし、

董正按、名目ヽ位と同じからず、名目とは、田畑に名付し樣々の異名也、位は土地の善惡を檢定せし位付なり、田畑に左の通品々の名目を附しは、厘取反取等の細密成取箇始りてよりの事成べし、往古は田畑の位附ありといへども、米麥ばかり成べし、上古は公田私田とわかれ有ゆへ、公田には上中下下々の位附ありて、私田は年貢なければ、位附も無ㇾ之

田方之部

藺田　　麥田　　麻田

是は通例上の位に、又一段上なり、但美濃國慶長年中之檢地帳に、上麥田、中麥田、下麥田と樣しもあり、上麥田と有ㇾ之は、通例の上石盛に壹ッ上り、中下も右の格也、藺田は藺を刈取たる跡へ稻を

作る也、麥田麻田、いづれも兩毛也

見附田　　砂田　　惡地下々田　　山田　　野地田　　谷田

是は通例上中下とも位の極めがたきを、名目を付け段を下げて石盛を附る也、見附田は、惡地の内にても宜しき所をいふ、惡地の内の見附ものといへる成べし、砂田は砂がちにてねばりなく鼠敷所を云、惡地下々田は、名目の通也、山田、野地、谷田いづれも場所耕地の名なれば、通例に位附べき所もある筈なれ共、畢竟土地惡しく、通例の位にも極がたきゆへに、直に其場所の名を附て段を下しもの也

沼田　　深田　　棚田　　流作田

是れは位之名目にはあらず、場所の名にして、沼田深田を惣べて水田ともいふ、元來水田は、田の惣名にて、沼田深田のことにあらず、されども、世上のむかしより斯く唱ふるなり、棚田は山方の地面かた下りのところ、段々畔を立て、棚の如きところなり、澗田は、谷間の耕地也、流作田は、川べり堤外などの水損場なれども、出水の時節により、立毛に障らず、また旱年には、格外の收納有レ之ところなり

苗代田

是を親田とも、種田ともいふ、苗を仕立る田也

植田　　蒔田　　摘田

是は田の名にあらず、田作植附のたがひを云、植田は苗にて植る田をいふ、蒔田は籾にてまくなり、摘田は地をかきて植る所へ、杖抔にて穴を突て、其穴へ籾粒を摘入る也、又灰に交ているゝもあり、但植田の懸り水を上とす、蒔田摘田を下とす

畑方之部

桑畑　　楮畑　　漆畑　　茶畑　　麻畑

桑、楮、漆、茶を四木といひ、麻、藍、紅花を三草といふ、民用に切なるものなり、美濃國慶長年中の検地帳に、桑楮畑は上畑石盛に一ッ上り、上畑拾貳なれば、拾參と極む、麻茶は上畑石盛に同じく附し所もあり

見附畑　　砂畑　　悪地下々畑　　山畑　　野畑　　鹿野畑

燒畑　　薙畑　　切畑　　林畑　　萱畑　　萩畑

是は通例上中下の位極がたきを名目をつけ、段を下げて石盛を附しなり、見附畑、砂畑、悪地下々畑は田方名目の通りなり、山畑、野畑、是亦同斷なり、鹿野畑は人里遠き野畑にて、猪鹿に荒さるゝをいふ心なり、燒畑、薙畑は、山方野方草木を燒て、其灰を肥しにして、其跡へ粟稗黍の類をまく、切畑は切替畑なり、野畑にても、山畑にても、五年七年、又は十年も作りて、其の土地痩せて、作毛

實のらず、其時に至りてそこを捨て、又外を切開て作るなり

林畑已下名目の通也

流作畑

田方之解と同事也

按、田畑名目大概右の如し、此外にも名目いか程も有べきなれども、見聞せし分を記のみ

一　畠の字、粈の字ともに字書に見へず

本朝にて古代に作りし文字といひ傳ふ、畠の本字は、圃園の二字也、田は田畑の惣名にて、專田地といへば畑もこもる也、是を分ていへば、水田陸田也、東鑑に、仁和年中武藏國多麻郡の曠野に、上多麻川の水を堰入て、水田に起すべしとの評議有て、土功を始し事見へたり、或人云、晉書に「畠之收至二十餘斛一水田之收收二數千斛一」と有、白田は、はたけの事ゆへ、二字を一字にしたると見へたり、又畑の字も、火耕水耨の義にて、水田より拵たる文字成べし、扨又上方は田方三分二、畑方三分一銀納、關東は畑方永取、又田畑半石代之引付をみれば、古來相傳の說成べし

田畑土性善惡之事

一　或覺書云、土性善惡、土色の見樣に功者を申人有レ之候得共、是も知らぬよりは、知たるが能候、然共日本六十餘州を殘らず見ずしては、知たるとは申がたく候、麥も越後抔にては、壹反に三斗四斗

五斗やうやう出來、奥州福島領などは、土性宜所なれども、至極の大出來にて、壹石位にて候、關東の内にては、至て上出來の麥は、四石餘もある場所も有レ之、又紅花關東より東海道筋をみれば、田植の節に花を摘仕廻候、福島邊は土用半過より花をつみ申候、如レ此作物にも、遲速多少有レ之上、五箇國拾箇國の事を知て、日本國中を殘らず見たる様に申ては、人の迷に成事有、土地の事、上方筋は上田とあれ共、其近所皆大かた上地也、中下も同じ、關東筋は田畑共に、壹村内に上も中も下々惡地もあり、肥しも共所々により、種々土地相應不相應有、國々により麥を麥田の場所へまかず、地を休め置て稻作をすれば、殊の外よく出來、取實米性風實共によし、上方筋又は東海道筋、麥田に麥をまかざれば、田作不出來なり、稻刈取りて跡をうなひ、冬水絶ずかけ置、春夏用水の足しにする所多し、然るを國により麥田をうなひ、あら土を隨分白く成程乾立ざれば、田作冷て青立に成惡地も有、然る間餘り土地の功者を申は、入らざる儀と存候

按、土性の事を、出來かたを定規にして論ずる時は、本を捨て末を論ずるなり、末に拘りては、其弊出來かた、出來旬、作り様共に上地といへば、何國も同様ならむと片寄て通ぜず、如レ斯論じてはたとへ日本國中を殘らず見たりとも、知り盡すといふ事はならざるもの也、元の土性は同様にても其國の寒暖あり、高低あり、乾地あり、濕地あり、同國の内にても、其方角により差別有事なれば、作物の出來形、出來旬、麥田の田作、刈田跡の水をほすほさぬの善惡其外變りめ、皆其譯有べし、

往古より國に上中下あり　田地にも上中下有、古來石盛の極やう國法も有、郡限に極たる高も有、古人の極も、諸國を殘らず見盡して極しものにもあらず、然ば眞土、野土、石色、土色、土の輕重深淺、小石交り、砂交り、ねばき、もろき、こわき、和らかきなどと古來云傳を、平日心懸て見覺へたる上、出來形、出來旬、作り樣も、國々により、所により、違ひある事など博く知り、詳に辨へたらんには、一向に土性の事は、知れざる事、いらざる事として捨置とは、格別のちがひ成べし

董正按、土性土目により、畑作は猶更、唯菜の地に相應するあるは、其村里の老農老圃の委しき事にして、農政のあづかる事にはあらぬ樣なれ共、新田檢地して位石盛を定る節、又田畑成畑田成等の變革も折々有事なれば、取增取下等の勘辨も有レ之候得ば、土性の善惡をも常々心懸け度事也、五畿七道の諸國を見ざれば、土性の論には不レ可レ及といふ說はあれども、古來より國々の風土產物を記せし書を見るに、五穀の生ずる土地には、格別の違ひなければ、荒增上中下の善惡を記す、是皆老吏の定むる舊記なり、○いなご眞土、いなごといへる蟲の色に似て、青み色有土也○麝香眞土の二種を上とす、土色淺黃にして、土目細かにねばりて堅まらず、常に潤ありて日でりにまけず、諸作實のりよし○砂眞土小石交りの眞土を中とす。然共土性堅きゆへ、塊をこなすに手間どれるなり、土くれ多ければ種物生つき遅し、肥を多く入るれば、能出來る土なり○へな眞土、其色青く白く、土性至てかたく、ねばり强し、され共乾きやすく日弱し、眞土の內には、是を下とすべし○野土は惣て土性宜しか

らずといへども、黑野土を上とす、ねばり薄く、肥養を多く入れば、よく出來る土なり、日に乾き安しといへ共、耕す時鍬に土つかず、都て鍬につく土は宜からず○赤野土を次とす、手入よければ、土性變じて黑くなる、潤出來るなり○山野土を下とす、土色鼠色にて灰の如く、土輕く乾安し、大風の節は吹立られて、土煙空に上るなり、肥養の精力ばかりにて實のるなり、都て石地瘦田磽确とて、不平の薄地は論なし、土は重きを上とし、輕きを下とす、田は杖竹を立るにどこまでも入て其竹に土のつかぬを上とし、土黑くねばり付を下とす、畑は日に乾きて、土色白く見ゆるを上とし、黃に見ゆるを下とす、此外土性の鑒定いろ〳〵有べし、大略を記すのみ

董正多年地方の道に心をゆだね、田畑を作り試たく思ひ居、屋敷廻り之竹木を伐拂、自身開發し、種種の野菜を栽て試しに、惣て荏原郡豐島郡の土地は、一面の野土にて虛地なれ共、幸に糞水餘りありて何一ッとして作り出さゞるはなし、され共其地に不相應の品を作るは尤肥養の力のみなり、夫故近邊の百姓は、肥し靡へにのみ苦む事なり、此邊只午房によろしく、風味よし、其外練馬村の大根、河越領の芋のごときは、皆其地に相應する物にして、他所の及ぶ所にあらず、田作は畑に引替て人家近き田地は、惡水落入て、肥しの過るを憂ふる事にて、稻作肥へ過れば、取實は甚少し、牛込早稻田の南緣りのごとき、茗荷を植て稻を作らざるにて知べし、利を射るため計に植るにあらざるなるべし、乘て予も抱屋敷內にて、田作も年々試たれ共、取毛の多少は爰に記しがたし、惣て江戶近鄕の百姓

は、畑作を好で田作を悦ばず、凶年に利を得て、豊年に利を失、遠國には引競べがたし、又千住砂村邊の百姓は、もやし物を仕立て、三月節句已前より瓜茄さゝげを出す、袂へいれて持出て是をひさぐ、得る處の錢壹人にて持がたしといへり、常に奢て美食をなす故百姓多くは貧窮なり、今年幸に王制の教行はれ、果實の時ならざるは、市に賣事を禁じ給ひ、すべて末作を止て本業を勵し給ふ、難レ有御政事ならずや

諸國金納石代之事

諸國石代は古き事にて、其始審ならず、上方三分一銀納、關東畑方二石五斗代、其外田畑半石代抔何れもふるき遺法成べし

一 地方一樣記曰、關東貳石五斗替、上方三分一銀納四拾八匁替、下野宇都宮三石替、奥州白川會津長沼三石貳斗替、同福島七石替、羽州米澤六石替、田畑なけ免半金納

按、一樣記は何人の選する事を知らず、或曰、伊奈氏之家臣より出ると、其書苗莠混雜して見にくき故、予別に一樣記辨解を著はす、併考ふべし、按、此諸國石代當時も引付の所多有て、貫代共云、年久儀にて、其始知れずといへ共、關東の諸國永高時代の遺法にして、古來何國も籾遣にて籾納なれば、此石代も此一倍の籾數成べし、籾遣止て米遣成し故、米の積半減にしたるとみへたり、いかに

となれば、關東二石五斗代の永を高五石とする事は、則籾五石にして直年貢の籾數なければなり、今は貳石五斗代、關東籾永の通法と成たり、上方三分一直段も、今は其年何にて極る、（一本其所に定あつて其平均直段を用ひとあり）奥州白川、會津、長沼三石貳斗替といふ石代の内、白川領三石七升貳合替と成、其譯或覺書に、奥州白川森山、長沼、會津、石川領筋は石直段三石二斗代に候處、其以後白川領分三石七斗二合替に成候譯（一本作儀）、長鐚四貫文に目を加へ候勘定を以、壹貫文に四分の利を加候積にて、三石二斗内にて一斗二升八合引て、三石七升二合替に直すと有、是前かたは調百錢の勘定の所、九六錢に成し故、今は石代直段三石七升二合替に成たりといふ覺書也、出羽國米澤田畑なけ免半金納といふは、田も畑も米取にして惣取米の半分六石替の石代を以金納にするなり

一　或覺書に貫代の事所々にて違ふ、甲州川内領の貫代は、壹石四斗四升に當るゆへ、記置と云々

按、貫代とは、永壹貫文に付米何程と積る、則石代の事なり、此覺書の意は、世上にて貳石五斗代を、諸國一統の通法とおもへ共、所々にて違あれば、一統の事にてはなしとなり、是に限らず、甲州の小切直段も貫代のひとつなり

一　或古文書に

一　三石五斗五升　此外壹石は寄進

一　二石八斗七升　四郎右衛門居内、此外藏入

一　三石五斗八升　　四郎右衛門分

以上拾石は　此代貳拾貫文

右の分依レ有二子細一、酒井雅樂助方爲二奏者一所レ令二扶助一也、永不レ可レ有二相違一之狀、如レ件

永祿八年乙丑十一月廿七日　　神　祖　御　諱

鈴木八右衛門殿

董正按、此古證文、國郡村附なけれ共、永祿八年に神君御年貳拾四に成らせ給ふ御時、酒井雅樂助事もあれば、三州之內にて可レ有レ之也、此文書を考れば、壹貫文に米五斗替なれば、關東は永樂通用の時なれ共、三州には永遣無レ之、京錢の勘定にて可レ有レ之なり、京錢に候得ば、兩替四貫文積にて、兩に貳石替に相當申候、證文の內子細有レ之に依るとあれば、拾石貳拾貫文と申は、子細も有レ之事にや、古人も此考難レ及と申候得ども、是古來の貫高といふものにて、知行高貳拾貫文の地を、御扶助の爲レ被レ下たる成べし、石代の古きものゆへ、後の考にも可レ成哉と記置也、天文永祿時代、通用金無レ之以前は、錢の位格別なる事にて、中々後世當時の引くらべにならず、人王二十四代顯宗帝の時、銀錢一文稻一石に替し事、日本書紀に見へたり、唐太宗の時、斗米三錢とあるは、銅錢の事也、又近代の覺書の內に、正保四亥年遠州掛川の藏入米金拾兩に百拾俵替、慶安二丑年金拾兩に九拾五俵替、同三寅年入札の拂米、金拾兩に百拾俵替、江戶正木屋又兵衛落札と有レ之、其頃掛川之城松平伊賀守忠晴

家中の物成、知行百石取の分限に付、九兩拾兩の貢米にて、內外の財用事足り、困窮の取沙汰無レ之、御軍役の通中間小者急度召抱、家作見苦事なし、慶安二年丹波龜山へ所替之刻、城中並家中之修理行屆、急度致したる引渡なりと、老人物語に見へたり、其後萬治二年より、井伊兵部少輔直之掛川城主にて、三代居城せられ、米直段は百石に七拾兩位迄に上りしか共、家中殊の外困究なりしとぞ、然ば永祿年中拾石貳拾貫の貫代は疑ふべき事にもあらざるなり

一　或覺書に、甲州大切小切の事、信玄時代より始る、取米の三分を大切、三分一を小切とす、小切は拾壹俵半がへ

按、甲州大切小切の事、今取用る處は、取米三分一小切、此定石代永壹貫文に拾壹俵壹斗八升替、但三斗六升入、右小切引殘三分二の內、三分一大切なり、但御張紙直段、金納相殘る分は、米納なり、此內御帳張直段と申は、後のことにして、大切小切拾壹俵半替の引付は、永高時代の遺法成べし

本石斗立出目米之事

本石斗立は、上方關東一統の事に非ず、上方は都て斗立納也、出目米といふは、國により年貢米の外に餘計を出す所も有、本石を延米にしたるをも出目米を混ずといへ共意味違ふと知べし

一　關東納米三斗五升を三斗七升納る也、是を本石斗立といふ

按、古來は關東も本石斗立の差別なかりしに、いつの頃やらん、三斗五升入壹俵に付、貳升宛の餘分を加へ、是を土用餘と名付しより、關東は通法と成て、本石斗立の名目立しと、先年老吏（板野祖右衛門といふ、地方功者のものゝ由）に聞けり、當時にては、貳升宛の餘米を出目と唱へ、又斗立にしたるを延米と唱ふ、然共出目米といふは、國々にも有レ之、或は上州に四斗六升出目、羽州に貳斗出目抔いふ、何れも元來籾摺より起て納スよし、其始四斗六升出目は、七合三勺摺、貳斗出目は、六合摺に當る、此外諸國にも此類有べし、本石斗立の出目とは、もとは格別也

一　地方落穂集云、本石と斗立を分るは關東計也、上方筋其外遠國は殘らず斗立也、本石といふは、三斗五升とばかり心得るは僻事也、四斗一升入の本石は、四斗也、三斗六升入の本石は、三斗四升也、如レ此出目を別に立るを本石といふ、是は百姓何れも二升の出目を加へ立る事に候得共、公儀御勘定の仕上は、何れも出目抜、元の石數にて仕上るにより、本の石といふ心にて本石といふ也、然共關東にて三斗五升を本石と立るは、三斗五升入百俵を三ッ五分の御定にて、百俵の物成と見る積る也、斗立といふは、右の心得也、上方筋遠國は殘らず斗立也、關東三斗七升を以斗立とす、然れ共是をのみ斗立といふにもあらず、公儀へ斗立納は、所の升目成により、斗立といふ也、諸國斗立も同意也

董正按、前條の舊按にいつの頃やらん、三斗五升入壹俵に二升の餘分を加ふといへり、元和二年の令

に

條々

一 年貢升目の事、當納より壹俵に付、三斗七升に、金を拂可二相納一事

一 年貢米壹俵に付、口米目こぼれ共壹升宛可レ納事

一 錢方は永樂百文の積に付、同三文宛の積口錢可二收納一事

右三ヶ條御料所、幷私領の百姓に至る迄、かたく可レ被二申觸一者也

元和二丙辰年七月　日

對馬守

大炊助

備後守

董正按、右の御定書にて時代歴然也、扨又關東納米の事、本石三斗五升に出目米貳升を加へ、三斗七升斗立納る定法也、遠國は攝州米五斗入と有レ之は、中札の通五斗の斗立にて、出目米無レ之、然共御年貢斗立の法、國々仕來俵入の外、合米と唱定法の餘米有レ之、御藏收改の節、若合米不足有レ之候得ば、差米被二仰付一事也、譬ば遠國四斗入の場所は、斗桝に四杯の外三四升宛入、其上缺米と唱、本米壹石に付三升宛の定法を以、別段に相廻す、是は海上船中數月を經て着船する故、濡手ふけ米等有レ之節の用意也、關東は三斗七升入の外貳升餘を入、其外缺米には定法無レ之、但關東三斗七升入を斗立と

申は、先は古來表面の定法にて、近來御料斗立の通法は、右の如くに候事

合米の儀に付御達書

御年貢米納廻の節、切石相立候歟、又は定法の合米不足にて、俵數相廻、合米不足俵有㆑之候はゞ、右廻俵の中札取㆑之、御勘定所へ可㆑被㆓申聞㆒候

八月

右之通先年申渡、合米不足俵の中札御勘定所へ被㆓差出㆒候處、明和三戌年吟味役御藏掛被㆓仰付㆒候に付、其節より不㆑被㆓差出㆒候得共、當時吟味役相止候儀、其上近頃納米切不㆓相立㆒、又は合米不足いたし候趣も有㆑之由相聞、如何候間、以來切石打立、定法の合米不足俵有㆑之候はゞ、於㆓御勘定所㆒可㆑及㆓吟味㆒候間、右廻し俵中札取㆑之、御勘定所へ可㆑被㆓差出㆒候

午十一月

右之通御勘定奉行へ申渡候間、被㆑得㆓其意㆒、於㆓國々㆒定法の合米不足不㆑致樣相改、猶又御藏庭において內拵之節も、不足不㆓相立㆒候樣、精々入㆑念可㆑被㆓取計㆒候

午十一月

右之通慶安三午年十一月十三日、於㆓御勘定所㆒在府御代官へ倉橋與四郎申達、在府無㆑之分は、手代へ御達

右の外にも合米の儀に付、御書付度々出る、略レ之

諸國入俵異同之事

諸國俵入は、往古は定有しに、當時は一樣ならずと知べし

一　續和漢名數曰、「米苞量數、延喜式第五十卷曰、凡公私運米、五斗爲レ俵、仍用二三俵一爲レ駄、自餘之雜物又准レ之、其遠路國者斟量減レ之」

按、當時國々の俵入、關東地廻りは三斗七升入、出羽國村山郡同斷、田川由里飽海郡は四斗八升入、奧州岩城領は三斗六升入、同國白川福島四斗入、越後、越前、三河、遠江、駿河、美濃、四斗入、甲州三斗六升入、播磨、豐前、豐後五斗入、美作三斗三升入、丹後、但馬、備中、備後四斗入、右聞し分を記す、此外國々俵入、異同何程も有べし

董正按、延喜式の法に、凡公私の運米五斗爲レ俵云々、凡と申字、大概と申義に候得ば、其頃の定法は大概五斗俵に候へども、遠路の國々は斟量して減ずと有は、俵入を減じ、又俵數を減じ、三俵附を二俵附にもする成べし、上代は穀納計也といへども、此俵入は正米納成事明か也、近世の法大概遠近の國々相通じて、四斗入多し、關東之三斗五升入、奧州の内三斗三升入、肥後國三斗入等も、京都を去事程遠なれば、小俵成も古代の遺法成べし、又美作國俵拵へあしきも、いかなる仕來にや

一　鈴錄曰、四ッ物成、三ッ五分物成などいふ事は、元來百石と云は、籾百石也、米にして四十石有もあり、又參拾五石あるも有、四斗俵、三斗五升俵抔云事出來れり

按、四ッ物成三ッ五分物成とは、今の厘附の事也、四斗俵、三斗五升俵といふは、俵入の事也、厘附俵入とも、籾摺より起るといふは、往古五斗俵の定成處、今諸國に俵入の違多を以、斯いへるなるべし

董正按、鈴錄の說は、只武士の知行高百石取、貳百石取といへるは、現米百石にはあらず、籾百石の事にて、四ッ物成といへには、四斗俵にて百石取といふ迄の事也、元來厘方の道を細論するにはあらず、俵入異同有事は、古來の引附にて、別に深き譯有事にあらじ、厘附は田地の位と、數十年の平均合を考へ定むる事なれば、細論なり、往古五斗俵の定成處、今諸國に俵入の違ひ多を以、斯いへるにはあらず

口米口永之事

口米口永古來よりの引附にて、其始しれず、貞永の式目、諸國守護人奉行の條に近年分祿（祿一本作錙）の代官於郡郷宛課公事於庄保、とあれば、其時代よりの事成べし、今取立る所國々により異同あり、又中頃には錢の調百と、九拾六文との譯にて、口永の異同有しが、今は一樣になりたり

董正按、公事を庄保に宛課すといふを、口米永と見るは僻說なり、公事を庄保にあつるは、今の國役村役のことなり、口米永を取り立てて、守護代官の役料とすることは、鎌倉時代よりのことにあらず、政事要略、弘仁式、三代實錄抔にも、年貢の上は米を取ること見へたり、本朝上古よりの仕來と心得べし

一　或覺書に、口米壹石に三升は上方、一俵に壹升は關東、出羽、奥州也、三河より東は關東につき、近代遠江は上方に附

一　又云、往古より口永は納壹貫文に付、永三十文の御定法なり、中頃壹貫文を九六にて割、（寛永新錢のころか）目錢を出して取立るに相定り候、九六にて割ば三十一文二分五厘と成り、（是を小目錢と號し、コウモク錢と、訛る）此三拾壹文二分五厘を八貫文に懸れば壹貫文と成、故に法には三二を以取永を割なり、三二にて割ば少々御代官の損成方に候得共、算術短く埒明ゆへに、畢竟刎込んでも損失に成ほどの儀にも無レ之故、擧世今の三二を法に用ゆ

一　又云、永壹貫文に口永調三十一文二分五厘取候儀、（一本「一樣」に作る）古來樣々調錢四貫文に付調鐚百二十文取、此百二十文を四貫文に割ば永三十文に成故、三拾文を懸來候處、其以後九六錢に成て、四文出目有レ之故、鐚百二十文に四文加へ、百二十四文へ又壹錢の目を加へ百二十五文なり、是を四貫文替に直せば三拾壹文貳分五厘と成、是を三一二五の法とて取扱ふ也、三一二五にては、金八兩に付壹分宛の積な

り、口永取三二にて割と申は、三拾貳にて割事とおぼへ、樣子存るものなし、子年より三拾文づゝに成ゆへ、向後其沙汰なし

按、口永の事、當時は一統に古來の通りに成て、永壹貫文に三拾文の御定に成たる故、此覺書を記は無用の事なれども、中頃九拾六文の割合を以、口永一變せし事もあれば、見合の爲に記す、又口米も、上方は取米壹石に三升宛、關東は納米三斗五升入壹俵に斗立壹升宛なりしが、今は本石壹升づゝ取立る也、但享保年中より御口米御口永は、公儀へ上る御代官は支配高に應じ、諸入用被ㇾ下也、然共私領へ御預の分は、御定の口米永にて相渡、扨錢九拾六文を以百文とする事は、異國には其代に隨て、四拾八文より段々有と見ゆれ共、本朝いにしへ其沙汰を聞かず、董正按、此仕かけ相場の事、元の初代至元年中十等鈔の法を始む、四拾八文を以百文とし、七八十文を以百文とする事、古今原始に見えたり　或書に、九拾六文を以百文とする事始りしは、鎌倉上杉家にて領分へ他國の商人入込で、領內の錢を他國へ持行を以、百文の內四文省て渡せしより始ると有、又或覺書に、甲州信玄の家臣不算の人の爲に始りしともいへり、異國にも有事にて、もとは仕かけ相庭といふ樣成ものにて、百文に直段せし物を、九拾六文に拂より出來るものならん、尤諸國一統の事にてもなし、東國北國筋の內、今以出羽、奥州、越後抔には、調百を以通用す、本文の內口永納壹貫文に三拾文の御定法にて、中頃口永變法有しは、上杉武田家より始りしといふは附會の說なり、寛永新錢の頃より、九六錢に成たると見えたり

董正按、九百文の事、橘菴漫錄に、淵鑑類函品類事實等の書を引て、唐の安祿山始むる共、又上杉修理大夫家政の老臣、長尾將監が孫四郞左衞門景春是を始むるともいへり、同人より始りしや慥ならずといへ共、此九六錢始りしより、世上日用に便なる事莫大也、尤近世四文錢通用してより以來、猶更便利擧て云べからず、或說に、日輪一歲の往來九拾六度にかたどるともいふ、附會の說紛々として信ずるに足らず

一　或覺書に、甲州公納口米三升、口米の事古代は籾納にて、甲州桝廿杯、外に揩欠貳杯入、合て貳拾貳杯にて、口籾壹杯を取、米納に成て籾を六合揩に積て取、但甲州桝壹杯は京桝三升也、右貳拾貳杯は、京桝六斗六升也、米にして三斗九升六合なり、口籾一杯は、京桝三升米にして一升八合也、然れば米一石に口米四升五合四勺五才餘に當る、此內一升五合四勺五才を口納口米として三升を御代官の口米とす、但取米を貳拾貳にて割惣口米を得る

按、口米御定より多き分は公納とす、此類奧州にも有ㇾ之、取米を貳拾にて割得るとは、取米貳斗貳升に付、口米壹升宛に當る故なり

董正按、口米永の御定書出しは寬永二十一年正月十一日也、右御定書に關東方口米は納三斗七升入、壹俵に付壹升宛、口錢は永百文に付三文宛、上方の分は壹石に付三升宛、御定外不ㇾ可ㇾ取ㇾ之旨被ㇾ仰出、酒井和泉守、伊丹順齋、杉浦內藏允、曾根源左衞門連名にて、上方關東御代官へ申渡有ㇾ之、其後口米

永御藏納に相成候は、享保十巳年九月也、夫より御代官へは諸入用被ㇾ下ㇾ之、但小物成口米共是迄取來候分は、不ㇾ殘本途御物成同然に御藏へ相納、尤口米の分は、只今迄の通鄕帳には除ㇾ之、別格の御勘定に相立候、又口米金銀にて取米の分は、御金藏へ上納す、米にて取立候分は、金銀積直段遂ニ吟味ㇾ年々十一月中上納也

一　上方は御年貢銀納に付、銀百匁に付口銀三匁宛之御定也

一　但州生野銅山口銅、上州甘樂郡砥石、山口砥、八丈島の口紬等は、口米永同然の品に候へ共、御藏納に不ㇾ及、有來之通被ㇾ下ㇾ之

一　正德三巳年十二月廿九日の御定に、知行渡の節の口米永は、其年檢見濟候以後之知行渡に候得ば、其年の口米永四分三御代官へ被ㇾ下四分一私領へ被ㇾ下候、但千石以下の知行渡に候へば、口米永不ㇾ殘給人へ相渡候、享保十巳年御改格後も、知行渡に相成侯節は、右の格を以取計申候由

見取反取定見取之事

反高見取、何れも年貢計出して、高役勤ざる地面の事也

一　地方答問書云、新田等惡地の場所は高を附す、反高と申候て町歩計記候て、相應の取箇附置候所にて關東方にはあきた有事に候、高を附候得ば、高役掛り候ゆへ、高役の上年貢納候儀成兼候、たとへ

取箇附候ても、餘り少し計の取箇附候へば、高役同事の樣成候故、不ㇾ得二止事一候て高附無ㇾ之、反高にて差置候

按、見取反取似たるものにて、見取といふは、今年作附候附候ても、來年は來年は不足成場所をいふ反高は不定地にはあらず、然共作毛不出來の惡地をいふべし、關東筋所々にありしが、段々高入に成也

一　惣て見取場と申は、田畑共に新開新田等高に結び難き地所にて、高を不ㇾ附候て差置、輕き年貢を申付候、見取年貢附候田地を、見取場と申候、年を經作馴地もよく成候て、高附候ても可ㇾ然見へ候時分、高結び候て新田に立置候、歟村高へも品により入候事に候

按、定見取と云て檢地帳に記せしも有ㇾ之、或覺書に云、都て見取場といふもの、潮入の池沼の端か、今年立毛仕附ても、來年か不定成場所、見取場と名附、高外にする事成に、何の譯なく新開、又は改出しの類を、いつ迄も見取と名附て置事不吟味成事也、猶も不埒成は、見取屋敷抔と名附し屋敷も有といへり、尤成事也、又村方より空地とて、開發場に願出る內にも、其村々川缺跡か山崩か、何ぞの荒地跡を段々起返しては、本免に立返るを厭ひ、後日其村の二重高に成を辨へず、當分年貢の少きを思ひて、見取に願事も有事也、起返りの場所ならば、起返にして、其地面相應の取箇を附て然るべし、何れにも引高の立歸る樣にすべき事也、起返といへば、はや本免になづむゆへ、

村方よりも是を厭ひ、又自然と見逃しにもする樣に成り行くは、地面と取箇と不相應より、右の通なる弊も出來る事

一 久津間清裕が筆記云、通稱を茂右衛門といふ、享保の頃、御代官風祭甚三郞手代新田見取改出の心得方に、百姓は如何樣の難場にても、地主に成を悦び、當何年改新田と帳面出すもの也、場所得見分の上、永々相續可ㇾ致場所に見へ候はゞ、高に結び可ㇾ申候、若又川向等䖏く、當分はよき田所に見へ候得共、末々川欠に可ㇾ成場所に見請候はゞ、當何年改見取と反別計出し、取米附可ㇾ然候、當年新田高に結び、其翌年より永川欠に成候ても、其高はづし候事不ㇾ相成、永々其村の負高に成、年貢は不ㇾ出候とも、高役等はかゝり、其村困窮の基也、又永荒場所起返し候得共、本途並に不ㇾ起返ㇾ候に付、本途厘附を請候を難儀に存じ、何の辨も無ㇾ之新田と帳面出すものも有ㇾ之、是又右に准候事故、吟味の上起返に致し、地所不足の分は、厘下げにいたし可ㇾ遣事也

浮役小物成の事

浮役小物成は、年貢の外に納る物也、一樣にいへども、小物成は總名にして、浮役は其内一ッ也、或定納の貢出し、又は何役何代抔の類を浮役といふ、年貢の事を物成といふにより、小年貢といふ心にて、小物成といゝ、然ば百姓役の外、何にても年貢の外に定納するは、皆小物成たるべし、知

行渡の高により、込高の違ひ有と知べし

董正按、本途物成の外、定納に成物を小物成と唱、定納に成難き物を浮役と申候、譬流作場の取箇に類したる物にて、今年は收納すれども、來年は不定成物故、浮役と申よし承及候、然處地方落穗集には、海川漁獵、其外運上物類の事を浮役と唱、野錢、山錢、野手米、山手米等都て正税に准じたるものを小物成といふ、知行渡の節、小物成は高に結び、運上物は高に不レ結と云々、勿論山方野方の年貢役永等は、永代不易のものにて、海川の諸役、津港の運上、其外何れの運上物にも、年久しく相續し來候場所も多候得共、時に變革無レ之とは難レ申候に付、總て是を浮役ととなへて可レ然也

一　地方答問書曰、總て小物成、並浮役と申は、山林野原海川殺生等、其外何にても、田畑御年貢の外に、定納に米金納候儀にて候、是は萬石以下の知行渡候時は、高に結入渡申候、但永壹貫文は高五石に積り申候、總て運上と申は、山林海川等其外何にても、年季不足に請負人等有レ之候て納候類、萬石以上の知行割渡候時は、高に結ばず、高外にて相渡申候

董正按、知行渡に高を取と申事有レ之候、永は壹貫文を高五石に積り候得ば、取は壹石貳斗五升にて候、但永壹貫文五石替之事上卷永の部に出す、貳拾百石といふ、籾高古來よりの定法也、高を四にて割、取米壹石貳斗五升を得

尤古來は貳石五斗替の定法に候處、元祿三午年より壹石貳斗五升替に成、享保七寅年より壹石替に成、

同貳拾卯年より元祿の御定に復し候より、今以其通也、年々增減無レ之、小物成の類は高結に成、年季物請負物等、總て浮役諸運上の類は、高に結ばずして取はかり附申候、船役計は前々より高結に相成申候

臨時物の事

臨時物と申は、定納にて無レ之、其年限又は年季有もの歟、何之定り等無レ之不時に有レ之納め物にて候

一　或覺書に、臨時物と申は、賣出し出目米口米等、夫米差米の類高にも取にも不二結入一物をいふ、六尺給米、御傳馬宿入用等も臨時物也、其外に懸るものは、皆臨時物也と云々

按、年季の限有レ之定納に無きもの、新田冥加金又缺所金抔の類也

董正按、右の外御林木並枝葉共、往還並木立枯之類取上、所望ノものへ御拂に成、代金等も不時の金納に付、是も臨時物に候へ共、是は御普請御入用の總勘定にて、差引に相成事に候

知行渡込高之事

一　或覺書云、上方關東共に、浮役高に結知行に渡候時、永壹貫文を五石替に直し渡來候、上方筋には永と申事は無レ之、金又は錢也、四貫文壹兩の積にして、五石替に致來候處、近年間違の事出來、壹兩を貳石五斗代にして渡候事有レ之、夫より後誤之儘貳石五斗代にて上方の分は渡候由、是も不穿鑿成

定法也、東海道筋永高の場所、壹貫文を高に直す時、前々よりして五石代にして、譬ば御代官所高五萬石內永高千貫文あれば、五千石の高に直し、五萬石の都合に入、然る時は萬一代方の場所を知行に渡候事有ㇾ之時は、壹貫文は貳石五斗代に直して渡候歟、五代にて渡候歟、浮役物の貳石五斗代と一義兩樣成如何、跡先の考も無ㇾ之、古法改候儀如ㇾ此違却あり、古法改る事は、吟味の上可ㇾ有二了簡一事也

董正按、此覺書に、上方關東共浮役を高に結、知行に渡候趣有ㇾ之候得共、元來御定書にも有ㇾ之、前條の通浮役高結と申事は無ㇾ之、取はかり附候て相渡候儀にて候處、是を相考候得ば、高結にては無ㇾ之、取を貳石五斗替に附候事に可ㇾ有ㇾ之、當時の取は壹石貳斗五升にて候得共、上方の分は、元祿以前之通貳石五斗替に候哉

一　地方答問書曰、秣場、野原、山林等之入會の地所には、何れも地元有ㇾ之儀にて、地元は野山年貢出候も、又は不ㇾ出も有ㇾ之事に候、入會の儀は古例次第の事に候、地元村たりとも新開立出し等は、不ㇾ爲ㇾ仕定法に候

按、知行渡込高といふに心得違有ㇾ之、前條にも有ㇾ之通、萬石以下の渡方に上納物を高に結渡す、是をも込高といへども、元來の込高といふは、萬石已上へ小物成を除き、高外にして渡を云、又知行渡に、譬ば高百石四ッ物成の都合にて渡は、五箇年平均四ッに不足なれば、四ッに合せる樣に高

を増て、百石の高を百何石と増渡す其餘計の高をも込高と心得たる有、是は物成詰渡といふ、又野山高も色高と名付けて、本途高内へ結置もあり、總て小もの成に、品々の名目擧て算へがたし、大概郷帳に載せしは何れも定納物也、漁猟運上年季請負等の郷帳に記せしも有なり

一 或帳書に、地方に取扱ふ名目を書集しもの有レ之、其中に提米の事、提野の事といふ有、總て小物成に品々の名目有といへ共、其時節之役人之存寄を以附來成べし、山手、山役、山錢、山年貢、山小物成抔各目は替れ共、畢竟は小物成の事なり

一 提米提野と申事、其譯を記さゞれば、人に問へ共未知れる人に逢はず、是を考ふるに、提とは前廣より其法度を定置筋の個なれば、野にても山にても、後々爭論抔起るべき所、又は既に出入起て双方相爭ふを、裁許の上野手米、山手米抔定置、其出す米を提米とし、其野を提野と唱し事歟、是餘り臆説也、知る人重て正説を書給ふべし

董正接、知行渡に林山を相渡候儀、新林立出し等の小木有レ之林は、高百石に付凡五反歩程迄は相渡候由、物成詰込高も、昔は五割位迄は相渡候處、近年の知行渡は、込高林山共可レ成程は相減じ割渡事に成候、尤諸運上小物成格別多き村方は相渡り不レ申候、込高といふは、村高多く取レ之、低き所を三ッ五分に渡候得ば、三ッ五分百俵にて、百石の處百貮拾も其餘も村高有レ之場所にて、既に御勘定所へ出し候請實の帳面にも、外新田改出し等無レ之旨斷書有レ之事也

村方夫米夫錢の事

夫米夫錢は、村役也、宿場並に宿々助郷相勤候村方は、高掛三役定、或村役錢等免除也

一　地方答問書云、百姓持の山林秣場等、前々より割持に分限の立候所も有レ之候て、古來より山錢野錢も不レ出所も有レ之儀にて候、前々より古き檢地の村方には、入念の無年貢空地も有レ之事に候、一概に如レ此空地なしとは難レ申候

按、定納の米永の内にも、夫米夫錢の類は高に不レ結事、本文の通野錢山錢杯、夫錢杯も不レ出村方も可レ有レ之候へ共、追々改出し有レ之候て、先近來ヶ樣の場所は稀成事に候、若有候ても、至て少分成場所に可レ有レ之候

董正按、夫米夫錢と申は、村役人足可二差出一候得共、農業に隙なき時節か、或は病氣等にて夫役勤兼候に付、代米錢にて納る事を云べし、奥州に四一高と申て、高一石に付永六文宛の夫錢出る、尤高々年々增減は有レ之候得共、古來よりの定納也、羽州米澤にも右の類の夫錢有レ之由、御鷹方之水夫役錢の類も、右の壹ッ也、又江戸近在の村方には、馬喰町御役宅へ駈附人足相當る、自身勤めかぬるものは夫錢差出、是を足留め錢と唱へ、駈附定雇へ相渡事也、尤御鷹方馬喰町の兩役は百姓役也、村方により棟割高割まち／＼也、公儀への納物と申譯には無レ之、且遠所は無レ之事に候

高掛りの事

高掛りは、小物成とは別にして、百姓役也、故知行渡の高に結ばず、往古は課戸とて家別に掛、家口とて人別にかけ、中古は田地の反別にかけ、今は村高に懸るなり

一 東鑑曰、文治元年十一月廿八日、補ニ任諸國平均守護地頭一、不レ論ニ權門勢家庄公一、可レ宛ニ課兵粮米一（段別五升也）

按、頼朝始て國に守護、庄園に地頭を置て、其入用（一本用下米字あり）と見へたり

董正按、兵粮米之事、貞應二年六月十五日の宣旨には、加徵反別五升可レ被ニ宛行一云々、加徵米は、兵粮米と同樣成物にして、此高懸之名目、室町時代の沽券證文にも多く見えたり、又加徵錢反別百文宛取立る事も鎌倉時代より始れり、足利時代には反錢共唱へ、矢張百文宛取立る也、先是等の類高掛之始共可レ致なり

一 又曰、弘長三年六月御上洛之間、百姓等所役事、段別百文、五町別官駄一疋夫二人、可ニ充行一（至レ貧、以ニ三町一可レ進ニ一疋）

按、鎌倉將軍家之時之課役（一本課上臨時二字あり）と見えたり、田方畑方の段違ひも、是にて知るべし

一 地方鑑曰、總て役を掛るに、昔は物の譯不レ定、年貢にも免狀といふ事もなく、年貢もとられ次第

とり、百姓も住宅定らず、萬事ふとゝのひ成故、棟をかけて家別に役を取、夫を百姓迷惑して、家を長屋の様に建て棟數をへらす、去により門役をかけて取、門役をいやがりて口を塞ぎ、口を少くするにより、內にて竈をかぞへて鎰役を取、是は物ごとゝのはざる時の事也

按、其かみ諸國おしなべて如ㇾ此時代なるにもあらず、然共國によりて右の如く有し事歟、今引附之小物成抔にても知べし、是を考るに、其起り織田家豐臣家日本を一統し給へるに、敵國を責従へ、其將降參すれば、所替國替といふ事をさせて、土着之武士は鄉士を離れて他國に移る樣に成、五年三年內にも、ひたと國主も替り、其中に暴虐之國主は、品々の役をかけて取しならん、佐々松倉守京極、其外暴虐にして亡し事擧て計へがたし、武家盛衰記其外近代の記錄を見て可ㇾ知也、扨鎰役之事、或覺書に自在の鎰也、越前に有といへり、在方は都て爐に自在といふをかけて、食物を煮る故、自在の鎰を竈と見て、鎰役を取しなり、直に竈役の事也

一　室町日記に、御料の百姓數年の未進をはらみければ、三好筑前守此秋急度上納皆濟可ㇾ仕段嚴重之催促に付、百姓中いろ〳〵斷候得共、曾て請ざりければ、攝州之百姓京都へ上り楠村長高（市右衛門と稱す）方へ書付を以て言上す

一　累年少宛未進仕事、方々の要害御普請之竹木御取被ㇾ成、又は夫足止事なく勤奉るに依て、農桑麻綿疎略に相成、拾ヶ年以前の三ヶ一ならでは無㆓御座㆒候事

一　畝時ならず取掛り、植田をこね作毛を刈り、馬の飼具抔に仕、種々の妨御座候に付、無爲なる世中とはつもり格別に候事

一　數年の未進、此度是非共皆濟仕候樣被ニ仰付一候は、面々所帶を上納仕候て、可レ致ニ逐電一覺悟に御座候、被レ成ニ下御宥免一候はゞ、來年夏麥にて少宛成共、皆濟仕候樣可レ致候、被レ加ニ御慈悲一候ば、難レ有可レ奉レ存候、以上

天文十六年十一月五日　　御料所

百姓中

御奉行樣

董正按、地方鑑の說は、織田家豐臣家以後之事計いふにはあらじ、足利家以來亂世の掛り物をいへるならむか、扨室町日記の百姓訴狀は、高掛りの事には無レ之候得共、亂世の百姓役は、農桑の時節を論ぜず、誠に限りもなく勤る事にて、其上身命を失ふさへ間々有レ之事なれば、訴狀の中に累年の未進の事に風水旱損の引ヶを申立てず、當時破免願抔とは雲泥の違也、然れば當時高懸臨時國役抔難澁申立る百姓へは、ヶ樣なる訴狀は書寫し見せ、教諭も致し聞かせ度事なり

一　定納高掛りは、御傳馬宿入用米、六尺給米、御藏前入用、但是を三役といふ

按、前方は御割賦にて納不同なりしが、享保年中より高百石御傳馬宿入用米六升、六尺給米二斗、

御藏前入用永貳百五拾文掛りと定納に成、右の外關東には小穀代とて、年々御割賦有て納しに、享保年中より御免也、前方は荏大豆餠米等は、色成と云て計立納也、宿入用米六尺給米は、臨時の高役とて本石納也

一　或覺書に、國役高掛りの事、御朱印地寺社除地公家門跡之領地は、相除御作法也、但除地の外檢地帳の末に、書付有之分可除事

一　地方答問書曰、夫米といふ事、公儀には無之、六尺給米迚、御賄所之六尺共へ年中の給米を被下候、私領方にては、心々にて夫米を高に何程と定取立候由、公儀にては其通にては無之候

按、私領上知抔引付にて、夫米にても夫金にても納る村は、六尺給米不掛候御定なり

一　又曰、都て關東方上方共、村方公私之小入用夫錢割合之儀、高割を以割合候定法にて候、然共市立町場の村々、山方濱方浦方にて、高に應じ候て家數大分多き村々は、家別割にも致し候、是を棟別割共申、關東方には高割に成にくき村も有之候故、是は田畑反別割にも致候村方も有之事に候（一本成下割字なり）

按、入作の百姓、其入作の村より公儀幷地頭へ納る役掛之類、高割、家別割、人別割、出入も無之濟來る所は、其通り也、若出入に及時は、高割にすべき由享保六年被仰渡也

出作入作越石持添之事

一　地方答問書曰、出作田地を心得違にて越石と唱候事、相違成儀にて候、越石と申は、知行割の時割合仕候節、高拾石より內の割合不足有レ之、隣村の內を足高に渡候を越石と申候、越石は田畑を割合渡候儀も不二相成一、勿論百姓をわけ渡候事も不レ成候て、足高分の年貢計を年々渡候儀にて候、越石高へば、惣て諸役人足役も不レ懸法にて候、右越石高は、其元村の高內を越石ほど除置、夫程の年貢を年年相渡候事に候

一　又曰、出作と申は何方にても田地を調候歟、質流等に取居ながら、外の村に持候田地を作る百姓を出作百姓と申候、村々遠近に無レ構、何方にても居村の外に田地を持通ひ作り致し候を、出作共入作共申、出作は此方よりあの方へ出で候て作候と申儀にて候、入作はあの方より此方に入候て作候と申儀にて候、出作百姓の地を持添共申候、右出作百姓へは、其年々之年貢割附、幷諸役割掛帳を本村百姓內事に爲レ見候法にて候、わるく致し候得ば、出作百姓へは右帳面を見せ不レ申、本村並より多割懸候儀も間々有事故、此法を立置候

一　勸農固本錄云、越石之儀、譬ば高百石之村にて此反別拾町有、內五拾石の反別五町は御料也、又五拾石の反別、五町は私領と、地所にて分け、町歩幷田畑上中下同樣に、甲乙無レ之分り候へば、越石は無レ之候得共、左樣の村方は稀にも有兼候に付、一村の內高計分け、物成米を其不足の方へ遣し候時、御料より私領へ遣候得ば、私領へ越石と申候、但高と地所と、百姓前とわけにくき時の事、又或は

壹萬石の知行に九千九百九拾石は何村にと名附たる村有、殘り拾石は他領の、或は西村高百石の內より高拾石、此方の或は東村へ越石年貢納に付、反別は不二相知一、右壹萬石に都合す、是西村より越石といふ、又或は高百石の村にて、拾石分は御朱印地へ入候、此處古檢にて、地所は三拾石も有ㇾ之、其所何方と申わかちもなく候故、御朱印地拾石分持候百姓より、御料の方へ或は五石も三石も米を出し候を越石と申候、凡地所分り不ㇾ申、物成計之越石には、高掛り諸役出不ㇾ申候

一　又或高百石の村にて、五拾石宛二領へ分候節、三拾石宛持候百姓二人わけ遣し候得ば、六拾石成故、拾石の餘計有ㇾ之候、內壹人は他領の高拾石持候を、持添と申候、高の多少によらず、其百姓御料百姓か私領百姓か其身極り候得ば、高少き方にても、其少き方の百姓にて候、高多候ても多かた持添にて候、上村の高拾石持候百姓、下村の田畑三十石も持候得ば、其分御料にても、又は相給の私領にても持添にて候

一　又或下村の芝地を、上村の百姓新開仕候時、兩村共同地頭ゆへ、役人心得違にて、上村の高に結候を下村より越石高といふ所もあり

董正按、此箇條元來越石と申儀にても無ㇾ之を、越石高と申候は、各役人之心得違なり、此新田を越石と申は不吟味の事

一　又上村の高持候百姓、下村へ引越參り、上村の田地を作候を、上村にては出作、下村にては入作

といふ、又質地に遣し他村より□□□候も同然也

按、出作、入作、越石、持添の事を、二様に心得唱事有によりて、其わかちを記す

董正按、上村の百姓下村へ移り、上村の田地を作候は、上村にては入作、下村にては出作と唱へ可レ然也、惣て居村より出作、他村より入作、前々よりの通稱にて候

按、本文の外に、抱田地、抱屋敷の名目有、其百姓にあらずして、外より所持するをいふ

董正按、御府内江戸近在に、武家並町人の抱屋敷近年多相成候、拜領屋敷之外物に候得ば、武家の持添にて候、新抱入に致候には、新地改御代官御鳥見三手の見分有レ之、向々へ證文差出し、新地改の檢地入候て相濟申候、下田、下々田、下畑、下々畑にても、抱屋敷に相成候得ば、上田、上畑の通年貢出る、其上小間壹間永拾貳文五分、間口貳拾間にて金壹分宛之定にて、新地改へ懸り物年々出る、抱屋敷の儀は、古來は御鳥見の方より圍家作濟候段、持主或は所之名主へ申渡相濟候も有レ之、又は持主より御老中方へ相願、圍家作御免被レ成候も有レ之、御鳥見中絶已後も、右之通にて相濟候屋敷も有レ之候、前々より圍家作は相濟候得共、一旦家作不レ仕差置候屋敷、又は不案内にて屋敷改の方へ屆も不レ致候由紛無レ之段、御鳥見より書状を取、屋敷改へ差出、吟味の上伺相濟候も有レ之、惣て圍家作の譯は、一樣には無レ之事也、勿論以前は御鷹場御拳場内は屋敷圍は不二相成一、家作計ちいさく建候事に候處、享保二酉年の御書付に、居屋敷計にて外に屋敷無レ之輩は、抱屋敷も圍取拂、家差置候儀可レ爲二勝手次第一候

若居屋敷類燒之砌、抱屋敷に住居致候時は、家の廻り當座之圍は不レ苦候、住居不レ致候節は、圍差置候儀不二相成一候旨、最初被二仰出一候得共、常に圍無レ之候ては難儀可レ仕候、其上圍廣狹も、火事之節俄に難レ極可レ有レ之候間、此節より家の廻りに計、隨分狹く圍可レ致候段被二仰出一、當時は何れも屋敷圍出來る事に成候、又町並之百姓地表へ、町屋建有レ之場所にても、裏の方を抱屋敷に致し、立退場に致候儀は不レ苦旨伺の上相濟、尤此節抱屋敷御改有レ之、武士町人共内證にて住居不二相成一、天保十二丑年より追々家作取拂被二仰付一、百姓へ戾地に成本田畑に可レ復之旨書付出る

又按、新地改被二仰付一候始は、寬文八戊申年正月十九日、兩御番之内より四人出役被二仰付一、寶永七寅年十二月より中絕致し、正德三巳年より再兩御番衆より六人出役被二仰付一、當時は三人也

又按、知行渡分鄉之事、或覺書に世間の分鄉を見るに、割の仕樣は通例之通法を出し、壹人前之持分反別小物成迄法をかけ、村中引分る故、御料共私領共片附て、引分れたる百姓壹人もなく、皆平均之割に成也、如レ斯分置ては、自然闕所百姓有時、可二引分一樣なし、割法を家數へも懸家數極候上、可レ成程は片附て、引分て後反別永別難レ分分、漸貳三人にて越石百姓相極、誰々は御料より私領へ越石、誰々は私領より御料へ越石、百姓名寄帳に可二極置一と有、知行渡分鄉之節之心得に可レ成事也

小作永小作之事

小作之事古へ佃といふ、古ハ國に佃御正作と、いふ事有、佃とは地頭の田地を作る也、御正作は地頭の手作也、當時永小作、直小作、別小作等、譯有事也と知べし

董正按、當時之小作と申は、何小作にても、其士民が自身作らずして、他人に作らする事にして、年貢の外に地主の得分も少々は有勘定にして、人に預くる事也、凡田畑百姓壹人之作分、八反作りと申て、八反餘も作れ共、先は八反を壹人の作分と定たるもの也、然共持反別壹人分に餘るものと、不足成ものと有ゆへ、小作は有レ之事也、一夫一婦之所レ作、百畝之田云レ佃、和訓に、つくだといふは、自分に作る田といふ義也、私田を作るを佃といふ、公田を作るを御正作といひ、地頭之田を作るを正作と云、鎌倉時代の田文に、領家之佃領所之小佃抔といふ有、當時之小作之譯にあらず、考べからず

一　地方答問書曰、永小作と申は、自分之持田畑を居村にても、外村にても、他の百姓に小作致させ廿ヶ年立候得ば、永小作と申候て、地主の方へ取返し候て、外之者に小作爲レ仕候儀不二罷成一候定法にて候、是を永小作と申候、然共小作人より地主方へ、小作之作徳米金を不二相濟一、及二難澁一候得ば取戻候、無レ左候ては不レ爲二取戻一候大法にて候、勿論永小作地は、小作之方にて質地等、又は別人に小作爲レ仕候儀、一切不レ爲レ仕制禁に候、依て當時は小作證文年季短く極候て、度々證文仕直させ、又は外之小作人へ申付候事に候

按、直小作と云は自分田畑を質に入、其質置主直に其地を作るを云、別小作は通例之小作にて、年

季を限り作る事也、山にもおろし山と云有、外村より山手を出し、場所を定入來るを云、小作同樣也、又請山と云有、年季を限て他村より入を云、通例之小作の如し、凡直小作、永小作、別小作等は、質地同樣に出入も極て多有故、臨時之御定も、質地に相並で品々あり、枚擧に勝ざるを以略ㇾ之

質田地之事

田地は、百姓永代之家督なるを以て、寛永年中永代賣御制禁以後、打續御條目有ㇾ之、然共百姓之貧福豐凶常ならず、不ㇾ得ㇾ止事ㇾ質入して其用を足す也、身命を繫ぐ本なれば、隨ひて出入に及び、又質地の品も多し、依て數ヶ條之御定有ㇾ之事也

董正按、貞享四卯年十一月之御書付に、田畑質に入候事は、御代官手代方迄可ㇾ相伺ㇾ事と有ㇾ之候へば、相對を以猥に質入候儀は、不ㇾ相成ㇾ候御定也

一　永代賣

是は質地證文に年季を限らず永代賣渡也、或は子々孫々迄名田に可ㇾ致等之文言、或は可ㇾ請戻ㇾ之文言等無ㇾ之を、永代賣といふ、寛永廿未年三月より堅御制禁也

董正按、寛永廿年之御定には、田畑永代賣御停止と計有ㇾ之、其後享保六丑年より田畑山林屋敷等に至迄、永代賣買一切停止之旨被ㇾ仰出ㇾ之、但年季之賣買にも、其村並之直段より倍金賣買不ㇾ可ㇾ仕旨被ㇾ

出仰レ之

一　頼納

是は田畑山林屋敷等、其直段より倍金を以質に入、又は年季賣買の積りにして質に取り、年季に買候金主は、年貢役等不ニ相納一して右質に入、又は賣候元地主より年貢役等納候儀也、堅停止也、此一條貞享四卯年より御停止に相成候、又半頼納といふ有、譬へば田地壹町歩質に入、年季を定め金をかり、右の内五反歩金主へ渡し、五反歩は手前に殘し置、金主へ渡したる五反歩分之年貢も諸役も勤るをいふ、是亦頼納同様に御停止也

一　倍金賣

是は縱令ば拾兩之質に入たるを、貳拾兩の手形に認る事也、請戻しがたき樣にする手段也、然共證文面其譯見ざる時は知れず、又年季明元金一倍を以可ニ請戻一文言有て、出入に及時は、吟味の上元金にて請戻さする也といふ御裁許も有レ之由

董正按、倍金手形之儀停止被レ仰出一候後も、奥州邊には只今以倍金賣買舊習有レ之に付、御代官可レ致ニ吟味一旨御書付出候得共、兎角相止不レ申候由承及申候、會津古文書之内に、奥州大會津郡東拾貳ヶ村内八角之村一分之地頭、神山善六が知行貳反六百刈之田地を錢拾貫八百文を以永代を限り、公方之諸公事を停止し、賣渡、但拾五ヶ年内には一倍之結解貳拾壹貫六百文に可ニ買戻一之旨、古證文に見へ申

候、右は貞治二年癸卯足利二代將軍の時也、倍金賣と申事、奥筋古代よりの遺風にても候やらん、乍レ去當時國禁に候得ば、先は制止之行屆兼るゆへにも可レ有レ之哉

一　二重賣

是は同所を兩人へ質に入るゝをいふ、是も御制禁也、但出入に及時、先に質に取しものへ地所相渡さする事も有レ之よし、其品吟味によるべし

一　有合質入

是は年季の限なく、金子有合次第返金せば、田地可レ返との質入をいふ、拾ヶ年の出入は取上拾ヶ年以上取上なし

一　再質

是は質に取たる田地を、又外へ入をいふ、前々よりの御定に金高を增て、再質に入間敷と也、出入に及ば、其品可レ依二吟味一

一　年季賣

是を關東筋には年季賣といひ、上方筋にて本物返といふ、年季を定め金子をかり、田地之作德を利足代りにして、利なしに年季明たる時返す故、本物返しといふ也

董正按、年季賣は、質地に似たるもの也、年季を定め田地を一旦買取、手作又は小作勝手次第に致し

作徳を利金と見て、無利息にて金を借し、年季約定の通元金皆濟之上、田地を元地主へ返す故、本物返也、尤御法度無之、但年季は成たけ短く取極、長きは拾年を限る御定有

一　讓田地讓屋敷

是は由緒有て田地を讓渡し讓受るを云、但田畑屋敷山林等賣買とはいはず、讓受と名付て、金銀を取讓渡事永代賣同様之御定也

一　寄附地

是は領主地頭より、寺社等へ田畑屋敷山林を寄附する外、凡下のものゝならぬ事也

一　質入

是は高反別字名請等書記し、年季を定め役判宛所共委細手形に記す

一　書入

是は名所計か、高計歟、反別計か、手形に書入たるを云、出入に及ば常の借金同様也

董正按、質田地之名目大概如此、質地之事は前々より出入多く、質入書入役判宛所之有無、年季之長短證文の邪正に從ひ、品々御定有事委くは擧るに遑あらず、其人にあらざれば、御裁許之事書記しがたし、右質田地の御定御仕置等に至迄、都て寛永廿未年に相極まる、其後出入の品により、斟酌して御裁許有之事也

名主組頭五人組之事

名主の名目は、鎌倉時代より始て、其引附を以唱來るといへども、其職は大きに異也、然共今纔に一在所にも不ㇾ可ㇾ欠ものにして、又五人組は、古今不易之要法たるべし

一　地方答問書に云、關東方にては名主組頭と申候、上方にては庄屋年寄と申候、所により庄屋年寄組頭と立るも有ㇾ之候、西國筋にては別當庄屋と立るも有ㇾ之候

按、名主と云は古き詞にて、貞永の式目にも名主職と有ㇾ之、此引附成べし、庄屋といふも、是亦式目に庄官と有ㇾ之、是も一在所を支配するものにして、名主職同列のものなれば、庄屋は庄官の轉じたるにあらん、組頭は元來五人組の內の頭分也、又年寄といふ有、又長百姓といふあり、往古何の長と云長にはあらず、高持百姓、年寄百姓之類也、又百姓代といふ有、多年年寄之內、又は長百姓內にて立て來る也、五人組といふものは、往古の制五人を伍とす、十人を什とす、五什を一隊とす、五拾人組也、是を組上て亦賦に用る引付之殘たる也、時世移り替りたれ共、伍法は殘て、何國にても五人組を定め帳面に書付て、前書に御大法を書付立て、相守る事古今之良法也

董正按、名主職之事、鎌倉室町時代之古書に多有ㇾ之、當時は名ぬしと唱候へ共、昔は名主(メウシユ)と唱申候、領主城主たる人の名に代る職分故、名主職といふ也、大名にも名主有、小名にも名主あり、名代、名

日、名田之節、何れも字音を唱へて、字訓を申さず、今之町人、百姓、名主、村役人抔は似るべくもなし

夫食種貸延賣之事

夫食種貸は、通例之事にあらずといへども、凶年饑歳には不レ可レ弃之第一義也、古人變を常に制すとは、平日豫備る事也、民を移し粟を移す事も荒政の急務、兼て講ぜずんば有べからず

董正按、惣て荒凶之備として穀を貯る事、古代より始る常平倉は、漢宣帝之時より始り、本朝にては廢帝之寶字年に作り、義倉は隋の文帝開皇年中に始る、本邦文武帝大寶年中に造り二十分一を納む、近年夫食御手當として、天明八申、寛政元酉、同二戌、三ヶ年の間二十分一御下穀被レ成下レ豫備倉新規御取立、諸國御料所には陣屋に籾藏を役名主の居屋敷には、村々の大小に從、麥稗雜を積蓄へ事也、社倉は宋の孝宗乾道年中朱文公造レ之、近世會津水戸に造レ之、享保年中豐後日田之御代官庄太夫、濃州笠松にて辻六郎左衛門作レ之、其外所々に有レ之、何れも名目は替れ共、圍穀の事にして、國家の急務なれば、ゆるがせにすべき事にあらず

一　農業全書云、凡飢饉の兆を智ある人は、夏の中にもはや見及べし、尤も七八月初には見ゆるもの也、農民之食を儉約せしむべし、扨蕪菁を多種さすべし、又蠶豆をも多種さすべし、麥より少々早く

出來ぬれば、麥に取つく迄の助と成べし

一　荒政要覽曰、人非ニ五穀一不レ生、五穀盡而糠粃、糠粃盡而草根木皮、此束レ手待レ斃之術也、因而食無レ害、草根木皮錄レ之、云々

董正按、原本に飢饉を救ふ草木三十六品を載す、然其夫食種籾御貸渡に相成程の凶年には、農民食て害なき草木、夫食の助に可レ成品書記、御渡に相成事にて、尤荒政要覽の外、救荒本草、救荒便覽等の書、百姓町人にも分り安き樣、其製法迄委記したる書物も有レ之ば、此書に載するに不レ及、依て略レ之、海藻の内に荒布は、何年貯置ても性を損ぜず、先年何國の百姓にや、家根の下葺にあらめを夥入置、飢饉の助となせし事も有レ之、朝鮮にては救荒第一の蓄とすと云へり

一　或覺書曰、田方損毛四分以上にて破免の節、撿見取同樣に損毛相改引方相立候、但一村の内田畑共水入場四分以上、又は皆損にても、一村平均四分内に當候得ば、引方立不レ申候段、享保十五戌年被ニ仰出一候處、其後も夫食貸年々夥相增に付、格別の損毛の譯無レ之ては、御貸渡は無レ之由にて、享保十八丑年より三分以上損毛引方相立候積被ニ仰渡一也、勿論定免村にも五ヶ年季の内に、三四年も三分以上に近き損毛打續候得ば、別段之御救も有レ之候

按、夫食貸の事、一國一郡へ隱なき損毛なれば、夫食貯方の有無を家別に吟味せしめ、實に飢に及ぶもの撰で、作毛へ取付迄日數を積り、米は一日男貳合女壹合宛、穀麥は男四合女貳合、粟稗も麥

同様也、但返納の年季は、其節の吟味に依へし、先は五ヶ年賦也、籾種麦種は、反別に割付て代金を以貸渡、三割の利を加へ三ヶ年賦返納の御定也、延賣と申は、御年貢米の内を貸附て、代金にて取立、又其年にも貸し、先繰に取立る也、先年は遠國所々に有しが、返納を永年賦被仰付より、延賣は御停止に成し也

董正按、荒凶の年のみ夫食種籾貸渡に相成事にも限らず、宿場の出火類燒も多分有之節には、家別に拜借金をも被仰付、又百姓家作燒失すれば、吟味の上夫食種籾農具代等貸渡事、夫々御定有之事也、但常陸、下野、陸奥國等御手當場所の儀は、餘國並の例に成がたし

國郡境之事

山境、野界、秣場等時々出入に及べり、依之大法の御定有といへ共、奸民多は場所名目を引違へて爭ゆへに、纔の事も年を歴て爭論絶えず、詰る所は百姓の困窮、多分是より起と知べし

一　地方答問書云、何方にても都て國境郡境の川は、川の中央を境に相立候定法に候、山岸、切水、落水の流を堺に相立候古法にて候

按、國境に川附寄次第の例者不用との御定有、御國繪圖又は水帳等の吟味、其外岸（一本峯作）分川落等の御定有、又深山の山方検地帳の奥書に、嶮岨場廣に付御検地除之と村並に記せしも有、所指は一所に

て兩村の帳面に記せしも有レ之、考ふるに、古來山木茂り奥山へ通路もせざる故、何れの村も吾奥山とのみ心得居し內、段々里近き方より伐開て、次第に奥山に至り爭論に及ぶ類も有レ之

董正按、國郡境、山林境、知行境等の爭論、古代より其例少からず、稱德天皇御宇吉備朝臣眞備、僧行基、泰澄等に命ぜられ、諸國檢地せし時、境に炭を埋め爭論起りぬ、後證にせし事も有レ之、近代播州美嚢郡之內松山林、一柳主税、黑田豐前守へ御割渡に相成候節、御代官へ相渡候御書付にも、山林割渡候節境に成候岸か道か、大木大石抔用レ之、堺目相定候はゞ不レ及二檢地一、無レ向候はゞ、今度山境に成候場所掘切り、境塚を築き傍に高札可二立置一事、境目の高札後に立替難レ成樣に、其邊の大木大石切岸、其外自然の形有レ之所より高札迄、東西南北の間數を書記し、證跡慥に殘候樣可レ致との被二仰渡一也、諸國折々境論絕へず、廻り檢地地押抔有レ之事なれば、領地割渡知行分鄕等には、境目尤可レ入レ念事に候

川附洲飛地秣場之事

一　又曰、川瀨附寄次第と申は、村境の川瀨大水にて、向の村方へ附寄候て、高外の秣場野原地河原等此方の地續の樣に成候得ば、向村の持分の地所にても、此方の地に成候、地方の定法如レ此に候、雖レ然田畑村高の內の地所に候得ば、此方の地に致候儀は不レ成定法にて、是は向の村高減候儀難レ成事故、矢張向の田地に致置候、是を飛地と申候、川瀨附寄次第と申儀取違候て、此飛地を此方へ取候樣心得候事有レ之儀は、心得違の不法に候

按、川瀨附寄次第に心得違多し、川筋向の村へ突當、段々川欠に成、此方へ附洲に成ては、河原の空地多出來ぬれば、却て附寄次第と心得て、此方の物と思て、多くは出入に及也、飛地といふも、大概田地の內を川筋突通りて、其作毛畔成抔(一本作形)所々に殘て有は、早速飛地と分れ共、自然と段々欠入向ふべも附洲等出來たるは見分りがたし

董正按、附洲川欠の事に心得有べし、水刎杭出し籠出しの仕方により、水勢向岸へ强突當、河瀨俄に替る事有由、是は多分奸巧のものゝ致事也、見分吟味其心得有べし

一　又曰、秣場野原山林等入會の地所には、何れも地元有レ之儀に候、地元は野山年貢不レ出候も、又は年貢出し候も有レ之候、入會の儀は、古例次第の事にて何れも先は證文證據無レ之事に候、地元村たり共、新開立出等は不レ爲レ仕候定法にて候

一　又曰、百姓持の山林秣場等、前々より割持に分切之立候所も有レ之候て、古來より山錢野錢も不レ出所も有レ之儀にて候、所により古き檢地の村方には、入會無年貢空地有レ之事に候、一槪に如レ此空無レ之とには無レ之候

取上田地之事

取上田地は、上より取上るには非ず、百姓罪有て欠所成、又借金多く何方も不都合に成て、不レ得二

止事一其地を去の類、其事に從て心得有べし

董正按、取上田地は、上より取上るにはあらずと申は、違說也、罪有て缺所に成程の百姓の持田畑山林に至迄、取上に成は定法也、此外上ヶ田地と申事有レ之、後に記す

一　地方答問書云、追放又は仕置に成候百姓、缺所に成候百姓田地質地に入置候分は、入札と申付候て質借金より入札直段高く候得ば、質金程相渡、殘分は處置候、若入札直段下直に候へば、田地を流地に渡候法にて候

一　逐電缺落百姓之田地は、取上候法にて候、拂田地には不レ致、村總作に申付置候、何之科もなく身代不二相成一して、逐電缺落仕候ものは咎無レ之事に候故、後日に立歸り候節、田地爲レ取候事も有レ之候故、總作に申付置候

董正案、免合至て高く掛り物多く、或負高多作德少き村方は、上ヶ田地に致度段願出る事有也、百姓不埒成事には候得共、實に取續兼候を無理に農業相勤、御年貢取立候得ば、不レ得二止事一百姓自然に退轉致し、村方衰微の基也、能々吟味勘辨可レ有事也、天明年中伊奈攝津守支配所常州村々、困窮に陷り相續成兼候由にて、上ヶ村に致し度段願出候事有レ之、夫より追々御手當被二成下一候也、又甲州の御代官增田長兵衞支配所にも此類有レ之、願の通り取上げに成る、尤も是は御代官心得違也、取上ゲ地に可レ致筋には有レ之間敷、潰に及ざる樣永續の取計方可レ有レ之事也

一　未進百姓年貢納兼候迚、田地取上候儀は無レ之法に候、未進の百姓何共難レ納候はゞ上ゲ田地と申て、田地を當分上候得ば、總作にも申付、又は小作にも爲レ致候て、連々未進分程取候得ば、其後は地主へ田地を返し爲レ取候事も有レ之儀にて候

董正案、此一段は尤國柄の善惡に依べし、關東奥筋手餘荒地有レ之國々、田畑家屋敷をも打捨置、缺落する程の村方抔は、此格を以て論じがたし

一　或覺書に、名主百姓引負未進等有レ之候得ば、田地取上、相拂候、未進償ひ申候時、讓田地の慥成證文有レ之候ても、地頭へ不二相達一名前切替不レ申內、是又取上申候と覺候

董正案、引負と申は、名主に限りたる儀にて、百姓は未進不納は有レ之候得共、引負は無レ之候、未進と申は、年貢半分も納候て、又半分は不二相納一候と申候、一向に納不レ申候を、不納と申候、未進の分彌納兼候得ば、百姓より願候て、田地を上させ小作に申付、未進皆濟の上元地主へ戻遣候、又今年之年貢、來年の五月迄に不レ納候得ば、田地取上村總作に申付候、不納と申は、未進よりも少々咎重く候に付、皆濟の上元地主へ直には不二相渡一、兩三年も過候て願候得ば、返遣候事の由に候、又名主の未進、其上引負等致候得ば、平百姓よりも其科重く候故、田地取上拂にも相成申候

一　或覺書曰、缺所に成候百姓田地、又は上地有レ之節は、前々より作徳米と申、取立御勘定に仕上來候、此作徳米心得違にて、年貢同前に本石にて取立候、年貢の儀は殘候作徳の內より出目米相納候に

付滯事、譬ば缺所に逢候百姓在住の內、四斗入五俵程も出し候はば、拾俵の內にて上納の年貢懸り物口米等引て、作德は斗立にて取立申候、作德に出目付候ては、品により村辨納に成候歟、差支候事出來、畢竟百姓の相對に、本石の請拂は無之事にて候故、本石は取立可申筋無之候、尤御勘定仕上の節、右斗立の作德米を本石に直し、臨時物に記之、缺所田地、上り田地、村總作に申付候共、此例に准ず

董正按、缺所の取上地は、伺の上御拂に相成候趣近郷へ相觸、入札申付る事也、多分は親類の內にて買置、御仕置に成候ものゝ妻子扶助の手當に可爲致樣、入札の樣子勘辨いたし取計可遣事也、右の拂田地望候もの多有之候得ば、格外の高札も入るものなれば、次札を落札に申付る事も可有之、但田地壹反に付永壹貫文以下の入札に候へば、不及伺村總作に申付候定法也

檢見坪刈之事

檢見は、作毛の見分也、毛見共いふ、坪刈は有米を積る法也、此仕方に先輩の諸說あり

一　地方問答書云、坪刈桝の寸尺、壹間は六尺壹分四方也、但內法也、木を以する事惡し、都て木はぬれひづむ事あれば嫌ふ也、竹にて拵へ、（一本ての下樣字あり）坪刈する時は四方の隅々切組にして、銅串をさして田の地へ差入、動かぬ樣にする也、坪刈の竿あてに正路不正路有、坪內稻株四方付にならぬ樣に竿をあてがふ也、貳方附にする大法也

按、一方、二方、三方、四方菱附といふ有、坪竿一方附て三方すくを一方附といふ、二方附て二方すく
を正法とす、三方當、四方當いづれも正路にあらず

一　坪刈の正法顛路の仕樣、坪枡を刈候田の坪續へ打返して當て、一所にて貳坪刈て、貳ッに割て平
均して、壹坪の籾を用る也

按に、一所にて二坪刈を、正法顛路の仕方とは事足らぬ說也、其理を押時は、三百坪刈て平均せざ
れば、意にあきたらぬ所有、然れ共左樣に刈事はならぬものなれば、田地何枚も見合て、其中分の
壹枚の內にて、能所を刈て然るべし、勘定づめにては、中分の內の中分成所刈筈の樣なれ共、上出
來の所は先は出來かた揃ふて、格別の高下なきもの成故、中分の上にて平均に成べし

一　上田中田下田にて、各三坪宛刈て、九段合て目樣に用る事古法也

董正案、古人檢見に念を入、心を用る事如此、前按に、二坪刈て平均するを事足らぬ說也といへり、
されども寛文年中駿河の御代官古郡又右衛門は、父孫太夫よりの仕來りにて、右の通二坪刈て一坪の
籾を用るといふ事舊記に見へたり、答問書の說は、古法といふべし

一　田畑六尺四方を壹歩と唱申候、尤檢見の節坪刈にも六尺四方を用候、是を步刈と唱申候事に候へ
共、近來坪刈と申習はし候

董正按、司馬法に、六尺を步とす、田法に六尺四方を壹步とす、坪は六尺六面の事にて候得共、世俗

の習はしは改がたく候

一　籾をこぎこなし、干さずして直に計候時は籾壹升を五合摺の米に積る也、籾を干てこぎこなす時は、籾壹升を米六合摺に積る定法也

一　惣て坪刈を取箇の元に立て用るは、地方功者の取箇には、用て用ざる事也、檢見するに引方を立て、目こぶし同樣年の豐凶を考るに、坪刈を用ゆる事也、取箇は古檢新檢地廣地詰り、其村作外の稼山林海邊市場等、此外品々の百姓產業の仕よき所を勘考致し、吟味を盡し、取箇附極る事、理屈取にならぬ樣に正理を用ひ、順路に困究に及ばぬ樣取箇附する事、役人の肝要大切の事也

按、此段の說前々より世上に云事なれ共、年の豐凶の考には、坪刈までにも及ざる事也、然共古來より坪刈は、檢見第一の法とする故、地頭は是を以て損害を積り、百姓は是を以て年貢可ㇾ納程を知る、然を坪刈を取箇の事に立て用るは、功者の用る事にあらずといへ共、專功者といひ勘辨と云時は、懸空に成て何の取所もなく、見込といふも別段の事成べし、坪刈の法は、取箇附の第一義と知べし、扨檢見に大檢見、小檢見、遠見檢見、なけ檢見といふ事有、大檢見は、御代官の檢見をいふ、小檢見は手代檢見也、是は損毛の年の事にて、通例の事にあらず、一旦御停止なりしが、享保四亥年より小檢見不ㇾ仕して、吟味行屆ざる處へは可ㇾ出旨被二仰渡一、勿論吟味の仕方御書付も出たり、夫より例年豐凶の差別なく、小檢見を出す樣に成て、多分小檢見は大檢見と、日をかへて別段に廻る也、都て

法令は嚴なれ共、絕がたきものは賄賂の筋也、諸儒の論にも檢見取を嫌ひ、定免を好めるも、畢竟此賄賂の節を厭て也、依レ之一ッの仕方に、大檢見と小檢見と人數は別れども、別段に小檢見を遣さず、大檢見小檢見一同相廻り、其村にて左右に分るか、又場所を分て相廻り、見分殘らぬ樣にして、一村每に大小檢見の坪刈合毛又は損毛の多分を突合せ、勿論泊休村移を一同にいたす事、余が是迄見及しは何れも此通にせし也、是にて疑先は少し、尤吟味の拔る事もなし、又時により手廻し能事も有、遠見檢見といふは、其耕地の小口計り見て極るをいふ、又村々入組たる耕地にて、出來形同樣成場所は一通り見分の上、其中にて步刈合毛を改、其外の村々も其步刈通りに受るを准合と云、是は遠見檢見にはあらず、又投檢見といふは、休泊などへ村方の名主出迎ひ、當年は去年に何程の增減に納べし抔いふを、吟味して極るを云、元來田米畑永の差別なく、打込に極るを投免といふより、投檢見と付し成べし、凡檢見に檢見句あり、立毛の見樣成年々豐凶の考、風水旱蟲の心得有、今爰に略す、予が所レ撰の縣令須知檢見の部合せ考べし

董正按、縣令須知は、谷猶右衞門著述也、然其其家の原本先年類火にて烏有と成し由、谷文晁物語也、此書世上に存在するやらん、未レ見レ之

檢見に付諸事心得方之事

凡地方の道、何れも疎略すべからざる事也といへども、尤檢見は每年有ㇾ之事にて、殊更大切の儀に候へば、舊記古例の宜を撰び、熟察吟味可ㇾ有事也

一　檢見は百姓一ヶ年の安危に懸る事故、大切の義也、依ㇾ之出立の砌より如何樣の不埒無禮成儀、或は强訴等致共、決て立腹いたす間敷と、誓願して發足すること也と、先士の申傳に候、百姓といふものは、元來愚昧成ものなれば、理に違候願訴訟等をも致もの也、此時に臨て、面を和らげ詞を正して、穩に利害を說聞せ、怒氣を顯して叱るべからず、若不屆と思ふ時は、心ならず麁言も出、又强叱る時は、其權威に恐れて、申立べき事をも申得ず、萬事差扣へ候故、上下の心中不和なれば、自然と立毛豐凶の考薄く、善惡ともに御爲筋に不二相成一、御取箇附の詮議も不二行屆一、正道に違候義も可二出來一也、上役人不功者未熟なれば、手代下役上を侮り民を虐たげ、檢見第一の心得此一條に可ㇾ有

一　檢見廻狀は、定文言有ㇾ之て認る也、但其外に古荒永引之起返有ㇾ之候はゞ、縱令壹步の場所也共、無ㇾ隱帳面に仕立可二差出一候、若起返無ㇾ之村には、古荒永引の場所へ、銘々小札立置可ㇾ受二見分一候、尤小札の通横帳面仕立可二差出一と、書加へ可二差遣一事也、是は聊の計略にて候、百姓といふものは、作間にても産業に障無ㇾ之、永荒は領主地頭より不二申出一候得ば捨置もの也、又横道を以起返不二申出一も有ㇾ之、右の通廻狀差出し、永荒場不ㇾ殘見分と申觸候得ば、隱置候起返も、自然と出るものなり、兎角此方よりは餘り嚴敷吟味を遂ずして、百姓方より申出る樣に萬端働事肝要也、檢見の節手廻

し能候はゞ、永荒場も可レ致ニ見分一、若手廻成兼候はゞ、右場所に爲レ建候小札、不レ殘爲ニ取上一可ニ持參一也、永荒横帳の儀も御取箇附の節、悉用立調法也、右永荒廻状の事は、多分私領方にて用る事也、惣而御料は大分の御高故、檢見役人も大まかにて永引連々引多く、永荒場之起りも世話不ニ行屆一、百姓方も怠慢勝にて、省て身上潰すもの多し、可ニ心附一事也

一　檢見歩刈之仕方は、前條にも有レ之、不レ及レ記レ之、朝露雨後之濡籾は、合毛多有レ之もの故、何割引と引方立遣す也、此露代引樣に割合有レ之、苗代之籾を水に浸事、凡十四五日にして蒔也、籾十四五日浸し、十分に張候得ば、外三割程增もの也、ヶ樣之事心得居候得ば、右引方考に成候、籾は濡樣により、何程之引ヶにて歩刈何合と百姓見る前にて、帳面に留べき也、是にて百姓得心いたす也

一　大檢見、小檢見、坪檢見之事前に委し、色取檢見といふは、たとへば上田也共、作毛惡くば中にも下にも組入也、又中下田なり共、出來宜くば上田の取を以て免合を定む、是を色取共、立毛取共いふ、此檢見在功者入候事也

一　毛揃檢見と申事を、享保の比には專世上多用ひ候事之由に候へ共、とかく免合に不陸出來るものに付、其後神尾若狹守相伺、御料所は諸國一統有毛檢見に相成申候、坪刈之上御取箇極る通法に成候、有毛取、立毛取、色取同樣致方にて候間、前條之通毛取檢見は、格別六ヶ敷事無レ之樣なれ共、歩刈舂法之上出合を、壹升之内外段々仕分けて、田之位に拘らず、出來形を以取箇極る事故、寄合之仕法

入組たる合附有て相混ずれ、急ぐ時には免合の平均ならざるも難レ計、念を入得と可ニ辨別一也、惣て取箇之平均適等を求るを肝要とすべしといへり、但有毛取の外検見の仕かた、當時不用成事の樣に候得共、近來迄有レ之検見法にて候得ば、後年無用共申べからず、依て其大概を記す、心得置べき事也

一 毛揃検見と申は、百姓に下見爲レ致帳面取レ之、上中下下々と四段之位切にて、壹ッ宛刈也、上田は上計り、中は中計、下は下計と毛を揃て見分する也、大概一ヶ村にて四五段刈て、此平均刈出しを以摺合を申付る也、尤下見に直不直有、上田之下見八合にて、壹升壹貳合も有事も有、何程百姓實貞に強く下見致ても、下見は內端成もの也、餘り刈出し多くて、夫にて平均增合を申付れば、百姓騷立べき心を以て不レ宜、又何程下見强候共刈込不レ可レ致、若誤て刈込時は、當年は作方一統宜からず迚、百姓口々に申也、實に小作の村にても、其年之樣子に免合下げざる時は、役人を恨る也、又違作にても刈出し多ければ、不仕合にて検見請損じたりと申居候處へ、少々宛の引け立遣し候得ば、甚百姓悅もの也、右等の意味合考へ、步刈之强方宜敷事也

董正按、惣て検見は每年の事なれば、御代官勸農教諭之行屆ざると、日比之心ばへ、政事之善惡共、廻村之節見ゆるもの也、殊に取箇附之强弱、事實に當り取扱方宜しければ、民悅て心服する也、悅と恨るとの意味、取扱方の方寸に有て尤大切也、書經蔡仲之命之篇に、民心常なし、只惠に懷く、善をなす事同じからず、同じく治に歸す、惡をなす事同じからず、同じく亂に歸すといへり、治亂之端を考へ、末々

御爲第一に心懸、眞實を以て民を取扱事、農政之要務なるべし

一　畝引檢見と申は、其村上中下下々之當合を以て檢見に相廻候節、百姓損毛と申立る分、當合より不足致候へば、此分畝引致遣す也、畝引之法、左之通

上田壹反五畝拾五步　　當合壹升貳合五勺

此步刈壹升　　此畝引を問

答引畝三畝三分

術云、當合之內步刈之合を引、法とす、壹反五畝拾五分と置、此拾五步を畝法三にて除、貳合五勺を乘じ、當合壹升貳合五勺にて除得る也

一　損毛小作檢見と云事有、是は損毛之分計小札爲ㇾ建、其外惣檢見也、百姓に內見爲ㇾ致候ても不陸有ㇾ之故、損毛之分畝分計書付小札爲ㇾ建、見分之上田毎に何合毛〳〵と小札に書付、畝引致遣す也、但此見分の節、直に小札に何合と書付候得ば、百姓附回りて强弱を口々に申すもの故、符帳を用る也

たとへば　スヱソユタカニナレ

一合二合三合四合五合六合七合八合九合

銘々小札に符帳にて記置、其晩に位切符帳を分札之裏に、何田何反何畝步內何畝步引と書付畝引致す也、右小札何枚にても一所にしめ候て、畝引致遣す也、當合より符帳高き分は不ㇾ引と記し、札は百姓

に返すに不㆑及、尤小札之通横帳面之寄ともに爲㆑致、小札之〆と突合せ、若過札あらば捨る也、此建札には名主印形可㆑爲㆑致、名主年寄共損毛內見を致候外は、私に小札爲㆑建間敷ため也、右小札の寄帳を附には、其村檢地之强弱、水旱損之樣子、篤と相考寄帳付べし、旱損之稻は五合可㆑有と見極るも、步刈之上五合五勺も六合も有もの也、水損稻は五合と見ても、四合に成やすく、五合には成がたし、たとへ見分通合毛は有ても靑米死米多、旱損場よりは格別劣るもの也、右之心得を以寄帳付可㆑致候、水損稻は目を潰し候と心得て、少々宛弱く付て的當する也、勿論此檢見仕法に限らず、いづれの檢見、又引戾反別改る時とも、必此水旱之心得方肝要也

董正按、古人檢見之仕樣に丹精を盡し、色々有㆑之といへ共、先其村之當合より出來增之分は、百姓格別に精出したるか、肥しに物を入たるか、尤其年之氣候にも依べけれ共、多は手入之行屆たる也、ケ樣の出來增をば見捨に致置、作德にとらせ遣すべし、風水旱蟲の障有て出來劣たるは、引方致遣す事正法順路と聞へ候、毛揃檢見に不㆑陸有と申は、たとへば下田之百姓も耕作に精を入れ、肥しに物を入て能出來たるも、上田之百姓年々骨打ずに能出來たるも、五步〳〵に取鬮附られては、順路之檢見には、上作之分は根取之免合と當合と見合せ、少しも增べきと見受候はゞ、步刈にも及間敷也、尤出來不出來見合せ、平均免之仕出し心得有べし

古今租稅之事

董正按、租稅と申は、年貢物成之事也、本朝も上代には貢法助法徹法とて、物成之取方夏殷周の世の制法に習、漢唐の制法に從ひ年貢を定めし也、然共續日本紀、文武天皇大寶年中より以前の事は、三代の法に從ひしや書傳委しからねば不可知、文武帝より以後の法は、弘仁式租事令、延喜式、拾芥抄、職原抄、律令格式等に委有之といへ共、稻は束數を以て定め、田割は町別を以て制す、租庸調のみつぎも、都而唐之世之法を用て至て宜法なれ共、當時之取箇とは大に相違して、今より千年も千五百年も以前上古之事を推量するとも、大旨を知のみにして委事は知がたし、但此原本には、其大概を記といふ共、今世に益少ければ、此度是を截略し、當然之有用を增し、無用を減ず、好古之士古書に就て尋給ふべし

一　集義外書曰、問、今之制は四分六分也、四分百姓取、六歩地頭取といへり、今日本にて十一の法を用ひるは大身小身共に、武士は一年も難立、却て亂之端と可成、古へ迚も日本には行はるべし共思はず、答、四分六分にして、六分年貢に成、四分百姓取といふは、上田之水を入れば田と成、水を落せば畠と成、麥作米よりも多出來て田麥には年貢無所之事也、中田は六歩百姓取、四分年貢と成、下田は十にして貳ツ計年貢と成、八ツ計百姓とらでは立がたきもの也

董正案、上中下田を等分して、年貢十二作德十八、是則平均四公六民之法に當る、都て取箇を積るに高合毛の引ヶの立べきを引ずして、低合毛之分は割より多引て、都合して元の割に合せる事一ッの習也、熊澤が此說より出る歟、原文之舊按集義外書之意と齟齬する說有は、是を用捨して略記す

一　地方答問書曰、關東方は御取箇反取永を極候、上方は厘附を以定候古法に候、都て四步上納、六步作德と申定より御取箇は極候、右之通關東方は根取石盛を二ッ割五步取と、極候時は、上方の厘附取も五ッ取と極候積に成候に付、然ば懸り物を入候得ば、六步上納之積るに成候、上方も關東も四分上納、古來より之法にて候由、四步と極候ても、高懸り等之品に有レ之候故、五步之納方に成候、上方關東惣御料高の御取箇、古來兩年平均大方三ッ五六分取に當り候、依レ之百石之高にて百俵取候、米俵三斗五升入にて、三拾五石納來候儀と申候

一　又曰、畑方之取關東方永取金納之儀、田方同事に米取に致し可レ然と申儀も候得共、中々米取難レ成事に候、惣て田畑共其地に作り出し候ものを年貢に納候筈にて候、田には稻を作り候故、米を納、畑には色々雜穀野菜等を作り候故、此品々を納候事不ニ罷成一候儀に候間、作り候諸色を賣候て、畑方永取金に致事に候、上方畑方も米に取候得共、取米の三分一は金納の法にて候、上方も國々平均候得ば、大方田方三分二、畑方三分一程有レ之積を以如レ此候、畢竟三分一金納は、關東も同事畑方金納之積に候、關東方は平均田畑大概等分之積に候、關八州は畑方多田方少候得共、伊豆甲斐出羽奥州を入候得ば、

大方田方等分に可レ有レ之候、關東方畑方永取下免之儀も、由來有レ之事に候、上代は日本も畑方無年貢にて候由、古昔之名殘にて隱岐佐渡國畑方無年貢にて候處、近來年相納候、上代は人少にて、田方第一に耕作いたし、畑には雜穀野菜少々作り渡世仕候故、國々野廣にて、畑は少く有レ之候に付無年貢にて候由、中古以來畑方段々開け、雜穀其外諸作致し候故、畑方年貢は金納にて候、往古は米穀下直に候故、米直段積甚下直に付、其直段積を以畑方永取下免に候と相見へ候、近來米高直に成候故、當然は畑方之永取甚少分に見へ候得共、國法に成來候て、今更畑方米取に直し、又永取今時之直段に合候積に、取永上げ候儀無レ之を重候事故、中々容易に難二取上一事に候

一 又曰、畑方之事上筋は田方同樣米取、關東筋は畑方永取之定法にて候、畑方は二毛三毛四毛迄も作り候ゆへ、畑方は毛見不レ致候、取箇之定法とて、格法立候儀も無レ之候、新開畑之取箇は、其近邊地續の村見合候て、畑壹反に付永何程と取箇附候、米取も其相應に極、差別之目付といふ事も無レ之儀に候

按、上代日本之畑方無年貢といふ事、往古之事は不レ知といへども、保元以前にも、雜穀之貢は中古之例を記

一 東鑑曰、養和二年四月、可レ令二早停止一、若宮供僧禪裔在家役並自作之麥畑壹町地子之事

按、無年貢共云がたし、畑方を米取に直し、又は永取を近代之直段に取事、中々容易には不レ成事な

り、成程通例の了簡にてはならぬ事也、都て世上の事共一事之上を論て、是より此法に利有と、當座の理屈のみに拘る時は、其事の上にては理は詰る樣なれ共、外に差支之出來る事間々有事也、又古來より馴し事なれば、變じ難しと一途に思ふも不ㇾ通也、關東畑方永取に定る内にも、私領上知坏には畑方米取にしたる村有、如ㇾ此は私領は米取になれ共、御料はならぬは如何之事にや、國により札遣ひにて通用自由成所有に、先年當十錢さへ通用せず、はた商ひ又とたん市共云米相庭之商人、大坂にて御停止の時もとかく流行止ず、江戶にては御免有てもはやらず、豐年打續て米穀下直成は國家第一之幸福とする所、然に今之世米穀甚下直なれば、工商のみ悅で士農甚苦む、士農困究すれば工商も又立がたし、是等の相違は人情時勢の然しむる所にして、國家天下に及迄離るゝ事なし、然時は一事を起し一事を改るにも了簡有べし

一　鈴錄曰、中古より兵農分れ、地四分百姓六分に租稅を取る、然ども其地頭四分内、一分は朝家の租稅にして、此内にて國司の祿其外の國用を足す

董正按、此說中古之大法をいへる迄也、四公六民は古今之通法に候へ共、天子の御領を天領と唱へ、諸國に有といへども、源平之亂後よりは、天領次第に減少する計にて、法令は有之通なれ共、中々令條之通行はれたるにあらず、四分一を朝家へ奉るといふは、當時民間にいへる上は年貢にて、此法中古の變法なれ共、永續したる事にあらず、いかにとなれば、鎌倉以後天下兵亂打續き、天子の御心に

任せぬものは、鴨川之水山法師抔いへる時節に至りて、四分一を朝家へ奉るものあらんや、御即位の料さへ無レ之事もあれば、定法のみをいへる成べし

一　將軍家譜（豐臣家譜也、林道春所著、全部七冊）曰、文祿四年、又下ニ九條法制于諸人一、大權現利家秀家輝元隆景復加判、又其三曰、天下賦稅、三分二者地頭取レ之、三分一者耕民可ニ自取一レ之、愼勿レ使ニ田畝就ニ荒蕪一也

董正按、太閤一統天下之後之法也、地頭三分一百姓三分二取といへる東鑑之說と、此法表裏也、取箇甚重き樣なれ共、天正文祿之以後は、武士領國を離しもの多く、戰陣之用途馬之飼具さへなければ、如レ此不レ取しては叶がたき事にや

一　地方算法前集曰、厘取反取共に、毛揃平均取根取（毛付取共）位免段免と云有、平均取といふは、田方位何も分米を一口に記して平均厘にて取也、根取毛付取といへる事正法也と云、根を居ると根を動すとの二品有、先根を居るものと心得て、去年之割付を以當合可レ定、上方は一口平均厘取の所也といふ

一　又云、關東畑方永取も、反取米之仕出しにて、上畑は上田之反取米を、貳石五斗代之永にしたるもの也、是古來之定なれ共、當時は米高直なれば、勘辨有べき事也

按、取箇に古今各別之相違有事は、時代に郡縣封建之分有、其代之沿革を知ずんば、其事は論ずべからず、當時四分取五分取之說も其時節之御定次第なれば論に及ばず、毛付取と云も、色取といふも同樣なれ共、算法集之毛付取と、當時の毛付取とには心得違あり、色取共、合毛取共、毛付取ともいふ、算法

集之趣にては、何程豐年にても根取は增事なく、通例之年にも畝引をするやうに成也、畝引といふは、損毛之年之事にて、通例之事にあらず、然共厘付を動かしては、重て急に上がたしと思ふ故、厘付をば居置て、合不足引を立る樣に成、元來之毛附取といふは、上中下之差別なく、其出來かたの合毛次第に毛揃をして、一村の惣有籾を積りて、取箇を極るをいふ、是に依て上田にも出來劣り貳參合毛も有、下田下々田にも九合一升毛も有、其地位にはよらずして、貳合參合壹升と合毛取にするをいふ也、然るに上中下田各其根取之反取を見て、根取より餘るは捨、不足は引樣に成、尤古へは左も有べけれども、檢地も年を歷ぬれば、昔極し上も下に成、下も上に成所多ければ、合毛取と可レ成事也

又算法集に、位免之事名目有て、其解分りがたし、勸農固本錄に、厘取之仕かたに、段々合付を以平均取を仕出し、或は上田之內にて壹升毛何町、九合毛何町、八合毛何町として、反取米を盛にて割、毛付厘に成、此厘付を分米に掛て、合毛每之取米を知る、此取米〆を上田之高にて割、上田之平均幾ッ何分何厘と知る、中田下田も如レ此と云々、此義成べし、段免といふは免違ともいふ、是亦固本錄に、谷限高限惡地抔有レ之は、其分免違あるをいへり、扨又答問書に、上代畑方無年貢也といへども、東鑑に、麥畑壹町之地子を免じたる事あれば、一概に無年貢共いひがたし、又高役も畑は田の半分懸りあれば、年貢迚も大概田方之半分とする事、いにしへよりの法と見えたり、依レ之今も田畑成に其田方の取之半分を附來る事、自然と古法に合る成べし

一　地方答問書曰、都て田畑取箇には、算法といふ事無ㇾ之儀に候、畢竟地方功者にて毛見検見之上、思案考之功を以て取箇附致し候より外に術無ㇾ之候

按、取箇に算法無ㇾ之と云事は、石高の始之事にて、今にては云がたし、元來村高之百石は籾百石取、五十石は籾五十石取と無造作に拵へたる物なれ共、段々辨ずる通籾納止しより、又四分取五分取之說に立歸り、厘取反取根取合毛取杯いふものに成て、格別地面之甲乙あるは、段免にもせねばならぬ也、然者一向算なしとも云べからず、又地方功者にて思案考之功といふは、道理は至極尤なる事なれ共、初心のもの悪敷心得ては、諸事自分計之了簡に落て、其弊終に我儘に成、十人は十色、百人は百色にて、世俗の所謂寄合世帯といふものに成て、云傳へ教習をもすべて廢るに至る、初學夫是を思へ

增補田園類說卷下終

縣令須知

谷本敎著

縣令須知序

夫縣令の職たる事、兼る事も多く、任ずる事もまた多し、心を盡さずんば有べからず、然れども久敷其事に馴て廣く見聞を累ねざれば、事情に達しがたく、事情に達せざれば、徒に其心を盡くさむと欲しても、益なかるべし、予縣吏となりて、常々是を患ふ間暇あれば、世に傳ふる覺書を尋ね求めて、心得の端ともならん事を分類拔粹し、檢地に始、種藝に終り、凡べて五篇、假りに之を名附て縣令須知外篇とす、其餘は本書によりて正すに暇あらず、且見聞の廣からざる、其理の通ぜざる事多かるべし、冀は其事に馴し輩、捨てずして其足らざるを補ひ、その誤りを訂さむ事をと云爾

谷　本　教　序

目

水利　第四　　種藝　第五

縣令須知卷之一

谷本教著

撿地　第一

一　檢地の事三百歩を一反として、此一反の斗代何程と、石盛を付け集て、高何拾石何百石何千石何萬石と結び上る事は、文祿慶長の比より起りて、往古は無き事なり、往古は田地長三十歩橫十二歩を以て段とし、（段の字、今は反の字を用、是は段の字草書反と似たる故、誤り轉じたると云傳へり）十段を町とすとありて、三百六十歩一段の積にして、年貢諸役も町段に應じて勤めし事なり、尤其田に公田私田口分田位田職田などとて、樣々の名目ある事、古き書にも見へたり、鎌倉將軍家の末に至りて、町段の外に貫高といふ事起りて、夫より京都將軍家の時代專ら行はる、然るに東鑑には何れも町段のみ記して、貫の事みへず、太平記に北條時宗靑砥左衛門に、三萬貫の地を宛行給ふとあれば、京都將軍家より前代東鑑末の事成るべし、此貫といふに傳來

兩様あり、田一坪に苗一把種る事にて、百坪には百把種、是を百日と云、千坪に千把種、是を一貫目と云、此積りにて大抵十貫百石百貫千石に當れども、上中下によりて一定せずと云へり（此積にては、一貫の地古反別の二反廿八歩、昔の別の二反三畝拾歩に當れり、是は一坪に稗壹升ずゝある積りにて、百坪に壹石、千坪拾石の積なり）又出羽國最上にて古來より云傳へて、今も田一段を百刈、一町を千刈と云、（此積にては一貫の地古反別にて三千六百歩にて、百刈は三石六斗、千刈は三拾六石に當る、大きなる相違なり、但し又此北方記す貫高の後、永高の書傳への辭なるや、又出羽奥州昔は田地も領國より廣くして、後國の三百三十歩は百歩程にも當れるにや、兩國の内貫と云は、千坪の所をいふなるべし）今按るに關東には石の貫高の後に文永高といふ事の別に起れりと見へたり、それを今時の人貫高と永高と一ツ事と心得違たるならん、或覺書曰、近年鎌倉の割付をみれば畑方何〆何百文、此取永何程と記しあるといへり、永樂錢渡らざる以前の貫高ならば、何〆何百とありて文とはあるまじきなり、但は又百目一〆目の字を文の字と書替たるか、夫にしても此取永とあるからは、永樂錢專ら行はれし時の引付成べし、又或覺書曰、古來永一貫文を五石と極る起りは、今以鎌倉中に永高有、鎌倉の永高は古來の永高成べし、今東海道筋の永高の所多く有レ之と云ども、鎌倉風は違ひたり、是は其以後の永高成べし、鎌倉永高とて貫文を云ふは、一〆文の所千坪の積りに申傳へたり、是を以みる時五石替と極る起りは、淨役を永高に結ぶは定納物故、百姓大概十五と云は中より上の場所ゆへ、上田の位に見て是貫文に十五をかけ、是を以割ば五石を結ばると云へり、此覺書所々にてみしなれば、多く世上にも云傳へたるとみへたり、大きなる違なり、先十五といふは斗代にては壹石五斗の事なり、是を三ッに

割ば五斗に當る、五石といふは位違ひなり、但是は古來一貫の地千坪は、新檢の三反三畝拾歩なるを以、是へ十五の盛壹石五斗を乘れば、五石となるといふ事ならんなれ共、是は皆推慮を以あてがいたる物なり、此說を推す時は野高、山高、海高も、皆反別を同じうしての積りなり、山野は假令反別をわかつとも、海上獵漁などの年貢となんぞ一定の反別あらんや、是皆貫高と永高を一ッ事と心得違へたるによりてなり（一貫文を五石に直す事、即貮石五斗代より起りたる物なり、其わけ末にしるす）

畢竟其次第をいはば、鎌倉將軍家の末京都將軍家の始より、古への町反の外に別に貫高起り、其後關東にて永高に變じ、其後今の石高に成たるなり、其貫高と永高の違ひをいはゞ、貫は田にても畑にても地面千坪を指して言、文の字を付てみるにより、後世にて錢壹貫の事と心得違ふなり、往古の町反の內より右の通地面を分けて貫と言しなり、永高は永樂錢渡りてより、關東に專ら此錢を最上の錢として年貢はひたすら永樂のみを限る

永樂錢の事は京都將軍家の時代に、明へ書翰を送りて取寄し事あり、又應永の頃關東大風の節、唐舟多く漂着せるに永樂錢を積來る、夫より關東に多く行はれし所に天文の比、鐚と云惡錢を交て遣ふにより、市町の賣買にも爭ひ出來し故、北條氏康鐚を停止して、一向永樂計を遣へとありければ、關東の鐚は皆上方へ上りしゆへ、此後は鐚を京錢と云しとかや、天正十八年北條家亡びて後、永樂鐚同じく通用す、但鐚四錢を以て永樂一錢の代りとなる、然れども世上錢の選び六ヶしきゆへ、亦慶

長のころ、永樂を御停止有つて、鐚計の通用と成りしゆへ、永樂も捨りて、鐚同樣に成しなり、然れ共民間には金銀の通用なくして、專ら錢計を用ひしに、其の後金銀はびこりて、金銀錢ともに通用する內にも、東國は金と錢、西國は銀と錢を專ら通用す、夫よりして永一〆文は、金壹兩の異名成つて、永といへば金の事に成りぬ、永樂錢の事は、中古治亂記、本朝寶貨通用事略、令條紀などゝ云書に有レ之よし、いまだ其の書は見ざれ共、或人の語りしを記す、又或覺書曰、永一〆文と云事は、算數の上にて立たる法なり、金壹兩を永一〆文と云法は、勘定早速知安き爲なり、古來より有法なり、永樂より起たるといへる事いぶかしと云へり、此說然るべからず、すべて其物ありて其數有、其物なき時は數を書べきやうなし、永樂錢あるにより其數有なれば、永樂錢のなき始より永の法とて可レ有樣なし、永樂も元來錢なれ共、永樂錢を上の錢として、一錢を四錢に遣ふ事も、關東にて專ら行はれし事なり、尤金銀も有つれども、砂金又は竿金板金にてたがねを以切遣ふ、又甲州に碁石金と云て、信玄の時代に始りて其形丸く、一兩は金目四匁、一分は壹匁、其以下二朱、朱中などとて段々有て、甲州には通用しつれども、他國へ出でず、今の極印を打し一分小判は、此節はいまだ始らざりしゆへ、民間に通用なし、其後金銀ともに民間にはびこりし時に、金一兩は永樂錢一〆文と等しき故に、其引付を請來り、且金とも錢ともいはず、永といへば形なく噂になりて、何文何分何厘までも通ずるゆへ、永樂錢もびたと同樣になりたれども、永は金の異名に變じて錢といはず

永と稱し來る成べし

田畑の年貢も其所々を計りて、此場所よりは永樂錢ならば何程、米ならば何程納むべしと極め置て取りし故、いつとなく前の貫高變じて永高と成しなり、此ゆへに永高と云ば、國々所々に貫代區々の違有て一定せず、關東向は凡て永壹貫文を貳石五斗にかへ、下野宇都宮は三石にかはり、奥州白川、會津長沼は三石五斗に代り、仙臺は五石にかはり、出羽米澤は六石にかはり、此貫代境方一樣記に出たり、一樣記は作者不ㇾ知、古き覺書にて世上に多く流布する書なり甲州河內領は壹石四斗四升かはり、或覺書曰、貫代の事所により各別の違ひあり、但甲斐河內領貫代は各別ゆへ記すとあり又鎌倉の內にも壹石八斗八升に代るもありといふ、かくのごとくに區々なる事も、永高は其土地によりて此場所より永樂錢一貫文出すとも、米ならば何ほど出すべしと年貢の納高を極置しゆへなり、此永高に成りたる譯を考ふるに、貫高と云は地面千坪を一貫とするなれば、土地に隨ひて取ヶ收納は各別の相違有べし、即今の同じ高百石にても、取ヶ收納の高下各別成るがごとし、永高なれば直に其場所より納る程を高にして結び置ゆへに、其場所には廣狹有べけれども、納まる所は甲乙なく、即今も此引付を請來りて、野にても山にても海にても、年貢永壹〆文納る所は、すべて高五石に直し結ぶ定法にて、其場所の廣狹不同ありといへども、其納りは何れも不同なきがごとし、此ゆへに關東は貫高を變じて永高になれる物ならん永一〆文を高五石に直し、米も壹石を貳石五斗に直す定法の事、或覺書に各一倍の高に直す事、五分〳〵の取ヶとみての事なりとあるは相違なるべし、是は假にしての積りなり、古への百石貳百石といふは、假の事なりと或書に見へたり、又奥州仙臺は壹〆文と云は拾

石斗ノ文は百石と云、是も米五石を積にしての積りなりとみへたり、然る上は五分〳〵の取ヶと云説は非也、畑の積りなるべし

今の石高は蓋し往古公田の定、上田一段五拾束、（一束の舂米五升、五十束分は米二石五斗なり）中田一段四拾束、（右同断、米弐石なり）下田一段三拾束、（右同断、米壱石五斗なり）下々田一段拾五束（右同断、米七斗五升也）此積りを元に立、差略して田地の位を定、石盛を付、高を結びし物ならん（往古の反別は三百六十歩を一段とす、新検は三百歩を一段とするに、六十歩の減を差略したるか、地方一様記に古法は石付を以、斗代を考用せりとあれども、あながち石付によるとは定めがたし、只本文の通往古の上中下下々ある事と、米も出来ま其位に随ひて不同ある事をふまへて、此田地にはいかほど出来ぬべしと考へて付たるなるべし、文禄慶長の頃は、應仁以来の戦闘をうけて、いまだ今のやうに民居も定らず、土地もひらけず、然るになんぞ前々の取ヶを見合、船着宿場或は津出し運送諸事勝手を考ふるやうなる事はあるまじきなり）

畑方の高を結ぶ事は地方一様記に、上方は田方の斗代に五分違ひ、関東は六分違の法といへども、是は盛の事にてはなく、取ヶの違ひを取交て言たるなり、慶長時分の検地帳をみるに、多分上田十五、中田十三、下田十一、上畑十二、中畑十、下畑八にて上中下の劣りは何れも二ッ劣りにて、田と畑の違ひは三ッ違ひなり、東鑑、弘長三年六月の條下曰、御上洛の間百姓等所役の事、段別に百文五町別に官駄一疋夫二人可充行、至于畠以二町可准田一町と云へり、是に依て時は取ヶを定、役を掛るには、田壱反は畠弐反の積りは古来よりの法とみへたれば、上方関東ともに取ヶは五分違ひといふべし（役を掛る事も、むかしは五分一の法なれども、今は畑を風掛るゆへ、畑も五分一定めたり）又畑方の取永一貫文を弐石五斗にする事、関東六分違の法なりといふも信じがたし、弐石五斗代は即関東向永高の遺法なり、前々に記すごとく永高は國々所々區々なれども、御開國の始にはもはや永高廢じて、専ら今の石高に成りて、其上一統の御代に成しゆへ、所々の永高

は只其所引付の米相場の様になり、關東の弐石五斗代計り相殘りて通法となりて、今は又すべて畑永の定法に成たるならん、扨検地の事は經界を正すの一事にして尤可レ愼事なり、村により繩の延たるあり、詰りたるあり、又一村の内にも延たると詰りたる所有、されども取ヶは其村の様子を考へて、年來付け來るなれば、假令地の不同は有れども、一村の辻にては馴合ふ様にいへども、とかく地の廣さは德にて、詰りたるは損成事は、何方も皆然り、其上地廣なる作德も多き田畑多分は富る者持て、地狹なる位違ひなどの田畑の作德無は、多分貧しきもの持なり、是によりて富る者は倍德として、貧敷ものは益損をする事多し、此ゆへに検地の元は此不同の無様にする事第一の事なり、今不定地の新田割渡したりとも、必是を思ふべし、本検地の節ならでは極りたる事はなし、廣くても狹くても當分の事なりと疎略にすべからず、本検地の節にも最初の廣く請來る所は、自然と繩も緩に、狹く請來る所は、是又自然と詰るは人情の常なり、此故に本検地は勿論の事最初のわり渡、又は地改等に至る迄、少も甲乙不同なき様にと心得べし、次には土地の位を定むる事なり、若上を下とみて下を上とするの違ひ有れば、上方の厘取關東の反取ともに、始終其村のなやみと成て、又取ヶの障りにも成事なり、能々土地を考へ吟味して、毛頭疎略すべからず、検地の仕形は御條目詳かなれば述ぶるに及ばず、尤誰ありてあながちに求めて不同あるべきにはあらざれども、其人に功不功ありて、思はず不同の出來なん事無にしもあらず、是によりて世に云傳へしことを集めて、其事に馴ざる輩の爲に心得の端ともなりなん事

を願ふと云爾

一　檢地繩始は大方山近き所より打始るよし、又下の場所より始るよし

一　竿打時は深田へも踏込地味を知り、縱を先に打せ横を跡に打すなり、横竿に別して念を入べし、少の延縮大に相違有、勿論雨降風吹毛の上檢地心得あるべし

一　田畑當分地狹とも、荒地或は野山段々に切添開きて、後田畑に可ㇾ成所か、又は當分開置たる所も、末々藪林に押され日影に可ㇾ成所か、當時中下の地とみゆれども年を經て上地に可ㇾ成所か、此類ひに念を入べし

一　荒地にても野地にても原にても、明き地有近所は繩打詰たるがよし

一　川端は田畑ともに少づゝ竿を除て置たるがよし、打詰てはあしし

一　道兩方へ切込といへども、心地下りの方へ多く切込ものなり、其心得して間竿を打、道を作らせたるがよし

一　道代は引て置たるがよし、打詰ては惡敷事多し

一　檢地は春檢地然るべし、立毛をみて檢地すれば、土の吟味疎略となる故相違あるべし、秋作に宜しき所にも麥作惡敷、麥作宜敷所にも秋作惡敷所もあり、又年により上中下の田ともに立毛好出來る事あり、又下田の能出來る年も有、此故に土の厚薄强弱等の大方、用水の掛引を考へ位を定むべし又

曰、檢地に瓜茶の木など厚々と作り、小麥蕎麥など出來能ければ上中の位とみゆれ共、元來茶の木、瓜、小麥、蕎麥、野菜、もろ〳〵しなどは下畑に作る物なれば、出來によりて位を定むる事は惡敷なり

又曰、田に芋、麻、木綿など作りあれば、畑の樣にみゆるあり

又曰、屋敷近き所、多分は上に成る物なり、眞土はよく、野土はあしゝといへ共、一偏には定めがたし、惡敷にも肥しをすれば一作は出來る事なり、出來は能ても取實なきも有、立毛の目付計にては違ふべし、雨を好む地あり、旱を好む地ありて不同なり

又曰、草場ありて、肥し澤山成村方は、いつとなく土肥るなり

一　山の下は田畑ともに步積多く成る所と少くなる所とあり

又曰、山畑の檢地登りに打てば步積多し、下りによし、又見積りは相違有べし

又曰、山などに細長き畑あるは、眞中より竿取二人にて上へ登りに打、下へは下りに打ては竿の延縮平均に成てよし

又曰、山畑は次第に惡敷成事多し、然共眞土山の下などに有畑は、次第に好く成物なり

又曰、山畑下の下溜は心能ても地頭に損失有、殊に高きほど肥しも運びにくし、肥汁もこけ落て惡敷故、高き山へ登る程位を下げて尤なり、然共山の中段にも家居あらば、其際には上中も有べし

一　鹽濱檢地の事は下の堅きを上とす、下の堅き所は鹽多出來る物なり、步竿を落しかけて竿のおど

るにて堅きを考へて、上中下を定むべし、且又鹽濱のうちへ眞水の入は悪しと心得べし、或人曰、鹽濱の至極砂の細か成は悪しといへり、見分するには足駄をはきてすれば、砂の甲乙下の地のあんばい能しるるといへり

嘉永六丑年鄕帳

備中國淺口郡江戸道次百八拾六里　勇崎濱

一　鹽濱高貳百三拾八石五斗三升五合五勺

此取鹽貳千三百七拾三俵貳分七厘

此石五百九拾三石三斗七升七合五勺（鹽壹俵ニ付貳斗五升入　高直段ニ付平均　九俵九分四厘九毛　壹石當リ不同）

在不同

定納物

一　銀四拾三匁　鹽捌方　冥加銀

一　銀四拾八匁　薪　冥加銀

一　米壹斗四升三合　御傳馬宿入用

一　米四斗七升七合　六尺　給米

一　銀三拾五匁七分八厘　御藏前入用

外
一　銀貳拾壹匁六分　船役　年々不同　運上
　　鹽五百九拾三石三斗壹升七合五勺
　納合　米六斗貳升
　　銀百四拾八匁三分八厘

一　古き檢地帳に大步、小步、大格步、小格步半と云ふ事あり、大步は貳百步なり、大格步は七畝步なり、小步は百步なり、小格步は三畝步なり、百五拾步を半と云ふ、六畝拾步を半四拾步と云ふ、如何樣の譯にて町段を記さずして右の通記すとや、いまだ是れを考へず、但し通例なれば有來る何町何反と記すべきを、別に名を付しは町反は改て記せども、見取のやうなる所にてかく名目を立しにや
一　檢地野帳折目を向ふへするは風の爲なりと、さもあるべし
一　繩は水繩管繩共に一間目〳〵に、木の小札を付、始より終まで間數を記し置たるかよし、間數はやく知れて手廻しよし
又曰、竿を打につき、竿と云は竿を地につけて地をすらせ、先に引目を付て段々かぞへて行を云、違ひなき物なり、竿を中に持て步み打は違ひやすく、又何程手足のよ丶定まりたる竿取にても、朝と晩は延縮

ある物なり、心を付べし

一　檢地帳を水帳共云、水帳は御圖帳成べしと或書にみへたり、或人曰、先年西國筋社地の爭論有りし時、品々の古き書物をみしに、御圖帳と書し古き帳面、即今の檢地帳の樣に反別を記せし物なり、殊の外古き書物にてありたると云へり、是による時は往古は御圖帳と唱へ、中古は田文、東鑑にあり今は水帳と成れるとなり

(欄外參考)

越後國蒲原郡の内、溝口龜次郎上知村にて壹反三百六十歩にて、大貳百四拾歩、半百八拾歩、小百貳拾歩、縱令ば何反大拾歩三尺と云、此三尺は五厘の事也、厘は五厘の外はなし

昔私領の檢地と云、今も其檢地の儘なり　穩明記

弘化四未孟春

土の甲乙

一　土地を見るに先陰陽を見分け、草木の成長と色と石の色、土の輕重淺深、或はねばきともろきと、其外日向の善惡、雨露風うけ等をみて、上中下の位を見計ふなり

又曰、陰氣の陽氣に勝ざるをよしとす、土のしめりたるは陰なり、乾きたるは陽なり、ねばり堅まりたるは陰なり、柔か過たる浮泥の類は陰なり、氣が（マヽ）強くはらくる耕し置たる所へ、雨降溝つぶれざる

は陽にしてよし、溝すきめ角つぶれるは陰して惡し、勝れて乾地は草の色赤、雨降ば勢ひ能成、又勝れて濕地は雨降程、草色惡敷成ものなり

一　土上中下の大概

白眞土　黒眞土　赤眞土　砂眞土　鼠眞土　稻子眞土　大河こみ海水の節泥の溜　野土交眞土野土の樣にみへて、小石交さらき土は上なり、見分がたき物なり　小石思合たる眞土

　右は上の田畑たるべし

さゝ石交眞土　砂の過たる眞土　小石交白眞土　黒重き野土　砂の過たる大河こみ　中たるみ山畑

　右は中の田畑たるべし

ねばき赤土　强きねば土　强き眞土　砂交野土　輕き赤土　灰土　輕野土　青まさ土　砂計の畑

　右は下の田畑たるべし

一　白眞土色白く少し青色あり　にてねばり心よく、日に强く、土色能は上なり、五穀生て粥多く味ひもよし

此土にねばりなきは日に弱し、中下の土なり

但竹木は心よく、枝少なし

一　黒眞土山入に多し　麝香色を上とす、米白、竹木刀强く節少し

此土に紛るゝ土有、川端などへ年々ごみを押寄、砂交りの上田有、元來黒眞土よりねばり少にして

地しからず、然共如レ此の土ありて、地の深きは無類の上田なり

又曰、黒眞土に砂交りてねばり心よく、土の重きは上土なり、兩作共に實入能事各別なり、別して此
土に木綿よく出來る物なり

此土に輕くしまりなきは中下の土なり、兩作共に日に弱し

一　赤眞土に砂交りてねばり心よく、土重く色ほんのりとみゆるは上土なり、此色の土は和らかにし
て兩作共に實入よし、五穀生じてぬれ色ありて味ひよし、草木勢強く竹木に節少く力強し

此土に色につや有りて、ねばり強過たるは宜しからず、麥作刈取て跡の土手にて、碎けかぬるは宜
しからず

又曰、此土に細砂交り過て、土色はつきとして落付たるは、五穀ともに取實少し、中の土なり

又赤黒眞土にして、いさ石小石有て、底に石なき土の和らか成るをよしとす

一　青土多く赤黒くして、むつくりとしてねばりなきを上々地とす、惣じて何の土にても、ねばり過
たるは土強くして惡敷なり

一　眞土に砂交り小石交は上土也、此内も土のぬれたるは日に強き故上土となす、五穀實入能味宜し、
此石に細石交りてぬれざるは日に弱し、中土なり、諸作生出心よからず、眞土に小石おもひ合はぬ
故なり、此土に肥しは能きく物なり、又曰、眞土の所も底より眞土成は上々なり、底より眞土成る

所は少し、五尺、六尺或は三四尺下は岩か、或は惡敷土にて上一かわ眞土成る所多し、さるにより地深き所をよしとす、

又曰、眞土の所は冬霜柱たゝず、霜降ても道惡敷なし、夏はごみふかゝらず、風吹てもごみたゝず、是眞土なり

又曰、眞土はよしと雖も、砂氣少も交らざれば、干かたまりて石のごとく、諸作共に心よからず

又曰、何程能眞土にても古へ川原の地にて、田畑壹貳尺底に石多く、土の淺きは下田同前なり、ヶ樣なる地は必田水を掛ても水保あしく、又さなくても肥し過れば稻枯、又少ければ惡し、年々雇土とて外より土を入ねば出來ず、如レ此田は能出來ても取實はなし

一　灰の樣なる土器色交りの野土は、下土にて惡敷なり

又曰、赤野土是又惡土也、野土の內の下なり

又曰、黑計にて輕く灰の樣なるは野土にて下なり、然共此土には野菜の顏はよし、草木も心よくのびて萬の苗木は盛長す

一　細砂計にて土氣なきは五穀實のらず、場所により田に水保たず、草木不レ快、惡下地なり

一　土によりて眞小石の有るは上の地、死石の有は下の地と先知べし

一　田方は水掛り專らにして、上に長流水有りていかほどの旱にも絕えず、又水吐よく洪水の難もな

く、或は池を掘へ日請能、下に水氣を含、上に陽氣を請、土の性よく、地深く肥しを用ひずしても、村里の汚水流入十分出來ても實のりよく、耕こなすに土ばらつきて牛馬の力費へず、何程の物作ても嫌なく、其地は黄色又黒色にて、重くさわやかなるは上々なり、凡土の上なるは青黒の小石交る物なり、又陰氣勝にて陽氣請る事少き地は、草生ては見事に長じても、實入劣るものなり

又曰、田方は少地淺くとも水の掛引よく、日請の能き砂交りの田は米性よく、春べりも少く、味ひ能きものなり

又曰、惣て田へふみ込見るに、ねれたるは上土、日にまけずさらきは下土なり

又曰、田の土足につかぬは下土なり、畑にてもぬれても足につかぬは下土なり、ねれたる事無故に足につかず、皆ごみの如く成るに依て田畑に足つかず、是野土の内の下土なり

又曰、深田も其游泥干て重きは上土なり、輕きは下土なり、小石交りも同前なり、眞土に小石交りは上田、是には畑して肥し能き物なり、然共其内に又上中下有、土にねばり有て、日にまけぬは上なり、此土は草木色よし、五穀生じて味よし、又小石交てもねばり少にして、日にまくるは下なり、又小石と眞土と思合ぬゆへ、畑地土色乾きて早々日にまくる故下なり

又曰、沼の田地にても土にねばり有て地のしまりたるは上なり、ねばりなく、たとへば灰などに水をかけたるごとく輕きは下なり、重きはよし

但、沼田の土の輕重難レ知は、其田の邊の土稲の葉に付たる土をもみ碎き、手の内に置ふきてみると、重きは手の内に殘る輕きは殘らず

一　畑の野土にも色々段々あり、黑色にておもくさらき計りなるは、野土にても上なり

又曰、中高成る畑惡し、中のたるみたる山畑よし、山畑は大方地かしらは壹貳間土こけ落て惡し、常の畑も中程の少しくぼみたる畑よし、平かなるもよし、南東下る畑もよし、西下りは惡し、北下り至極惡し、下々なり、山畑に多し

一　土の善惡は輕重とあり、少にても能と惡敷をば輕重にてしるゝ也、土の淺深は杖を指てみるべし

右土の甲乙大概世々傳ふる所かくのごとし、畢竟上の田地と云は眞土にして、强くもなく柔にもなし、土重く地に汁氣有りて、上々は眞小石有ても、底に石なく木陰も無を上とす、詮ずる所重き和かなる土は上にして、大概は村近邊に上多く、村遠に中下多き物なり、又田畑の善惡は大方立毛にてみゆる物なりといへ共、瘦たる地も肥しを能掛れば立毛よし、上地なれども作人不鍛練、又は貧して肥しを不レ入地は、日比肥たる地も瘦るなり、立毛もよく地面もよく見へて、水掛り日當り物陰もなきは上の土地にて、是に背くを以甲乙を可レ知、然ども東國と西國と土地同じからず、西國にては土のねばり過たるは嫌ふなり、ねばり多して落付たる地には、下木とて柴を苅込肥しとす、或は沼田などの土ねばり過たるは、山土の細砂交りを入るゝか、皆是は土の落つかざる樣にこしらへ耕作

す、然るに關東多分土の性弱く、灰のやうに輕きにより、重くねばり過たる類をよしとす、上方筋は上の場は其近所大方上にして、中にも各其通りなるに、關東の田畑には一枚の內にも能所と惡敷所あり、是各別の相違なり、是等の違ひ目をとくと心得、其國々の地心を考ふべし、心を用ひて其事に馴ざれば知がたし、又古田の上の場所年を經て惡敷成事あり、下の場所も上となる事有、とくと考へ吟味して位を可ㇾ定事なり

村里　第二

四方の土地同からず、其俗も各異る、國に大國、上國、下國有、村里に山方、里方、野方、濱方、市井、往還筋等の差別有、治農の官たるもの其教を修めて其俗をかへず、千政を齊へて其宜を易へざるべし、されば倉廩實而禮節を知り、衣食足而榮辱を知とはいへども、富るも敎なき時は奢る、奢る時は終に困窮に至る、又困窮も救はざれば民情離る、離れては治がたし、古へより法言數限りもなしといへども、詮ずる所其村の名主、（上方の庄屋）年寄、組頭たる物能和して惣百姓を引廻し、公法を守りて非理をなさず、能其職業を勤めて何年にも公事爭論と言事をしらぬを、能治りたる村と言べし、令たり吏たるもの其所に臨みて、二三年も經んには其土地の樣子其人情にも通ずべけれ共、初てしらぬ國里に行く時は、思の外見違へ心得違もあるべし、是に依て愚かなる言傳へなれども、記して了簡の端を起さしめん爲なり、

一　東に流水有、南に田澤有、西に道路有、北に山林谿小川有、北高南低、赤眞土に眞小石ありて死石なく、土厚く重く汁氣有て用水澤山に惡水吐能、少し東へ傾きたる地形を上の村里とす

又曰、北に小山有とも、南廣くして南へ流たる谷廣ければ暖かなり、北南の風吹拂て障りなき故に上とす

又曰、東に山なき村里は日請朝夕能故に、作物に病なく出生す

又曰、居村西北に有て東南に山なく、居村の前に田畑を抱たるは、朝夕日請風請共によき故順の村とす

一　北高南低、南北長西短く西に流有、黑眞土にて土厚く、用水は大池水を取、川霧なき村を中とす

又曰、東南廣き場所にても、西北に山有は日請よしといへども、西北より風請なき所は作物に病生ず、假令滿作たりとも兩作ともに薬に力なし、五穀の味少し宜からず、中の村とす

一　東南高く又流有といへども、岡より水出或は天水掛り、林有といへども石山にて木生長(ソダチ)かね、黑ぼこ土にて底にへな土有て肥しを保ち、土淺大河有ても用水に用られず、川霧深き村を下とす

又曰、西北廣くとも東南に山有て日請なき場所は、物種心よく出生せず、實入もよからず、南ふさがりて暖氣すくなき故に、稻に病せうじ稻を植付て虫付事あり、苗五本植ても三本になりて子根滅ず、例年下作の村とす

一　東南西高北は低物陰多、死小石交の黑土灰のごとく土薄く、汁氣なく所々出水有て田畑冷ふけ田

多、或は天水掛りにて陸地なるは下々とす

右は世に言傳ふる所の大概なり、凡べて山方、里方、濱方等の差別有里方にて山林なく、又草野なく平地計りの村々も差別幾段も有べし、山にはなれたる所多分は眞土勝なる物なり、用水多惡水吐口自由にて、綿、紬、麻、木綿、紙、漆、蠟、油其外草樹、又は其所の名産、男女の稼、都邑の遠近、河海の運送船着、肥しを取所の道程、牛馬の草飼その村の品を分ち、其品の多少によりて村里の次第を定むべし

一 村居北に在て南を請、日向能村、前は田畑共に能出來るなり、惣て北高南低地は上作、南高北低地は常に下作、東高西低地は早稻滿作（稻に限らず凡べてわせ物よし）西高東低地は晩稻滿作（稻に限らず凡て晩稻物よし）尤早稻に宜敷土地にても水の掛引自由なれば、田麥など作る故に晩稻を作る、晩稻に宜敷土地にても水の出安き所には、其用心をして早稻を作る事もあり

又田村西に大河構へたるは、必水損有て旱損なし、村東に川有て地形常ならば旱損所と可レ知

一 村里土地の高下をみるは、川上と川下とにて知る（堰などせき上て高き所に水流るともあり、是又氣を可レ附）其土地の善惡は作物竹木の生立に心を付、何の所は土地に相應し、何の品は相應にせざると云事を可レ知（以後竹木等を仕立る心得にも可レ成）

一 惣て何國にても川邊にて川なく、海邊にて海の獵ならず、野方にて其村の野なく、秣不自由にて山方にてなき村は、積りの外惡敷事多き物なり

又曰、萬事能村も下水の吐かぬるは是一ッにて大きに惡し

一　富る村は家居よく、四壁荒さず

困窮の村は家居惡敷、垣ね崩れて四壁薄く、家居まばらにて明屋敷多し

富る村は夫食よし但國風により夫食の善と惡敷とあり、是又心を付べし

困窮村は夫食惡し

富る村は馬よく馬具も奇麗なり

困窮村は馬瘦て馬具惡し

富る村は田畑賣買高直なり但富る村にも地廣くして新田などするに、地澤山なる所は田畑賣買下直なるものなり

困窮村は田畑賣買安し

富る村は百姓の衣類、又は人の色つや並人相よし

困窮村は衣類惡敷、人の色つや惡し

富る村は子供のそだち樣にても知るなり、尤手習子ども多く、寺か浪人か、醫師の所にて習はするなり困窮村は子瘦かじけて着物惡敷、下人を持たず、子供に薪を拾はせなどするなり

富る村は醫師浪人ある物なり、又若き物共何角の稽古をもする物なりケ樣なる所遊藝過れば、後には困窮村に成るなり

困窮村は醫師浪人渡世する事稀なり、又村中惡敷所作計をして何にても稽古をせず、富る村は諸勸

進多し

困窮村は神參りなし

又曰、夫婦いさかひ多し

又曰、道橋別て惡敷故、田畑をふみ損さし、牛馬の足も危く、百姓痛事多ければ、先其分に過き行ものなり

富る村は百姓の庭に薪萱、或は麥藁大豆からの類を積置家多し

困窮村は稀なり

又曰、川除堤の草をむしりなどする物なり

又曰、耕作肥し少く手入惡敷、田方稻色惡敷根薄し

一　田多き國にて田多き村に畑を持百姓よし、畑多き所にては、田を多く持たる百姓能物なり

又曰、一村の内に富る百姓と、困窮成百姓むら〳〵に有は、田の石盛と畑の石盛と相違有か、又上の所は中下に成、中下の所は上に成たる事あれば、百姓むら〳〵に困窮する物なり。

一　村方困窮年を重ねては大體の事にては救ひも行屆かず、兼て何ゆへに困窮すると云事を吟味して、其手當の心得有べし

取箇不相應に高くて困窮する村有、取箇は相應なれども百姓の手間を費し、人夫を遣はれ困窮する

村有、

當分取箇を下げ諸役をも用捨すれ共、ひたと困窮する村は田畑を他所へ質入に致し置、又は年季に賣渡しなどして、年貢を辨へて次第に困窮する村有、年貢諸事緩やか成れ共百姓の困窮する事有、是は仕置ゆるやか過て百姓奢りての事なり、假令作り取にしても成らざる物なり、或は謠、鼓、笛、太鼓を稽古し、遊民を集め三味線を引、亂舞をして大酒を呑、或は博奕を好などして色々の惡事をする村は、作毛無精にて次第に困窮する物なり

村に惡敷者五三人博奕を好み大酒を呑、毎日おふちやく成者五三人有は、是に移りて惣樣共に惡敷成事あり

纔の山か野か村境等の事を意地を張、公事を取結び困窮する事有、村方の爲はせ惡敷名主組頭のしまりなく、いつとなく惣百姓我儘に成り、自分〳〵の我を立、平日公事をして困窮する事あり

縣令須知卷之一終

縣令須知卷之二

撿見　第三附取箇、取立

撿見とは其作物の出來形をみて、其年の上中下を定むるなり、往古は年貢の役に定れる限り有て、今の樣に其年々に取箇を上ゲ下ゲする事はなし、中古以來年久敷、戰國を經て後、民居もいまだ定まらず、土地もいまだひらけざる時に、毎年其出來形をみて、取箇を付しより請來りし事成べし

夫古昔は專ら唐の租庸調の法に習ひて、年貢諸役に定あり（地方の事を云もの、儒書の片端を聞はつりて井田の事をいへども、本朝昔より井田行はれし事あらず、專ら唐の代の法に習ひて、又少々の差略あり、其詳かなる事古き書に出たり、考へみるべし）中古鎌倉將軍家の始迄も、大筋は古法の通り成りしに、國司領家の外に國に守護、庄園に地頭と云事始り、或は兵粮米段別に五升づゝ（東鑑文治元年十一月の條下に有り、此翌年文治二年二月の條下に曰ニ仰テ五畿七道諸國之庄園免ニ除兵粮米ノ譴可レ令ニ安堵ニ土民ノ事と云々、是による時は兵粮米は程なく止たる樣なれども、守護地頭の入用外に出すべき樣なし、定て是よりして段々臨時の事も出來たらん、今の世口米などゝ云事も、此時代より引付請來る物ならんか）出させしよりして、古法も段々移り變りたり、或書曰、（經濟錄と云書にあり）當代田租を取るに十分の四を以通法とす、拾石の内より四石を出すを今の俗に四ツ物成と云、土の肥瘦と田の上中下とに依て、四ツより多きも有、少きも有、中を取て今の通法とすといへり、是は知行渡りなどに用ゆる事にて、年貢を定むる事にはあら

ず、但し世に傳ふる四公六民と云事なるや、[山崎氏朱子社倉法の序に、公は四にして民は六をとるとあれば、據も有べけれども、今の通法と言據を見ず]國により所に依て、高拾石に年貢は二三石に當らざるも有、又七八石拾石に及ぶもあれども、各其實は出來形石數の四分か五分か六分かに當るべし、一樣に高拾石の內より四石を取を以通法といはゞ、今の世に當りて殊の外不同出來ぬべし[鈴錄曰、五ツ物成四ツ物成三ツ五分物成など言事は、元來百石と云は籾百石なり、米にして五拾石あるもあり、四拾石有もあり、三十五石あるもありて、五斗俵四斗俵三斗俵三斗五升俵など云事出來せりといへり、是は籾を米にすり、勘定を以物成免合に引合たる物なれども、免の事はあながち籾合にはよるべからず、國々俵入の違の事も籾摺の事より起るとは如何あらん、大方籾を摺に一升にて三合摺もあり四合摺もあり、五合六合七合迄も摺あり、さるにより、中分を取て五合摺と云は通法なり、俵入は籾の合を以起るならば、六斗入もあるべけれども、六斗入と云はなし、然れば俵入の事は其國々牛馬の強弱、當時人夫持運びの勝手などにて、貮俵付又は三俵付ともしたるなるか、又其地頭の了簡にて申付たるか、引付に成たるもあらん]

上方は厘取關東は反取なり、往古は田畑町反の數のみにて高と云事なし、其後貫と云事起り、又關東にて永高と成、今の石高は文祿慶長の比より始まりたる法にして、上方は此高に幾ツと取箇を付て是を厘取と云、關東は高によらず新檢の町反に取箇を付て、是を反取と云、其實は何れも其出來形の石數を考へ計りて、取箇を極めし物なり

（欄外參考）　穩明

石高の事、文明の頃の感狀、或は武德編年集拆にも見ゆれば、一ぺんに昔なき共難レ申か、可レ考

或書曰、[鈴錄]中古より兵農分れ、地頭四分百姓六分に租稅を取、然共其地頭四分の內一分は朝家の租稅にして、此內にて國司の祿其外の國用を足すと云へり、是は鎌倉將軍家の比より戰國迄の事なり、或書[地方鑑]

曰、總て役をかくるに昔は物の分け定らず、年貢にも免狀と云事もなく、年貢も取られ次第取、百姓も住宅定まらず、萬事不とゝのへ成故、棟役をかけて家々役を取る、夫を百姓迷惑して家を長屋の様に作り棟數をせず、去るに依て門役をかけて取、門役をいやがりて口を塞ぎ口を少くするにより、内にて竈をかぞへてかき役を取、是は物毎とゝのはざる時の事なりといへり、是は戰國と成て貫高も永高も取失ひたる時の事なり、然るに將軍家譜〈豐臣の家譜〉文祿四年の法令曰、天下賦稅三分二ッ者地頭取レ之、三分一耕民可ニ自取一之、愼莫レ使ニ下田畝就中荒蕪上也、是による時は四公六民と云說も止みたり、其後又出しにや、當世令たり吏たるものは、專ら公私五分〳〵を以通法と心得取行ふなり、蓋し甚寛なれば奢り甚急なれば困む、其能程を計りて村々に不同なく、取ヶの相應する樣第一の考へなり、只妄りに取ヶを少く取る事を仁政といはど、赤子を愛して甘き物を多く與へて、終に疾を生ずると異ならず、或書〈地方鑑〉曰、檢見と取付とは心得各別なるに、檢見にて取付すると思ふにより一ッも考へ合ず、元來檢見は大きに入事なれども、取付をするには檢見にはなれてせざれば惡しと云へり、其所をも能知其事に馴たるは、年の豐凶損亡の多少をも計りて、取ヶも相應に村々不同なるべけれども、其事も馴たる輩の其損亡の多少、其土地村柄の考へなくして、妄りに坪刈目ためしなどを引合、一樣に推し平均するにては、村々に不同も出來ぬべし、取分心を盡し兼て習ひ置べき事なり、是によりて世々云ふれし覺書共の内より、檢見と取箇のわかち心得の端とも可レ成を集めて、初心の爲に記す物なり

一　檢見の時節は其國〱によるべけれ共、大概秋彼岸に入る十二三日目より、三十日を限るべき、其山方は少し早く、水所は少し遲き所あり

一　先其年の世上の耕作善惡を知たるがよし、其年の豐凶を考るには、前年の冬雪のふりたるにて、當年の田の仕付水を積るに、雪を壹升計りて置見るに雪解て水に成、三合有年もあり、四合有年もあり、五合六合七合迄有年もあり、是は其年の寒じ樣の加減にて水の多少に應ず、强く寒じたる年は水多し、去により春山々より雪解て水に成出るに、寒じ强き明年は水多し、然る間冬雪降りたる明年は、永雨ふらざれば田仕付の水少きなり、惣て田畑にくせ付蟲付てくちの入事は、皆前年の冬あたゝか成故也、田にくせ付は夏永しけか、又土用中冷し過る年必稻草になまり付て、稻のずいに蟲のわく事あり、又根にくちの入事あり、國所に寄りてあふかましなどゝ云と、白く稻の穗を蜘の巣まき付たる樣にする事有、ヶ樣の事をも氣を付て其年の豐凶をも考べし、然ば世上何ほど上作の年にも違ふ村有、又世上耕作惡敷年も作毛の能村も有、又年により稻草にあたるとあたらざるとあり、是又考ふべし

一　惣て田畑共に夏の土用中の天氣にて、其年の耕作の善惡は極るとみへたり、土用中雨繁ければ水過てひへ立て惡し、殊に以寒ければ萬の作毛ひへ、其年は大方耕作違也、早稻物は萬の作毛共に別して惡し、晩稻も土用中寒ければ稻かじけもたへず、稻に成實相惡し、假令稻の元厚く、葉の長能く、穗の大成も實相惡し、取實少き物なり、上穗より下穗にしゐな多く、稻に色々の瓣付き惡敷事多し、又土用

中打續き南風吹ば、稻にいもち入ると云て、葉赤み蟲付なり

一　春の祭の賑ひをみて去年の作を考へ、秋の賑をみて其年の作を考ふべし

一　照年は田方よし、雨過たるは惡し（但旱魃は各別なり）

一　雨年は畑方よし、照過たるは惡し（但永雨は各別なり）

又曰、雨年は稻の元必厚稻のたけよけれども、見分よりは實相惡敷取實なし、雨年には一穗朽、又はしいな多く黑粒交り、又根に朽など入、色々惡敷事有物なり、心付てみるべし

一　諸作物初中終を可ㇾ知、但盛の時分はよくみへ、初と終は惡敷みゆるものなり

又曰、實を取作物は手に取みるべし、手に取てみると見分とは違ふものなり

又曰、諸作ともに早穗中穗晩穗あり、何れも早稻は晩稻より取實少き物なり、然れども上品なり

又曰、諸作共に出來過たるは實入薄し、小出來にても揃ひたるは取實あり、薄くまばらにみゆるは惡しと可ㇾ知

又曰、眞土場は田畑ともに作毛本は薄き樣なれども、うらへ行き穗大きくしいなも本にあり、肥しをする程能なり、尤大概の世並なれば、思の外見分よりは實相能物なり

又曰、土惡敷場は田畑共に作毛の本計りふとく成り、うらへせいゆかずしてうらおくれになり、しいなもうらに有、肥しも聞きかぬる物なり、尤作毛よしといへども、眞土の所の少しかいなき作毛よ

り、實相惡敷取實少し

一　植田蒔田摘田（上方筋は多分植田計りなり）の差別有、植田の掛り水を上とす、米も風味もよし、蒔田摘田を下とす、米風味共に惡し、蒔田摘田は草生能みへても取實なく、植田は草生少惡敷みへても取實あり、又植田には麻麥等を作り共跡へ稻を作田は、春田の籾六合摺の時は、麻田麥田の米は五合摺有ものなり、水田には苗にて植ずして粒にて植る土地にはよるべし、併數年作り來りといへども、次第に土目能なりたる國有、又昔より惡敷なりたる土地も有べし、よく考へしるべし

一　稻は柳に生ず、又梅田枇杷麥共云ふ、此類榮ゆる年は稻宜しきとなり

一　上作の年は百姓藁をかくす物なり、下作の年は稻に限らず、粟、稗、大豆何れにても作物らをみせたがる物なり

一　何程水澤山成る所にても、夏雨かゝらざれば惡し、夏中夕立雨ふるがよし、殊に稻の花落て籾の口をわる時分、雨掛るれば一入吉、夫も稻の口を割たる時分永雨などは、又籾に黑粒出來る事あり

一　同じ土性同じ水掛りにて、畦並にて能出來たる稻と、惡敷出來たる稻と有、是は身上能百姓と、身上ならぬ百姓とに大に違有、耕作の仕樣肥を入ると入ざるとにても違有、又稻草にも當るに違ふ有、又おうどう成百姓にて、作物不精にて不作するもあり

一　立毛小出來にても實入能、穗の揃ひたるは見分よりも取實有なり、伏たるにも二樣あり、能出來

實入ともに能、青海波の様に伏たるは大上毛なり、又早稲は葉弱き物にて出來過れば實入悪敷、しいなあれどもめん鳥羽のごとく伏ものなり、又實入能田の稲を打込たるは、葉計外にみゆる物なり

一　檢見に朝の間は露を含葉のつやよく、穂首かたむき實入能みゆるものなり、雨降又雨の後と晝前猶以能みゆるなり、晝過より風吹と日を向ふに受てみるとは悪敷みゆる、馬上にては稲の本薄くみゆる物なり、此故に晴天、風雨、朝暮、高み、低みの了簡有べし

又曰、檢見をするにもたへたる稲、寸稲、上穂、下穂を能見分け士きわにて見分、又穂先にて見分成程細かにみるべし

又曰、田壹枚ごとに上々、上中下、下々の位を以見計ふべし、土の厚薄、淺深水掛りの善悪、早穂、中稲、晩稲等の多少を踏見分すべきなり、稲草の品に寄りて立毛見違ふ事あり、大穂芽の有稲草は立毛よくみへ芽の無は悪敷みゆるものなり、又稲草により穀の多きと少きと有べし、惣て毛のなき稲は升目多きなり、然れども出抜け腰折れ等は、彌六程には升目なき物なり、ヶ様の事も氣を可レ付なり

稲草の名も所によりて替り、又二十年共前と今は違へとも、或覺書の内より記す、伊勢稲早稲なり稲色黄なり、石あり毛もあり白海老中稲なり毛なし、なり石少し彌六早稲なり石少し腰折出穂に似たり見苦敷稲にて、弱きいねなり石少し腰毛色白見苦敷稲なり、石少し米作よし畦越穂出抜に似たり、少し毛稲なり彌六より石少し品能中稲なり毛稲毛穂に稲なり石中分なり田白子早稲なり毛稲にても毛先少し、見事成なり石少し花落永樂毛彌六に同し毛は少し有、に相應なり、彌六より石少し霜下出抜穂この折たる様にみは

る稲なり、見苦敷稲なり石少し　江近（彌六に似て少大きなり毛なし色）　チコ（彌六よりふさ〳〵と見ゆるなり、毛なし、水入所に相應なり石あり）　京上﨟（晩稲なり薄葉色にして又赤き色多し見事成稲也、石中分なり）　ふんばり（江州に多し石少し）　小おんみつ（晶葉に似たり石中分なり）　イツホ稲（毛あり少赤稲なり、强々としたる稲なり石あり）　伊勢海老（毛稲なり彌六より少し赤く短毛なり、石中分なり）　水くゝり（チコと同じ彌六に似たり石あり）　白葉（晩稲なり毛白共有、晶葉の如く毛いねなり）　千本（チコに似たり毛なし石あり）　細餅（御前とも言米、性よく、アセコシより能なり石多し）　勾當餅（石有）　鶉餅（小黒き稲なり石あり）　コボレ餅（毛稲也短毛なるはセンコセンとも打もち共云、彌六より石少し）　烏餅（色黒し石中分也）　赤餅（毛稲也赤黒みあり石中分なり）　菊餅（石彌六程有）　白餅（石畔越に同じ）　かさ餅（毛なし米性よし石あり）

右の外品々ありて今は又多分名も替れり、只其大概を擧てヶ様の事をも氣を付て然るべしとの事なり、種子も時のはやり物ありて、いつとなく前方能も悪敷なり、又其年の當りたる物と不出來する物と有て、一定の事はなき物なり

一　檢見立には其田のあがらざる所を少し宛殘し置、尤悪敷所を殘すに依て聢と知ざる事有、檢見立ては百姓手くろする物なり

又曰、檢見立稲の恰合より上穗少々みたて、稲のはかまがちにみへ、下穗抜け上りたるには、手くろ有、能心を付べし

一　坪刈は其年の作毛の能所を、かねて坪刈して引合すると可二心得一、坪刈なくしては百姓の損德あり、殊の外迷惑する物有事なり

又曰、坪刈の時上中下に可二心付一、上は殘毛少けれども年貢多し、中下は年貢少し、同毛はいなれば、

上中下に心持有

又曰、坪刈の事百姓必是をいやがり大方ならばするも悪しといへり

又曰、坪刈するに一ツおさの内、悪敷所を刈てためすべしと云説もあり

又曰、坪刈一ツおさの内能出来たる所と、悪敷出来たる所と、中位の處と、三段に刈たるもよし、

右品々の説の内先は此説然るべし

又曰、坪刈して種夫食を引入、目を引ても大方の悪田は、小々高免の處も籾餘る物なり、然共百姓は其田をこなし米にする内は、其田の米を夫食にして作る物なり、ケ様の事をも考べし、無理に坪刈して米有様にしても益なし、とかく百姓困窮せざる様にすべし、百姓困窮しては地頭損多し

又曰、青穂の籾粒数をかぞへて、百粒あれば壹升の中墨に合なり、大中小三穂平均にして百粒を籾壹升と見ば、坪刈に及ずともいへり

中粒の籾壹升の數三萬六千粒　此一升米にして五合六勺貳才五分

中粒の籾壹升の數六萬四千粒　此一升籾にして七合八勺に當る

右は先年かぞへて記し置たれども、假令同所同時に同じ籾米を量りかぞへても、量る度毎に相違有べし、されども大概ははづれざれば心得に記すなり

又曰、檢見の時節名主百姓心入悪敷所にては、箕の底に穴を明け、下を澁紙にて袋のごとくに致し置、

坪刈の稲をこなす時、彼穴へ籾をゆりこみ減ず事多し、或はもみたるからに米を交ぜて捨る事もあり、又箕にてひる時にしいなの中へ籾をひ込もあり、ヶ様の儀氣を付べし、勿論大勢かけこなす事悪し、一兩人にてこなさせ然るべし、又水場所などは檢見の節田に水を仕かけ、吐口をふさぎ置水を湛へ、稲は水底に成たりと水損を申立、檢見濟ば早速水を落して、能稲を刈取様成事心を付べし

一　籾小筋あり其溝淺きは上作なり、深きは下作なり、壹穂手に入しごき手當りざらつきたるは上なり、しなへたるは下なり、何ほど能出來にてもふけ田惡水多く、水吐惡敷田は實なせ多して升目少し、假令ば籾壹升を見込たるに、六七合夫も納米に成は又此半分たるべし

又曰、稲出來形あり地面能眞土の上田所は、稲の能定りて葉に節三ッ、根に二ッ惣様に五節有、穂に枝も八ッ有うらにて兩方へわかり、枝九ッ有様なり、上々滿作の時には籾數三百六十出來ると云傳へり、然共其所にも殊の外の違有事なり、地面惡敷下田の所にては葉に二節有、枝も七ッ程なくてはうたず、惣じて稲株の内に上穂下穂と云事有、地面能眞土の上田は籾數上穂に百五六十、下穂に五十六十計りは大概の年に有、上作とみゆる年は上穂に百七八九十、下穂も是に隨ひて多し、貳百二三十より上貳百五六十とも有は上々の滿作なり、下穂も是に隨ひて籾有、上滿作の年は三百六十迄籾有と云傳へたれ共、左様に籾有物にてなし、地面惡敷下田の所は大概の年は、上穂に籾百十四五より百二三十なくてはなし、下穂は是に隨ひて籾三四十の内外有、上々の作と云ども上穂に籾百六七十ならでは

なし、其上百八九十貳百とも上穂に籾有は上々の滿作なり、田畑共に眞土と惡敷土は大きに違有事なり、惡敷作と云は幾々如何程も有みな損と云迄有によりてかくれず、土性の惡敷處にて籾の數多ければ必粃多し

又曰、田壹坪に稻株六十七十、又は八九十株なり、土により稻草に隨ひて厚薄有べし、六寸四ッ目七寸四ッ目八寸四ッ目なり、又廣くして大株狹して小株、是は其田主數年作り覺へたる仕癖有、土肥て肥しを不入して作る田は、小株にして大畔たるべし、地瘦て肥しを多く入作る田は、小畔にして大株たるべし、先瘦たるは大株肥たるは小株と心得べし

又曰、刈田を見るに稻のこぼれ多きは上作なり、少きは下作なり、藁筋太く莇株平に奇麗に草をも取たるは上也、ふろくにしてうねたちくちわら多きは下作なり、踏てみるに莇株こわきは上作、和らかなるは下作なり、又黑きは下作又稻の干たるをみるに、色と長短にて上下を知るべし、尤隣田の稻の出來様に心を付べし、又刈立置たる稻を鳥など喰、風雨しげき頃は殊の外惡敷みへる事有心得べし

旱損

一　旱損所は低き所程よし、水入或は沼田など海邊等は高き程よし、然共理外の理も有べし

又曰、照年は稻の元に捨穂少く其實取よし、取實多し、乍去大旱は各別なり、旱につよく逢たるは穂すかずして筒に留る、天水場には旱年は稻柴の様に成る處あり、是は見分安し

又曰、眞土の所旱に强く痛む、田畑共に照付るほど作毛の根をしむる故、旱に强く痛むなり
又曰、土惡敷所の畑の作毛、思ひの外旱にこらゆる物なり

水損

一　水入の檢見は稻水をかふるに、少しにても穗先水より出て有は苦しからず、然共草稻の時うみ掛りたるは筒に水入ては惡敷事有べし
又曰、稻は性の强き物なれば少しの内水掛りたる分にては、又おきかへる事有、二日共水かぶりたる稻はたまらず、水の引時たをされて何樣にも立ぬやうに成物なり、假令又水入の稻たをれず立ているとも、二三日とも水かぶりたる稻は、實の入物にてなし、能心を付べし
又曰、水入の時早稻は、其時節によりて苦しからざる子細あり
又曰、少しの水押は當分は能みへて後惡敷物なり

風損

一　風損の檢見は見分に仕樣あり、雨ふらずして南のから風は一入作毛に當る、大風にても雨交れば作毛にあたらざる事有、風吹て雨降らず稻白く成は惡し
又曰、風に當りたるは當分惡敷みへて、後はさまでみへざる事なり
又曰、大風一入刈しほの稻にあたり、稻穗を吹折て籾を吹こぼす、是に又坪を以見分の仕樣あり

又曰、花盛の稲にに大分當る花を吹ちらす故、かいしき實入ざる事有、雨交らざれば花盛の粒には
大風猶當るなり

又曰、わか苗の時分大風あたるといふとも、積て日並能は苦しからず、兎角にから風は悪し、雨掛
れば少々風當りしほれたるも起るなり

右の通りなるにより風の吹伺により、早稲の違事も有中稲の違事も有、又晩稲の違事も有

又曰、稲風に當り、或は蟲さすか葉の色にて知れがたきは、所々にて稲穂を取指にてこき、粒籾に
して水へ入てみるべし、實入たるは沈み實なきはうくべし、但風枯などは一夜の間なれば、雨露の
中はみへがたし

取箇

一 検見と取付とは心持各別なり、ヶ様の分けを大方はしらず、検見にて取付すると思ふにより大い
に違なり、尤検見せざれば年の出來方はしれず、大きに入事なれども取付をするには、検見をはなれ
てせざれば悪し

一 取付に少し宛様子替り有、高に幾ッと割付ると、反別に取米を割付ると、田畑共に米にて取と、
田は米畑は金にて取と、又畑方は何にても作る物を年貢に取所も有

一 取箇の事所により少しづゝ品替ると云ども、本は同事也、其村の田畑土目相應、其村の村立相應、

其年の田畑作毛相應、この外にも萬考へて過不及無き樣にすべし

一　厘取は高にて取箇を付、反取は反別にて取ヶを付れども、畢竟厘取の取ヶを反別より組上げざる物なれば、先一村の田畑の惣反別、何程の石盛に當ると云事を知べし、古來より傳ふる處村高田畑高の平均、拾町百石より內は石盛高し、假令何ぼと能土目にても六町七町にて、百石は別して石盛高し、是によりて高に合せて年貢取ヶは付がたじ、繩詰りの村は惣て秣取場不自由にて、地狹なる物なり、土地惡敷ても平均拾二三町百石の取、拾六七町貳拾町百石などゝ云村は、年貢も毛高く取らるゝ物也といへり、すべて取ヶの考へには田畑米取の村ならば、其の村の田高百石に取米何程に當る、畑高百石には取米何程に當る、田反別上中下平均して壹反に取米何程に當る、畑反別上中下平均して取米何程に當るとみるべし、田は米取、畑は永取も、右の通田高畑高、田反別畑反別に取米を割て突合、地廣地狹浮所務等を考べし

又曰、野方にては谷間に四方多き事有、又畑も多し、秣は本より澤山にて肥し有により、萬事ゆるやかにて取付高免にもなるべし

又曰、水掛りよく土口能山か川かの稼有りて、繩目ゆるやかにして地面廣、秣に事をかゝす、薪不自由になく、下水の吐口自由成村は、年貢も高くとらるゝものなり

又曰、繁昌の地に近き地味能所は、年により何作を取り代物多取所あり、ヶ樣の所は取ヶを强して

も困窮せず

又曰、滿作の田は壹にても肥し代入田は取崩すものなり

一　惣て何國にても少しづゝは錢を取る事あり、絹、紬、麻、木綿、布の類、海川の魚、山稼、或は茶、多葉粉、紙、漆、藥草、菜種、紅花、青苧紫などを賣出す所か或は萬の菓、竹子、竹皮にて錢を取るか、大豆、小豆、午房、瓜、茄子、大角豆此外醬漬か、町場なれば駄賃其外少しづゝの錢を取る事あり、本より菜薪は申に及ばず、木の子の類何ぞは少し錢を取、少の助成になる事有ものなり、若又右の通の事なくして作計にて渡世する村は、取付も用捨なくしてならざるなり

又曰、土目能水掛り能地面能村にても、縄詰り薪不自由にて秣取場なくして、田畑の畦をせゝりなどする所は、何程能村のやうにみへても、年貢は見分よりも不足成物なり

又曰、上作の年と不作の年は、籾摺に不同有て有米積も違也、上作の實入よく籾は米多く有物也、下作の實相悪敷籾は米少し、米の拵様にもよるといへども中分を取て云なり、一反に籾三石二三斗有位の出來なれば、米は五合ずりも五合五勺摺も、少籾の拵様能と見れば六合するもあり、夫も滿作の籾は猶以米多し、出來悪敷田の籾は、壹反に壹石二三斗有位の粒は五合摺はせず、夫より悪敷みゆる田の籾は、米三合二合五勺摺ものなり、籾の拵様によるといへども大概如此

一　田は米畑は金にて出す所は先高に取箇を付、畑方は貳石五斗がへにして金にて取、是にも又田は

米にて取付をして、畑には直に永を割付る替り有、右畑方を二石五斗替にして金にて取には、能考へざれば地頭に損有、但用捨なれば用捨して取べき所は取がよし、しれぬ所に損をする無勘なりといへり

又曰、田畑米取の所田多き國は各別、大體は田畑共に米にて出せば百姓損多し、畑は米代下りて米少く出すといへども、田畑共に米にて出すは百姓損なり

又曰、村方の内道通り惣てみゆる道は、地面惡敷樣にて脇に各別能所ありて、其場所をばみせざる所もあり、又道通り惣てみゆる通は、地面能樣にて脇も各別惡敷所有をば考へなくして、ひたと高免なるもあり

一　百姓困窮無樣に心持有べき事なり、去ながら取付下ゲ過れば、却て困窮の元になる事あり、能々考ふべし

又曰、當年の取付高免なれば、明年しるゝものなり、亦下免なるも明年あらはるゝものなり

取立

一　年貢の取付極る時は、納方無油斷催促も用捨はいらず、嚴敷取立る事肝要なり

又曰、取立に遣す物に堅く申付て、成程嚴敷して無油斷取立さすべし、油斷有ては皆濟おくるゝなり

又曰、催促させるに早稲、中稲、晩稲三段を考へ、早稲方より日積りをして納めさせたるがよし、大方の所にては早稲方にては多く納りぬ物なり、中稲、晩稲にて年貢は納物也、然共早稲計作る村も有物なり、ヶ様なる村は各別の事なり

又曰、村々へ割付を出し其村の高に應じ、拾俵も二拾俵も五拾七拾俵も割出し、日限を定め納めさせたるがよし

又曰、其村々に随ひて五日に米餘程出來るもの也、それも雨降ば初掩により出來かぬる、日和よければ其村高に應じて割付をして、五日〳〵にはからせたるがよし、（是は取立をする小役人の心得なり）

又曰、其村によりて早稲少く作る村へは、早稲方は少く割付中稲は多く割付、晩稲にて皆濟をするに引しろはぬ様に割付たるがよし

又曰、とかく催促は嚴敷して取立たるがよし、百姓も後は嚴敷がよしと云合點ゆくものあり、何としても催促ゆるやかなれば、米を脇へちらし過す物なり、嚴敷と思へば前廉より能納るゆへ、後して百姓の爲にもよし

一　未進は大きに悪し、　令潰るゝ共未進はさせざる様にしてよしと云傳へり、未進をさすればひたと未進出來る物なり、取ヶを何ほど下げても未進たへざるものなり

右の通取立は随分嚴敷してよしといへども、其内にも困窮の村は或は借用して年貢を計り、或は身

を貢て年貢を納る樣なる村を妄りに嚴敷すれば、潰れまじき百姓も潰るゝ物なり、ヶ樣の所に至りては役人の働きにて、何卒一人も續く樣にすべし、尤外の側にならぬ助救ひをして、扨其村に有る海川山何にても、運上になる事、運上にして米の上乘に限らず、惣て少も助けに成事は其所の物にさせたるがよし、運上など外村よりせるものありては、少の德有分にては他所の者にさせるはあしく、右の外何にても此心得を以て、其村の助けに成事を世話すれば救ひは救ひ、取立は取立にわけ立て、自然と村方も治り百姓も相續すべし

縣令須知卷之二終

縣令須知卷之三

水利　第四

田を耕すに川を堰上げて用水とし、沼水を引て用水とし、溜池を以て用水とし、泉水を以て用水とし、

上郷の捨り水を堰て用水とする有、（是を惡水と云）　其地理を考へて旱損所は水を求る手だてを盡し、水損所は土手堤の圍水吐堀筋を愼むべし、就中河水の田畑におけるほどよき時は用水と成過れば惡水と成、甚敷は堤を切、田畑を損じ、作毛を失ふ、別して川通近年損毛の多き事、出水の毎度に山より土砂を押流し、川床漸く高く成るを以俄水出て、纔の水も溢れて堤を切、川欠等多なれり、是によりて國々の湊口古來大船入津せし所も淺くなりて、船の往來古へのごとくならざるも一ッの驗しなりといへり、然る時は今又其源を正し、土砂の出ざる樣にとの仕形、集義外書にも論ぜしなれども、今の時節山方の民も多くなれば、山林の制も成がたく、川を治る三策とて、上策は川を浚ふ、次中策は川に枝川を付て水の勢ひをわかつ、下策は堤を修覆し、蛇籠出し枠等を以て防ぐなり、然れども當時川筋を深くする事は勿論、その常水を量りて其常水より多き水を、二筋にも三筋にもして流すやうに、枝川を付置事も時に合がたし、（美濃國竹ヶ鼻の北足近川にあり）然る上は下策たりとも堤を修覆し、蛇籠出し、枠等の其所に相應の品を以防ぐより外なし、川筋に品々あり、石川、砂川、泥川、早き川、緩き川、上早く下緩き、川上緩く下早き川有、又同じ川筋にても、所により不同あり、又其國々其川々の仕癖あり、又此川には何の品宜といへども、其諸色の其國になき品あり、又古來の仕方もいつとなく變りて、昔と今と違へるもあり、各其節に當らざれば妄りに入用を以、何ほど丈夫にするといへども、出水にあふて其益なかるべし、凡川除多分は出水に破られて後、防ぎを強くして專ら其所に泥むなれば、全體破れの跡を追ふ物なり、然るに出水

の勢ひの變ずる事中水には爰へ留れども、滿水には彼こに當る、前には此所へ當りし勢も、爰の閙ひも當りて、又他へ當る事咸ゆへ、一定したる事はなきに、妄りに其跡を追ふて其他をはからず、いかにして後日の變をあらかじめ防がんや、或書曰、（地方算法記後編にあり）川除は水上と流下とを見定め、去る洪水にて川形り如此成りたれども、又古川に成り戻らんか、新川の儘に川床居らんかと看得して、水に障らずあしろふて流す工夫の外傳も、亦才覺なき物といへり、川上川下の樣子を見定め、始終を考へみる事は尤なれども、水に障らずあしろふて流すといふは劣れる說にはあらず、其上傳も才覺も大さに入る事にて、馴たると馴ざるとは懸隔の違なり、それ川除は猶守攻のごとし、たとへば破らんとする物を破られぬやうに守る事なり、土手堤を全うするは、かねて破られぬ樣にとの備なり、枠等は水に勝べき機械なり、勝ざればこたへず、こたへざれば勝ず、（兵書に戰ふを以守りとし攻るを以守りとする事あり、川除もまたしかり、堤を破らぬやうにと出し枠をするは專ら其所を守るなり、所により一向其所に構わず、川上にてはね出し瀨違ひなどして自然ど其堤を破られぬやうにする事も多し）是に依て其場に臨むの大意、川下つかへて溢るゝならば其所を浚すべし、堤の場所水勢より狹くして保たずんば、其場を開いて築べし、川原廣過て却て堤を破らば、高き所を掘取て堤を相應に進むべし、堤低して溢るゝは高くすべし、かしこに水當りて此方を害するならば出し枠等を以其當る所を除くべし、水勢と地形との釣合を考へはかりて、水勢は地形に勝ず、地形をして常に水勢より餘りあらしむる時は、水をして此方の思ふ所へ自然と趣かしむべし、是則川を治るの大旨にして、知たる事誰も口に任せては、尤もらしく論ずれども、いく度も、その事を勤めて

心を盡し能したる事も多く、又仕損じたる事も時にありて、其事理と事情とに能達せしものなくては皆席上の噂のみにして功少し、然るに一概に水に障らずあしろふて流すと計心得、或は又禹王の水を治る水の性に隨ふの古言などを心得違へて、とかく水には勝れぬ物と、五十年七十年たま〳〵ある變水を定規にして、平日人力にて防がるゝ事をも廢するに至るは、全體水の爲に遣はれて、前にいはゆる破れの跡を追ふものに成る故、出水毎に兼てはかりしとは了簡相違して、思ひがけなき處を破らるるなり、畢竟その理を論ずるに水勢と地形の二ッに過ず、水勢を知りて地形による時は、川を治るに少しき保ひ無にしもあらず、平日其事に勤め馴て諸川の事を多く見及びて、心を盡したるものは甚難き事にあらざるべけれども、其事に習はざる輩の爲に、其至れる事は差し於て用水惡水普請の仕形、世に云傳ふる有増を集む、敢て功者の爲にするにあらず

用水

一　田用水は大河の水湖水などはよし、山川の水或は涌水などは冷て宜しからず、涌水の近所などは冷て渕して惡し、赤鐵氣ある水惡し、惣て水の溫なるを上とす、亦水道の上みに紙漉など有か、或は村中を通る水末田方へ掛る處、少し肥しの氣味ありてよし、川下を堰留て掛取るを上とし、沼水を中とし、池溜を天水と云ふ下なり、米の味も水によりて段々善惡有り

一　汚泉は稻に宜とて村里の垢水の流入る事よく、然れども入過ては稻の性惡敷虫付物也

一　百姓の屋敷廻りの堀、幷に冬田に水を入置べし、冬水有所亦は冬雪久敷あれば、夏水持よく麥よく諸作よし、且堀水は火事の節もよし

一　淸水なき村々には井溝を幾ッも掘置べし、寒中に水を溜樋のもらぬ樣にして、鯰と鯉を放し置ば、水盡ぬ物なりといへり、場所の見立肝要なり、平地にてもかたさがりの所よし

一　水無所にては百姓に能云ふくめ、田がしらに井戶を掘、又は溜井を掘、すつぽううち、つるべ水すくひ、龍骨車にても拵、水ある樣にする事油斷さすべからず、可ニ心得一事なり

一　山田の用水冷て年々不作する所は、其地形により其水を落して、別に遠くより筧などにて水を取り、日に當り水の暖りに成樣に、工みて取べし

一　溜池を築事山間か、又は淸水少づゝも流出る所を見立て築べし、山間は堤を築上る程、水口開水多く湛ゆるなり、淸水ありといへども堤池の場所は、岡にて脇は切岸の所は惡し、成就せぬ物なり、亦山間淸水の有所は無類の場所なりといへども、洪水の度々山より缺流れ込で、やがて池うまる物なり、山のそばに溝を掘、流れ込缺を外へ流す樣にすべし

又曰、溜池の仕樣山間にても、地下りの平地にても土手を築くに、下地の上へ土を築ては、水通して保たぬ物なり、地形をも三尺も五尺も掘りて、新規に外の土を以埋取其上へ築べし、尤樋小口も同前なり

又曰、溜池に野水惣て悪水落しを掘べし、地の上下を見積りて、高さは水門の水口にて量るべし、兎角悪水の自由に吐様にすべし、水いかりて土手は勿論水門も破損するなり、悪水落口にも水門したるよしともいへり、又堀口に水門伏ては弱きなりといへり

又曰、溜池は早口（あらいとも云其堤の土手の分量を定置て、水其分量より多く成ると洪水の節は勿論平日ともに餘水を流しやる所を云）付様に品々あり、此付様あしければ洪水に切るゝなり能々土地を考へて築べし

又曰、往古河内國狭山が池の塘に、竹をうゆると云事あり、竹を土手塘にうへては其根能土をからみて強く成物なり、且うき土にはよくさかゆる物なれば、池河の土手を築ば、必竹をうゆべしといへり

一　川を築切て其水を用水に取是を堰と云、堰に草堰洗堰有、川に泥川、石川、砂川、大川、小川の差別有り、草堰と云は小川又は水の緩き川を、石をかき上げ堰敷杭などを打、輕き柵などにて堰を云なり、洗堰は泥川にても石川にても堰て、用水の餘りは常に其堰の上より流るゝ様にするを云、其仕様大きなるは川下より材木を敷並べ、段々積上げ木の枝芝などにて仕立るなり、石川には枠をも用なり、堰も其川により品々あり、一文字に堰と箕の手に堰と袋堰と云有、大河はとかく一文字堰にすべし（図：用水口　川上　堰）如此堰を云、箕の手堰と云は（図：川上　堰）如此堰を云、小川には箕手堰よし、大河には悪し、大河を箕の手堰にすれば、出水の時用水の掘口に土砂埋り、又堀口も保くさる物なり、亦小川を一文字堰にしては水入少きなり、袋堰と云は（図：川　堰）如此川下へたるませて堰を云、砂川に用

ゆゑなり、砂川は袋堰にせきれば、砂を堀口へ押込で水口埋るなり、たるませて堰時は砂たるみへ流れて、用水堀口へ砂入ざるなり

一　石川の洗堰に六七八尺の杭木を、一尺間程宛亂に打、石を詰堅めて洗堰したるは、何れよりもよく保もつなり、是を杭木洗と云へども、其の所によりて勾配の早き石川など、出水に堰の強さ程水溢れて外の害をなす場所は成がたし、是によりて同じ川筋にても川下にては用ゆれども、川上にては成難き事あり、玉川などにも此杭木洗にて二萬石餘の用水堰有、入用も少くして保能物なり

一　石川より堰入るゝ用水などは、年々出水に瀬替るゆへに用水掛りかぬる事有、此ゆへに川口を付る時に、其堀の向ふに日當あり、或書曰、「溝所以導水、不用水勢、則其流易壅、故爲溝者因水勢之曲直、則其流斯無壅矣」といへり、惣て水は眞直には流ぬ物なり、川上にて向ふへ當りぬれば、亦川下にて此方へ當り、又夫より川下にて向ふへ當り、とかく兩方へ當りて流るゝ物なれば、其當り所を見計ひ、いか樣の出水にも水先の向ふ所を見立て、堰口をする事なり、尤水先は入口より少し上へ當る樣にするなり、直に引請ては惡し

一　川に添ふて掘るをかけ堀と云、大河を堰入るには入口かけ堀し、入口より深堀にしては惡し

一　新規に用水のかけ堀落し堀など普請せば、雨の時分水吐川水の樣子を考へて普請すべし、尤所にはよれども先は掛け堀は淺く廣く、落し堀は少狹く深くする事なり、且又用水の堰溝水道をなすに水

盛肝要なり、水の勾配ぬるければ思の外水掛りかぬる物なり

一　穴堀（奥州筋にて穴堀と云）岩の中へ掘通したるを云、土砂を押込ても穴の出口廣ければ、其儘吹出すゆへ埋らぬ物なり

一　當時石川の堰蛇籠を列べ重ねて、堰又牛と云にて堰くも有、牛の方は入用も多く掛りて却て堰には惡し、然共出水に逢て堰を破られ、其破れ口水深くして堰き難き時には、牛にあらざれば成がたし、牛も其所と時に寄べし、凡て同じ川筋にても、其所により各別違ひ有れども、何方ぞ一所よければすべてよからんと心得て、其場所の吟味はせずして、其諸色を押ならしに用ゆる事不功の至りなり

一　石川の川除堤の内へ水門作る事、能々吟味すべし、水門の付様惡ければ、却て本川をいやなる方へ引寄すなり、凡て用水堰も入口は川原の内にて、地の高き所を見立て堰くなり、出水に水先の當らぬ様に見立、又本瀬に成ざる様に見立て水を取事なり

一　泥川の堰土俵を入、杭〆にして堰くも有、又大河を築切て堰く有、此築様よければ十年もこたへるなり、皆萓羽口に仕立、始は榎かこならか水に強き木を一重敷並べ、又枝木を築立、其上を萓にて仕立様に揃へて、竹の押縁をするなり、杭など打は大きに惡し、打はたまらぬ物なりといへり、羽口は水際より三尺程も高く築事とはいへども、其川年々出水の様子によるべし

一　川を築切る事兩川端より、柱にても假橋にても打出し、扱萓羽口にて仕出し、川の眞中にて築切も

よく、品により假に築切て成とも、又は杭を打、しがらみをして、水をよどませて築切たるもよし、築切の場所川口にては悪し、築もこたへぬ物なり

又曰、〆切に土砂を用ゆる所の普請は仕形六ヶ敷なり、先川の兩端地面の高低を見定、低き方より築初め川の淺深を知て、地水井掘への掛る程を辨へ、水四五分一程は放ちやるやうに、洗堰を仕掛け置なり、土砂を以て築には萱刎口にするの外なし、地形低方の川岸より萱を敷出して、岸の土より縫初るなり、常の堤は萱の根を外へ出す入端口と云、〆切には根を堤の内になす、出し端口と云なり、扨〆切長貳參間端口壹尺四五寸も敷縫して土砂を持こみ、端口より水上の方を埋める心持にて築出してみるなり、水勢强して土砂たもちがたき川ならば、水の有たけ端口の萱を敷べし、堤の中と思ふ所より水の上下向の方へ端口を出して縫行也、萱の上に土地を築上るゆへに、萱落付て堤と成、如此段々築行、洗の所を定め堤を低して置なり、洗は萱の上をしがらみ丈夫に懸けて簀をあてたるがよく、杭を打て堤を堅ふし、水上には堤より低く杭を打、下の水を淀ますするがよし、段々〆行故に水勢次第に强ふなるなり、此故に地面の高き方へ流し置、低方を淀になしたるなり、川幅相應に流口を殘し置、是迄築たる所を能々踏堅め打堅めなどして、漏ざる樣に堤をおち付、一兩日過てひしと〆切、洗より水の流るゝ樣にするなり、さて右の殘し置たる流口を〆切を、俗にむとめと云、又水戸合とも云、此水戸合の仕形ぬ前の端口のごとくさのみ替る事なし、然れども水勢はげ敷ゆへ、萱を押流され成就成が

たき物なり、此時奉行たる者人足使様に心得有べし

又曰、〆切に無用の水堰取らず、尤満水の節こたへる心がけをして、其能き程の分量を考計り、地水をも放ち流す心得有べし

又曰、〆切に枠を立る仕形もあり、深き川は端口計にて水とめがたきゆへに、枠と板を用ひ水を廻し、其下に堤を築なり

一　水門の事溜井より取、用水は水口に水門の堤を築て水門をふせる、水門両方は萱羽口か、又は板（關板と云）にてもする事あり、川より取る用水は猶以堤を堅く築、水門を伏せざれば悪し、尤水門の戸明け立自由なる様にして、大雨にて俄に水出る時分、水門の戸急に立るにも安き様にすべし

川除

一　堤を以水を防ぐ事古今不易の通法也、堤の切たり崩たりする事は、其地形の水勢に應ぜぬ狭き所か低き所か成べし、其水勢に其地形應ぜずして切るゝならば、川面を堤より一尺程除て逆り、四五本の杭を打、貫を通し、笠木など仕かけてよし、（是は大河口にて水勢のさのみ強からぬ所なり、甚敷は楯枠などにあらざれば防がたし）又二重堤と云事あり、是は處は同じ處にて馬踏弐ツするなり、川面の方は高く、内の方は少し低く、馬踏は川面の方は少し狭く、内の方は少し廣く築なり

又曰、堤を築て水を防ぐに、水勢と地形とを考べし、石川の大河などの堤、其水勢より川幅狭ければ

もとより保たず、又餘り川幅廣く堤退き過ては却て害あり、如何となれば餘り川幅廣ければ河原の内に出水の毎度、高き所出來て水勢却て堤へ當るなり、然ば堤も其川により、其水勢と地形とを考へて、其築所を選むべし

又曰、堤は一文字に築くは弱し、入の字の形、への字の形に築くは、自然に出し堤を兼てよしと云へり、何さま美濃尾張國は水所にて、大堤の有國也、先年美濃に有し時、出水にて堤危きよて知れる者、防の爲に出しに、其ものの物語に、堤の上へ水越むとして、既に堤も切れんとする時には、敷貳拾五六間三十間程の、堤の上屏風の淵を歩む様にて、堤ふわ／＼と成ると云へり、然れば直なるより曲りたるは水請能きにや、又曰、川幅廣き所の堤は勾配急成を用（大概高八尺なれば、敷三間馬踏一間、世俗の云壹尺三寸三分餘の勾配なり）川幅狭き所の堤は勾配緩を用（大概高は尺なれば、敷四間馬踏一間世俗の言八寸八分餘の勾配也）右二品の外なしといへり、案ずるに大旨は右の通心得て、其川筋によりて品々の了簡有べし、二品に限る事にあらず、幾様もあるべし

又曰、凡堤を築には先高を定、馬踏をその高の四分三か三分二かを用、勾配急緩を定めて敷を定むるなり

又曰、堤は敷の廣き程よし、水門の上などは、猶以て廣きをよしとす

又曰、堤の高さ壹丈七八尺位より以上は犬走を付けたるがよし、但所にもよるべし

又曰、堤を築くには石垣は格別、先は羽口にしたるがよし、羽口にも品々有、芝羽口、葉ふさ竹の羽

口、木の枝羽口、藁羽口、柴の羽口、又は土俵にて築立るは仕様何ほどもあるべし、元來堤は羽口にしてよけれども、一里とも有所を羽口に築立る事ならざるにより、土居に築立るなり、然共水當りの所か、惣て強みの入所は、羽口に築たるがよし

又曰、堤を築くには水當りを見立、或は前へ築出しの羽口の出し、又は矢來出し、又少遠のけて川くら（牛頭共云）をして、柵をかきなどして出水の防ぎを心得べし

又曰、堤を築に、假令ば高さ壹丈ならば、其下の五尺を十に割り、五寸宛にてかけや丸棒にて搗堅め築上げ、上の五尺は五ッに割て壹尺程にて、右の通築上る時はよし

又曰、堤に鼠穴蛇穴にても少しの穴ありても、夫より水通して堤切るゝ物也、弱手には堤の裏へ水しみ通る所有るべし、少しにても水しみ通る所あれば、其の所より堤切るゝと心得べし、是又水のしみ通るあるに、川面にてはとまらぬ物なり、堤の中を箱樋のやうに掘て、とくと搗堅めざればとまらざるなり

又曰、惣じて堤築立るに、渡しにして仕立るには、堤築立る人手間を積り、土取場の遠近、土持運ぶ道の平地か難所か、近所に土取場なければ、川向より舟にて取事も有、近處に土取場高き所などあれば、道具拵土取手廻しの仕様もあり、然共堤を築立るに丁場渡しにして、はかの行をよしとするは惡敷事なり、少日柄はかゝるとも入念たるがよし、堤築立るには前のヶ條の通り、下より能々土を堅め上て、

或は槌或は棒にて築上、人足を使ふにも、土をもつこにて堤の上へ荷ひ上させる樣にすべし、はねもつこにしてはかの行を本とすれば、堤築仕廻と弱く、又堤の高さも低くなるなり、とかく渡し普請は可心得事也

一　埜地の和らかなる所に堤を築には、かさを上るに隨ひてめり入低くなる事有、堤惣樣低くなるは各別なり、堤中たるのみになりたるか、又は低くなる所有には、土を何ほど持かけても、低く成事あり、其樣なるには、木の枝又は竹をたばね入るゝか、丸太などを入れては築なり

一　石川の川除堤多分土取場なくして、蛇籠に石を入、又は枠をさして石砂を入れ、羽口にすれ共、石砂にて築立たる分多きによりて、滿水の時節保ちかぬる事多し

一　石川の川除堤は出水の時は崩れず、引水の時節崩るゝ下の地も石砂成るにより、引水の時は瀨をつくるとて、堤のはなよりたまらず掘崩す物なり、堤のはな拵やう有べし

又曰、堤の段々缺込に根ともに缺る間は缺とまらず、缺口に根殘ればそれよりかけ留る物なり、田畑の缺入るも同じ事なり

一　川除普請の積りは、其場所計をみて積りては、出水の時節皆違ふ物なり、川口より貳拾町も川上より、段々地形の樣子本瀨枝川等をとくとみて、其當り所を考へて積る事なり

又曰、石川の川除は、水にかまはぬ樣にする事なかれ、たまらぬ物なり、成程水にかまひて水の突か

かる樣にすべし、さなくてはきかぬ物なり

又曰、石川の川除のはなに、すて水門、すて枠と云事有、又〆切瀨違などに水深にて、然も水急成所は上手にて、牛をして水の勢ひをぬかして〆切事あり

又曰、石川の川除出水の時、水堤に當り水押廻す內に、堤のはなへ石砂水に持かけさせる仕かけ心得べし

又曰、川上にて水を逆すれば川下にて必又强く當る、手前を圍ふとて、向ふの田畑の損する事を忘る事あり

或書曰、何ほどたけき石川にても、川除の仕樣口傳ありといへり、少々の心得は有べけれども、必定是をよしと堅く云事は決してなかるべし、必泥むべがらず

一　江州瀨田の橋、往古は橋一ッにてありしに、度々水に押されしに、中島を築て大橋小橋と成て、夫より水に押流さるゝ事なしと云、又江戶小石川船河原橋俗にどんどはしと云際は、神田川への落口にて瀧也、然るに橋の下の方に石を以敷石のやうに築上て、水の當りを防ぎ、左右より水分れて落るやうにしたるは能仕形なりと云傳へり、其場所の大小と其築所の違ひあれども、其理は同じかるべし、ヶ樣なるをも心を付て類を推して、其他をも發明すべき事なり

一　石川の水勢强き川出水急也、大雨降ば夜の內にも滿水し、又は二時の內にも滿水するなり、夫も

水末所々より遲く滿水する事あれども、石川は多分出水急なり、是によりて出水にかゝりて水防ぐ事成がたし、且山の近き程出水急なり
又曰、源の遠き大河大水出るとて不慮に出るにあらず、前方に大雨ふりて大水出べき前には、川の眞中濁り來り淡の立つ物也、水濁り來り淡立つは大水出ると心得べし、濁水そろ〳〵と來り二三日過て大水滿水するなり、其濁り來る時分より水防ぐ用意すべし、土俵房葉竹萱杭木材木舟など寄置たるがよし、色々に工面をして堤を切られざる心得有べし、按ずるにむかしより云傳ふる事右の通なり、然共洪水して急に滿水する事もあり、是は山林荒て水保少きゆへ俄水出る故にや、又は里方は雨ふらざれ共、山は幾日も前より雨降ての事にや、何れ近年は出水する事前々よりも早し、是も古今の違也
又曰、出水の後川水は落て常水に成たれ共、水濁りて川瀬定まらざる内は、俗に弟水をみると云習はしで、又出水あると云傳へり、惣て其國所其川に色々の言習しも有物也、々様の事も其所の者に聞べし
又曰、水勢緩き泥川は、山遠く谷遠きゆへ出水遲し、水末程滿水遲し、出水の多少又遲速、常に能心を付て見置べき事なり
一　大水に堤切るゝ事、泥川と石川の違あり、石川は水勢强く出水急なり、泥川は出水遲し、尤所によるべし、先は其所の物に能く尋たるがよし
又曰、滿水の時分堤壹升より上にて、堤の上を越す水は言に及ばず、堤七八合九合程の水には堤切る

る事有、七八合より上の水は堤の内弱手へ當る事甚强し、常に水の當る所、惣て弱手は、前廣に强く拵へたるがよし、按ずるに水は低き方ほど勢ひも强、水かさも高き筈なれども、出水の勢は同じ川筋にて向ふ合せの一方は高く、一方は低き所も、其水先高き方に向へば、低き方よりも水かさ高く、破れ多し、少々の高低にては、とかく破れし方水かさ高き物なり、又風にもよるなり、是によりて兼てより出水の時分は、何方へ水先向ふべしと遠き慮りを成し置べし、又川端の村々は、平日農の隙を考へて、土俵又は石俵を拵置、又籠詰枠詰の石をも所々にひろひ集め置くべし

又曰、出水滿水して水定りて減る時分は、必定大南風吹なり、夫故波高くして堤のふちをたゝく故、打崩して堤切るゝ事多しと云へり、あながち滿水南風計りにはあらず、武州の荒川は丑寅の風、玉川は辰巳の風、相州馬入川は南風、酒匂川は東風、駿州富士川、遠三の大井川は南風にて出水强し、如レ此川々にて違へども、川水も風によりて、堤への當り强弱あることを知るべし

又曰、出水の時は、堤の上に五間七間に壹人づゝ水番をおき、夜は松明にて水の堤のうらへしみ通るを見付けさせ、水くゞり通る穴など見出させ、惣ての弱手を見させたるがよし、所々に篝をたかせ置、能く番をさせたるがよし、滿水の堪へぬ内、兩川向の者共、一方の堤の切るゝを待つもの也、兩方の内一方の堤の切れば、一方は堤切ざるにより、兩方共に何とぞ向の堤の切るゝを願ふ也、水の滿へて難儀する村は、他所の堤を切たがる物なり、夫により夜中人遣成る所をば忍び來り掘くづし、又は細引

竹縄などにて、兩方に立て引切る事有、其引口より水通りて堤切るゝものなり、水番ゆるがせにすまじき事なり

又曰、水番に付置ものには、所々に貝にても太鼓にても持せ置、弱手ありて水しみ、又はくゞり通らば、段々鳴りを立、土俵萱何にても用、道具品々持よりて、水潜りしみ通る所へ踏み込、急に留たるがよし、手廻し次第にて留る事あり、急成時は近所の家にてもこぼちてふみこみとめべし、何とぞすればとまるものなり、されば能く早く見出しとめたるがよし

又曰、堤切れ所急にとめざれば、作毛多く水損する也、堤の切口急にとむるには舟にのみ穴を掘、せんをさして土俵をつみ、又は石抔にても積、切口へのりかけ、せんをぬき、船共に沈め、それにて水少しよどめば、其上へ土俵などを入、築とめたるがよし、さなくば材木の根に穴を掘、土俵を能く〱付て元の浮ざる樣にして切れ口へ入て、扨土俵を入てとめたるがよし、切れ口は必七尋も八尋もたつ程深く掘るゝ事あり、然れども右のごとくにしてとむれば留る事あり、堤切れて其儘とめても水は貳尺も三尺も低く成るなり、少の内にても切口より水通ればはやく引ものなり

又曰、堤切れ口にても、又は水戸合にても、其所へ水强流れ落る故に、水上五間拾間上りて、杭又は立木に縄を結び、切る途の水戸へ屆く間積りをして、縄の先に葉竹又は木の枝、或は萱、葉、莚、菰等をむすび付流してやるなり、もとより間數を積りたる故に、幾所より流しやりても水戸にとゞまる

なり、かねて土俵を拵置て、右の流留りたる物にちなみて留るなり

又曰、先年堤切れ所防に、其近所の百姓家を焼、そのあかりにて防ぎ留、跡にて其百姓に家を造り與べしと云物語あり、尤常にはせずとも時に臨みて發明なり

一　堤築様は繩を引竹を立、其堤所々の間數を定むる也、芝羽口に築くは、芝くれを凡積りにしてきらせ置也、尤積りより餘計をきらせ置、此芝くれを草のはへたる方を下にして、芝くれ小口三寸程も草のはへたる方へ折返し堤の羽口になす、鳥の羽のごとく重ね行も、又めん鳥ばとて直ぐに並べ、合せ目毎に一枚づゝ重ねるもよし、此芝くれは長みを堤の横に置たる故に、跡くれとて芝くれの長みを堤の長みに一二枚通り置べし、大概高さ貳尺計りも重りたる時、槌(カケヤ)にて打〆踏鎮たるがよし、兩端口取間に中詰の土砂を運ばせ、堤の中所々に溜置、端口出來次第引ならし、堤の高凡三四尺計築上て地形能ならし、人足を大勢上て踏堅めさせ、兼て長六尺計廻り五六寸ほどの圓木を用意し、是を持て堤の上より、端口を見おろしてたゝかせたるがよし、堤の形出來しては、とにかくに堤の上へのぼる樣に人足を遣ひ、踏堅めさせたるがよし、人足使樣心得有べし、先は其堤の兩小口より土を持運ばせ、中よりは往來せざる樣にすれば、自然と堤の上往來しげき也

一　堤、萱羽口、縫竹、人足等の積り並に仕樣の事は、假令ば高六尺はゞ三間長五拾間なれば、埜萱厚壹尺づゝ三通敷積り、一坪に三尺繩〆九拾六束づゝ掛る（是は両端口萱厚一尺づゝ三通り敷、壹坪に四十八束両方にて九十六束掛る）　端口縫竹三四

寸廻りの唐竹、堤長一間の所一通りに、兩側にて拾貳本づゝ三通合三十六本掛る、右の仕樣は萱厚一尺より少し厚めに敷立、端口七八寸も退（シサ）りて唐竹根入貳尺三尺も指立て、先貳本一所に指て萱を踏鎮めながら、右の貳本を左右の手にて向ふと前へくじき、右の手にて手前へくじきたるを萱と共に踏鎮め、扨又堤長壹尺程置て竹壹本立、最前向へくじきたる壹本を相手にして、右のごとくゝじき、次第〳〵にくじき行き、竹の末は各堤の内に納むべし、能く踏鎮めさせて、しがらと萱のあそばぬやうにすべし、馴たる人足に縫せたるがよし

右羽口を縫ふ間に、堤の中通り土砂を運ばせ置、引ならし踏堅め、打堅めなどするなり、土砂あつさ壹尺二寸程にも築、又其上に萱を敷き前の如くにす、土砂は縫目の外へ出す事なかるべし、無益の事なり（此人足大概二十五人は、縫壹人貳間づゝ三百七十五人は土砂取運壹坪三人掛り）右の如くにして堤高壹尺程も餘計を築べし、落付ば低ふ成る物なり、路の邊は別してなり、野山にても六尺立方に掘取りたる土を、外へ運ば八尺立方になるといへり、（按ずるに兵書に高三間敷八間馬踏二間半の土は、幅十間深五間の土にては少し餘ると有、尤眞土と野土との違ひはあるべけれども、何れにても深五間幅拾間なればやげん堀にして土坪二十五坪有、今築へ上居の積り漸拾五坪七分五厘也、然る時は大き成相違にて六尺立方の土六尺立方には成がたし、上切を成すものはためて置たき事なれ共、いまだ是をこゝろみず）右縫竹を伐尖らする物なれば、其節竹の本口長貳尺有餘伐取置、夫を貳ッ割にして簀にあみ、上段の羽口を押へたるがよし、堤の出來方も奇麗にて端口の强みにも成なり、又端口縫竹をなよ竹にして、唐竹を堤の長み一長く通し、ふちになして押へるもあり、一向に縫ずして土砂置もあり、勾配を付るもあり、又水門の羽口など瓦竹と言て、唐竹を上にならべ（細きは丸竹をも用）

（なきは武ツに割用）其上を押ぶちにて押へたもあり、又国々の仕馴なる形もあり、其時の了簡にも寄べし

一　端口には芝羽口、俺粂羽口、桧葉羽口、萱羽口、葉羽口の差別あれども、仕やうは何れも同じ事なり、不断水の有所の羽口は、桧葉羽口にしく物なし、百年も朽ずして能く保つものなり

一　川除出しに品々あり、籠出し、枠出し、石出し、籀出し、杭木出し、矢来出し、牛頭出し、薮出し、流し、土手出し等あり、籠出しは蛇籠を以出す、枠出しは四方枠、三角枠、弁慶枠（近年相州酒匂川、武州玉川にて唱、聖牛一件の名を唱によりて違ふなり）等を以出す、石出しは石を積重ねて出す、籀出しは直に籀の事なり、杭木出しは杭木を多く打置なり、薮出しは杭を打其間々に葉竹をさし折かけ置を云、又ながしと云は杭を打、葉竹を付結付さとするなり、葉竹計にてもとを植たる様に丈夫にさし堅め、流るゝ水に撓るゝやうにするも有、土手出しは羽口をして土手を出すなり

一　出しの鼻川下へかたむきては破損しげし、又川上へかたむきては出しの根缺る故に、大方直に出したるがよし、但はね出し請出しあり、水の當り押懸を出水の時節見分致し置、能く考ふべしといへり、接ずるに大方直に出したるがよしとは、大河の勾配急成石川は直成べし、但直に出すには出しの根に、岩か大石か山地か元切なかるべき場所を見立て出るなり、其外の川は石川たりとも、先は斜に出すに利あり、然ども川により石川の勾配急成事同様にみへても、一様には論じがたし、はね出しては川下の方へ斜に出して水をはねるやうにするを云、請出しとは川中へ直に出して水を請るを云也又

曰、出しをするに裏切を云て、出しの手前をきられぬやうに、籠しがらみ枠を用ひ、出しの先へ水を廻すやうにすべし

又曰、出しの事早川は三四寸、勾配緩き川は五六寸勾配に過ずといへり、是は一偏の説なり、川により直に出すもあり、又川上の方へ水に逆ふて出すもあり、其所によるべし

又曰、出して長サは川幅の十分一を定法として、夫より短は得有、長は失多し、出し長くせで叶ひがたき所は、本出しの水表は拾間拾五間の間に、或は五間成は三間の小出しを附べし、さなければ保かたしと云へり

又曰、出しをするに大河の勾配、急に水勢强き石川などは、出しの根弱くてはこたへがたし、沈枠、蛇籠を以堅めざれば、出水の時節保がたし、此仕様は四方枠を沈めて石を詰、此枠の廻りも根籠巻籠とて蛇籠を廻し重ね、其上を木にてふたの様にして、其上へ蛇籠にて出すなり

一　籠出しは假令ば長六間高六尺、壹丈ならば堤兩様籠差渡、貳尺籠なれば三ッ重にして高六尺也、長六間の所三間籠なれば、片側九ッ、兩側にて拾八、堤の小口壹間の所へ長貳間籠三ッ、鞍かけと云仕形にて、竪に並べ堤の上迄、竪になげかけたるさまに置なり

一　枠出しに四方枠、三角枠、辨慶枠、聖(ヒジリ)枠、竪枠、牛頬、牛枠、牛掻(カヤ)欄、魚鱗枠等の差別有、四方枠は即四方の枠なり、三角枠は三角にして長く出す、辨慶枠は下貳間なれば、上六尺ともして上す許りにして

長く出す、堅枠は川上水請の方は、直に水裏の方は斜にして長く出す、堅枠は堤或は田畑の欠口水當りの強き所に、高弐間にも弐間半にも、幅三尺にも五尺にもして長く囲ふ、何れも矢來木をして石を詰るなり、牛垣は三角枠に似て矢來木なく、柵をして蛇籠を重りにして出す、牛枠は押倒されぬ様に大木にて枠を押へひかへるなり、大木に足を付川の縦にも横にも居るを牛出しと云、牛揺柵は牛に柵をして、蛇籠又は石俵土俵にて重りを付、牛を流さぬやうにするを云也、其なり形は其所により幾様もあるべし、魚簗枠と云は、三角にして角を川上へ向け居へて、水の勢を分つためにすへ置なり

一　石なき川にて籠出しならざる時は、しがらみ出しを用るなり、川の上下を二三尺間に五六通出せば幅有、堤同前に利ありといへり

又曰、しがらみ出しは岸のひたひより杭を打、初勾配を考へて造りに打出し、上下の通りも間の遠近に勘辨有べき事なり、扨又竹のもとを岸の土に差込てあみ行なり

一　杭木出し大河は間遠に打てよし、小川は間近打てよし、大概大河は一坪四本積但三尺間に成、小川は一坪九本積り、但弐尺間に成なり

又曰、石原に杭を打に、大石多して入がたき所は、大きなる鐵の鴨を以て先打込、其穴の跡へ打ば入やすく、又はがねにて大きなる錐のごとく拵らへたる物にて地形へ打込、其穴の跡へ打たるもよし

又曰、淵の差引有所、長き杭はゆりこまざれば入がたし、土俵も弐俵もくゝり付、十文字に繩を引張

てゆり込べし、根入深からざればさし潮の時拔るものなり

一　水當りに矢來出しは竹の本を强して一間程宛間を置き柱を立、其柱にひかへ柱をしたるがよし、但し上と下と二所にひかへなければ惡し、ひかへ杭をつよく打て、竹は茂く並らべ厚さほどよし、古き竹をも其儘置、新敷竹を年々幾重もあてたるがよし

一　牛埴出しは、川筋の掘替瀨違ひに用るなり

一　新川の掘樣に心得多し、遠く掘川はすぐに計り掘たるは惡し、水あたりをみて水に應ずる積りして掘べし

一　新川、新堀、堰、溝などは渡しにして掘らせたるがよし、竪横を定め深さを定て渡し、深さには中に約束の深さ程に牓示を立させ、是に尺を當て掘らせたるがよし

一　埜地の和らかなる所は、堅き土の所よりも掘にくし、子細は掘りて土を取るに手間を取故、掘にはか行かず、渡しなどにしては、請取たるもの迷惑するなり

一　川を掘廻す事あらばさいめを打時、地下の高下によりて川筋を廻して打べし

一　清水の細く流るゝ所あらば必川筋を廻すべし、地形低き所は出水の時、川水いかりて水損あり

一　圦、樋、水門、笕、川除等の諸色も、其國所川筋によりて替り有、委しく其場に臨みて古今を考へて用べし、初學の爲に名所諸色の一二をしるす

一　圦樋の諸色根太木（土台木とも云）敷板（下梁又まつらとも云）枠柱（立まつらとも云）上梁（上まつらとも云、但下梁より上梁迄を合て内枠と云）側板、土居、甲蓋（此上両方に押木するもあり）鰭留

右の戸前堤外川表の方に、男柱、笠木、砂留木、（甲蓋の上にあり）芝留板、袖柱、（腕木とも云）扇板堤内の方の男柱を鳥居柱と云、笠木を鳥居木と云、川表に有を瀬戸、是は雨扉にして満水なれば、おのづから其戸立て水を内へ入れず、内に有戸は掉戸もあり、落し戸もあり、各釘鎹をも用るなり

是は内よりは悪水を吐せ、外より悪水いれざる圦樋なり、美濃尾張に多し

一　水門の諸色根太木（土台木共云）羽金板（共樋筒により丁番に用るにあらず）内枠（大水門に中柱あり中束とも云）両側板、土居木、甲蓋、鰭留、男柱、袖柱（腕木と云）笠木、砂留、柱砂、留木、芝留板（甲蓋の上は土手にするか、上は石垣などを重しにするもあり）釘鎹

是は幅五六間長八九間の積りなり、少きは仕様いくらもあり、大概は同じ

一　箕の諸色敷板側、外枠、臺柱、貫梁、箭、釘、鎹、両方は閘板か羽口なり

一　三角枠諸色敷弐間高さ壹丈長弐間半、内法にては数壹丈上壹尺高六尺、石坪は内法にて積る

柱丸太拾本（長壹丈末口五六寸）　中梁三本（長八尺末口五六寸）

棟木胴貫共に五本（長二間半末口三四寸）　根太五本（長二間末口五六寸）

矢来木八拾本（長二間半末口二三寸）　大せん弐本（長二尺）

唐竹三本（五六寸廻り是は片竹に用）　縄拾五房（是は矢来をかき付る縄なり、[illegible]の節にはそ穴通しせんなり）

一　辨慶枠是は近年仕し名也形は昔よりあり　諸色敷貳間上壹間高サ八尺長貳間半、內法にては敷壹間上三尺高サ四尺長貳間

柱丸太八本　長八尺末口七寸但先年は四尺間に立しかども、今は五尺間に立る好みによるべし、是は五尺間の積り　根太四本　長二間末口六寸

笠木四本　長二間末口七寸　貫四挺　長二間半幅五寸厚壹寸

中梁四本　長壹丈末口六寸　矢來木八拾本　長二間半末口三寸

繩拾五房　但切組はほぞ穴通しせんメなり

一　楯枠諸色二間半高貳間半横五尺、內法にては長貳間高さ貳間橫三尺

柱丸太八本　長二間半末口五六寸、但先年は四尺間に立しかども、今は五尺間に立る好みなるべし、是は五尺間積り

貫六挺　長二間半幅五寸厚一寸　根太四本　長五尺末口五六寸

中梁四本　長五尺末口五六寸　笠木四本　長五尺末口五六寸

矢來木百本　長二間半末口二三寸　繩貳拾房　但切組はほぞ穴通しせんメなり

一　牛垣諸色長八尺より壹丈貳尺迄好に依べし、柱丸太矢來木共一組に拾壹本　長八尺より壹丈貳尺迄、末口四五寸長の長短に依て見計也

唐竹壹本半　五六寸廻り片竹に用

蛇籠五本重ねより七本重ね迄好みによるべし、蛇籠は一組に二本づゝ、

一　枠造る大工積り壹間の四方枠一組、大概五人積り其枠の品により掛りの多少あり、牛垣は人足壹人にて二組づゝ組積り

一　木掩は長貳間、幅壹尺に廻して大概貳通引

一　締出しの杭木は壹間に差り四本打、但し高サ四尺のしがらみには三四寸廻りの唐竹、一坪には三拾本ほどしがらみ、かき人足は壹人七坪づゝかく積り

一　蛇籠竹差渡一尺五寸壹間には五六寸、廻りの唐竹四本づゝ、但唐竹の太サ三四寸廻りより五六寸廻りまで、四ッ割にして用るなり（差渡し二尺の籠も、四本積りと六説あり然れば壹尺五寸は少し内端入べし、）

一　蛇籠の竹片竹にして貳尺五寸廻り、壹ヾにて指渡二尺四五寸長貳間程出来るなり、籠の竪に用る片竹は三間より短くては悪し、横に用るは短くても苦しからず

一　籠造り人足は壹人にて貳間、籠一日に貳ッ、組仕馴たるは三ッも四ッも造る

一　蛇籠の居様はしがら鎖り杭ヾと云あり、しがらくさりはひしき竹、割竹、なよ竹にて敷の上に鎖り付る、是は川床の柔になる場所に用ゆ、杭ヾと云は竹木の杭にて籠を貫き打て堅むるなり、杭は壹尺廻り以下を用根ヾ三尺程

一　蛇籠の口の差渡大小は川によるべし

一　端口萱の積り壹坪に尺縄ヾ四拾八束宛、萱のたけは三尺あるも四尺あるも有、麁朶の積り松葉の積りも、皆縄ヾにて積る故何れも同斷なり

一　端口縫竹は堤の長壹間の所に、葉唐竹三四寸廻り六本宛、三通にて拾八本入なり

一　端口縫人足は壹人貳間縫、但仕馴たると仕馴ざるとは各別違なり
一　杭の事何木にてゝ逆さまに打たるが根入宜く、いかにもとがらして根入三尺程に打なり
一　出し並堤などの蛇籠〆杭は、貳間籠一重に四本打
一　杭を石原に打時、松木の杭は何れの杭よりも根〆能ものなり、此杭打人足大概壹人貳拾本打、地の堅きと柔かなるとにて違ふ、石間なきは三拾本打、多きは拾本打もあるべし、中分貳拾本打也
一　石原に杭を打に入がたき時の事、杭木出しの修下に出せり
一　川除杭大概壹間に六七本程、しがらみ柴は壹駄程
一　杭長五六尺壹人に五六本持運ぶ
一　蛇籠詰の小石は宜しからず、渡り六七本程より壹尺位迄を用べし、籠居へて先大き成をあしらい納め、後に大小取合次第に入るゝなり、但籠の目一倍位の石は入る物なり
一　土砂持運人足積り、石は壹坪壹町四人、土砂は三人懸りなり、路程は取運ぶ所に平均して勘定する故、三町を越凡拾町にも及ば、掛り人足壹町壹人づゝも減じて然るべし、尤日の長短にもよるべし、先春の日の永を以考たるよしといへり、但路程拾町に限らず、三四町より以上は段々割は減ずるなり、石を取る物土を掘りて、もつこに入てやるもの持運ぶ物を分けて、一日の功をはかる時は大概を得べし、尤人足の馴ざると馴たるとは縣隔の違ありと知べし

又曰、土を取もつこに入と人足にあてこふ物と、持運ぶ物は別にすへし、さなければ其荷不同ありて、だん〳〵持運びの荷がさ少く成なり

一　土壹尺立方　拾〆目　塵芥泥には拾壹〆目

一　砂同　拾壹〆目（石交りの砂利は、壹升八百目あまりもあるべし）

武州にてためしたるに拾〆目もなし、土も砂も其所によりて輕重あり、然れば其輕重の入る時には、其所にて猶又ためしたるがよし

一　土壹荷の重サ八貫四百五拾目積り（大概を記す所により輕重あるべし）

但谷ッ合もつこ荷をかけて行歸りの道、一日に歩む事八里積りといへり、是は土取物は別にありて持運ぶ計の積りなり、但其往來の足場により是よりも里數減ずべし

一　石壹尺立方　拾七〆目

一　栗石六尺立方　三千〆目程

但栗石と眞土と蛇石との重サに違あり

三間の角石は壹人の曳坪　貳百八拾寸坪積り

貳間の角石は壹人の曳坪　三百五十寸坪積り

壹間の角石は壹人の曳坪　四百五十寸坪積り

一　釘鎹の鐵目方寸六拾目、釘は三を用ひ、圓き物は七九を用る事、今通法となれり

一　林木の根伐人足壹人にて、指渡壹尺の木三本積り

一　枝葉伐除り木拵人足壹人にも三本積り

一　持送り人足壹人にて六〆目一日六里歩行の積り

但松木の生木壹尺六面にて六〆目程、右末口物は角に廻し重さを積るなり

右枠積り籠積り人足積り等は、世に言傳る所と又通例用る所を兼記す、强ち通法と云には非ず、凡て諸色の類、其品多く其仕樣も所にて變り、人足も其事に馴しと馴ざるとは其功甚違、只中分を以記す

一　川除普請の入用は、領主より用水は百姓自普請の定なり、然其百姓自力に叶ひがたき時は助成を下す事、古今の通法なりと云へり、然るに國所により普請を常にして耕作を疎略し、普請を稼にして年貢を濟す、いつも普請ある物と心得、自普請圍等をするを臨時に餘所の事をする樣に覺し所もあるべし、ケ樣なる差別能々心得て風儀の押直る樣に心得べき事なり

一　川除は其所の古き物に尋給ひてすべしと言傳ふれども、其所のものも心がけなきものは知らず、出水の樣子をばとくと尋聞て、決着の所は自ら知るべし

縣令須知卷之三終

縣令須知卷之四

種藝第五

種藝の事は先に農業全書ありて世に行はる、誠に農家重寶の書にして、令たり吏たるものも熟讀すべき物也、凡天地の間に生じて人を養ふ物、五穀を始一草一木に至る迄、各其徳に非ずと云事なし、或は其實を取或は其根を取、或は其葉を取、或は其幹を取の類ひ區々にて、各其出來何も不同有、其法を得る時は能榮へて實りよく、其法を失なへば榮へずして實らず、又其土地にも不同ありて其所を得ると得ざるとは各別の違なり、夫農は壹人耕して拾人是を食する分數ありといふなれば、農たるものも能勤めて怠らざる時は、多く人を養ふの陰徳あり、勸農の任たる者も能敎へさとす時は其徳彌廣く、然るに農は年々其事を勤ながら、稼穡の術に委しからざるも有、又令たり吏たるものも、其任に居て差當る品の如何樣にして種べく、何程收納するものと云事も知らざるもあるべし、耕作はすべて時に先だつ損は少く、時々後日に損は限りなきなれば、其時を奪ふべからず、又其收納の時節をしらずして妄りに其稅を催すとも益なかるべし、是によりて今農業全書にもとづき、差當る品を拔粹して、且一二の

闢傳へを加へ、其一隅を擧て其詳成事は、猶又其委書並に農政の書に求め考へて、地の利を盡すべきものなり

一　土地の善惡所の高下遠近色々あり、其利潤を考へ作らざれば、妄に人力を盡くしても益なし、但上々と下々の土は、人力にて上々を下々にもならず、又下々を上々にも轉じがたし、中下の土は惡土を肥土となし、弱土を强土となし、堅きを和らげ、ねばきをもろく、淺きをふかく、輕きを引しむる事は、力次第にもなる物なれば、其土の性を能見分て、うへ物より夫々手入の品に至る迄、其相應を知る事第一なり

一　田畑作毛には下たに水氣を持て、上に陽氣を請、段々成長して實るなり、下に陰氣は持ても日影當らぬ所は、草生には長々と見事なれども、實入甲斐なし在穀にならず、又上に陽氣は請ても下に水氣なき所、或は敷石などありては不二根付一なり

一　田畑の地淺きは惡敷深きよし、砂交り一入米性能なり、然れども餘りこわきは、砂に野土を少し交てよし

一　畑の地淺きは萬作物日負する物なり、强き土は砂か野土を少し入べし、總て作物仕付の時、地を深くおこしたき事なれども、底の辛土掘起しては惡し、年々少しづゝふかくおこし、或は草ごみなどを掘込、其ほめきのさめたる節種蒔べし

一　檢地ありて後、百姓屋敷段々山際へ引移れば、平地の屋敷をば畑にすると、次第に村厚く成る物なり

一　一切に手入すべき作物をば家居近く作り、手入間違ひても苦しからぬ作物をば、家路遠く作るべき事第一の考なり

一　眞土の厚き所は肥しする程よし、土惡敷所は肥し過れば返りて薄田に成り、作毛から計出來過て實入ざる事多し、下田惡土の所如レ此

一　總て惡敷土目の所肥過て、から計そだちて實入ざる所、ヶ様成る所に作りて、能稲草有ものなり心得べし

一　備後は肥良の地多き國にて、南方を受る故、土産いろ〳〵多き中に、藺田の利勝れて多し、六月刈取藺の株をぬき去り、跡を其儘耕して、かねて晩稲の苗を仕立置、早速うへて手入段々常のごとくすれば、大方時分にうへたる稲にさのみはおとらず、霜降て苅取と云なり、何國にても田畑肥過て、其實はよからぬ所ある物なり、左様の地に此法を用ひて藺を作るべし、畔にうつ事ならざる物は、藺にて實たるも利ある物なり、殊に跡にも又稲の出來る地ならば、誠に過分の利なり、所によりて考へ、或は習ひ得て心を用ひ、其利を求むべし

一　其所にはよるべけれども、大概黒土は麥に宜し、赤土は豆に宜し、粟黍は黄白土の肥土に宜、大

根は細かに和らか成る砂土に宜、芋は水に近き肥柔か成日陰によろし

又曰、赤眞土砂土は麥菜大根に宜、稍に眞土黑眞土に細石の能思ひ合たる土は、諸作共に能出來れ共別して麻木綿によし、所に依り麥作は出來過て斛少き事あり、又菓樹の類は南向深肥地屋敷廻り人煙近きほどよし、遠きは實のり少し、總て土地を考へ相應の物仕付べし

又曰、赤眞土は麥に宜しけれども、秋作は次なり、日影畑の赤土は春地にして菜大根を作る事多し、然ば半作なり、黑土は作仕付よく、芋、多葉粉、菜、大根、大豆以下諸作中分なり、總て日影畑は麥は惡し、秋は見合て作る物多し

一 野菜の類作るに、其場所にも宜敷所有、茗荷は木の下、萵苣は道端、蓼は井の端、紫蘇、韮は軒下、地膚(ハヽキヾ)は空地、莙薘(トウヂサ)菾韮は前栽によろし、蕃椒は木綿の中か紅花の中に交て作るがよし

一 白地胡麻に宜し（細砂の肥たるに能出來る物なり） 瓜を植る地黑土赤土黄色の少しは砂交りて、光色ありて粘り氣少きがよし、さのみ肥ざるを好ず、薑は細沙の肥地に宜し、茗荷(ミヤウガ)は樹下其外日影に陰地を好む物なり、芋は軟白沙に宜し（ごみ沙などいかにも和らかなる深き肥地の、終日日あたらぬ所或は川の邊り其外少水氣の濕氣は、もれやすき所を好みて、高くかはきたる薄き地などはすべてよからず）

一 胡麻は旱を好みて雨年よからず、他の作り物は少旱痛する所も、胡麻には苦しからず、欵冬(フキ)は旱をおそるゝ物にて、終日能日の當る所に種べからず

一 藍、木綿、麻、生姜、多葉粉、大豆、大麥、粟、稗、茄子、牛房、菾韮の類は中畑以上の作物な

り

一　總て東南の草は思ひの外惡敷事有、氣を付てみるべし

一　種子の撰も又肝要の事なり

一　菖蒲は百草に先立て生ずる物なれば、農人是を目當として耕し始るなり、此外其所の草木のめだちに時分〳〵の目つけ心覺へすべし、すべて田畑共に一村の内にしても、所により陽氣の遲速ある事なれば、寒氣の早く退く所より、段々に耕す心得すべし

一　總じて稻に限らず、草の類は節氣に先達て生ずる物なるゆへ、時におくるゝに損有、時におくるゝ稻は後の手入を盡しても、十分の實なし、殊におそき稻は秋颶の災も有時分、能うへたる稻は莖すくやかにして株太く穀茂く、穗馬の尾のごとく、籾皮薄く、舂て米多く減らず、おくるゝ稻はよわく糠厚く萬災のみ多し、必天の時を失ふべからず

又曰、早過る損は少く、遲き損は限なし、稻のみに限らず作り物に於て專工夫鍛錬し、才覺手廻しを用ひて、利潤をさらずと云ふ事なし（令たるものも農の時を考へて妄りに百姓を遣ふべからず）

一　春の耕しは手に任て勞すとて、犂て其儘杷にてかくべし、春は風多きゆへすきてからそのまゝ置ば、土かわき過らつけて性ぬくるものなり、秋の耕しは白背を待て勞すとて、畔の高き所白く干たる時かくべし、其のゆへは秋の田は霧しげくしてしめるものなり、能干ざるに其儘かけば、土かたまり

て性あしゝ

一　犁一擺（ハイカキナラス）六とは、一度犁てば六度かきこなせと云事なり

一　其分限より多く田畑を作る事を貪るは、なべて是農人ことの病にて、夫によりて過はひをあやまる者多し、田畑分に過ぬれば、假令耕作の法を能知ても人力たらず、其法のごとくいとなむ事なく、耕し種る事も必時におくれ、物毎皆土地の力を盡すことあたはざる物なり、耕作は分量より內ばにして深く耕し、委しくこなし、厚くつちかふに、利潤多しと知べし

一　惣じて耕作は牛馬と下人の能きを持ずしては、いかほど肥良の田地を多く持ても、作りこなす事ならずして、次第にやせ荒るゝ物なり、田畑相應よりは少は餘る程持たるを、よき農人とする事なり

一　凡て其所に作り來れる作物にては、其植樣其地味相應を能はかり考へて定法とすべし、假令ば同じ田の內を一歩は中分と思ふ程とうへ、一歩は少多く取てうすくうへ、一歩は能程に取つてうすくうへ一歩は少く取て茂々うへ、ヶ樣に同じ田坪のうちに品を變て種る事、右のごとく同じ樣に三ヶ所計に植て、秋の實りを以みたらば、其里の地味にあひたる程がよく知べし、それを以て其村里の定法とすべし、是一度心見て長く其所の相應を知事なりといへり、畑作のすぢの切やう品々有べければ、是等の事も其所相應を心見考へて、其頭たるものより、末々不才なる農人に委しく敎へて然るべし

一　一疋の牛馬の踏たる糞、大方田地五反計りはよく肥すべし

一 稲 苗代に種を下す積り、一畝に貳斗五升積、肥は壹斗蒔に拾駄當、桶肥し二荷程入べし、苗芽出れば水を干し如レ此二度程すべし、暖を入べき爲なり、雨降れば水をかけべし、强き雨には根を蔵き出して惡敷なり

苗を植る數、凡一反の田に三萬を中分とす、手間の事、一反に三拾人手間と積りては少々不足なり、うないおろし草取手間、刈上こなす間、俵にする迄を勘定すれば、一反に五十人手間と云ても苦しからず、然れ共内ばに積りたるがよしといへり

上田の上土の所、種おろし少しといへども、下田の惡敷所にても地面詰りて狹きは種おろしも少し、地面能所にても地面廣きはおろし多し

稲は七八十日にて穗に出て、早田(ワセ)は三十日、中田晩田(オクテ)は四五十日にして苅旬になる、唐に毎度旱損する國に、早稲(ヒデリ)の種を他國より求め來りて作りて、後飢饉の愁へを助りたりと農書に記せり、國により麥田に麥を蒔ずして地を休め、田作をすれば殊の外出來も能取實も有り、米性も風味もよし、然るに上方筋麥田に麥蒔かず、休めたる時の田作に小出來なりといへり、國所により格別の違もあるものなり

稲の事は檢見の篇に大概を記す、交へみるべし

一 大麥 上中下の畑共に作る

種壹反に麥安は四五升、稍麥は八九升、是中分なり

又曰、四升五升或は六升、又曰、上畑壹反に七升、肥しは荏粕か干鰯か、馬屋肥なれば壹反貳拾駄、下肥四拾荷餘、手間は貳拾人手間、馬貳疋手間程掛る（種はおろしの事國所によりて各別の違あり、關東筋には麥種貳斗までも蒔所あり、又肥しも其國所の用來るありて、其積りも違ふも心得べし）

収納

上々三石四斗
上貳石七八斗
中貳石餘内
下壹石餘内

又曰

上々五石七八斗
上　四石五六斗
中　三石五六斗
下　貳石位

武州野方の農に聞しに、上貳石、中壹石貳三斗、下四斗餘といへり

農書曰、能出來にて貳石程、畿内老農の說には麥安壹反に四五石あり、其次といへども三石なきは稀なりと（石數積り所より各別の相違あり、其一端を擧て記す、委敷は支配中其所々にて、よくと尋問て記すとしるす、以下何れも同斷なり）

又曰、遠國或は土地の惡敷村里に住み、他所をしらぬ農人は疑ひあるべし、五畿内のうちにても作人により、出來不出來ありて同村同前に畔を並べて、同じ地を作れども、一倍も三双倍も變りてみゆる有れば、皆其作人にもよる物なり

又曰、麥厚く茂り過て黃色になりたる時は、熊手にて中をかき、厚き所を間引て薄くなすべし、其儘おけば實少し

又曰、麥は秋の土用入て蒔初るを上とす、土用終十月上旬を中とす、十月廿日頃を下とす、八月上

の戌の日より小麦蒔初るよしといふ、雪のふらぬ国は春も蒔べし、是は悪し、取實少し

一　小麦　下畑下々畑に作る

仕入大麦に同斷

收納　上壹石貳三斗　中　八九斗　下　四斗餘内　又曰　上壹石六七斗　中壹石一二斗　下壹石餘内

武州野方の農に聞しに、上六七斗中三四斗といへり

一　粟　中畑以下に作る

仕入大概麥に同斷、壹反に種五六合、瘠地は少し多く蒔、但下肥計りにて作る、手間は麥程はいらず

收納　上貳石餘内　中壹石餘内　下三斗餘内　又曰、能出來にて壹石程あるなり

武州野方の農に聞しに、上五斗中三斗位といへり、粟を能作れば、壹反に夫婦年中の食物ほどある物なりといへり

一　稗　中畑以下に作る

植て小便を掛る壹反に拾荷程づゝ、兩度苅迄に人手間八人程、修理兩度收納能出來にて貳石程有る、武州野方の農に聞しに、上貳石中壹石貳斗下五六斗といへり、稗を山に作る時は、あらく毛のあるを作るべし、鹿鳥の犯さぬ物なり、且旱して苗枯たる時か、又は五月洪水にて苗流れ、或は水底に成て腐たる時も稗は出來る物なれば、水損ある所は兼て種子を蓄へ置、苗をうへて植付て此難をのがるべし

干潟を開き殺田となさんとすれども、初の間は潮水もれ來りて、苗かれうせ稻盛長せず、毎年手を空しくする所、しゐて稻を作り、妄りに費を益べからず、先ヾ此稗の苗を長くして植れば、大方は潮氣にも痛ずして能榮へ、其功をなす物なり、其後に稻を作るべし

一　黍　中畑以下に作る

人手間稗に同じ、下肥兩度懸る、畑畔に作る事多し、もろこしと云は即是なり

一　大豆　中畑以上或は田の畔にも作る、田に作れば明年稻の出來よし、即是をあこしと云て、稻色各別なる物なり

稗の間に植るは、肥し稗の肥にてよし、畦大豆は杭を突植る、上に灰を掛る

收納　上壹石壹貳斗　中壹石餘内　又曰　上貳石壹斗餘内　中壹石五斗餘内

下四斗余內　下八斗四五升

又曰、能出來にて壹反に七八斗程有る、凡蒔て百廿日にて苅收る物なり

又曰、大豆は槐に生ずといふて、槐のさかゆる年は大豆よしとなり、小豆は李に生ず、先年小粒の大豆壹升の粒をかぞへて見しに、壹升の數壹萬三千粒ありたり

小豆壹反收納　上壹石餘內
中五六斗餘內
下三斗餘內

黑豆は肥過れば實少し

一　蕎麥　下畑に作る、山畑によし

下肥三返懸る、一返に拾三四荷程入る

收納　上壹石五六斗
中壹石餘內
下四五斗

又曰　能出來にて四斗俵三俵餘、或は貳俵半程ある

武州野方の農に聞しに、上六七斗中三四斗下壹貳斗といへり

又曰、蕎麥を春蒔て、夏の末實のると異國の農書にみへたり、日本にて誠に極てみるべしといへり、

蕎麥を蒔に雨濕に合ざるやうにすべし、蒔時雨にあひ、又はしめりたる地に蒔たるは、いか程肥しを用ても、盛長しがたく瘠て實少し

一　大豆は場に熟し蕎麥は八分に刈れ、粟は早くして黍は遲くかれといへり

一　菜　上下中共に作る

肥大根同斷人手間麥に同じ、蕪菁は（一名は葛菁共いふ）飢饉の時他の菜は久しく食すれば、菜色とて其人いたみ色迄靑く成物なれども、此物はいかほど久しく多く食しても病を生ぜず、人の色相變る事なし、依レ之種子を貯置て凶年の節多く蒔てよし、諸葛孔明の軍のさき〲しばしの在陣にても、必地をえらみ是を蒔せられしゆへに葛菁とも云、植る地家の跡かきかべの崩跡などの、古き土を好む物なり

又曰、後漢桓帝の時、天下打續き大に飢饉に及びしを、天下に詔し郡國の奉行に仰て、蕪菁を多く作らせられしにより、餓死のものなかりしとなり

一　大根　上中畑に作る

下肥六拾荷程人手間麥に同じ、種子一反に五六合中分なり

收納壹反に一萬貳三千あるべし、一歩に四五拾本中分なり、又曰、一歩五拾本といふ

又曰、大根は二月より六月迄、毎月上旬に蒔は六十日にしては、根葉共に榮へ、年中絕間なき物也

一　芋　上畑に作る

先小麥を作り其中に植る、肥しは壹反に下肥拾五荷程掛け、そだちて馬屋肥を貳駄ほども入、又下肥を拾五荷程も掛る、收納能出來にて壹斗入のざるに、三百ざる程もある

又曰、山城の鳥羽にて一反の畝數凡八百あり、是に四倍ある故、芋株數三千貳百一株に芋の子壹升ほどゝ云、過分の利なりと云

又曰、芋は農人かぐべからず、地にあひぬれば人の力次第にて、凶年しらぬ物なり

又曰、蕎麥と芋とは土地餘計ある所ならば、農人ことに必多く作るべし、芋は虫氣其外天災にあはぬ物にて、地にうへて牛馬糞あくた枯草などおほひ培ひ置にて、別の手入さのみ入らずして過分の利を得て、穀の不足を助け、上もなき物なり

一　蠶豆は飢饉の年に多く植て飢を助くべし、麥よりも早く出來て又手入肥しも掛らず、壹反に五六石もある物なり、又曰、三反に六石より八九石もあるべしといへり

一　薩摩芋は壹反に四五拾石もありといへり、作り樣農業全書及び功能書にあり、種子の取置樣を能覺へたらば、何方にても出來ぬべし、其内寒氣を嫌ふ物をみへたれば、南向の海邊は何方も然るべし、西瓜は昔日本になし、寛永の末初めて其種子來りて、其後諸州に廣まり、南瓜西瓜よりは早く日本に來れども、京都へ種る事は寛文の頃より始るよし、今は何國にも多くうへてもてはやすなれば、薩摩芋何ぞ廣まらざる事あるべき樣なし、作り覺へたらば農家の助けのみならず、國土の重寶なり、心を

盡しみるべし

一　二月芥菜をうへて葉をかき食し、五月諸菜皆枯たる時も、是はよくさかへて菜の絶間を助るゆへ、人數多き家は取分け、是と非とを多く作るべし

一　莙蓬(トウチサ)四季絶ずあるゆへ、不斷草と云、菜の絶間にもあるゆへ作るべし

一　三草（麻藍紅花）　四木（桑漆茶楮）は農家の貴種、其國に無き品は求め、作り覺へて增す樣にすべし

一　麻壹反　上拾貳貫目餘内　中八貫目餘内　下五貫目餘内

江州にては寒明て三十三日目に蒔、土用三日前に苅、種に殘すは所々に殘し置、花咲は實のらざる物なり、是故に白き花咲は切り捨るなり

麻は枝葉なきをよしとす、木綿は枝玉多きをよしとす、葉枯落るよしといへり

一　藍紅花は少しづゝは諸國に作れ共、專ら多く出て土產とするは、藍は阿波、紅花は出羽をよしとす、其品を能作りて所の產ともせんには、とくと其功者を、求めて種子選みよりして、始終の位立を習ひ熟して作るべし

又曰、紅花を先年は上總にて作り替るに、能出來て上方へ賣けるに、もとより〆目にて賣買しけり、一年紅花を入し桶の下へ砂を入て賣けるを、上方のもの知ずして買ければ、殘らず腐りて用にたゝ

ず、大分の損せしを上方のもの腹にすへかねて、又來年は大分買調ふべきと申越けるゆへ、たゞ集めて又例のごとく砂を入置きけるに、去年の紅花皆捨りし事をいひて買ざれば、多くの支度空くなりて、作人も賣手も損しけり、夫よりして上總にて、紅花を作る事をやめたりといへり、農の心へにも成べき事なり

一 木綿は三草の外なれ共、今は民間一日も缺くべからざる寶也、古は唐にもなかりしを、近古宋朝の時分南蠻より種子を取來りて、後もろこしにひろまり、本朝にも百年以前、其種子を傳へ來りて廣まれり、元二種あり、一種は木にて、是は異國はもとよりあり來りしよし、本朝へ往古（桓武天皇延暦十八年）綿の種異國より渡り、諸國へ詔して植しめ給ふ事あり、其種は今の綿の種なるや、何れにしても其種は廣まらざりしと見へたり（事は類聚國史に詳なるよし、又新撰六帖といふ書に、衣笠内大臣家良公綿と云題の歌に、敷島や大和にはあらぬ唐人のうへけんわたの種は絶にき、とあれば六帖の時代にはすでに又絶たりとみへたりと、或書にあり）木綿の種分量一反の畑に、凡貳〆匁壹〆五百匁にても地の肥瘠と、きり蟲の考へして難もなく肥ざる地ならば、さのみ多くは蒔べからず、木綿の類風を入、夏作をば國により方角に隨ひ、切々風吹方へ畔を立てよし

木綿		
上々七拾貫目	中五拾貫目	下々貳拾貫目
上六拾貫目	下三拾貫目	下々下拾貫目

右は五畿內の積り、關東北國筋は

上々五拾貫目　上四拾貫目

中三拾貫目　下拾五貫目

一　桑三月三日晴れば、桑よくさかゆる物なり、此日若し雨ふれば、桑の葉價ひ高く綿も高し

一　柘榴の木を多く植置て、若葉を蠶に飼へば、桑と同じく糸を生ず、此糸は琴の糸にして其音清く響きて、常の糸よりは甚勝れり、されども糸はすぐれて是を蠶に飼むとならば、前年葉を殘らず切はらひ去べし、其まゝ置は春の若葉も毒ありて、蠶に害あり、畑の廻りに桑を植て蠶を飼、壹反の畑廻りの桑拾四五束ある時は、綿壹疋半程出來る、拾八九束ある時は、綿貳疋も取るなり

武州青梅邊にて蠶を飼ふに、糸の積り能きまゆなれば、百匁にて貳拾四五匁あり、つぶれたるまゆは百匁にて拾壹貳匁あり、種跡にては百匁にて六拾匁ほどあるといへり

一　能漆の木五本植て持たる物は、老人夫婦の糧は必ある物と云なり

國々の內に漆木はなくて、漆實代などゝて小物成永を納むる所あり、是は定めて昔はあれども、いつとなく絕たるもあらん、又漆の實を納め、又生漆を納めなどして、百姓是を難儀に思ひて、段々枯次第にして絕たるもあらん、ヶ樣又漆の實を納め、又生漆を納めなどして、百姓是を難儀に思ひて段々枯次第にして絕たるもあらん、ヶ樣の所はすゝめて植たき物なり

一　茶園の地樹下北陰に宜しとて日當を好まず、土地の性よく黒土赤土にても粘氣も少ありて、石交りのさのみ深からずして、堅きに糞しを用ゆるが風味よき物なり、底の堅きを好む事は、立根ふかくは入ずして脇根多し、さかゆれば枝葉も上には延ずして、脇へよく榮へ葉茂く付物なり、其ゆへに園地の底の和らかなるには、底に石瓦を敷て其上に肥土を多く入るなり、茶園に成べき土地は普く多き物なれども、勝れたるは稀なり、山城三園の土地何も赤土の石地にて風霜烈しき陰地なり

惣じて茶は少しきかたさがりの地に宜し、然るゆへに陰地をば好むといへども、水濕のもれ安き所能と知べし、田の園は取分よしといへども、水濕もれずして滞る所にては枯るゝ物なり、凡都市の中田家山中共に少も園地となる所あらば、必多少によらず茶を種べし、左なくして妄りに茶に錢を費すは愚成事なり、一度植置て幾年を經ても枯失る物にあらず、もし又山野もなき里ならば、本田畑に茶を植ても、家々に茶を買ぬ手立をなすべし、是只一時の心遣を以て、子々孫々迄茶に財を費さぬ謀事也、茶を植立る事は僅の手間にて成べし、多葉粉茶は他所より買求めずして、手作にて濟様に有度物也

一　茶一本と云六ヶ目也、一斤は二百五拾匁なり、大抵の茶園一反に三十本ある事是中分なり

一　多葉粉一反收納

上多葉粉　上百五拾斤程　下百斤程

上貳百斤程
下多葉粉　中百五拾斤程
下百斤程

一　楮は南向の深く肥たる赤土に宜、但少さがして濕氣の洩やすき所を好みて、風烈しき高山などはあしゝ、楮は其用多く殊にうゆる土地も多くある物なり、或は五穀は曾て作られざる山野の嶮しくそばだちて、牛馬のすきかきもならざる岩のはざまの石多く、他の物を作るべき様なき所も、楮に相應の地必ある物也、心を付て選みうゆべし、されども高山北向の風烈しき所にはうゆべからず、假令肥良の土地にても風の強くあたる所に甚よからぬ物なり、中國邊に楮の利多き事を國々に聞傳へ、委しく其術をまなばず、能其地味を辨へずして、妄りにひろく楮を種て多くの人民を苦しめ、莫大の財を費せし所多しとかや、是皆大事を作すに能其始を謀らざるゆへ、其終に失多き事限りなし、却てかゝる類ひは尤其始を謀るに心を可レ用ものなり、地厚く肥て柔らかに、底ゆるやかにして潤ひはありて濕のもれやすく木立のびやかに、くさ木むくげなどの楮に似たる類の木、よく榮ゆる地は必楮に宜しと知べし

又曰、楮も人氣によるにや、深山高山などには、いか程肥たる地にても生立ず、人の手風に觸ざれば盛長せず、それ／＼類を以て見分、おし計て知る事肝要なり

一　何れの朽木にも蕈（キノコ）は生る物なれ共、木の性によりて毒なり（六七年以前武州村山の氷川と云所の氣にて、寺門の山にて、しめじに似たる木の子を取り來りしが、茄子を入て煮て食すれば當らずといひて、多く茄子を取込て煮て食す、折ふし住僧外より歸りけるに、何をば煮て食すると問、しか〳〵との事をいひければ、我も食してんとて食す、木挽も居たりしが是も食す、食し終りて何れも腹痛みけるに住僧は金袋圓を服せるが、忽吐して正氣を失ふ、木挽は反魂丹を服せしに是も吐して終す、是より殘らず絶す、然る所へ名主行合せ、此體をみて急に醫師を呼よせて、色々と藥を呑せけるに、住僧と木挽と共貳人助かりて、外五人は何れも死たり、毒ある木の子は茄子を入ても毒消ず、撰なく妄りに食する事なかるべし、寺號は慶正院とやらん、禪宗のよし聞けり）丘木と椎榲は毒なし、丘木は桑、槐、榆、柳、楮なり、此外榎木に生ずるは常に用ゆ、毒なし

一　吉野にて能樵の木拾本餘も持ぬれば、一かど渡世の助となる事なり

一　柑橘（ミカンノルイ）は細軟沙の地に宜し、南方暖成所を好み、肥地ならではよくさかへぬ物なり、取分け海邊の日向よき沙地によし、又橘の類は下枝に多くなる物なり、下枝を少も切べからず
柑類は寒氣をおそるゝゆへ、山家其外寒氣強き所にては、何程ふせぐ用意しても枯るゝ物なり、依て北國にはなし、又山中赤土其外かたきやせ地などにてはそだゝず、種べからず

一　田畦には榛（ハリノキ）、榎、椚（クヌギ）を植べし、漆、楜（クルミ）、槻の類は惡し、木の下やけて作物不出來する物なり、間

のしきりには桃の木よし、實ばへより三年目には五寸廻り程には成るを、根三寸程置て切れば若ばへ多く出る、五寸置にうへ壹本置に隔年に伐べし、桃の木老木なれば悪し、平地には林にしてよし、其時は畔を立植べし、又くぬぎの木を植て林三ッ割にして、三年に壹ッ割づゝ伐ば毎年伐て間斷なし、松杉の類は伐と根を掘て若木を植べし、水付或は日影陰地の所には柳の木を植てよし、國により土地にもよるべし、高柳、杉柳、河柳、丸葉柳、疣柳、箸柳、熊野柳、しだれ柳其類多し、其内高柳杉柳よし、さし木に成なり、土の古きはつかず、土手を築き新敷してさすべし、熊野柳は鞭になる

一 井の端には桐の木を植べし、植て三年の間は土際壹寸程置て十月伐べし、三年過て立るなり、女子生れたる年植置は、婚姻の時分には長持になると云傳へり、芽の所をそぎさし植置ば、根出でそだつといへり

一 下の水近き所は木盛長せず、二尺計下は水ある所あり、三尺五尺迄の木漸實れども、夫より木長じて其根水に入れば實る事なし、此地は別て才覺なし、但年來の宅にて庭も園も廣くば、其人の力により地形をあくる外の術なし、重く愛する木ならば土を寄せ、貳尺も三尺も高く其邊には漸々と土を置べし

又曰、樹を移しうゆる事は、但菓實のなる物は上十五日よし、下十五日は實少し

又曰、木を移しかゆる事は下十五日をよしとす、上十五日には木の生氣悉く枝葉にあるゆへ、移せば

性を傷り、接ば則氣を失ひ、又伐ば潤ひの氣中にみちて、久しくおきて蟲を生ず、潮のさかひなる時を忌と心得べし、かれ潮の時は生氣根にあるゆへに、よく活る物也、接木も同じ、但菓木は下十五日は實すくなし、如レ此古書にも、說の多けれとも、只是まじなひの類にて正說にはあらず、偏に掘樣種やうに心を盡し念を入ぬれば、小木などは夏の土用に移しても痛む事なし

一 林手入疎かなる時は空地多く出來て費ゆ、古きを株などを掘取跡をならし、何木にても土地相應成を植べし、其儘捨置ば水氣を引によつて、木そだちかぬる物也、雪折風折の木をば早く伐、其跡へ若木をうへべし、ふせなへして植てはそだち遲し、種にて直に植べし、ふせなへと種植とためしみるに、ふせ苗五年に三尺そだつなれば、直植は八尺もそだつ各別の違ひなり（或農を此事を尋しに、實植の能きは桐などはよし外の木は苗植よしといへり）松杉諸木ども老木の種よし、早く大木にて成といへり、松と竹は六月に植てよし、諸木の實は二月暖國なれば芽植もよし

又曰、其村普請ある所なれば其普請に入用の品を植べし

又曰、新林仕立つるには、其所の土地相應の木を植れば早く役に立なり、眞土には楠、槻、つきの木、かしの木などの苗よし、杉などは眞土の所にては、木にねたみ付實入過てそだちかぬるといへり、本より雜木山に仕たるもよし

又曰、林に仕立る所原ならば植たるがよし、松杉は三尺四尺づゝも間をあらけて植べし、一度には何

としても植こまれぬ物なり、假令一度に植立ても或は枯れ、或は人の手足にさわり動き、又猪鹿に荒されて少き内に消安し、毎年植には植込たるよし、最早五六年も立てばそだつなり、其節は間を壹本づゝ掘と別地へ植たるがよし

又曰、薪の爲の林ならば雜木を仕立たるよし、榎、こなら、くぬぎなど取まぜてうへてよし、雜木林落葉むざとかゝぬよし、ひたとかけは實木そだちおそく、落葉肥しに成、實木もそだち木の實おちておのづからはへ、木の葉朽て肥しと成、木に太に付物なり、栗の木も交て植たるがよし、然れども栗は栗の木計うへたるよし、栗の實を取百姓の助けに成事有、野土の所に栗の木を植れば、餘程そだちて必枯るゝ事あり、所によるといへども關東にては、大方栗の木は餘ほどそだちて、年ふれば朽る事多し、栗の木の苗を仕立置て、朽木をば伐、ひたと植つきたるがよしといへり、栗林は實を取て餘程百姓の介けに成る所あり

又曰、松の木林は松計うへたるがよし、杉の木林も杉計植てよし、假初ながら大分の事なり

又曰、諸木植立つるには柴間の野原よりは一毛作りたるがよし、先は右の通にしてよけれどもうないかへして植てもよし

又曰、石原にて土少しもなくとも、土を少づゝ置、松を植るもつく物なり、是又心付たるがよし

又曰、百姓の四壁はいふに及ばず、堰溝の淵にも何にても木を植てよし、就中柿の木など植たるがよ

し、惣て木蔭にならざる所の明地には、澁柹にてもこねりにても植たるがよし、假令〳〵に百姓の爲也、蜜柑、きんかん、ぶどうなどは所を嫌ふゆへ仕立る事ならず、栗、柹、桃、梨などは心付て能くすれば、仕立られずと云事なし

又曰、松杉惣て木の枝妄りにおろせば木ふとらず、枝をおろす事なかれ、そだちかぬる様なれども、實木ふとく成かぬる、是により百姓山に當時たい木に成事なしといへり、百姓山は枝をおろす事茂きゆへなり

一　松は峰に宜し、杉は谷によし

松は地をきらはず能生長し、大小材木に用ひて、世の介けとなる良木なり、海濱又は田畑のさはりとならぬ所には、いか程も多く植べし、鹽を燒薪に松の枝葉にこゆる物なし、され共田畑の邊りにて強てうゆる事なかれ、落葉田畑に入り松の雫かゝれば、土地忽瘠せる物なり、殊に水少き山などに松を植立れば、水を吹上げ土地かわき、水あしよはく次第に瘠地となるべし、田に水を取山にて水多からぬ所ならば、必松を植べからず、松を仕立るならば、先木苗を支度して仕立たるがよし、其木苗によりてふせやう有り、木苗をふせて三年めにかたす（やとうとも云）とて、脇へうつしなほすなり、油斷なく幾所にも木苗を植べし

松の枝おろすならば、實木の際よりおろしてよし、杉は本支を一寸許りおきておろしてよし、其殘り

一寸を實木の際より皮をむきて置ば、入節に成木ぶり能成る物なり、木毎に左様になり、左れどもヶ様の事も心得べし

一　杉も良木なり、海川近き山谷の肥地ある所には、いかほども多くうへおくべし、たる木棹小柱などに成事、數年を待ぬ物なれば、雜木ありとも除き去て、專是等の木をうゆべし

又曰、杉は水に入雨にぬれ土に入てくさらず、椊梻とすべし、且又大工の手間まで無造作なり、屋敷廻りのふせぎより、山林は云に及ず餘地を殘さずうへおくべし、國のたから又上もなき物なり

又曰、多葉粉葉のしをしてのし上、たばねて杉の櫃に入れ氣のもれざる様にかこひ置ば、何年過ても損ずる事なし

一　杉も良木なり

又曰、杉は野土の所よし、杉に熊野とて竹のごとくにそだつ杉あり、其杉を植べし、松も野土によし

一　榿(ハン)の木實をうゆれば早く盛長し、三年にしては薪と成といへり

一　榿上方筋の田の畔に植て、秋收納の節稻を掛けて干す益有、水付に長くたゆる木なり、薪によし、皮は煎じ出しめうばんを入、染物に用る茜染のごとし

一　橿山は水持よし、實を取置て飢饉の年、食物となして世を助る(實は布袋に入れ、川にてさらし、澁を取るべし)

一　櫻木花を賞し材を用ゆ、多くうへて國用を助る良木也

一 椶櫚の皮を繩となし、水に入て千歳腐らぬ物といへり、されば又船の大綱にして無類の物なり、唐船の綱は皆しゆろなりと云、其外牛馬の綱にし釣瓶繩にして、久しく朽る事なし、わらおに作りて破るゝ事なし、土泥もつかず軍陣のわらじには必是を用ゆべし

又曰、船の綱にして此大綱一筋にても、大風の時苧綱十倍の役に立べしといへり

一 人里遠き奥山に雜木多くして、古今用をなさゞる所多しとみへたり、此等の山中改めて運送の造作まけせぬ、良木をうへまほしき事なり

又曰、高山の風烈敷所にても、仕立て成らずと云事あらじ、峯の風はげしき所には、ならの木くぬぎを植、間に松を植べし、下草を刈らずして置ば、風空を吹ゆへ木そだつ、又一枚岩にて草木の根付かたき所をば、鶴の嘴げんのうなどにて、岩に貳尺四方程に穴を掘、その中へ黍と土とをもみまぜ、小杉を植夜々水を入根付置ば、根岩を通して能林に成べし

一 萱野も所々に有は大き成調法なり、柴原をも草をからず、冬許に刈れば萱野に成物なり、明地有所にては萱野仕立たるよし、林の下草に萱野は成かねる物なり、所々に木有分にては萱も有物なれども、上木ひしとそだてば、萱野なくなる物なり

一 異國には竹の種子六十一種あり、其中に舟に作る物あり、龍公竹とて徑七尺長壹丈貳尺の物もあり、又は高さ一尺にもたらぬ細竹も有、又四角なる竹ありといへり、ケ樣成事は差置、先有來二三種

の竹、何れも民間の重寶なり、竹藪を仕立つるは木よりはやく用に立、普請等萬に多く入る事なれば隨分仕立たるがよし

竹をうゆる地は高くして平かなる所、山の林下谷川近き所の、黄白軟の地に宜しとて、尤肥て性よし、沙がち成る和らかなる地、濕氣もれやすきを好むと知べし

竹を栽に、諺に竹を植るに時なし、雨を得て十分生といへり、又竹を栽には五月十三日、是を竹酔日とも竹迷日とも云て、此日竹をうゆれば百活うたがひなく、即さかゆる物なり、又必五月に限らず毎月廿日竹をうへて、皆活共いへり、又一日二日三月三日是も又よく活る物なり、又辰の日は毎月うゆべしともいへり、いづれも根の土を厚く廣く掘取、一科を數人にて掛など、大かぶにしてうゆれば盛長せざる事なし

又曰、竹は二年を植べし、三年の竹には稀に筝を生ずるあれども必細し、四年竹には決定笋なし、藪は下草茂せしめざるよし、笋出やみ皮を落したる時、其本に墨にて一文字を引置べし、毎年墨引をいたし置ば三年めには三筋有、此三文字ある竹を年中に切盡べし、右の伐口を四ッに打割置べし、早朽てよし、朽ざれば根がらみ地土堅く成るゆへに、笋出生せず、藪傷しぬる時は蟲付、或は朽枯るゝなり、地堅き時は竹子すくなし、自然子付て枯るゝ事あり、其時は藪の眞中ほどの竹を五尺計の高さに切、細き竹にて節をつきぬき糞をつぎ入置べし、自然子たゆるといへり、地土堅うして笋すくなき時

は、藪半分を伐起せば、先薪を得る事益あり、其跡へ芋を植れば實る事常の畑に十倍せり、二年目にも又芋を仕付置き、竹の子出るを取らずして置ば、三年目には笋も太く數出る事常に十倍せり
笋を仕立るには母竹に、其年の若竹うらを伐て植たるよし、はやく笋出來藪に成事はやし、母竹は中より伐たるよしといへども悪敷なり、母竹はうらを伐たるよし、末を切ればかれぬなり、中より伐れば多く枯るゝ事あり、竹を伐に三を留、四を去と云事あり、竹は七八年も過れば花を生じ立枯する物なり、三年竹をば殘し留めて、四年に成を伐べし、是竹林を生立る定法肝要の事なり、四年にならざるは必伐べからず、跡の竹甚いたみて、太き竹林も小さくなる物なり

一　から竹藪三年竹をば伐り、若竹を殘置、油斷なくそうやくすれば、はやく大竹藪に成る事なり、大竹藪もむざと伐ば、細きから竹になるなり、から竹藪は成ほど掃除してよしとなり、内竹藪は落葉又ごみあればこやしに成、笋早く心よく出ることとなり

一　紫竹葉竹も植てよし、紫竹は日照に枯れ安しとなり、葉竹はぢねん子付安しとなり

一　總て內竹藪に自然つかば、其ぢねん子付らる、竹のあたり掘廻して其根を掘捨てみたるがよしといへり、それにても自然子付ば藪を掘すて、別の竹を植たるよしとなり、ぢねんごは竹の疾にて根朽ぢねんごと成、とかく自然この付たる藪は絶るなり、はやく自然こ付たる竹を掘捨、別の竹をうへ能藪仕立るよし

凡田畑作物に蟲の付事は、前年冬雪降らずあたゝかなるか、又其夏永しけか、土用中冷し過る年蟲付といへり、諸作物のたね冬の雪水を溜置て、種をおろす時に浸して蒔ば、蟲付かずと云

一　大根に蟲付たる時、苦參を多くたゝき水にいせ、かき灰を少合せてしへ箒にて日中にうつべし、必蟲死るものなり、又西國にてよしみ柴とも小林とも云、三月白き花さく柴有、上方にてはあせほの木と云なり、此柴をせんじてうつべし、又此柴をせんじ牛馬などに虱の付たるを洗ひても極て妙なり、又人の手にしやくろと云瘡を生ず、此柴を煎じあらへば虫死し、瘡癒る物なり

一　牛房虫付は取去るべし、朝露か灰をふるひかけたるも虫のく物なり

一　藍の虫を殺す事、たばこの莖を煎じ出し、其汁をしへ箒にて、ひたとうちひたせば虫死る物なり、毎日如此して虫悉く死し盡るを以てやむべし、又苦參の根をたゝき碎き水に出しうちたるも、虫よく死る物なり

一　たばこの虫を殺すは、抹香を捻りかくれば虫死ぬる物なり、又せんだんの葉を干し粉にして捻るも、虫よく死る物なり、又苦參をたゝき水にいせ、かき灰をたてゝして箒にへ箒にうちたるは、虫よく死るなり

一　瓜の蠅を追はらふ事は、箒又手板を以てうち拂ひうち殺し、又は鳥もちにて付て取もよし、つばなの穗を多くたばね、是にてはらへば取付て、飛去事ならざるを殺すもよし、又葉に虫の付事あり、

朝露に灰を多く用ひて片手にて瓜つるを上げ、かた手にて灰をふりかくべし、畔中に灰をふれば瓜の
糞にも成べし

一　蜜柑の木に虫付事あらば、掘うがち針がねにてさし殺すべし、又硫黄を粉にして穴に入れ、艾に
もみまぜ虫をふすべ殺すもよし、又硫黄と土と合せて穴をふさぐもよし、又杉を針に削り虫の穴に打
込たるも、虫死る物なり

一　楊梅の木に病を生じたる時、甘竹を釘にしてひたと打べし、病其まゝのく物なり

一　樹木を虫の喰には、硫黄雄黄二色を粉にして、艾にもみ合せふすぬれば、虫皆死る物なり、又硫
黄と河の底の泥と合せて、虫喰の穴をふさぎ、直に木にぷるも虫能死るなり

一　柳の下に蒜を一粒づゝさし入置ば、虫の生ずる事なし、又極月廿四日に柳を栽れば、虫の生ずる
事なし

又曰、樹木元日の暁、太き松明をともし菓木の下を照せば、虫の災なしといへり、又三月の節に入暁
も此のごとくしてよし

一　凡飢饉年の兆をば智有人は、夏の中にもはや見及ぶべし、尤七月八月初には慥にみゆる物なり、
農民の食物を倹約せしむべし、扨蕪菁を多く種さすべし、又蕎麦をも多く種べし
麦より少し早く出來ぬれば、麦に取つく時に助と成べし、飢饉年食物に成るべきもの、蓮根、くわい、

ところ、わらび、狗脊、茄子、菜、ふき、海草の類は、常にも食する事なれば知たる事なり
うるい　おせうろ（野方にあり本名は何と云や）　山牛房　はこべ　夏枯草　金錢花　蕎麥苗　黃豆苗　豇豆苗　百合
麥門冬　苧根　菖蒲　老鴉蒜　山蘿蔔　車輪菜　地蔘　雀麥　燕麥　黃精苗　蒲筍　蘆筍　茅芽根
瓜樓根　菊花　金銀花　菱筍　木槿樹　白楊樹　橡子樹　かしの實　とちの實　栯樹　皂莢樹
楮桃樹　柘樹　槐樹芽　楡錢樹

右の類食物に成といへり、食として不レ苦と云事を知ざれば、難レ用故記す、此外品々有、委敷事は救荒本草と云書あり、是をみるべし、又出羽の國最上にて大概の百姓よりしては、味噌を相應に仕入貯へて、三年程の方を仕入置せんぐりに遣ふなり、其譯を聞しに往古飢饉有し時、春の頃如何樣の草木の葉にても味噌を以、煎て食すれば、腹中にあたらず、其上味噌は久敷成程色こき故、遣ひでもありて平日共に勝手になるとて、今以その風儀殘れるなり、扨海草のうちにもあらめは、何年も閉ひ置て損ぜぬ物にて、飢饉の年飢を助く、多く貯置て凶年に備ふべし、又とちの實餅にして食す、椎の實多收め置ては飢饉を助く、此外橡子榲の實多く貯置て救ふべし、籾を貯へる事最上の物なり、知たる事ゆへ略レ之

一　平糴の法と云も、常平倉の法と云ふも、俗に云御買上米の事なり、年に豐凶ありて豐年には穀物下直にして、凶年には高直なり、甚高直なれば工商を傷ひ、甚下直なれば農を傷ひ國貧し、是によりて

大に熟する事は何ほどを買上、中熟とは何ほど、下直には何ほど、割合を定置て籾を買上、凶年に至ては小の凶年には、下熟の買上を賣與へ、中の凶年には中熟の買上を賣與へ、大凶年には大熟の買上を賣與へといへり、是も法は至極の事なれども、年の上中下を分かたず、妄りに割付て買上、又買上のみにて段々つめ替る事をせざれば、終に費に成事あり

一　義倉法と云は、毎年の秋百姓の手前〲、其貧富によりて米麥を出させて、其村里の氏神の地に倉を建、右の籾を詰置、其差配をば社司（但神主には限るべからず、名主にても頭立もの可レ然）にさせて、凶年の備へと成しむ、是を名付て義倉と云ふなり

一　朱子社倉法と云は、百姓の内組を立置て、其組へ元米を與へ置て、世話役頭取を定、春より夏に至る迄、食のとぼしき時組合の借り度ものには利を付て貸し、春貸して秋取立る事なり、如レ此年をへて其年に元利共に多く出せしものには、利を取らずして、缺米計りを取りて貸すなり、扨凶年なれば其組中、是にて飢を助かるなり

一　宋の世に王荊公と云ふ人、青苗の法と云事を始む、是は甚惡敷事にて、後に天下中の迷惑に成しとてそしれども、其法の惡敷にはあらず、取行ひの惡敷ゆへ、よき事も却て惡敷なり、此法は青田を質に取て金錢を貸して、秋元利共に取立る事なり、所によりて百姓殊の外便利なるもあり、借り度ものの計へ借して、不レ好ものへは貸ざればよけれども、後にはおしなべて高役のやうに割付て、いやがる

物へも貸ゆへに及ぶ難儀なり、前公も最初一鄕一村にて事をなせしに、殊の外便利なりける故、一天下へ推してなせしゆへ、然相違して諸民の歎きとなれり、毎初はとかく其致し方によりて、能事も惡敷害になるなり

一 差役雇役と云事あり、差役とは村々より人夫を出し、役を勤むると云、雇役とは人夫を出す替りに錢を出す、此錢を以て地頭にて人夫を雇ひ遣ふ事を云、是も百姓外の稼なき所などは、錢を出す事迷惑するゆへ、人夫を取遣ふて百姓も勤よく、又外の稼のある所の百姓は、錢を出して其役を勤る事勝手に成るなり、ヶ樣の事其所〱にて違ふなれば、一概に論ずべからず、又百姓へ貸米などを渡すにも、幾の石數に逗留し、數日の隙を費す事も有、是等は結句渡さぬよりは劣る事なり、心得あるべし、凡べて經濟に拘りたる事は品多し、記すに暇あらず、能々知れる人に尋問て知るべし

右平糴常平倉以下の事は、名目計を擧記す、其詳かなる事は名歷代の史書にみへたり、令たり吏たるもの、其書を尋みる事は暇あるまじければ、此名目を以て知れる人に、其委細を尋問て置べき事なり

縣令須知卷之四 大尾

大學養老篇

入江南冥著

大學養老篇序

先王敎民孝弟、其方不一、而足養老其大者乎、所謂天子袒而割牲、執醬而饋、執爵而酳、冕而摠干此、乃子事父之道也、夫敎自上而下者也、孝弟者、德之本也、先王豈不躬行孝弟哉、以行區々內行未足以示天下、故以天子之尊、而父事三老、兄事五更、於是天下之人不待號令、而知敬事父兄、此謂不言之敎、敎之至也、孝經曰、陳之以德義、而民興行、此之謂也、三代明王、皆嘗擧行是禮、周衰乃廢、自戰國秦漢之際、不暇及此、漢之隆盛、經術之士、有建議者、而上不果行之、迨乎明帝時、乃果行之、上親臨辟雍、養三老五更云、豈不善哉、雖然是擧也、曠世一開、後無復繼者、非以世衰國家多故、君臣不志於禮樂之治乎、夫自禮樂不興、而後之敎者、務以言語喩人、則不復知先王有不言之敎、讀書者、亦不知所謂養老爲何事、吾友子園懲焉、因著一篇、將以示初學之士、故書以國字、欲使夫不知養老爲何事者、因是以了其義、此其意不亦善乎、養老之禮雖不行、然一見此篇、而知先王隆高年之意、則其益不小、在上知此、則不言之敎亦可興矣、子園來求序、余因贊之云爾

寬保三年癸亥春三月戊寅　　信陽　太宰純

大學養老篇

東都　入江忠囿　著

養老大義

夫養老ノ禮ハ上古ノ至敎ナリ、其昉メ虞舜ヨリ起レリ、「孟子曰、堯舜之道孝弟而已矣、」凡ソ天下國家ノ先務、孝弟ヨリ上ナルハナシ、是人々明カニ聞知スルコトナレドモ、澆季ノ風俗ニ引カレ、孝弟ノ敎ヲ迂濶トナシ、目前ノ功利ヲ事トシ、才智ヲ專ラトシテ、篤實ヲ疎ンジ、孝弟ヲ行フ人鮮ク、又孝弟ノ敎ニ風靡スル代モナシ、西漢以來孝弟醇厚ノ人ヲ擧ル令アレドモ、命令ノミニテ、孝弟ノ實上ニ行ハレザレバ、風化ノ益ナシ、是何ノ故ナレバ、上古ノ政敎ヲ曉サザルニ由ルナリ、孝弟ヲ以テ天下ヲ風化スルニ術アリ、是ヲ以テ上古ノ聖人養老ノ禮ヲ興シ、大學校ニ於テ是ヲ行ヒ天下ニ示シ、天子ノ尊ヲ以テ賤キ老者ニ事ヘ、國人ニ遍ク縱觀セシム、國人コレニ風化シ、自ラ孝弟ノ道ヲ辨ヘ知ルナレバ、養老ハ敎化ノ要道ナルコト明白ナリ、凡年五十ヨリ養老ノ禮ニアヅカル、シカモ七十以上ハ養

ヒ重シ、故ニ大學校ニ於テ養ヲウクル也、大學校ノ所在殷周制ヲ異ニス、殷ノ大學ハ郊ニアリ、周ノ大學ハ國ニアリ、天子ニ辟雍ト云ヒ、諸侯ニ頖宮ト云フハ、大學校ノ稱ニテ周ノ制也、其義下文ニ具ス、サテ虞庠ハ舜ノ學校ニテ、大舜ハ孝ヲ專ラニシ給フナレバ、周ノ代ニ至テ特ニコレヲ尊ビ、四代ノ學校ヲ立ト云ヘドモ、虞庠ハ別シテ四郊ニ建ツ、「祭義曰、天子設二四學一、當レ入レ學而大子齒、」齒ストハ、大子ノ尊ヲ以テ庶人ト列シ老者ヲ尊ブ、徂徠先生ノ説ニ、小學ハ大子ノ學校ト云ヘルモ、蓋此義也、如レ是老ヲ尊ビ齒ヲ上トシ、養老禮敎ノ一ツニテ、萬民ノ敎トナリ、老テ困窮スル人ヲ憫ミ、强キモノ弱キヲ犯サズ、衆人ヲタモツ、勢ニ任セテ寡小ノ者ヲ暴虐ニセズ、和順ノ風俗トナルハ、大學校養老ノ效ヨリ行レ來ルコト也、故ニ徂徠先生ノ説ニ、大學ノ書ニ、「在レ明二明德一、在レ親レ民」トハ、養老ノ義ナリト云ヘリ、其説辨名ニ具ニ見ヘタリ、尊老ノ道ハ、甚ダ行ヒヤスキコト也、「孟子曰、徐行後二長者一、謂二之弟一、疾行先二長者一、謂二之不弟一、夫徐行者、豈人所レ不レ能哉、所レ不レ爲也」ト云ヘリ、僅ニ人ニ先ツト後ルヽトニテ、弟ト不弟ノ道ワカルヽナレバ、枝ヲ折ルヨリモ易キコトナルニ、一人モ行フモノナク、却テ老耄ナリト慢リ、老者ヲ小兒同前ニ待スル人多シ、古ハ天子百年ノ者ヲ問テ是ヲ憫ミ、又タ大夫ノ老人ヲバ字ヲ以テ稱スルコト、春秋ノ傳ニモコレアリ、如レ是風俗淳厚ナル故、人々自ラ老ヲ尊ブコトヲ知ル、今ハ敝風ニ引レ、孝心アルモノモ、世上ニ憚ジテ行フユヘ、踏切テ特操ヲ立テ行フ人ナキヤウニナリユク事ナリ、其敝風ヲ救フニハ、君タル人養老ノ禮ニ本トヅキテ、老ヲ尊ブノ義ヲ興スニアリ、是養老ノ

要道ナルコトヲ知ルベシ、因テ先王養老ノ禮ハ敎ノ本ナリ、他ハ萬行アリトイヘドモ、コノ道タヽザレバ、源ナキ水ノ如シ、秦漢以來聖代ノ風ナキハ、全ク養老ノ政敎闕グルガ故也、是養老ノ大義ナリ

學校說

古ヘノ學宮庠序校塾ノ別アリ、然ニ大學校其宗タリ、故ニコヽニ大小學校ノ義ヲ述ブ、大、舊晉泰ナリ、ソノヽチ程子朱子ニ至リテ、初メテ讀デ大小ノ大トシ給ヒ、大人小人ノ學問カハリアルユヘ、大學小學トワカチタル說オコレリ、師說云、此說ノ起リハ、劉ガ音直帶ノ反、聖人ノ學問ヲ博大ニストテ云ニ本ヅク、迂遠ニシテ通ジガタシ、大學ハ天子ヨリ諸侯ノ國都ニ至ルマデ、學校ヲ設ケ民ヲ敎ルナレバ、學校ヲ稱スル名ナリ、大ハ舊音ノ如ク泰ニテ、大宰、大司徒ナドノ大ト同ジ、大イナル學校ト云フ事ニテ稱スル言バナリ、小學ノ小モ、小宰小司徒ノ小ニテ音少、少訓㆑幼、幼少ノ人ノ學校ト云コトナリ、愚謂ク大學ノ義ヲ知ントナラバ、先ヅ學校ノワケヲ詳ニ得心スベキコトナリ、因テコヽニ其要ヲ述ブ、師說ニ云フ學宮ニ大小ノ名アルハ、庠序校塾ノヤウナル別名ニアラズ、「學記曰、家有㆑塾、黨有㆑庠、術有㆑序、國有㆑學」、「王制曰、小學在㆓公宮南之左㆒大學在㆑郊、」此ニ知ル塾ト庠序ト皆學校ノ名ニシテ、塾ハ自ラ塾、庠ハ自ラ庠、序ハ自ラ序、小學ハ別ニ小學、大學ハ別ハ大學、各自ニ相別レタル名ニシテ、混雜スベカラズ、小學ハ公宮ニ近シ、故ニ漢ノ時、賈誼モ專ラ世子ノ學校ト云フナレバ、閭巷ノ人ヲ敎ル所ニ

アラズト云々、愚按ズルニ、賈誼傳ニ云、「及ニ太子少長知ニ妃色一、（師古曰、妃色、妃匹之色、）則入ニ于學一、學者所レ學之宮也（師古曰、宮官舍、）學禮曰、帝入ニ東學一、上レ親而貴レ仁、則親疎有レ序、而恩相及矣、帝入ニ南學一、上レ齒而貴レ信、則長幼有レ差、而民不レ誣矣、帝入ニ西學一、上レ賢而貴レ德、則聖智在レ位、而功不レ遺矣、帝入ニ北學一、上レ貴而尊レ爵、則貴賤有レ等、而下不レ踰矣、帝入ニ大學一、承レ師問レ道、退習而考ニ於太傅一、太傅罰ニ其不一レ則、而匡ニ其不一レ及、則德智長而治道得矣、此五學者、既成ニ於上一、則百姓黎民化ニ輯於下一矣云々、」コレマタ太子ノ學校、公宮ニ近キコト知ヌベシ、愚因テ王制ヲ按ズルニ、曰ク、「天子命レ之、然後爲レ學、小學在ニ公宮之左一、大學在レ郊」ト云フ、郊ハ百里ノ國、二十里之郊、七十里之國、九里之郊、五十里之國、三里之郊ト云ヘリ、百里ノ國ナレバ、國城ハ中央ニアリテ、四方一面毎ニ五十里、ソノ五十里ノ內、二十里ハ郊ヲ置ク、三十里ハ郊外ナリ、七十里ノ國ナレバ、國城ハ中央ニアリ、亦面ゴトニ三十五里ナリ、九里郊ヲ置キ郊外二十六里ナリ、餘ハ准ジテ知ルベシ、然ルニ愚疏ヲ按ズルニ、「小學在ニ公宮之南一、大學在レ郊」トハ、殷ノ時ノ制ヲ云フナリ、周制ハ不レ然「大學在ニ國都一、小學在ニ西郊ニ」ト云ヘリ、又王制ノ終リノ文ヲ考ルニ、曰ク、「周人養ニ國老於東膠一、養ニ庶老於虞庠一、在ニ國之西郊ニ」ト云々、又儀禮鄉射ニ云ク、「周立ニ四代之學於國一、而又以ニ有虞氏之庠一爲ニ鄉學ニ」ト云リ、コレニ據ルニ、周ハスナハチ「大學在ニ公宮之左一、小學在レ郊、」西周ノ代ニ東膠ト云ハ、即チ大學ニシテ、虞庠ハ即チ小學ナリ、「習ニ書於虞氏之學一、習ニ禮樂於殷之學一、習ニ舞於夏后氏之學ニ」ト云リ、此文ヲ併セ考レバ、王制ニ「所謂學在ニ公宮之南一、

大學在レ郊」トハ、殷ノ時ノ制ニヨツテ、小學ハ太子ノ學校ナルユヘ、公宮ニ近キコトヲ明カセリ、周ノ制ニハ三代ノ學校兼用タルナレバ、或殷ノ代ノ學校ヲ用ヒテ說クガ本トナリト知ルベシ、又師說曰、小學公宮ニ近シト云ヘバ、閭巷ニ小學ナキコト分明ナリ、且ツ閭巷ノ賤キ者、公宮ニ近キ小學校ニ入ルベキ理ナシ、專ラニ世子ノ學校ナルコト、推レ之知ルベシト云々、コレマタ殷ノ制ニ由テ明ス者也、王制ニヨツテ周ノ制ヲ案ズルニ曰、「耆老皆朝ニ（猶會也、）于庠一、元日習レ射上レ功、習レ鄉上レ齒、大司徒帥ニ國之俊士與ニ執事一焉、不レ變命ニ國之右鄉一、簡ニ不レ帥レ敎者一移ニ之左一、命ニ國之左鄉一、不レ帥レ敎者移ニ之右一、王太子王子（王之庶子也）鄉大夫元士之適子、國之俊選皆造焉」ト云々、コレニ據テ見レバ、周ノ小學ハ鄉學ニテ虞ノ庠ナリ、ソノ小學ニ入ル者ハ、太子ヨリ國都ノ民ノ俊選ニ至ル、俊選トハ、「曰、大樂正論ニ造士秀者一、以告ニ于王一、而升ニ諸司馬一曰ニ進士一、命レ鄉論ニ秀士一、升ニ之司徒一曰ニ選士一、司徒論ニ選士之秀者一、而升ニ之學一曰ニ俊士一（學、大學校）升ニ於司徒一者、不レ征ニ於鄉一、升ニ於學一者、不レ征ニ於司徒一曰ニ造士一、（不レ征、不レ給ニ其繇役一、造、成也、能習レ禮則爲ニ成士一、）」。

按ズルニ、朱子ノ大學ノ序ニ、凡民ノ俊秀ニ至ルマデ、皆小學ニ入ルト說キ給フハ、全ク此文ニヨルナルベシ、然共俊選ハ已ニ進士ヨリ段々出身シテ、王ニ告シ上ゲタル人ナレバ、官人ニシテ凡民ニアラズ、タヾ民ノ發明ナルヲ擇ミテ、學校ニ入ル、ト心得テハ大ナル相違ナリ、故全ク閭巷ノ賤シキ者、公宮ニ近キ學校ニ入ベキヤウナキコト知ベシ、小學ノ敎モ、灑掃應對進退之節、禮樂射御書數之文ヲ以テストアルモ、古ヘ小學校ニテ敎ヘタル方ト心得テハ相違ナルコトナリ、故ニ師說ニ云ク、古ノ學問ハ、

詩書六藝ヨリ外ハナキコトナリ、然ルニ六藝ノ學ビヤウニ次第アルコトナリ、「內則云、十年學ニ書計、十有三年學樂誦詩、成童舞象學ニ射御、二十始學禮」トアリ、論語ニモ、「游ニ於藝、成ニ於樂」トノ給ヘバ、六藝ハ小子ノ專ラニ習フコトニアラズ、タヾ詩書六藝ニ就テ、ソノ力ノ及ブコトヲ計リテ授受ノ節トナスコトナリ、論語ニ、子游ガ論ズルトコロノ洒掃應對進退ノタグヒ、少儀弟子職ニ載スルモノ、又漢ノ時字學ヲ小學トスル類ヒヲ見ルニ、六藝ハ小子ノ專ラ事トスルニ非ルコトヲ知ルベシ、通雅ニ、小學篇アリ、漢ノ時字學ニ通ズルモノヲ擧ゲタルコトアリ、併セ考フベシ、愚案ズルニ、洒掃應對進退ノ類ハ、小子ノ平生ノ教ヘナレバ、學校ニテ專ラ教ルノ方ニアラズト見ヘタリ、然レバ庠序二ツノ學校モ、所行ノ禮各殊ニシテ、宮室ノ制モ同ジカラズ、故ニ「孟子曰、庠者養也、校者教也、序者射也、夏曰校、殷曰序、周曰庠、學則三代共之、皆所ニ以明ニ人倫也、」庠學校ハ養老ノ禮ヲ教ヘ、序ノ學校ニテハ射ヲ貴ルト見ヘタリ、後世ノ教ノ專ラ義理ヲ講ズルヲ教トナス類ニアラズ、周衰ヘテヨリ、庠序二ツノ學校ノ政スタレ、士タルモノ始テ其國ノ境ヲ越ヘテ、他國ニ游學スルコトニナリ、ソレヨリ秦漢ニ至リテ、黌舍ヲタテ學士ヲ養フコトニナリタルハ、孔子ノ鄉里ノ闕里、又タハ齊ノ稷下ニテ學ヲ教タル遺法ニシテ、先王ノ舊ニアラズ、後世ノ學校ヲ以テ三代ノ法ヲ見ルトヤハ、大ニ相違スルハヅナリ、國都ノ學ヲ大學ト、大ノ字ヲ以テ稱スルコト深キ義アルコトナリ、故ニ師說曰ク、大學ハ國都ノ學ナリ、蓋シ鄉ノ學ハ庠ナリ、術ノ學ハ序ナリ、皆先代ノ學校ノ名ニシテ庠ハ虞舜ノ學校、序

ハ夏后氏ノ學校ナレドモ、周ノ世ニ至リテモコレヲ存シ給フハ、先代ノ教ノ亡ビヌ樣ニト思シ召スユヘナリ、シカモ教ノ道ハ古ニ本トヅカネハナラヌユヘナリ、然レドモ國都ノ學、其統トナシテ三代ノ制ヲ引キククリ兼備スルユヘ、國都ノ學ヲ大學ト云フナリ、故ニ詩書禮樂ノ教ミナ大學ニアリ、コレ鄉庠術序ニナキコトナリト知ルベシ、其教ノ詳ナルコト、文王世子篇ニ見ヘタリト云々、愚按ニ此段ノ大學ノ說ハ、徂徠先生又周ノ學校ノ制ヲ以テ、大學ハ學校ノ宗タルコトヲ明シ給ヘリ、文王世子篇曰、凡學世子及學士必時、（四時各有所宜、學士、謂司徒論俊選所升學者也、）春學干戈、秋冬學羽籥、皆於東序、（干、盾也、戈、句子戟也、干戈、萬舞象武也、用動作之時學之、羽籥、籥舞象文也、用安靜之時學之、）小學正學干、大胥贊之、籥師學戈、籥師丞贊之、（四人皆樂官之屬也、通職秋冬亦學以羽籥、小樂正、樂師也、周禮、樂師掌國學之政、教國子小舞、大胥掌學士之版、以待致諸子、春入學、舍采合舞、秋頒學合聲、籥師掌教國子舞羽吹籥、）胥鼓南、（南、南夷之樂也、胥掌以六樂之會正舞位、旄人教夷樂、則以鼓節之、）春誦夏弦、大師詔之瞽宗、秋學禮、執禮者詔之、冬讀書、典書者詔之、禮在瞽宗、書在上庠、（誦謂歌樂也、弦謂以絲播詩、陽用事、則學之以聲、陰用事、則學之以事、因時順氣、於功易成也、周立三代之學、學書於有虞氏學、典謨之教所興也、學舞夏后氏之學、文武中也、學禮樂於殷之學、功成治定、與己同也、）養老乞言、合語之禮、皆小樂正詔之於東序、（學以三者之威儀也、養老乞言、言養老人之賢者、因從乞善言可行者也、合語、謂鄉射鄉飲酒大射燕射之屬也、鄉射記曰、古者於旅也語、）大樂正學舞干戚、語說命乞言、皆大樂正授數、（學、以三者之義也、戚斧也、語說、合語之說也、數篇數、）大司成論說在東序、（論說、課其義之深淺才能優劣、）學校ノ教ヘ詳カナルコトカクノ如シ、然モミダリニ學校ニ入ニアラズ、所謂大胥ト云役人學士ヲ掌リ、版籍ヲ以テコレヲ改メ聚ルヲ待テ、學校ニ入スナリ、學士春學校ニ入ル時ハ、蘋藻ノ菜ヲ釋テ先聖先師ヲ禮シ、六舞ヲ合シテ節奏セシム、秋時ハ學士ノ才藝ヲ頒チ布テ、音聲ヲ和合シ、曲折ニ應ゼシムルナリ、コ

コヽニ知ル世子及ビ學士、春夏ハ干戈ノ舞ヲ學ビ、秋冬ハ羽籥ノ舞ヲ學ブ、ミナ東序ニ於テコレヲ學ブ、春ハ詩ヲ誦シ、夏ハ琴ヲ學ブモ、瞽宗ト云フ學校ニテ習フ、秋ハ禮ヲ學ブ、冬ハ書ヲ讀ム、禮ハ瞽宗ニアリ、書ハ上庠ニアリ、凡ソ祭リト養老、乞言、合語ノ禮ハ、東序ニ於テナスコトナリ、コヽヲ以テ大學校ハ學ノ兼備スルコトヲ知ルベシ、大ヲ以テ稱スル由來分明ナリ、然ドモ養老ノ禮第一ニ重キ敎ナリ、ソノ義ヲ尊ルニ、先ヅ敎ノ昉リハ堯舜ニ本ヅク、サテ敎ノ方モ後世ノヤウニ義理ヲ說キ、一々ニ諭サントスルニアラズ、言バノ上ニテハ人々信用ナキ物ナレバ、躬敎ト申シテ、直ニ身ニ行ヒ顯ハシテ天下ニ示シ給フナリ、ソノ敎ハ孝弟ヨリ外ハナキコトナリ、「孟子曰、堯舜之道、孝弟而已、」コヽヲ以テ虞舜初メテ養老ト云フコトヲ始メ給ヒ、孝弟ヲ敎ヘ給フ、故ニ大學ノ敎ヘ詩書禮樂コト〳〵ク備ルコト、上ニ述ルゴトシト雖モ、養老ノ禮第一ニ重キ禮ナルユヘ、大學專ラ養老齒ヲ序ルコトヲ述ルモノナリト知ルベシ、コレ大學一篇ノ主意ナリ

養老說

凡養老一歲ニ有七ト云ヘリ、四時每ニ養レ老、學士春舍菜シ、秋合樂時共養レ老、合セテ六度也、又天子視學ノ時養レ老、併テ七くビ也、學校ハ人君孝弟ヲ敎ヘ給フトコロユヘ、先ヅ老人ヲ養フコトヲ專ラニスル也、大學ノ初ニモ、在レ親レ民トハ此事ナリ、上タル人老ヲ敬ヒ給フユヘ、人々是ニ見習ヒ、自ラ

孝弟ノ道ヲ辨ヘ知ルコトニナリ行クナリ、周衰ヘテ學校ノ道廢シ、學者師トナリ、人ヲ敎ルヤウニナリ來ルコト秦漢已後ノコトナリ、ソレヨリ以來異見紛々トシテ、皆先王ノ古道ニソムケリ、養老ノ禮ハ王制ニ見ヘタリ、「曰、凡食レ老、有虞氏以二燕禮一、夏后氏以二饗禮一、殷人以二食禮一、周人脩而兼用レ之、凡五十養二於鄕一、六十養二於國一、七十養二於學一、達二於諸侯一、八十拜二君命一、一坐再(注)命謂下君不二親饗食一、必以二其禮一致上レ之九十使二人受一、有虞氏養二國老於上庠一、養二庶老於下庠一、夏后氏養二國老於東序一、養二庶老於西序一、殷人養二國老於右學一、養二庶老於左學一、周人養二國老於東膠一、養二庶老於虞庠一云々、」蓋シ天子諸侯老ヲ養ヒ給フコト同ジ、故ニ達二於諸侯一ト云ヘリ、人五十ニシテ始メテ衰フ、故ニ鄕ニヤシナフナリ、然レドモアマネク天下ノ五十ノ人ヲ養フベキ理ナシ、コレ蓋シ子孫國ノ爲メニ難ニ死シ、ソノ父祖五十ナルヲ養フナリ、六十ハ漸ク衰フ、養ヒ益々重シ、故ニ國學ニ養フナリ、國學ハ小學ナリ、七十ハ又衰フ、禮重シ、故ニ大學ニ養フナリ、殷人ハ國老ヲ右學ニ養ヒ、庶老ヲ左學ニ養フトアレバ、左ヲ賤シ右ヲ貴ブナリ、故ニ小學國中ノ左ニアリ、大學ハ郊ノ右ニアリ、皇氏ガ說ニ云ク、「人君養レ老有二四種一、一是養二三老五更一、二是子孫爲二國難一而死、王養二死者父祖一、三是養二致仕之老一、四是引レ戸校レ年、養二庶人之老一、」シカモ四種ノ內、德ヲ貴ブコト重キ故、三老五更ヲ第一ニ養フナリ、三老五更ト云フコト鄭玄ガ說ニハ、三德五事ヲ知ル老人ノ稱ニテ、互ニコレヲ云フナレバ、三德五事ヲ善ク脩メタル老人ノコトナリ、三德ハ、正直剛柔ヲ云ヒ、五事ハ、貌言視聽思也ト云ヘリ、忠囿按ズルニ、鄭玄ガ說、更ノ字分明ナル說ナシ、

タマ／＼三國志ヲ讀ムニ、蔡邕ガ明堂論ヲ引テ云ク、「更應ㇾ作ㇾ叟、長老之稱、字與ㇾ更相似、書者遂誤以爲ㇾ更云々、」裴松之ガ論ニモ、「嫂字女傍叟、今亦以爲ㇾ更、以ㇾ此驗知ㇾ應ㇾ爲ㇾ叟也」ト云ヘリ、此說ニヨルニ、更ハ叟ノ誤リナレバ、老ト同意ナリ、禮記ノ注疏ニモ、コノ說ヲアグルナレバ、蔡邕ガ說ニ隨テ見ルモ可ナルベシ、樂記曰、「食ニ三老五更於大學一、天子袒而割ㇾ牲、執ㇾ醬而饋、執ㇾ爵而酳、冕而揔ㇾ干、所ニ以敎ニ諸侯之弟一也」ト云々、三老五更ヲ養フコト如ㇾ是、天子自ラ袒デ牲ヲ割クトハ、天子自ラ俎ノ賓ヲ制シ給フ料理ノコトナリ、執ㇾ醬トハ、食スル時醬ヲ執リテススメ給フ、執ㇾ爵トハ、食シ訖テ天子自ラ爵ヲ執リテ、老者ノ口ニノマシメ給フコトナリ、老者ニテ德高キ人ナル故、ソノ養ノ重キコトカクノ如シ、凡ソ齒ヲ尙ブコト虞夏殷周皆同ジ、故ニ祭義曰、「昔者有虞氏貴ㇾ德而尙ㇾ齒、夏后氏貴ㇾ爵而尙ㇾ齒、殷人貴ㇾ富而尙ㇾ齒、周人貴ㇾ親而尙ㇾ齒、（貴謂ニ燕賜有ㇾ加ニ於諸臣一也、尙、謂ニ有ㇾ事尊ニ之於其黨一也、臣能世ㇾ祿曰ㇾ富、舜時多ニ仁聖有德一、後德則在ニ小官一、）虞夏殷周天下之盛王也、未ㇾ有ㇾ遺ㇾ年者一、年之貴ニ乎天下一久矣、次ニ乎事ㇾ親也、（言ニ其先ㇾ老也」）サテ致仕ノ老ヲ養フトハ、曲禮ニ、「大夫七十而致ㇾ事一トアリ、コレ首尾ヨク隱居シタル老ナリ、然ドモ君ノ許シナケレバ隱居ナリガタシ、致仕ノ許シナキ老人ハ、禮ヲ異ニスルナリ、「祭義曰、朝廷同ㇾ爵則尙ㇾ齒、七十杖ニ於朝一、君問則席、八十不ㇾ俟ㇾ朝、君問則就ㇾ之、而弟達ニ乎朝廷一矣云々、」七十ニテハ致仕ガ定リナリ、然レドモ君許シナケレバ朝スルコトナリ、因テ杖ニ據ツテ朝スルコトヲ許サル、凡ソ朝ハ君臣トモニ庭ニ立ツ法ナリ、七十ヨリシテ席ヲ設ケ坐スルコトヲ許サルルコトナリ、八十モ本ヨリ朝ニ杖クナリ、ソノ上不ㇾ俟ㇾ朝

トハ、朝廷ノ政事オワルヲ待ズシテ退出スルナリ、致仕ヲ許サレ隱居シタル老人ハ、七十ニテ國門マデ杖クナリ、故ニ王制ニ「七十杖二于國一」トアリ、八十ニシテ朝ニ杖クナリ、致仕ノ老人ハ常ニ朝スルコトナク、故アリテタマ〳〵朝スルユヘ、致仕ヲ許サザル老人トハ禮ヲ異ニスルナリ、サテ八十九十ニ至リテハ、大學ニ來リテ養ヒヲ受ルニ堪ヘズ、因テ君ヨリ使ヲ賜リ、饗食ノ禮ヲソノ家ニ贈リ致シテ養フナリ、「有虞氏以二燕禮一」トハ、虞舜帝道弘大ナルユヘ上下親和シ、燕樂ノ禮ヲ以テ老ヲ養ヒ給フ、故ニ履ヲ脫デ堂ニ升リ、ソノススメ物モ、殽烝折俎ト云フコトアリ、切レ肉、殽ト云也、烝ハ升也、升二殽於俎一也ト左傳成公十六年ノ注ニ見ヘタリ、鄭玄詩經箋云、「凡非レ殺而食レ之曰レ殽」トアリ、折俎ハ、左傳ニ「宴有二折俎一」、ソノ註ニ云フ、「體解節折升二之於俎一、物皆可レ食、所三以示二慈惠一也」ト云ヘリ、コレヲ按ズルニ、燕禮ハ、慈惠ヲ專ラニシ給フナレバ、右ノ如ク殽烝折俎トテ、牲ノ體ヲ解キ節骨ヲ折テ、食セラルルヤウニ料理シテ賜ルナリ、飮酒モ立テ拜スルコトナク、只一獻ノ禮ノミニテ坐シテ酒ヲ飮ミ醉ヲ以テ度トナス、コレヲ燕禮ト云フナリ、「夏后氏以二饗禮一」トハ、夏ハ虞舜ノ禪ヲ受ケ、三王ノ首ナレバ、禮ヲ尙(カミ)トシテ養老ニ饗禮ヲ用ヒ給フ也、「饗則體薦而不レ食、爵盈而不レ飮、依二尊卑一而爲レ獻、取レ數而已」ト云ヘリ、體薦トハ、左傳宣公六年ノ文ヲ按ズルニ、「享、有二體薦一、宴有二折俎一」ト云リ、體薦ハ房烝トテ、「半解二其體一而薦レ之、」又其牲體ヲ全クソノママ俎ニ升ルユヘ、全烝トモ云ナリ、只牲ヲ備ヘタルマデニテ食スルコトナキナリ、故ニ成公十二年ノ文ニ云ク、「享以訓二共儉一云々、」共儉トハ、ツツシンデヘリクダ

リ禮ヲ專ニナスユヘ、享禮ノ席ニ几ヲ設テオケドモ几ニ倚ラズ、爵ニ酒盈レドモアヘテ飮マズ、肴ハ乾クニイタレドモアヘテ食セズ、禮ヲ行フマデナルユヘ「所以訓ニ其儉一」ト云ヘリ、周人ハ三代ノ禮ヲ兼用ヒテ、春夏ハ氣ヲ養フユヘ酒ヲ專ラトシ、虞氏ノ燕禮ト、夏后氏ノ饗禮ヲ用ヒ、秋冬ハ體ヲ養フユヘ、殷人ノ食禮ヲ用ヒテ老ヲ養ヒ給フ、故ニ「脩而用之」ト云ヘリ、脩ノ字義ハ、本ト脯脩ノ脩ニテ、ホジシト云フモノナリ、脯ハタダ鹽ニテ制シ乾ンタルモノナリ、脩ハ姜桂ノ類ノ香キ物ヲ加ヘテコレヲ制シ、治メテ別ノ味ヒニ仕立テ用ニ立ルナリ、サルユヘニ脩道ト云モ、先王ノ道ヲ脩シ行フニ隨ヒテ、別ノ物ニ成リタルヤウナルモノユヘ、脩ルト云、此ニ「脩而用ㇾ之」トアルモ、虞夏殷三代ノ禮ヲマゼ合セテ、別ノモノニ仕立テコレヲ用ヒ給フユヘ、「周脩而用ㇾ之」ト云ナリ、總ジテ脩ノ字義カクノ如シ、サテ右ニ述ルモノ皆養老ノ大略ナリ、他ハ禮記等ニ委ク見ヘタリ、然ルニ養老ノ禮ハ上古ノコトナレバ、排[illegible]ノ如クニナリ、今ヨリ古ヲ尋ルハ、亡子ヲ尋ルト等ク思フモノ多シ、コレ全ク後世ノ學ニ習熟シ、先入爲ㇾ主ヨリ起リ來ル見ナリ、故ニ孔子好ㇾ古ヲ以テ示シ、尚書ニ稽古ヲ卷ノ始メニ說ケリ、コレ上代トイヘドモ、古ニカンガヘズシテハ私ノコトナルガ故ナリ、方ㇾ今養老ノ禮行ハレズドモ、古學ニ考ヘ先王ノ敎ヲ本トシ學ブトキハ、老ヲ敬ヒ幼ヲ憫ミ、人々和順ノ風俗ニナルベシ、コレ皆養老ノ義ヲ知ルヨリ行ハレ來ルナレバ、養老ノ義ハ嚴重ナル敎ナリ、徂徠先生ノ解全ク養老ノ義ヲ述ブ、然ドモ解中正意、異論混說ス、幼學ノ者ノ辨ズル所ニ非ズ、養老ハ孝弟ノ敎ノ本ナレバ、アマネク同志幼學ノ徒

ニ示ンコトヲ欲ス、於レ是竊ニ正意ヲ探テコレヲ述ブ、國字ヲ以テスルハ幼學ニ便ズ、ソノ餘說ノ如キハ、別著ニ于下篇一以テ明レ之、コレマタ承ニ解之說一而ママ管見ヲ加ヘ、且ツ國字證引未レ著モノハコレヲ補ス、蓋積年積思ノ致ストコロ、全ク養老ノ敎德行ノ本ナルガ故ナリ、因テ竊ニ藏レ之同志ト講ニ習之ハ、比年同志ノ勸ニ因テ以梓ニ行ヒ、四方同志ノ幼學ニ示スト云フ

大學養老篇　終

大學養老篇補遺

上篇所レ述、僅僅著二學校養老之要領一、以便二覽觀一、如二其學校說一、亦惟擧二大小學一而已、若二庠、序、校、塾、辟雍、泮宮、瞽宗、米廩、成均之屬一、則非三國字所二詳悉一、若二養老之說一亦然、故抄二之三禮之書一、而補二綴其闕漏一、然三禮之說、散二在于彼此一、錯雜無二統紀一、因採二擷彼此所一レ述、比事類聚、以爲二一編一、初以二學校說一、次以二養老說一、其不レ易レ曉者、加レ疏明レ之、其易レ曉者省焉、其及二尊レ老上レ齒之義一也、則采下其可三以爲二鑑戒一者上、錯而述レ之、且若二學校說一、後儒末學異同紛出、今亦皆不レ取、至下據二三禮一而述焉者上、則本二于古學一故也、遂刻二鄉飲酒義一、竟二養老之義一爾

庠序校塾

學記曰、古之敎者、家有レ塾、黨有レ庠、術(スイ)有レ序、國有レ學、術當レ爲レ遂、聲之誤也、古者仕焉而已者、歸敎二於閭里一、朝夕坐二於門一、門遂在二遠郊之外一、術之當爲二之遂一、周之五百家爲レ黨、萬二千五百家爲レ遂、黨屬二於鄉一

疏 正義曰、云下古者仕焉而已者、歸敎二於閭里一、朝夕坐二於門一者上、已猶レ退也、謂下仕年老而退歸者上、

按、書傳說云、大夫七十而致仕而退、老歸二其鄉里一、大夫爲二父師一、士爲二小師一、新穀已入、餘子皆入

學、距冬至四十五日、始出學、上老平明坐於右塾、庶老坐於左塾、餘子畢出、然後皆歸、夕亦如之、云門側之堂謂之塾者、爾雅釋宮文、引周禮者、證黨遂之異案、周禮六鄉之內、五家爲比、五比爲閭、四閭爲族、五族爲黨、五黨爲州、五州爲鄉、六遂之內、五家爲隣、五隣爲里、四里爲酇、五酇爲鄙、五鄙爲縣、五縣爲遂、今此經、六鄉舉黨、六遂舉遂、則餘閭里以上、皆有學可知、故此注云、歸教於閭里、其比與鄰近、止五家而已、不必皆有學、云遂在遠郊之外者、按、周禮、遂人掌野之官、百里之外、故知遂在遠郊之外、鄭注州長職、云序周黨之學、則黨學曰序、此云黨有庠者、鄉學曰庠、故鄉飲酒之義云、主人拜迎賓于庠門之外、注云、庠鄉學也、州黨曰序、此云黨有庠者、是鄉之所居、黨爲鄉學之庠、不別立序、凡六鄉之內、州學以下皆爲庠、六遂之內、縣學以下皆爲序也、皇氏云、遂學曰庠、與此文違、其義非也、庾氏云、黨有庠、謂夏殷禮、非周法、義或然也

典謂竊按、庠爲鄉學者、經無明文、故據鄉飲酒義、云主人拜迎賓于庠門之外、爲證、然孟子曰、庠者養老也、序者射也、據是倂考、鄉飲酒亦養老尊敬之義也、則宜鄉學爲庠也、按、周禮、黨五百家、州二千五百家、鄉萬二千五百家、學記所謂黨者、則屬鄉之黨、便鄉學而庠也、庠學者主養老、鄉飲酒禮是也、州序主射禮、孟子曰、庠者養也、序者射也、故周禮州長職曰、春秋以禮會民、而射于州序是也、蓋學記所云、學校不辨四代制、惟言其概、而述學校之隆而已、制

記于下

儀禮鄉射注曰、周立四代之學於國、而又以有虞氏之庠為鄉學、疏曰、按、王制云、有虞氏上庠下庠、夏后氏東序西序、殷人左學右學、周人東膠虞庠、周立四代者、通已為四代也、但質家貴右、故殷大學在西郊、小學在國中、文家貴左、故夏周大學、在國中王宮之東、小學在西郊、周所立前代學者、立虞夏殷三代大學、若然則虞氏上庠、則周之小學、為有虞氏之庠制、在西郊也、立殷之右學、則瞽宗、周立之亦在西郊、立夏后之東序、則周之東膠立在王宮東、以其改東序為東膠、東膠二代名、故云周立四代學（膠、糾也、所以糾集學士也）

貴按、文王世子篇、以有虞氏之庠為鄉、學者經無明文、但有於成均、以及取爵於上尊也之文、成均亦學校名、即虞庠也、其學在西郊、所謂以有虞氏之庠為鄉學者、豈謂此乎、學中學樂之義、見上篇國字解、按、周立四代之學於國者、立虞夏殷三代之大學於國都也、而以夏序為周之大學、又別立虞庠於四郊、以為小學、謂之小學者、則世子齒於國人故也、四郊之中、西郊曰成均、其義詳于下文、徂徠先生曰、小學者太子學校者、此之謂矣、何以言之、則按祭義曰、天子設四學、當入學而太子齒、（注）四學謂周之虞庠也、文王世子曰、行一物而三善皆得、唯世子而已、其齒於學之謂也、據此虞庠、即周之小學、故世子入於庠學、而與國人齒焉、則世子之學校也明矣

辟雍頖宮

周稱ニ大學校一、曰ニ辟雍頖宮一、故王制曰、天子命ニ之教一、然後爲レ學、小學在ニ公宮南之左一、大學在レ郊、此小學大學殷制 天子曰ニ辟雍一、諸侯曰ニ頖宮一、辟明也、雍和也、所ミ以明ニ和天下一、頖之言班、所ミ以班ニ政教一也

辟雍頖宮之義、具註ニ于圖說一

米廩

有虞氏之庠曰ニ米廩一、魯之所レ建也、魯家於ニ此學中一、藏ニ粢盛委積一、桓十四年、御廩災是也、故明堂位曰、米廩有虞氏之庠也、序夏后氏之序也、瞽宗殷學也、庠序亦學也、庠之言詳也、於以考レ禮詳レ事也、魯謂ニ之米廩一、虞帝上レ孝、令藏ニ粢盛之委一焉、序次ニ序王事一也、瞽宗樂師瞽矇之所レ宗也、古者有ニ道德一者使レ教焉、死則以爲ニ樂祖一、於レ此祭レ之

忠圃 按、此注所レ云、庠序之義、只訓ニ字義一而已、其實則孟子所謂、庠者養也、序者射也、可ニ以爲ニ正訓一也

瞽宗成均

按、周禮大司樂曰、大司樂掌ニ成均之法一、以治ニ建國之學政一、而合ニ國之子弟一焉、(注)鄭司農云、均調也、樂師主レ調ニ其音一、大司樂主レ受ニ此成事已調之樂一、玄謂、董仲舒云、成均、五帝之學、成均之法者、其遺禮可レ法者、國之子弟、公卿大夫之子弟當レ學者、謂ニ之國子一、文王世子曰、於ニ成均一以及レ取ニ爵於上尊一、然則周人立ニ此學之宮一 凡有レ道者有レ德者、使レ教焉死則以爲ニ樂祖一、祭ニ於瞽宗一、道、多ニ才藝一者、德、能躬行者、若下舜命レ夔典レ樂教中胄子上是也、死則以爲ニ樂之祖神一而祭レ之、鄭司農云、瞽、樂人、樂人所ニ共宗一也、或曰、祭ニ於瞽宗一、祭ニ於廟中一、明堂位曰、瞽宗、殷學也、泮

言、謂學也、以此謂之、繫於學官中

文王世子曰、凡語于郊者、語謂論說於郊學必取賢斂才焉、或以德進、或以事擧、或以言揚、大樂正論造士之秀者升諸司馬、曰進士、謂此矣、曲藝皆誓之、曲藝、謂小技能也、誓、謹也、皆使謹習其事以待又語、又語爲後復論說也三而一有焉、三說之中有一善則取之、以有曲藝、不必盡善乃進其等、進於衆學者以其序、又以其藝爲次謂之郊人、遠之、俟事官之缺者以代之、遠之者不日俊選、曰郊人、賤技藝於成均以及取爵於上尊也董仲舒曰、五帝名大學曰成均、則虞庠近是也、天子飮於虞庠、則郊人亦得酌于上尊以相旅

疏　正義曰、語、謂論課學士才能也、郊西郊也、周以虞庠爲小學、在西郊、今天子親視學於其西郊者、課論說於西郊之學、以西方成就之地故也、或徧在四郊、○必取賢斂才焉者、謂在於西郊學之中、論說取賢、斂其才能者以爵之也○或以德進者、謂人能不同、各隨才用也、德謂有道德者、進謂用爵之也、德最爲上、故進之宜先也、○或以事擧者、事次德者、雖無德、而解世事或吏治之屬、亦擧用之也○曲藝皆誓之者、曲藝謂小々技術、若醫卜之屬也、誓、謹也、若學士中雖無前三事、而有小々技術、欲授試考課、皆且却之、令謹習○以待又語者、又語謂後復論說之日、令待後時、若春待秋時也、○三而一有焉者、謂小技藝者所說、三事之中而一事有善者○乃進其等者、等、輩類也、若說三事有一善者、則進於大衆輩中也○以其序者、序、次也、雖得進衆、而不得與衆爲一、猶使於其輩中自爲高下之次序也○謂之郊人者、雖有次序而待職缺、當擬補之、若國子學士未官之前、俱爲俊選、

而以小才技藝者未官之前、而不得同爲俊選、但名曰郊人、言其猶在郊學也○遠之者、所以謂爲郊人者、是疎遠之故也○於成均以及取爵於上尊也者、成均則虞庠也、上尊、堂上之酒尊、天子於成均之內飮酒、以恩澤被及於此郊人、其郊人雖賤、亦得取爵於堂上之尊、以相旅也、所以榮之

天子視學之義

文王世子篇曰、天子視學、大昕鼓徵、所以警衆也、(註)早昧爽擊鼓以召衆也、徵猶起也、周禮、凡用樂、大胥以鼓徵學士、○昕音欣、說文云、旦明日將出也、音若希、警音景、衆至然後天子至、乃命有司行事、興秩節祭先師先聖焉、(註)興猶舉也、秩常也、節猶[illegible]也、使有司攝其事、舉常禮祭先師先聖、不親祭之者、視學觀禮耳、非爲彼報也　有司卒事反命(註)告祭畢也、祭畢天子乃入　始之養也、(註)又之養老之處、凡大合樂、必遂養老、是以往焉、言始、始立學也○養如字、徐羊尙反、後皆倣、徐音[illegible]、呂恵反、下同、　適東序釋奠於先老、(註)親奠之者已所有事也、養老東序、則是立學於上庠　遂設三老五更群老之席位焉、(註)三老五更各一人也、皆年老更事致仕者也、天子以父兄養之、示天下之孝悌也、名以三五者、取象三辰五星、天所因以照明天下者、群老無數、其禮亡、以鄉飮酒禮言之席位之處、則三老如賓、五更如介、群老如衆賓必也、○更、古衡反、注同、蔡作叟、音素口反　適饌省醴養老之珍具、(註)省醴、省其所有　遂發詠焉、退修之以孝養也、(註)發咏、謂以樂納之、退修之、謂既迎而入、獻之以禮、獻畢而樂闋　反登歌清廟、(註)反、謂獻群老畢、皆升就席也、反登歌、乃席工於西階上、歌清廟以樂之、　既歌而語、以成之也、言父子君臣長幼之道合德音之致、禮之大者也、(註)既歌、謂樂正告正歌備也、語、談說也、歡備而旅、旅而說父子君臣長幼之道、合樂之所美、以成其意、鄉射記曰、古者於旅也語　下管象舞大武、大合衆以事達有神、興有德也、(註)象周武王伐紂之樂也、以管播其聲、又爲之舞、皆於堂下、衆謂所合學士也、達有神、謂天授命周家之有神也、興有德、美文王武王有德、何樂爲用、前歌後舞　正君臣之位、貴

賤之等焉、而上下之義行焉、(注)由貴賤式也 有司告以樂闋、(注)闋、終也、告君以歌舞之樂終、此所告者、謂無算樂 王乃命公侯伯子男、及群吏曰、反養老幼于東序、終之以仁也、(注)群吏、鄉遂之官、王於燕之末、而命諸侯時朝會在此者、各反養老、知此禮、是終其仁心、孝經說、所謂諸侯歸各帥於國、大夫勤於朝、州里勤於邑、是也(○闋音缺、賤及也、本又作衍、又作闋、養本作羕) 是故聖人之記事也、慮之以大、(注)謂先本於孝弟之道 愛之以敬、(注)謂有其所以養老之具 行之以禮、(注)謂視其宜之、如其見父兄 脩之以孝養、(注)謂親嘗之 紀之以義、(注)謂既歌而語之 終之以仁、(注)謂又以命諸侯歸於國復自行之 是故古之人一舉事、而衆皆知其德之備也、古之君子舉大事、必慎其終始、而衆安得不喻焉、(注)言其德之本末盡見、可得而知也、喻猶曉也 兌命曰、念終始典于學、(注)兌當爲說、說命、書篇名、殷高宗之臣傅說之所作、典常、念事之終始常於學、學禮義之府、○兌注作說、同音悅

世子齒於學之義

行一物而三善皆得者、唯世子而已、其齒於學之謂也、(注)物猶事也 故世子齒於學、國人觀之曰、將君我、而與我齒讓何也、曰、有父在則禮然、然而衆知父子之道矣、其二曰、將君我、而與我齒讓何也、曰、有君在則禮然、然而衆著於君臣之義也、其三曰、將君我、而與我齒讓何也、曰、長長也、然而衆知長幼之節矣、故父在斯爲子、君在斯謂之臣、居子與臣之節、所以尊君親親也、故學之爲父子焉、學之爲君臣焉、學之爲長幼焉、(注)學、教(○學音效、下及注同) 父子君臣長幼之道、得而國治

尙齒之義

祭義曰、昔者有虞氏貴德而尙齒、夏后氏貴爵而尙齒、殷人貴富而尙齒、周人貴親而尙齒、（註）貴、謂燕賜有加於諸臣也、尙、謂有事尊之於其黨也、臣能世祿曰富、舜時多仁聖有德、後德則在小官 虞夏殷周、天下之盛王也、未有遺年者、年之貴乎天下久矣、次乎事親也、（註）言其先老也 是故朝廷同爵則尙齒、七十杖於朝、君問則席、八十不俟朝、君問則就之、（註）同爵尙齒、老者在上也、君問則席、爲之布席於堂上而與之、言凡朝位立於庭、魯哀公問於孔子、命席不俟朝、君揖之即退、不待朝事畢也、就之、就其家也、老而致仕、君或不許、異其禮而已、○於朝直遥反、後皆同、弟音悌、下及下註同、爲于僞反 而弟達乎朝廷矣、行肩而不併、不錯則隨、見老者則車徒辟、斑白者不以其任行乎道路、而弟達乎道路矣、（註）錯、雁行也、父黨隨行、兄黨雁行、車徒辟、乘車步行、皆辟老人也、斑白者、髮雜色也、任、所擔持也、不以任、少者代之、○併步頂反、徐扶頂反、辟音避、注同、行戶剛反、下同、擔都甘反、少詩照反、下同 居鄉以齒、而老窮不遺、强不犯弱、衆不暴寡、而弟達乎州巷矣（註）老窮不遺、以鄉人尊而長之、雖貧且無子孫、無棄忘也、一鄉者五州、巷猶閭也、○遺如字、一本作匱、其媿反、長丁丈反、下文皆同

祀乎明堂、所以教諸侯之孝也、食三老五更於大學、所以教諸侯之弟也、祀先賢於西學、所以教諸侯之德也、耕藉、所以教諸侯之養也、朝覲所以教諸侯之臣也、五者天下之大教也、（註）祀乎明堂、宗祀文王、西學、周小學也、先賢有道德、王所使教國子者、○食音嗣、下同、更古衡反、下同、大學音泰

天子巡守、諸侯待于竟、天子先見百年者、（註）問其國君、以百年者所在、而往見之、○守手又反、本亦作狩、竟居領反 八十九十者東行、西行者弗敢過、西行、東行者弗敢過、欲言政者、君就之可也（註）弗敢過者、謂道經之則見之 壹命齒于鄉里、再命齒于族、

三命不レ齒、族有ニ七十者一弗ニ敢先一、(註)此謂ニ鄕射飲酒時一也、齒者、謂下以ニ年次一立若坐上也、三命、列國之卿也、不ニ復齒一、席ニ之於賓東一、不ニ敢先ニ族之七十者一、謂ニ既一人舉レ觶乃入一也、謂レ非ニ族中然、齒ニ于族人一、故言レ族耳、復扶又反、觶之豉反七十者不レ有ニ大故一、不レ入レ朝、若有ニ大故一而入、君必與レ之揖讓、而后及ニ爵者一、(註)謂ニ致仕在レ家者一、其入朝、君先與レ之爲レ禮、而后揖ニ卿大夫士一天子有レ善、讓ニ德於天一、諸侯有レ善、歸ニ諸天子一、卿大夫有レ善、薦ニ於侯一、士庶人有レ善、本ニ諸父母一、存ニ諸長老一、祿爵慶賞、成ニ諸宗廟一、所ニ以示一レ順也、(註)薦、進也、成ニ諸宗廟一、於ニ宗廟一命レ之、祭統有ニ十倫一六日、見ニ爵賞之施一焉、(見賢遍反、施始豉反)

大學養老篇補遺終

天子辟雍圖

諸侯泮宮圖

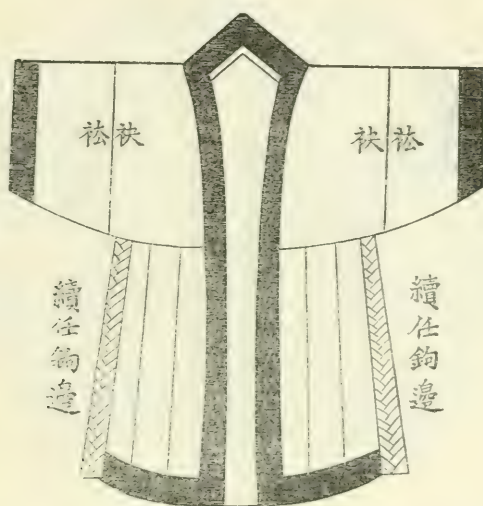
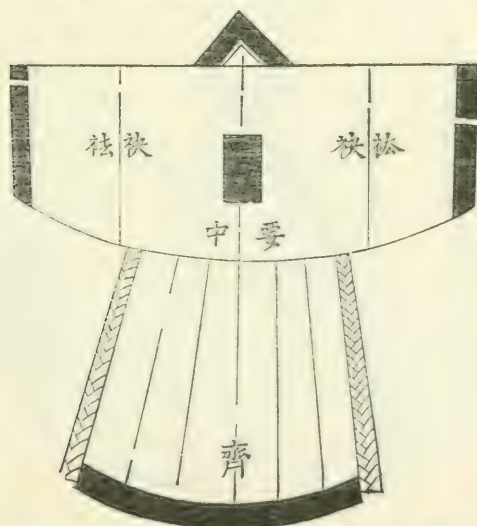
豆之圖

深衣掩袷圖

深衣前圖

袷
袪袂
袂袪
續衽鉤邊
續衽鉤邊

深衣後圖

袪袂
袂袪
要中
齊

詩箋曰、辟雍者、築レ土雝二水之外一、圓如レ璧、四方來觀者均也、泮之言、半也、半水者、蓋東西門以南通レ水、北無也　天子諸侯宮異レ制、因レ形然、疏云、辟雍者、築レ土爲レ堤、以雍二水之外一、使二圓如一レ璧、令三四方來觀者二均一、故謂二之辟雍一也、釋詁云、肉倍レ好、謂二之璧一、孫炎云、肉身也、好孔也、身大而孔小、然則璧體圓而內有レ孔、此水亦圓、而內有レ地、是其形如レ璧也、圓既中レ規、而望二水內一、則遠近之路等、故四方來觀者均、言均得レ所レ觀也、此箋□言二築レ土雝レ水、四方來觀者均一、說二水之外畔一、靈臺傳云、水旋レ丘以節二觀者一、說二水之中央一、所レ據不レ同、互相發見也

天子之宮形既如レ璧、則諸侯宮制當レ異矣、而泮爲レ名、則泮是其制、故云、泮之言半、半水者、蓋東西門以南通レ水、北無也、既以二蓋爲一疑辭、必疑下南有二水者、以行レ禮當二南面一、而觀者宜二北面一、畜水本以節レ觀、宜三其先節二南方一、故知南有レ水、而北無也、北無レ水者、下二天子一耳、亦當レ爲二其限禁一、故云、東西門以南通レ水明、門北亦有二溝塹一、但水不レ通耳

爾雅釋器曰、木豆謂二之豆一、註、豆禮器也、疏案、周禮旊人爲二豆實三一而成レ㪷、崇尺、鄭注云、崇高也、豆實四升、又祭統云、夫人薦レ豆、執レ校執レ醴、校レ之執レ鐙、鄭注曰、校豆中央直者也、鐙豆下跗也、又禮圖云、口圓徑尺、黑漆飾レ朱、中大夫以上、畫以二雲氣一、諸侯以レ象、天子以レ玉、皆謂レ飾二其豆口一也、然則豆者以レ木爲レ之、高一尺口足徑一尺、其足名レ鐙、中央直豎者名レ校、校徑二寸、總而言之名レ豆、其實四升、用薦二葅醢一、周禮醢人、掌二四豆之實一、朝事之豆、其實韭菹醓醢之類是也、其飾則

三代不レ同、明堂位曰、夏后氏以二揭豆一、殷玉豆、周獻豆、注云、楬無二異物之飾一也、獻疏刻レ之、是也、以供二祭祀燕饗一、故云、禮器也

王制曰、有虞氏皇而祭皇冕屬深衣而養レ老、蓋深衣者、先王之法服、其制之副二義方一也、不レ可レ不レ知焉、然古制竟不レ可レ審、是故後世深衣圖解、異同紛紛、今據二戴氏之說一以示焉、如二其圖一、姑據二諸書所一レ出云

深衣篇曰、古者深衣、蓋有二制度一、以應二規矩繩權衡一、(註)言聖人制レ事、必有二法度一短毋レ見レ膚、(註)衣取レ蔽レ形長毋レ被レ土、(註)爲二汙辱一也續レ衽鉤レ邊、(註)續猶レ屬也、衽在二裳旁一者也、屬二連之一不レ殊二裳前後一也、鉤讀如二鳥喙必鉤之鉤一、鉤レ邊、若二今曲裾一也、續或爲レ裕要縫半レ下、(註)三分二要中一、減レ一以益レ下、下宜レ寬也、要或爲レ優、袼之高下可二以運一レ肘、(註)肘不レ能レ不二出入一、袼衣袂、當レ掖之縫也、袂之長短、反詘レ之及レ肘、(註)袂屬二幅於衣一、詘而至レ肘、當二臂中一爲レ節、臂骨上下、各尺二寸、則袂肘以前尺二寸、肘或爲レ腕帶下毋レ厭レ髀、上毋レ厭レ脅、當二無レ骨者一、(註)當レ骨、緩急難レ爲レ中也制二十有二幅一、以應二十有二月一、(註)裳六幅、幅分レ之、以爲二上下之殺一袂圜以應レ規、(註)謂二胡下一也、(下垂曰レ胡)曲袷如レ矩以應レ方、(註)袷交領也、古者方領、如二今小兒衣領一負繩及レ踝以應レ直、(註)繩謂下裻與二後幅一相當之縫上也、踝跟也、下齊如二權衡一以應レ平、(註)齊緝故規者行、擧レ手以爲レ容、(註)行擧レ手、謂二揖讓一負繩抱レ方者以直二其政一方二其義一也、故易曰、坤六二之動、直以方也、(註)言三深衣之直方、應二易之文一也、政或爲レ正、下齊如二權衡一者、以安レ志而平レ心也、(註)心平志安、行乃正、或低或仰、則心有二異志一者與、五法已施、故聖人服レ之、(註)言非レ法不レ服也、故規矩取二其無一レ私、繩取二其直一、權衡取二

其牢一、故先王貴レ之、（註）貴二此衣一也 故可二以爲一レ文、可二以爲一レ武、可二以擯相一、可三以治二軍旅一、完且弗レ費、善衣之次也、（註）完且弗レ費、言下可二苦衣一而易上レ有也、深衣者、用二十五升布一、鍛濯灰治純レ之以レ采、善衣朝祭之服也、自レ士以上、深衣爲二之次一、庶人吉服、深衣而已、苦衣、言以二其完牢一乃可下於二苦事一衣著上也

大學養老篇圖說終

大學養老篇附錄

鄉飲酒義（禮記第四十五）〔一〕陸曰、鄭云、鄉飲酒義者、以其記鄉大夫飲賓於庠序之禮、尊賢養老之義也、別錄屬吉禮

疏 正義曰、按、鄭目錄云、目鄉飲酒義者、以其記鄉大夫飲賓于庠序之禮、尊賢養老之義、此於別錄屬吉事、儀禮有其事、此記釋其義也、但此篇前後凡有四事、一則三年賓賢能、二則鄉大夫飲國中賢者、三則州長習射飲酒也、四則黨正蜡祭飲酒、總而言之、皆謂之鄉飲酒、知此篇合有四事者、以鄭注、鄉人鄉大夫、又云、士州長黨正、鄭又云、飲國中賢者、亦用此禮也、鄭必知此篇鄉大夫賓賢能、及飲國中賢者、幷州長黨正者、以此經、云鄉人、即鄉大夫士、則州長黨正、又云君子、謂鄉大夫飲國中賢者、下又云、六十者坐、五十者立侍、亦是黨正飲酒之事、下又云、合諸鄉射、是亦州長習射之禮、鄭以此參之、故知此篇兼有四事、鄉則三年一飲、州則一年再飲、黨則一年一飲也、所以然者、天子六鄉、諸侯三鄉、卿二鄉、大夫一鄉、各有鄉大夫、而鄉有鄉學、取致仕在鄉之中大夫為父師、致仕之士為少師、在於學中、名為鄉先生、教於鄉中之人、謂鄉學、每年入學、三年業成、必升於君、若天子鄉、則升學士於天子、若諸侯之鄉、則升學

士於諸侯、凡升之必用正月也、將用升之、先爲飮酒之禮、鄕大夫與鄕先生謀事、學士最賢使爲賓、次者爲介、又次者爲衆賓、此鄕大夫爲主人、與之飮酒而後升之、故周禮鄕大夫職云、三年則大比、攷其德行道藝、而興賢者能者、鄕老及鄕大夫、帥其吏與其衆寡、以禮禮賓之、鄭云、賢者有德行者、能者有道藝者、故鄭云、古者年七十而致仕、老於鄕里、大夫、名曰父師、士名少師、而教學焉、恆知鄕人之賢者、是以大夫就而謀之、賢者以爲賓、其次以爲介、又其次爲衆賓、而與之飮酒、是亦將獻之、以禮禮賓之也、若州一年再飮者、是春秋習射、因而飮之、以州長爲主人也、若黨一年一飮者、是歲十二月、國於大蜡祭、而黨中於學飮酒、子貢觀蜡是也、亦當正爲主人也、此鄕飮酒之義、說儀禮鄕飮酒也、但儀禮所據、是諸侯之鄕大夫、三年賓賢能之禮、故鄭儀禮鄕飮酒目錄云、諸侯之鄕大夫、三年將獻賢者於君、以禮賓與之飮酒、是也、鄭必知諸侯鄕大夫者、以鄕飮酒禮云、磬階間縮霤、注云、大夫而特縣、方賓鄕人之賢者、從士禮也、若天子之大夫特縣、則鐘磬並有、今唯云磬、故知諸侯之鄕大夫也、若諸侯之州長則士也、故儀禮鄕射、是諸侯州長、經稱鹿中、記云、士則鹿中明、非諸侯之鄕大夫爲之也

鄕飮酒之義、主人拜迎賓于庠門之外、入三揖而后至階、三讓而后升、所以致尊讓也、（註）庠鄕學也、州黨曰序（○）庠音詳、學記云、古之教者、家有塾、黨有庠、術有序、國有學　盥洗揚觶、所以致絜也、（註）揚擧也、今禮皆作騰、（○）盥音管、觶之豉反、說文云、鄕飮酒角也、字林、音支、絜音結（○）絜或作潔、下同、一本

（作揖賓也）拜至、拜洗、拜受、拜送、拜既、所以致敬也、（註、拜至謂始升時拜賓至）尊讓絜敬也者、君子之所以相接也、君子尊讓則不爭、絜敬則不慢、不慢不爭、則遠於鬭辨矣、不鬭辨則無暴亂之禍矣、斯君子所以免於人禍也、故聖人制之以道（註、道謂此禮、爭、爭鬭之爭、下同、遠于萬反、辨如字、徐音免反、下同）

疏　鄉飲至以道○正義曰、此一節初明鄉飲酒之禮、拜迎至、拜洗相尊敬之事、故聖人制之以道也○鄉飲酒之義、主人拜迎賓于庠門之外者、此謂鄉大夫、故迎賓于庠門外、若州長黨正、則於庠門外也○盥洗揚觶者、謂主人將獻賓、以水盥手、而洗爵揚觶、謂既獻之後、舉觶酬賓之時亦盥洗也、必盥洗者、所以致其絜敬之意也○拜至者、謂賓與主人升堂之後、主人於阼階之上北面再拜、是拜至也、○拜洗者、謂主人拜至訖、洗爵而升、賓於西階上北面再拜拜主人洗也○拜受者、賓於西階上、拜受爵也○拜送者、主人於阼階上、拜送爵也○拜既者、既盡也、賓飲酒既盡而拜也○所以致敬也者、言賓主相拜、致其恭敬之心○尊讓絜敬也者、言、入門而三揖三讓、是尊讓、盥洗揚觶、是絜也、拜至拜洗之等、是致敬也、故總結之云、尊讓絜敬也者、君子之所以相接也（註、庠學也、州黨曰序、今云州黨曰序者下有　鄭注云鄉射下脱黨字、注文義因序之當作黨）○正義曰、案、州長職云、春秋射于州序、黨正云、屬民飲酒于序、是州黨曰序、有室謂之庠、無室謂之序、鄉學爲庠、州黨爲序、學記云、黨有庠者、謂鄉人在州黨、但於鄉之庠學、不別立也、則州黨曰序、必是無室、今案鄉射云、豫則鉤楹內、堂則由楹外、故鄭注云、庠之制、有堂有室也、豫讀如成周

宜榭災之榭、凡屋無室曰榭、今文豫爲序、序乃夏后氏之學、亦非也、以此言之、則州黨爲序、其義非也、今云州黨曰序者、但州黨之序、雖並皆無室、今鄉射則鉤楹內、是內之深無室事顯、正得讀豫爲榭、是無室故也、不得讀豫爲序、以序非無室之名故、云非也、以有楹內楹外之言、故鄭特云、序非也、謂正鄉射文非非是餘處序字皆非也、餘處之序、並皆無室也、但有虞氏之庠、周以爲鄉學、夏后氏序、周以爲州黨之學則、夏時之序則有室也、周時州黨之序則無室也、序名雖同、其制則別、故鄉射注云、序乃夏后氏之學、非謂州黨之學也、以鄉射爲豫已非、今文爲序又非、故云亦非、鄉學雖爲序云、亦有東西牆、謂之序、故鄉飲酒或云序東西、榭學雖爲序、據其序內亦有堂稱、故鄉射或云堂東堂西也

鄉人士君子、尊於房戶之間、賓主共之也、尊有玄酒、貴其質也、 (註)鄉人、鄉大夫也、士、州長黨正也、君子謂鄉大夫士也、卿大夫士飲國中賢者、亦用此禮也、共尊者、人臣卑、不敢專大惠、(鄉人士君子周禮、天子六鄉、鄭司農云、百里內爲六鄉、外爲六遂、司徒職云、五家爲比、五比爲閭、四閭爲族、五族爲黨、五黨爲州、五州爲鄉、鄉大夫每鄉卿一人、州長每州中大夫一人、黨正每黨下大夫一人、族師每族下士一人、閭胥每閭中士一人、比長五家、下士一人、諸侯則三鄉、長丁丈反、篇內皆同、卿去京反、注同、飲於鴆反 俢、共音恭

洗當東榮、主人之所以自絜、而以事賓也 (註)絜猶清也、(榮如字、屋翼也、劉音營絜如字、皇才性反 (此下釋文混) 羞出自東房、主人共之也 (註)主無私可以自專也、(羞音

疏 鄉人至賓也○正義曰、此一節明設尊、及玄酒貴其質素、又羞出東房、及東榮設洗、主人事賓之義也、鄉人謂鄉大夫也、士謂州長黨正也、君子者謂卿大夫也○尊於房戶之間、賓主共之也者、以鄉大夫等唯有東房、故設酒尊於東房之西、室戶之東、在賓主之間、示賓主之共

有ニ此酒一也、酒雖ニ主人之設一、賓亦以酢ニ主人一故云ニ賓主共ニ之也○尊有ニ玄酒一、貴ニ其質一也者、北面設レ尊、玄酒在レ左、謂レ在ニ酒尊之西一也、所ニ以設ニ玄酒一在ト西者、地道尊レ右、貴ニ其質素一故也○羞出レ自ニ東房一、主人共レ之也者、謂レ供ニ於賓一也、○洗當ニ東榮一、榮屋翼也、設ニ洗於庭一、當ニ屋翼一也、必在ニ東者、示ニ主人所ニ以自絜以事一レ賓、從ニ冠義一以來、皆記者豐ニ出儀禮經文一、每於ニ一事之下一、釋ニ明儀禮經義一、每レ義皆舉ニ經文於上一、陳ニ其義於下一、以釋レ之也、他皆倣レ此也

賓主象ニ天地一也、介僎象ニ陰陽一也、三賓象ニ三光一也、讓レ之三也、象ニ月之三日而成ト魄也、四面之坐象ニ四時一也、(註)陰陽助ニ天地一養ニ成萬物一之氣也、三賓象ニ天三光一者、繫ニ於天一也、古文讓、皆作レ遁、○介音戒、下故レ此、輔レ賓者、僎音遵、輔ニ主人一者、魄普百反、說文作レ霸、云、月始生魄然也、坐才臥反、又如レ字、　天地嚴凝之氣、始ニ於西南一、而盛ニ於西北一、此天地之尊嚴氣也、此天地之義氣也、天地溫厚之氣、始ニ於東北一、而盛ニ於東南一、此天地之盛德氣也、此天地之仁氣也、(註)凝猶レ成也○凝魚矜反　主人者尊レ賓、故坐ニ賓於西北一、而坐ニ介於西南一以輔レ賓、賓者接レ人以レ義者也、故坐ニ於西北一、(註)賓者接レ人以レ義、言ニ賓來以成ニ主人之德一、　主人者接レ人以レ仁、以ニ德厚一者也、故坐ニ僎於東北一、以輔ニ主人一也、(註)以レ僎輔ニ主人一、以ニ其仕在ト官也、　仁義接レ賓、主レ有レ事、俎豆有レ數曰レ聖、聖立而將レ之以レ敬曰レ禮、禮以體ニ長幼一曰レ德、(註)聖通也、所三以通ニ賓主之意一也、將猶レ奉也、　德也者、得ニ於身一也、故曰、古之學ニ術道一者、將ニ以得ト身也、是故聖人務レ焉、(註)術猶レ藝也、得レ身者、謂ト成ニ己令名一、免ニ於刑罰一也、言レ學ニ術道一、則此爲ト賓ニ主禮一之事上

疏　賓主至ニ務焉一○正義曰、此一節明ニ賓主介僎坐位之義一也○賓主象ニ天地一也、介僎象ニ陰陽一也者、天地則陰陽著成爲ニ天地一、故賓在ニ西北一、天地嚴凝之氣著、主在ニ東南一、天地溫厚之氣著、介坐在ニ西

南、象陰之微氣、僎在東北象陽之微氣○三賓象三光者、謂衆賓也、四面之坐、象四時也者、主人東南象夏始、賓西北象冬始、僎東北象春始、介西南象秋始、其四時、不離天地陰陽之內而坐、卽是賓主介僎之所象也○曰聖者、聖通也、謂上諸事、並是通賓主之意也、聖立而將之以敬曰禮者、謂通賓主之事、其道已立、能將行之以恭敬、乃謂之禮也○禮以體長幼曰德、德者得也、旣能有禮、以體成長幼、於事得宜、故曰德也○德也者得於身也、重釋稱德之義、是得善行於其身、謂身之所行、皆得於理也○古之學術道者、將以得身也者、術者、藝也、言、古之人學此才藝之道也、將以得身也、謂使身得成也、此謂賓賢之人有術道、今以賓敬接待之事、其尊敬學習術道、身得成就而有令名○是故聖人務焉者、以上賓主德義之事、於禮最重、故聖人務行焉

祭薦祭酒敬禮也、嚌肺嘗禮也、啐酒成禮也、於席末、言是席之正、非專爲飲食也、爲行禮也、此所以貴禮而賤財也、卒觶致實於西階上、言是席之上、非專爲飲食也、此先禮而後財之義也、先禮而後財、民作敬讓則而不爭矣、（註）非專爲飲食、言主於相敬以禮也、致實、謂盡酒也、酒爲觴實、祭薦祭酒、嚌肺於席中、唯啐酒於席末也、○祭薦本亦作薦、同嚌才細反、肺芳廢反、啐七內反、專爲干僞反、下及註、專爲同

疏　祭薦至爭矣○正義曰、此一節明飲酒之禮、祭薦祭酒相尊敬之心、貴禮賤財之義○祭薦者、主人獻賓、賓卽席祭、所薦時脯醢也○祭酒者、賓旣祭薦、又祭酒也○敬禮也者、言賓旣

祭薦又祭酒、是賓敬重主人之禮也○嚌肺嘗禮也、賓既祭酒之後、與取俎上之肺嚌嘗之、所
以嘗主人之禮也○啐酒成禮也、於席末者、啐謂飲主人酒而入口、成主人之禮、於席末、
謂席西頭也、案鄉飲酒禮、祭薦祭酒嚌肺、皆在席之中、唯啐酒在席之末、又鄉飲酒禮云、祭
脯醢奠爵、右取肺卻左手、右絕末以祭、尙左手嚌之、興加于俎、坐挩手遂祭酒、嚌肺
在前祭酒在後、此先云祭酒者、嚌是嘗嚌之名、祭酒是未飲之稱、故祭酒與祭薦相連、表其
敬禮之事○言是席之正、非專爲飲食者也者、若此席專爲飲食、應於席中啐酒、今乃席末
啐酒、此席之設、本不爲飲食、是主人敬重於賓、故設席耳、祭薦祭酒、嚌肺在席中者、敬
主人之物、故在席中、啐酒入於己、故在席末也○此所以貴禮而賤財也者、於席上祭薦祭
酒、是貴禮、席末啐酒、是賤財也○卒觶致實於西階上、言是席之上、非專爲飲食也者、卒
觶主人酬賓、賓卒立以擧觶也、致實、謂致盡其所實之酒於西階上、不就席卒席者、言此席
之上非專爲飲食也、故不於席所而卒席、啐纔始入口、猶在席末也、卒則則盡爵、故遠
在西階上、前文方論設席之禮、故言是席之正、此覆說前席、故變文言是席之上、上亦正也、此先
禮而後財之義也者、先禮則貴、後財則賤、則亦上下互而相通也（註）致實至末也○正義曰、以經卒觶
致實、既云卒席、論其將欲卒觶之時、擧其事者、致實、論其盡酒之實、故更言致實也、
云酒爲觴實者、以盡酒稱致實之意、酒爲觴中實、今致盡此實也、云祭薦祭酒嚌肺於

席中、唯啐酒於席末也者、皆鄉飲酒禮文

鄉飲酒之禮、六十者坐、五十者立侍、以聽政役、所以明尊長也、六十者三豆、七十者四豆、八十者五豆、九十者六豆、所以明養老也、民知尊長養老、而后乃能入孝弟、民入孝弟、出尊長養老、而后成教、成教而后國可安也、君子之所謂孝者非、家至而日見之也、合諸鄉射、教之鄉飲酒之禮、而孝弟之行立矣（註）此說鄉飲酒、謂黨正國索鬼神而祭祀、則以禮屬民、而飲酒于序、以正齒位之禮也、此鄉射、州長、春秋以禮會民、而射于州序之禮也、謂之鄉者、州黨鄉之屬也、或則鄉之所居州黨、鄉大夫親爲主人焉、如今郡國下令長、於鄉射飲酒、從太守相臨之禮也、弟音悌、下同、行下孟反、索色百反、屬音燭、太守音泰、下手又反相息亮反、漢制、郡有太守、國有相、或息羊反、則以連下句

疏　鄉飲酒至立矣○正義曰、此明黨正飲酒、正齒位之事、六十者坐、五十者立侍者、按、鄉飲酒禮、賓賢能則用處士爲賓、其次爲介、其次爲衆賓、皆以年少者爲之、此正齒位之禮、其賓介等、皆用年老者爲之、其餘爲衆賓、賓內年六十以上於堂上、於賓席之西南面坐、若不盡則於介席之北東面北上、其五十者、則立於西階下東面北上、示有陪侍之義、非即在六十者旁、同南面立也○以聽政役者、所以立於階下、示其聽受六十以上政事役使也、所以明尊長也者、言欲明尊敬六十之長老、故立而聽政役○六十者三豆、至九十者六豆者、以其每十年加一豆、非正禮、故不得爲籩豆偶也、其五十者亦有豆也、但二豆而已、則鄉飲酒禮、衆賓立於堂下者皆二豆、其賓介之豆無正文、當依衆賓之年而加之也○所以明養老也、豆以供養之物、故云明養老、立侍是陪侍之義、故云明尊長也○而后乃能入孝弟者、人

若知尊長養老、則能入孝弟之行也、民入孝弟、謂入門而能行孝弟、出尊長養老者、謂出門而能尊長養老也○令諸鄉射、教之鄉飲酒之禮、而孝弟之行立矣者、諸於也、謂春秋二時、聚合其民於州長、鄉射之禮以敎之、鄉飲酒之禮、謂十月黨正飲酒、是敎之鄉飲酒之禮、既州正教射、黨正教飲酒、則民知尊長養老、故孝弟之行、以此而后立也、(注此說至禮也)○正義曰、鄭知此經所說、是黨正正齒位者、以儀禮鄉飲酒之篇、無正齒位之禮、今此云六十者坐五十者立侍、故知是黨正正齒位之禮、此謂初飲酒之時正齒位、及其禮末、皆以醉爲度、雜記云、一國之人皆若狂、是也云、其鄉射則州長、春秋以禮會民、而射于州序之禮也者、此則州長職文引之者、證經中之鄉射也、云謂之鄉者、州黨鄉之屬也者、既是州長黨正射飲、而並謂之鄉者、以州黨屬鄉故云鄉之屬也、云或則鄉之所居州黨者、鄭更云別解此州黨謂之鄉、鄉之所居、此州黨行飲酒射之禮、鄉大夫、則代此州長黨正爲主人、故得稱鄉射飲酒也、若鄉之州黨、鄉所不居、則鄉大夫不得爲主人、亦不得稱鄉射鄉飲酒、但謂之州射黨正飲酒可也、云如今郡國下令長、於鄉射飲酒者、謂郡治之下、及王侯有國治之下、滿萬戶以上之令、不滿萬戶之長、於已縣或射或飲酒、則從郡之大守、及主國之相來、自行禮相監臨之儀、不用令長禮也、令長射而飲酒、似州長黨正也、大守與相來監臨、似鄉大夫監臨也、故引以相證也

孔子曰、吾觀於鄉、而知王道之易易也(註)、鄉鄉飲酒也、易易謂教化之本、尊賢尚齒而已○易易皆以豉反注及下易易同

疏　孔子至易也○正義曰、謂孔子先觀鄉飲酒之禮、而稱知王道之易易、故記者引之、結成鄉飲酒之義○吾觀於鄉者、鄉謂鄉飲酒、言我觀看鄉飲酒之禮、有尊賢尚齒之法、則知王者教化之道、其事甚易、以尊賢尚齒、爲教化之本故也、不直云易、而云易易者、取其簡易之義、故重言易易、猶若尚書王道蕩蕩、王道平平、皆重言取其語順故也

主人親速賓及介、而衆賓自從之、至于門外、主人拜賓及介、而衆賓自入貴賤之義別矣（註）速謂即家召之、別猶明也○別彼列反、注及下注同

疏　主人至別矣○正義曰、此一經明鄉飲酒之禮、主人待賓之異、明貴賤之別也○衆賓自從之者、主人親自速賓拜、往速介、而衆賓不須往速、自從賓介而來也○而衆賓自入者、謂賓介至門、主人拜賓及介、而衆賓不須拜自入門、是賓介貴於衆賓、貴賤之義別矣

三揖至于階、三讓以賓升拜至、獻酬辭讓之節繁、及介省矣、至于衆賓升受、坐祭立飲、不酢而降、隆殺之義辨矣（註）繁猶盛也、小減曰省、辨猶別也、尊者禮隆、卑者禮殺、尊卑別也○省所領反、徐疏幸反、注同、殺音殺色戒反、注及下同

疏　三揖至辨也○正義曰、此明主人於賓介禮隆殺分別也○拜至獻酬辭讓之節繁者、主人於賓三揖三讓、拜其來至、又酌酒獻賓、賓酢主人、主人又酌而自飲以酬賓、是辭讓之節、其數繁多也○及介省矣者、按、鄉飲酒、介酢主人則止、主人不酬介也、是及介省矣○至于衆賓升受、坐祭立飲、不酢而降者、按、鄉飲酒之禮、主人獻衆賓于西階上、受爵坐祭立飲、不酢主人、

而降西階東面也○隆殺之義辨矣者、於賓尊降、衆賓卑殺、是隆殺之辨也

工入升歌、三終主人獻之、笙入三終、主人獻之、閒歌三終、合樂三終、工告樂備遂出、一人揚觶、乃立司正焉、知其能和樂而不流也（註）工謂樂正也、[illegible]閒之閒、[illegible]音閑、復扶又反

疏　工入至流也○正義曰、此一節論鄉飲酒設樂樂賓、既則以司正正之、不令流荒之事也○工入升歌三終者、謂升堂歌鹿鳴四牡皇皇者華、每一篇而一終也○主人獻之、笙入三終者、謂吹笙之人、入於堂下、奏南陔白華華黍、每一篇一終也○主人獻之者、謂獻笙人也○閒歌三終者、閒代也、謂笙歌已竟、而堂上與堂下更代而作也、堂上人先歌魚麗、則堂下笙由庚、此爲一終、又堂上歌南有嘉魚、則堂下笙崇丘、此爲二終也、又堂上歌南山有臺、則堂下笙由儀、此爲三終也、此皆鄉飲酒之文、故鄭注鄉飲酒云、閒代也、謂一歌則一吹也○魚麗言太平、年豐物多也、此采其物多酒旨、所以優賓也、南有嘉魚言太平、君子有酒、樂與賢者共之也、此采其能以禮下賢者、賢者纍蔓而歸之、與之燕樂也、南山有臺、言太平之治、以賢者爲本、此采其愛友賢者、爲邦家之基、民之父母、既欲其身之壽考、又欲其名德之長也、由庚崇丘由儀今亡、其義未聞也○合樂三終者、謂堂上下、歌瑟及笙並作也、若工歌關雎、則笙吹鵲巢合之、若工歌葛覃、則笙吹采蘩合之、若工歌卷耳、則笙吹采蘋合之、所以知然者、則鄉飲酒云、乃

合樂周南、召南（一本無上召南二字）關雎、葛覃、卷耳、召南、鵲巢、采蘩、采蘋、鄭云、合樂謂歌與衆聲倶作（歌與衆聲、或作歌樂與衆聲）周南召南國風篇也、王后國君夫人、房中之樂歌也、關雎言后妃之德、葛覃言后妃之職、卷耳言后妃之志、鵲巢言國君夫人之德、采蘩言國君夫人不失職、采蘋言卿大夫之妻、能脩其法度也、工告樂備遂出者、工謂樂正、工先告樂正、樂正告賓以樂備、而遂下堂也、言遂出者、樂正自此至去、不復升堂也、鄉飲酒云、工告于樂正、樂正告于賓乃降、注云、樂正降者、以正歌備無事也、降立西階東北面○一人揚觶、乃立司正焉者一人、謂主人之吏也、一人擧觶之後、乃立司正、樂既備、將留賓旅酬、爲有懈惰、故主人使相禮者一人、爲司正以監之也、擧觶示將行旅酬也、鄉飲酒云、作相爲司正、又云、司正洗觶升自西階、階上北面、受命于主人、主人曰、請安于賓、司正告于賓、賓禮辭許（一本無許字）注云、爲賓欲去留之、告賓於西階、又云、司正既擧觶、而薦諸其位、注云、司正主人之屬也、無獻、因其擧觶而薦之○知其能和樂而不流也者、結之也、流失禮也、工升歌後、立司正以正之、故知鄉飲酒能和樂、不流邪失禮也

賓酬主人、主人酬介、介酬衆賓、少長以齒、終於沃洗者焉、知其能弟長而無遺矣（註、遺猶脫也、忘也、少詩召反、沃於木反、弟音悌、下弟長同、脫徒活反、又音奪）

疏　賓酬至遺矣○正義曰、此經明旅酬之時、賓主少長、皆得酬酒、長幼無被遺棄之事○

少長以齒終於沃洗者、言旅酬之時、賓主人之黨、各以少長為齒、以次相旅、至於執掌罍洗之人、以水沃盥洗爵者、皆預酬酒之限、此經主人酬介、介酬衆賓、雖據旅酬之時、其少長以齒、終於沃洗、是無算爵之節也、但因其旅酬、遂連言無算爵、欲見無不周徧、弟長而無遺、而如終沃洗、是其無算爵、按、鄉飲酒記、主人之贊者、西面北上不與、無算爵然後與是也○知其能弟長而無遺矣者、弟少也、言少之與長、皆被恩澤而無遺棄也、故云知其能弟長而無遺也

降說屨升坐、脩爵無數、飲酒之節、朝不廢朝、莫不廢夕、賓出主人拜送、節文終遂焉、知其能安燕而不亂也（注）朝夕朝莫聽事也、不廢之者、既朝乃飲、先夕則罷、其正也、終遂猶充備也○廢芳廢反、注朝夕既朝同、莫音暮、下同先悉薦反

疏 降說至亂也○正義曰、此一經明飲酒之禮、雖爵行無數、猶能節立、目（旨、或作立文）終不至於亂也○降說屨升坐者、此謂無算爵之初也、以前皆立而行禮、未徹俎、故未說屨、至此徹俎之後、乃說屨升堂坐也○脩爵無數者、謂無算爵也、熊氏云、謂行爵無數矣○朝不廢朝者、朝後乃行飲酒之禮、是朝不廢朝也、○莫不廢夕者、謂飲酒禮畢、乃治私家之事、是莫不廢夕、此謂鄉飲酒之禮、若黨正飲酒、一國若狂、無不醉也○節文終遂焉也者、終謂終竟、遂謂申也、言雖至飲畢、主人備禮、拜而送賓、節制文章、終竟申遂、不有闕少、故鄭云、終遂由充備也、知其能安燕而不亂也、謂安在於燕樂、而不至亂也

貴賤明隆殺辨、和樂而不流、弟長而無遺、安燕而不亂、此五行者、足以正身安國矣、彼國安而天下安、故曰、吾觀於鄉、而知王道之易易也（註）貴賤至易也〇正義曰、此一節總結上經、明上五種之事、又覆說前文孔子所言以知王道之易易也、知此五行者、是以正身安國安者、五行謂上第一云貴賤之義別、第二云隆殺之義辨、第三云和樂而不流、第四云弟長而無遺、第五云安燕而不亂、是五種之行也〇彼國安而天下安者、以鄉飲酒於此、將天下諸侯爲彼國、故云彼國安而天下安也

鄉飲酒之義、立賓以象天、立主以象地、設介僎以象日月、立三賓以象三光、古之制禮也、經之以天地、紀之以日月、參之以三光、政教之本也（註）日出於東、僎所在也、月生於西、介所在也、三光三大辰也、天之政教、出於大辰焉、〇行下孟反

疏　鄉飲至本也〇正義曰、此記者更覆說鄉飲酒之義、有所法象之事、前文雖備、故此更詳也〇立賓以象天、立主以象地者、前文天地共言、故云、賓主象天地、此則析言之、賓以象天、主以象地、賓者主之所尊敬、故以賓象天、主供物以養賓、故以主象地也〇設介僎以象日月者、則前經陰陽也、但陰陽據其氣、日月言其體、僎在東北、象日出也、介在西南、象月出也（註）三光三大辰也〇正義曰、按、昭十七年、有星孛于大辰、公羊云、大辰者何、大火也、伐爲大辰、北辰亦爲大辰、故爾雅云、大辰房心尾也、大火謂之大辰、北極謂之北辰、是三大辰也、何休云、大火與伐、天所以示民時早晚、天下取以爲正、故謂之大辰、辰時也、是天之政教、出於大辰

亨狗於東方、祖陽氣之發於東方也（註）祖猶法也、狗所以養賓、陽氣主養萬物〇亨普庚反　洗之在阼、其水在洗東、祖天地之左海也（註）海水之委也〇阼才路反、委於僞反　尊有玄酒、教民不忘本也（註）大古無酒、用水而已〇大音泰

疏　亨狗至本也〇正義曰、此一節覆明上立主象地、以下諸文之意也〇亨狗於東方、祖陽氣

之發ニ於東方一也者、此覆下説前文從出ヒ自ニ東房一也上洗之在レ阼、其水在ニ洗東一、祖ニ天地之左下海也者、此覆ニ説前經洗當ニ東榮一、因説下水在ニ洗東一、法中天地左海上也○尊有ニ玄酒一、敎ニ民不レ忘レ本也者、此覆下説上文尊有ニ玄酒一、貴中其質上也

賓必南鄕、東方者春、春之爲レ言、蠢也、產ニ萬物一者聖也、南方者夏、夏之爲レ言、假也、養レ之長レ之、假レ之仁也、西方者秋、秋之爲レ言、愁也、愁レ之以レ時、察守レ義者也、北方者冬、冬之爲レ言、中也、中者藏也、是以天子之立也、左レ聖鄕レ仁、右レ義借藏也（註）春猶レ蠢也、蠢動生之貌也、聖之言生也、假大也、愁讀爲レ揫、揫斂也、察猶ニ察察一、嚴殺之貌也、南鄕鄕レ仁、貴レ長ニ大萬物一也、察或爲レ殺○鄕許亮反、下及注、鄕仁南鄕東鄕皆同、蠢尺允反、蠢動生之貌、夏戶嫁反、下同、假古雅反、下同、愁依レ注讀爲レ揫、子留反、下同、[illegible]云、揫聚也、藏如レ字、下同、徐才浪反、借音佩、殺如レ字、又色戒反　介必東鄕、介ニ賓主一也（註）[illegible]之輔、主人將レ西、賓將レ南、介閒ニ其間一也○閒音間、[illegible]之閒　主人必居ニ東方一、東方者春、春之爲レ言、蠢也、產ニ萬物一者也、主人者造レ之、產ニ萬物一者也（註）言[illegible]之所レ共、主人一出也○共音恭　由ニ月者三日則成レ魄、三月則成レ時、是以禮有ニ三讓一、建レ國必立ニ三卿一、三賓一者、政敎之本、禮之大參也（註）言[illegible]者[illegible]也、大[illegible]取ニ象法於月一也、○成魄普伯反、參七南反

疏　賓必至ニ參也一○正義曰、此一節更總ニ言鄕飲酒禮、坐位所レ在、并明ニ三揖三讓、每レ事皆三以成一レ禮○產ニ萬物一者聖也者、聖之言生也、東方產ニ育萬物一、故爲レ春爲レ聖○養レ之長レ之、假レ之仁也者、假大也、謂下養ニ育萬物一、長レ之使中大、亦爲レ仁、於ニ五行一春爲レ仁、夏爲レ禮、今春爲レ聖、夏爲レ仁者、春夏皆是生育長養、俱有ニ仁恩之義一、故此夏亦仁也、聖既生物、以レ生ニ物於春一、如ニ通明之聖上、故東方爲レ聖也、各以レ義言レ之、理亦通也○中者藏也者、此言北方主レ智、亦爲レ信也、若以ニ五行一言レ之

則爲レ信、若以二其生長收藏一（生長收藏或作二萬物歸藏一）言レ之則爲レ藏也○介必東鄕、介二賓主一也者、主人獻酬之禮、既行就レ賓（主人獻酬之禮、行既就賓、或作下主人獻レ賓、將二西行一就上レ賓）賓又南行將レ就二主人一、介在二西階之上一、以介閒在（介閒在或作二介閒陽一）於賓主之間一也○主人者造レ之、產二萬物一也者、釋下所三以主人居二東方一之義意上、東方產二育萬物一、主人共二客所一レ須、故主人造爲下產二萬物一之象上者也○月者三日則成レ魄者、謂二月盡之後、三日乃成下魄、魄謂二月輪生傍有二微光一也、此謂二月明盡之後而生下魄、非二必月三日一也、若初以二前月大一、則月二日生レ魄、前月小則三日乃生レ魄、○三賓者爲二政教一之本者、凡建レ國既立二三卿一、助レ君治レ國、今鄕飮酒立二三賓一、亦象三國之立二三卿一、故云二政教之本一也（註）言禮者陰也、大數取二象法於月一也 ○正義曰、樂既爲レ陽、故禮爲レ陰月是陰精、故禮之大數、取二法於月一也

大學養老篇附錄 終

寛保癸亥春三月

東都　書坊　淺倉屋久兵衛

都鄙問答

石田勘平著

都鄙問答目次

卷之一

卷之二

卷之三

卷之四

都鄙問答卷之一

石田勘平著

都鄙問答ノ段

大哉乾元萬物資始、乃統レ天、雲行雨施、品物流レ形、乾道變化各正ニ性命一也、天ノ與ル樂ハ、實ニ面白キアリサマ哉、何ヲ以テカコレニ加ヘン

或時故郷ノ者來テ曰、頃日出京致シ、親類ドモ方ニ罷在候トコロ、或學者參ラレ物語ノ上、汝ノ噂出申候、夫ニツキ、尋度子細有テ來リ、是マデ在所ニテノ噂ニハ小學抔ヲ講ゼラレ、少々宛ハ門人モ聚ラルヽト聞、影ナガラモ喜シク思ヒ侍シ所、彼學者申サレケルハ、彼ハ異端ノ流ニテ儒者ニテハ無トイヘリ、依テ其異端ト云ハ、如何ナル義ゾト問ケレバ、異端ト云ハ聖人ノ道ニアラズ、其者ガ別ニ私意ヲ以テ敎ヲ立、世上ノ愚ナル者ヲ誣ヒ晦マセテ、性ヲ知ノ心ヲ知ルノト、向上ノ論義ヲ爲、人ヲ惑スコトナリ、性ヲ知ルト云ハ、古ノ聖人賢人ノコトニテ、後世ノ人及ベキ所ニ非トイヘリ、我此ヲ聞ヨリ思ヘバ、人ヲ惑スコトハ、山賊強盜ヲ爲スヨリハ其罪ハ甚シカラン、餘笑止ニ思ハレ如レ此云也、汝故郷ヘ歸居ルヽ共、只口ヲ養ハヽ、心易キコトナリ、口一ツ養ントテ、人ヲ迷スハ哀シキコトナリ、如何心得ラレ候ヤ

答、厚キ志シ過分ノ至也、先今日教ヲナス志ヲ語ン、「孟子曰、人之有レ道也、飽食煖衣、逸居而無レ教、則近ニ於禽獸一、聖人有レ憂レ之、使ニ契爲ニ司徒一、教以ニ人倫一、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信、」此五ノ者ヲ能スルヲ學問ノ功トス、是ニテ古人ノ學ト云者ヲ知ルベシ、論語學而ノ篇ニモ大抵皆本ヲ務ヿヲ多クセリ、人倫ノ大原ハ天ニ出テ、仁義禮智ノ良心ヨリナス、「孟子又曰、學問之道無レ他、求ニ其放心一而已矣、」此心ヲ知テ後ニ、聖人ノ行ヲ見テ法ヲ取ベシ、君ノ道ヲ盡玉フハ堯ニアリ、孝ノ道ヲ盡玉フハ舜ニアリ、臣ノ道ヲ盡玉フハ周公ニアリ、學問ノ道ヲ盡玉フハ大聖孔子ナリ、此皆孟子ノ所謂、性ノマヽニシテ、上下天地ト流ヲ同ス、聖人ハ人倫ノ至ナリ、如レ是君子大德ノ行跡ヲ見、此ヲ法トシテ五倫ノ道ヲ教、天ノ命ゼル職分ヲ知ラセ、力メ行トキハ、身脩テ家齊、國治テ天下平ナリ、「孟子曰、遵ニ先王之法一而過者未ニ之有一、」又曰、天下言レ性故而已、故以レ利爲レ本、」其性ト云ハ人ヨリ禽獸草木マデ、天ニ受得テ以テ生ズル理ナリ、松ハ緑ニ櫻ハ花、羽アル物ハ空ヲ飛、鱗アル物ハ水ヲ泳、日月ノ天ニ懸モ皆一理ナリ、去年ノ四季ノ行ルヽヲ見テ今年ヲ知リ、昨日ノ事ヲ見テ今日ヲ知ル、コレ即所謂故ヲ見テ、天下ノ性ヲ知ト云所ナリ、性ヲ知ル時ハ、五常五倫ノ道ハ其中ニ備レリ、中庸ニ所謂、「天命之謂レ性、率レ性之謂レ道、」性ヲ知ラズシテ、性ニ率フヿハ得ラルベキニ非ズ、性ヲ知ルハ學問ノ綱領ナリ、我怪コトヲ語ニアラズ、堯舜萬世ノ法トナリ玉フモ、是率レ性而已、故ニ心ヲ知ルヲ學問ノ初メト云、然ルヲ心性ノ沙汰ヲ除、外ニ至極ノ學問有コトヲ知ラズ、萬事ハ皆心ヨリナス、

心ハ身ノ主ナリ、主ナキ身トナラバ、山野ニ捨ル死人ニ同ジ、其主ヲ知ラスル教ナルヲ、異端ト云ハ如何ナルコトゾヤ

曰、彼學者ノ云ル而已ニ非ズ、其座ニ禪僧居ラレケルガ此僧ノ云ヘルハ、拙僧モ自性ヲ見タシト思ヒ、十五年程坐禪致トイヘドモ、今ニ此ゾト見性セズ、見性スレバ、飛揚ホド嬉コト有ト聞、然ニ心易知ラルヽト云ハ、紛レ者ニ達ハナシトイヘリ、且汝ノ云ヘル如ナレバ、知リ易キコトナリ、我等如キハ、心ノツカヌコトナレドモ、心ヲ付テ見ルナラバ、春ハ花サキ秋ハ實、冬ハ藏リ、人ハ人ノ道ヲ行ヒ夫ニテ知タルコトヲ毎日毎日講釋シ、家業ノ忙キ者ヲ寄聚メ、隙ヲ費サシムルハ如何ナルコトゾヤ、且汝ハ故ヲ見テ知ルト云、彼禪僧十五年ノ間、心ヲ盡テモ、性ヲ知リ得ルコト難シト云、然ヲ汝不學ノ身トシテ、知ルコト安シト云、彼此以テ疑ヒ多シ、此譯ハ如何

答、汝物語ノ僧ハ、未徹ノ僧ナレバ云ニ不レ足、定テ妙ヲ見ルコトアリト思フナラン、釋尊ハ曉ノ明星ヲ見テ大悟シ玉ヒ、唐土ノ靈雲ハ桃花ヲ見テ悟レシニアラズヤ、悟テ後ハ星ヲ月ト見ルベキヤ、又悟ザル前ニハ桃ヲ櫻ト見ルベキヤ、如何ゾ活潑端的ノ所ヲ知ラザル、信心不及ノ所ヨリ、無益ノコトニ十五年ノ間、精神ヲ費ハ惜哉、又汝我ヲ不學ト云ヘルハ、文字ニ疎ト云コトカ

曰、然リ

答、唐土ノ六祖ハ、一字ヲ不レ學トカヤ承ル、然レドモ達摩ヨリ六代ノ祖トナリ、禪ヲ今日マデ繼來ルハ

六祖ノ力ニ有トカヤ、然レドモ是ハ禪宗ノコトナリ、又我儒ニテ云ハヾ、「子夏曰、賢ㇾ賢易ㇾ色、事二父母一能竭二其力一、事ㇾ君能致二其身一、與二朋友一交言而有ㇾ信、雖ㇾ曰ㇾ未ㇾ學、吾必謂二之學一矣、」聖人ノ道ハ心ヨリナス、文字ヲ知ラズシテモ親ノ孝モ成リ、君ノ忠モ成リ、友ノ交リモ成リ、文字無キ世ナレ共伏羲神農ハ聖人ナリ、只心ヲ盡テ五倫ノ道ヲ能スレバ、一字不學トイフ共是ヲ實ノ學者ト云、且文學アル者ハ文質彬彬ノ君子トハ云ベケレド、常體ノ者ノ至ルベキコトニ非ズ、如何トナレバ、家業忙、記憶薄キ者多ケレバナリ、「子曰、行有二餘力一則以學ㇾ文、」聖人ノ學問ハ行ヲ本トシテ、文學ハ枝葉ナルコトヲ知ルベキコトナリ

曰、汝ノ云ヘル如クナレバ、文學ハ末ナルコト明ナレドモ、彼儒者ニ一言ニテ、身ノ修ルベキコトアリヤト問バ、汝ガ如キ四書ノ素讀モセザル者ニ、聖人ノ道何ヲ云ヒ聞センヤ、俗ニ聾ニ呫ト云如シ、耳ニ入ルコトナカルベシト云レタリ、又世間ノ人モ斯思ヘリ、然レバ汝ノ云ヘル所ハ誤リナリ、文學ナクテハ知ラルベキコトニハ非ズ、何程ニ云レテモ疑ナキコト不ㇾ能、又汝ハ何方ニテ學ビ、世間ノ學者ニ替タル敎ヲ弘ルゾヤ

答、替タル敎ニ非ズ、汝不審ノ所ヲ語ルベシ、我何方ヲ師家トモ定メズ、一年或ハ半季聞巡トイヘドモ我初心ト愚昧ノ病ヨリ、此ゾト心定ラズ、心ニ合ル所モナク、年月コレヲ歎シニ、或所ニ隱遁ノ學者アリ、此人ニ出會物語ノ上、心ノ沙汰ニ及シ所、一言ノ上ニテ先ニハ早速聞取テ、汝ハ心ヲ知レリト

思ラメド、未レ知、學ビシ所雲泥ノ違アリ、心ヲ知ラズシテ聖人ノ書ヲ見ルナラバ、毫釐ノ差千里ノ謬ト成ルベシト云ヘリ、然レドモ我云コト、先方ヘ聞ヘザルユヘニ、斯申サルヽト心得テ、幾度モ、論議ニ及トイヘドモ、背フ氣色見ヘズ、我益々合點ユカズ、或時彼人ノ云、汝何ノ爲ニ學問致シ候ヤ、答テ云、五倫五常ノ道ヲ以テ、我ヨリ以下ノ人ニ教ンコトヲ志ト云、彼人ノ云、道ハ道心ト云テ心ナリ、孔子曰、溫レ故而知レ新、可ニ以爲ヲ師矣、」故トハ師ヨリ聞所、新トハ我發明スル所ナリ、發明シテ後ハ學所我ニ在テ、人ニ應ズルコト窮ナシ、此ヲ以テ師ト成ベシ、然ヲ汝心ヲ知ザレバ、自迷居テ、且他モ迷セ度候ヤ、心ハ一身ノ主ナリ、身ノ主ヲ知ザレバ、風來者ニテ宿ナシ同前ナリ、我宿ナクシテ、他ヲ救ント云ハ覺束ナシト云リ、我見識ヲ云ントスレドモ、卵ヲ以テ、大石ニ當ガ如シ、言句吐コト不レ能、此ニ於テ茫然トシテ疑ヲ生ズ、實ニ得タルコトハ疑ナキ者ナリ、然ニ疑ノ發ハイマダ得ザルト決定シ、夫ヨリ他事心ニ不レ入、明暮如何々々ト心ヲ盡身モ勞、日ヲ過コト一年半計ナリ、折節愚母病氣ニ附、廿日餘看病セシニ其坐ヲ立出ケルガ、其時忽然トシテ疑晴、煙ヲ風ノ散スヨリモ早シ、堯舜ノ道ハ孝弟而已、魚ハ水ヲ泳、鳥ハ空ヲ飛、「詩云、鳶飛戾レ天、魚躍ニ于淵ニ」ト云リ、道ハ上下ニ察ナリ、何ヲカ疑ハン、人ハ孝悌忠信、此外子細ナキコトヲ會得シテ、二十年來ノ疑ヲ解、コレ文字ノスル所ニアラズ、修行ノスル所ナリ

曰、其子細ナシト會得セルトハ如何ナルコトゾ

答、此會得セシコトハ言ガタシ、然レドモ譬ヲ以テ其趣ヲ語ン、或ハ證文、印判抔ノ類、入用ノ時、器ヲ視共不レ見、又外ヲ尋レドモ不レ見、今日モ尋明日モ尋、又餘日モ尋レドモ不レ見、見ヌニ附疑ヒ起リ、取レハセスカ、證文ナドハ、反古ニマギレテ遣ハセヌカ、落ハセスカト、種々ニ疑オコルモノナリ、餘リ見ネバ最早是非ナシト思ヒ、他ノ用事アツテ取マギレ居トキ、忽然ト思ヒ出コトアリ、思ヒ出ハコレモ文學ノ及バザル所ナリ、其時ニコソ、前ニ盗レヤセン、落ヤセント思ヒシ疑モ忽チ晴ルナリ、心ヲ知モ其如ク、闇夜ノ忽ニ明、一天照然トシテ明カナルガ如シ

曰、然ラバ心ヲ知ルトキハ、直ニ賢人ニテ候ヤ

答、否、身ニ行ザレハ賢人ニアラズ、知ル心ハ一ナレドモ、力ト功トハ違アリ、聖賢ハ力強シテ功アリ、中庸ニ所謂安ジテ行フハ聖人ナリ、利シテ行フハ賢人ナリト云コレナリ、我等如キハ力弱シテ功ナシ、或ハ勉強シテ行フ是ナリ、然レドモ心ヲ知ルユヘニ、行ハレザルコトヲ困、困トイヘドモ行ヒオホセ、功ヲナスニ及デハ一ナリ、

曰、道ハ樂ムベキコトナルヲ、困ムコトヲ學ブトハ如何ナルコトゾ

答、譬バ此ニ相駕籠舁二人ノ者アラン、一人ハ力強、一人ハ力弱、強ハ苦マズ、弱ハ苦シム、苦メドモ駕籠ヲ舁ユヘ飢コトヲ免ル、駕籠ニ出ザレバ、乞食ト成テ路道ニ立ナリ、道ヲ行フコトモ如レ此、我ラ如キハ力弱駕籠舁ニ同ジ、苦ミナガラモ行フユヘニ、不義ニ陷イラズ、是ヲ以テ心安シ、又心ヲ不レ知者

ハ、常ニ苦ミ有テ、言葉ノ上ニ見ル、然レ共ソノ耻ヲ不レ知ユヘニ、學ブ志立ザルナリ

曰、汝ノ云ヘル行ヒト云ハ、禮儀三千三百ヲ習ヒ、威儀ヲ正スルヿニ候ヤ、左樣ノコトナレバ、我等如キ農人ナドノ行フコトハ叶ザル所ナリ、彼學者ノ云如ク、不學者ノ及ベキコトニ非ト云ルモ理ナリ

答、否左ニハアラズ、汝ノ云ヘルハ、孔子子張ヲ謂テ、師ハ辟ナリトノ玉フ所ナリ、辟トノ玉フハ、威儀ニ習テ實少ヲ云、行ヒノコトヲ汝ガ聞易所ニテ語ン、行ヒト云ハ農人ナラバ、朝ハ未明ヨリ農ニ出テ、夕ニハ星ヲ見テ家ニ入、我身ヲ勞シテ人ヲ使ヒ、春ハ耕シ、夏ハ芸、秋ノ藏ニ至ルマデ、田畠ヨリ五穀一粒ナリトモ、オホク作出スコトヲ忘ズ、御年貢ニ不足ナキヤウニト思ヒ、其餘ニテ父母ノ衣食ヲ足シ、安樂ニ養、諸事油斷ナク勉時ハ身ハ苦勞ストイヘドモ、邪ナキユヘニ心ハ安樂ナリ、身ヲ肆ニシ、年貢不足スル時ハ、心ノ苦ト成、我教所ハ心ヲ知テ、身ヲ苦勞シ勉レバ、日々ニ安樂ニ至ルコトヲ知シム、心ヲ知テ行トキハ、自威儀正クナリ、安キヲ知ルコトナレバ何ヲカ疑ンヤ

曰、知ル者ノ善ナルコトハ、聞ヘ侍リキ、然レバ少シニテモ聞タル者ハ彌進ベキコトナルニ、前方ハ汝ノ方ヘ進來レドモ、今ハ少シ緩者有ト云コトハ如何

答、左樣ナル人モ有、其人最初ニ思フヤウハ、今マデ遊興ヲ好ム心モ、利欲ニ耽ル心モ、柔弱モ忽ニ止、心清淨ニシテ、樂ベシト思ヒシ所ニ、忠孝ト家業ヲ精ニ入レ、身ヲ敬ザレバ、安樂ニナラレズ、舊染(ナジミ)ノ人欲出テ行ヒ難シ、行ハザレバ心ヲ欺、道心ト人心ト戰ユヘニ中ヲ苦ム、後ハ善カラント思ヘドモ、

當分ガ窮屈ユヘニ、進マザル者アリ、「孔子曰、困而不ㇾ學、民斯爲ㇾ下矣」トノ玉フコレナリ

曰、然ラバ知トイヘドモ、悦ビ來ザル者ハ、益ナキコトニ候ヤ

答、其者當分ニハ、不義ハ行マジキト思ヘドモ、修行ノ功ナキユヘニ人心ト道心ト離テ分ズ、然レドモ一度道ヲ聞テ、不義ヲ悪コトヲ知レバ、此程ノ益ナリ、不義ヲ嫌ハ善ナリ、急々ニ進ザルハ柔弱ノ致處ナリ、又曾子孟子ノ如キハ行謹テ上達シ玉ヘリ、依テ仁以爲㆓己任㆒、又養㆓浩然氣㆒ニ至レリ、今云所ハ、性ヲ知ルヲ先トス、性ヲ知レバ行ヒ至リ易ノ道ナリ、孟子モ人ヲ導玉フハ、性ヲ知ルヲ先トシテ教玉フ、依テ最初ヨリ性ハ善ナリトノ玉フ、此孟子發明シ玉フ所ニシテ、前聖ノイマダ發セザルトコロナリ、知テ行ヒニ至ルコトハ早シ、行ヒオホセテ至コトハ遲シ、故ニ性ヲ知ルヲ先トシ玉フ、今教ヲ立モ此ニ倣ヒ、法ナキ道ヲ弘ルニアラズ、我因所ハ孟子ノ「盡ㇾ心知ㇾ性則知ㇾ天」ト說玉フ、我心ニ合ヒ疑ナキヲ以テ、教ヲ立モトトス、「求ㇾ觀㆓聖人之道㆒者、必自㆓孟子㆒始」ト、序說ニモ見ヘタリ

曰、彼儒ノ云、汝ハ詩作文章ニ疎キ由ヲ聞ク、若儒者タルモノ諸侯方ヘ召出サルヽコト有テ、詩文ナドヲ好セタマハヾ、如何スベキ、文學ナクシテ儒者トハ云レマジト云如何

答、然リ、我等如キハ文字ヲ正ナハ、手紙一通モ書得ザル者何方ヘ出ベキヤ、拙ヲ知テ出ザレバ恥ヲ受コトナカルベシ、元來儒者ハ民ニ從者ナリ、論語ニモ仁ヲ問ヒ政ヲ問コト多シ、詩作文章ニ及ブコト少ナリ、孔子ハ德ニ至リ仁ヲ全スルコトヲ教玉フ、孟子ハ其仁ヲ知ルコトヲ教玉フ、依テ心ヲ盡シ性ヲ

知ルト說玉ヘリ、文學ハ末ナルコト明ナリ、然ルニ詩作文章バカリヲ儒者ノ業ト思ヘルハ僻ナリ、二子曰、誦二詩三百一、授レ之以レ政不レ達、使二四方一不レ能二專對一、雖レ多亦奚以爲」ト、專對ルハ心ナリ、詩三百ヲ誦ハ文ナリ、和漢トモニ小事ヲ見テ、大事ヲ見ル者少ナリ、陋哉文學ニ伐、文藝モ道ノ助トナレバ、令ルコトニハアラズ、愚文學拙ヲ以テ悔トイヘドモ、民間ニ產、家貧シテ、學ブベキ暇ナク、四十餘ノ比ヨリ此道ニ志、如何シテ文學マデニ至ベキ、只恥ベキハ何方ヘ一箇ノ饋ルトモ、文字ニ於テ誤コトゾ多カルベシ、見人コレヲ用捨有ランコトヲ願フ

孝ノ道ヲ問フノ段

或問曰、我若年ノ比ハ、前後ノ辨モナキコトナレバ、親ヘ不孝ノコトモアルベケレドモ、最早壯年ノ比ヨリハ、孝行ノ心付モ有ユヘニ、何ノ不孝モイタサズ、隨分心一盃ニツトメ候ヘドモ、是ホドノ孝行ハ、世間ニモ有ルコトナレバ、天下ニ誰ト名ヲ呼ル丶ホドノ、孝行ヲ勤見申度候、如何樣ニ致シ然ルベク候ヤ

答、父母ノ心ニ逆ハズ、我顏色溫和ニシテ、親ノ心ヲ痛ザルヤウニ事ラバ、孝行トモ云ベキカ

曰、父母ノ心ニ逆ザルト、顏色溫和ニスルコトハ、輕コトニテ勤リヤスキコトナリ、タトヒ能スレバトテ、內證ノコトナレバ、世ニ呼ル丶程ノコトハ有マジク候、我云所ハ他人ノ目ニモ、發知ト言ホド

ノコトヲ勉見申度候

答、汝ノ云ル所ハ、名聞ニテ眞實ヲ以テ、父母ニ事ト云モノニアラズ、其名聞アレバ、利欲モ甚多カラン、名利ノ勝者ハ、必仁義ノ心薄シ、孝行ハ仁義ノ心ヨリナス者ナリ、有子曰、君子務ㇾ本、本立而道生」ト、根本既立トキハ、其道自生、本トノ玉フハ、親ニ事ルノコトナリ、名ヲ求ルハ譽ヲ喜ナリ、我名ニ著スル者、豈孝ヲ知ベキ、汝ハ父母ノ心ニ逆コトナシト云、然ルニ去暮伯父ノ方ヨリ、少々ノ銀子借用ニ來リシ所、兩親ハ用達度由申サレケルニ、汝不得心ニテ少モ不ㇾ借ユヘ、親達難儀ニ思ハレ、向後外ノ事ハ、儉約モ致スベク間、此度ハ用立遣スベキヨシ、再三申サレシカドモ汝聞分ナク終ニ借ザルヨシ、其爭時モ顏色温和ニ候ヤ、人ニ爭トキハ、温和ナラザル者ナリ、夫ニテモ逆ザルト温和トノ二ツ、心易勉ルト云ハ如何ナルコトゾヤ

曰、孝經ニ、父有二爭子一則身不ㇾ陷二於不義一、故當二不義一則子不ㇾ可三以不ㇾ爭二於父一ト、爭トキニハ如何ゾ温和ナルベキ、父母ニ不義アルトキ爭コトハ、聖人トイヘドモ有ルコトナリ、我爭モ是ニ效ヘリ、去冬伯父ガ方ヨリ銀子借用ニ來シトキ、親ドモ貸度思フコトハコレ不義ナリ、伯父モ前方トハ違勝手モ貧、何返トタシカニ心當ナキコトナリ、其返覺モナキ所ヘ、積ナク貸ト云ハ前後ノ辨ナキコトナリ、ケ樣ナル不義ヲ云ルヘトキハ、親トイヘドモ爭ズハ有ベカラズ、タトヒ父母如何樣ニ云ヘバトテ、家ノ害アルコトハ成難候、我貸ザルハ後々ニ至テ、親ニ不自由ヲサセマジキ爲ナリ、手前ニ損アルコトヲ堪忍

シ、而前ニ從フハ、父母ニ甘毒ヲ食セルガ如シ、其毒ヲ與ヘザルハ實ノ孝ト云ベシ、其ウヘ衣類食物ハ、望ノ通ニイタサセ、遊興物參等心任ニ致コトナレバ、大概ノ孝行ハ致シ候、但年中ニ算披程ノコトナケレバ、孝行ノ至トハ云ザルコトニ候ヤ

答、汝モ少ハ學問ヲ致サレシト見エテ、孝經ヲ引用トイヘドモ盡不意ニ違ヘリ、「父有ニ爭子一則身不レ陷ニ於不義ニ」トノ玉フハ親無道ニシテ、欲惡甚シク、或ハ君ヲ弑シ、國ヲ奪、下タル者ハ盜ナドヲナス、大ナル不義アル時ハ善ニ遷シメン爲ノ爭ナリ、汝ハ親ニ仁義ノ心有テ人ヲ救ヲ、我不仁不義ヲ以テ拒キ爭ト云モノナリ、子トシテハ親ヲ善ニ導ベキヲ、反テ惡道ヘ陷イレシムルコト有ベキヤ、汝ノ如ク書ヲ見ナス者モ、學問セシ者ト云ハド、世ノ人學問ハ不仁ノ本ナリト思ベシ、然ル時ハ學問ヲ廢ル罪人ナリ、元來世間ニ書ヲ讀而已ヲ學問ト思ヒ、書ノ心ヲ知ラザルニヘニ汝ガ如ク見誤ルコト多シ、總テ經書ハ聖人ノ心ナリ、聖人ノ心モ我心モ心ハ古今一ナリ、其心ヲ知テ、書ヲ見ル時ハ、書ノ意味ハ掌ヲ見ルガ如シ、汝ガ義ト云ハ盡ク不義也、兩親ノ心ハ義ニ合ヘリ、兄弟ヲ舍ザル志、左モ有ベキ事ナリ、伯父ハ親同前ノ事ナレバ、假令兩親共ニ、貸コト成難ト云ルトモ、兩親ヘ願、少ノコトハ合力ニテモ致ベキコトナルニ、反テ親ノ志ニ背ハ、親ヲ無スル罪人ナリ、其罪ヲ知ラズシテ、孝行ヲナスト云、其愚昧ハ論ズルニ不レ足

曰、汝ガ云ル所、心得難コトアリ、世間ヲ見ルニ、吝シテ家業ニ精ヲ入金銀ヲ持、父母ニ不自由ヲサセ

スヤウニ養バ、假令親類ヘ屆ザル仕方アリトモ、不孝者トハ云ズ、身持ヨキ者ナリト云、然ルヲ汝ハ彼ラモ皆惡人ニテ不孝者ト云ベキヤ

答、カクノゴトキ者ヲ、世間並ノ人ト思フベケレド、親ヘツカフル道ハ曾テ知ザル者ナリ、汝ハ書ヲ讀ナガラ、書ヲ讀ザル愚昧ノ者ヲ法トスルユヘニ、父母ニ事ル道ヲ不レ知、「昔公明宣、學ニ於曾子ニ三年不レ讀レ書、曾子曰、宣居ニ參之門ニ三年、不レ學何也、公明宣曰、安敢不レ學、宣見ニ夫子居テ庭、親在叱咤之聲未ニ嘗至ニ於犬馬ニ宣說レ之學而未レ能」ト云ヘリ、曾子ノ如キハ親ノ前ニテハ犬ヤ馬サヘ怒テ叱玉ハズ、然ルニ汝ハ、只養ヲ孝ト思ヘリ、「子曰、今之孝者、是謂ニ能養ニ至ニ於犬馬ニ皆能有レ養、不レ敬何以別乎」ト、如レ是ナル時ハ父母ニ事フル道ハ、愛ト敬トノ二ツ也、愛ハイツクシミアイスル心ナリ、敬ハツヽシミウヤマフ心ナリ、然ルニ汝ハ、父母ノ命ヲ用ヒズシテ心ヲ痛シム、心ヲ痛シムルハ愛心ナキガ故也、命ヲ不レ用ハ敬心ナキガ故ナリ、愛敬ノ心ナキハ鳥獸ニ同ジ、汝ハ世ニ呼ルヽホドノ孝ヲ問、聖賢ノ孝ヲ聞ントハ思ハズ、早ク愛敬ノ心ヲ知ベシ、愛敬ノ心ヲ知バ、聖賢ノ孝ニモ到ルベシ

曰、我問所ハ、親ニ事フルノ丁也、其急ナルコトヲ差置、只一通ニ心ヲ知レトハ如何ナルコトゾ

答、汝ハ損アル事ニハ從ヒ難シト云リ、從ザレバ逆ナリ、親ニ逆ヨリ大ナル不孝アランヤ、然ルニ費有コトニ從ハ、義ニ合ザルト思ヘリ、コレ心ノ暗ヨリ、是非分ザル所ナリ、我云所ハ悉親ニ事ル道ナレドモ、汝聞得コトアタハズ、是心ヲ知ザルユヘナリ、因テ心ヲ知ル事ヲ急務トス

曰、損アル事ニ從ヘバ、先祖ノ家ヲ破ル道アリ、是是非善惡分ル、ユヘナリ、然ヲ是非シラズトハ如何ナルコトゾ

答、汝ノ云ル所、一ツトシテ是非分レズ、是非ヲ論ズルハ他人ノ事ナリ、父母ニ對シテ是非ヲ論ズルモノニアラズ、況汝ノ父母世間ニ對シテ惡舗コトアルニ非ズ、親類ヲ救フ仁愛有コトヲ知ズシテ、却テ親ヲ不義ノ人ト云ハ哀キコトナリ、今汝ノ家財ハ親ヨリノ讓カ、但自身カセギ出シ、其財ヲ以テ父母ヲ養レ候ヤ

曰、兼テ汝モ知ル、如ク、親ノ讓ノ外、我財寶ト云ハナシ

答、左程ノ家財ヲ讓ラレシ父母少々費アレバ迚、家ノ立ザルホドノコト有ベキヤ、親ノ財寶ナレバ、假令ツカイ舍ラル、トモ心マカセナルベシ、財寶盡ナバ、如何樣ノ賤キ働ヲシテ成トモ養ベシ、若又此ニ人有テ身ヲ舍、苦勞シ得タル寶ナレバ、父母ヲ養コトナラズト云テ飢凍者アラバ、コレハ尤ナリト汝ガ心ニ許スベキヤ

曰、否、我寶ニテ養事ハナラズト云テ、父母ヲ飢凍者、夫ヲ人トハ云レマジ

答、汝モ人ノ是非ヲ知ルコトハ明ナリ、然ルニ親ノ寶ヲ親ノ心ニマカセザルハ如何ナルコトゾ、唐土舜王ハ大孝ノ君ナリ、親ノ爲ニハ天下ヲ棄コト、敝タル蹝（ワラグツ）ノ如クニ思召ト、ケ樣ナルコトヲ知ルベシ、財寶ハ云ニ及バズ、元我身ハ親ノ身ナレバ遣タキ樣ニツカヒ、賣タクバ賣テ遣ル、トモ、汝ガ言分ハ

ナキ筈ナリ、親ノ財寶ヲ以テ父母ヲ養ヒ、其餘ヲ我身ノ養ノ期ニセル心アラバ、父母ノ短命ヲ待ニ似タリ、其機內ニ動トキハ、必外ニ發シテ父母ノ氣ヲ痛ルコト多カルベシ、醫書ニ百病ハ氣ヨリ生ズト云リ、コレヲ以テ見レバ、父母ノ心ヲ痛マシムルホドノ不孝ハナカルベシ、昔衞ニ宣公ト云君アリ、其嫡子ヲ伋ト云、後ニ又宣公齊國ヨリ宣姜ヲ妻リ、宣姜二人ノ子ヲ產リ、兄ヲ壽ト云、弟ヲ朔ト云、宣姜ト朔ト二人シテ、伋ガコトヲ宣公ニ讒ニ言ナシケレバ、宣公宣姜ニ溺レテ伋ヲ惡ミ、齊ノ國ニ遣ハシ、賊ヲシテ路ニ待ウケテ殺シメントス、壽コレハ母ト朔トガ惡事ナリト知テ、兄ノ伋ニ告ゲ命ヲ助ント思ヘリ、伋ガ曰、父ノ命ナリ、逃ベキニアラズト云テ入レズ、壽センカタナク伋ガ齊ニ使スル驗ノ旌ヲ竊執テ兄ノ身ニ代、死セン爲ニ先ヘユク、賊アヤマツテコレヲ殺ス、後ヨリ伋至テ曰、父ノ命ナリ、我ヲ殺セ、壽ニ何ノ罪ヤアラン、賊又伋ヲ殺ス、伋ハ父ノ命ヲ守、又宣姜ノ惡事ヲ見サズ、我身ヲ亡テモ逆コトナシ、汝ハ少々ノ金銀ニテ父母ノ命ニサカヒ、己ガ欲心ヲ以テ、親ノ心ヲ傷ム、聖賢ノ孝行ヨリ、汝ガ仕形ヲ見ル時ハ、木石ニ不異、退テ工夫セラルベシ

武士ノ道ヲ問フノ段

或問曰、我世悴今度武家方ヘ奉公ニ出シ申候、士ノ道如何申シキカセ、然ベク候ヤ

答、我農圃ニ生レ武ノ事委カラズトイヘドモ、書物ニテ見タル上ヲ以テ告ベシ、先君ニ事ル者ハ凡テ臣

ト云、臣ハ牽ナリト註シ、心常ニ君ニ牽ルヽナリ、又世間君ヨリ奉祿ヲ得ガ爲ニ、牽ルヽ如クニ見ユル者アリ、「子曰、鄙夫可ニ與事レ君也與哉、其未レ得レ之也、患レ得レ之既得レ之、患レ失レ之苟患レ失レ之無レ所レ不レ至矣」ト、毫釐ホドモ祿ヲノゾムニ心アラバ、君ヲ害フ本トナルベシ、古ヨリ不忠ヲナス者ハ、祿ヲ貪ル心ヨリナス所也、臣ノ君ニ牽レシ道ヲ見トナラバ、舜ノ堯王ニ事ヘ、伊尹ノ湯王太甲ニ事ヘ、周公旦ハ武王成王ニ事ヘ玉フヲ見ベシ、今君ニ仕ル者モ欲心ヲ離レ、古人ヲ見テ法ヲ取ベシ、其外殷ノ王子比干、コレ等ノ旁ハ皆義ヲ盡テ心常ニ君ニ牽レ玉ヒ、今ニ至テ臣ヲ正ス法トナリ玉フ

曰、我學問ナケレバ、六ケ鋪コトヲ問フニハ非ズ、只心得ヤスキヤウニ語ラルベシ、我一年參宮致シ、御師ヘ大神宮ノ御教ヲ示シ玉ヘト云ケレバ、此ノ神ノ御教ハ只正直ヲ以善トス、親ヘノ孝君ヘノ忠、直サマニシテ家業ヲ精ニ入レ、心ニ掛ルコトナク、其上ニ罪咎アラバ、其罪咎ハ某ガ受ント云ハレケリ、扨心易御教哉ト思ヒ、今少シ六ケ鋪教モアラバ示シ給ヘト云ケレバ、御師ノ云此ノコト心易勤リナバ、重テ告ント云レケリ、心易思ヒ勤見レドモ先正直ガ勤ラズ、孝ト忠トハ猶往ズ、其上家業ヲ精ニ入レ、心ニ掛ラヌ樣ニ勤ルコト、此身ノ一生ニテハ、勤ルベキトハ思ハレズ、思ヘバ思フホド、高大ナルコトカナト、感心致シ侍ルナリ、只ケ樣ニ心易告ラレヨト云

答、實ニ左モ有ベキコトカナ、「樊遲問レ仁、子曰、愛レ人問レ知知レ人」、仁知ハ大ナリトイヘドモ、此二語ヲ以テ盡シ玉フ、文字ニヨラズシテ、人ノ曉シ易キコソヨカラン、愚元來不學ナレバ幸ナル哉心易ク、汝

ガ身ニモ備リタルコトヲ以テ語ベシ、先手足ハ口ノタメニ使ルヽナリ、如何トナレバ口ガ物ヲ食ネバ、手足安穩ナルコト不レ能、コノユヱニ手足ガ苦勞シテ、一代口ノ爲ニ使ハルヽト云ヘドモ、少シモ不居ラシキコトナク、口ニ忠ヲ盡テ能ク事マツルモノナリ、君ニ事マツル道モ、手足ノ口ニ使ルヽコトヲ法トスベシ、臣下ノ飯ト汁ハ君ヨリ給ル奉祿ナリ、其祿ナクシテ何ヲ以命ヲツグベキヤ、コノユヘニ我身ヲ、委テ君ノ身ニ代、露塵ホドモ我身ヲ顧ザルハ臣ノ道ナリ、常ニ手足ガ口ニ使ルヽト、我身ノ君ニ事ルト、違フコトアラバ此ハ不忠ナリト知ルベシ、此ヲ法トセバ何國ニテ仕ルトモ、臣ノ道ヲ離ルルコトアルベカラズ、扱臣ハ政ニ從フモノナリ、下ヲ使ハ君ノ道ヲ以治ムベシ、古聖人ノ御代ニハ、君トシテハ萬民ヲ子ノ如ク思召、民ノ心ヲ以テ御心トナシ玉フ、「傳云民所レ好好レ之、民所レ惡惡レ之、此之謂二民父母一、此ユヘニ聖人ハ世ヲ沒玉ヘドモ、民思ヒ慕テワスレズト云リ、此味ヲ知ルベシ、忠義ノ臣ハ、名ヲ後世ニ殘シ、天下ノ人コレヲ愛ス、「禮曰、士四十志强立、不レ奪二於利害一、不レ怵二於禍福一、可二以出仕一」ト見ヘタリ、士ノ道ハ先心ヲ知テ志ヲ定ムベシ、「孟子曰、尙志何謂レ尙レ志仁義而已、殺二一無レ罪、非レ仁也、非二其有一取レ之非レ義、居惡有、仁是也、路惡有、義是也、又曰、舍レ生而取レ義者、此以患有レ所レ不レ辟也」士タル者ハコレヲ味フベキ所ナリ、又世ニ誤テ、武藝バカリヲ以テ、士ノ道ト心得ルモノアリ、實ノ志無ハ士ノ中ニ入ベキニ非ズ、「子曰、如有二周公之才之美一、使二驕且吝一、其餘不レ足レ觀也已」ト、心正ク直ナラバ他ニ不足有共猶士ト云ベシ、「孔子又曰、邦有レ道穀、邦無レ道穀恥也」ト、然バ治世ニ幸ヲ以祿ヲ

得、無役ニシテ食ヲ耻ベキヿ也、況ヤ君無道ニテ國治ラズ、然ルニ君ヲ正スヿ能ハズ、祿ヲ貪リ身ヲ退カザルハ、此又大ナル耻也、能々味フベキ所也、此志ノ大略ヲ云、事ハ士ノ家ニ入テ聞ルベシ

商人ノ道ヲ問フノ段

或商人問曰、賣買ハ常ニ我身ノ所作トシナガラ、商人ノ道ニカナフ所ノ意味何トモ心得ガタシ、如何ナル所ヲ主トシテ、賣買渡世ヲ致シ然ベク候ヤ

答、商人ノ其始ヲ云バ、古ハ其餘リアルモノヲ以テソノ不レ足モノニ易テ、互ニ通用スルヲ以テ本トスルトカヤ、商人ハ勘定委シクシテ、今日ノ渡世ヲ致ス者ナレバ、一錢輕シト云ベキニ非ズ、是ヲ重テ富ヲナスハ商人ノ道ナリ、富ノ主ハ天下ノ人々ナリ、主ノ心モ我ガ心ト同キユヘニ、我一錢ヲ惜ム心ヲ推テ、賣物ニ念ヲ入レ、少シモ麁相ニセズシテ賣渡サバ、買人ノ心モ初ハ金銀惜シト思ヘドモ、代物ノ能ヲ以テ、ソノ惜ム心自ラ止ムベシ、惜ム心ヲ止メ善ニ化スルノ外アランヤ、且天下ノ財寶ヲ通用シテ、萬民ノ心ヲヤスムルナレバ、天地四時流行シ、萬物育ハルヽト同ク相合ン、如レ此シテ富ミ山ノ如クニ至ルトモ、欲心トハイフベカラズ、欲心ナクシテ一錢ノ費ヲ惜ミ、靑戸左衛門ガ五十錢ヲ散シテ、十錢ヲ天下ノ爲ニ惜マレシ心ヲ味フベシ、如レ此ナラバ天下公ノ儉約ニモカナヒ天命ニ合フテ福ヲ得ベシ、福ヲ得テ萬民ノ心ヲ安ンズルナレバ、天下ノ百姓トイフモノニテ、常ニ天下大平ヲ祈ルニ同ジ、且御法

ヲ守リ我身ヲ敬ムベシ、商人トイフトモ聖人ノ道ヲ不レ知バ、同金銀ヲ設ケナガラ、不義ノ金銀ヲ設ケ、子孫ノ絶ユル理ニ至ルベシ、實ニ子孫ヲ愛セバ、道ヲ學デ禁ルコトヲ致スベシ

播州ノ人學問ノ事ヲ問フノ段

或時播州ノ者上京致サレ、宿ノ主同道ニテ來リ物語シテ曰、某コト倅一人持候所ニ、學問ヲ望ミ何トゾ少ノ間京都ヘ罷出、セメテハ小學ヤ大學ノ講釋ナリトモ承リ度ヨシ度々願ヒ候、汝ニ對テ物語ヲ致スコト、少シ遠慮ニ候ヘドモ、物語ヲ致スベシ、姬路近邊ニモ、内福ニテ田地高モ多ク持タル者ナドハ、學問ヲモ致サセ候處ニ、後ニ至テ難儀ノスヂモ出來申ヨシヲ承ル、一人ノ倅ノゾミ申ス事ト云、又少ハ目モ明テトラセ度候ヘドモ、人柄アシク成ベキヤト心元ナク存、得發申サズ候

答、學問ニ因テ、難儀アリトハ如何ナル事ゾヤ

曰、學問ヲサセ候者ドモ、十人ガ七八人モ商賣農業ヲ疎略ニシ、且帶刀ヲ望、我ヲタカブリ他ノ人ヲ見下シ、親ニモ面前ノ不孝ハイタサネドモ、事ニヨリテ親ヲモ文盲ニ思ヤウナル顏色見ユ、然レドモ他人ノ聞惡キ樣ニ、反リ返答セヌコトハ學問ノ德カト思ヘドモ、親ニハ默然トダマリ居ル者ゾト云ヤウナル顏ツキ見ヘ、又少シニテモ學問致タル者ナレバ、親達モ遠慮セラルヽ、體ニ相見ヘ申候、夫ユヘ手前ノ倅モ若左樣ニ成候ヘバ、迷惑ニ存ジ得發申サズ候、如何イタシ然ルベク候ヤ

答、學問ト云フ者ハ左樣ナルコトヲ直ス者ニテ候、實ハ御城下邊トハ申シナガラ田舍ユヘニテモ候ヤ

曰、左ニハアラズ、其中七八分ホドハ、京都デモ名アル衆中ニテ學ベル者ドモニテ候

答、汝ノ物語ヲ聞ニ、其學シ人ハ悉人倫ニ違ヘリ、敎ノ道ハ人倫ヲ明カニスルノミ、師タル者假令敵ニ敎ユレバトテ、聖人ノ道ニ背テ敎ユベキヤ、學問ノ道ハ、第一ニ身ヲ敬ミ、義ヲ以テ君ヲ貴、仁愛ヲ以テ父母ニ事ヌ、信ヲ以テ友ニ交リ、廣ク人ヲ愛シ、貧窮ノ人ヲ憫ミ、功アレドモ不レ伐、衣類諸道具等ニ至マデ約ヲ守テ美麗ヲナサズ、家業ニ疎ラズ、財寶ハ入ヲ量テ出コトヲ知リ、法ヲ守テ家ヲ治ム、學問ノ道有増カクノ如シ

曰、其中ニ心得ガタキコトアリ、衣類ニ美麗ヲナサズト云リ、先父母ハ我子ニ、他ヨリヨキ物ヲ著セタク思フハ親ノ心ナリ、ソレニ麁相ナル衣類ヲ着テハ、父母ノ心ヲ害フユヘ不孝ニアラズヤ

答、人ニ背キ麁相ニセヨト云ニハ非ズ、我言所ハ約ヲ守ルコトヲ云、道ニ明ナル父母ナラバ、如何ゾ禮ニ背キ奢コトヲ喜ブベキヤ、孔子モ「禮與ニ其奢ニ寧儉」トノ玉フ、然レバ禮ニ少カグル所アリトモ、奢ノ害ハ大ナリト知ラルベシ、又道ニ疎ク奢ヲ好ム、父母ニ盡心ニ合フコトバカリハ成リ難、成難コトヲ譬テ云ハバ、父母盜ガ好ナレバトテ盜ヲセラレンヤ、內證ニテ此ヲ止ルハ、眞實ノ心ヨリナス所ナリ、心ヲ知ル時ハ孝ノ道ヲソコナハズ、父母ノ惡事ヲモ止メ、父母ヲ道ニ向シム、又道アル父母ナラバ、心自ラ合フベシ、是學問ノ力ナリ

曰、汝ノ云ヘル知クナレバ、忰ニ學問サセテモ、大ナル蛇トモ成マジ、然レドモ或人ノ云ヘルハ、カヤウニ學者ノ風俗悪鋪ナルハ、弟子ノ難ニハアラズ、儒者タル人、聖賢ノ心ヲ知ラズシテ教ル故ニ、己ニ克チ禮ニ復ルヿヲ知ラズ、且我身ニ祿ノ望有ユヘ、禮ヲ以テ進、義ヲ見テ退コト能ハズ、其無禮ヲ學ユヘ、己ガ文學ニ伐、他人ヲ慢、コレ學問ノ害ナリ、其發ヲ原ヌレバ、師タル者ノ名聞ト利欲ノ心、自然ニ遷タル者ナリ、弟子ノ難ニハアラズ、師ノ難ナリト云フ人有リ、如何ナルコトゾヤ

答、汝左様ノコトハ云ザルモノゾヤ、「子貢謂ニ子禽ニ曰、君子一言以爲知、一言以爲不知、言不可不愼」ト、凡諸方ニ儒者ノ數、何程有コトハ知ラザレドモ、論語ヲ讀ザル儒者有ベカラズ、論語ノ序ニ「孔子及長爲委吏、料量平」ト、孔子大聖ノ徳有テ薪蒿材木ナドヲ、取集ル役目ヲ掌リ玉ヘドモ、不足ニ思召コトナキ故、料量平カニ勘定合ヘリ、是則天命ニ任セ玉フ所ナリ、又爲司職吏、其時ニハ役目ナレバ、牛羊ヲ畜玉フ、莊長トサカンニ長ジ、蕃ク生ル計也、此時ノ天命ニ安ジ玉フ、コレヲ法トシテ士農工商共ニ、我家業ニテ足コトヲ知ルベシ、論語ヲ讀ム者、カホドノコトヲ知ラザランヤ、凡テ道ヲ知ルト云ハ、此身コノマヽニテ足コトヲ知テ、外ニ望コトナキヲ、學問ノ徳トス、汝ノ云ヘル諸生ハ此訣サヘ知ラズシテ、帶刀ヲ望ミ、教ノ道ヲ聞得ズシテ、却テ師ノ難トナスハ誤ナリ、儒者タル者モ聖賢ニ至ザレバ、諸ノコトヲ皆ナ思ハザルニハ非ズ、思フトイヘドモ祿ニ志有テハ、仕ル者ニアラズト知ル、是ヲ以テ望ムヿヲ抑テ、不義ノ祿ハウケズ、今日我身ノアル所即天命トシル、此孔子ヲ法ニ取ユヘナリ、

此義ヲ知ラバ我職分ヲ疎ニスル心有ランヤ、且國主ヨリ召コトアラバ、我器量ノ拙コトヲ申立先辭退スベシ、豈仕フルト仕ヘザルトニ心ヲ動サンヤ、「孔子曰、沽レ之哉、我待レ賈者也、」待レ賈トノ玉フハ、士タル者ハ禮ヲ以テ招ルヽコト無ケレバ、飢テ死ストモ、此方ヨリ出テ仕ル者ニハ非ズトノ玉フコトナリ、此程明ニ說玉フコトヲ知ラズシテ論語ヲ讀ト云ルベキヤ、總テ仕官トナル者ハ、君ヲ正シ國ヲ治ル爲ナリ、少シニテモ祿ヲ求ル心ニテ仕ル者ハ、必ズ得タル祿ヲ失コトヲ恐ルヽモノナリ、祿ニ心有テ君ヲ諫メ正スヿハ思モヨラヌコトナリ、假令何程ノ書ヲ讀、世ニ博學ト召ルヽ共、君ヲ不義ニ陷イルル者ヲ學者ト云ルベキヤ、既冉求季氏ニ仕、柔弱ナル所ヨリ季氏ヲ諫ル事アタハズ、却テ附益コトヲナス、コレニ依テ孔子冉求ヲ深ク責玉ヘリ、若又祿ニ望有者君ニ仕ヘナバ、我身ヲ害ヒ耻ヲ受ベシ、扨又汝ハ儒者タル人、聖人ノ心ヲ知ラズトイフハ如何ナルコトゾ、心ハ身ノ主ナリ、且儒ハ濡ト云テウルホスト云コトナリ、身ヲウルホスハ、心ヨリウルホスコトヲ知ルベシ、孟子ノ一書モ、心上ヨリ說來ル、心ヲ知ル時ハ志强ク義理照カニシテ以テ上達スベシ、此心ヲ知ズバ昏昧トクラク放(ホシイマヽ)ニシテ、學問ニ從ト云ドモ、發明スル所アルベカラス、醫書ニ「以二手足痿痺一爲二不仁一」仁者ハ天地萬物ヲ以テ一體ノ心トナス、己ニ非ズト云コトナシ、天地萬物ヲ己トスレバ至ザル所ナシ、若心ヲ知ラズバ、天地ト己ト別々ニシテ、氣已不レ貫、手足ノ痿痺ル病人ノ如シ、聖人ハ我ガ心ヲ以テ天地萬物ヲ貫、凡テ師タルモノコノ心ヲ知ラズバ、何ヲ法トシテ敎、人ノ心ヲ正ンヤ、然ルヲ師家ニ立人、心ヲ知ラズト云、夫ハ汝

ノ在所ナドニテ、書物ヲ能讀、文字ヲ知テ敎レバ、是モ儒者ト思ナラン、若又聖賢ノ心ヲ知ラズシテ敎儒者アラバ、小人ノ儒ニシテ人ノ書物箱ト成ベシ、君子ノ儒ハ心ヲ正シ德ニ至ノ外他事アランヤ、我ガ文才ニ伐ラズ、利欲利聞ヲ離、道ニ志有ヲ君子ノ儒トハ云ナリ、然ルニ心ヲ知ルハ古ヘ聖賢ノヿニシテ、今ノ世ノ者知ラルヽヿニ非ズト云ハ、佛氏ノ末法萬年ト云敎也、一方ニテハ佛氏ヲ非リ、我勝手ニ合バ末世ハ衰ト云敎バカリ是トシテ、取用ルハ如何ナルコトゾ、聖人ハ百世モ變ラズトノ玉フニアラズヤ、此理ヲ不レ知シテ、書ヲ講ジ人ヲ敎ルコト成ベケンヤ

又問、然ラバ汝モ心ヲ知テ敎ラレ候ヤ、其心ヲ知ト云ハ如何ナルコトゾヤ

答、心ハ言句ヲ以テ傳ラルヽ所ニアラズ、心ハ譬ヲ以テ言者アリ、譬バ玉ノ鏡ノ如シ、四方上下ヲ照ス、程子所謂明鏡止水是也、又用ヲ以テ言者アリ、孟子所謂心ノ官ハ思フヿヲ司リ、飢テハ食ヲ思、渴ハ飮ヲ思フヿ、子曰、視思レ明、聽思レ聰、貌思レ恭ノ是ナリ、凡テ云ヘバ、聖人ハ天地萬物ヲ以テ心トシ玉フ、口傳ニテ知ラルヽ所ニ非ズ、我ニ於テ會得スル所ナリ、烝民ノ詩曰、有レ物有レ則ト、父子ノ間ニテ云ハヾ、父ノ慈愛有ハ父ノ心、子ノ孝行有ハ子ノ心、萬事ニソタリテ如レ此、是ハ聞ヘ易ガ如シ、然レドモ一度決定シ、疑晴ルコトナキトキハ正ク聞得ルコトアタハズ、此決定ハ信心堅固ニシテ致ス所ナリ、親ヨリ傳テ子ニ讓ルコト能ハズ、師モ弟子ニ傳コトアタハズ、我レ知レバ師ノ肯フ所ナリ、コヽガ孔子孟子モ言句ノ絕タル所ナリ、然ドモ天何言哉、四時行焉、百物生ズトノ玉ヘバ道ハ隱ルヽ所ニ非ズ、ケ樣ニ

說顯シ玉ヘドモ、此ノ四時行焉、百物生ズトノ玉フハ如レ何ナルコトゾト、心ヲ附ル人少也、莊子ニ所謂聖人ノ意ヲ知ラズシテ、書ヲヨムハ糟粕ニシテ實ノ味ハナク、皆糟ナリト云ヘリ、實ノ味ハ、桶大工ガ輪ヲ斲ゴトク、「徐則甘而不レ固、疾則苦而不レ入、不レ徐不レ疾、得ニ之手一應ニ之心一、口不レ能レ言」ト云モ面白シ、心ヲ知ラズシテ法ヲ說クハ、桶大工ノコトヲ傳聞テ、輪ヲ斲ガ如シ、心ニ得ザレバ桶ト成テ、水ヲ有ノ用ヲナサズ、教ノ道モ斯ノゴトシ、コノユヘニ心ヲ知ルヲ要トス、「子曰、七十而從ニ心所一レ欲、不レ踰レ矩」ト、如レ是心ノ欲ル通ヲ行玉ヒ、天下ノ法ト成玉フコトハ、賢人モ及バザル所ナリ、然レ共心ヲ知ル時ハ一ナリ、譬テ云バ水ノゴトシ、聖人ハ四海ノ水大船ヲ浮テ天下ノ財ヲ通用シ、萬民ヲ養ガゴトシ、賢人ハ大河ノ水一ケ國ノ財ヲ通ジ、一國ヲ養フガ如シ、我等ゴトキ小人ハ、小川ノ水五町カ七町ノ田地ヲ潤育フガゴトシ、世ヲ助ル上ニハ違アレドモ、漸ニシテ四海ニ到トキハ一ナリ、心ヲ知モ如レ是聖賢ニ至ルマデハ、上中下ノ替リアレドモ、學デ止ザル時ハ終ニハ聖賢ニ到テ一ナリ、我等ゴトキハ欲ル心ヲ抑ヘ惡ヲ懲シ困デ勉レバ、漸ニシテ至ラルヽコトヲ知ル所ナリ、客退ク

或人問テ曰、今吾ニ告ラルヽ如ナラバ、書ヲ講ジテ弟子ヲ集ル、世間ノ儒者ハ盡聖人ノ心ヲ識テ教候ヤ

答、否シカラズ、書ヲ講ズル而已ニテ眞ノ儒者トハ云ベカラズ、性ヲ知テ身ヲ濡ヲ儒者ト云、假令牛ニ汗シ棟ニ充ル程ノ書ヲ讀共、性理ニ暗キ者ハ、朱子ノ所謂、記誦詞章ノ俗儒ニシテ眞儒ニアラズ、汝モ何方ニテ儒ヲ聞ルヽトモ、其目利ヲセラルベシ、目利セザレバ、客ノ云ヘル如クニ、學問ニ依テ家

業疎末ニ成不孝ノ本ヲ習テ、身ノ害ヲナスベシ、心ヲ求得テ敎ルハ眞儒ナリ、孟子ノ所謂、「欲レ貴者人同心也、人人有二貴ニ於己一者上弗レ思耳」此味ヲ知ラルベシ

都鄙問答卷之一終

都鄙問答卷之二

鬼神ヲ遠ザクト云事ヲ問フノ段

或問、我朝ノ神ノ道ト、唐土ノ儒道トハ、異ナル所アリ、「孔子告二樊遲一曰、敬二鬼神一而遠レ之可レ謂レ知」ト有、我朝ノ神ノ道ハ左ニアラズ、然ルニ神ト云名ハ同フシテ、ケ樣ニ替アルコト如何

答、汝ハ我朝ノ神明ハ、イカヾ心得ラレ候ヤ

曰、我國ノ神明ハ馴親チカヅクヲ以テ本トス、遠クヲ以テ不敬トナス、因テ或ハ物ニ願ヒ望ムコトアレバ、願狀ヲ以テ神明ヲ祈ル、其願ヒ成就スル時ハ、始ノ願狀ノ如ク、鳥居ヲタテ社ノ修覆ナドヲス

ルコトナリ、ケ樣ニ人ノ願ヒナドヲ受入レ玉フ、然ルニ聖人ハ敬シテ遠クトノ玉ヘバ雲泥ノ違ヒアリ、是ヲ以見レバ、儒學ナドヲ好ム者ハ、我朝ノ神ノ道ニ背ク罪人トナルベシ

答、敬シテ遠クトノ玉フハ左ニハアラズ、外神ヲ祭ルハ敬愼而已ヲ主トス、此故ニ道ナラヌ穢キ願ヒヲ遠ザケ、又先祖ヲ祭ルハ孝ヲ主トス、是遠クニアラズ、扨敬シテ遠クトノ玉フニ、大ニ取違ヒ有コトナリ、神ハ非禮ヲ受玉ハズ、然レバ非禮ノ願ヒヲ以テ近ヅクヲ不敬トス、敬ヒテ遠クトノ玉フニハアラズ、汝ノイヘル如クナレバ、我朝ノ神ハ願狀ヲ籠テ、成就ニ至ル時ニハ、願文ノ通ニ鳥居ヲ立或ハ社ノ修覆ナド致ヲ敬ヒト思ワレ候ヤ

曰、然リ

答、然ラバ今此ニ人アツテイハン、汝ガ隣ノ娘ヲ倅ニ妻ハセ度候、媒イタシ臭ラレヨ、禮金ヲヤラント云ハヾ、身ノ辱メヲ不顧媒セラレンヤ

曰、夫ハ人ヲ賤タル待(アシラヒ)ナリ、金ニ目臭テ爭デ媒ノ成ベキヤ

答、汝モ羞惡ノ心有テ身ノ辱ハ受ザルナリ、況ヤ貴人ニ對シテ何ニテモ御願ヒ申ス時ニ此事成就ナシ被下ナバ、是程ノ金銀ヲ進ント云ルベキヤ

曰、貴人ヲ輕ズルニ似タリ、何トテ左樣ノコトヲイワルベキヤ

答、貴人ニ云レザル不義ヲ以テ、淸淨ノ神明ニ祈ヲ爲シ、願ヒノ通ニ成下サレナバ、鳥居ヤ社ノ修覆致シ

奉ラント云時、鳥居ヤ修覆ニ迷ヒ玉フアサマシキ神有ベキヤ、然ルヲ非禮ノ物ヲ推テ捧ゲ、神明ヲ穢奉リ、終ニハ神罰ヲ受ベシ恐ルベキコトナリ、「心だにまことの道にかなひなば、いのらずとても神やまもらん」トノ御神詠モ有ゾカシ、子路孔子ノ病ヲ禱ルヿヲ請、「子曰、丘之禱久」ト、禱ルトノ玉フハ、誠ノ道ニ合ヘルヿナリ、誠ニ合ハヾ何ゾ祈ヿアランヤ、然ルヲ我朝ノ神道ニ違フトハ如何ナルヿゾ、凡テ聖人ノ書ハケ様ノ迷ヲ解ベキ爲ノ書ナリ、書ニ依テ迷ハヾ書ノ無コソ勝ラン、古ヨリ神國ノクニ儒道ヲ用ヒ玉フヿヲ知ルベシ、我朝ノ神モ、非禮非義ノ賂ヲ好セ玉フベキヤ、清淨潔白ノ水上ナル故ニ、神明ト申シ奉ル、凡テ神信仰スル者ハ、心ヲ清淨ニスル爲也、然ルニ種々樣々ノ、非禮非義ノ願ヲ以テ朝暮ニ社參シ、色々ノ賂ヲ以テ神ニ祈ル、コレ不淨ヲ以テ神ノ清淨ヲ無スル者ナレバ、是ゾ實ノ罪人ニテ、神罰ヲ受ベシ「子曰、獲二罪於天一無レ所レ禱也」ト、聖人ハ天命ノ外ニ望ヿハ皆罪也、トノ玉フ、願ト云ハ多ハ手前ノ勝手ヅクナリ、手前ノ勝手ヅクヲスレバ他ノ爲ニ惡シ、他ヲ苦ルハ大ナル罪也、罪人ト成テ爭デ神ノ御心ニ合ベキヤ、萬民ニ隔ナキコソ神ナルベケレ、ソレニ一方ハ惡クトモ、一方ノ善樣ニ願ヒヲ叶ヘ玉ハヾ、贔負ノ沙汰ナリ、願ヒ叶フト叶ハザルトヲ譬テ云ハヾ、親ヨリ子ニ家督ヲ讓ル如シ、子ヨリノ願ハイラズ、身持正ケレバ家督ヲ受、又身持放埓ナレバ家督ヲ受ルヿ能ハズ、願ヒノ成就スルモセザルモ此ニ同ジ、天命ノ我身ニアルヿヲ知ベシ神ノ御心ハ鏡ノ如シ、何ゾ贔負ノ私有ンヤ、其ニ成レルヿ有バ神ノ納受ト云、是ヲ他人ハ聞テ、誰ハ何ヲ神ニ捧ラレシ故ニ彼願ヒ叶ヘリト云、

如レ此取沙汰スレバ、終ニハ神明ヲ賂取ノ神ト成、穢奉ルヿ哀キニ非ズヤ、是天命ヲ知ラザル故也

又問、或人云、「子曰、非ニ其鬼ニ而祭レ之諂也」祭ベカラズトノ玉フ、我朝ニハ土地ノ神、又太神宮トイヘドモ、御恩ノ爲ニ五穀ノ出來初穗ヤ或ハ神樂ナドヲ捧奉ルコトナレバ、兎角唐土トハ違有ト云リ、然ルニ汝神ハ一列ノ如クニ云ヘルハ如何ナルコトゾ

答、中庸ニ所謂、「鬼神爲レ徳其盛矣乎、體レ物而不レ可レ遺」ト云ヘリ、鬼神トハ天地陰陽ノ神ヲ云、「體レ物不レ可レ遺」トハ造化ハ鬼神ノ功用ニシテ、鬼神ハ萬物ヲ總主レルヲ云、又我朝ノ神明モ、伊弉諾尊伊弉册尊ヨリ受玉ヒ、日月星辰ヨリ萬物ニ至マデ總主リ玉ヒ、殘所ナキユヘニ唯一ニシテ神國トハ云ヘリ、コヽハ工夫有ベキ所ナリ、然レドモ唐土ニ替リ、我朝ニハ、太神宮ノ御末ヲ繼セ玉ヒ御位ニ立セ玉フ、依テ天照皇太神宮ヲ宗廟トアガメ奉リ、一天ノ君ノ御先祖ニテワタラセ玉ヘバ、下萬民ニ至マデ參宮ト云テ、盡ク參詣スルナリ、唐土ニハ此例ナシ、此國ニハ宗廟ト尊ユヘニ、神樂初穗ヲ捧奉ル、今日天下ノ萬民ヨリ君ヘ貢物ヲ捧ルガ如シ、然レドモ御祭禮ヲ其者自身ニ行フコトハ不レ能、國主トイヘドモ天子ノ御神事ハ行レザルコトナリ、其位ニアラザレバ祭ラズ、マツラザレバ唐土ト違ハナシ、語曰、三家者以レ雍徹、子曰、相維辟公天子穆々、奚取ニ於三家之堂ニ」ト、魯國ノ三家ハ大夫ノ身トシテ、天子宗廟ノ祭ニ歌サセ玉フ、雍ノ詩ヲ歌テ己ガ先祖ヲ祭リ、又泰山ニ旅リセントス、ケ樣ナル分ヲ僭、理ニ背コトヲナセバ、セマジキ事ヲスルユヘニ、其鬼ニ非ズシテコレヲ祭ルハ諂ナリトノ玉フ、且孟子モ社稷ノ神ハ

民ノ爲ニ立トノ玉フコトナレバ、出來初穗ヲ捧ル如キハ唐土ニモ有ルベシ、我朝ニモ初穗ヤ神樂ヲ捧グルヲ祭トハ云レマジ、譬バ祇園會御靈祭ナドモ其神ノ祭ナリ、其土地ニ住ミ障ナキコトヲ喜デ我身ヲ祝フト云モノナリ、又下々ニ何程サハリアリトテモ、御神事ハ行ハルヽナリ、コレニテ我祭リニアラザルコト明ナリ、俗說ニ不レ拘、本ヲ推テ工夫有ベキ所ナリ

禪僧俗家ノ殺生ヲ譏ルノ段

或禪僧來テ云、今日去方ヘ參リシニ子息ノ婚禮有トテ、魚類等ヲツカヒ生物ヲ殺シ殺生戒ヲ破リ、目出度コトニ物ノ命ヲ取ル、實ニ俗家ハアサマシキコトヲ爲シ、是ヲ嘉儀トスル哀哉ト云リ

答、汝佛法ヲ學ブトイヘドモ、小乘ヲ知テ、佛ノ大乘ヲ知ラザルハ惜哉

曰、知ラザルニアラス、如何ト云ニ佛法ハ先五戒ヲ有ツヲ第一トス、其中ニ殺生戒ヲ重キ戒トス、儒家ニテ云バ五常ノ仁ノ如シ、儒家ニ於テ仁ヲ害フ者ヲ善トスルコトアリヤ、汝ハ儒ヲ說クトイヘドモ、イマダ仁ノ意ヲ知ラザレバ聖賢ノ本意ニ闇シ

答、仁ハ慈愛ノ德有テ私心ナキヲ云、汝如キ私心ヲ以テ仁ヲ知ラルヽ所ニ非ズ、汝ハ禪家ヲ學ブトイヘドモ、其家ノ本意ヲ知ラザルト見ヘタリ、既ニ南泉和尚ハ猫ヲ殺シ、蜆子(ケンス)和尚ハ海老ヲ釣テコレヲ喰フ、所作ニ依テ見バ、此等ノ僧ハ殺生戒ヲ破ル惡僧ト云テ盡ク舍ンヤ、又汝日々ノ殺生擧テカゾヘ

ガタシ、先今朝ヨリ喰フ所ノ米ノ數幾粒ト云コトヲ知レリヤ

曰、五穀ハ非情ナリ、殺生ニハアラズ

答、大乘ノ法ニ、有情非情トヘダテ見ルコトアリヤ、隔アリト云ハヾ艸木國土ニ佛性ナシト云ベキカ、神代卷ニ曰、伊弉册尊曰、我千首ヲクビリコロサント曰、伊弉諾尊曰、我千首アマリ五百首ヲ生ントノ玉フ、此兩神ハ陰陽ノ御神ニテ御座、天地ノ間ハ自然ニ生殺トノ二ツ有コトヲ知ルベシ、今日物ヲ用ルモコレニ效ヘリ、萬物一理ニシテ輕重アリ、其次第タガハザルヲ以テ善トス、此理ヲ以テ天地ノ行ル丶コトヲ見ルベシ、强者ハ勝、弱者ノ負ハ自然ノ理也、近ク知ラント思ハヾ鳥獸ニテモ見ルベシ、鷲鷹ハ諸鳥ヤ畜類マデヲ取リ喰フ、又鵜ヤ鷺ハ魚類等ヲ取リ喰フ、雀ヤ其外小鳥ハ蜘蛛ヤ菜虫ナドヲ喰フ、犬狼ハ鹿猿等ヲ取リ喰フ、此等ノ類ハ殺生トセンカ、天道流行トセンカ、戒律モ天理ヲ不ㇾ知シテハ有タレザルコトヲ告ベシ、夏ニ至テ土用ノ時節ナドニハ、米ヲ舂置コト一兩日ニシテ、糠虫ヲ生ズ、此糠虫至テ微塵ノ如クニシテ見難シ、米ノ中ヘ手ヲ入シ時、其手ガ痒キ者也、其カユキ時ニ黑漆ノ器ニ米ヲ入レ、其米ヲ取テ其跡ヲ白日ニ能見レバ、動形見ユル者ナリ、定テコレヲ糠虫トイフナラン、假令五穀ハ非情ナリト云フトモ糠虫アレバ、殺生戒ヲ破ルナリ、戒律ノ僧ハ夏ニ至テハ五穀モ食フヿハナルマジ、不ㇾ食バ忽ニ死スベシ、コ丶ニ至リ喰フテ全ク有ツヿヲ知ルベシ、佛ノ敎ニ從テ戒ヲ有タント思ハヾ、先我ヲ離ヿヲ修行スベシ、此身コノマ丶ニテ地水火風空ナリト、一度見性スル時ハ我モ世界ノ一

物ナリ、其時ニ人ト糠虫トハイヅレガ貴カラン、至テ賤キ糠虫ヲ助テ、至テ貴キ人ヲ殺スヿハ成マジ、佛ハ無心ニシテ不可思議ヲ體トナス、其釋迦モ糠虫ノアル五穀ヲ食シ玉フ、然レバ貴者ノ爲ニ賤キ者ヲ殺スコトハ道玉ハズ、殺生戒ノ源モ如レ是、天理ヲ知レバ戒ハ易ク有ツベシ、神佛聖人ハ何レガ師ニモ弟子ニモアラズ、皆心ノ欲スル儘ナレドモ自天道ナリ、天理ヲ知ラズシテハ何レノ道ニモ合ベカラズ、獣シテ工夫セラルベシ、天道ハ萬物ヲ生ジテ其生ジタル者ヲ以テ其生ジタル物ヲ養ヒ、其生ジタル物ガ其生ジタルヲ喰フ、萬物ニ天ノ賦シ與フル理ハ同ジトイヘドモ、形ニ貴賤アリ、貴キガ賤キヲ食フハ天ノ道ナリ、又佛氏ニハ艸木國土悉皆成佛トイヘバ、萬物皆佛ナリ、然レドモ形ニ貴賤アリ、貴キ人間佛ガ、賤キ五穀佛果佛ヨリ水火佛マデヲ喰フテ、世界ハ立モノナリ、此理ヲ知ラバ聖人ノ物ヲ用ヒ玉フハ、貴キト賤キトハ禮ヲ以テ分ツ、貴キ者ノ爲ニ賤者ヲ用ユルコトヲ知ルベシ、證ヲ以テイハヾ借ハ貴ク臣ハ賤シ、賤キ臣、貴キ君ニカハリ死スルコトヲ聞、貴キ君ノ賤キ臣下ノ身ニ代リ死タル者ヲ未聞、此賤キガ貴キニカハルハ、天地ノ道ニシテ全ク君ノ私ニアラズ、聖人物ヲ用ユルニ、禮ヲ以テシ玉フハ即此所ナリ、此故ニ臣トシテ君ヲ棄ル者ハ賊臣ト云、汝モ今朝ヨリ幾萬共數知ラズ、五穀佛ト、果佛ヲ殺シ喰テ身ヲ育フ、然レドモ此理ヲ知ラズ、知ラザレドモ、暗ニ賤ヲ以テ貴キヲ育フ理ニ合ヘリ、汝小乘ニ拘テ我ハ殺生ハセズ、非情ノ物ヲ喰フト云ナレバ、草木國土皆佛ト說玉フ佛語ハ詐トスルヤ、是ヲ詐トセバ、佛經ハ皆破リ舍ベシ、舍ズシテ用ユト云ハバ、汝モ大佛ガ小佛ヲ喰テ殺生スルニ違ハナシ、

我ハ幾ノ殺生シ、身命ヲツナギ居ナガラ、俗家ハ目出度嘉儀ニ生物ヲ殺シ、淺間敷コト、云、佛ノ本意ヲシラズシテ他ヲ譏コト大ナル罪ナラン、汝如キ法ニ昧キ僧多キユヘニ、徒然草ニ僧ニ法有テ、法ヲ以テ身ヲ賊ヒ、又君子ニ仁義有テ、仁義ヲ以テ身ヲ賊フト譏レリ、君子ハ仁義アルニ由テ、君子トイフニ、如何ナル事ゾト、眼ヲツケテ見バ、孟子ノ「舜由ニ仁義一行、非レ行ニ仁義一也」トノ玉フコト明カナラン、無極ノ眞ヲ體トシ玉フ外ニ、仁義ト云名目アランヤ、無我ノ舜ナンゾ仁義ヲ期ニシテ行ヒ玉フベキ、聖人ノ道ハ、一理渾然タル所ヨリ行ハルヽコトヲ知リ、佛氏モ亦本來ハ無法ナリト會得セバ、兼好ニ譏ルヽヿモナカルベシ、汝禪家ヲ學ブトイヘドモ、本來ノ面目ハ不會ナリ、依テ俗家ニ目出度嘉儀ニ殺生スルハ、アサマシキコトナリト云、汝モ自性ヲ知ラバ五戒ハイフニ不レ及、百戒二百戒ニテモ有ベシ、忽ニスベキコトニアラズ、急々ニ會得アルベキコトナリ、此理ヲ得バ、其時ニコソ出家ハ出家ニテ、殺生戒ヲタモツト知ラルベシ、俗家ハ俗家ニテ目出度コトニ魚鳥ヲ用ヒテ善ナルヿヲ知ラルベシ、何ヲカ疑ヒ何ヲカアヤシマン、俗ト出家ト混雜スル者ニアラズ、我心易コトヲ以喩ン、先四體ハ一ツナレドモ首ハ上ニ有テ足ノ代ニハナラズ、足ハ又手ノ代ニハ遣レズ、口ハ體ヲ養フ入口ナレド目ノ代リニナラズ、耳ハ鼻ノ代リニ香ヲキカズ、凡テ天地ノ形ハ照然タリ、因テ物々此形替ニ因テ法アリ、其物ニ因テ法ハ替ルナリ、然ラバ何ゾ佛ノ法ヲ以テ、俗家ニ混雜シテ用ヒンヤ、心ヲ清スニハ佛法モ然ルベシ、身ニ行ヒ家ヲ齊、國天下ノ治ル法ニハ儒道ヲ以テ善トセン、海川ヲ渡ニハ船ヲ以テ善ト

ス、陸地ヲ行ニハ馬駕籠ヲ以テ善トス、佛法ヲ以テ世法ヲ治メントスルハ、馬駕籠ニテ海川ヲワタルニ同ジ、五戒ヲ有ツ身トシテ政ヲ行ヒ罪人ヲ殺スコトハ如何、又不レ殺バ政道立ベカラズ、刑罰ナクバ政ハ如何、汝ノイヘル所ハ水火ヲ一致ニセントイフガ如シ、一致ニセバ水ハ湯ト成リ火ハ消ベシ、水火ハ水火ト分レザレバ爭デ世ヲ助ン、此理如何

或人親へ仕(ツカヘ)之事ヲ問之段

或問曰、私祖父ノ時分ニ相勤候手代、只今ニテハ法體致シ居申候、コノ者毎々私ヲ不孝者ノ様ニ云ナシ、孝行イタセト、度々申シ候ヘドモ、私サノミ不孝ノ覺モコレナク候、分テ孝行トハ、如何様ニ致シ然ルベク候ヤ

答、孝行ト云ハ、只志ヲ養フヲ本トス、昔曾子ト云ヘル人ソノ父ヲ養フニ必酒肉アリ、食シ終テ膳ヲ除去ントスルトキ、父ニ請曰、此餘者誰ニカ與ヘ申サント問ヒ、若又アマリ有ヤ否ヤト問ヘバ、必アリト答フ、親ノ意ニ誰ニカ與ヘント思召サンコトヲ恐レ玉フ、如レ是志ヲ養ヒ親ニ事ルヲ孝行トハ云

曰、我父母ヲ養フニ、衣服食物ナド如何ヤウニイタシテモ、其善悪ヲ申スコトナケレバ、父母ノ志ヲ害スルコトハ有マジク存候

答、汝ハ父母ノ體ヲ養フヲ孝行ト思フ故ニ、禪門ガ忠義有テイヘルコトヲ聞タガヘリ、我ハ志シヲ養

フコトヲ云、我思ヒ當ル所ヲ以テ問ベシ、先汝ハ折々遊興ニ參ラレ、夜更歸ラルヽト聞ケリ、マコトニ左様ニ候ヤ

曰、我モ前方ハ度々出デ申候トコロ、親ドモ甚不屆ノ由ヲ申シ、當分禁足致スベキ旨申シ渡シ候ユヘ、私モ迷惑仕リ、禁足ノ請合致カネ候トコロ、右ノ禪門挨拶イタシ、若キ者ノヿナレバ、氣晴ノ爲ニ、月ニ一兩度ヅヽノ遊興ハ、免サルベキ由申シ、兩親トモニ得心致シ免シニテ出申候、又夜更歸リ候コトハ邇近ノヿユヘ緩ト慰ミ歸リ候、然レドモ父母ノ志ヲ害フホドノコトハ御座ナク候、元來親ドモ少氣ユヘ、家來ノ者ヲ起シ置クヿヲ氣ノ毒ニ存ジ、門ヲ叩セマジキ爲ニ、八ツ時分マデ相待居申候ヘドモ數度ノヿニアラズ、月ニ一兩度ノコトニテ、ソノ代ニ翌日ハ勝手次第寢ラレ候ヘバ、是モ傷ニハナリ申サズ候

答、汝遊興ニ出ルコト、邇近ノコトユヘ、父母ヲ夜更マデ、待セ置テモ苦シカラズト云ヘリ、先親ニ事マツル者ハ、夕ニハ遲ク寢朝ニハ早ク起テ、父母ノ安否ヲ問ハ子ノ道ナリ、ソレニ汝ハ身ノ遊興ノ爲メニ寒暑ノ苦ミモカマハズ、夜更ルマデ兩親ヲ待セ置キ、快ク遊興セラレ候ヤ、總テ待コトハ退屈ナルモノナリ、ソレハ待計ノコト也、兩親ハ汝ノ歸ラレシ顏ヲ見ルマデハ、酒ナドガ過ハセスカ、喧嘩ニテモシハセヌカ、寒ハ無カ、風ヒキハセマイカト、色々品々ニ思ヒ煩フ、且ニ內徒ノ者ノ心マデヲ推ハカリ、是ホド夜更シセラルヽヲ、兩親ハイフヿハ成ヌカト思フベキトノ心遣、又下女ヤ小者ハ草臥テ最早八ツモ過ルナドツブヤクヲ聞ク時ハ心ヲ傷ルコト多カルベシ、其苦ミ傷ルヽコトヲ不レ知、父母ヲ夜更ル

マデ待セオキ、翌日ハ勝手ニ寢ラルヽトハ、イカニ愚ナレバトテ、左樣ノ不孝ヲナシ、父母ノ志ヲ害フコトゾヤ、扨又汝ハ家業ノコトハ、如何心得キラレ候ヤ

曰、家業ノコトハ、イマダ心懸モナク候、子細ハ只今ニテハ朋友ノ交リ多ク、謠皷茶湯ナドモ心懸ナクテハ交リアシク候ユヘ、右ノ稽古ゴトニ取紛レ、家業ノ儀ハ、サシテ心ガケモコレナク候、コレハ手代ドモノ役目ナレバ、致サズトモ相勤リ候、然ルニ右ノ禪門親共ヘ申候ハ、惣ジテ家業ノコトハ、子供ノ時ヨリ見習セ置ルベキ由姦シク申候、ソレユヘニ、親父モ禪門ガ手前ヲ思ヒ、商賣ノコトモ見習ヨトハ申候ヘドモ、母ナド内證ニテハ彼禪門ガ云コトヲ甚腹立シ、主人ノ子ヲ澤山ソフニ我子ヤ孫ヲ云ヤウニイソレザル世話ヲシテ人ニ嫌レ、長命スルモノカナトイヘドモ、親父ハ又恐ルヽコトガアルカシテ、禪門ガ云コトハ一言ノ返答モセズ、聞テバカリ居申候

答、家業ノコトハ手代ニ任セ遊藝ニ鬧シキト云、汝今安樂ニ暮スハ、家業ノ影ニアラズヤ、職分ヲ知ラザルモノハ、禽獸ニモ劣リ、犬ハ門ヲ守リ、鷄ハ時ヲ告ル、先武士方ニ馬ヲ繋ルヽ程ノ人、騎ルコトヲ知ラザルハアルベカラズ、書翰ハ人ニ書セテモスム、我代リニ家來ヲ馬ニハ騎ラレマジ、商人トテモ我ガ職分ヲ知ラズバ、先祖ヨリ讓ラレシ家ヲ亡スニ近カルベシ、禪門ノイヘルモ此ナルベシ、其忠アル者ヲ母ノ腹立セラルヽハ、金言ノ耳ニ逆フト云モノナリ、臣ノ諫ヲ受入ルヲ眞ノ君ト云ベシ、然ルニ彼ガ長命ヲ嫌ハ、忠臣ヲ殺ンコトヲ願ナリ、此桀紂ニ替ハナシ、不忠ノ者バカリ殘リナバ、家ノ滅

亡ヲ待モノナリ、「傳曰、小人之使レ爲二國家一菑害並至、雖レ有レ善者亦無二如之何一矣」ト云リ、又親父モ家業ノコトヲ云ルヽハ、禪門ガ云ハセルコトヽト思ヘルハ、汝大ニ過テリ、禪門ガコト、理ニアタルコトユヘ、義ニ責ラレテ云ハルヽナリ、「孟子曰、家必自害而後人是害」ト、今汝モ職ヲ忘レ、身ヲ害コトヲナス、此コト得心ナクバ家貴果テ後ニ思シラルベシ、又汝ハ短氣ニテ毎々兩親心遣セラルヽト聞、イカナルコトゾヤ

曰、私生質短氣ニ御座候、コレハナホシ申度候ヘドモ、生質ユヘ是非ナク候、然レドモ兩親世話ニ成シコトハ、只一度田舍ノ小者ヲ抱置シニ、不調法者ユヘ、或時打擲イタシ候トコロ、疵附泣クルシムヲ漸シヅメ、其疵愈ザル内ニ在所ヘ歸ラント云、夫ユヘ兩親モ手代共モ、是ニハ迷惑イタシ候、ソノ後ハ左樣ノコトハ御座ナク候

答、汝生質ニテ短氣ナリト云リ、生質ニ短氣ト云コトアルベカラズ、此氣隨ノ爲ストコロナリ、貴人ニ對シ氣隨出ルモノニアラズ、愼ミ直サバ、ナホラザル事イカデカアルベキ、已ニソノ小者ヲ打擲セシニ、小者怒恨コトアルマジキヤ、甚ウラミ怒トイヘドモ、主人ノコトナレバ、忍ビコラヘ居ルナリ、ソノ小者ヲ他人打擲センニ、汝ニ打ルヽ如ク、堪忍イタシ居ルベキヤ、他人ニハ是非ニ讐ヲナサン、然ドモ主人ノ事ユヘ、手向セザルハ愼ノイタス所ナリ、是ヲ以テ見ヨ、愼デナホラザルコト有ルベカラズ、マシテ父母ヘ此ツヽシミナクバ畜類ニ替ルコトアルマジ、又兩親ノ世話ニ成シハ、タヾ一度ナリト云ヘ

リ、一度輕キニアラズ、小者ヲ打擲シ血ヲ出ストキ、兩親ノ心ヲ察セヨ、人ノ子ニ疵ヲツクレバ、ソノ疵ヲ恐ル、ノミナラズ、若シ死スルトキハ、汝ノ命ヲ取レンコトヲ恐レテ苦ムナリ、喩バ魏ノ文帝ノ時凌雲臺ヲ築レ額ヲカヽセンタメ、韋誕ト云者ヲ籠ニ入レ、引上ゲラレシ、其高サ地ヲ去ルコト二十五丈ナリ、既ニ下レバ黒カリシ髮モ、忽ニ白髮トナレリト、只此一事ノ恐レナレドモ、時ノ間ニ白髮トナル、汝ノ兩親モオソレ傷コト、身ニ釘ヲウタル、ガ如シ、五年ノトシモ一度ニ寄ラン、老ハ即死ノ本也、刃ヲ以殺サズトモ、殺スナンゾ替リアラン、其小者直ニ死スルコトアラバ汝ガ身ニ及ブベシ、左アラバ一朝ノ忿ニソノ身ヲ忘テ、以テ其親ニ及ボス、不孝是ヨリ大ナルハナシ

曰、前ニ申ス如ク、短氣ハ宜シカラズ存ジ候マヽ、是ハ何卒ナホシ申度候、親ノ氣ヲ傷ムルコトハ、左程マデニハ存ゼズ候、知ラザル所ハ是非ナシ、又親切ニ致ストコロハ、心一盃ツクシ申候、ツネニ親ドモハ酒ヲ好ミ、給ベ過スコト御座候、ソノ節ハウタ〳〵ト、長咄ヲシ寢ルコトヲ知ラズ、母抔モ難儀ニ存ジ候、且二日酔ヲ致シ苦ミ候ユヘ、身ヲ知ラヌ酒ノ飲ヤウト存ジ、以後ハ扣ラレ候ヤウニ諫申候、ケ様ノ類ハ親ヲ思フ所ナレバ、孝行ニテハ有マジク候ヤ

答、汝ノ云ヘル所子タル者ノ道ニ背ケリ、易ニ家人ニ嚴君アリト云ヘリ、妻子ヨリ云ハヾ、家ノ主ハ君ノ如シ、然レバ母モ汝モ家來ニ同ジ、家來ノ身トシテ我退屈スルヲ以テ、主人ノ慰ヲ止ルコト、法ニ於テ有ベカラズ、且母ノ難儀ト云、我レ道ニソムクノミナラズ、母マデヲ女ノ道ニ背シム、重々ノ

不孝アゲテ數ヘガタシ、己ガ身治ラズシテ人ニ及ブベキコトニアラズ、況ヤ親ニ於テヲヤ、扨又汝ノ遣ルル金ハ、何方ヨリ出申候ヤ

曰、親ドモ方ヨリ、小遣金トシテ渡シ候ヘドモ、是ハ一ヶ月ニモ足リ申サズ候ユヘ、不足ノ所ハ手代共ヲ頼ミ請取申候、然ドモ色々ノコトヲ申シ、思フ程渡シ申サザルユヘ、又母ニ申シ、五兩三兩宛モラヒ、其上ノ不足ハ此彼ニテ五兩十兩借用致シ候、然レドモ二三年ノ中ニ親共隱居イタシ候ヘバ早速ニ濟シ申候、他人モ是ヲ存ズルユヘ、五十兩百兩借候コトハ、心易キコトニテ何ノ世話モコレナク候

答、汝ノ云ヘル所ヲ聞ニ既ニ家ヲ亡ス前表アリ、ソノ子細ハ先親ヨリ渡サルヽ小遣金ハ、天ノ與ル汝ガ祿ナリ、ソノ祿ヲ十分ノ一ニモツカヒ不足トイフハ、法ヲ不レ知奢者ナリ、奢者ハ天コレヲユルシ玉ハズ、又不足ノ所ハ手代ヲ頼ミ請取ヨシ、ソノ金銀ハ手代ノ物カ汝ノ物カ我物ヲ自由ニ得セズシテ手ヲツカネ、手代ニ求ルコトハ有ベカラズ、我令ヲ出シ、彼ヨリ持來テ渡スベキ筈ナリ、ソレヲ此方ヨリ、手ヲツカネ求ルハ逆也、此汝終ニハ寶ヲ失ヒ、手代ノ家ニ養レン兆見ハレタリ、其上ノ不足ハ母ノ方ヨリ、内證金ヲ貰トヤ、母ハ此方ヨリ與テ養フモノナルヲ、反テセブリ受、女ハ多ク金銀ノ貯ナキモノナリ、母モ定テ親兄弟ノ方ニテ、借リ調ヘ與ラレン、ケ樣ナル苦勞ヲカケ、其辨ヘヲ不レ知ハ、哀キコトナリ、ソノ外不足ハ、他人ヨリ借用ユルトヤ、自ノ財寶アリナガラ、他人ノ心ヲ伺フ、コレ汝ガ威(イキホ)ヒ衰ヘル前表ナリ、他ヨリハ家屋敷ニ、心ヲ附テ貸ナレバ、終ニハ他ノ物トナラン、是天汝ガ財寶ヲ、クツガヘサン

トスル兆シ既ニ見ハルル、詩曰、天之方レ蹶無ニ然泄々一ト云コレナリ、扨又月ニ一兩度ノ遊ニ何トテ左様ニ金銀入リ申候ヤ

曰、イカサマ是ノ不審ハ尤ニ候、一事ヲ擧テ云ハバ、芝居ノ顔見世毎ニ、棧敷二三軒モ借リ候ヘバ、相應ノ雜用カヽリ申候、委細ハ申スニ及バズ、思召ノ外入用コレアリ候、此味ハ學知ノ及ブ所ニテハ此ナク候

答、芝居顔見世一度ニ棧鋪二三軒モ借ルト云ヘリ、其客ト云ハ振舞ノ雜用ノミナラズ、其上悉金銀ヲ出ス客ナラン、其金銀ノ出ル客ヲ、二三軒ノ棧鋪ニ一杯オカバ、親ノ渡サルヽ小遣ニテ足ラザルコト聞ヘタリ、イカサマ世ニ稀ナル藥袋ナシトハ汝ガコトナリ、家内ノ手代ハ一分二分五厘三厘ヲ爭テ、商買ヲナシ汗ヲ流シ設クル金銀ヲ、一度ニ遣費コト、家内ノ人ノ血肉ヲ吸カラスニ同ジ、殷紂王ノ比干ガ胸ヲサクニ異ナラズ、如何トナレバ紂王ハ我ヲ助ケ諫ル者ノ胸ヲサク、汝ハ家ヲ思フ手代ノ心ヲ痛リ、是忠義ノ者ヲ害フコト、紂王ニナンゾ替リアラン、恐ベキコトナリ、人タル道ヲ以テ云バ其一日遣費ス金銀ヲ家内ノ者ニ惠バ、汝ガ志ヲ神ノ如クニ思フベシ、家内ノ者ニ神ノ如クニ思ハレナバ主人ノ法ト成ベキニ、汝ゴトキ者ハ、必ズ内ニテハ吝キモノナリ、兩親ハ是ヲ見テ、アノ細サニテハ多分ノ金ハ、遣フマジト思ヒ居テ津波ニ値タル如ク、家屋鋪一度ニ取ルヽ時ノイタマシサヨ、扨又右ノコトヲ供ノ小者ヤ男ドモハ、家内ニテ物語ハ致サズ候ヤ

曰、其所ニハヌカリナク、小者ヤ男ドモニハ心ヅケヲ致シ、堅ク口ヲ閉オキ候ユヘ、家内ニハ露塵存申サズ候

答、小者下男マデ、口ヲ閉テ置ユヘ、家内ニハ少シモ知ラズト思ヘルハ甚愚ナリ、汝ガ惡事ハ我ヨリイハザル先ニ天下ニ明也、中庸ニ「莫レ見ニ乎隱一」ト說玉ヘリ、未レ形トイヘドモ、幾ハ已ニ動ク、動ケバコレ明ナリ、人ハ知ラズト思フトモ、汝ガ心ニ惡事ト知ル、シルユヘニ口ヲトヅ、惡事ト知ラバナンゾ速ニ止ザル、「子曰、見レ義不レ爲無レ勇也」ト、其上小者惡所金ノ、ツカヒヤウヲ見覺ヘ、又僞ヲ習ヒ、成人ノ上ヘ汝ノ教シ通リヲ守リ、金銀ヲ盜ツカフテ、引負スル手代バカリニ成ベシ、コレ我導キニ依テ、人ヲ害フモノナレバ、ケ樣ノ手代出來ルトモ、汝イヒブンハ無キ筈ナリ、然ルニ引負セシ手代アラバ請人ニアヅケ、難儀ヲサスベシ、如レ此主從トモニ、放埓ニテ惡事ヲナサバ汝ノ家ヲ亡スコトモ目下ナルベシ、「子言ニ衛靈公之無道一也、康子曰、夫如レ是奚而不レ喪、孔子曰、仲叔圉治ニ賓客一、祝鮀治ニ宗廟一、王孫賈治ニ軍旅一、如レ是奚其喪」トノ玉フ、靈公無道ナレドモ、三人ノ臣ヲ用ユルユヘニ、國ヲ有テリ、汝ガ家ニ禪門アルハ衛ニ三人ノ臣アルガゴトシ、然ルニ禪門死センコトヲ願フ、禪門死セバ、專ラ汝ガ令ニ從ヒ終ニハ家ヲ亡スベシ、然レドモ心ハ是變易ナリ、汝今マデノ過ヲ得心シテ改ルトキハ忽チ變ジテ善トナリ孝トナルベシ、「語曰、不レ恒ニ其德一、或承ニ之羞一、子曰、不レ占而已矣」ト說玉ヘリ、汝ガ占ヒ此ノ所ニテ有ルベシ、コレマデノ所作ヲ占ヒ變モノナラバ、人ノ進ムル羞ヲ免レ、子タル道ニ入テ家榮長久ナルベシ

或學者商人ノ學問ヲ譏ルノ段

或學者問曰、我モ學問ヲ好、汝ハ表ニ學問ヲ云立、教ヲ弘ム道ハ聖人ノ道ナレバ替コト有ルマジ、然レドモ宋儒ハ孔孟ノ心ニ違ヒ、老莊禪學ニ似テ甚理ヲ高ク說ク、此故ニ略心得ガタキコト有リ、汝宋儒ノ註ハ用ユトモ、定メテ孔孟ノ本意ヲ弘ルト思ラン、汝ガ教トスル所物語リ有レ、不得心ノ所ニ不審ヲイフベシ、我不審ヲ問カルレバ是卽學問ナリ、先他ヲ導ル、所ハ何レノ所ヲ至極トセラル、コトゾ

答、學問ノ至極トイフハ、心ヲ盡シ性ヲ知リ、性ヲ知レバ天ヲ知ル、天ヲ知レバ、天卽孔孟ノ心ナリ、孔孟ノ心ヲ知レバ宋儒ノ心モ一ナリ、一ナルユヘニ註モ自合フ、心ヲ知ルトキハ天理ハ其中ニ備ル、其命ニ違ザル樣ニ行フ外他事ナカルベシ

曰、汝ハ理ヲ直ニ命ト云、是大ニ誤レリ、理ハ玉ノ理ナリ、又總テ物ノ理ナレバ、通マデノコトニテ死物ナリ、命ハ書經ニモ「惟命不レ于レ常」ト云ヘリ、天ノ降セル命ナレバ活物ノ性ナリ、斯ノゴトク別ナリ、然ルヲ死活ヲ以テ一致トスルハ如何ナルコトゾ

答、汝ノイヘル所ハ枝葉ニカヽハリ、文字ノ沙汰ニテ本ヲ失セリ、君子ハ本ヲ務ムト云、萬事ニ滯テカクノ如シ、先初學ノ者ハ本末知ルヲ先務トスベシ、末ニ至テハ繁多ニシテ分レ難シ、天地有テ物ヲ生ジ、物生ジテ後ニ名アリ、名有テ後文字ヲ加テ名ヲ書ス、文字ハ伏羲ノ後倉頡ガ作ト云ニ非ズヤ、イマダ名モ

附ケズ文字モ無キ前ヨリ天道アリ、天道トイヘドモ人有テ付タル名ナリ、我云所ヲ名ヲ離レテ聞ベシ、既ニ聖人ハ仁ヲ本トナシ、老子ハ大道ヲ以テ仁ノ本トナシ、道ト仁ト名ハ二ツ也、文字ニ依テ何レガ本ト論議分ルベキヤ、無レ聲無レ臭シテ萬物ノ體ト成ル物ヲ暫名ヅケテ乾トモ天トモ道トモ理トモ命トモ性トモ仁トモ云、總テイヘバ一物ナリ、乾ハ元亨利貞トイフガ如シ、乾ハ理ナリ、元亨利貞ハ命ナリ、體用ノ謂ナリ、文字ヲ離レテ察ミヨ、理ト命ト名ハ二ツアレドモ一ナルヿヲ知ルベシ、譬ヘハ川ト淵トノ如シ、流ルヽ所ニテハ川トイヒ溜ル所ニテハ淵ト云、理ハ淵ノ如ク命ハ川ノ如シ、動靜有テ一ナリ、「公伯寮子路季孫愬、子曰、道之將レ行也與命也、道之將レ廢也命也、」「孟子曰、莫レ非レ命」ト、孔子孟子トモニ道ノ行ルヽモ廢モ治亂トモニ皆命ナリトノ玉ヘバ、命ハ天ノ行ルヽ總名也、理ハ其體ナルヿ決セリ、「昔者聖人之作レ易將ニ以順ニ性命之理一、是以立ニ天之道一、曰ニ陰與レ陽、立ニ地之道一、曰ニ剛與レ柔、立ニ人之道一、曰ニ仁與ニレ義、兼ニ三才ニ而兩レ之」陰陽剛柔仁義ト分レドモ、天地人ノ三ツヲ窮盡ス時ハ一箇ノ理ナリ、此性命ノ理ヲ盡シ玉フハ聖人ナリ、コノユヘニ無爲ニシテ治ル、天道ニ同ジ、「子曰、無爲而治者、其舜也與」シカレバ天理ニ順フ外ニ道アランヤ、書經ノ意モ理ニ逆フ時ハ天命變ジテ亡ブベシトノ敎ナリ、依テ「惟命不レ于レ常」トイヘリ、此ヲ法トシテ今時モ理ニ順ヘバ天命ニ合フ、理ト云ハ天地ヨリ人間畜生草木マデ行ルヽ道、ソレ〳〵ニ分レ備リタル體ヲ假ニ名付テ理ト云、又文字ハ天地開闢ヨリイハヾ、數億萬歲ノ後ニ作リ初シモノナリ、コレヲ以テ天ノ爲作無量ノ物ニ合ストモ、萬分ノ一ニモ不レ足、此理ヲ知

ルベシ文字ニ泥ムハ糟粕ヲ味フニ同ジ、色々理窟ヲツクルトモ、爭デ文字ニテ盡スベキヤ、元來天地ノ體ハ文字ヲ離レテ死活無キユヘニ古今變ラズ、命ハ用ナルユヘニ動テ變ルナリ、理ハ體ナルユヘニ動カズシテ常ナリ、其變ザル物ヲ理ト名ヅケタルト知ルベシ、文字ハ事ヲ天下ニ通ス器ノ如シ、理ハ其主ナリ、「子曰、謹ニ權量一」ト稱錘(ハカリ)ヤ斗斛(マス)モ天下ノ通用ヲ以テ寶トス、學問ノ道モ亦如レ是、理ヲキハメ天道聖人ノ心通用スルヲ以テ寶トス、「聖人窮レ理盡レ性以至ニ於命一」玉フニ依テ、古今ニ通用シテ寶トナル、此理ヲ知ルヲ學問ノ本ト決定スベシ、理明ナレバ萬事時ノ宜キニ合ベシ

又問、性理ヲ知レバ時ノ宜キニ合ト云、其時ニ宜キト云ハ行ヒ難キコトナリ、然ルヲ汝ハ易キガ如ク云ヘリ、夫ハ我ガ爲ニ宜キカ人ノ爲ニ宜キカ

答、宜キト云ハ其座雙方トモニ宜キヲ云

曰、雙方トモニヨロシキコト有ルベカラズ、譬ヘテ云フベシ、先コヽニ木綿一疋買ヒ汝ト是ヲ半疋宛分テ取ンニ、汝モ織カケノヨキ所ヲ望ム、我モ織カケノ能所ヲノゾム、コノ理ハ木綿ノコトニ限ラズ萬事ニワタルベシ、又奉公人ヲ抱或ハ役目等ノ事ニ附テモ、同日ニ來ル者同ジ役目ヲ云ツクル時ニ、凡テ一方ヲ上ニ立テ一方ヲ下ニ立ル、其上ニ立ツ人ハ宜カラン、下ニ立ツ人ハ快カラズ不足アルベシ、是ヲ以テ見バ兎角雙方トモニ宜キ事ハナラザルコトナリ

答、其所ニ時ニ宜キコト有テ一々ニコト分ルヽナリ

曰、其一々事ノ分ルト云ハ、如何ナルコトゾ

答、其奉公人、雙方同ジ器量ナラバ門口ヲ先ヘ入タルヲ上ニ立ベシ、凡テ門口ヲナラビヤ出入ハセズ、器量ニ甲乙有ラバ器量ノ勝タルヲ上トスベシ、又役目ノ上ニテ云時ハ、先ニ進ムハ同日ト云トモ是ヲ上トスベシ、是皆天ノ爲ス所ニシテ私ニアラズ、コヽヲ以テ時ニ宜キト云

曰、我云フ所ノ木綿ノコト、是ハ斯細ナルコトナレドモ汝ガ心ニ濟ズ、ソレユヘニ返答セザルカ

答、是ハ云フマデニ及ザルコトナリ、コヽヲ以返答セズ

曰、其返答ニ不レ及トハ如何ナルコトゾ

答、孔子モ「己所レ不レ欲勿レ施レ人」トノ玉フ、我否ト思フコトハ人モ嫌フモノ也、我ヨリ其木綿ヲ分ルナラバ、汝ニ能方ヲ渡サン、汝ヨリ分ルナラバ我ニ能キ方ヲ渡スベシ、又汝ノ方ヘ織カケヲ取リ、奥ノ惡鋪所ヲ我ニ渡サバ、汝ノ世話ニセラルヽ、故ニソノ筈ナリト思フ、ケ樣ニサバキ置時ハ悉ク宜シカラン、汝ニ能物ヲ渡サバ、汝ハ喜ビ我ハ義ヲ以テ仁ヲ養フ、是宜キニアラズヤ

曰、夫ニテハ汝ノ爲ニ損ナルガ、損ノ往クヲ喜ビ、是ヲ義ト云ハ如何

答、否損ニアラズ、大ニ利アリ

曰、忽ニ損ノ見ヘタルヲ利ト云ハ如何ナルコトゾ

答、孟子モ「君子舍レ生而取レ義者」ナリトノ玉フ、君子ハ命ヲステ義ヲ取ル、木綿ハ輕キコトナリ、假

令一國ヲ得萬金ヲ得ルトモ、道ニタガハバ何ゾ不義ヲ行ハン、外物ノ損ヲ爲シ心ヲ養テ利ヲ得此外ニ
勝ルコト何カ有ラン
曰、汝ハ財寶ヲ舍テ唯義ヲ上(ダット)ムト云、然ラハ不義ヲ嫌テ利アリトモ決シテセザルカ
答、其不義ヲ行ヘバ心ノ苦トナル、苦ヲ離ルヽ爲ニスル學問ナレバ奚不義ヲ以テ心ヲ苦ムルヿヲセン
曰、商人ナドハ毎々ニ、詐ヲ以テ利ヲ得ルコトヲ所作トス、然ラバ學問ナドハ決シテ成ルマジキコト
ナルニ、汝ガ方ヘハ多ク商賈人相見ヘ候由、汝ハ此ニテハ此ニ合セ、彼ニテハ彼ニ合セテ教ユルナレ
バ、孔子ノ玉フ鄕原ニテ德ノ賊トハ汝ガコトナリ、學者ニアラズシテ流ヲ同フシ、汚世ニカナフテ世
ニ媚ヘツラヒ、人ヲ誣(クラマ)セ己ガ心ヲ欺ク小人ナリ、門人ハ是ヲ知ラズ、汝モ學者ノ中ト思ハルヽハ恥キ
ニアラズヤ
答、「君子於二其所一レ不レ知蓋闕如也」ト孔子モノ玉フ、凡テ知ラザルコトハ闕キ置ベキコト也、此理ヲ
知ラズシテ云チラスハ野卑(イヤシキ)コトニアラズヤ、扨汝ノ云ヘル所ハ、世ノ人モ疑フ所ナリ、總テイヘバ道
ハ一ナリ、然レドモ士農工商トモニ各行フ道アリ、商人ハ云ニ不レ及四民ノ外乞食マデニ道アリ
曰、然ラバ乞食ニモ又道アリヤ
答、昔聞或人江州ヘ行キ侍リシニ一ノ非人村アリ、其所ニ橋ノ渡リ初有リシヲ、立止テ見侍リシニ非人
頭トオボシキ者、圓坐ニ座シテ有リケリ、村ノ者ドモ橋ノ渡リ初ノ祝儀ヲ持來ル、其中ヨリ痩テ色惡キ

男一人、茄子三ツ持來テ頭ノ前ニ進ム、頭タル者是ヲ見テ、汝ハ頭目相頼ヒ居ルト聞シニ、何トテ此茄子ヲ持來ルヤト問ケレバ、左樣ニ候、永々ノ病氣ナンギ仕候所ニ、此度橋ノ渡リ初メニツキ、頭殿ヘ祝儀ヲ致ベキ由小頭ヨリ申渡シ候ユヘ、夜前他所ノ畠ヘ往盜ミ申候ト云、頭ノ云乞食ハ盜ヲセマジキ爲ナリ、盜ヲナセバ乞食ヲバセズ、汝ハ村ノ住居ハ成マジキト云テ、小頭ヲ召テ彼ガ快氣次第村ヲ拂フベシ、病氣ノ中ハ番ヲ致スベシト云ワタシケルトカヤ、飢テ死ストモ盜マヌハ乞食ノ道ナリ、「子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣」困窮シテ正シキヲ守ラバ君子ナリ、困窮シテ放ニ濫ルハ小人也、小人トナツテ乞食ニ劣ルハ哀キニアラズヤ

曰、扨商人ハ貪欲多ク、毎々ニ貪ルコトヲ所作トナス、夫ニ無欲ノ教ヲナスハ、猫ニ鰹ノ番ヲサスルニ同ジ、彼ニ學問ヲ進ルハ、前後ツマラヌコトナリ、其濟マヌヿヲ合點シテ教ル汝ハ曲者ニ非ズヤ

答、商人ノ道ヲ知ラザル者ハ、貪ルコトヲ勉メテ家ヲ亡ス、商人ノ道ヲ知レバ、欲心ヲ離レ仁心ヲ以テ勉メ道ニ合テ榮ルヲ學問ノ德トス

曰、然ラバ賣物ニ利ヲ取ラズ、元金ニ賣渡スコトヲ教ルヤ、習フ者外ニハ利ヲ取ラスコトヲ學ビ、內證ニテハ利ヲ取レバ實ノ教ニアラズシテ、反テ詐リヲ教ルト云者ナリ、如何トナレバ元來ナラヌコトヲ强ルニヨリテ、ケ樣ニ前後合ハザルコトアリ、商人利欲ナクシテスムコトハ、終ニ聞ザルコトナリ

答、詐リニアラズ、詐リニアラザル子細ヲ告ベシ、是ニ君ニ仕ル者アラン、奉祿ヲ受ズシテ仕ル者有

ベキヤ

曰、ソレハ無キ筈ノコトナリ、孔子孟子トイヘドモ祿ヲ受ザルハ、禮ニ非ズトノ玉フ如何ゾ有ベキ、

是ハ受ル道ニ因テ受ルナリ、受ル道ニテ受ルヲ欲心トハイハズ

答、賣利ヲ得ルハ商人ノ道ナリ、元銀ニ賣ヲ道トイフコトヲ聞ズ、賣利ヲ欲ト云テ道ニアラズトイハヾ、先孔子ノ子貢ヲ何トテ御弟子ニナサレ候ヤ、子貢ハ孔子ノ道ヲ以テ賣買ノ上ニ用ヒラレタリ、子貢モ賣買ノ利無クバ富ルコト有ルベカラズ、商人ノ買利ハ士ノ祿ニ同ジ、買利ナクバ士ノ祿無シテ事ルガ如シ、

或所ニ屋舖ヘ出入スル用達シ二人アリ、又外ヨリ出入ヲ望者在リシガ、買物方ノ役人申サレケルハ、二人ノ用達ヨリ入ル物ハ殊ノ外ニ高直ニ相見ユルト云テ、彼ノ出入ヲ望者ノ絹ト見合有ケル時、過分ノ直違アレバ役人殊外ニ機嫌アシク、二人ノ用達ヲ一人宛呼デ、汝ガ方ヨリ差上候呉服、殊外高直ニツキ、外ヲモ見合候所、格別ノ相違不屆ノ由申サレケレバ、一人ノ出入ノ者ノ云、拙者ドモ御用蹟末ニ仕コト少モ是ナク候、初テ御出入願申者ハ損銀ヲ致シテナリトモ、最初ニハ差上ゲ申候ヘドモ、後ノ續カザル者ニ候ト云、其口書ヲトリテ歸サル、又一人ヲ招テ不屆ノヨシ申シ渡サレケレバ、仰セ御尤ニ候、拙者儀去年マデハ愚父存生ニテ御用達シ申ス所ニ、愚父相果テ候テ後、御用拙者ニ仰ツケサセラレ候所、拙者コトノ不調法ニシテ勝手困窮仕候ユヘ、買物調カネ先方ヨリ高直ニ賣リ申候ヤ、心モト無ク存タテマツリ候、且御調ベナサレ候呉服ガ證據ニテ候、高直ナル物ヲサシアゲ申ス事、殿樣ノ御高恩ヲ忘ルヽト申

スモノニテ御座候、今暫下シオカレ候御扶持ニテ渡世仕、一兩年ノ中家屋舖諸道具等賣拂借銀相スマシ、其上ニテ御用相勤申シ度候ト云、然ラバ其口書セヨト云テ、口書ヲトリテ歸サル、其後評議アリテ一人ノ用達ハ身ノ上不如意ナル者ヲ手本トシ、高利ヲトリ其上役人ヲ云掠ル咎アリトテ、用事ヲ取リアゲラレシトカヤ、又一人ハ正直ナル申ブンナリ、其上彼レガ貧乏ハ亡父ガ奢ノ爲ス所、彼ガ咎ニハアラズ、亾父ガ咎ヲ身ニ受ル孝心、殿ヘノ忠義彼此後々ニ至テモ、爲ニ成ベキ者ナリトテ、古借ヲ開屆、合力致シ用向ヲコレマデノ通リニ云附ヨト有リ、此正直ニヨツテ幸ヲ得タリ、コレハ是殿樣ノ高恩ヲ忘ズ、高直ナル者ヲ差上マジキト思フ實ト、父ノ奢ヲ隱ス孝ト、我正直ナル所ヨリ役人ヲ言掠ル心ナキト、此三ツノ德ヨリ我身ノ幸トナル、又一人ノ用達ハ全ク御用疎末ニ仕ラズ、今初メテノ者ハ損ヲ致シ差上ルナド、云フコトハ世間一等ノ口上ナルガ、其ヲ聞者ノ身ニ替リテ見ヨ、アマルホド過分ノ違アラバ實尤ト聞ベキヤ、扨モ座遁ノ僞リヲイフト思ノベシ、彌其辯舌ヲ能云ヒマワスホド聞人コレヲ惡ム、世ノ人賢キヤウナレドモ實ノ道ヲ學ザルユヘ、我過ノ益スヿヲ知ラズ、ヿ、ヲ能味ヒ見バ、眞實ナクテハ叶ハザルコトヲ知ルベシ、多葉粉入一ツ、幾世留（キセル）一本買トテモ、善惡ハミユル物ナルニ、色々ト云ヒマワスハ宜カラザル者ナリ、有リベカヽリニ言コトハ善者ナリ、我ヨリ人ノ實不實ヲミル如ク、他ヨリモ又我實不實ヲ見ルコトヲ知ラズ、ヿ傳曰、人視レ己如レ見二其肺肝一」ト、此理ヲ知レバ僻ヲ飾ズ有リベカヽリニ云フ故ニ、正直モノナリト、何事モ任セ賴ルヽユヘニ、世話ナシニ人一倍モ賣モノ

ナリ、商人ハ正直ニ思ハレ打解タルハ互ニ善者ト知ルベシ、此味ハ學問ノ力ナクテハ知レザル所ナリ、
然ルヲ商人ハ學問ハイラヌモノト云テ嫌ヒ用ザルコトハ、如何ナルコトゾヤ
曰、然レドモ世俗ニ商人ト屛風トハ直ニテハ不ㇾ立トイヘルハ、如何ナルコトゾヤ
答、世俗ノ言ニケ様ナル間誤リ多シ、先屛風ハ少シニテモ曲ミアレバ疊マレズ、此故ニ地平面カナラザレバタヽズ、商人モソノ如ク自然ノ正直ナクシテハ、人ト竝ビ立テ通用ナリ難シ、コレヲ屛風ノスグニタトヘタルモノナリ、屛風ト商人トハ直ナレバ立ツ、曲メバタヽヌト云フコトヲ取リ違テ云ヘリ、古ヘノ伯夷ノ直モ、屛風ノ直ニ勝ルコトアルベカラズ
曰、商人ノ屛風ニナラブホドノ直ト云コトハ、如何ナルコトゾヤ
答、凡テ鬻ㇾ貨曰ㇾ商、然レバ貨ヲ賣中ニ祿アルコトヲ知ルベシ、コノユヘニ商人ハ左ノ物ヲ右ヘ取リ渡シテモ直ニ利ヲ取ルナリ、曲ミテ取ルニ非ズ、口入計リスル商人ヲ問屋ト云、問屋ノ口錢ヲ取ルハ、書付ヲ出シ置バ人皆コレヲ見ル、鏡ニ物ヲ移スガ如シ、隱ス處ニアラズ、直ニ利ヲ取證ナリ、商人ハ直ニ利ヲ取ルニ由テ立ツ、直ニ利ヲ取ハ商人ノ正直ナリ、利ヲ取ラザルハ商人ノ道ニアラズ、コヽヲ以テ正キ士ハ此賣物ハ損銀タチ候ヘ共、負テ賣ント云フ時ハ不ㇾ買、我買テヤルハ汝ニ利ヲ得サセン爲ナリ、汝ガ合力ハ不ㇾ受ト云ヘリ、利ヲ取ザルハ商人ノ道ニアラズ
曰、然ラバ天下一等ニ、元銀ハ是ホド利ハ是程ト極メアラバ然ルベシ、ソレニ僞リヲ云ヒ負テ賣ハイ

カナルコトゾ
答、賣物ハ時ノ相場ニヨリ、百目ニ買タル物九十目ナラデハ賣ザルヿアリ、是ニテハ元銀ニ損アリ、因テ、百目ノ物百二三拾目ニモ賣コトモ有、相場ノ高ル時ハ強氣ニナリ、下ル時ハ弱氣ニナル、是ハ天ノナス所、商人ノナス所、商人ノ私ニアラズ、天下ノ定ノ物ノ外ハ時々ニ狂アリ、狂アルハ常ナリ、今朝マデ金一兩ニ一石賣シ米モ九斗ニ成、小判ハ下リ、米ハ高リ、又小判ハ高リ、米ハ下リスル者也、天下第一ノ賣買物是ナリ、其外何ニ限ラズ日々相場ニ狂ヒアリ、其公ヲ欠テ私ノ成ベキコトニアラズ、ソレニ一人天下ノ商人ニ背キ、元銀ハ是、利ハ是トハ分難キコト也、僞リニハアラズ、是ヲ僞ト云ハヾ賣買ナルマジ、賣買ナラズバ買人ハ事ヲ欠、賣人ハ賣レマジ、左樣ニナリユカバ商人ハ渡世ナクナリ農工ト成ラン、商人皆農工トナラバ財寶ヲ通ハス者ナクシテ萬民ノ難儀トナラン、士農工商ハ天下ノ治ル相トナル、四民カケテハ助ケ無カルベシ、四民ヲ治メ玉フハ君ノ職也、君ヲ相クルハ四民ノ職分也、士ハ元來位アル臣ナリ、農人ハ草莽ノ臣ナリ、商工ハ市井ノ臣ナリ、臣トシテ君ヲ相クルハ臣ノ道也、商人ノ賣買スルハ天下ノ相ケ也、細工人ニ作料ヲ給ルハ工ノ祿ナリ、農人ニ作間ヲ下サルヽコトハ是モ士ノ祿ニ同ジ、天下萬民産業ナクシテ何ヲ以テ立ツベキヤ、商人ノ買利モ天下御免シノ祿ナリ、夫ヲ汝獨賣買ノ利バカリヲ慾心ニテ道ナシト云ヒ、商人ヲ惡ンデ斷絶セントス、何以テ商人計リヲ賤メ嫌フコトゾヤ、汝今ニテモ賣買ノ利ハ渡サズト云テ利ヲ引テ渡サバ、天下ノ法破リトナルベシ、上ヨリ

御用仰付ラルニヽモ利ヲ下サルヽナリ、然バ商人ノ利ハ御免シ有ル祿ノ如シ、然レドモ田地ノ作得ト細工人ノ作料ト商人ノ利トハ、士ノ如クニ定テ幾百石幾拾石トハ云ベカラズ、日本唐土ニテモ賣買ニ利ヲ得ルコトハ定リナリ、定リノ利ヲ得テ職分ヲ勉レバ自ラ天下ノ用ヲナス、商人ノ利ヲ受ズシテハ家業勉ラズ、吾祿ハ賣買ノ利ナルユヘニ買入アレバ受ルナリ、呼ニ從テ往クハ、役目ニ應ジテ往クガ如シ、慾心ニアラズ、士ノ道モ君ヨリモ祿ヲ受ズシテハ勉ラズ、君ヨリ祿ヲ受クルヲ慾心ト云ア、道ニアラズト云ハバ孔子孟子ヲ始トシテ、天下ニ道ヲ知ル人アルベカラズ、然ルヲ士農工ニハヅレテ商人ノ祿ヲ受ルヲ慾心ト云ヒ、道ヲ知ルニ及ザル者ト云ハ如何ナルコトゾヤ、我教ユル所ハ商人ニ商人ノ道アルコトヲ教ユルナリ、全ク士農工ノコトヲ教ユルニアラズ

曰、然ラバ商人ノ賣買ニテ、利ヲ得ルコトハ有ベキコトナリ、其外ニ曲ゲテ非ナルコト候ヤ

答、今日世間ノアリサマニ、曲テ非ナルコト多シ、コヽヲ以テ教アルナリ、實ノ商人ハ敬ミ爲ザルコト有リ、譬ヘヲ以テ告ン、我幼年ノ時分ニ聞シコト有リ、昔或ル國ニ中頃ヨリ水入ニナリ、農作ナラヌ田地アリ、其昔水モ入ラザリシ時、年貢ヲカケラレシ例ニヨリ、今モ少々宛年貢ヲカケラレシニ、其田地ニ果ヲ植、稻作ヨリ増ニヨコモノナリ揚ケレバ、其果ニ先君ノ時ヨリ、又運上ヲカケラルヽトカヤ、君コレヲ難儀ニ思召、是新法ヲ止、民ノ害ルヽコトヲ救ハント志シ玉ヘ共、親殿ノ時ヨリ始ラレシヿナレバ、子ノ身トシテ改メ變コトヲ歎キ玉ヒ、自ラ止ベキコトヲ思召、或時臣ヲ召テ曰、見レバ

城下ニ二階作リノ家ヲ立ル者アリ、二階作リノ家ハ盡ク運上ヲ取ルベシト仰セ有ケレバ、臣是ヲ難儀ニ思ヒテ相談示シ合セ、君ニ申アゲラルヽハ、先達テ二階作リノ運上ヲ取ルベシト仰付ラレ候コト、昔ヨリ其例ナキコトニ御座候、御免下サレ候ヤウニト申上ラルレバ、君聞召、昔ヨリ例ナキコトカヤ、我ハ其例ヲ以テ言付ルヿナリ、彼ノ水入ノ田地ハ下ニテハ年貢ヲ取リ、果ニテモ運上ヲ取ルナレバ、二階作リノ運上ニ同ジ、例ナキコトニアラズトノ玉フ、ソレヨリ果ニ運上取ルコトヲ止、田地ノ年貢バカリニ成ケルトカヤ、御仁愛ノ及ブ所實ニ民ヲ子ノ如クニ思召ス故、世ニ有難キコト哉ト申シキ、商人モケ様ナルコトヲ法トナスベキコトナリ、二重ノ利ヲ取リ、甘キ毒ヲ喰ヒ自死スルヤウナルコト多カルベシ、一二ヲ擧テ云ハヾ、玆ニ絹一疋帯一筋ニテモ寸尺一二寸モ短キ物アランニ、織屋ノ方ニテハ短キヲ言タテ直段ヲ引ベシ、然レド一寸二寸ノヿナレバ疵ニモナラズ、絹ハ一疋帯ハ一筋ニテ一疋一筋ノ札ヲ付ケテ賣ルベキガ、尺引ニ利ヲ取リ、又尺ノ足ル者ト同ク利ヲ取ルナレバ、是二重ノ利ニテ、天下御法度ノ二升（フタマス）ヲ遣フニ似タル者也、又染物抔ハ染違ヒ有レバ、少シノコトヲ大キニ云タテ直引シ、職人ヲ傷メ誂タル人ヨリハ染代ヲ請取、職人方ヘハ渡サヾルコトモ有リ、コレ又二重ノ利ニ越タル惡事ナリ、總テケ様ノ類多カルベシ、又身上不調ニツキ、買懸リ借金ノ方ヘ、三分五分ノ割銀ヲ以テ詫言致シ濟コトモアリトカヤ、其負方（オホセ）ノ中ニ賣高多キモノ、又猿賢キ者ハ詫人ヨリ禮銀ヲ密々ニ請取、同ク損銀アル體ニ見セカケテ、我ハ損セザル者アリトキク、ケ様ノ紛ハシキ盗ミヲナス者ヲ非ト云

曰、其詑人ヨリ禮銀ヲ受トリ、事ヲ取持ハ商人計ニテ候ヤ、商人ノ外ニモ此類アルベキコトナリ

答、商人多クハ道ヲ聞ザル故、ケ樣ノ類有リ、又道ヲ知テ事ヲ取捌者ハ左樣ノ不義ハセザルコト也、假令御領家領ノ庄屋年寄ニテモ、上ノ正キ政道ヲ受テ、事ヲ取持身トシテ、小百姓ヨリ禮銀ナドヲ請取ルコト有ルベキニ非ズ、元來士ト云ハル、身ガ下々ヨリ密々ニ禮銀ナドヲ請ルコトアラバ、定メテ贔負ノ沙汰ニ至ルベシ、下々ト並デ何ゴトニテモ、取持人ヲ士ト云フベキカ、其ハ盗人ト云者ニテ士ニハアラズ、上ニタツ人、下ヨリ賂ナドヲ受テ、政道タツベキヤ、假令當分ハ知レズトモ天知ル地知ル我知ル人知ルナレバ、終ニハアラワレテ天ノ罰ヲ受ベシ、天罰ヲ知ラザル者、天下靜謐ノ世ニ有ルベカラズ、然レ共賣人ハ士ニアラザレバ、ケ樣ナル不義有ルナリ、毫釐ホドモ道ニ志アラバナスベキコトニ非ズ

曰、其詑人ガ禮銀ヲ出シ、埒明ヲ頼ガ惡キカ、又禮銀ヲ取リ、事ヲ頼マル、者ガ惡キカ

答、其時ハ頼ム人ハ下也、頼ル、者ハ上也、頼ム者モ頼ル、者モ罪アリ、然レ共七分ノ罪ハ上ニアリ、三分ノ罪ハ下ニアリ、昔ヨリ知アル者ハ上ニ立チ下ヲ治ム、無知ナル者ハ下ニ立、力ヲ勞シテ上ヲ食フト孟子モノ玉フ、上ノ清潔ヲ法トスルハ古ヨリノ道也、其正ヲ守ラズシテ詑人ト比テ不義ノ禮銀ヲ取リ、コレモ財ト思フハ、アサマシキコトナリ、下々ニ生ルレバトテ人ニ替ノ有ルベキヤ、身上不如意ノ者ハ是非ナク金銀ヲ減少シテ詑ルナリ、負方ハ身分相應ノ損アリ、其中ニテ取持顏ツキシテ禮銀ヲ取ルハ

盗人ニ同ジ、ケ様ナル事ヲナス者ハ甘キ毒ヲ喰テ自死スルニ同ジ、又人ノ手代ニモ斯ル邪ヲナス者多シ、是ハ主人ノ思寄ナキ惡ヲ迎ヘ、主人ニ甘キ毒ヲ喰セテ家ヲ絶ス者ニ同ジ、孟子ノ所謂「逢君之惡其罪大」ト、然ルヲ主人ハ金銀ノ損サヘ少ケレバ忠アル者ト思ヒテ、我身ヲ亡サルヽ事ヲ知ラズシテ是ヲ喜ブ、其根(モト)ヲ尋ルニ商人ハ學問ハイラヌモノナリト云ヒテ、聞コトヲセズ反テ聞人ヲ笑フ、實ニ一疋ノ鼻ノアル猿ガ、九疋ノ鼻欠猿ニ笑ヒ殺ルヽト云フニ同ジ、我賢ト思フヨリ不善ノ道ニ陷レバ、其家終ニハ禍來ルコトヲ知ラズ、哀哉、易ニ曰、「積レ善家必有ニ餘慶一、積ニ不善一家必有ニ餘殃一、臣弑ニ其君一子弑ニ其父一」ト是教ノ眼ナリ、聖人ノ仁心能々味フベキ所ナリ、聖人斯ノ如ク不善ヲ惡ミ玉フ、味ヲ知ラバ二重ノ利ヲ取リ、二升(フタマス)ノ似(マネ)ヲシ、密々ノ禮ヲ請ルコト抔ハ危フシテ、浮ル雲ノ如クニ思フベシ、是ヲ能々ツヽシムハ只學問ノ力ナリ、世間ノアリサマヲ見レバ商人ノヤウニ見ヘテ盗ム人アリ、實ノ商人ハ先モ立、我モ立ツコトヲ思フナリ、紛レモノハ人ヲダマシテ其座ヲスマス、是ヲ一列ニ云ベキニハ非ズ

曰、商人ノ道ハ是ニテ有増事足リ候ヤ

答、此ハコレ賣買ノ道ヲ云、此上ハ中々事多クシテ盡シ難シ

曰、此外ニモ何ゾムツカシキ教アリヤ

答、ムツカシキ教ニハアラズ、然レ共五常五倫ノ道ハ、天下國家ヲ治ルモ一列ナリ、此故ニ小家トイヘドモ教アリ、譬ヘテ云ハン、田舍ニテ大佛殿ヲ見度ト云老衰ノ人有リ、其子孝行ナル者ニテ、在所ニ

大工有リケルユヘ、大佛堂ノ雛形ヲ建見ラレヨ、親ニ見セタキ由云ヒケレバ、大工ノ云フ、我ハ大佛堂ノ雛形ハ得建申サズ候ト云フ、否小ク只四五尺計ニ建クレラレヨト云ヘバ、大工ノ云フ、凡テ本堂ヨリハ法ヲ知ラザレバ雛形モ得建申サズ候、堂ニハ大小アレドモ仕用ニ替ルコト無キユヘナリト云、天下ヲ治ルハ大佛殿ヲ建ルガ如シ、小家ヲ治ルハ雛形ノ小堂ヲ建ルガ如シ、家一軒ニハ君臣有リ、父子有リ、夫婦有リ、兄弟有リ、朋友ノ交リ有リ、人倫ノ道ナクバ、小家ト云ヘドモ如何シテ治ルベキ、小家ヲ治ルモ仁、國天下ヲ治ルモ仁、仁ニ二品ノ替アランヤ、商人ノ仁愛モ、間ニ合バコソ、先年飢饉ノ救ヒ米ヲ出シタル者ハ、悉ク御褒美ヲ下シ玉ヘリ、飢人ヲ救フテ人ヲ不レ殺ハ人ノ道ナリ

曰、然ラバ商人ノ心得ハ如何致シテ善カランヤ

答、最前ニ云ル如クニ、一事ニ因テ萬事ヲ知ルヲ第一トス、一ヲ擧テ云ハヾ、武士タル者君ノ爲ニ命ヲ惜マバ士トハ云ハレマジ、商人モ是ヲ知ラバ我道ハ明カナリ、我身ヲ養ルヽウリ先ヲ疎末ニセズシテ眞實ニスレバ、十ガ八ツハ賣先ノ心ニ合者ナリ、賣先ノ心ニ合ヤウニ商賣ニ精ヲ入勤ナバ、渡世ニ何ンゾ案ズルコトノ有べキ、且第一ニ儉約ヲ守リ、是マデ一貫目ノ入用ヲ七百目ニテ賄、是迄一貫目有リシ利ヲ九百目アルヤウニスベシ、賣高拾貫目ノ内ニテ利銀百目減少シ、九百目取ント思ヘバ、賣物ガ高直ナリト、尤ラルヽ氣遣ナシ、無キ故ニ心易シ、且前ニ云尺違ノ二重ノ利ヲ取ラズ、染物屋ハ染違ニ無理セズ、倒タル人トウナヅキ合テ禮銀ヲ受ケ、負方中間ノ取口ヲ盗マズ、算用極メ外ニ無理ヲセズ

奢リヲ止メ、道具好ヲセズ遊興ヲ止メ普請好ヲセズ、斯ノゴトキ類盡愼止ル時ハ、一貫目設ル所ヘ九百目ノ利ヲ得テモ、家ハ心易ク持ル丶者也、扨利ヲ百目少クトレバ、賣買ノ上ニ不義ハ有增ナキ者ナリ、譬ヘバ一升ノ水ニ油一滴入ル時ハ、其一升ノ水一面ニ油ノ如クニ見ユ、此ヲ以此水用ニタヽズ、賣買ノ利モ如レ是、百目ノ不義ノ金ガ、九百目ノ金ヲ皆不義ノ金ニスルナリ、百目ノ不義ノ金ヲ設ケ增、九百目ノ金ヲ不義ノ金トナスハ、油一滴ニヨリテ一升ノ水ヲ捨ル如クニ、子孫ノ亡ビ往コトヲ知ラザル者多シ、二重ノ利ヤ倒者ノ禮銀ヤ、拂ノシカケナドノ無理盡ク合セ聚テ見タリトモ、ソレニテ世帶ガ持ル丶者ニハ非ズ、此理ハ萬事ニワタルベシ、然ドモ欲心勝テ、百目ノ所ガ離レ難キユヘニ、不義ノ金ヲ設ケ、可レ愛子孫ノ絕エ亡ルコトヲ知ラザルハ哀キコトニアズヤ、前ニ云如クニ、兎角今日ノ上ハ何事モ清潔ノ鏡ニハ士ヲ法トスベシ、「孟子曰、無ニ恒產一而有ニ恒心一者、惟士爲レ能」ト昔鎌倉最明寺殿、天下ノ政ヲ皆相模守殿ヘ讓リ玉ヒ、諸國ヲ巡リ玉フハ天下ノ邪正ヲ正サンタメ也、コレ下ノ訴上ヘ通ゼザルコトヲ歎キ玉フユヘナリ、上仁ナレバ下義ナラザルコトナシ、此ニ靑砥左衞門尉誠賢、鎌倉ニ於テ訴ヲ分ル時、相模守殿家人ト公文(クモン)ト相論有シガ、相模守殿家人ノ無理ナレ共、評定ノ面々時ノ權威ニ恐レテ理非ヲ分ザル所ニ、靑砥是ヲ分明ニ分ル、此時公文大ニ悅ビ、其夜半ニ鳥目三百貫文靑砥ガ屋舖ヘ後ノ山ヨリ落シ入レヌ、靑砥是ヲ見テ喜ビズシテ、殘ラズ反シ遣シテ言フ樣ハ、相模守殿ヨリコソ、褒美ヲバ受ベキ所ナリ、公事ヲ分明ニ分ルハ、相模守殿ヲ思ヒタテマツルユヘナリ、天下ノ理非

正キハ、相模守殿喜ビ玉フベキ所ナリトゾ言ケル、カクノ如キ者ハ士ノ中ニ入ベシ、才知ハ青砥ニ劣ル人モ有ルベシ、不義ノ物ヲ受ザルホドノ事、青砥ニ劣ラバ士トハ云ハレマジ、コヽヲ以テ見レバ、世ノ人ノ鏡ト成ルベキ者ハ士也、「子曰、蓋有レ之矣我未ニ之見一」トノ玉フ、世界ハ廣キコトナレバ、鼻ヲ塞テ不義ノ物ヲ受ル士モ有ベシ、若有ラバ士ニ似テ刀ヲ指ス盗人ニテ有ン、事ヲ頼ム者ヨリ賂ヲトルハ壁ヲ穿ツ盗人ニ同ジ、青砥ガ公事ヲ分明ニ分ルコトハ、相模守殿ヲ思ヒタテマツルト云ナレバ、我身ヲ脩メ役目ヲ正ク勉メ邪ナキハ君ヘノ忠臣ナリ、今治世ニ何ゾ不忠ノ士アランヤ、商人モ二重ノ利密密ノ金ヲ取ルハ、先祖ヘノ不孝不忠ナリト知リ、心ハ士ニモ劣ルマジト思フベシ、商人ノ道ト云トモ何ゾ士農工ノ道ニ替ルコト有フンヤ、孟子モ道ハ一ナリトノ玉フ、士農工商トモニ天ノ一物ナリ、天ニ二ツノ道有ランヤ

都鄙問答卷之二終

都鄙問答卷之三

性理問答ノ段

或學者問曰、大聖孔子ハ、三綱五常ノ道ヲ說、性理ノ沙汰ニハ及ビ玉ハズ、孟子ニ至テ人ノ性ハ善ナリト云、又我浩然ノ氣ヲ養フトノ玉フ、告子ハ「生之謂レ性、」又曰、性無レ善無ニ不善一、或性猶ニ杞柳一、性猶ニ湍水一ト云、又韓退之ハ「性有ニ三品一ト云、荀子ハ人ノ性惡、其善者僞也ト云、楊子ハ善惡混ゼリト云ヒ、且老莊佛氏ノ說、彼此ソノ數擧テ數ヘ難シ、何ヲ是トシ何ヲ非トセン、是ニ因テ我朝ノ儒者モ、或ハ孟子ヲ是トシ、告子韓子ヲ是トシ、又ハ孟子ヲ非トシ、又孔子以下ヲ皆非ノ如ク云者アリ、ソノ論義一トシテ難レ定、然ルヲ汝宋儒ヲ是トシ、孟子ヲ尊信シ人ノ性ハ善ト云、我思フニ兎角決定シガタシ、元來人ニ替リナケレバ、汝モ決定ハ有マジケレドモ、孟子ニ與スル儒者モ多ク、且世ノ俗語ニモ、孟子ヲ善ト思フ者多キユヘ汝ガ心ニモ、實ニ孟子ノ性善ヲ得心致シ、背フ心ニハアラネドモ、先性ハ善ナリト云テ居ラルヽト見ヘタリ、ソレハ學者ノ正直トハイハレマジ、我云フ如クニ疑ヒアリトイフコソ正直ナルベケレ、尤世渡リノ勝手ヲイハヾ惡カラン、然レドモ心ニ咎ハアルマジト思ヘリ、汝頸ヲ押テ問ナラバ、性善ニハ是ゾト證ハナカルベシ、證ハナケレドモ先孟子ニ寄因ミテ、性善ト說キ觸ラレ候ヤ

答、否シカラズ、サリナガラ汝ハイカヤウトモ思ハルベシ、所詮我云所ハ聞ヘマジ

曰、汝ガ思フ所ニ當ルユヘノ返答カヤ

答、左ニハ非ズ、「子曰、朽木不レ可レ彫也、糞土之牆不レ可レ杇」ト汝ガ如ク我體ヲ見失テ、其ヲ不レ知者ハ朽木ニ彫物スル如ク、相手無レバ死人ニ同ジ、誰ニ向テ語ンヤ、性善ト云ハ我性ヲ知テ、孟子ノ善トノ玉フハ是カ非カ、我性ニ合カ不レ合カト、手前ニ法ヲ求テ後ノ詮議ナリ、先性善ノコトハ差置、孔子一貫トノ玉フハイカヾ得心セラレ候ヤ

曰、ソレハ「曾子曰、忠恕而已」、何ゾ疑ン

答、曾子ノ忠恕ハ至テ善ナリ、後世ノ性理ニ昧キ者モ、忠恕ヲ一貫ノコトナリト云ハ可也、一貫ヲ忠恕ノコトヽ云ハ不可ナルコト必セリ、如何トナレバ今時ニテハ和漢トモ忠恕ト計リ云テハ、聖人ノ道統ト思ハズ、思ハザルユヘニ道統ヲ無ミスル罪アリ、然ルヲ汝性善ヲ知ラズシテ一貫ヲ以テ忠恕ト云ハ、曾子ノ粕ヲ食ナリ、一貫ト云ハ性善至妙ノ理ニテ、聖人ノ心ナレバ、言句ヲ離レ獨得ル所ナリ、曾子ハ是ヲ聞事理粲ナレバ、其指ニ契ヒ疑ヒ無ユヘニ唯ト對玉フ、外ノ門人中モ一列ニ聞ルレ共、聞ヘザルニ依テ孔子出玉ヒテ後ニ何ト云コトゾト問レタリ、一貫ニテハ聞ヘザルニヨリ、曾子曰、忠恕而已ト說カヘ玉ヘ共、其心ヲ覺ラズ、既ニ子貢ニモ一貫ト告玉ヘドモ、子貢未ダ達セザルユヘ對ナキナリ、曾子ハ道統ヲ得玉フユヘニ忠恕ヲ以テ至誠一貫ノ理ヲ說玉フ、得タル者ハ自由ニシテ、一貫ヲ忠恕ト說ド

モ合ヘリ、合ト不レ合トハ得ルト得ザルトニアリ、汝忠恕ト說ドモ性善ヲ知ラザレバ、曾子ノ忠恕ト違ルコト決セリ、只忠恕ノコト、押ツケ置トモ彼是濟ヌコト多カルベシ、師タル者ハ此理ヲ說ベシ、汝ハ性理ニ昧ユヘ聞ヘザルト見ヘタリ

曰、其所ハ師タル人モサツパリトハ濟ネ共、此ノ聖人ノヿニテ今ノ學者ノ知ルベキ所ニ非ズ、忠恕ノヿ也ト云テ、此上ノヿハ、決シテ沙汰ナキヿ也

答、汝ハ今ノ學者ノ可レ知所ニ非ズト云、聖人ノ敎ハ古今ニ通ジテ變ルヿナシ、今ト古トヲ分ルハ佛氏ノ末世ト云敎也、混雜スベカラズ、扨孔子｢無レ適無レ莫｣ト宣ヒ又顏淵ノ｢在レ前忽焉在レ後｣ト宣ヒ、孟子道一而已｣ト宣フ、ケ樣ノ類多シ、汝ハ如何心得居ラレ候ヤ

曰、ケ樣ノ類ハ深ク詮議セザルコトナレバ、早速ハ返答ナリガタシ

答、此三言ハ皆我心ノコトナルガ、其ヲ急々ニ返答ナラズトイハヾ、書ヲ見ルコト多シトイフトモ、何ノ益アラン、論語ノ書ハ皆聖人ノ心ナルニ、其心ヲ不レ知シテ、何ヲ法トシテ身ヲ修メ人ヲ敎ラレ候ヤ

曰、孔子ノ道ハ、五倫五常ノ外ハナシ、何ゾ疑ヒアラン

答汝ハ一而已ノ一ヲ知ラネバ、道ヲ不レ知、｢孔子曰、人能弘レ道、非二道弘一レ人｣ト、｢心能盡レ性、人能弘レ道｣人ノ外ニ無レ道、道ノ外ニ無レ人、人ノ心ハ覺ルヿ有、此ヲ以テ道ヲ弘ム覺ル心ハ體ナリ、人ノ大倫ハ用ナリ、體立テ用行ル、其用ハ君臣父子夫婦兄弟朋友ノ交リナリ、仁義禮智ノ良心ハ其五倫ヲ行スル

心ナリ、汝ハ此ノ心ノ一ナルコトヲ不レ知

曰、汝ノイヘル所モ一理アルナレバ何レヲ學ブモ外ナラズ、我モ向後ハ心ノコトヲモ工夫スベキガ、然レドモ孟子ノ性善ハ愈濟ガタシ、聖人ハ知仁勇ノ三德全シテ善ナルベシ、最早賢人サヘ全カラズ、況ンヤ衆人ハ又劣リ、ソレヲ一列ニ善トイフハ如何ナルコトゾヤ

答、「孔子易一陰一陽之謂レ道、繼レ之者善也、成レ之性也」トノ玉フ、天地ハ一陰一陽也、陰陽ノ外ニ他物有ヤ

曰、五行トイヘドモ、陰陽ナレバ他物ナシ

答、然ラバ此陰陽ハ二ツカ一ツカ

曰、二ツトモ分ガタシ、又一ツト思ヘバ動靜ノ二ツナリ

答、動靜ノ二ツナリ、其ノ動ハ何方ヨリ來リ、靜ニナルハ何方ニ歸ルゾヤ

曰、無極大極トイヘドモ、畢竟ナキモノニ名ヲ付ケタルニヤ、聢ト落著ナリガタシ

答、無キ物ニアズ、大極トイフハ天地人ノ體ナリ、先汝ガ鼻ノ息ト口ノ息トハ二ツカ一ツカ

曰、是モ分ガタシ

答、其口ト鼻トノ息ハ直ニ天地ノ陰陽也、天地ニ吐テ天地ニ吸フ、其吸フト吐トヲ暫モ止メ置レ候ヤ

曰、止ルコト不レ能

答、呼吸ハ天地ノ陰陽ニシテ、汝ガ息ニハ非ズ、因テ汝モ天地陰陽ト一致ニナラザレバ、忽ニ死スルナ

リ、陰陽ノ外ニ汝ガ命ナキコト明白ナリ、吸息ハ陰ナリ、吐息ハ陽ナリ、繼レ之者善ナリ、身ノ動モ靜ナルモ天地ノ陰陽ナリ、易ト何ゾ替コトアラン、孔子ハ天地ヲ以テ道ノ體ヲ說明シ玉フ、孟子ハ人ヲ以テ道ノ體ヲ說明シ玉フ、天人一ナレバ道モ亦一ナリ、周子曰、五行ハ一陰陽也、陰陽ハ一太極也、太極ハ本無極也、此無極ヲ一トヤイハン、二トヤイハン、己ニ實知セズバ何ヲ以テ道ヲ說カン、醉ノ中ニ夢ヲトキ、世ヲ惑スコト哀キニ非ズヤ、早ク孔孟ノ一ヲ可レ知、孔子孟子ハ割符ノ如シ、孔子ヲ是トセバ孟子モ是ナリ、孟子ノ性善ヲ貴ビ糟ヲ食ヒ與スルニハ非ズ、我心ニ合フ故也、ケ樣ニ說ク時ハ甚知リ易ニ似レドモ、此上ヲ味ヒ得ルコトカタシ、味ヒ得バ生死ハ一致ナリ、是故ニ「朝聞レ道夕死可矣」ト孔子モノ玉ヘリ、扨孔孟ノ曰フ所ノ善ヲ世ニ見誤コト多シ、性ガ善ナラバ、世ノ中ハ皆善人ニテ、惡人ハナキ筈ナリ、然ルニ惡人モ多ケレバ、定テ虛名ナラント疑フ者多シ、是以テ味ヒ得者少也、如何トナレバ今日ノ上此ハ善、彼ハ惡ト、善惡對々ノ善ト見ルユヘニ、聖人ノ宗ヲ失シテ、大ナル謬出ル所也

曰、其大ナル誤リ出ル所ヲ、聞クコトヲ得ラルベキヤ

答、然ラバ天地ノ道ヲ以テイフベシ、今此ニ、田地二反アラン、百姓ノ力ヲ用ユルコト同ク糞等モ同ク、其植ル所ノ苗モ同ク、ウユル時モ同ジ、然ルニ一反ニハ米三石アリ、一反ニハ、一石五斗有時ハ、纔ニ一反ノ中ニテ米一石五斗違アラバ、其田ニ惡心アリト云ンヤ、又三石アル田ヲ善心アリトイハンヤ

曰、田ニ心ナケレバ、惡心トハイハレマジ、然レドモ上田下田トハイフベシ

答、然ラバ、土ニ替リハナク同ジ土ナレドモ、上田下田ノ替リアルナリ、是地ニ肥タルト磽タルトアリトイヘドモ、土ノ理ニ替ルコトナシ、然レバ土ハ同ジ土ニテアリナガラ、上田ト下田トアリ、然リトイヘドモ、土ニ具ル所ハ同ジ、同キユヘニ、漸々ニ糞ヲ入土ヲ入レバ、下田ハ中田トナル、中田ハ上田トナル、是ヲ人ニ喩テイハヾ、下田ハ小人ナリ、中田ハ賢人ナリ、上田ハ聖人ナリ、聖人ト賢人ト小人ト替リアレドモ、元性善ハ同キユヘニ、學バ漸々ヲ以テ小人ハ賢人トナリ、賢人ハ聖人トナル、是性ハ一ナル證ナリ、扨聖人モ賢人モ小人モ今日活テ動クハ呼吸ノ二ツナリ、此二ツヲ繼モノヲ見得スレバ、形ナキモノニシテ、萬物ノ體トナルモノナリ、是ヲ名ヅケテ善ナリトノ玉フ、此性ノ善ナルコトハ私慮ヲ以テ窺可知ニアラズ、孟子ノ性善ハ前ニイフ如ク、惡ニ對スル善ニ非ズ、誤ルベカラズ

曰、孟子ノ性善ト、告子ガ性ニ無善無不善ト云ハ同ジカルベシ、如何トナレバ、無善不善ノ所ハ寥々寂々トシタル所ナリ、孟子ハ其ノ寥々寂々タル所ニ名ヲ蒙ラシメテ、性善トイヘリ、告子ハアリノマヽニ、無善無不善ト云、辭ニ替リハアレドモ實ハ虛名ナリ、夫ニ孟子ハ是トシ、告子ハ非トスルハ如何ナルコトゾ

答、是汝ガ不得ノ所ナリ、先告子ガ無善不善ト云ハ、是思慮ナリ、如何トナレバ我性ト云者ヲ尋見レドモ、善トモ不善トモ分レズ、然レバ善モ不善モ無キ者也ト思慮ヲ以テ見タル所ナリ、孟子ノ性善ハ直ニ天地ナリ、如何トナレバ人ノ寢入タル時ニテモ無心ニシテ動クハ呼吸ノ息ナリ、其呼吸ハ我息ニ

ハ非ズ、天地ノ陰陽ガ我體ニ出入シ、形ノ動クハ天地浩然ノ氣ナリ、我ト天地ト渾然タル一物ナリト貫通スル所ヨリ、人ノ性ハ善ナリト說玉フ、自然ニシテ易ニ合ヘリ、扨此所ハ前後トモニ間分ガタキ所ナリ、默シテ工夫セラルベシ、易ハ天地ノ上ニテ說玉ヘバ凡テ無心ノ所ナリ、其無心ノ陰陽ガ一タビ動キ、一タビ靜ナリ、是ヲ繼者ガ善ナリトノ玉フコトナリ、此微妙ノ所ト、告子ガ云思慮ト、一列ニイハルベキヤ大ニ異ル所ナリ、孟子ノ性善ハ生死ヲ離テ天道ナリ、イカンゾ告子ガ念々生滅スル者ト、一列ナルベキヤ、此ハ易キニ似テ難レ知所也、思慮ヲ以テ知ラルヽ所ニアラズ、信心堅固ニシテ、憤リヲ發シ、孔子齊ニ在テ樂ヲ學ビ三月肉ノ味ヲ知リ玉ハザル如クニシテ可レ知、世ノ人書物ヲ讀ナガラ、此性善ヲ知ラズ、不レ知シテ書ヲ讀者ヲ喩テイハヾ、病人ノ如シ、無事ノ人ハ食ノ美キ味ヲ知ル、玆ヲ以テ喜ブ、熱病人モ食ハ喰ドモ、美キ味ヒヲ知ラズ、コノ故ニ不レ喜、性善ヲ不レ知者モ斯ノ如シ、書ハ讀ドモ書ノ意味ヲ知ラズ、却テ孟子ノ性善ヲ非ト見ルナリ、孟子ノ性善モ天ナリ、孔子ノ易ノ性善モ天ナリ、天地ト人ト別々トイハヾ汝口ト鼻トヲ塞ギ活テ見ヨ、天地ノ陰陽ヲ受ズシテ活ラレナバ孟子ハ非也、死スベシトイハヾ、孟子ハ是ニシテ天地ノ性善ト一致ナルコト決セリ、是端的ノ證ナリ、其繼物ヲ不レ知ニヨツテ迷フ也、其迷ヨリシテ告子ガ說ヲ實ニ尤ト請合フ也、告子ガ云ル如ク、性ニ何ゾ善不善アランヤトイハヾ、人學テ是ニ寄ベキカ、退テ工夫スベキ所ナリ、善不善ナシト思フ一念ハ毫釐ノ差ナレ共遂ル所ニテハ千里ノ謬トナル、聖人ノ道ハ、天地而已天地ハ見ヘタル通ニ淸ト濁ト有テ天ハ淸リ

地ハ濁レリ、清ル天モ濁レル地モ、何方ヲ見レバトテ、物ヲ生ジ育ノベキトモ不レ見、無レ心ナレドモ萬物生々シテ、古今違ハズ、其生々ヲ繼物ヲ善ト云、分テイハバ天ハ形ナフシテ心ノ如シ、地ハ形有テ物ノ如シ、其生々スル所ハ活物ノ如シ、無心ナル所ハ死物ノ如シ、天地ハ死活ノ二ヲ兼タル物ナリ、死活ノ二ヲ兼スブルユヘニ萬物ノ體トナル、其物ヲ暫ク名ヅケテ理トモ性トモ善トモ云、然ルニ私意ヲ用ユル者ハ、天地ハ活物ナリト、一方ヲ知テ死活ヲ攝テ一理ナルニトヲ不レ知、因テ害ヲナスコト甚シ、是故ニ「孔子攻二乎異端一斯害也已」トノ玉フコトナリ、天地ヲ人ノ上ニテイハヾ、心ハ虛ニシテ天ナリ、形ハフサガツテ地ナリ、呼吸ハ陰陽ナリ、コレヲ繼者ハ善ナリ、用ヲ爲所ヲ主ル體ハ性ナリ、是ヲ以テ見ヨ、人ハ全體一箇ノ小天地也、我モ一箇ノ天地ト知ラバ何ニ不足ノ有ベキヤ、告子ハ是ヲ不レ知、生滅ニアヅカル思慮ヲ以テ我性ト思、思フ所ハ性ニ非ズ、如何ナレバ思慮ナキ天理ニ異ルユヘナリ、此味ヒヲ不レ知者ハ、天道ニ不レ合ユヘニ異端ト云、渾然タル一理ノ性ニ至レル孟子ニハ異ル所ナリ

曰、天人ハ一トハ聞ドモ、我モ天地ト一致ナルコト落着シガタシ、汝ハ此理ヲ知レリヤ、曾テ不得心ノコトハイハレマジキガ如何ナルコトゾヤ

答、書經大誓ニ曰、「天視自二我民視一、天聽自二我民聽一」トアリ、天ノ心ハ人ナリ、人ノ心ハ天ナリ、此故ニ古今ニ通ジテ一ナリ、汝今物語ノ相手ハ誰ゾヤ

曰、對シテイフハ汝ナリ

答、我ハ萬物ノ一ナリ、萬物ハ天ヨリ生ル、子ナリ、汝萬物ニ對セズシテ、何ニヨツテ心ヲ生ズベキヤ、萬物ハ是心ナル所ナリ、寒來レバ身屈シ、暑來レバ身伸、寒暑ハ直ニ心ナリ、熟シテ工夫アルベシ

曰、段々ノ說ニテ天人一致ト性善ノコトハ、耳ニハ聞ドモ心ニハ得ズシテ、少シモ面白キ味ノ不レ出ハ如何ナルコトゾヤ

答、能問哉、徒然草ニ、傳聞學ンデ知ルハ眞ノ知ニアラズト云、今汝如レ斯キコヘタルヤウニ思ハル、トモ、未實知ニ非ズ、是ヲ以テ味ナシ、性ヲ知リタシト修行スル者ハ得ザル所ヲ苦ミ、是ハイカニコレハ如何ニト、日夜朝暮ニ困ム中ニ忽然トシテ開タル、其時ノ嬉サヲ喩テイハバ、死タル親ノ蘇生、再ビ來リ玉フトモ其樂ニモ劣マジ、昔ヨリ重荷ヲ持シ山賤(ガツ)ノ息杖懸テ休タルヲ、安樂ノ至極ナリト書キ傳シ其人ハ、豁然ト開タル此樂ヲ不レ知者ニテ有ツラン、我ニ至極ノ樂ヲ盡ケト望人有バ、豁然ト開ケツツ手ノ舞ヒ足ノ蹈所ヲ忘シ者ヲ盡ベシ、此所ヲ「傳曰、豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無レ不レ到ト、扱此所ハ我心ヲ盡ス程々ニ嬉サチガフナリ、年久シク如何如何ト思フ所ヨリ、忽然トシテ疑ヒ晴ルコトアリ、然ルニ一ケ月ヤ二ケ月ニ疑ヲ起シ、是ニ於テモ彷彿ト開クコトアリトイヘドモ喜ブコト少シ、少キユヘニ勇氣出デズ、又信心堅固ニシテ入立時ハ、假令辻ニ立テナリトモ、此味ヒヲ世ニ傳ヘ殘サント思フ勇氣モ出ルナリ、我文學ノ拙キ恥ヲ知ラズシテ、如レ斯謂散スハ實ニ鄙夫トイフベケレド、我志ヲ述ンタメナリ

曰、性理ハ第一ノ事トハ思ヘリ、然レドモ兎角開得ルコトカタシ、雲泥ノ違アル、告子ガ非ヲ得心セバ孟子ヲ是トシラルベキヤ

答、孟子ノ性善ヲ得レバ、白晝ニ黒白ヲ分ル如シ、他ノ非ハ聞ズシテ明ニ分ルナリ、何ゾ非ヲ知ルコトアラン、性善ヲ知レバ、定木ヲ以テ曲直ヲ正スガ如シ、孟子ノ性善トノ玉フハ、心ヲ盡シテ性ヲ知リ性ヲ知ル時ハ天ヲ知ル、天ヲ知ルヲ學問ノ初メトス、天ヲ知レバ事理自明白ナリ、此ヲ以テ私ナク公ニシテ、日月ノ普照シ玉フガゴトシ、告子ガイヘル所ハ生レナガラノ性ヲ見失ヒ、私知ヲ用ユレバ白晝ニ日輪ノ光ヲカラズシテ、戸ヲ閉テ燈火ヲ用ユルガ如シ、照ス所斯ノ如キ違アルナリ、因テ雲泥ノ違ト云、天地ハ照々ト明ナリ、何ゾ力ヲ用ユルコトアラン、力ヲ不レ用行ルヽユヘニ、安樂ニシテ然モ明カナリ、是故ニ天地ノ靈トナル、此ヲ不レ知昏々トクラフシテ、私知ヲ以テ苦ハ告子ガ説ナリ、孟子ハ性理ニ明カナルユヘニ、積レ義浩然ノ氣ヲ養ヒ、至大至剛ニシテ天地ニ充ルノ徳ニ至リ玉フ、告子ハ此理ヲ不レ知、己ガ私知ヲ以テ定テ、此筋ニテ有ント思フテハ問ヒ、又決定ナキ所ヨリ品ヲ變テ問ユヘニ、論義ノ度々ニ變ルナリ、吾ニ決斷シテ云コトバハ變ザル者ナリ、然ルニ告子ハ「不レ得ニ於言一、勿レ求ニ於心一」ト云、於レ言有レ所レ不レ言其言ヲ舍置ベシ、其理ヲ心ニ反シ求ルハ惡ト云、心ニ求ルコトヲ嫌ヒナバ何ノ世ニカハ覺ル所アランヤ、今日一事ノ輕キコサヘ、心ヲ盡シテ知ルニ非ズヤ、且告子ガ湍水ノタトヘニテ明カニ可レ知、告子ガ思ヤウハ心ハ種々ノ思ヒヲ生ズレドモ、何ヲト云テ可

レ取ヤウテケレバ性ハ水ノ流テ淵ニグルグル洄ル如キ者ト思ヘリ、夫天ハ忽寒暑雲霧風雨ヲ生ジ、平旦清明ノ氣ヨリ、仁義禮智ノ良心ヲ生ズルコトヲ不レ知、色々品々ニ穿鑿シ、思慮スルユヘニ、只紙一重ホドノ違モ天地懸隔トハルカナルヘダヽリトナル、譬バ犬ノ己ガ尾ヲ食ントスレバ、身ノ回ルニ隨テ尾モ巡ル故、喰ヒツクコト不レ能、告子モ色々思慮スルユヘニ、性善ニ及ブコト不レ能、惜哉哀哉、孟子ハ知ヲ不レ用、義ヲ行ヒ玉フニ因テ、平旦清明ノ氣ヲ養フコトヲ得玉フ、然レドモ獨得ル所ニシテ、形容シガタキヲ以テ難レ言トノ玉フ、「程子曰、觀二此一言一則孟子之實有二是氣一可レ知矣」又程子ノ此一言ヲ觀レバ、程子モ此氣ヲ養ヘルコト明ナリ、知音ノ人ハ是ヲ可レ知、性善ヲ會得スレバ、氣モ亦清明ニシテ、仁義ノ良心ヲ發ス、常ニ仁義ノ良心起ラバ、人事ハ此ニ越ルコトアランヤ

曰、性善ヲ知ルハ、至極ノコトニテ有ベケレド、我等ゴトキハ何程聞テモ得ラルベキニアラズ、孟子ノ如キ器量アラバ善ナラン、後世ノ者所詮及ビ難シ、又世界數萬億ノ中ニ纔ニ二十人三十人、假令九十百ニ至リ、得心スル人アリトモ、イハヾ少シノコトナリ、只心易云テ世渡リヲ能スルコソ善カルベケレ、佛者ナラバ極樂ヘ往生スト云テ悅バセ、儒者ナラバ天地ニ升降スト云コソ勝ラント思ヘリ、假令覺レバトテ、同ジ天地ナレバ、苦ンデ益ナキコトニアラズヤ

答、汝モ益アルト思ヘバコソ、苦ンデ學ブニアラズヤ、不レ學バ鄉人トナル、鄉人トナル恥ヲ嫌フユヘニ學ブ也、學問第一ノ所ハ聖賢ニ至ルコトナリ、性善ヲ知ルハ聖賢ニ至ルノ門也、門戸無クバ如何ゾ聖人

ノ道ニ入ベキ、「孟子曰、堯舜之道孝弟而已」苦ンデナリトモ是ヲ能スルヲ益トス、孝弟ヲ舍レバ禽獸ト
ナル、心禽獸ニ陷テ不孝不弟ヲナシ、親子兄弟心ヲ阻ル程、世ニ悲キコトアランヤ、此故ニ孝經ニ、「子
曰、自二天子一已下至二于庶人一孝無二終始一而患不レ及者未二之有一也」ト、因テ「五刑之屬三千、罪莫レ大二於
不孝一」トノ玉フ、ケ樣ニ罪人トナリ、人倫ヲ破レドモ恐ル、コトナク、孝弟ハ行ヒ損ト思ヒ、死スレ
バ君子小人トモ天地ヘ散々テ、一列ナリト思ハレ候ヤ

曰、何ゾ人倫ヲ可レ舍、又天地ニ散々ト決定スルニモアラズ、然レドモ地獄極樂ヘ往ベキトモ不レ思、三世ノ
コトハ定メテ無キ者ニテ有ント思ヘリ、コレハ我バカリニモ非ズ、世間ニモ決セヌ人モアルヤラン、或
所ニ儒者ヲ專一ニ致シ、佛法ヲ譏リ、且神社佛閣ヘ友ニ誘レ參リテモ、曾テ拜ナドモセズシテ居ラレ
シガ、時節來テ病氣ヅキ、最早九死一生ト相見ヘシ時ニ、日頃緣類ユヘ來リ因ム僧アリケレバ、臥ナ
ガラ手ヲ合、淚ヲ流シ、後世ノコト返々賴入ト申サレケリ、自身ニモ最期ニ望デハ、何トヤラ氣味アシク
日頃ノ血氣ニ任テ云時トハ替ルモノニヤ、又我モ實ハサツバリトセネドモ、佛者ニ聞モ口惜ク、其上
佛者ニモ、正ク悟道ノ僧モ見アタラズ、或時田舍ノ禪僧ニ出合幸哉ト思ヒ、佛家ニハ生死ノ一大事ヲ
說明セリト承ル、如何ナルコトゾ、今宵ハ心閑ニ、御物語候ヘトイヘバ、彼僧拂子ヲタテヽ見セラレケ
レドモ、何トモ心得ガタキ故ニ、暫他ノ物語ヲシ、後ニ又最前ノ生死ノコト、今一度唯心易ク、耳ニ入
ヨキヤウニ示シ玉ヘト云ケレバ、今宵ハ茶ガ濃テ、寢苦シカラントイハレケル故、聞ザルカト思ヒテ、

最前ノ生死ノコト、今一度示シ玉ヘト反シテイヒケレバ、彼僧最早四ノ柝ガ鳴ト、大聲ニテイヒ、又イハルルヤウハ、汝ハ學問モアリソウナルガ、笑止ヤ聾ソウナトイハレケリ、ケ樣ナルコトナレバ問テモ濟ズ、不レ問猶決定セズ、如何シテ疑ヒナク、末期ニ至テ不レ泣ヤウニナルベキヤ

答、彼僧最初ニ、拂子ヲ立テ見セラレシヲ、汝是ヲ見テ知ラザレバ盲ト可レ云ヲ、又品ヲ替ヘ說テ聾トイヘルハ愛ニ溺シ教也、孔子ハ吾爾ニ隱スコトナシト、只一言ニ盡シ玉フ、「又季路問レ死、曰、未レ知レ生、焉知レ死」トノ玉フ、今此身ヲ知レバ、死ノ道ハ目前ニ明ナリ、何ゾ他ニ因テ求ンヤ、生死ノコトハ論語ニ明ナリ、是ヲモ殘サズ教ルヲ實ノ儒者ト云、汝モ秘密セズシテ、教ル方ニテ學ビ、早ク生死ノ疑ヒヲ晴サルベシ、足下ノ近コトヲ不レ知、聖賢ノ教ニ違ヒ心ヲ苦メ、夫ニテモ世渡リ勝手ヨキト思フテ己ガ心ヲ欺キ、我コソ孔子ノ弟子ニテ眞ノ儒者ナリト云テ居ラヽハ、如何ナルコトゾ

曰、古歌ニ「こゝろのとはゞいかゞこたへん」ト有ゴトク、心ニ問バヤスキニハ非ズ、人ガ問ヘバ、儒者ナドハ奉祿渡世ノコトヲ思フ者ニテモナシ、元來天ヨリ來テ天ニ歸ルト潔白ニイヘドモ、實潔白ナラズ、心ハ糞土ニ蓋ヲシテ置ヤウニテ不レ安苦ムナリ、然リトイヘドモ如何トモスベキヤウナシ、是ハ儒者計ニテモナク、佛者モ前ニイヘル如クナレバ、世間並也ト思フ、尤佛者ハ廣キコトナレバ、千人ニ一人得心ノ僧モアルベケレド、儒者ハ數モ少ケレバ、彌〻罕ナルベシ

答、我思フハ、左ニハ非ズ、佛者ニハ少ナルベシ、儒者ニハ數モ多カルベシ、儒者トイフハ學者ノコト

ナレ共、儒ハ濡ニテ身ヲ濡スト云コトナレバ、此身ニテ滿足シタル者ヲ儒者トイフベシ、孟子曰、人々己ニ貴者アリ、己ニ貴キハ心也、心ヲ得テ滿足シ、身ヲ濡者スハ儒者也、何程ニ出家多シトイフ共、俗人ノ十分ノ一ニモ及バズ、人數少キユヘニ悟道ノ人罕ナルベシ、俗ハ數萬ノコトナレバ、身ヲ濡ス人モ多カラン

曰、然ラバ修行ノ功ヲ積、心ヲ得テ道ノ無レ疑ホドニ至リ、何程ノ勝レタルコト候ヤ

答、孟子ノ曰、「我四十而心不レ動」ト國天下ノコトニ預リテ、恐レ疑フコトナク、身ヲ脩ルヲ勝レタリト云、然ルニ世ノ中ニ、道ヲ敎ル爲ニ弟子ヲ取リ敎ルコトヲ不レ知シテ弟子ニ養ハルルハ逆ナリ、コレヲ譬テイハバ、男タル者我女房ヲ養フヿヲ得セズシテ、反テ女房ニ養ハルル如シ、心ヲ不レ知敎ルトキハ如レ斯逆ニ至ル、「大學道明ニ明德ニ爲レ本、新レ民爲レ末」學者タル者心ヲ知ルヲ先トスベシ、心ヲ知レバ身ヲ愼ム身ヲ敬ムユヘニ禮ニ合フ、故ニ心安シ、心安キハ是仁也、仁ハ天ノ一元氣ナリ、天ノ一元氣ハ萬物ヲ生ジ育フ、心ヲ得ルヲ學問ノ始トシ終トス、呼吸存スル間ハ、心ヲ以テ性ヲ養フヲ我任トスルコトナリ、少シニテモ仁愛ヲ行ヒ、義ニ合ヘバ安樂ナリ、我心ノ安樂ニナルヨリ外ニ敎ノ道アランヤ、我心ニ不レ得コトヲ僞リヲ以テ得タル顏ツキシタリトモ、ソレハ僞リナリト受ツケヌ心有ユヘニ苦ムナリ、是前ニ汝ガ云ヘル古歌ノ如ク、「いつはりも、ひとにはいひてやみなまし、こゝろのとはばいかゞこたへん」ト云所也、「孔子曰、君子不レ憂不レ懼、又曰、內省不レ疚、夫何憂何懼、」ト我云所、

他ニハアラズ、平日不レ憂不レ懼内ニ省テ不レ疚、心靜々トシテ安樂ナラバ、コレニ勝ルコトアランヤ

曰、聖人ハ生ナガラニシテ知リ玉フ、汝等如キノ窺ヒ可レ知所ニアラズ、然ルニ心易ク聖知ノ私知ノト判斷セルハ、如何ナルコトゾヤ

答、汝モ黑白ハ心易ク分ルベシ、聖知ト私知トヲ分ルモ如レ是、禹ノ水ヲ治メ玉フ時ニ、彼ハ高シ此ハ下シト知リ玉フバカリノコトニテ、替リタルコト有ニ非ズ、私知トハ品々ノ了簡ヲ加ルユヘニ、自然ノ知ニアラズ、此聖知ニ異リ、聖知ヲ近ク知ラント思ハヾ、「程子曰、今人羈靮以御レ馬、而不ニ以制一レ牛、人皆知ニ羈靮之作在ニ乎人、而不レ知ニ羈靮之生由ニ於馬」、聖人之化モ亦猶レ是、聖人馬ヲ見テ後ニ羈ヲ作テ、馬ニハマセテ使ヒ玉フ、此母ノ胎内ヨリ知テ、生レ玉フニ非ズ、向ヒ視物ヲ則心ト爲玉フ、是聖知ノ勝レタル所ナリ、向フ物ヲ移シ曲ザルハ、明鏡止水ノ如シ、人タル者元來心ハ替ラザレドモ七情ニ蔽昧サレテ、聖人ノ知ヲ外ニ替リタルコトアルヤウニ思フヨリ、昧クナッテ種々ニ疑ヒ發ルナリ、元來形アル者ハ形ヲ直ニ心トモ可レ知、譬バ夜寢入タルトキ、寢掻シ、覺ヘズ形ヲ相ク、是形直ニ心ナル所ナリ、又子々水中ニ有テハ人ヲ不レ螫、蚊ト變ジテ忽ニ人ヲ螫、コレ形ニ由ルノ心也、鳥類畜類ノ上ニモ心ヲツケテ見ヨ、蛙ハ自然ニ蛇ヲ恐ル、親蛙ガ子蛙ニ蛇ハ汝ヲトリ食フ、畏シキモノゾト敎ヘ、蛙子モ學ビ習テ、段々ニ傳ヘ來リシ者ナランヤ、蛙ノ形ニ生レバ、蛇ヲ恐ルルハ形ガ直ニ心ナル所ナリ、其外近ク見ント思ハヾ、蚤ハ夏ニ至レバスベテ人ノ身ニ從テ出ルモノナリ、是モ蚤ノ親ガ人ヲ食フテ渡

世ヲセヨト教ンヤ、人ノ手ノユク時ハ心得テ早ク飛ベシ、トバズバ命ヲトラルルト教ンヤ、飛ニゲルハ此不レ習シテ皆形ニヨッテ爲ス所也、「孟子曰、形色天性也、惟聖人然後可ニ以踐レ形」形ヲ踐トハ、五倫ノ道ヲ明カニ行ヲ云、形ヲ踐デ行フコト不レ能ハ小人ナリ、畜類鳥類ハ私心ナシ、反テ形ヲ踐、皆自然ノ理ナリ、聖人ハ是ヲ知リ玉フ、日本紀ニ云、「夫大己貴命與ニ少彦名命一、戮レ力一レ心經ニ營天下一、復爲ニ顯見蒼生及畜產一則定ニ其療レ病之方一、又爲レ攘ニ鳥獸昆虫之災異一則定ニ其禁厭之法一、是以百姓至レ今、咸蒙ニ恩賴一」ト見エタリ、何國ニモ道ハ同フシテ、唐土ニモ伏羲能ク犧牲ヲ馴伏スト史記ニ見ヘタリ、第一ニ人ト畜類トハ、類異ル故ニ鳥獸共ニ人ヲ懼テ近ヅクコトナキヲ、聖神ハ私心ナキユヘニ、彼ガ懼ルヽコトヲ見テ此ヲ心トシ玉フ、夫故ニ牛ハ此レヲ好ム、羊ハ彼ヲ好ム、家ハ此ヲ好ム、馬ハ彼ヲ好ム、此ハ强シ、彼ハ弱シ、此ハ厲シ、彼ハ靜ナリト向フ所ノ物ヲ、自ノ心トシテ彼ガ氣質ノ性ノ儘ヲ、能知リ玉ヒテ、人ニ馴伏スルヤウニシ玉フニヨリ、多クノ獸ヲ馴レシタガヘテ、後世鬼神ニ諸肉ヲスヽメ、又老人ヲ養フコトヲ教玉フ、然レバ天地ニ生ヲ受ル物ハ、自ラ弱モノヽ强キ者ニ從フハ是天之道也、聖神其德在スニ因テ無益ノ物ヲ不レ殺、理ヲ盡シテ、祭祀賓客老人ノ養ヒ等ニハ已コトヲ不レ得シテ、時ノ入用ニ從ヒ、殺テ是ヲ用ヒ玉フ、無用ノ時ハ虫一疋モ殺シ玉ハズ、又萬草ノ中ニ於テ、五穀ハ勝レタルコトヲ知リ玉ヒ、麥ハ夏出來ルモノナレバ、何蒔ウヘタルガ實登ガヨキ、稻ハイツゴロ種オロスガ善キ、ソレヨリ大豆小豆小角豆ハ何ガ善キト、時候ヲ考ヘ玉ヒ、五穀ヲ植藝ルコヲ教玉フ、其外ニ草木ノ多キ中ニ食

フテ能人ヲ養フ者ヲ知ラセ玉フ、且土ヲ見分ケ、ソレハソコ此ハコヽト、田畠ノ植ル所ヲ知リ教玉フニヨリテ、人タル者飢餓ルヿヲ、免ルホドノヿヲ知ル世トナリヌラン、此皆大己貴命、少彦名命、唐土ニテハ伏義神農黄帝御仁德ノ功也、天ハ萬物ヲ生ジ、生ズルモノ自ラ育ル、日本紀ニ云、「保食神乃廻レ首嚮レ國、則自レ口出レ飯、又嚮レ海則鰭廣鰭狹亦自レ口出、又嚮レ山則毛麁毛柔亦自レ口出」ト見ヘタリ、保食神ノ口トハ、如何ナル口ゾト工夫スベシ、天神地祇ハ如レ斯自由ナル御神也、ソノ自由ノ口ヨリ生ズル故ニ、生ズル物モ又自由也、譬バ蟬ハ口ニ聲ナクシテ脇ノ下ニ聲アル者ナリトモイヘリ、口モアルベケレドモ何方トモ見分ガタシ、春夏空ニ飛小虫ナドヲ見レバ、何ヲ食フトモ見ヘズシテ、飢ルコトナク、虛空ニ生ジテ虛空ニ死スヤ、出所ヲ不レ知モノ多シ、此ノ類ヲ推テ保食神ノ口ヲ味フベシ、是ヲ以テ見レバ、今日ノ萬民世渡リノコトハ定リアル者ナリ、衆人ハコレ有コトヲ不レ知、然ルヲ萬物ノ上ニツイテ、萬物ノ迹ヲ見テ教ヲ立玉フ、其教直ニ天ニ有ユヘニ古今變ラズ、天ハ物ヲ生ジ與ヘテ、其心ヲ聖神ヲシテ民ニ知ラシメ玉フ、聖人ハ天ノ如ク拵ヘ出スヿ不レ能、天ノ力ニ不レ屆所ヲ教ヘ、世ヲ救ヒ玉フ、聖人ナクバ天德見レズ、天德ナクバ爭デ聖人ノ功ヲ立玉ハン、譬バ日本武尊ノ、武勇ナクバ天ノ叢雲ノ御劍モ、草薙ノ御劍ト云名ハ見レジ、實ノ德モ皆持人ニヨル、聖人ナクトモ天ノ道朽ハセズ、然レ共世ニ見レ不レ行、世ノ人德ヲ明カニセント眼ヲ開クベキ所也、天ノ道ヲ知テ世ニ教ヘ施玉フヲ、聖知トハイヘリ

又問、儒者ヨリ佛法ヲ異端ト云テ嫌フハ、イカナル違ヒ有コトニ候ヤ

答、異端トハ端ヲ異ストイフヿ也、儒ニハ仁義禮智信ノ五常、君臣父子夫婦兄弟朋友ノ五倫トヲ天ノ道トシ、天人一致トス、佛家ニハ五常五倫ノ道ヲ不レ立、此儒ト歸（オモムキ）ヲ不レ同、因テ異端ト云、假令儒者ニテ儒經ヲ說トモ我心ヲ不レ知、聖人ノ心ニ不レ通、我私心ヲ以テ敎ヲ立レバ、私心ハ直ニ異端ナリ、然レドモ聖人ノ弟子ニ似タレバ押出シ異端トハイハズ、不レ言トモ異端ノ方ニ近キ者ナリ、時節至テ心ヲ知レバ我儒ト一致トナル、扨儒佛ノ二道ヲ枝葉ニカヽリ論ゼバ事多クシテ分レ難シ、互ニ根本ノ所ハ性理ヲ會得スルヲ要トス、先佛氏ニテイハヾ、天台宗ハ止觀ト云、眞言宗ハ阿字本不生ト云、禪宗ハ本來面目ト云、念佛宗ニハ入我我入機法一體ナドヽ云、日蓮宗ニハ妙法ト云、ケ様ニ名目ニハ替リアレドモ、修行熟シテ至ル所ハ一ナリ、一事ヲ擧テイハヾ、一壽量無邊經曰、佛告ニ文殊ニ言、無心無念之本佛以ニ不思議ニ爲レ體、無ニ本去來ニ無ニ三身性ニ無ニ十界性ニトト云、然レドモ有ニ對スル無ニハ非ズ、是ヲ以テ法性トハイフベシ、然ラバ其法性ヲ覺ルヨリ外ハナカルベシ、悟レバ生死ノ迷ヒヲ離ル、生死ノ迷ヒヲ離レザレバ、宗旨ノ法燈ト成コト不レ能、扨儒ニハ、性理ノ至極ノ所ニ至テハ、上天ノ載ハ無レ聲無レ臭ト說玉フ、卽易ニ所謂「窮レ理盡レ性以至ニ於命ニ」トノ玉フ所ニテ聖人ノ心ナリ、如レ斯ハ渺然トシテ主トスル所ナキニ似タリ、然レドモ聖人理ヲ窮メ玉ヘバ、義有テ存セリ、喩バ雪中ニ梅ノ香ヲ知ルガ如シ、形見レズシテ、而明ナリ、然レバ聖人ノ心ハ天道ニ至リ玉ヒ、天地アラン限リハ在シ玉フ、聖人沒シ玉フニ心バカリ殘レルコト如何ト可レ思カ、世ニ在ス時モ心ハ天道ナリ、一詩曰、文王在ニ於上ニ昭ニ于天ニトイヘ

リ、此心ヲ知ラバ、德行ハ至ラズトモ、儒者トモイフベキガ、其心ヲ不レ知者ヲ、聖人ノ弟子トハイフベカラズ、扨儒佛共ニ理ノ所ハ近フシテ分レガタシ、又行ヒノ上ハ見ヘタル通リニ雲泥ノ違アリ、出家ハ五戒ヲ有、俗ハ五倫ノ道ヲ行フ、是又マギルヽコトハナシ、其出家ノ眞似ヲ、俗ガスルニ因テ流ニ費有リ、唐土ニモ梁ノ武帝ノ如クニ終日一食ニ蔬素ニ宗廟以レ麪爲ニ犧牲ニ斷ニ死刑ニ必爲レ之涕泣、天下知ニ其慈仁ニ、然ルニ武帝之末、江南大ニ亂ル、佛ノ心ヲ悟ズシテ法ニ泥トキハ害アリ、害アルコトヲ譬テイハヾ、飢者ニ金ヲ與ル如シ、天下第一ノ寶ト喜ベドモ、此ヲ懷テ死スルニ同ジ、聖人ノ教ハ飢者ニ一飯ヲ與ル如シ、一飯ハ金ノ喜ビニハ劣ル如クナレドモ、命ヲツナグヨリ勝ルコトアラジ、武帝ノ如ク、死罪ノ者ヲ見テ泣君アレバ、其慈仁ハ金ヲ得シ如ク、民喜ベドモ、政道不レ正シテ、江南ノ亂レバ金ヲ懷キ飢テ死スルニ同ジ、是害アル所ナリ、聖人天下ヲ治メ玉フハ、敬ヲ主トシテ、孝弟忠信ヲ行ヒ玉ヒ、是ヲ教トナシ玉ヘバ、只一飯ヲ與ヘ、命ヲ助ル如クナレドモ、天下ノ民盡ク孝弟ヲ行フユヘニ、及ブ所廣大ニシテ利益アル所ナリ、事ヲ以テ論ゼバ、佛氏タル人罪咎アル者ナレバトテ死罪ニ行フベキヤ、罪咎アル者ニテモ、弟子ニセントテ上ヨリ貰ヒ助ケ度思フハ出家ナリ、慈愛ノ心バカリニテ、聖人ノ法ナクシテ政道ヲ行ハヾ、反テ事ノ亂トナラン、武帝ノ如キ君アラバ、異端ト譏ルモ宜ナル哉

曰、手前ニハ儒道ニテ、身ヲ脩ル志ナレバ、我爲ニ問ニハアラズ、然レドモ上ヨリ下ニ至ルマデ、佛法

ヲ信仰ノコトナリ、雑ル時ニ害アルコトナラバ、上ニハ用ヒ玉ハザル筈ナリ、如何ナルコトゾヤ

答、汝ノ如ク聞得ザル者アレバ害ヲナス、聞得シ人ニハ何ゾ害有ン

曰、汝ハ交ゼ用ルトキハ、害アリトイハル、ユヘニ問フコトナリ

答、我イフ所ハ左ニハ非ズ、佛法ノ用ヒヤウヲ知ラザレバ害アルコトヲ云

曰、知ルト不レ知ト、用ヒヤウニ二品アルハ、イカナルコトゾヤ

答、佛法ノ表一通リヲ聞テ悟ルコト不レ能バ、武帝ニ刑罰ノ者ヲ訴ルガ如シ、助ルコトヲ知テ正スコトヲ不レ知、如何ゾ政行レンヤ

曰、左アレバ忽ニ害アリ、又悟道シテ行フトモ、佛法ヲ用ヒバ殺生ハナルマジ、殺生ハナラズト云テ可レ殺、咎アル者ヲ助ナバ害アルコト明白ナリ

答、佛法モ人ヲ助ル法ナリ、薬モ亦病ヲ助ル物ナリ、然レドモ法ヲ弘メ薬ヲ施シ、人ヲ助ルハ其人ニヨルベシ、世ニ醫者多キ中ニ、附子熊膽ヲ遣ヒ覺テ療治スル醫者モアリ、又人參ヲ第一ニ用ヒテ療治スル醫者モアリ、熱病ニ眞桑瓜ヤ、水ヲ用ヒテ病ヲ愈セシ醫者モアリ、如斯生冷ノ物ハ毒ナリト云テ、多クハ醫者ノ用ヒザルモノナリ、假令大人參ノ如キ、能薬バカリ用ユトモ、病愈ザレバ何ノ益アラン、是ヲ以テ見ヨ人參ヲ勝レタリトイハンヤ、附子ト熊膽ヲ劣リトイハンヤ、名醫ハ何ニテモ病ノ可レ愈モノヲ用ヒテ疾ヲ愈シ、諸薬ヲ盡ク遣ヒ覺テ、療治スルコソ善ルベケレ、古ヘヨリ薬種トシテ出シ置

ル、物何ゾ棄ルコトアランヤ、一モ舍ズ一ニ泥ズ、能用ルハ名醫ナルベシ、一方ニ泥滯リテ、時ノ變ヲ不レ知ヲ名醫トハ云ベカラズ、天下國家ヲ治ル道モ如レ斯、古ヨリ有來ル法ヲ一トシテ舍テズ、一ニ泥ザルハ名醫ノ諸藥ヲ舍テズシテ病ヲ治スルニ同ジ、天下國家ヲ治ルニ儒道ハ善ト云トモ、心闇シテ泥ムコトアラバ、必害アラン、是庸醫ノ人參ヲ以テ人ヲ殺ガ如シ、金屑眼ニ入時ハ忽翳トナル、又佛法信仰スルハ、心ヲ悟ルタメナリ、佛法ヲ以テ得ル心ト儒道ヲ以テ得タル心ト、心ニ二品ノ替リ有ンヤ、何ノ道ニテ心ヲ得ル共其心ヲ以テ仁政ヲ行ヒ、天下國家ヲ治メ玉フニ何ヲ以テ害アラン、自惡ヲ爲シ刑罰ニテ死スル者ハ君ノ私ヲ以テ殺シ玉フニ非ズ、何ゾ刑罰ニ心アランヤ、「書曰、自作災不レ可レ活」聖人ノ政ハ天ノゴトシ、無爲ニシテ治ル、「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不レ驚」トイヘリ

曰、汝ガイヘル如クナラバ心ヲ得ル爲ニハ、佛法ヲ雜ヘ用ユルモ然ルベキト聞ユ、然レド佛法ハ我業ニアラザレバ、同クハ儒ニテ知リ得度候、佛法ヲ除キ得ルコトハ成ガタキコトニテ候ヤ

答、「孟子曰、無ニ惻隱之心一非レ人也、無ニ羞惡之心一非レ人也」ト、汝最前ヨリ心ヲ不レ得ヲ苦ンデ赤面シ、不善ヲ恥ルハ、即羞惡ノ心ナリ、其羞惡ノ心ヲ推テ知ラバ、仁義ノ良心ニ至ルベシ、何ゾ佛法ニヨルヿアラン、我心ヲ得レバ儒佛ノ名ヲ離レタルモノナリ、譬バ此ニ一人ノ鏡磨者アラン、上手ナラバ鏡ヲ磨ニ可レ遣、磨種ニ何ヲ用ユト可レ問ヤ、儒佛ノ法ヲ用ユルモ如レ斯、我心ヲ琢ク磨種也、琢テ後ニ磨種ニ泥ムコソヲカシケレ、タトヒ儒家ニテ學ブト云共學ビ得ザレバ益無、佛家ヲ學ブ共我心ヲ正ク得ルナラバ

善カルマシ、心ニ二ツノ替アランヤ、佛家ニ習バ、心ガ外ニ替ル者ト思フ者ハ笑フニモ又絶タリ、佛家モ最初ハ儒學ヨリ入僧多シ、儒書ガ妨ニナリテ、佛意ヲ得ルコト成難キコトヲ聞ズ、儒者モ其如クニ佛法ヲ以テ心ノ磨種ニシテ、心ヲ得テ何ゾ儒家ノ妨トナルヘキヤ、既ニ佛氏儒者ノ方ニテ發明シテモ用ユル所ハ佛法ニ用ユルナリ、又經論ニ因テ見レバ佛ハ覺ナリ、覺ハ一切衆生ノ迷ヒ解ルナリトアリ、迷ヒ解レバ本ニ歸ルユヘニ、三界唯一心ト云、迷ヒノ解タル體ヲ名付テ佛性ト云、佛性ト云ハ天地人ノ體ナリ、至極ノ所ハ性ヲ知ル外ニ佛法ヤアランヤ、佛ヨリ二十八世、達摩大師見性成佛ト說リ、又儒ニハ道ノ大原ハ天ニ出、依テ天ノ命コレヲ性ト云、性ニ率フハ人ノ道也ト說玉フ、性ト云モ天地人ノ體ナリ、神儒佛トモニ悟ル心ハ一ナリ、何レノ法ニテ得ルトモ、皆我心ヲ得ルナリ、又禪家ノ僧ナドハ、天地ハ大豆粒ノヤウナル者ナルヲ、己トシ止マランヤト云、此ハ法性不思善不思惡ノ地位ニ至レバ、天地ノ名ヲ離レタル者ナルユヘニ、此假ノ名ニ泥ミ止マラヌコトヲ云ナリ、然レドモ天地ノ外ヘ去トイフコトニハ非ズ、又性理ニクラキ儒學者ナドハ、此事ヲ聞驚テコレハ禪家ノコト、格別ナリト云テ除キ置ナリ、是ヲ除キ置バ、告子ガ弟子ニ成テ「不レ得レ言、勿レ求レ心ニトイフ者ニシテ、儒者ニテハナシ、何ゾ告子ニ替ルコトアランヤ、中庸ニ、「子曰、舜其大知與、舜好レ問而察二邇言一、隱レ惡而揚レ善、執二其兩端一用二其中於民一、其斯以爲レ舜乎、舜ハ天下ノ善惡ヲ受容、惡ヲ去テ善ヲ用ヒ玉フ、今世ノ人ハ我心ニ濟ヌコトアレバ、善惡ヲ擇ズ除ケ置ノ也、孔子舜ヲ大知トノ玉フハ、何ニテモ問尋ルコトヲ

好ミ、近キ言葉ノ中ニテモ能ク察シ明ラメ、悪キコト隱シオキ、其中ニテ能言葉ヲ執用ヒテ、其善ノ中ニテ、又兩ノ端ヲ擇ビ、其中ニテ能言ヲトリテ、民ノ上ニ用ヒ玉フハ舜ナリ、是ヲ以テ大知聖人ナリトノ玉ヘリ、實ノ學問ト云ハ毫釐モ私心ナキ所ニ至ルコト也、孔子ノ如ク徳御座共「巧レ言令レ色足恭、左丘明恥レ之、丘亦恥レ之」トノ玉ヒ、「又述而不レ作、信好レ古、竊比ニ於我老彭ニ」トノ玉フヿヲ知ラルベシ、其徳ハ古今ノ聖人ニ勝レ玉ヘドモ、此等ノ賢人ニモ一事ノ徳アレバ慕玉フ、無我ノ所ヲ法トスベシ、況ヤ心ヲ得度思フ者、私心有テハ得ラルベキ所ニアラズ、心ハ彼ニテ得ラレズ、此ニテハ得ラル丶トハ定メガタシ、「孔子在ニ川上ニ曰、逝者如レ斯夫、不レ舍ニ晝夜ニ」ト、道ノ體ヲ指テ、見易カルベキハ、川ノ流ニ如ハナシト示シ玉フ、滄浪ノ水濁バ足ヲ濯フノ歌ヲ聞玉ヒ、小子コレヲ聞、自心ニ不善アレバ、他ヨリ侮リヲ受ルト示シ玉フ、聖人ハ見聞コトヲ心トシ玉フコト如レ斯、道ニ信仰アルコソ、聖人ノ學問トハイフベケレ、我前方ニ、一物一大極ノコトヲ疑ヒシニ、或書ヲ見侍ルニ、天地一面ノ神國トイハヾ博シテ狹シ、微塵ノ中ニモ神ノ國アリトイハヾ、狹シテ博シト云コトヲ見テ、一物一大極ノ疑ヒヲ解、他ノ書ヲ見テ解トイヘドモ全ク儒ノ害ヲナスニアラズ、儒ヲ學ビシ道ヲ以テ、御神託ヲ拜スルニ少モ疑シキコトモナシ、且佛老莊ノ教モ、イハヾ心ヲミガク磨種ナレバ、舍ベキニモ非ズ、一度琢テ後ハ、佛老莊ヨリ、百家衆技ノ類ヲ寄聚メ見テモ、心ハ鏡ノ如シ、物來ルトキハ即應ジ、物サルトキハ即靈々トシテ一物ヲ止ズ、此心ヲ得テ後ニ聖人ノ教ニ向バ、明鏡ニ對ニテ我形ヲ見ルゴトシ、天

地萬物ノ上ヲ見ルモ、惟一理ニシテ我掌ヲ見ルニ同ジ、皆我一體ナリ、「日本紀天照太神手持ニ寶鏡一授ニ天忍穗耳尊ニ而祝之曰、吾兒視ニ此寶鏡ニ當ニ猶レ視レ吾、可ニ與同レ床共レ殿、以爲ニ齋鏡一」ト、此天照太神ハ、神璽御德寶鏡寶劍御德見御神也、中庸ニ所謂「自レ誠明謂ニ之性一」者ニシテ天道ナリ、天忍穗耳尊ハ、中庸ニ所謂「自レ明誠謂ニ之敎一」者ニシテ、由レ敎、神璽御德ニ入玉フ所ナリ、神璽ノ御德ニ至リ玉ヘバ、寶鏡寶劍ノ御德ハ、其中ニ籠玉ヘリ、此寶鏡ヲ視マスコト、吾ヲ視ル如クスベシトノ玉ヘバ、寶鏡ヲ直ニ天照太神宮トモ拜ベシ、床ヲ同、殿ヲ共ニストノ玉フハ、寶鏡ノ御德ヲ離レ玉ハズバ、代々ノ君天下ヲ平ニ治メ玉フベシトノ御寶勅也ト拜スベシ、此理ヲ不レ知シテ事ヲ行ハヾ、君トシテハ國ヲ亡シ、臣トシテハ家ヲ亂シ、政道正シカラズシテ、無益ノ物ヲ殺シ、人欲肆ニシテ、無道ヲ行ヒ、五倫五常ノ道ニ背キ、出家ハ五戒ヲ破リ、佛ノ道ニ背クベシ、世法ヲ治ルニハ、聖人ノ道ニアラズシテ何ヲ以テ治ンヤ、故ニ儒道佛道老子莊子ニ至ルマデ、盡ク此國ノ相ケトスル樣ニ用ユルコトヲ可レ思、日本宗廟天照皇太神宮ヲ、宗源ト貴ビ奉リ、皇大神宮御寶勅ニ任セ、萬クダ〳〵シキヲ拂ヒ舍テ一心ノ定レル法ヲ導テ、天ノ神ノ命ニ合フ惟一ヲ相クルニ、儒佛ノ法ヲ執リ用ユベシ、コヽヲ以テ一法ヲ舍テズ、一法ニ泥マズ、天地ニ不レ逆ヲ要トス

或曰、客ノ問所、未盡ザル所アリ、汝ガ答ヲ聞ニ、學問ノ道無レ他、其放心ヲ求ル而已トモ云ヒ、又聖人ノ心ハ無心ナリトモ說ク、無心ナラバ心ヲ求ルコトハ有マジ、實ニ心ヲ求ルト思ハヾ無心ト說クハ

非ナリ、何ガ是、何ガ非ト一ニ定メズシテ、ケ樣ニ紛ハシク說クハイカナルコトゾ

答、敎ノ道ハ一定ノ中ニ膠シテ變ヲ不ㇾ知、一ヲ取テ百ヲ舍ル如キニハ非ズ、喩テイハヾ、一本ノ丸木桴(イカダ)ニ乘ガ如シ、ヨク乘馴シ者ハ何ヲ踐デモ踐所直ニ中ト成テ乘コトヤスシ、乘馴ザル者ハ丸木ユヘニ、グレグレトシ踐所ヲ知ラズシテ乘コトカタシ、學問ノ道モ如ㇾ斯心ヲ知ザレバ、聞ドモ不ㇾ聞、又心ヲ知ル者ハ何ヲ聞テモ一理ナレバ、皆我心ニ合ヘリ、其放心ヲ求ルト說クモ、聖人ノ心ハ無心ナリト說クモ、二ツニハ非ズ、一致ナリ、天地ハ物ヲ生ルヲ以テ心トス、其生ル所ノ物、各天地物ヲ生ル心ヲ得テ心トナス、然レドモ人欲ニ掩レテ此心ヲ失ス、故ニ心ヲ盡シテ天地ノ心ニ還ル所ニテイフ時ハ、放心ヲ求ルト說キ、又求メウレバ天地ノ心トナル、天地ノ心ニナル所ニテ說クトキハ無心ト云、天地ハ無心ナレドモ四季行レテ萬物生ジ、聖人モ天地ノ心ヲ得テ、私心ナク無心ノ如クナレドモ、仁義禮智行ハル、一旦豁然トシテ貫通スル時ハ、疑ヒハ晴ルルモノナリ、聖學ヲ論ズルトイフハ此心ヲ知テ後ノコト、思ハルベシ

都鄙問答卷之三終

都鄙問答巻之四

學者ノ行狀心得難キヲ問フノ段

或問曰、或所ニ幼年ヨリ學問シ、四書五經ハ云ニ及バズ、何ニテモ書物諳ズル程ノ徳有ル人アリ、然レドモ心得ガタキコト多シ、一事ヲ擧テ云ハヾ、金銀借用等ニ、不埒ナルコト多シ、夫トモニ手前ニモ儉約ヲ守ラルヽ上ニテ、是非ナク不足アラバ他ノ了簡モ有ベケレドモ、手前ハ取ジメナク他人ニ不埒ヲナシ、且親ヘノ事モ何トヤラ惡舗トコロ有テ、親ノ心ニ合ハザレバ、先ハ不孝ト云ベキカ、扨身ノ行作ヲ見レバ物知リ顔ニ我ヲタカブリ、辯舌ハ鮮ナレドモ聞ナレヌ挨拶ニテ兎角耳ニ入ニクシ、ナニトヤラ寄添ヒガタキ風俗有テ、十人ガ九人マデハ嫌フナリ、是ヲ以テ見レバ、親ノ氣ニ入テ又モ尤ナリト云者多シ、博學ノ徳有テケ様ナル身持アルハ、如何ナルコトゾ

答、汝ハ徳ト云コトヲ曾テ知ラズト見ヘタリ、ケ様ナル疑ハシキコトヲ問ヒ定ラルヽハ左モアルベキコトナリ、其學者ハ徳ニ至ルノ學問ニハアラズ、文字藝者ト云者ナリ

曰、然ラバ書物ヲ讀ム外ニ學者ト云フコトアリヤ

答、イカニモ書物ヲ讀ムコトニテ候、然ドモ書物ヲ讀デ、書ノ心ヲ知ラザレバ學問トハイハズ、聖人

ノ書ハ自ラ心ヲ合メ玉フ、其心ヲ知ルヲ學問ト云、然ルニ文字計ヲ知ルハ、一藝ナルユヘニ文字藝者ト云

曰、書ヲ讀ムハ同シテ、汝今分テ二ツトスルハ證アルコトニ候ヤ

答、「孔子謂二子貢一曰、女器也、」子貢ノ學ハ記憶能シテ記スコト多ケレ共、イマダ徳ニ至ラズ、志アレ共仁ニ至ラザル中ハ器ナリトノ玉フ、器トハ一品ノ役ヲナシ、萬事ニ通ゼザルコト也、子貢ハ志シアルユヘニ終ニハ性ト天道トヲ聞テ、君子ノ徳ニ至リ玉ヘリ、汝ノ云ヘル學者ハ親ニハ不孝ヲナシ、他人ニハ僞リヲ云、是皆不仁ノコトナリ、文學バカリニテ一藝ナルユヘニ文字藝者ト云ナリ、徳トハ心ニ得テ身ニ行ヲ云、我心ヲ得レバ父母ニハ孝行ヲナシ、他人ニハ僞リヲイハズ、詐リヲイハザレハ、出入等ニ不埒ハナサズ、返ス覺ヘナキモノハ不レ借、飢テ死ストモ不義ノ物ヲ受ズ、己ガ欲ザル所ヲ人ニ施サズ、我才能ヲ以テ人ニホコラズ、他人ノ善事ヲ身ニウツシ、人ノ惡事ヲ見テハ我ニモ此惡事有ランカト恐レ、己ヲ顧ミ仁義ノ志シ有テ止ザルヲ聖人ノ學問ト云、「子曰、有二顏回者一好レ學、不レ遷レ怒、不レ貳レ過、不幸短命死矣、今則亡、未レ聞二好レ學者一」ト、顏回ノ心ハ鏡ノ物ヲ照スガ如シ、右ノ怒ヲ左ニ遷サズ、前ニ過ヿヲ後ニ復セズト、如レ是心ニ得テ身ニ行フヲ徳ニ至ルト云、故ニ文學ニ長ジタル、子夏子游ヲ好レ學トハノ玉ハズ、詩書六藝七十子習テ通ゼザルニ非ズ、通ズレドモ文學ハ用ナリ、徳トハイハズ、汝ノ云ヘル學者ハ年久ク文字ヲ數テモ、書ノ心ヲ得ザルユヘニ、不孝ニシテ世ノ交リアシク不義ノ類多シ、

然レドモ文字サヘ讀メバ德アリト思ヒテ、世間ニ取違ル所ナリ、誤ルベカラズ

淨土宗之僧念佛ヲ勸ムル之段

或淨土宗ノ僧、毎々參ラレシガ、或時來テ曰、汝ハ儒者ノ事ナレバ、佛法ヲ勸ムルニハアラネドモ、無常轉易ノナラヒナレバ、又徒然ノ折カラハ、百遍二百遍ヅヽ成トモ、念佛ヲ勉ラレナバ後世ノ便リトモ成ルベシ、且儒ニテ終ニ聞及バザルノ大事モ、佛法ニハコレアレバ申スコトナリ

答、思召ヨラレ、斯ク申サルヽコト過分ノ至リニ候、扨其儒ニナキ大事トハ如何ナルコトニ候ヤ

曰、先儒佛道トモニ勸善懲惡ノ敎ハシレタルコトナレバ、相替ルコトモナカルベシ、如何トシテモ儒ニハ敎ノトヾカザルコトアリ

答、敎テトヾカヌハ孔子ノ玉フ、下愚ノ不レ徙モノト云コトニテ候ヤ

曰ソノ下愚ハ、目モ見ヘ耳モ聞ヘ、口ニモ言者ナレバ、敎ノトヾクコトアリ、下愚ノモノニテモ佛前ヤ神前ニ向ヒ、コレハ神、コレハ佛ゾトイヘバ名ハ聞クナリ、然レバ是程ノ敎トヾク所アリ、如何シテモ敎ノトヾカヌ者ニトヾカスル傳受アリ、ソノ傳受トイフハ啞ト聾ト盲ト此三色ヲ身ニ具タル者ハ、先聾ユヘニ法ヲ聞コトナラズ、盲ナレバ見ルコトナラズ、啞ナレバ言フコトナラズ、是ノ如ク三重病人ニテモ救ヒ、往生サスルコトヲ傳受スルナリ、此ヲ以テ見レバ儒ニハ闕ゲタル所アリ、今世ノコト計ニ

テ、後世ヲ救フコト不レ能

答、其救ル丶罪ハ、何ニ因テ出來申候ヤ

曰、ソノ罪ト云ハ、物ヲ見テハ見ルニ附、著念ヲ發シ、聞ニツキテハ喜怒、言フニ附テハ他ヲ譏リ人ニ怒ラセ、其外種々ノ罪ヲ作ル擧ァ數ヘガタシ、如レ是ツミ咎ヲ救ヒタスクルコトナリ

答、然ラバ此ニ君ヲ弑シ、親ヲ弑シタル者アラン、ソノ罪逃ル丶コト不レ能、コレヲモ助クベキヤ、コレヲ助ケナバ屆カヌ所ヲトヾカスト云フモノナリ、助クルコト不レ能トイハヾ、三重病人モ助ルコト不レ能證シナリ、且三重病人ハ見聞言コトナレバ罪ナシ、罪ナキ者ニ助ケハイラズ、其外ニ助ルコト有ヤ

曰、否猶大事アリ、三重病人ト生ナルコトハ過去ノ因縁ナリ、此ヲ助クル傳アリ、三世ヲ攝テ救コトハ、儒道ニハナキニアラズヤ

答、左樣ノ敎ハ、傳ヘ來ル丁ナシ、天地ノ間ニ生ル丶者ハ、天ヲ父トシ地ヲ母トシ自ラ生ズ、「朱子曰、自レ天降ニ生民一、則既莫レ不下與レ之以中仁義禮智之性上矣、然其氣質之稟、或不レ能レ齊」ト今日人ニ生レタル者ハ五常五倫ノ敎アリ、君臣ノ義、父子ノ親、夫婦ノ別、兄弟ノ序、朋友ノ信、是ヲ能行ヒ仁義禮智ノ性ヲ全フシ天命ニ至ラシムル敎ナリ、草木ハ天ニタガハザルニ因テ、敎ハ不レ入、人ハ喜怒哀樂ノ情ニ因テ、天命ニ背ク、故ニ敎ヲナシテ人ノ道ニ入レシム、固ヨリ啞ナレバイハズ、聾ナレバ聞ズ、盲ナレバ見ズ、見聞言ザレバ咎ナシ、咎ナキ者ハ赤子ニ同ジ、赤子ハ敎ヘザレドモ無知ノ聖人ナリ、抑聖人ハ見ルニ心

ナク、聞ニ心ナク、言ニ心ナキユヘニ、不レ失二赤子之心一者ハ聖人ナリト、孟子ノ玉ヘリ、是又三重病人ニ似タリ、聖人ノ教ハ咎アル者ハコレヲ正ス、咎ナキ者ヲ何ゾ正ン、扨汝ニ問ン、所々ニ庚申ト云ヲ見レバ見ザル聞ザル言ザルノ猿ナリ、コレヲ三疋合スレバ、三重病人ナルヲコレハ佛菩薩トシテ人ニ拜マス、然レバ三重病人モ佛菩薩ニ近キモノニアラズ、扨如來ノ說法ト云ハ、直ニ南無阿彌陀佛ト知ルベシ、如何トナレバ口ニ唱ル、南無阿彌陀佛ガ耳ニ入リ、一遍ノ念佛ニテハ一念ノ惡ヲ消シ、二遍ノ念佛ニテハ二念ノ惡ヲ消ス、惡念死テ善心生ルナレバ、コレ即往生ナリ、往生ニ三義ヲ立ツル中ニ一ヲ擧テ云ハヾ往ハ猶此ノ如シ、此ニ生ル也、自心ヨリ生ルヲ以テ、故ニ不レ往シテ往ヲ名テ往生トナスナリ、念佛ノ行者モ初ニハ火宅ヲ厭ヒ離レンコトヲ思フテ、極樂往生ヲ願ヒ、彌陀ヲ念ズル也、夫ヨリ年月ヲ經テ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛ト唱レバ念佛ニクセヅキテ、終ニハ餘念他念ナク、後ニハ南無阿彌陀佛計ニナレバ不レ往シテ、南無阿彌陀佛ニ生ル、也、南無阿彌陀佛ニナレバ我ト云モノアルベキヤ、我ナケレバ虛空ノ如シ、虛空ニ南無阿彌陀佛ノ聲有テ、唱レバ此レ即阿彌陀佛也、阿彌陀佛直（ヂキ）ニ御名ヲ唱玉フハ說法ニアラズヤ、此說法ノ功德ニ依テ、彌陀ヲ念ズル行者モ念ゼラル、方ノ佛モ、雙方トモニ一體ト成リ、苦樂ノ二ツヲ離レ終ルナリ、離レ終テ無心無念ノ不可思議ト成ル、是ヲ名テ自然悟道トモ云ヒ、能所不二機法一體トモ云ニアラズヤ、大原問答ニ曰、一自ニ有相修因一直入ニ無相樂果一抑ニ往生見一令ニ體ニ達無生理一」コレ等ノ所ハ如何得心セラレ候ヤ、阿彌陀經曰、「從レ是西方過ニ十萬億佛土一有ニ世界一名

曰二極樂一、其土有レ佛、號二阿彌陀一、今現在說法、」現在ハ目前ノコト也、唯心ノ淨土、己心ノ彌陀ナレバ、娑婆即寂光ナリ、然レバ現在ノ說法ト云ハ草木國土悉皆成佛ニテ、森羅萬像悉一佛ナレバ、柳ハ綠花ハ紅ト分レテ、己々ガ法ヲ說クナリ、一心不亂ノ修行ヲ以テ此傳授ナクテハ救ヒガタシト云ハ、如何ナルコトゾヤ、且圓光大師ハ、念佛ノ外ニ奧深コトヲ存ゼバ、二尊ノ慈ニハヅレ、本願ニモレ候ベシト、一枚起請ニアリトカヤ、一枚起請ニテハ、奧深キコトハナシトイヒ、今汝ガ云ヘル所ニテハ傳ニテ大事ヲ傳ト云、コレ大師ノ教ニタガフベシ、儒ニハ左樣ノ箱傳授ハイラズ

曰、然ラバ汝ハ段々傳ヘ來ル大事ヲミナ僞リト云ヒ、非法スルハ如何ナルコトゾ

答、何ゾ理ナク他ヲ非法スベキ、念佛宗ニ云ハ、西方極樂ヘ往生シ、彼國ニ至テ、如來ノ說法ヲ聞テ、悟ヲ開キ、成佛スルトノ教ナリ、汝如キ人ノ導師ト成ル者ハ、此所ヲ能々工夫シテ開クベキ所ナリ、佛氏ニテ云トキハ迷ガ故ニ三界城、悟ガ故ニ「十方空本來無東西、何處有二南北一矣」如レ此ナレバ、彼國ト云ハ、唯心ノ淨土ト云コトニ決定セリ、淨土ト云モ我心ノコトナリ、「普廣菩薩白レ佛言、世尊十方佛土、皆爲二嚴淨一、何故諸經中偏歎二西方阿彌陀佛國一、勸二往生一、佛告二普廣菩薩一、一切衆生濁亂者多、正念者少、欲レ令二衆生專心一有レ在、是故讃二歎彼國一爲二別異一耳、若能依レ願脩行莫レ不レ獲レ益矣」ト、コレニ因テ見レバ、一切衆生ニ心ノ濁亂ル、者多ク、正念ノ者ハ少キユヘニ、衆生ノ心ヲ一筋ニ向ハシメン爲ニ、西方ヲ極樂ト指テ教ユトノ玉フコト明白ナリ、然レバ極樂ヲ西方ト教玉フハ、愚痴ノ者ニ說玉フ法ニテ、上知

ノ教ハ十方佛土ナルコト明ナリ、師範ト成ル者ハ別シテ味フベキ所ナリ、愚痴ナレバ先我往ベキ道ヲ知ラズ、我往生ヲ知ラズシテ、他ヲ導ベキ所ニ至リ、九品ノ淨土ヲ目前ニ拜ムベシ、コレ即諸法實相ノ所ナリ、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不舍、他宗ハ修行ノ功ヲ積ミ觀念座禪等ヲ以テ、此理ヲ悟ナリ、然ルニ難行ヲセズシテ悟開カル、ユヘニ、念佛宗旨ハ諸宗ニ勝レリト、汝モ口眞似スルニアラズヤ、釋尊ノ法性ヲ悟リ、一佛成道シ玉フト、念佛ニテ法性ニ至リ、自然悟道シタルト二ツノ替リアリヤ、法性ニ二ツ無クバ、南無阿彌陀佛ニテ、淨土宗門ハ事足ルベシ、然レドモ傳授ナクテハ不足ト云ハヾ、大師ノ起請ハ僞リト云テ破リ舍ンヤ如何

或人神詣ヲ問フ之段

或問曰、吾頃日親ノ年忌ニツキ、國本へ參リ候所、産神ヘハマイリ申サズ候、子細ハ此度墓參リ第一ニ存ジ、最初ニ墓マイリ致シ身汚候ユヘ、産神ヘハ參詣イタサズ候、又神ヘ先ニ參リテハ、親ヲ疎末ニナスヤウニ存候、カヤウノコトハ如何

答、親ノ心ニ適フヤウニセラルベシ

曰、親ハナキユヘニ問フコトモナラズ、親ノ心イカヾシテシルベキヤ

答、都テ親ノ心ハ子ノ身ノ上能キコトヲ願フモノナリ、親ノ心ハ子ヲ思フニ致ラザル所ナシ、然レバ

身ノ汚ナキ以前ニ、產神ヘ參ラルベシ、親存生ノ時ニ、汝在所ヘ往ナバ、先產神ヘ參ルベシトイハルルニ非ズヤ、然ラバ先社參シテ神ヲ敬ハヾ、是親ノ心ニ合フトイフモノナリ、父母ノ心ニ合フ程宜キコトアランヤ、「范氏曰、子能以二父母之心一爲レ心則孝矣、中庸事レ死、如レ事レ生」トイヘリ、今ハ父母ナシトイヘドモ、此意味ヲ得心シテ事ヘマツラバ、孝行ト成ルベキコトナリ

醫ノ志ヲ問フノ段

或人問曰、吾倅ノ內一人ハ、醫者ニ致度候、渡世ノ爲ニハ、如何ナルモノニテ有ベキヤ
答、吾醫之道ハ學ザレバ、委カラズトイヘドモ、暫ク志ス所ヲ以テ告ン、先第一醫學ニ心ヲ盡スベキコトナリ、醫書ノ意味得心ナクシテ、人ノ命ヲアヅカルコトハ恐ルベシ、如何トナレバ我一命ノ惜キコトヲ顧ミ、他人ニ推及ス、斯ル時ハ病人ヲ預リテ一時モ心ユルヤカナルベカラズ、譬バ我身ニ頭痛シ腹痛時ハ、少ノ間ニテモ堪忍ナルマジ、其堪忍ナラヌヿヲ知ラバ、人ノ病ヲ見テハ我病ノ如ク思ヒ、心ヲ盡シ療治セバ、一夜ニテモユルヤカニ寢ルヿハナルマジ、人ノ命ヲ惜ミ藥ヲ施シ、施スヲ以テ心トシ、病氣快然ヲ以テ樂トシ、藥禮ノ事ヲ思ハズ、療治スベキコトナリ、藥禮ヲ思ハズトイヘドモ病家ヨリハ、一命ヲ賴ムコトナレバ身分相應ノ謝禮ハ有コトナリ、或人云ヘルコトアリ、渡世ノ爲ナラバ、醫者ハスベキ者ニアラズトイヘリ、藥ヲホドコスト云所ヨリ見レバ左モ有ベキコト哉、渡世ノタメニ

セバ、藥禮ノ滯ル所ヘハ、往ガタキ心モ出ベキコトナリ、追付見舞ント云テ延引致シ、其病人若死ニモ至ラバ、天命トハ云ナガラ其醫ノ心ニ成テ見バ、我ヨリ不仁ノ私欲ヲ以テカクナシ行ヒ、天命ト片ヅケテハ置ガタカルベシ、「孟子曰、殺レ人以ニ刄與一レ政有ニ以異一乎、曰、無ニ以異一也」ト、殺ス品ハ替ルトモ、罪ニカハリハ有ベカラズ、恐ルベキコトナリ、心一杯ヲツクシ、人ノ命ヲ惜ム仁心アリテ、藥ヲホドコシ、且病治セザルハ是非ナシトモ云ベシ、「子曰、人無レ恒不レ可ニ以作一巫醫一善哉」ト、醫ハ人ノ生死ヲ寄タノムモノナリ、人ノ命ヲ惜ムヲ以テ我心トセザレバ、過ノ不仁多カルベシ、我命ヲ惜ム心ヲ以テ、病人ヲ愛セバ、過スクナカラン、斯クノゴトクセバ實ニ仁愛ノ醫者ト成ベシ、其仁愛ヲ失ザレバ、コレ醫ノ恒ト云ベキカ、コレヲ味ヒ見バ、治シガタキ病人アラバ、何ホドモ醫書ニ眼ヲサラシ工夫スベシ、博學ノ爲ニハアラネドモ、病人ヲ實ニ愛憐スル所ヨリ、終ニ博學ノ名醫ト成ルベシ、博學ト云ハ、詩作文章ヲ事トスルニハ非ズ、此レ醫ノ志スベキ所ノ大略ヲ云フ

曰、然バ博學ノ名醫ト云ヘルハ醫學バカリノコトニテ候ヤ、他ノ文學ナク挨拶等常體ノコトバカリ云ハバ、輕々鋪文盲ニ見ユベシ、文盲ニ見ヘテハ他ノ信仰モ薄ク、信仰ナキ所ニテハ療治ナドモ成難カルベシ、身ノ飾ヲナス爲ニハ、詩作文章ヲモ兼テ博學ナルガ宜キニアラズヤ

答、博學ハ我モ好ム所ナリ捨ニアラズ、然レ共醫學熟シテ後ノコトナリ、本末ヲ正トキハ醫學ハ本ト知ルベシ、「有子曰、本立而道生」ト、本末ノ違ルハ君子ノ道ニアラズ、扨汝ハ世俗ノ聞ナレヌコトヲ云ヲ、

博學ト思ハレ候ヤ、ソレハ麁相ナル了簡ナリ、良醫ハ聞ナレヌコトヲ云モノニ非ズ、醫書ニ望聞問切ト云コトアリ、先病人ニ望容體ヲ見ルヲ望ト云、樣子ヲ聞テ病ヲ知ルヲ聞ト云、不審ヲ問テ察スルヲ問ト云、脈ヲ診テ病ヲ定ルヲ切ト云、然レバ病人ニ望ミ其容體ヲ觀テ後ニ疾ノヿヲ言セテ聞キ、又委細ノコトハ看病ノ者ニ問、且脈ヲ診テ、我意ニ合ヘルカ不レ合カト得心シテ、藥ヲ用ユベキコトナリ、ソレニ人ノ聞ナレヌコトヲ云ヒ、先方ヘ聞ヘザレバ又先ヨリノ返答モ違モノ也、互ニキコヘズハ望聞問切ト違、病根ヲ察テ藥ヲ用ヒ療治スルコトハ成マジキコトナリ、「子曰、辭達而已」ト辭達已トハ我云コト、先ヘ聞ユレパ已ミ、キコヘザレバ聞ヘテ通ズルマデ云ベシトノ玉フコトナリ、言テモ聞ヘザルコトヲ云者ハ狂人ナリ、狂人ガ爭デ療治スベキ、京都ニ住ル醫者、醫書ト論語ヲ見ザル程ノ者有ベキヤ、聞ヘニクキコトヲ云テ喜ブハ邊土ニ居テ假名雙子ヲ見療治スル者ハ、世間ヨリ何モ知ラヌ醫者ナリト、侮ラルルコトヲ嫌テ、色々ノ聞ナレヌコトヲ覺テ云タガル者ナリ、良醫タル者ケ樣ノコトアルベキヤ

或人主人行狀ノ是非ヲ問フノ段

或人來テ物語シテ云、汝ノ知レル如ク、我親方ハ今日ニテハ内福ナル者ニテ、財寶何ニ不足ノコトモナシ、然レドモ金銀ヲ溜ルバカリニテ、何ヲ樂ムコトモナク、只金銀ノ番ヲスル而已ニテ、貧乏人ニ同ジ、親ノ代ニハ相應ノ樂モセラレ、少ハ奢モ有シ故ニ借金モ有トイヘドモ、定リノ家督有ユヘ、是非

乞者モ無レバ財寶有ニ同ジ、申サバ澤山ニ遣ヒ得ト云者也、一生ソレニテ相濟、果報人ニテ終レリ、ケ樣ノコトハ雙方ノ是非如何

答、總ジテ重モ輕モ人ニ事ル者ハ臣ナリ、臣タル者ハ善惡是非少ハ辨ヘアルベキコトナリ、先第一ニ天下ノ御政道ニ奢ハカタキ御禁ナリ、奢者久カラズト俗語ニモ云傳ヘ、又奢ニ因テ流罪追放セラル、者其數ヲ知ラズ、高家ニテ國天下ヲ亡ス者ヲ云ハヾ、中古ニハ平ノ淸盛ヲ始、相摸入道其外奢ニ因テ國家ヲ亡ス者、其數少カラズ、唐土ニモ秦ノ始皇ハ奢ニ因テ天下ヲ失フ、汝ノ先ノ親方モ奢アレバ、天下ノ御法ニモ背キ、且定リタル家督アリト云、是奢ノ第一ナリ、上ノ命ヲ受ルハ民ノ常ナリ、假令御用達スル身ナレバトテ、手前ヨリ定ルコト有ベカラズ、況ヤ其以下市井ノ臣ト生レ君ノ命ヲ不レ知シテ、此方ヨリ定リタル家督アリト思ヘルハ、上ヲ無スル罪人ナリ、又借銀ヲ乞者モナシトイフハ僻ゴトナリ、如何トナレバ汝今親方ニ仕ルニ、最早何年ホドハ勤タレバイツ頃ハ宿持タセクレラレント、定テ期ニセラルベシ、然ルヲ時來テモ暇ヲ乞ザレバ、宿ヲ持セズ、何マデツカワル、トモ親方ノ遣ヒ得ト云ツテスマシテ置レンヤ、我身ヲ推テ知ラルベシ、汝ガ時節ヲ待如ク、貸タル者モ日限來レバ利足ヲ添テ返サル、ヲ待ハ常ナリ、其ヲ乞者ナケレバトテ、反サヌト云法アリヤ、然ルニ子ガ先ノ親方ハ、借銀ヲ返サズシテ、死去セシヲ汝ハ幸ナリト思ヘリヤ、此ハ僥倖ト云倖ナリ、此僥倖ト云サイハイハ、人ノ物ヲ盜デモ、人ヲ殺テモ其罪不レ知シテ遁タルモノ、幸ナリ、此幸ハ望ムベキ所ニアラズ、然ルヲ果報

人ニテ終ト云ァハ如何ナルコトゾ、推取シテハスマザルコトノ證（シルシ）アリ、善惡ノ二ヲ擧テ告ベシ、先唐土ノ堯舜ハ天下ヲ治玉ヒ仁ト孝トノ法トナリ、大聖孔子ハ至德ヲ以テ其道ヲ後世ヘ傳ヘ玉ヒ、今ニ至リ唐土ハ云フニ及バズ、我朝マデヲ照シ玉フ、又盜跖ハ大盜ニテ其惡名今ニ不レ絶、天下ノ人コレヲ惡ム、聖人ハ不義ノ物ハ一芥ヲモ受玉ハズ、盜跖ハ人ノ物ヲ推取シ盜人ノ名ハ朽ザルナリ、此モ同ジコトニテ相濟ト云ンヤ、借タル物ハ戾シ貸シタル物ヲ請取ルハ人ノ道ナリ、且孝弟忠信ノ德アツテ、家業ニ疎カラズ、ケ樣ノ類ヲ善事ト云、道ハ天地ニ昭然タリ、然ルヲ汝ガ先ノ親方ハ吝ヲナシ、他借ヲ乞者ナシトテ反サズ、反サズシテ死スルハ推取ナリ、其推取セシハ聖人ニ近キヤ、盜跖ニ近キヤ、其不義ヲ行ヒシ人ヲ一生事濟、果報人ゾト思フ、汝ハ盜跖ニ與スル者ナリ、今ノ親方ハ身ヲ約ニシテ親ノ借銀ヲ濟シ惡名ヲ雪グ、コレ人ノ道ナリ、「范氏所謂子能改二父之過一、變レ惡以爲レ美、則可レ謂レ孝矣」云是也

曰、扨今ノ親方ノ致方ハ、前ニ云フ如ク、今時ノ日傭取ニモ劣タル仕方也、親ノ代ニハ衣類モ花美ヲ好マレシニ、今ノ親方ハ木綿布子ニ生布ノ帷子、小倉帶ニ高宮羽織、ケ樣ニ各別ナル事ヲ好ム、是等ハ如何

答、先汝ガ心ニ大ナル奢アリ、如何トナレバ同ジ下々ニテ我ト日傭トハ格別ナリト思フ、此即彼ヲイヤシメ我ヲタカブルノ奢ナリ、農工商ハ一列ニ下々ナリ、然ルニ日傭取ト我等如キト何程違有ンヤ、其ヲ賤キト見ルハ心セバシ、今ノ親方ハ知有テ我ヲタカブラズ、上ヲ恐レ身ヲ下リ、世ニ罕ナル者也、貴ト賤キトノ分レヲ知ルハ禮ナリ、凡テ衣服ニ羽二重ヨリ上ハナシ、其ヨリ木綿マデ何程ノ品アラン、貴賤

ノ次第ヲ以テ云ハヾ、上ヨリ地下ニ至ルマデ、其品何程ト量ベキヤ、衣類ハ細ニ分テモ、十段計リナラデハ無キモノ也、位ノ段ヲ以テ品ヲ立バ、下々ハ薦ヲキテモ善カルベシ、左モナラザレバ木綿ヲ常ノ衣類トナシ、手前豐ナル者ハ祝日ナドニハ、衣類ニ絹紬マデハ農工商共ニ用ユルナリ、其法式ヲ有ガタシト思テ背カズ、急度執守テ、我身ノ賤ヲ知リ、其分チヲ立ラルヽハ賴母敷コトナリ、汝モ親方ガ木綿キラルルナラバ常ハ洗布子ノ織ノ當タルヲ着ラルベシ、汝ハ是ヲ異形ノ衣服ト云、孟子ハケ様ナル法ニ合ヘル衣服ヲ大聖堯王ノ服トナシ、法ニ背キ分ヲ踰ユルヲ大惡無道ノ桀ガ服トナシ玉フ、異哉汝ガ云ルヿ

曰、折々ハ普請ノ手傳ヤ、手代ノ代リヲ勉ラルヽ、ケ様ナルコト如何

答、問ニ依テ見レバ、親方ノ心入實尤至極セリ、汝ハ常ヲ知テ變ヲ不ㇾ知、格式定レル武ノ家ヲ以テ見ルベシ、治世ト軍旅ノヿヲ舍ザルハ士ノ常也、唐土ニハ田獵ヲシテ武ノ事ヲ習、我家ノ業ヲ習ハ人ノ常也、何程手代アレバトテ賴トハナラズ、若手代ナクナラバ其時ハ家業ヲ舍ンヤ、家業ノ事ヲ不ㇾ知シテ、何ヲ以テ商賣取續キ家ヲ立ベキ、孟子曰、禹八年於外、三過其門而不ㇾ入、禹是時ニ當テ天下ノ洪水ヲ治メ玉フ、我職分ヲ勉メ玉フヿ如ㇾ斯、親方ハ我職分ニ疎カラズ、聖人ノ道ヲ能聞得タル人也

曰、算盤細ニ聚ルヿヲ好、散スコトハ嫌ニテ、奉公人モ綺羅ヤル者ハ氣モ不ㇾ入、儉約者ノ見苦鋪者ヲ好キテ、其者ノ給金ニテモ下直ナルカト云ヘバ其モ不ㇾ替、カヤウナル前後揃ヌコト如何

答、扨汝ノ親方ハ世ノ法ト成ベキ人哉、凡テ下々ノ者ハ云ニ及バズ、假令二萬騎三萬騎ノ大將トテモ、

算術疎テハ馳挽備ヘダテ成ガタカラン、元來商賣人トシテ、算盤不レ知シテ何ヲ以テ勘定致スベキ、奉公人ヲ抱ルニモ此手代ハ拾枚或ハ五枚、下男ハ百目彼ハ又五十目ト、人別ニ替リ有、其者ノ働ヲ見テ功有者ニハ給銀ヲ増ベシ、其日利アラバ我手代(テガハリ)ニ成ベキモノ幾人モ出來ラン、中庸ニ「忠信重レ祿、所ニ以勸レ士也」コレ君誠有テ臣ヲ養フ道也、背ベキニアラズ、何ヲ以テナレバ、唐土項羽人ヲツカフニ功有者ニハ國ヲ封ベキヲ、吝ミ忍デ祿ヲアタヘズ、卒ニ漢ノ高祖ノ爲ニ亡サル、是臣ヨリ君ニ怨アルユヘ、心替テ高祖ニ往、却テ我敵トナル、此其功ト祿ト算用知ザル所ヨリ發レリ、假令項羽ニ無禮有トモ高祖ニ往ハ臣ノ道ニアラズ、不忠ノ者モ仁ヲ以テ忠臣ノ如ク使ヒナスハ君ノ道ナリ、コノユヘニ汝ガ親方ハ義理有テ出スベキ給銀抔ハコレヲ出シ、聚ベキ物ハ能聚、散テハ聚メ、聚テハ散ラス、此二ツ義ニ合ハバ、假令家國ヲ治トモ何ノ難キコトアラン、奉公人モ、儉約者ハ給銀ヲ溜テ主人ノ恩ヲ知ル、奢者ハ給銀ヤ鼻紙代ニテ遣タラズ、不レ足所ハ盜ミ遣ナガラ、我旦那ハ幾年勤テモ勤甲斐ナシト云、汝ガ親方ハ此ヲ知ル、コヽヲ以テ給銀ヲネギラズ、見苦キヲ反テ喜ブ、是誠ノ道ヲ以テ人ヲ遣ナレバ、忠アルモノヲ求得ルコト多カラン、「子曰、以レ約失レ之者鮮矣」ト、儉約者ヲ好ハ尤ナリ、國家ヲ治ルモ約ヲ本トスルニアラズヤ、假令財寶アリトモ、善人ヲ得ズハ何ヲ以テ家ヲ治ンヤ

曰、先年ノ困窮年ニ、親類中其外宿モチ手代ドモヘ、米穀ノ調ヘ金銀ヲ貸シ、明年ヨリ取カヘサント云、借リ方ノ中ヨリ手前勝手ニ相成リ候マヽ、今日ヨリハ利足ヲ出シ借度ヨシ云モノアレドモ聞不レ入シテ

取反シ、内ニ積置番ヲセラルヽ、ケ様ナル費ヲ知ラザルコトハ如何

答、是一入面白、親類手代中モ、先旦那ハ人ノ物ヲ反サズシテ奢ラレシヲ見習ヒテ、奢コトヲ知テマサカノ時ノ貯ヲスルコトヲ不レ知、其ヲ教ンタメニ急々ニ取立ラルヽト見ユ、且借タルモノヲ取反スハ古今ノ定法ナリ、「孟子曰、非二其道一也、一介不二以與一レ人、一介不二以取二諸人一」ト、心正キ親方、貸取コトニ心アランヤ、人ヲ不義ニ陥シ入レズシテ、且救ハン爲ナルベシ

曰、左様ナルカト思ヘバ、出入ノ働人ナドノ何ノ好モナキ者ニハ、多クノ米穀ヲ施シ、其ハ又遣舍テニセラルヽ、然レドモ誰ガ一人トジテ禮ニモ來ラザレバ、格別ニ喜ブ體モ見ヘズ、畢竟遣損ナリトイフ者アレバ、否、物ヲ施スハ禮ヲ受ル爲ニハアラズ、其筈ノコトナリトイハルヽ、又吝イ（シハ）コトハ、虱ノ皮ヲ千枚ニヘグヤウニセラルヽ、コレラハ如何

答、扨此ニ至テ一入感心致ス所ナリ、何ヲ以テナレバ金銀ハ天下ノ御寶ナリ、銘々ハ世ヲ互ニシ、救ヒ助ル役人ナリト知ラルヽト見ヘタリ、此故ニ困窮ニ至テ多クノ人ヲ救ヒ、又救レシ者ドモヨリ忝ナシト染々禮ヲイフ者モナケレドモ、其厭ナキハ聖人トイヘドモ此上モ有マジキカト思ヘリ、孟子所謂「若レ民則無二恒産一因無二恒心一」ト、民ノ知ナキハ常ナリ、其愚ナル處ヲ知テ、其者ヨリ我慈悲ヲ知ラザレドモ、其厭ナク他ノ憂ヲ救ヒ自コレヲ任トス、能貯ヘ能施ス、今ノ親方ハ學問ヲ好ルヽトモ聞ザリシガ、假令一字モ學ズトイヘドモ此ゾ實ノ學者ナラン、先人ハ天地物ヲ生ズルノ心ヲ得テ心トスルナレバ、人

物ヲハゴクミ育フヲ以テ要トス、孟子所レ謂「君子所レ性雖ニ大行一不レ加、雖ニ窮居一不レ損分定故」ナリト、是ヲ以テ見レバ人ハ貴賤ニ不レ限、盡天ノ靈ナリ、貧窮ノ人トイヘドモ一人飢時ハ直ニ天ノ靈ヲ絶ツニ同ジ、此故ニ聖人ハ民ヲ養フヲ以テ本トシ玉フ、此ヲ以テ飢饉年ニハ、御上ヨリ飢者ヲ救セ玉フ御事ナレバ、子ノ親方モ御法ヲ能モ用盡サレタリ、ソノ志シ誰モ斯ハ有度モノナリ

曰、親類一家祝儀ノ音物ハ取遣トモニ三分一ニ減シ、七日ノ法事ハ三日ニ減ジ、一日ノ齋ハ三日ニ增シ、齋非時モ五十人ノ僧ヲ二十人ニ減ジ、一石ノ施行ハ三石ニ增ス、此等ハイカン

答、我分ヲ能知テ天ヲ恐ルヽ志シ有ガタキコトナリ、音物ヲ減ジ、法事ノ日數ヲ減ジ、僧ヲ聚ルコトヲ減ズルハ、分限ヲ知ラルヽガ故ナリ、法事ニ齋シ敬ムハ禮ナリ、施行米ヲ增シ、人ヲ救フハ仁ノ施シナリ、凡テ增減ヲ知ルハ智ナリ、實ニ智仁ノ心ヲ能用ヒタルアリサマ左モ有ベキコト哉、孔子モ「禮與ニ其奢一也寧儉、喪與ニ其易一也寧戚」トノ玉フ、扨五十人ノ僧ヲ二十人ニ減ズルコト定テ疑ヒアルベシ

曰、法事ハ少ニテモ增ヲ善事ト云ベシ、減スヲ善ト云ハ如何ナルコトゾヤ

答、不レ似事ナガラ、汝心得ヤスキヤウニ事ヲ設テ語ルベシ、汝モ生レシ時ハ赤子ト云、次デ名ヲ付テ次郎トカ太郎トカ云ベシ、成長シテ汝今ノ名ヲ付ケリ、又年寄ラバ法體シテ法名ヲ付ベシ、其時々ノ名ヲ召(ヨベ)バ答ヘルナリ、其名ハ實ノ者カ假ノ者カ

曰、名ハ付テ生ルヽモノニハ非ズ、先ヅ假ノモノナリ

答、汝ヲ盗人ト云ハヾ如何

曰、盗人ト云ハレテハ身分立タズ、コノ故ニ怒ルナリ

答、善人ト云ハヾ如何

曰、我ニ善事ハナケレドモ譽ラルヽハアシカラズ

答、盗人ト云、善人ト云、コレ假ノ者ニテ外ヨリ付タル名ナリ、其ニ何トテ怒リ喜ブコトゾヤ

曰、假ノ者トハ思ヒシガ、名モ我ニ添タル者ナレバコレモ實物ニ同ジ、盗人ト云レテハ思ハズシテ怒也

答、今汝ガ爪ヲ切捨ルニ、爪ノ中ニ爪ト云フ名アリヤ、又汝ガ身ヲ切裁(サイ)テ見バ汝ガ名アランヤ

曰、爪ヲ切、身ヲ切トテモ名ハアルマジ

答、爪ヲ切、身ヲ切ルトテモ名ハナシ、形ハ土ナリ、名ハ則汝ナリ、神ト云名ハ直(ヂキ)ニ神ナリ、名ノ外ニ神佛ハナシ、因テ先祖親祖モ法名ヲ付テ召(ヨベ)バ直ニ親祖也、扨又汝祭ヤ節ニ召(ヨビ)レテ往クニ先ノ夫婦機嫌ノ好ガ善カランヤ、機嫌ハ惡舗トモ料理ノヨキガ善カランヤ

曰、料理ハ麁相ナリトモ亭主機嫌ノ好ガ勝ルベシ

答、先ノ親方ハ大業ナル法事ナド致サレシトアリ、實ニ然リヤ

曰、信心者ユヘ佛ノコトハ大業ニ致サレ候

答、法事ノ時何モ機嫌能喜テ勉ラレ候ヤ

曰、大勢ノ客ヲ麁末ニセヌ心ユヘニ、下々ノ廻リ悪ケレバ、勝手ノ者ハ呵マワサレ候

答、傭人ナドニモ法事ノ心付ヲモセラレ候ヤ

曰、大勢ノ出家ナレバ、布施マデノコトニテ外ノ心付ハ致シ申サレズ候、今ノ親方ハ異モノニテ、布施ハ前ノ格式ヨリ仕過世間ニ替テ、出入働キノ者ニモ傭ノ外ニ心付ヲ致シ無益ノ費御座候

答、然レバ先ノ親方ハ呵マワスト、我腹立トヲ法事ニセラレ候ヤ

曰、左ニハアラズ、出家サヘ五六十人モ招カレ候ヘバ、勝手ニハ人足ラヌ故ニ氣ヲセキ、自ラ怒ラレ候、然レドモ結構ナル法事ハ致サレ候

答、法事ニ佛前ノ供物ハ自備ラレ候ヤ

曰、外ノ世話多ク、ソレマデハ手ガ届申サズ候

答、座敷ノ膳ヤ引菓子抔ハ自ラセラレ候ヤ

曰、ソレハ丁寧ナル者ユヘ、重客ノ分ハ是非共自ラセラレ候

答、汝ハ最前ニ主機嫌悪敷所ヘ召レ往クハ否ト云フニ非ズヤ、我身ヲ推テ萬事ヲ知ルベシ、法事ノ上客ハ親祖ナリ、然ルニ親祖ノ所ヘハ顔出シモセズ配膳モ他人ニ任セオキ、相伴人ヲ馳走スル禮法ハアルマジ、左様ニ不待ノ所ヘ料理ノ好味ヲ喜、先祖ハ來ラルベキヤ、若來レルコトアリトモ、爭デカ快カン、快カラザルコトヲナシテ、孝行ノ法事ト云ハルベキヤ

曰、先祖ハ最前佛ナレバ其構ハナキニアラズヤ

答、汝ハ最前ニ名モ實物ト云、佛前ニ法名アレバ是レ直ニ親祖也、神佛モ名ヲ祭リ、親祖モ名ヲ祭ル、名ハ直ニ體ナリ體即心ナリ、コヽヲ以テ孔子モ、「祭レ神如レ在、吾不レ與レ祭、如レ不レ祭」ト、因テ供物等モ自ラ進メ、人ヲシテ代シムレバ祭ラザルガ如シトノ玉フ、祭ト云ハ今此國ノ法事ノコトナリ、孔子大聖ノ德御座テ、親祖ノ祭ニハ沐浴シ、心ヲ齊ヘ身ヲ淸メ玉フ、親祖ヲ祭ハ我誠アレバ靈來テ供物ヲ受玉フ、誠ナケレバ靈來ラズ、祭ト云フトモ何ノ益アラン、因テ今日法事ヲ行フトモ、只孝行ヲ主トスベシ、然ルニ汝ガ先ノ親方ハ、多ク出家ヲ召集客アシライニ隙ヲトラレ、且ツ臺所ニ人少ケレバ、廻リアシク、佛前ノ勉ハ他人ニ任オキ、ソレニテ先祖在如キノ馳走成ベキヤ、分ヲ不レ越奢ニナラズバ出家多キヲ惡ト云フニハアラズ、總ジテ今ノ世ノ法事ヲ爲ヲ見ルニ、名聞ノミニテ勝手ハ働者ヲ儉約シ、人少クシテ客ハ多キユヘニ手廻シ出來ズ、主ハ腹立イカルコト多シ、其怒顏ツキシテ親祖ニ向ヒ、何ノ法事ニ成ベキヤ、實ノ法事ト云ハ我心ヲ散亂セズ、安樂ナル顏ツキヲ親祖ニモ見セマイラセ、出家衆ヘモ衣ノ損ジ料モ澤山ニアルヤウニ、布施ニ心ヲ付ケ出入働スル者ニモ、佛ノ外ニ心付ヲナシ、何方モ快喜ヤウニスルコソ實ノ法事トハ云ベケレ、入用ノ金ハ心當ヲ極メ置、名聞ノ爲ニ出家ヲ聚ルユヘニ、自布施ハ減ジ其外可レ爲コトニ不足アルコトナリ、法事ヲスルトテ人ヲ怒ラセ我モ腹立、下々ハ手足摺粉木ニナルホド、ツカヒ苦シメルコトコソ哀ケレ、天下ニ大法事ナド行セ玉ヘバ、諸國殺生禁

斷罪人モ、御赦免ナサルヽ、ゾカシ、カヽル實ノ御法事ヲ法トシ、身ノ分ヲ諳ヘズ、約ニシテ金ノ入用ヲヘラサズ、寄集者盡快喜ヤウニセバ、親祖ヲ弔フ實ノ法事トナルベシ

曰、兎角今ノ親方ハ貧乏人ガ好カト思ヘバ、又財寶ヲ聚、其聚タル金銀ニテ、衣服ニテモ拵ヘ美食ニテモ好ムカトオモヘバ、毎々ハ食ト汁ニ香物菜、朔日十五日二十八日ハ鱈膾ニ香物、正月節ハ鱈膾ニ鯖ノ燒物大根汁ニ香物、祭ハ瓜膾ニ燒物ハ鰡(シイラ)ノセンバ、茄子汁ニ香物、不圖ノ客アレバ、茶漬食ニ香物、有增如レ斯、夫ユヘニ寄集親類衆モ、我家ノ格式トハ大イニ違故ニ、箸ヲ取ソムル計ニテ節ヤ神事モ、淋ク、影口ヲ開バ餓鬼ジヤノ吝嗇ノト、人ノヤウニハイハズ、ケ樣ノコヲ聞モ氣ノ毒ナリ、是等ノコハ如何

答、其一家一門ノ議ハ、皆々法ヲ知ラザルユヘ也、道有テ聚ル金銀ハ天命ナリ、天ノ賜ル財ヲ不レ捨、天ノ命ニソムカズ、約ヲ以テ禮ノ本ヲ守レリ、又道ヲ行フ者ハ他ノソシリハ有ナラヒ也、「孟子曰、無レ傷、士憎ニ玆多口ニ詩云、憂心悄悄、慍ニ于群小ニ孔子也ト聖人ノ行ハ小人ノ行ニ違ヘル故、衆ノ口ノ爲ニ孔子モ譏ニ逢玉ヘリ、又美食ヲ好ザルハ身ノ分限也、一汁五菜七菜抔ト云、重キ料理ハ下々ノコニアラズ、御上ヨリ品ヲ分テ見バ、汝ノ親方ノ料理ハ、今少シ奢ニテモ有ベシ、ソレヲ一門衆ハ、箸ヲ取初ル計トハ、分ヲ知ラザル奢者ナリ、先飢饉年ニハ飯米ノ調代ヲ借リ、汝ノ親方ノ惠ニヨリ飢ニ及バズ、ソレヲ忘レ身ノ分ヲ不レ知、今手前豐ニ暮セバトテ、左樣ノ惡口ヲ吐ル、コト論ズルニ不レ足、其人々ニモ道ヲ知ラセント思ハルヽ、親方ハ、中ヤ不中ヲ捨ザル、實ニ中才ノ人ト孟子ノ玉フガ如シ、又其一門衆ノ惡

口ヲ、聞テ居ナガラ此ヲ法トセヨト、心一杯ニ勤メ見セラル丶ハ眞實ト云ベシ、一家ノ衆用ヒラルベキトハ思ハズシテ心ヲ盡サル丶計ナリ、魯國ノ季氏泰山ヲ旅セントスル時ニ、冉有季氏ガ臣トシテ、救ヒ正スコトアタハザルコトヲ知ナガラ、孔子心ヲ盡シ玉ヒテ、女救コトアタハザルカトノ玉フニ能似タリ

曰、日外二男、內證ニテ歌學セルコトヲ聞、喜ンデ何ゾ褒美ヲ遣トテ、大算盤ニ而褒美トシテ遣ル丶、歌學ノ褒美ニ算盤トハ、實ニ木ニ竹ヲ繼グゴトク、文盲ナルコトヲセラル丶、是等ハ如何

答、其褒美ノ心ヲ不レ知シテ笑フ汝ハ、扨々文盲ナル者哉、其二男ノ身ノ行ヒヲ聞バ、家業ノ事ハ一トシテ不レ勉、尤色所ノアソビハセラレネドモ、諷鼓歌學ニ懸テ居ラル丶ヨシ、其ユヘ前方ニハ親父モ折々異見セラレシヨシ、然レドモ汝ラガ思フニ二男ハ悪所ヘハ往レズ、旦那位ノ身上ニテ是ホドノコトヲ、急申サレナバ反テ心僻デ悪カラント、大勢口々ニ云ハル丶ユヘ、親父モ其後ハイハレスヨシ、君子ハ本ヲツトムトアリ、スベテ家業ニ疎ホドノ徒者何方ニ有ベキヤ、第一ニ不孝トナル、不孝ノ罪ハ重シテ、刑罪ニモ入レラレズト、孝經ニモ說玉ヘリ、家業ニ疎ヲ悲マレ、歌ヲ詠ムヲ喜ル丶ニハ非ズ、歌學ニ事コセテ此褒美ニ算盤ハ、如何ナルコトゾト心ヲ付サセン爲ナルベシ、夫ヲ汝等モ同ジク利口ソウニ頭ヲフツテ是ヲ笑フ、親ノ子ヲ思フ慈悲至ラザル所ナシ、汝等ガ婦寺ノ忠ヲ以及ブベキニアラズ

曰、親類方ヤ手代中ヨリ、金銀ヲ借リニ來ル者アレバ、貸カサヌハ除置、何レモ方ノ家督ニテハ、幾人暮持兼ルコトハナキ筈ナリト云テカサズ、又ツモリガ合バ彼ハ得歸ヘスマジト知リナガラモ貸ル丶、

利ノアルコトヲ曾テ知ラザルニ似タリ、是等ノ是非イカン

答、尤此事ハ深心有ベシ、如何ナレバ世間ニテ金銀ノ出入スルヲ見ルニ、假令親類手代ニテモ先彼ハ此ホドノ、金返カ返サヌカト金銀ヲ貸ザル前ニ吟味スルハ毎ナリ、然ルニ汝ノ親方ハ、先方ノ身上往カヌル筋道有レバ貸、ユクベキ理アレバ不レ貸トハ、親ノ子ヲ思フ心ト何ゾ替アラン、嗟世ノ中ノ人十人ニ二三人程、ケ樣ナル人アラバ、世ニ難儀スル人少カルベシ、我金銀ト思ハズ、我ハ此事ヲ治ル役人ト思フ志、世ニ稀ナルコトナリ、我一族ノ人ヲ左樣ニ深切ニ思フ身ニハ誰モ成タキ者哉、孔子モ「周レ急不レ繼レ富」トノ玉フ、周レ急トハ困窮ノ者ノ足ザル所ヲ補助ルコトナリ、不レ繼レ富トハ富デ餘アル者ニハ、ツギ足ニハ及バズトノ玉フコトナリ、汝ガ親方ノ欲心ヲ離テ、金銀ヲ出シ人ヲ救ハルヽハ、聖人ノ御志ニ能合ナヘリ、或田舍ニ其所ニテハ內福ナル人アリ、此人親類中ヘ金銀ヲ貸ニ、借ニ來ル人アレバ貸レケルガ、戾ス覺ヘアラバ遣レヨ、此方金貸ハ家業ニセズ、因テ利足ハ取ラズト云テ貸レケリ、是程ノ人サヘ稀ナルニ、汝ノ親方ハ、先方ノ算用不足スル譯ヲ聞屆、道理ノ立タル不足ナレバ何カヘスト云コトヲカマハズシテ貸ルヽナレバ、合力金ト云者ニテ取返スト云心ヲ離タル仕方ニテ、天下ニ飢人ヲ救玉フニ似タル者ナリ

曰、宮寺ノ奉加ヤ建立ゴトハ嫌ニテ、死後ニハ何ニ生レント思ハルヽヤ、曾テ後世ノ善事ハセラレズ、兎角當世ニ異ナリ

答、段々ノ問ニ因テ見レバ、汝ノ親方ノ信心ニ合フ程ノ、徳有神主ヤ、出家ガ無キ故ト見ヘタリ、宮寺ノ建立ゴト嫌ル、トハ不レ見、先古ノ様子ヲ考ヘ見レバ、宮寺ヲ建タキト云テ奉加帳ヲ旦那ノ家々ヘ持來リ、イヤガル旦那ニ奉加ヲス、メテ金銀ヲ出サセ、其金銀ヲ持テ建立セラレタル、神主開山方ハ有マジ、皆々徳有故ニ神道佛道ノ棟梁ト成レリ、神ノ御心ヲ云ハヾ、常ニ供シ奉ル者ナク、金石ヲ食スル共、常ニ心ノ濁リ穢シ人ノ捧ル者ハ受ズト、八幡宮ノ御神託ニアラズヤ、其ニ氏子ノ志ナキ金銀ヲ慈悲正直ノ神受テ喜玉フベキヤ、又吾モロ〳〵ノ蒼人草イツハリ謀テ、タトヘ善ト思フ共必天ノ尊ノ怒ヲ受テ根ノ國ニオモムカン、正キ心ヲ持テ正悪共必天ノ神ノ恵アラント、皇太神宮ノ寶勅ナリ、神御納受無キコトニ、氏子ヲ苦メ金銀ヲ出サセナバ、神ノ御心ニ背クニアラズヤ、神主ト成者ハ御神託ニ因テ神ノ御心ヲ知ルベシ、何事モ御心ヲ知ルノ徳ニヨル、譬ヘバ禹王ノ有苗ヲ征セシモ、師ヲ班シ徳ヲ敷クニハ如カザリキ、物ノ成就致難キハ身ノ不徳也ト、我ヲ顧バ恥キコトモ多カルベシ、心ヲ明ニスル爲ニ神ニ仕ヘ、反テ心昧クバ神罰ヲ受ルコト速ナラン、扨佛ノ道ハ五戒ヲ有ニ依テ佛ノ弟子ニアラズヤ、其ニ寺ノ修覆ト云ヘバ内福ノ寺方ニテモ、世間ニ習テ家々ヘ奉加帳ヲ出スコト有テ、強進レバ檀家迷惑シ、出シカヌル金銀ヲ出サセ、人ヲ苦メ傷ルハ殺生ト云者ナリ、一戒ヲ破レバ五戒ハ盡破ナリ、證ヲ以テ言ベシ、毘婆娑論ニ一ノ鄔波索迦有、性仁賢ニシテ五戒ヲ受持テリ、専精シテヲカサズ、後ニ一時ニ於テ水ニ適、一ノ器ヲ見レバ酒有リ水ノ如シ、取テコレヲ飲、ソノ時飲酒戒ヲ破レリ、時ニ隣ニ

雞有來テ家ニ入ル、盜殺テコレヲ食、殺生戒ト、偸盜戒ヲ破リ、鄰ノ女雞ヲ尋ニ來ル、強遁是ニ交ル、邪淫戒ヲ破リ、鄰ヨリ官所ヘ訴フ、コレヲ拒爭テ妄語戒ヲ破、如レ是一戒ヲヲカスニ依テ、五戒悉ク破レテ佛ノ罪人トナル、佛心ヲ悟テ後ハ、假令奉加ヲ勸ル共勸ル上直ニ教ト成ベシ、神佛トモニ如レ斯、古人ハ道德明ナルユヘニ人是ヲ感心シテ宮寺ヲ建立セシコトト相見ユ、然レバ今日ニテモ道德アキラカニシテ、人ヲ教導キ、旦那モ此人ノ教ニヨリテ心モ安樂ニ成リ、又生死疑ヒナクナラバ、其人奉加帳ハ出サズトモ、如何ヤウノ社堂ニテモ建ベシ、古今トモニ人ノ心ハ天ノ命ズル所ナリ、何ゾ替リアランヤ、又宮寺ノ奉加ト云フトモ毛筋ホドモ、人欲勝手アラバ此不義ノ類ナリ、汝ノ親方ノ正キ心ニテ其不義ニ與センヤ、奉加ニツカザルニハアラズ、只不義ニ與セザルナリ、死後何ニ生ント思フ心、ナンゾ有ンヤ、今日ノ義ヲ行ヒ、明日ノコトハ天命ニ任ス志シト見ヘタリ、「孟子曰、天壽不レ貳、修レ身以俟レ之」ト、來ルモ天ニ任歸ルモ亦天ニ任ス、此間ニ私意ヲ入レンヤ、當世ニ異ナルニハアラズ、當世ノ人ガ法式ヲ越エ聖人ノ教ニ異ナリ、汝ノ今ノ親方ハ聖人教ヲ能ク守レル人ナリ

曰、中庸ニ所謂聖人ハ「素ニ夷狄一行ニ夷狄一」トアリ、又君子ハ無レ所レ爭トモアリ、然ルニ、親類一家中ト盡爭ヒ逆フ、コレラハ如何

答、汝經書ヲ見テモ一モ理モ辨知ルコトナシ、「程子曰、吾自ニ十七八一讀ニ論語一、當時已曉ニ文義一」ト、書ヲヨムコトハ我ニ會得センガ爲メナリ、聖人夷狄ニテハ、夷狄ヲ行フトノ玉フハ、夷狄ノ法ヲ背カズシテ

而モ道ニ合フヤウニスベシトノ玉フコトナリ、又「君子無レ所レ爭」トノ玉フハ、不義ヲ以テ人ニ爭ハズトノ玉フコトニシテ、義ヲ以テ他ノ不義ヲ正スコトハアルベシ、此故ニ湯王モ義ヲ以テ桀ヲ南巢ニ放、武王伐レ紂、是我ニ義有レバ爭所ノ證ナリ、汝今ノ親方ハ天下ノ御法ニソムカズ、義ヲ以テ行フユヘニ背者レルノ不義ニ爭フ、然レ共共親類ヨリ手代ノ末々ニ至ルマデ、一人トシテ背フ氣色モ見ヘザレ共、我宗領家ノコトナレバ、本ヲ正シ肴ヲ退ケ約ヲ守テ、禮義ノ本ヲ知ラシメント思ヒ末々マデヲステズ、世話ニセラルヽハ神妙ノ至リナリ、其正キ惣領家ニアルコトハ一家中ノ寶ナリ、此味ヲ知ラザルハ、寶ノ山ニ入、手ヲ空フシテ歸トハケ樣ノコトナルベシ、ソレ程ノ德アル者世ニ露見セザルハ如何ナルコトゾヤ、親類家內ノ人々ハソレヲ知ラザル而已ナラズ、不義ヲ以テ義ニ勝ント思フハ僻ナリ、汝ハ賢德アル親方ノ仁愛ヲ知ラズシテ、僻云者ニ徒黨シ親方ヲ誹ル、然レ共愚痴ヨリナス所ナレバ、親方ハ心寬、コレヲモ免シ置ルヽナリ、其心ヲ會得シコレマデノ誤ヲ改メ忠義ヲ盡サルベキコトナリ、數多家來ノ其中ニ左程德アル親方ニ與シ、相クル者ナキハ惜哉哀哉

客退テ後或人曰、最前ヨリ客トノ問答ヲ聞ニ汝ノ云ヘル所一通リハ相聞ヘ、法式ニ背コトモ有マジ、然レドモ、時ヲ不レ知所アリ、今日ニ違テハ世間ノ交ナルベカラズ、世ノ交ヲカギテハ人ノ道ニアラズ、大聖孔子モ鳥獸ニハ與ニ群ヲ同フスベカラズ、吾斯人ノ徒ト與ニスルニアラズシテ、誰ト與ニセントノ玉ヒ、人タル者ノ交ヲ絕コトヲ悵ミ玉フ、客ノ云ル先ノ親方ノ他借ヲ返サズシテ死ス、夫ヲ果報人ニテ

絕レリト云ハ極テ非ナリ、又今ノ親方ノ仕方、假令法ニハ不レ背トモ、人ニ替リタル行ニテ世ノ交ヲ絕、コレハ又是ニ似テ非ナリ、中庸ヲ以テ見レバ、過不及有テ雙方トモニ中ラザルコトナリ、二人ノ行ヲ合テ其中ヲ取テ行バ可ナラン、然レバ木綿布子ニ生布ノ帷子高宮羽織ハ不レ及ナリ、忽ニ今日ノ交スマズ、其スマスコトヲ尊ムハ如何ナルコトゾヤ

答、汝ノイヘル如ク、人倫ヲ絕ツコト大ナル罪ナリ、我云所モ悉ク人倫ノミ、汝ノイヘル鳥獸ト群ヲ同スベカラズトノ玉フ、聖人ノ意ハ道ノ廢タル世ナレドモ、此人ト交テ亂タルヲ正シ、古ヘノ道ニ反サントノ玉フコトナリ、然ルヲ汝ハ無道ノ人ヲ正スコト能ハズシテ、交ル而已ヲヨシト思ヘルハ非ナリ、禮アルヲ以テ人トス、禮無トキハ人倫ニアラズ、食テ愛セザルハ豕ノ交ナリ、愛シテ敬セザルハ獸ノ畜ナリト孟子ノ玉フ、是禮ニアラザレバ交テモ不レ交ノ證ナリ、木綿布子生布ノ帷子ハ、上下ノ品分テ法ニ背カズ、盡ク禮ニ合ヘリ、譬バ此ニ君ヲ打レシ、臣數多アラン、心ヲ合テ敵ヲ伐ハ士ノ道ナリ、然ルニ皆々不同心ナラバ、大勢ニハ背カレズト云テ、主君ノ敵ヲ見遁ニシ、武士ノ道ヲ舍ンヤ、多分ニ背ト云トモ、敵ヲ打ハ士ノ道ナリ、今日ノ交モ斯ノゴトシ、ソシル人アリトモ、ナンゾ上下ノ禮ヲ亂ンヤ、喩バ加賀絹ハ羽二重ニ似タリ、紬ハ木綿ニ似タリ、ヨツテ聖人ノ教ヲ聞得タル者ハ上ヲ恐レ、紬ヲ著テ貴賤ヲ分ルノ禮ヲ貴ブ、教ヲ聞ザレバ加賀絹ヲ著テ上ヲ犯シ、貴賤尊卑ノ禮ヲ亂シ、思ハズシテ罪人トナル、是教ヲ知ラザルヨリ致ス所ナリ、教ヲ知ル時ハ、交モ不レ絕シテ奢ヲナサズ、我ヲ下ルユ

ヘニ人ニ悪レズシテ心易交ルナリ、又教ヲシラザル者ニ財多ケレバ身ノ程ヲ知ラズ、我ヲタカブルユヘニ世ノ人コレヲ憎、表向ハ交ルトイヘドモ心ハ常ニ離ル、ナリ、「子曰、君子泰不レ驕、小人驕不レ泰」ト總ジテ奢者貧身トナルトキハ恥ヲ不レ知、盗ヲモナスニ至ル、又身ノ程ヲ知テ約ヲ守ル時ハ、法ニ合フユヘニ安カルベシ、孔子又曰、「麻冕禮也、今也純儉、吾從レ衆、拜レ下禮也、今拜二乎上一泰也、雖レ違レ衆、吾從レ下」トノ君子ノ世ニ處スル事ノ、義ニ害ナキコトハ世俗ニ從テモ可也、義ニ害アルヿハ從フベカラズトノ玉フ、奢ノ害ヨリ大ナルハナシ、又天地ノ冬ニ至リ枯槁テ屈スルハ、春ニ至リ伸所ノ兆也、聖人ノ約ヲ本トシ奢ヲ退ケ玉フハ、凶年ナドノ時ハ溜置ル財寶ヲ國々ヘ布施ント思召、民ノ爲ノ儉約ナルコトヲ知ルベシ、如レ斯類ヲ法トシテ、下々モ一家ノ頭タル者ハ、親類中ヲ我家ノ如ク思ヒ、難儀アレバ救コトヲ我役目ト思フ者ナラバ、平常儉約ヲ思ヨリ外ニ心ハ有マジ、儉約ト云ヲ世ニ誤テ吝キコトヽ思フハ非ナリ、聖人ノ約トノ玉フハ侈リヲ退ケ法ニ從フコトナリ、客ノ云ヘル今ノ親方ノ行ヒハ皆々法ニ合ヘリ、聖人ノ行ヒニ合ハヾ中庸トモ云ベシ、然ルヲ汝ハ善悪ヲ不レ擇、二人ノ眞中ヲ執ラント云、善悪ヲ不レ擇シテ中ヲ執ルハ一ヲ擧テ百ヲ廢ツ、是時ノ中ヲ害ス、孟子道ヲ賊ト誹玉フ、子莫ガ中ト云ハコレナリ、客ノイヘル今ノ親方ノ行ヒヲ細ニ心ヲ付テ見ルベシ、一トシテ私ノ勝手ヅクヲナサズ、親類ヨリ手代マデヲ親ノ子ヲ思フ如クス、聖人民ヲ子ノゴトクニ思召ス政ト、大小ノ替リハアレドモ志シハ同ジ、ソレヲ知ラズシテ世ニ異ル人ト思ヘルハ大ナル僻ゴトナリ、世ノ中ノ有福ナルモノ、我親類ヲ銘

銘ニ引請テ世話ニ思ハヾ、飢ニ及ブホドノモノハアルマジキニ、反テ道アル人ヲ誹リアザケルハ哀キニアラズヤ

或人天地開闢ノ說ヲ譏ルノ段

或人問曰、日本紀神代卷ニ「天地未レ剖、陰陽不レ分、渾沌如二鷄子一、溟涬而含レ牙、及下其清陽者爲レ天、重濁者爲上レ地、神聖生二其中一焉、于レ時天地中生二一物一、狀如二葦牙一、便化爲レ神、號二國常立尊一」ト見タリ、此奇怪說ナリ、若世ニ人有テ、天地未レ闢前ニ生レ壽ヲ得ルコト數百億萬歲ニシテ親ク視、コレヲ後ノ人ニ傳ヘシヤ、傳ヘナク元來跡形モ知レザルヿナレバ、實ニコレ奇怪ナル說ニアラズヤ、汝ハ如何心得居ラレ候ヤ

答、汝ノ云ヘル如ク、此說ヲ世ニ疑人多シ、然レドモ此所ハ性理ニ昧キ者ノ窺知ベキ所ニアラズ、然ルニ是ヲ奇怪ノ說ト云ヘルハ、聖德太子舍人親王ヨリモ、汝ガ器量ハマサレリト思ハレ候ヤ

曰、我等如キガ、此方々ニ及ベキコトニ非ズ、然レドモ天地開闢ノ說ハ奇怪ノ說ナリ

答、太子親王ハ聖德御座、世ニ賢渡ラセタマヒ、書傳ヘ我朝ノ記錄トナシ玉フハ如何ナルコトゾト心ヲ付ベシ、此御方々天地未レ開、渾然タル時有テ其時ニモ人有ト思召玉フベキヤ、今日短才ノ者ニテモ箇程ノコトハ知ルゾカシ、其ニ心ヲツケザルハ愚昧ノ者ニアラズヤ、「神聖(アレマス)生二其中一」トアル其神ハ、今日ニ至テモ在ヤ在ザルヤ、在サズバ今ハ神國トハ云ハレマジ、在バ何レニ在ゾ、其時ニハ見ハレ在シ、今ハ隱

在カト默シテ心ヲ盡サズ夜ノ曉時節アルベシ、汝ハ自心ノクラキコトヲ不ㇾ知シテ、心ノ明ナル親王ノ筆記シ玉フ書ヲ麼セント思フハ、晴夜ニ燈火ヲ以テ天ヲ窺フガ如シ、扨我モ前ツカタハ、天地未ㇾ闢ノ說ヲ非トシテ他ヲ迷ハセタルコトモアリシニ、今ニ至テ見レバ愚ナル處ヨリ古人ヲ譏侍リシモ悔シ、然レ共猿賢者ハ十人ガ九人迄ハ、能ク肯フ議論ニテ、汝ガ如ク云フ者ヲ、反テ知者ノヤウニ思フモノナリ、汝モ世間ノ少シ學問アル者ニ云聞サバ、是ハ發明ナル見識ナリト思ヒ、汝ヲ知者ノヤウニ思フベシ、知者ト思ハルヽ汝ノ愚ハ、思フ者ヨリ勝レル愚ナリ、今云所ニ心ヲツケラレナバ、解ル時節モアルベシ、扨易ノ畫ニ八卦ニハ伏義ヨリ始ル、彖ノ辭ハ周ニ至テ文王始テ繫ウケ玉フ、爻ノ辭ハ周公旦ニ始リ、傳ハ孔子天地人ヲ交テ釋玉フ、易ハ變易ニシテ古今不ㇾ變モノハ理ナリ、理ヲ以テイヘバ天人一致ニシテ、今日ニ至リ人間畜類マデ、銘々繼來ル者ハ理ナリ、其繼グ者ヲ知リ得レバ、忽ニ疑ヒハ晴ル者ナリ、天地未ㇾ闢ノ說、又天ハ子ニ闢ケ、地ハ丑ニ闢ケ、人ハ寅ニ生ルナドノ說モ怪ニ似タレドモ、皆々當ル所アリ、夫ヨ辭ニ泥ムヿ有テハ書ハ見ヘザル者ナリ、易ノ卦ヲ以テ配ㇾ月シテ云フ時ハ十月純陰ナリ、十一月冬至ノ日、一陽來復スルトイヘドモ天地ノ間ニ何方ヲ見レバトテ、是ニ一陽來レリトモ見ヘズ、初陽ハ潛ミカクルヽ故ニ見ヘズト云ハヾ、正月ニハ三陽生ジテ、花咲鳥鳴トイヘドモ其體ハ見ヘズ、又乾ハ龍トナシ、坤ハ牝馬トナシ、陰陽ヲ龍ト馬トニ喩フ、是モ文字ニ泥ミ陰陽ハ直ニ龍馬也ト云ベキヤ、周公旦ノ譬ハ疑ハズ、親王ノ譬ニ、狀葦芽（アシカビ）ノ如シト說玉フコトヲ疑フハ如何ナルコトゾ、皆象

ヲ假テ義ヲ顯ス、其體ハ微妙ノ理ニシテ見ルベキニアラズ、見ヘザレバ左ニアラズト云テ古人ノ書ヲ破リ舍テンヤ、天地未レ闢ノ說、又天ハ子ニ闢クルノ說、是皆天地ハ自然ノ次第ナルヿヲ知ラシメン爲ナリト知ラルベシ、我性ヲ知テ萬事ノ說ヲ見バ、掌ヲ見ル如ク昭然トシテ疑ナカルベシ、今草木ノ生出ルヲ見レバ、始ハ種土中ニ有テ渾ジテ分レズ、ソレヨリ錐ノ先ノ如クニ成ルハ、自然ニ陽ノ形ニシテ皆葦芽ノ如クナリ、二葉ニ分ルハ平ニシテ陰ノ形ナリ、二葉ノ中ヨリ心(シン)ノ立出ルハ陰ヨリ出ルノ陽也、其草木梢ニ至ル迄、陰陽陰陽ト生々ス、易ノ上繫辭傳ニ「天一地二、天三地四、天五地六、天七地八、天九地十」ト說玉フ、是ニテ陰陽陰陽ト生成シテ、不レ止コトヲ知ルベシ、天ハ一、地ハ二、萬物ハ三、天地有テ後ノ萬物也、人ハ萬物ノ靈ナル故ニ萬物ヲ人ニ惣ベ合セ、三ニ生ルユヘニ、人ハ寅ニ生ズトモ云ベシ、又人母ノ胎內ニ宿ル時ハ一滴ノ水ナリ、是雞ノ子ノ如クニシテ芽ヲ含メリ、其中ニ清陽ナル者虛ニシテ心トナルハ天ノ開ナリ、重濁者形トナルハ地ノ闢ナリ、頭ノ形高ナルハ葦芽ノ如シトモ云ベシ、如レ是見バ天地開闢ノ理ハ我一身ニモ具レリ、此ヲ味ヒ見バ天地ノ始終ハ古今共ニ同ジ、ソレヲ今此上下ノ天地、ヒラケ始ルコト有トノ玉ヒシヿト一概ニ見ナシ、又天ハ子ニ闢クルノ、地ハ丑ニ闢クルノ、人ハ寅ニ生ルノト、字面ニ拘リ曲ニ泥ムヿアッテハ、書ヲ見ルトモ不審バカリ出テ心ヲ解ノ樂ミトハ成マジ、滯テ困ムハ、我知ノ開ケザル所也ト知ベシ、「子思曰、今夫天斯昭々多、及ニ其無レ窮也、日月星辰繫焉、萬物覆焉」此味ヲ見テ知ルベシ、天ハ廣大ナレドモ耿耿ト少シバカリ明カナル、器ノ

中ノ天ヲ見テ、其高大ノ天ヲ知ルベシ、聖人モ天地ノ外ヲ巡リ見玉フニハアラズ、「子曰、殷因ニ於夏禮ニ所ニ損益ニ可レ知也」ト、前ヲ推シ後ヲ知リ、今ヨリ推シ始ヲ知、人ト生ルレバ、仁義禮智ノ性ハ、古今相續テ不レ變、是天地ニ有テハ元亨利貞ト云、名ハ替レドモ、萬物ノ理ハ一ナリ、一物ヲ知リ得レバ、一物ノ中ニ、萬物ノ理ハコモレリ、然レ共此微妙ノ理ハ、容易知ベキ所ニアラズ、一度我ニ疑ヒ晴コト有テ後ニ味フベキ所ナリ、然ルニ今ノ世ノ人、文字ニ泥ミ色々ニ作爲スルユヘニ、昏々然ト闇ク、古人ノ心ヲ不レ知ユヘニ、和漢トモニ文學他ニ勝レバ、此ヲ徳ト思ヒ、我ヲ伐ル者多シ、文學ニ伐ル者ヲ喩テ云ハヾ、衆人ノ財寶ヲタクラベテ、彼ハ劣レリ、我ハ勝レリト伐ルニ同ジ、學者ニ於テハ恥ベキコトノ第一ナリ、如何トナレバ財寶モカセギ設テ吝クスレバ溜ル者ナリ、文字モ其如ク、年ヲ重テ油斷ナク學バ、他ヨリ勝レル者ナリ、其中ニ記憶能シテ多ク記ハ、衆人ノ中ニ仕合能ク富ルガ如シ、又學者モ文字ヲ讀ノミニテハ聖人ノ意味、神書ノ奥深キ所知ラルベキニ非ズ、然ルニ文字ヲ滯ナク讀バ、此外モ有マジト思ノベキカ、推量トハ雲泥違所ナリ、或儒者田舍ヘ通フ商人ト、親類ニテ互ニ因ミセラレシニ、儒者ノ曰、汝モ少々ハ學問セラレヨカシ、如何トシテモ文盲ナリト云レケレバ、商人ノ云我少モ文盲ナルコト候ハズ、斯ノ如ク絹布ニ札ヲ付、何國ニテ賣ベキ心當モナケレドモ、賣買シテ父母妻子ヲ養ヒ、家内ヲ治メリ、汝ガ如ク文字ヲ效バ文字ヲ讀、汝我ニ代テ一日コレヲ勉見ヨ、賣買ノコトハ知ラズト云ハヾ我ニ替ルコトナシ、我職分ヲ知レバ事ハ足レリ、汝箇程ノ理ヲ不レ知バ、夫ヲ學者ト云

ベキヤ、彼儒者モ中京ニテ、近代誰ト世ニ知ラレシ儒者ナレドモ、彼レガ理ノ明ナルニ及ザレバ、答フベキコトナシ、文學ナケレドモ、足ルコトヲ知ル者ハカクノ如シ、況ヤ性理ニ明ナル者、文學ニ達スルナラバ、聖學ノ興ルコト速ナルベシ、孟子所謂、「七八月之間旱苗槁、天油然雲作、沛然雨下則苗浡然興之矣」カクノ如ク興リ起テ聖學天下ニ遍カラン、此故ニ博學豪傑ノ士、性理明ナル者アランコトヲ幾フ、汝モ一理ヲ明シ得ルナラバ、其時ニコソ神聖生ニ其中ニ、國常立尊ト號ストノ玉フコト知覺シ、天ノ與ル樂ヲ得テ實ノ道ニ入ラルベシ

都鄙問答卷之四 大尾

石田勘平著　　門人藏板

齊家論

石田勘平著

齊家論序

子曰、予欲ㇾ無ㇾ言、天何言哉、四時行れ百物生る、天何言哉、聖人さへかくの玉ふ、况余ごとき婆婆ふさげ、言句を吐こそをかしけれ、不肖のものは四十にならで、死むこそ、めやすかるべけれ、と、徒然艸に譏られしが、死なぬ命は是非もなし、門弟より養を受け腹ふくらし、ねてもゐられず、腹すかしの爲、同志の人の齊家便りともならんかと、賤き儉約ごとを書散すは、すきに赤ゑぼしといふものか

延享甲子のとし五月上旬　石田勘平自序

齊家論上

石田勘平著

實に年月の過る早き事は、たけき川水の流るゝがごとく止る事なし、予講釋を初んと志し、何月何日より開講、無縁のかた〲にても遠慮なくきたるべしと、書付を出せしも、はや十五年に成ぬ、其比書付を見て、殊勝なりといふ人もあり、又あの不學にて何を説やと譏るもあり、或は面向は誉れども

影にて笑ふ人もあり、其外評判まち／＼なりと聞、予晩學の事なれば、何を覺えし事もなく、行跡も好人に似ることあらばしかるべきに、それもいよ／＼及びがたし、然るに何を敎ゆと思ふべきか、吾をしへを立る志は、數年心をつくし、聖賢の意味彷彿と得る者に似たる所あり、此心を知らしむる時は、生死は言に及ばず、名聞利欲もはなれやすき事あり、是を導かん爲なり、尤文字に拙き講釋なれば聽衆もすくなからん、若聞人なくば、たとひ辻立して成とも、吾志を述んと思へり、ねがふ所は、一人かとも五倫の交りを知り、君に事る者ならば、己を忘れ身をゆだね、苦勞をかへりみず、勤むべき事を先とし、得る事を後にするの志を盡す人出て、又父母に事るに、親しく愛し參らせ、常々よろこべる顏色あつて、身のとりまはしは柳の風になびくがごとく、睦じくつかふるの孝をつくす人出來らば、これ生涯の樂也、たとひ千萬人に笑れ恥をうくとも、いとふことなき志なり、其比實儀あつてへつらひなき朋友の有しが、某にいはるゝは、汝は我に比すれば學者なり、然れども推出し儒者とはいはれまじ、又世間に沙汰なき人にも、出會て見れば經書はいふに及ばず、詩作文章達者なる能き學者あり、又儒者ならねども、少し心がけある人には、汝ぐらゐの學者は町並にも有べし、其中にて無緣の講釋すると、口廣き事はいはれまじ、夫をもかまはず、書付を出されなば、聽者もあるべけれど、一度聞ては素讀同前の講釋なりといひ、又口の惡き者は、あの學問にて講釋するは、笑ふにたらずと譏るべし、たとひ十日廿日入かはり聽衆ありともつゞくまじ、其時に至りしまはんよりは、今七八年

も學問し出られなば、本望もとげ、恥を受る事も少からんと、いはれし人も過去むかしがたりになりぬ、或人のいへるごとく、予不學なれば、四書五經にさへ、假名して讀來れり、然かるに、幸なるかな、今日まで入替り聽衆もたへず、其中に親しき門弟もあり、今々の門弟には、文學を好める人もあれど、したしき門弟は、文質彬々は所詮及びがたしと思ふより、某言所に同心し、且他をも誘ひ集る事こそ殊勝なれ、寛保元年秋の比、門弟の中來て云、武藏國に薪木賣長五郎といふ孝心なる者あり、江戸表はこれ沙汰にて、則其趣き板行にあらはれしとて見せられけり、曰、武藏國多摩郡府中領押立村に、長五郎といふ小百姓あり、其身貧しく、妻にもはなれ、八十八歲になる母を養ひ、其外子供にもせがまれながら、母を大切にやしなひ孝をつくせしゆへ、公の御惠にもあづかりしとなり、此長五郎貧き百姓薪賣の事なれば、學問の德にて孝行したり共見えざれども、天下萬民聞知程にはなれり、門弟中にも是までは、文學なくては學問の甲斐なきなどゝおもひし者も、長五郎が事を聞き、いよ〳〵吾言ところに同心するこそありがたき、又去る年、門弟一書を持來り見せられけり、題號は、越後孝婦傳とあり、曰、越後國三島郡、出雲崎尼瀨の大工作太夫が女房は、姑に孝行なるもの也、夫作太夫も孝心なるものなれど、世のいとなみのやるせなくて、他國かせぎに出るゆへ、女房ひとり、七十にあまる姑を介抱し孝行をなし、是も御惠にあづかりしよし、板行にあらはれ、普く天下にひろまるは、有がたきにあらずや、元來假名ものなれば、講釋するに及ざれども、京大坂大和河内にて講釋の上に

て讀聞せり、其意はかく孝行すれば、天下に知られ好事と思ひ、名聞に成とも孝行がさせたく思ふ所なり、天子より已下、庶人に至るまで、孝終始なきときは、患ひ及ばざる者はいまだこれあらじ、又地の利に因、身を謹み、用を節にして以て父母をやしなふは、諸人の孝と、孝經に說きたまへり、それゆへ常に儉約の事を說きかせ、門弟へは月次の會に、折々儉約の題を出し、得心あるやとこゝろみれども、是までは志も立ざりしが、五六年より十四五年も從へるしるしにや、去秋町家の門弟志を起し、來ていはく、我々年來敎をうくるといへども、家を治るうへに心得たがひあり、今般家を治るは儉約が本となる事を得心せり、其本立つときは奢りもやみ、家も齊ふべし、家齊ふれば、をのづから親の心を養ふ孝行となり、其外出入の者も、心安く惠まるべき理あり、他の奢り筋にて、當分親の心をなぐさむ事も有べけれど、約を守らざれば、段々內證に不足立、諸事のまはりあしくなりて借金せば、終には親の心をくるしむるに至るべし、尤是までも內證の事は、約を守る志あれば、つとめ來りし事もあれど、衣類などは表向の物にて、世間なみの事なれば、心付なくうかうかとくらせし所、能能考れば分に過たる衣裳を是非に着よと言ものはなき事也、其外儉約筋諸事、親しき門弟示し合せ急度あらため、家內にて行ふべしといはれけり、殷の紂王始め象牙の箸を爲る時、箕子慨歎して、彼象牙の箸を爲り玉はゞ、必玉の杯を爲るべし、玉の杯を爲らば、必遠方珍怪の物を思ふてこれを用ひ、輿馬宮室の漸自レ此始不レ可レ振といへり、君子の眼違はずして、遂に不レ振して亡びたり、天下の主として

象牙の箸はわづかなれど、高山も微塵よりなるごとく、終には民を暴虐し、殷の天下を亡ぼすに至る、高下ありといへども、家を興し家を亡す理は一なり、奢りは日に長じ安し、恐れ愼むべき事なり、子曰、禮は其奢らんよりは、寧儉せよと、又約を以て是を失するものはすくなしと、聖人の意味は深長にして格別の事なり、しかれども先儉約に思ひ付るゝことこそ殊勝なれ

或學者、某門弟專ら儉約を用ゆる事を聞く、或る時來りて物語のうへ問ていはく、聖人の道はあらそふ事なきを善とする、然るに近比汝はあらそふことを敎ふと聞けり、いかなる事ぞや

答、某敎ゆるは、聖賢の口眞似なり、爭ふことを敎ゆるとは、何をもつていはれ候や

曰、汝が門弟の中、俄に儉約を用ひらるゝによる、もしは身上のもつれにてもあらんやと、心もとなくいかなる事ぞと問しかば、師が好む所なりといへり、學者の上にて約を守るは、常の事なり、しかるを、人にかはりあはたゞしく行ふゆへ爭ひおこる、予が思ふは世間と一同にするが善かるべし、既に聖人は、民の心を以て心とし、民の好む所をこのみ、民の惡む所をにくみ、民と心を一にしたまふゆへ、民の父母共いふ、今民のこのむ所は、衣裳に美をつくし、純子縮緬綾錦鹿子縫箔類、着かざることをよろこべり、其外普請等をきれいに作り、諸道具には蒔繪銀梨子地を用ひたり、又喰物は、常々魚類鳥類おほくつかひ、振舞等には、珍味珍物を取りあつめ、賑にくらすことをよろこぶ、尤これらを法にかなふと言にはあらず、然れども如ㇾ斯なり來りし世上なれば、急々にあらたむることあたはず、

聖人の民ををさめ玉ふは、親の子を養育る如く漸々を以て治め玉ふべし、一軒の家にていはゞ、妻子より小者に至るまで吾が民也、其民を次第にやすく治るが主人の職分なり、先人間の樂は、衣食住の三ツなり、衣類等を拵るは、着てたのしむが爲めなり、しかるに自身着ざるのみならず、妻子小者に至るまで、おさへとゞめて着せざるよし、女童の身にしては、さぞ迷惑におもふべし、是不便の事にあらずや、又振舞もこれまでは、一汁三菜、二汁五菜の料理にて、客もてなししたるをば、儉約をいひたて、一汁一菜か、二菜の料理ですますとあり、客人も是までとはきれかはりたる不馳走なれば、興なくてにが／＼しく思ふべし、妻子家内の者どもは、不興なる體を見て心をいため、さぞ氣の毒に思ふべし、門弟中、人にそむき、俄に儉約をなすゆへ、したしむべき親類、又家内のものまで爭ひに至るはかなしきにあらずや、是皆欲心よりなす所なり、前に言ごとく、儉約はつねのごとく心得るが學者にあらずや

答へて曰、汝の言ごとく、儉約は學者においてつねのことなり、某嘗て著す都鄙問答、或人主人行狀の是非を問ふの段に云置しは、始終儉約を行ふ事なれど、これと題號なき故、門弟も心付なかりしに、儉約が常なる事を得心し、此度改め行へり、それゆへ家内のものも珍しき事と思へるなり、向後身分相應を知れば儉約がつねとなるなり、又汝人間のたのしみは、衣食住の三ツといへり、尤衣食住の三ツを樂めども今日のごとくおごりたかぶるを以て樂みとするにあらず、此三ツ人の身にやむ事を得ずして

いとなむことなり、只不レ飢さむからずして心やすらかに過すを樂みとす、周禮に曰、室は高さにあらざれども、漏ざれば便よし、衣服は綾羅にあらざれども、和暖なれば便よし、飲食は珍しき饈にあらざれども、一度飽ば便よしといふ、又論語にも、君子は食飽ことを求むることなく、居安からんことを求むることなしとのたまへり、此味を知るべし、扨妻子や家内の者にあらそひ、思ふやうにさせざるを不便の事なりといふ、これ大にあやまてり、汝いふごとく、家内の者は我民なり、我民ゆへ眞實に愛するなり、愛する故に爭ふことを喩ていはゞ、吾子に灸する如し、逃まはるをだましとらへて灸すれば、跳つはねつ反かへりあゝあつや、最早惡事しますまい、父樣母樣堪忍して下さりませと泣さけぶ、親は涙を流し歯をくいしばつても灸するなり、是もあらそひに似たれども、其子の病を治め無事に養育んが爲なり、妻子兄弟に押へ留めてさせざるも又如レ斯、國天下も不レ治時はあらそひなくんば有べからず、既に殷の紂王不仁を以て萬民を苦しめ天下を亂す、周の武王これをなげき天下を治めん爲に、仁德を以てあらそひ玉ふ、あらそふは仁と不仁の二ツなれど、遂には不仁を誅し玉ふ、こゝにおゐて天下一統仁に歸す、今世間の奢り者を見るに、自美服を着るのみか、召つれる女まで、紗綾綸子に縫薄して着するなり、田舍者は是を見て御所方か武家方か侍のつかぬは不審なりとうたがへり、賤き町家の者としてかやう成奢りをなし、道理にそむく罪人となる、女や子共は智の昧きものなれば、結構成ものさへ着れば、善ことゝおもひ、見るを見まねに我しらずして奢に長じ、貴賤尊卑の禮をみだる、

是を止ん其爲に、止事を得ず爭也、凡て世の有樣を見來るに、町家程衰へ安きものはなし、其根源を尋れば愚痴と云病也、其愚痴が忽變じて奢となる、愚痴と奢と二なれど分難き事を語るべし、或富家の町人姑嫁を同道にて參宮す、上下三十人計有とかや、小畑の宿にて休み、支配手代は先達て大夫殿へ案內す、彼思に、恐らく此大夫にて金持の一旦那は我親方にて有べしと、慢心顏にて居たりしが、大夫殿出られければ、彼手代の云、此度後室奧方兩人共に參宮致候、萬事宜く御世話賴存ると、子細らしく口上述ければ、大夫の曰、其許は當地不案內と見ゆ、京大坂には町家にても、姑や嫁を後室の奧のと稱へられ候や、左樣成上を犯し奢がましき事は、皇太神宮の邊にては大なる非禮也、神は非禮を受玉はず、此度參宮せらるゝも、神の惠を受ん爲なるに、遙々參宮せられても、神慮に叶はぬは笑止成事也、大切成旦那の事故如斯云也、忝くも茅ぶきの宮作り、三杵米の御供物を受させ給ふ、其神慮にかなふ禮法を以て參宮案內致すべし、かやうの事をしらずして今の世には奢りに長じ、分をしらず仕合よく、十軒口か廿軒口の家を持、三十人か五十人も蓄せば大きな事と思ふより、嫁を御新造の奧のと稱へさす、都て農工商は下賤也、其賤者として歷々の武家方と同じやうに思はるることそ愚なれ、その奢たかぶり上を犯す心にて參宮せば、神罰を受らるべし、是まで知らざるは是非なし、向後は急度愼まるべきことなり、又旦那名よせ帳をみれば、三四十年以前迄京大坂にて、大金持といはれたるかくれなき町人も、往方しれぬ者もあり、又身上衰へ自炊して蓄すもあり、十軒に七八軒は如斯、其時

に奥あしらい誰にしてもらはんや、遠慮なきときは必ず近きうれひありとはかやうの類なるべし、夫を笑止に思はれて物語するぞかし、凡て貴は貴く賤は賤く、町家ならば町家相應の名を呼るべし、相應の名を呼が則正直なるゆへ、皇太神宮もうけさせ玉ふ所なりと、竹わるやうにいはれければ、文官至極の手代なれど、御師の辯に恥入て、ほこる勢ひ失はてゝこれぞ實に實勅ならんと感心せりと聞ゑけり、其手代忽に善に化せられ、愚は變じて智にかへり、奢りは變じて儉と成、有がたき御師の徳ならずや、身は正直の神明に捧げ、旦那には心を盡す所より、露塵も諂ひ曲る欲心なく、懇切たる誓は大丈夫とも云つべし、總て物に相應あり、長刀をふらせ黒絲の乘物にて、内玄關より出入ある歴々ならば、御新造の奥のともいふべし、夫より以下には似合ぬことなり、況下賤の者に於てをや、古へも名の奢りにて聖人に罪を受し者あり、楚國の子西これなり、子西は政を紊す賢大夫なり、楚は一國の君なれば昭侯と稱すべきを、王號を借し昭王と稱へさす、是を以他によき事あれど、孔子彼をや彼をやと子西が事は論ずるに不ㇾ足とのたまふ、世上に名に奢り有ことをしらざるもの多し、都て分に過るは皆奢り也、何ほど奢りかざるとも農人は農人、町人は町人にて等の踰らるゝものにあらず、夫をしらざるは愚痴なり、鸚鵡能言ども飛鳥を離れず、猩々能言ども禽獸をはなれず、可ㇾ恐可ㇾ愼

或人又曰、今の世の人聖賢には比べ難し、然ども汝が口より禽獸と同く賤むるは、いかなる事ぞや

答、我不肖の身にて儒を業とす、心あらん人には賤めらるゝ事多かるべしと、常々恥恐るゝことなり、

然ども聖賢の道を說く上よりは、自味とて用捨のならざる所なり、蓋人々已に貴きものあり、敎へ導くときはおのづから聖賢の道にも入、禮儀をもわきまふべし、辨へざるときは禽獸に同じ、是を敎へんと思はゞ、先貴賤の分ちと天下泰平の御高恩を知らしむべし、此有がたき事を告んとならば、亂世のかなしき事を說て、治世の安樂成事を知らすべし、亂世のかなしみに比すれば、百分の一にも足まじけれど、ちかく世に知る所なれば、大坂大火の事を語るべし、予先年大和めぐりし、それより大坂へ出しは三月廿一日午の刻ばかりなり、千日寺の茶店に休みしに、堀江邊より出火すといふ、燒出しとは見えながらすさまじき火なり、折節未申の風はげしく、いきほひつよく丑寅へ吹付、黑けぶりの中より爰かしこに火煙みゆ、其勢たとふべきにあらず、此風にてはたまるまじとて、備後町油や何某といふ常宿へ行みれば、うろたゆる體なり、馴染の事なれば見捨がたく、連のうち兩人は跡に殘る、某は荷物を持せ、八軒屋にて待べしといひ別れぬ、八軒やの濱へ往て見れば、もはや西本願寺御堂に火かゝり、大風ゆへ、外のけぶりはさかまく波のごとくなれど、御堂の煙は二三十間ばかりも立のぼり、すさまじき勢也、火におはれ我先にとにげ走るは、蜘の子ちらすごとくにて、老人や子供は、負たり懷たり、手をひいたり、跡を見かへり泣もてにぐるものもあり、分て笑止に見へけるは、廿歲あまりのいやしからぬ女、走りつかれて目をまはし、舟の乘場へつれ行、水をのませて居るもあり、又三十計の女、紫の小袖着て、男のやうに帶刀し、長刀を持、赤足に草鞋にて、足より血をながし、下女は風

呂數づゝみを負ひ中間と見えし者は、葛籠をかたげたれば、助くることもならずと見ゆ、其外難儀そうなるもの數をしらず、七ッ時迄に天滿も一面の火と成、難波橋も燒、天神橋へも火かゝれりと見る所へ、連の者も來れり、二人とも何成とも食ねばゆかれぬといへり、さりながら食と金とつりがへにても、賣人なければ是非なくて、ゆかれ次第往べしと、京橋を渡り片町にて、漸しんこを見あたる、かゝる折とていはずして、二文のしんこは二文に賣、げに天下泰平一統に治る御代の德なれや、そのしんこにたすけられて足輕く、守口の宿につき、一夜を明すも有がたき、その時分には、大坂に親き者もなかりしゆへ、未明に立て歸京せり、後に聞ば西の御堂にては、數十人燒死す、船場の中も爰かしこへ飛火して、一面に火がまはり、燒たてられ逃る者は、風に木葉を散らすがごとし、材寶は取次第、落せし物は捨ひ次第、只命を惜むばかりにて、我先へとにげゆく、京橋は人つどひして夥しき人死あり、其外四方八方へにぐるもの、橋の落たる所は舟にてわたらんとすれど、舟には諸道具を積置たり、そのうへ船頭なければ、渡べき自由もならず、渡らんとすれば流れて死する者もありと、數の知れざる死人なれば、子が死し親は殘り、親が死し子は殘り、夫が死し妻は殘り、妻が死し夫は殘り、主人は死し家來は殘るも有べし、又其中には知音ちかづきなければ貸借もならず、せんかたなく古郷などへ立のき、さぞ難儀なる者も有べし、如斯物語すといへども、我見聞所ばかりなれば、十分の一にもあるまじ、又戰國の昔物語を聞ば押入强盜徘徊し、己が住居も成難く他國へ逃んとすれば、道にて剝取財寶

所持して逃る事もならず、着の儘逃ても所々にて弓鐵砲をかまへ辭をかけ、裸に成てゆけといふ、着のまゝ也免せといへど聞入ず、裸になればよし、否といはゞ打放すと云り、命に代る衣類はなしとて、裸に成て往し者數不ゝ知と聞置り、戰國の時食物や着物が、撰み分けていらるべきや、虱だらけの物ならで着るとは成まじ、其時木綿布子は重い抔と理屈が云てゐられふか、押頂て着るべきぞ、又食物に乏しく多くは疲れゐるべし、其時に麥飯や白粥は嫌なりといふべきや、食ひくるゝ者あらば、神佛の樣に思ふべし、辱くも今の御代、天下一統に養るゝはありがたき事に非ずや、孟子曰、牛羊を野飼する地を牧地といふ、人に頼れ牛や羊を牧ふ者有んに、必ず野飼の地と草とを求ん、其地と草とを求め得れば、牛羊はおのづから養はるゝなり、又民を養ふ君を人牧といふ、今天下治る時なれば、己々が職分さへ勉れば、自養はるゝ牛羊を野飼の地に放ち置ば、おのづから養はるゝがごとし、此味を知らず安樂にくらせば、己が力と思へるは愚なること甚し、暖に着飽まで喰ひ、逸居をして、人の爲を知らざるは、禽獸に近きぞと、孟子も戒玉ふなり、今治る御代の、廣大なる御高恩報じ奉る事を思ふべし、下賤の者いかんして、廣大の御高恩報じ奉るべき、報じ奉る事はならずとも、家内一統和合して、一人のごとく治むるならば、其程の御恩を報じ奉るともいふべきか、世の人これを思はるべし

齊家論上　終

齊家論　下

或人又問、汝儒書の講釋に袴を着せざるも、儉約の含あるゆへ、前方よりゆるし置れしと見えたり、然ども某思ふは、袴は禮服なり、それを許すは禮をすつると云ものなり、禮をすて聖人の道は說れまじ、天下の事、一物として禮にあらざることなし、曲禮に曰、道德仁義、禮にあらざればならず、敎訓て俗を正するも、禮にあらざれば備はらず、爭ひを分ち、訟へを辨ふることも、禮にあらざれば決せず、君臣、上下、父子、兄弟も、禮にあらざれば定まらずと見えたり、其辨へを敎ゆるに、禮を捨て何を敎へられ候や

答、曲禮を引くは面白きことなり、さりながら汝のいへるは表一通りにて、袴さへ着れば、禮は調ふと思はるゝと聞ゆ、我云所は左にあらず、聖人の敎を有難く思ふ、實あつて袴を着るは禮なり、實なくして袴を着るばかりは禮にあらず、子曰、繪の事は素より後にす、子夏曰、禮は後乎、言は禮は必忠信を以質と爲、是を以て見れば、實は本也禮は末也、我許せしは信心有ても、袴着ては、講釋に出がたき人の爲なり、豈儉約にかゝはるべき、隙暇は有ながら、農工商の身として、毎日袴着て徘徊すれば、隣近所の人々がしさいらしく思ふ故、遠慮せねばならぬ也、遠慮のいらぬ方々に、袴無用と

いふべきや、兎角一人なりとも多く聞せたきが我願也、固より人は性善なれば、皆君子の筈なり、然れども聖賢より以下は私欲あり、私欲ある者は常人なり、其中に甚おぼるゝ者は惡人ともなる、此故に教へなくんば有べからず、能教る時は善人と成、又甚おぼるゝ者も、刑罰をのがるゝ常人までには成やすき所なり、是皆性善の徳ならずや、故に孝經小學などを說、其意味を知らせ、心を和らげ上を貴び下をあはれみ、家業の事に怠りなきやうに教へたき志ゆへ、和らげ說候まゝ、老若男女共に望あらば、無緣のかたがたにても聞かるべしと、又書付を出せり、或學者これを見て、儒書が女の耳へ入ものがめづらしき書付かなと譏らしれと告る人あり、其時某答に、古の紫式部、清少納言、赤染衛門などを、其學者は男と思はれ候やといひければ、告し人、我云所に同心しておかしがられき、ケ樣の事をいはるゝも、近世の學問多くは、詩作文章に流れ、聖學の本を失せるゆへなり、論語學而篇に行餘力あるときは文を學べと孔子既にの給へり、文學は末なり、身の行ひは本なり、凡て學問は本末を知るを肝要とす、又國を治るには、用を節にして民を愛すとのたまふ、財寶を用る事儉約にする中に、人を愛するの理備はれり、人を愛せんと欲すとも、財用たらざれば不レ能、しかれば家國を治るには、儉約は本なる事明なり、これまで物語すといへども、汝いまだ不得心と見ゆ、幸今般門弟儉約示し合の書付を認め、其序を予に請れけれど、先何もの存より述られよといへば、如レ斯とて書付見せられけり、趣意は予が心に合ふ、これ約にして見やすかるべし、此序を見て儉約の意味を考へ知るべし

倹約序

伏て惟るに、御代の泰平日出度治事、上は貴く下は賤く、尊卑の位まし／＼、有がたくも孝を鬼神に致め、飲食、衣服、宮室の類は薄くなし、倹を用ひたまひ、恵みを萬邦に垂んと御力を盡し玉ふ、至徳光輝普くあらはれ、すゑが末まで安穏に照らし玉はぬ里もなし、實に徒然艸にも、世を治る道は、倹約を本とすといへり、蓋倹約と云事、世に多く誤り吝き事と心得たる人あり、左にはあらず、倹約は財寶を節く用ひ、我分限に應じ、過不及なく、物の費捨る事をいとひ、時にあたり法にかなふやうに用ゆる事成べし、それ天下安穏に治り、有がたく泰事一をあげていはゞ、財寶は數千里のあなたより、數千里のこなたへ取通し、舟路、陸路、海賊、山賊の患ひも知らず、近くは閭巷の區々まで、我家／＼に安居して、士農工商おのれ／＼が業に心をいるれば、何の不自由なきやうにとの御仁政、上は申も恐れあり、それ／＼所々に司位にまし／＼て、日々夜々に怠らず、是を治めたまはり、又家業の隙ある折々は、月花のたのしみも心にまかせ、且志あれば聖人の道を學び、貧福ともに天命なれば、此身このまゝにて足ることの教をきく、此國恩の大なる事、天地のごとくにして、中々筆にも盡すまじ、下として無道放逸をなし、上を犯し我分限を知らず身をおごり、人のいたみをしらざるは悲き事かな、

さある人は天罰のがるゝ事有まじ、今誠に目覺る心地して、國恩をあふぎ奉り先非を悔ひ、これ教を受る益ならんか、扨此御高恩いかんして報じ奉るべきや、明には知らねども、我身をおさへ、上を犯すことなきやうに愼み、父子、夫婦、親類、緣者、家の小者に至るまで、たがひに睦しく打和らぎ、吝きことなく儉約を守り、一人の小者、又は出入從ふ者をあはれみ助けたき志なり、これまでも一家親み、又人を惠むこと、元來きらふにはあらねども、第一自身のおごりつよく、費おほきゆへ、人を惠む仁愛の心も外に成行ぬ、親き親類の疎に成もかの奢ゆへ、一家の出會も物每造作に、料理などもおもくなり、度々の出會もなく遠々敷成ぬ、これを以てみれば、奢は不仁の本となる、恐れつゝしむべし、今より後常の出會は、茶漬飯したし物などにて、木綿衣類なればをのづから心やすく度々出會、親き上にもしたしくなり、且親類は言に及ばず、宿持手代出入の人々迄、若身上不如意なる者あらば、其譯を聞屆、不實ならざることならば、何分力を合せ救ふべし、又家內を惠むにも、先木綿衣類なればあたらしく仕かへるにも心やすく、古き物は仕着の外に見合てつかはし、仕着の新しき物は貯をかすやうに仕なし、又半季一季の者は、纔の給銀を取、布子一重を拵ゆれば、殘りずくなになり、鼻紙代も不自由にて、甚不便の事也、たとへ盆正月に、百二百の錢、又履抔つかはしても、これらにて足るべしとも思はれず、尤家により奉公人により、高下次第も有べけれど、すべて是に准ずべし、夫故たまかにつとむる者には、折々の心付致べき事也、扨又世間に人をつかふに定りの仕着や給銀さへ渡しぬ

れば、事すむやうにおもひ、其外に心を付る人まれなり、奉公に出る人、親もと不自由ならざる人もあれど、多くは親里まづしきゆへ奉公にも出す、親もと豊なれば、乳母をも添養ひ育る事なり、然れども貧きゆへ親の手をはなし、遙々奉公に出すものなれば、さぞかなしく不便に思ふべけれど、是は助たきとていかんかすべき、又たすくれば、助らるゝ事はたすけたき事也、惣而田舎出奉公人は、布子一かたびら一重あれば、事足りぬと思へり、然れども半季か一季過れば、傍輩の衣類多く有を見て羨敷おもひ、不自由成親本へいひやれば、親は聞より不便に思ひ、借金して成とも、一ッづゝもこしらへのぼせ、最早能かと思へば、又たらぬものをいひやれば、拵る事は成がたく、のぼさねば子供が不便なり、いかゞして成とものぼしたく思ひ、なやみ煩ふ者多くいたましき事なり、かやうの類は心を付助くればなる事なり、夫故貧しき親兄弟に、其苦労をさせざるやうにいたしたき志なり、元來今般の儉約は、上を恐れ己が賤きことを知り、約を守り、萬分の一なりとも禮儀を守らば、おのづから親類はいよ／＼睦く、家内の者には親兄弟の勞をのがれさせ、出入の人々には惠みの端とも成、子としては先祖父母への孝となり、おのづから上を恐る、恭順の道ともならんか

或人曰、門人方儉約の序文をみれば、町家相應にては面白し、しかれども町家ばかりの儉約にて大道の用にたゝず、同くは世間一同に用るやうに敎へらるゝがよかるべしと思へり、汝の門人には武士方もありと聞り、此等の敎はいかん

答、汝は町家のことは瑣細にて、大道に用られずと云、某思ふは左にあらず、上より下に至り職分は異なれども、理は一なり、儉約の事を得心し行ふときは、家とゝのひ國治り天下平なり、これ大道にあらずや、儉約をいふは畢竟身を修め、家をとゝのへん爲也、大學に所謂天子より以て庶人に至るまで、壹に是皆身を脩るを以て本とすと、身を脩るに何んぞ士農工商のかはりあらん、身を修る主となるは如何、これ心なり、此身の微なるを喩ていはゞ、大倉に稊米一粒あるがごとし、しかれども天地人の三才となるは唯心のみ、古今たれか此心なからん、然ども是を知る者まれなり、知といへども其通を行ふ者甚かたし、惟君子は誠を存し、克思ひ克敬し、天君泰然にして百體令に從ふ、不學者は見聞所の欲にひかれ、固有せし仁心を見失ひ、これを求る事をしらず、知らざればこと〳〵く不仁となる、不仁となるものを放心といふ、尤色心は愛より來るといへども、過れば忽不仁となる、まづ放心の一二を擧ていはゞ、名聞と利欲と色欲なり、衆人はたとひ少々の善事をなせども、己を他より譽られたく思ふ心よりする善事なれば、實の善事にあらず、其外身上の事、氏系圖の事、或は藝能智惠に至るまで、己相應より宜しく思はれたき心有は、皆名聞也、又利欲といふは、道なくして金銀財寶をふやす事を好むより、心が闇く成て、金銀有がうへにも溜たく思ひ、種々の謀をなし、世の苦みをかへりみず、剰親子兄弟親類まで不和に成、たがひに恨みをふくむに至る、又色欲といふは、若き時は前後のわきまへもなく、しなかたちにのみめで、爰かと思へばかしこにわたり、流れ女にさへ心を見

すかさるれど夫をもしらず、親のゆるさぬ金銀をつかふ、又老たる人も夫婦諸とも道にも入べき時、腰本や下女に手をかけ、又はわかき女を抱へ寵愛し、親むべき女房には疎く成、頭には白髪をいたゞく事をしらず、榮耀榮華のおごりのために、こゝろを惱ますことはなはだし、其外萬事不義無道をなし、心を煩はすは皆放心を以なり、此味を知らず、仁に心を盡さざるはかなしき事かな、聖賢これを歎き給ひ、學問の道他なし、その放心を求むるのみと、孟子も既に說たまへり、予教ゆる所もこれによれり、孟子冊示す所、至て重きことなれば、容易ことにあらず、しかれども、執行の功により放心を求め得ることあり、求むるときは、心の一致なることを知る、故に士農工商おの〳〵職分異なれども、一理を會得するゆへ、士の道をいへば農工商に通ひ、農工商の道をいへば士に通ふ、なんぞ四民の儉約を別々に說べきや、儉約をいふは他の儀にあらず、生れながらの正直にかへし度爲なり、天より生民を降すなれば、萬民はこと〳〵く天の子なり、故に人は一箇の小天地なり、小天地ゆへ本私欲なきものなり、このゆへに我物は我物、人の物は人の物、貸たる物はうけとり、借たる物は返し、毛すぢほども、私なくありべかゝりにするは正直なる所也、此正直行はるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし、我願ふ所は人々こゝに至らしめんためなり、分て士は政のたすけをなし、農工商の頭なれば、清潔にして、正直なるべし、もし私欲あらば、其の所は常闇なり、又、農工商も、家の主は家内の頭なり、もし私欲あらば、家内が常闇となる、すべて物の頭となるものは可ゝ愼ことなり、然

るに欲心に蔽れ、此正直を行はずして、あさましき交りになり行は、かなしき事なり、故に十五年以來、其私欲を離るゝ事を說來れり、私欲ほど世に害をなすものはあらじ、此味を知らずしてなす儉約は、皆吝に至り害をなすこと甚し、我いふ所は正直よりなす儉約なれば、人を助るに至る、子曰、人の生るは直也、罔て生るは幸にして免たりとのたまへり、これを以てみれば不直にして生るといへども死人に同じ、可〻恐事なり、それにつき去春或人關東洪水の事によつて問れし事あり、予返答せし趣物語すべし

或人の問に曰く、何も方は際の拂も例年の通首尾よく仕舞、正月を祝はる、某も人に遇ば先もつて御慶といへば、先方よりも御無事に重年目出度といふ、しかれども我心苦しければ一切目出度なし、所以は、去年關東の洪水に我藏のごとくに思ひし、三軒の得意は家財より田畠まで流され、身がらほう〳〵命を助かられしばかりなり、依て當分の見舞に、金三十兩あまりつかはしければ、やう〳〵と飢は助かりゐらるゝ也、然ども賣場もこと〴〵く流れたれば、中々商ひの段にてはなく、これまでの賣掛を取あつめのぼさるゝは、今年共來年とも其限りはしりがたし、此仕合ゆへに際拂もならず、借金を濟さんとすれば、家財まで賣拂ひ赤裸に成なれば、是も又成がたき事也、日頃汝の物語を聞に、難儀の所にて心を惱さぬが學問のちからなりといへり、かゝる時いかんして心をなやまさず、御慶目出度祝はるべきや

答、某いふ通りそむかず用ひらるゝならば、いと心やすき事也、望の通り萬々歳を祝ふべし、祝ふといふは他の儀にあらず、正直を守ることなり、正直を守らんと思はゞ、先づ名聞利欲を離るべし、然れども柔弱にてはなれがたく、名利のこゝろは發るべし、發るとも一生行はざれば、扨も正直者なりと天下の人よろこぶべし、天下の人に悦ばるゝほど目度ことはあるまじと思へり、いかん

或人いはく、正直者といはるゝは、誰ものぞむところなり、しかれども、借り方を濟ます事はいかゞすべき

答、汝世間の者によろこばるゝは、誰も望む所といふ、喜ばるゝが望みならば、家財殘らず賣拂ひ赤裸になり、借金を濟さるべし、こと〲く濟されなば、今の世にたぐひ稀なる正直ものと世擧てよろこぶべし、其正直と父神の正直と、正直に二品あるべきや、其正直が通るならば、汝も直に大神宮の末社同前也、既に比咩大明神の御託宣に、「天にならひ地にうけたりし人心まがらざりせばすなはちの神」とあり、此意味を得心せば、身上有切賣拂、借金皆濟せらるべし、其とき負せ方の心を推ていはゞ、誰もかくさつぱりと裸には成がたきことなるに、扨正直成仕かた哉と、汝が心を感ずべし、たとへていはゞ人の生れし時は裸なり、しかれども裸で凍えし赤子もなし、無智無欲成ものなれど、先産着とて着せるなり、親が着するのみならず、親類まで持寄り着せるなり、人の心は自然に慈悲正直成所あれば、汝の裸になられし其日より感心せし負方が、寄集りて着すべし、左はいへど何程の財寶か集る

べしとは知りがたし、正直よりあつまる財寶なれば、神に捧る散錢のごとし、しかるに世間に此背まるゝ事を嫌ひ、私欲をもつて邪知者を頼み相談せば、何程の借金有とも二三歩通よりあつかひかけ、辯舌を以ていひまはさば、四五歩どほりにては濟べし、少成ともおほく殘すを手がらとし、其殘金銀を我物と思ひ人をだます事を所作とするは、俗にいふ餂盜人といふ者なり、謀計は眼前の利潤たりといへども、必神明の罸と當る、正直は一旦の依怙にあらずといへども、終に日月の憐を蒙るとは、皇太神宮の寶勅なり、神の罪人とならば居所はあるまじ、廣き世界に住得ずして、狹き住居するはかなしき事なり、ひろき世界に住得ずして、せばき住居するといふは、土地のことにてはなし、廣大なる心を微塵のごとくなしてくるしむことを云、又正直を行ひ、心に恥ることなければ、限りなき天下の廣居に居て、深長なる樂みあることなり、我教る所は其餂盜人の難を遁れさせ、正直者といはせ、鏡のごとき神明の御心にかなふやうにならるゝは、日出度祝ひにあらずやと云

或人又曰、汝いふ所の儉約は正直が本なる事をいひ、且常にも正直を第一に教へらるゝにつき、或人へ答られし物語一通り聞へたり、汝所存の通赤裸と成ても、正直を用ゆる志に候や、しかれば論語に葉公孔子に謂て曰、吾黨に躬を直する者あり、其父羊を攘む、然るを子これを證すとあり、父が惡事にても隱さずあらはすは、ありべかゝりの正直なり、又前にひかるゝ御神託に「天にならひ地にうけたりし人心まがらざりせはすなはちの神」とあり、天地は見えし通り明かになして隱す所なし、汝がいふ所

もかくす事なく、ありべかゝりの正直なれば、御神詫に同うして眞直也、然れば汝がいふ所は、神道の上の事なるべし、某思ふはたにあらず、惣て世間の事、汝がいふごとくさつぱりと裸には成がたき所あり、故に孔子も葉公にこたへて日、吾黨の直き者はこれに異なり、父は子の爲に隱し、子は父の爲に隱す、直き事其中にありとのたまへり、汝も我も同じく儒者を學びかやうに相違あるはいかん

答、此御歌は、人々天地に受たる心を直に用るときは、卽神なることをしらせ玉ふ所なり、汝は父が惡事を證す、惡人を反て正直者と思ひ、御神詫と同じやうに見なすは、理に闇きゆへ是非わかれず、彼が不善を知らんと思はゞ實情を知るべし、實情の發る處をいはゞ、こゝに人あらんにその父人を殺さば、はつと驚くは子の常なり、又父が羊を攘みしと聞ときも、はつと驚く情發るは、鏡に物の移り、形に影のそふがごとく、間に髮を入ず、此所にて豈直不直を論ぜんや、これ惻隱の情にて實情なり、常人は勝手にひかれ思慮おほく、其意に思ふは、此事人が知るべきか、定て知るべし、隱し課ることはなるまじ、迚も隱されぬことならば、人にいはれぬ前に、我よりいふが罪もかろくて然るべしと思ひ、父の惡事をあらはすは、己を思ふ所より父を捨るに至る、不孝ものにて大惡人なり、汝博學なれども理に闇き故、思慮と實情分難く、固より論語が解ぬ所より、神道儒道に高下を見なすは笑止なることなり、既に孟子に云、上世嘗て其親を葬らざることあり、其親死する時擧てこれを壑に委つ、他の日これを過る時、狐狸これを喰ひ、蠅蚋姑これを喰ふ、子が顙より泚流れ、睨に見て不レ視、それ泚する

こと人の爲に泚するにあらず、中心より面目に達すと、是卽惻隱の心なり、予は此惻隱の心發る所を直に行ふを正直といふ、舜の大聖人といへども、瞽瞍人を殺さば、善惡をえらまず負てのがれて隱れ玉ふべしと、孟子ものたまふ所也、聖賢の說たまふ惻隱の情は、直に眞心なり、思ふて得にあらず、勉て中るにあらず、天理の自然なり、程子の所謂、聖人の心は明鏡止水のごとく、四方八方を照し給ふ、又神道にては八咫鏡と申奉るは、直に天照太神宮の御心にて、天が下あらんかぎりを照させたまふ、神聖の御心如ㇾ斯、一塵もとゞめぬ御心にて、乾坤を貫きたまふ、これ明なりといはんや、直なりといはんや、又正きといはんや、年月を重ね默して識べき所なり、予云、儉約は只衣服財器の事のみにあらず、總て私曲なく、心を正すやうに致たき志なり、退て工夫有べし、尤言所は質朴にして野鄙ならん、しかれども文質相かぬることは大賢以上のことにて、天に楷て升るがごとし、いふも中々に愚なり

齊家論下　終

上言

上言序

古ヘ聖王ノ天下ヲ治メ玉フ、偏ク見テ遠ク聞コト能ハズ、淑人君子ヲ求テ其治ヲ任ズ、然レドモ猶不足トシ玉ヒ、謗木ヲ作テ愆失ヲ書シメ、諫鼓ヲ建テ下情ヲ通ズ、故ニ朝ニ佞邪ノ路ナク、野ニ遺逸ノ賢良ナク、海內歡歸シテ文王以寧ト也、方今國家文明庠序ノ教ヲ修メ、萬民ヲ化育シ玉ヒテ、勤約ノ風御上下ニ行ハレ、濟々タル多士輔弼シテ三代ノ治ニ等シク、御仁澤ヲ仰ギ奉ル、然レドモ君上ハ猶不㆑足トシ玉ヒ、善言ヲ洩シ　御視聽ノ窒滯有セラレン事ヲ憂ヒ玉ヒテ、農賈ノ賤キマデモ、御政治ニ益アル存慮アラバ、奏達仕ルベキ由シノ命下リヌト聞ヘシカバ、大智ナルハ其大ナルヲ奉リ、小智ナルハ其小キナルヲ貢ス、此ニ於テ諫鼓苦ムシテ鳥不㆑驚ノ御政治、誰カ仰歡シ奉ラザラン、賤民農桑ヲ業トシ、賤劣愚昧ニシテ經傳ノ一班ヲ窺ヒ見ズト雖ドモ、御教化ニ浴シテ粗倫常ノ尊ブベキヲ承リヌ、退テ民家ノ情狀ヲ察シ候ニ、郡司ヨリ以下村邑ノ諸小吏ニ至ルマデ、治道ニ不案內ナルハマヽ御教化ニ背戾シテ、下民ノ痛苦ニ至ル事モ少カラズ候、由テ竊ニ其由ヲ惟ンミルニ、堂上ニハ曲サニ下民ノ情態ヲ、聞セ上ル者モ有㆑之マジク候得バ、其狀ヲ知シ召ス事稀ニシテ、下情ハ不㆓上達㆒、上意ハ不㆓下通㆒、天地ト懸隔仕ルユヘ、御仁澤下民ニ□兼候事カニ奉㆑存候、依㆑之其位ニ在ザルノ罪ヲ恐レ候得ドモ、近

隣ニテ聞見仕ル所ニ、二十餘條ヲ陳序シ、間々拙存ヲ加ヘ、謹テ執政ノ閣下ニ奉ル、大凡ソ上言拆ト申候ラハヾ、御國ノ達益カ指タル通弊ナドヲ上言仕ルベキニ、一村懸僅カナル管見淺々シタ、殊更上朝廷ノ御事ニ及シ候儀ハ、戰慄止事ナク候得ドモ、國家萬世益富强ノ基ヒカトㇳ心附候事ハ、乍ニ恐惧至極ニ上言奉リ候、全ク御政事ヲ誹謗仕ル筋ニハ無ニ御座ニ候、昔鄭ノ鄉校ニテ執政ヲ非論セシ者候得シニ、子產是ヲ聞テ其善キ所ノ者ハ吾コレヲ行ハン、其否ラザル所ノ者ハ吾コレヲ改ン、是吾師也ト云ケルヲ、孔子聞召テ仁者ヲ以テ子產ヲ褒稱シ玉ヒシト也、サレバ當今モ賤者ノ上言許容マシマス由シ、君命アリト承リ候得バ、陋言ノフツ束ナルモ必シモ上言仕ルマジキニ非ズ、況ヤ一言ナリ共他人ハ勿論ニテ友善ノ類ニ非ズ候、唯芻蕘ニモ取、雉兎ニモ取ト見得候ヘバ、數百千言ノ冗長ナル內、御政治ノ寸益ニモ相成候時ハ、賤祖ヨリ御國ノ土地ニ生育シ、御國ノ布粟ニ衣食シ、農桑ノ中數口ノ家、凍餒ノ難ヲ免ルヽノ御恩澤ヲ報ジ奉ル萬分ノ一ニモ當ラン事ヲ庶幾ヒ候也、唯々恐惧仕ルハ僭上非禮ヲ罪シ玉ハン事ノミニテ候、冀クバ至愚ノ寸悃ヲ察シ玉ヒ、賤老昏昧ノ所爲ヲ尤メ玉ハズバ、生前ノ大幸不レ過レ之奉レ存候、誠惶誠恐稽首頓首

寶曆四年正月

賤民　齋戒沐浴謹書

凡例

一　大凡御郡方ヨリ指上候上言ハ、當時ノ御利潤ヲ上達仕ル由ニ候所、此上言コレニ異リ候、然レドモ其本根ヲ培フトキハ、枝葉自カラ茂盛仕ル理ニ奉レ存候ユヘ、見在ノ御利益ニ拘ラズ、本ヲ治ル事ヲ主ニ申上ル事ニテ候

一　上言中諸官吏平交ノ言書記シ候、諸君子モシ愚悃ヲ憐ミ玉ハヾ、不圖御耳ニ相達サレン事モ測リ難ク候ユヘ、假リニ君前臣名ノ義ニ比シ候、僣上不法ト罪シ玉ハルマジク候

一　上言中標頭闕字可レ仕所多ク御座候、其外俗語通用ノ可レ有ニ御座一候、無ニ御座一候、可レ被レ爲レ成、可レ被レ遊ノ類、多クハ省略仕候、品ハ讀切ニ無レ之所モ文面モ頻ニ斷ヘ、且字數ヲ隔候得バ不文體ノ意、マスマス廻リ遠クナリ候故省キ申候、不敬ト罪シ玉ハルマジク候

一　此上疏八箇年前指上候稿本御座候處、委曲別口上書ニ申上候通リニテ、其頃恐懼ノ餘リ不レ殘燒ステ候ユヘ、今更見合可レ申樣無ニ御座一候、尤年數相隔リ候事ニテ、只今ニ至リ其節有レ之事モ當時相ヤミ、前年微カニシテ當時盛ナル事抔有レ之、時勢異リ候ユヘ今ニ合ザル事ト、當時承ハラザル儀ナド一向相省キ、其外四五條近來ノ事共書加ヘ、都テ二十二條ニ仕候、依レ之箇條ノ前後條數モ、前本ト頗ル可ニ相異一候、殊ニ前本ハ經語格言等多ク引用ヒ、文面甚以カヽ苦シク下情トクト通ジ兼候樣ニ奉レ存候間、左

樣ノ事相省キ、民情揣意之通ジ候ヲ專ニ仕候

一　上言中御上ヲ度リ奉ルニ相準候事處々有レ之候、元來表立チ指上ル儀ニ御座候得バ、皆御尊上ニテ申上ル事ニ候得共、暗ニ上奉リ候ユヘ申上ル品々ノ内、若シ御取上ゲ爲玉フ事有レ之候トモ、御不審御答可ニ申上一樣無レ之候ユヘ、此事ヲ不レ得ニ拙存一不レ殘申上候、全ク御上ヲ度リ奉ル筈ハ無ニ御座一候、尤堂上ノ御事ハ賤民不レ知處ニシテ、一向不案內ニ御坐候ユヘ、定メテ不取合ノ事ドモ有レ之候ハント奉レ存候、其外指積リ候儀モ大方不都合ノ事ドモ可レ有レ之ニ御座一候得ドモ、獨思仕ルナレバ外ニ料見可レ仕樣無レ之候、此儀御宥免爲玉ハルベク候

一　上言中ノ書記シ候眞字ノ傍ニ、間々假名ヲツケヌハ、土ノ返リ等書付候儀ハ、民間通用ノ俗語等、堂上ノ知シ召ザル事抔有レ之、又ハ草字ニ書來リ候テ、眞字ニ書候テ讀苦キ事モ有レ之、或ハ一二古語等ヘハ假名ヲ書付申候、尤モ御役ハ御召ナド申如ク、凡テ御ノ字有レ之處ト御字無レ之處ト、或ハ闕字等ノ例モ甚不同御座候、其外眞字假名字不同仕ルモ、文面ニ隨ヒ讀ツヾケ不レ宜候ヲバ、皆相改メ候ニテ不同仕候、何トゾ下情トクト申上度書記シ申候

一　賤民元ヨリ固陋ニテ、假名ヅカヒ等モ相心得不レ申、其上老眼不慥ニ御座候ユヘ、恭敬仕リ候得バ益相誤マリ申候、尤間々古語等引用候モ、老耄仕リハキト覺ヘ居不レ申候ユヘ、文字相違ノ儀モ有レ之候ハント奉レ存候、左樣ノ不都合見苦シキ儀ハ、御宥免爲玉ハルベク候

一 此上言賤民奉ルナレバ、肝煎大肝煎ヨリ段々階級ヲ傳ヘテ上達仕ルベキ處、曲サニ村官ノ情態ヲ書記シ候ユヘ、此事ヲ不レ得直ニ晤上奉リ候、委曲ハ副口上書ニ申上候

一 上言中賤民里名相記シ不レ申ハ、條中堂上朝廷ノ儀ニ及ビ候ユヘ、若御尤メノ罪ヲ得候トキハ、遠クハ賤者上言ノ路ヲ塞ギ、近クハ妻子ニ其憂ヲ貽サン事ヲ惧レ候得バ也、覽見ノ諸君子怪ミヲ爲シ玉フ事ナカレ

上言目次

以上二十二條

上言

總論

一　恭シク惟ンミルニ國家ヲ治ルハ、大ナル事業ニ御坐候、故ニ天下ヲ治ルニハ、天下ノ賢才ヲ擇ンデ任レ之、一國ヲ治ルニハ國中ノ賢才ヲ擇ンデ任レ之候、然レドモ生レナガラ才德具ル人ハ、聖人ノ外無レ之候ヘバ、皆學ンデ其才德ヲ明ニ仕ル事ノ由ニテ候、サレバ孔門ニテ子路始テ孔子ニ見ヘ候トキ、南山ニ竹アリ揉ザレドモ生レナガラニシテ直シ、斬レ之矢トナスニ犀革ノ堅キヲモヨク貫スク、

以レ之ミレバ生レ付才智アル者ハ、學問スルニ及バヌ事也ト云レケルニ、孔子括(ハツ)シテコレニ羽ツケ鏃リシテコレヲ礪ガバ、其入事イヨ〳〵深カラントノ玉ヒケレバ、子路服レ之學バレシト見得候、凡ソ學問ハ人ノ才徳ヲ砥グモノニ候ヘバ、其才徳アル人ニシテ學問ノレバ、益々明カニ其才徳ナキ人モ學問スレバ企テ及レ之候、左候ヘバ古ヘヨリ學問ノ道ヲ重ンジ候ハ、コレガ爲カニ御坐候、苟クモ民ニ長タル人學問ナキトキハ其徳下ニ及シ難ク、才智アル人モ、其才智開ケ難ク一己ノ智ニ止リ候由、聖人ノ語ニモ好レ仁トモ學ヲ好マザレバ其蔽愚ナリ、好レ勇トモ學ヲ好マザレバ、其蔽ヘ亂ナリト申候テ、兎角學問ニアラザレバ國家ヲ治ルニハ成難キ事ニ相見ヘ候、竊カニ當時ノ諸官吏御代官定役人、上廻リヨリ下モ諸役人ノ所爲ヲ承リ候ニ、勤方宜キト申モ多クハ民ノ痛苦ヲ不レ辨候カニテ、聚斂ノミヲ以忠義ト心得、甚ダ御仁政ニ背キ候事多ク相聞ヘ申候、况ヤ其他ノ俗吏ハ一向御政治ノ大體ヲ存ゼズ、聚斂ノ甚ダシキ苛刻不仁ノ仕方ニテ取リ集メ候テモ、支配頭ノ面見(メミ)ヨクシテ身分官職ニテモ登ン事ヲ思ヒ、或ハ奸曲ノ計ヲ廻ラシ候テ、己レガ利欲ニ爲ン事ヲ思ヒナド仕リ、至ラヌ取所ニテ上風甚ダ衰ヒ候、是畢竟學問仕ラズ、道理ヲモ相心得不レ申ユヘノ事カニ奉レ存候、凡ソ下ノ上ニ於ル草ノ風ニ從フ如キ者ニテ候ヘバ、縱ヒ無理ナル事ニテモイナミ不レ申ハ民ニテ候、モシ兎ヤ角申者御坐候ヘバ、御權威ヲ鼻ニカケ挫キ候ユヘ、何樣ノ無理申シカケ候トモ違背仕ラズ候、苟クモ如此ナル民ニ長タラシムル者、無學ニシテ、心ザマ惡ク御坐候ヘバ甚以不仁非義ノ事ドモ有レ之候、右ノ吏風ニナリ下リ候程ニ一々廉潔

ノ心ナル者モ、御代官以下ハ同役ニ挾マレ候ユヘ、心ナラズ惡事ヲ仕ル事モ有レ之由ナド承候、依レ之謹デ其弊ヘヲ救ヒ玉ハン儀ヲ愚案仕ルニ、唯學問爲シメ禮義廉耻ノ道ヲ知シメ候外、有レ之マジク奉レ存候、左候ニハ先儒道ヲ崇ビ玉ヒ、大ニ學校ヲ興シテ諸士ヲ倡ハセ玉ハゞ、可レ然奉レ存候

一嘗テ一隱士ノ說話承リ候ニ、凡ソ國家ヲ治ルノ重キハ制令也、制令ハ威尊ヲ貴ブ、威尊輕キトキハ民犯シヤスシ、條數多カラザレバ、威尊重ク、條數多キトキハ威尊輕シ、譬ヘバ羅綱ノ如シ、細密ナレバ揚レ之ニ必壞ル、事アリ、綱大ニシテ目疎濶ナレバ、物重シト云トモ能堪ヘリ、サレバ制令ハ國人ノ羅綱也、依レ之條數細密ナラズ、大綱疎目ニシテ民犯レ之トキハ、大ニ制事ニ防害アル事計ヲ令スレバ、制令ノ威尊重ク且所レ守ノ數多カラザルユヘ行ヒヤスシ、若其ノ犯者アラバ其時嚴シク刑罰ヲ加フレバ、民畏テ敢テ犯サヌモノ也、其條數多ク瑣細ノ事マデ禁ズレバ、制令ノ威尊輕クナリテ民狎テ畏ザルモノ也、然ルヲ强テ守ラシメント刑罰ヲ加ルトキハ、守ル所ノ數多ク、手足ノ措キ處モナキヤウニナルユヘ、民心背モノ也、民心背クトキハ其情離ル、然レドモ下ハ上ニ從フモノナレバトテ、愈嚴シク刑罰ヲ加ルトキハ、民心大ニ離レ不祥ノ事モ出ヅルモノ也、故ニ古ヘノ聖人ノ國家ヲ治メ玉フハ、民ノ好ム所ハ好レ之、民ノ惡ム所ハ惡レ之、父母ノ子ヲ思フ如ク、何トゾシテ下民ノ痛苦ナキヤウニト爲玉フ事也、サレドモ民ハ愚昧ナレバ制禁ナキトキハ、惡事ヲナス者ユヘ、制禁ヲ立テ其レヲ防グ、譬バ水ヲ行ルガ如シ、堤ナケレバ四方ニ溢ル、故ニ嚴シク其堤ヲ築キ、必ズ其堤ヲ大ニシテ餘地アラシ

ム、若シ堤小サクシテ餘地ナケレバ、大水ヲ持ツ事アタハズ、若堤頻リニ屈曲サスレバ、水常ニ苦ンデ大水アルトキハ、其防ギ必ズ壞ルヽモノ也ト申ナドモ承リ候、サレバ古言ニモ大國ヲ治ルヲ、小鮮ヲ煮ニ譬ヘ候如ク、熟セルカ否カト頻リニカキマハシ候ヘバ、其肉皆壞レ候、國家ヲ治ルモ其如ク頻リニ制禁ヲ出シ、彼ヲ犯セバ此ヲ禁ジ、此ヲ禁ズレバ彼ヲ犯ナドシテ、兎角不レ靜候ヘバ不レ宜モノヽ由ニテ候、依レ之乍レ恐御政治ニ於テ妨ゲ無レ之儀ハ、御免許爲玉ハリ候ハヾ可レ然奉レ存候

一　古言ニモ將サニ取レ之ト欲セバ固ク與レ之ヨ、又與ルノ爲レ取事ヲ知ルトキハ、政ノ寶也トモ相見ヘ候、依レ之下條ニ申上候事ドモ乍レ恐御舊制ニモ相違ヒ候事モ有レ之候テ、大カタ當前ニハ御物入御損失ノ方ニ相聞ヘ候得ドモ、皆以萬歳御利益ニモ相成候ヤウニト奉レ存候事ドモユヘ、乍二恐懼至極一敢以申上候、モシ御吟味ヲ以テ左ニ申上候事ドモ行ハセラレ候ハヾ、上風モ相直リ信トニ御仁政下民ニ相及シ、萬民尙更難レ有感服可レ仕奉レ存候、委曲後段其條下ニ相記シ候

儒業

一　儒者ノ業ハ先王治二天下國家一道ニシテ、亂ルヽニハ武ヲ以テシ治ルニハ文ヲ以テシ候ヘバ、上人倩執政ヨリ下モ諸官吏ニ至ルマデ、苟モ民ニ長タル者ハ學バズシテ叶ハザル事ニ相見ヘ候、故ニ古ヘ三代ノ隆ンナリシトキハ儒官ト申スモナク、府閣ニ庠序學校ヲ設テ、公卿大夫ヨリ上庶人ニ至ルマデ、

皆以學問修行仕リ、成德ノ者ハ官ニ就シメ候程ニ、在職ノ人皆盡ク君子ニテ候ヘバ、上下各其所ヲ得萬民不レ安事ナク候由シ、ケ樣ノ事ハ皆傳記ニ明白ニ相見得候、サレバ其職トスル所ヲ觀候ニ、大ニシテハ其君ヲ堯舜トシ、其民ヲ堯舜ノ民トシ、小ニシテハ其身ヲ修メ家ヲ齊へ、カヽル尊ブベク重ンズベク君上士大夫ノ師範ニナリ、士風ヲモ可二相直一候、學問ヲ事業ニ仕ル者ニ御坐候處、當今儒官ノ御待遇ヲ承ルニ、乍レ恐甚以卑薄ノヤウニ奉レ存候、當時士風衰ヒ候モ前段ニ申シ上候通リ、學問不レ仕ユヘノ事ニ御座候處、ケ樣ノ御待遇ニテハ何樣ニモ學問盛ンニ行ハレ、士風相直リ可レ申樣無レ之儀ニ奉レ存候、イカニト申候ニ、凡ソ弓鎗武藝ノ選擧或ハ醫師等ノ類、大カタハ大番組ニ列サシメ玉ヒ候由シノ處、彼ノ尊ブベク重ンズベキノ儒官撰擧シ玉フニハ、番外ニ召出サレ年數ニアラザレバ御番入ニ許シ玉ハズ、醫師諸藝人ノ前ニ膝ヲ屈サシメ、其上御俸祿モ僅ナル事ニ候ユヘ、內ニ至テ困窮仕候ユヘハ、其年講說ノ謝禮等ヲ當ニ仕リ、市井懇意ノ者ヨリ無心ノ金錢借用仕リ、衣服財用ニ相辨ジ候處、近年諸士ノ風落下リ候上ヘ、儒業輕侮ヲ得候ユヘカ謝禮等モ甚失禮ノ由ニテ、其暮ニ至リ返辨可レ仕樣無レ之候ヘバ、禮義ヲ常談ニ仕ル儒官モ力ニ不レ及、遲滯失義等モ仕ルカニ御坐候、依レ之上トシテハ官祿ノ階級ヲ以テ卑シマレ、下トシテハ困窮失義ヲ以賤マレ候ユヘ、其者ノ心中モ自然ト落下リ節季正月ノ參會ニハ、其年ノ禮弊ヨリ方等ノ話ニテ、誠ニ商買ノ風ニ齊シク相聞へ申候、左候ヘバ何トシテ其者ノ說キ聞セ候處行ハルベク候ヤ、學問ノ盛ナラザル事勿論ニ御座候、依レ之學問相行ハレ士風改マリ候

ハン儀、謹ンデ愚案仕リ候ニ、先御知行百貫文相附ラレ學校造營ナシ置レ、德行政事文學等ノ亭堂相立ラレ、御家中大番組以下侍分マデノ小進困窮者ノ二男三男、或ハ部屋住等三十以下二十以上ノ者、學問仕リタキ者ニハ望次第入學仕ラセ、學校ニテ衣服小遣下シ賜リ、其得手〳〵ヲ以テ學問稽古仕ラセ、篤實清廉ノ者ニ候ハヾ御郡方役人ニ召使ハレ可ㇾ然奉ㇾ存候、其外大番組以上大進ノ者モ望次第入學日通ヒ、自分料ニテ學問仕度者ハ相許サレ可ㇾ然候、右書生ノ中學問得手ニテ成器ノ者ニ相見ヘ候ハバ、御物入ヲ以テ江戸ヘ相登サレ學問修行仕ラセ、愈學德成就ノ者ニ御坐候ハバ儒官ニ召出サレ、秩祿ハ御格式ノ通リニテモ、位階ハ其身一代詰所以上ニ爲玉ハリ、勤仕中別段ニ儒官料下シ賜ハリ、學校ノ書生教誨仕ルカ、其得手〳〵ヲ以御用方ニ召使ハレ候ハバ可ㇾ然奉ㇾ存候、サテ又右學校大先生ト申スニハ、右ノ儒官中ニ於テ優學有德ノ者ニ仰付ラレ、寺院住職ノ如ク在職中ハ大番頭格ニ仰付ラレ、役料ハ右學校料ノ內ヲ以相應ニ下シ賜ハリ、書生ノ支配仕リ、右儒官參會日夜學問相倡ナヒ切瑳琢磨仕ラセベク候、其者老衰御用立不ㇾ申候ハヾ、本官儒官料ヲ以退役隱居仕リ、又以儒官中ヨリ仰付ラレ候ハヾ、百貫文ノ學校料ニテ大先生役料ノ外、書生百人ヲ相育セラルベク候、サテ又學問ト申ハ書典ヲ誦讀仕ル計リニ御座ナク、其持來リ候面々ノ才德ヲ砥者ニ候ヘバ、樣々其性ノ得手タル所ヲ修メ候事、昔學問ニ御座候、古ヘモ禮樂射御書數ノ六藝ハ、昔學者ノ持前ニ御座候ヘバ、右ノ學校相立ラレ候ハ、弓場馬場モ拵ヒオカレ、讀書講禮ノ餘暇ニハ弓馬刀鎗ノ武術ヲ勸シ、且ハ讀書ノ欝滯ヲ慰サメ、

凡ソ士タル者ノ學ベキ事、皆盡ク其得手ヲ以學バシメ候ハヾ、所謂德行ニハ顏淵閔子騫冉伯牛仲弓、言語ニハ宰我子貢、政事ニハ冉遊季路、文學ニハ子遊子夏ト申如ク、諸士各其德ヲ成可レ申候、サレバ孔子ノ語ニモ文事アル者ハ必武備アリ、武事アル者ハ必文備アリト御座候ヘバ、萬一ノトキニハ武備ヲ以テモ可二御用立一儀ニ候間、學者トテ武術不案內ニテ可レ然儀ニ無レ之候ヘバ、文武トモニ稽古仕ルベキ事ニ奉レ存候、左候ハヾ學校ヨリ出候者ハ、皆文武六藝修行ノ者ニ候トキハ、名目ハ學校ニテ實ハ諸士文武修行稽古所ニテ御座候、依レ之右ニ申上候通リ書生ノ者モ、儒官ノ者モ其得手〳〵ヲ以テ官役ニ召使ハレテ、御城下御用カ御郡方ヘ相下サレ候ハヾ可レ然奉レ存候、其中ニモ左ノミ篤實秀才ト申ニモ無レ之、指テ御用立不レ申候者モ御物入ヲ以テ、十年ノ間學問修行爲サシメラレ候トキハ、朝夕道理ヲモ承リ居可レ申候ヘバ、御恩澤ニ因テ甚シキ惡事ニモ趣キ申マジク奉レ存候、左樣ノ者ハ只今マデノ通リ面々ソレ〳〵ニ片付可レ申候、乍レ然右ノ通リ百貫文ノ御知行ニテハ、書生百人ノ外相育シ兼申ス事ニ奉レ存候、依レ之後條ニ申候措策行ハセラレ候トキハ、御知行ハ僅カニ二十貫文許ニ過ズ候テ、其外書生有合次第御扶持方ノミ下シ賜ハリ候ハヾ、書生三百人相育シ衣服小遣ヒ外、大先生役料儒官役料書生遊學ノ入料、學校諸雜用修理破損マデ皆以相辨可レ申手段御座候、右ノ措策行セラレ候ハヾ御家中困窮ノ志士ハ、大抵相育セラレ候ニ可二相成一奉レ存候、尤右ニ申上候諸士ノ分ハ才不才ニ拘ハラズ、御惠ノ筋ニ御座候ヘバ、望次第入學相許サレ其外諸浪人凡下タリトモ、國器ニモ可二相成一候秀才ニ御座候ハヾ苗

氏刀相許サレ侍分ニ列サシメ、學校書生ニ相入學問切磋仕ラセ候ハヾ、御國ノ秀才空ク朽チ棄リ不レ申、御用ニ相立可レ申候、右ノ通リ行ハセラレ候ハヾ永々學校衰廢不レ仕、諸士ノ風俗モ改リ御郡方ヘ相下サレ候諸官吏モ、皆以學問修德仕候バヾ、不廉苛刻ノ儀無レ之、百姓快ク耕作可レ仕候、右拙作ハ後條長蓄倉ノ所ニ附記仕候

一　御國ノ學風只今マデ行ハレ來リ候所、甚偏屈ノヤウニ奉レ存候、イカニト申候ニ第一書籍博覽ヲ禁ジ候ユヘ、古今ノ治道變態ヲモ心得可レ申樣無レ之、次ニハ文章精錬ヲ仕ラセズ候ユヘ、經傳諸史トモニ疾ト解シ難ク、胸中モ自ヅカラ狹小ニ相成、何樣ニモ學問上達仕ルベキ路ナク候、蓋學問ノ大體ト申スハ先王孔子ノ禮樂ヲ以テ、天下國家ヲ治メ玉フ道ヲ學ブ事ニ御座候處、今聖人ノ世ヲ去ル事二千餘歲ニシテ、其道ヲ書記シ候文章モ古文ト申候テ、今文ノ如クハ解サレザル由ニテ、博ク古典古言ニ通ジ文章古辭ノアツカヒ合點仕リ、其上漢魏ノ古注ヲタヾシ今注ニ引合、諸儒ノ明論トクト相考ヘ熟覽不レ仕候ヘバ、眞ノ古文ヲ解シ先王禮樂ノ趣意ヲ合點仕ル事不レ能事ニ及レ承候、兎角聖人ノ外ハ何人ニテモ一得一失アル者ニ御座候ヘバ、誰ガ說ヲ守リ誰ニ從フト申候ヘハ、モハヤ片ヨリ其弊ヘ出デ候、何レニ讀書ハ本文ノ意ヲ能見明メ候ガ趣意ニテ候、尤注解ト申ハ本文ノ意ノ解シ難キヲ助ケ明ムル者ニ御座候ヘバ、一通ノ書典モヨク善惡相ワカリ候者ハ、何注ナリトモ聖經ヲ解スル者ニ候トキハ、博覽可レ仕事ニ奉レ存候、大抵一見仕候ヘバ忠孝仁義ノ書カ、異端亂民ノ說カ、相知ル事ニ御座候ヘバ、經

史子集ノ內博ク歷覽仕リ、其後己ガ意ヲ以テ此說本文ニ合不合ヲ判斷仕ルベキ儀ニ奉レ存候、サレバ聖賢ノ教ヘニモ師ヲ四方ニ求メ、博ク學ンデ無レ方ト申スハ、衆德一人ニ備ハリ候者無レ之、一師ノ說ヲ守リ候ヘバ胸中甚ダ狹小ニシテ、所レ學上達不レ仕候ユヘ、四方ノ明師ニ交接仕リ其長所計リヲ取集メ、己レガ身ニ大成仕ル事ノ由ニテ候、勿論文章精錬ハ書生ノ持マヘニ御座候テ、書キ習ヒ不レ申候ヘバ必以文章トクト解シ兼候由、譬バ物ヲ隔テ痒ヲカキ羅ノ內ヨリ物ヲ見ガ如クニテ明白ニ知難キ事ニ相見ヘ候、其內詩ハ志ヲ述ル者ニテ、亦詩ヲ不レ學候ヘバ文章合點ニテモ、其餘味蘊奧ノ所ハ中々解セヌ事ニ承候、左候ヘバ詩文章共ニ學問ノ道具ニテ其身ニ所持仕ラズ、借物ニテハ埒明カネ候由ニテ、皆書生ノ學バズシテ不レ叶事ニ相見得候ヘバ、如何ホドモ忌ミ嫌フ事ナク學バシムベキ事ニ奉レ存候、依レ之文學不案內ニ候ヘバ、吾ヨク經傳ヲ解セリト存候モ、不レ解ニハナク候ヘドモ右ニ申上候通リ、羅モノ、中ヨリ物ヲ見候如クニテ、眞面目ヲ視候ニハ無レ之事ニ相聞ヘ申候、左候ヘバ文章精錬仕リ羅ヲ取除キ眞ニ聖賢ノ意ヲ見明ラメ可レ申事ニ奉レ存候、當時京洛ノ學者ノ樣子承リ候ニ、先年ト違ヒ學風衰候ユヘカ、經學念書バカリニテ、性命道德ノ沙汰仕ルモ口ト違ヒ、庸俗ニヒトシク候心底ノ者ノミ多ク、中老ノ年ニ至リ候テモ左ノミ成德モ仕ラズ、人ノ學才ヲ惡ミ己レガ不レ知トコロノ文學風雅ノ者ナド有レ之候ヘバ、大ニ妬氣ヲ生ジ甚以テ似合ザル事仕ルモ有レ之由、皆僻學ノ弊ヘカニテ胸中甚狹小ノユヘト奉レ存候、タヾ學問シタテ候ニハ三十歲前ハ看書博學ノ內、禮義忠孝ノ道ニ涵養ツカマツラセ置キ、サ

テ詩文章ニモ精ク立入、古今ノ時勢ヲ合點仕リ、治民ノ法代々ノ異同ヲ相察シ、其上藝術修行仕リ四十五十ニ至リ客氣漸クウセ、世ニ應ズルコト久シク德積モリ業熟シ、始テ成德ノ沙汰仕ル事カニ相見ヘ候故ニ、古ヘニモ四十ニシテ始テ仕フ、五十ニシテ大夫トナルト有レ之候ヘバ、四十五十ノ前ハ學德未レ成候ユヘ、官職ニモ不レ登候事ト相見ヘ申候、左ナク候テ壯年ノ英氣ヲ折キ候ヘバ、或ハ病ヲ生ジ或ハ秀テヽ不レ實ナド、其德ヲ全フ仕ル事無レ之由ニ候、サレバ聖人ノ生知ニテモ十有五ニシテ志レ學、三十ニシテ立ト御座候ヘバ、三十前ハ道德立玉ハザル者カ、四十ニシテ不レ惑五十ニシテ知ニ天命ニトノ玉ヒ候ヘバ、聖人ニテスラ如レ此ニ候、況ヤ今ノ學者二十三十ニシテ性命ノ沙汰仕ルハ、甚ダ等ヲコヘ近キヲ知ラヌ事カニテ御座候、性命ノ理ノ容易ナラヌ理ト相見ヘ、孔門ノ子貢サヘ性與ニ天道ニ得テ不レ可レ聞ト有レ之候、今ノ學者ノ器ヲ不レ成、國家ノ用ニ所レ益不レ多候ハ、皆學問ノシカケ次第ヲ違候故カニ奉レ存候、譬ヘバウチ出シノ劍ヲ磨ギ候ニ、速ニ其カナ色ヲ見ン事ヲ欲シアラ砥ヲモ經ズ候テ、始メヨリヌリ砥ニ掛候ガ如クニテ候、何程コスリ候トモ段々下タトギノ砥數ヲヘ不レ申候ヘバ、眞ノ刃色眞ノ利ハ出不レ申理ニ御座候、依レ之學問モ次第有レ之、少壯ノトキハアラ砥ニカケ下地ヲ拵ヘ置、其後段々砥數ヲ經テ四十五十ニ至リテ、ヌリ砥ニカケ始メテ德ノ色ヲ修メ研キ候事ノ樣ニ相見ヘ候、朱子ハ道學篤行ノ君子ニテ候ヘドモ、下地博覽セラレ候事ト相見ヘ、漢書ヲ十數度覽見ノ由ニテ候、然レバ漢書ノミ限ラズ諸史トモニ、五度七度ヅヽハ歷覽ノ事カニ御座候、當今ノ學者小學四書近思錄ノ外ハ看セ不レ申、其內

博覽ノ分ニテ五經ニ及ボシ候モ、朱注ノ外ハミル者ニモ不レ仕候、朱子ノ如キ大儒ニテモ諸史マデ博覽セラレ候ナレバ、況ンヤ朱子ニ不レ及者ハ、尚々博ク精ク覽見可レ仕事ニテ御座候、御國ハ東海ニ表タル大邦ニテ、穀帛器財諸物諸藝本邦無双ノ由ニ御座候處、タヾ學者ノミ俊傑ノ者闕タリト、他邦ノ者モ申ス由ニ御座候、畢竟右ニ申上候通リ、壯年ノ英氣ヲ奪ヒ幹氣ヲ折キ候テ、大儒豪傑ノ下地ヲ不レ仕候ユヘ、大量ノ生質ナルモ却テ狹窄ニ相成リ、大器ヲ成就仕ルベキ樣無レ之事奉レ存候

一　書生遊學ノ地、前ハ京都宜ク、經學ノ士モ有レ之由ノ處、當時甚ダ衰微仕リ游戲ノ士ノミニテ、却テ人才ヲ相賊ナヒ候、近年ハ江都學盛ンニ相成リ、大儒豪傑モ多ク甚以宜ク相聞ヘ申候、殊ニ御藩邸ノ左右ニ候ヘバ、遊戲ノ惡行ニモ趣クマジク、勿論御物入モ相減候方カニ奉レ存候

諸士文武修行

一　凡ソ怠リハ百事ノ害ニ御座候由シ、修身ニ怠リ候ヘバ外カ身ノ樣惡ク成下リ、内心樣モ何トナク元氣薄ク、頻ニ過失ナド仕出シ候、齊レ家ニ怠リ候ヘバ家事ノ取オキ衰ヘ、家風落チ下リ屋シキ廻リマデ其樣ニアラハレ、一家ノ元氣失來リ候、治國ニ怠リ候ヘバ、何トナクスキマアラハレ、家中ノ風俗トモニ藝術モ不レ修ムダ人ノミ多ク諸事ノ取サバキマデ卑劣ニナリ下リ、一國ノ元氣薄ク見ヘ申候、治ニ天下ニ怠タリ候ヘバ、一世ノ風俗衰ヘ、億兆ノ民安カラズ、諸侯ノ心一ナラズ、國家ノ元氣薄ク見候者ノ

由ニ承リ候、當時諸士ノ風俗衰候儀謹ンデ其所ㇾ由相考ガヒ候、タヾ學問ニ怠リ候ユヘノ事ニ奉ㇾ存候、サテ學問ト申シ候ハ看書ニ限ラズ、凡ソ國家ヲ治ルノ事武藝軍法ニテモ修行精錬仕ル事、皆學問中ノ事ニ相見ヘ候、諸士ハ大小進トモニ君上ノ御手足ニテ候ヘバ、衆民無爲ノ御風敎ヲナシ玉フトハ可二相異一候、イカニモ其性質得手〱ニ隨ヒ、事業怠リ不ㇾ申樣ニ御手入ナシ置レ候ハヾ、自然ト士風相直リ可ㇾ申カニ奉ㇾ存候、左候ニハ大番組ノ士ハ大番頭宅、其外詰所以上ヨリ番外侍分ニ至ルマデノ、其身ニ當官御用人ノ外ハ平士ノ分無ㇾ殘、面々支配頭宅ニテ一箇年二度ヅヽモ召寄ラレ、一人ゴトニ其長所ヲ承リ、學問ニ得手候トナラバ講釋申付ケ、是非相正シ刀鎗得手候ナラバ、仕合仕ラセ、弓馬得手候ハヾ弓馬ヲコヽロミ、算數筆法何レナリトモ其得手ヲ相試ミ、怠リ候者ニハ申シ含メ、又其次ノ會時ニ相正シ毎年如ㇾ此ニナシ玉ヒ、其長ズル者ハ御奉行處ヘ相達シ、御試ノ上イヨ〱才能ノ者ニ候ハヾ、小進タリトモ選擧良官ニ命ゼラレ、其中含メニテモ怠リ候者ニハ、一年ノ蟄居ニテモ仰付ラレ藝術相ミガヽセ翌年御試ミ、其ニテモ怠リ候カ愚昧ナルハ、夫レ〱ニ黜罰ヲ加ヘ玉ハヾ、其志アル者ハ良官ニ擧ラレン事ヲ思テ益々勵ミ、其怠リ候ハ黜罰ヲ恐テ却テ相勵ミ候ハヾ、數年ニシテ士風大ニ改マリ、何レモ御用ニ相立可ㇾ申候、左候ハヾ怠リ者ハ病氣可二申出一候間、虚實御糺明不都合ニ候ハヾ、後段ニ申上候黜罰仰付ラレ可ㇾ然奉ㇾ存候、尤大番頭以上ノ名士ハ固トヨリ、數百千騎ノ大將ニ相備ヘラレ候カニ御座候ヘバ、武藝軍術ノ心係ケハ不ㇾ及ㇾ申、文武兼備ノ儀勿論ニ奉ㇾ存候、依ㇾ之支配頭仕ル者ハ時

時會合武道貴善ノ切磋仕リ、其上組下ノ士折々手入仕候ハヾ、其面々ノ剛臆智愚得手勝手心得居候コト、家人子弟ノ如クニテ誰々ハ刀鎗ヲ得手、誰々ハ弓馬ヲ得手、誰ハ勇猛、誰ハ智才ト申事明白ニ相知、我支配下ニハ刀鎗ノ者何十人、弓馬ノ者何十人、勇猛智才ノ者何十人ト、掌ヲ指スガ如ク心得居候ハバ、明日ニ使令仕候トモ左右進退嚮ノ應ズル如ク可二相成一候、左候ハヾ支配頭ノ者ハ兼テ習熟ノ精兵ニテ、心ノ如ク指麾ニ從ヒ大勳ヲモ可レ得候、組下ノ士モ面々ノ長所ヲ以テ相勵、將士ノ心一致仕候トキハ、三百人ノ組下ニテモ、熟錬ノ精兵ナルトキハ、敵三千ニモ可二相當一儀ニ奉レ存候、然ル所諸士中當時怠リ多ク相唱候ユヘ、假令バ御家中十萬人有レ之候ハンニ、萬一ノ儀出來仕候トモ、眞ニ可二御用立一人ハ如何ホド可レ有二御座一ヤ、乍レ恐無二御心許一奉レ存候、竊ニ諸士ノ所行承候ニ、藝術御手入無レ之ユヘカ、間暇ニテ日ヲ暮シ兼候ト相ミヘ、志士ノ外ハ宜シキ玩ビノ内ニテ碁將戯サテハ酒宴遊興甚シクシテハ、三四十貫文ノ高祿頂戴仕ル者モ、或ハ上留利ヲ習ヒ太夫ヲヨビ、又ハ市井ヘ通ヒ三絃ヲ習ヒ、或ハアヤツリヲ仕掛屋シキニテ躍ラセ、或ハ博奕ヲ相催シ諸士相會シ美膳トリ調ヘ侍博奕ト名ケ、或ハ市井ノ博奕師通リノ者ナドヲ呼集メ、父子兄弟其家中共ニ寄合晝夜ノ娛樂、或ハ市井ノ女子ナドヲ呼ビヨセ酒宴ノ遊戯ナド仕リ、又小進困窮ノワル者ハ、人通ヒ稀ナル辻ニテ行人ヲ苦ルシメ、或ハ七北田邊ヘ遊行仕リ、路人ヘスレ係リ慮外申シ尤メ、或ハ在鄕給人ノ惡ル少年ハ、夜中兩刀ヲ帶シナガラ行人ノ衣服ヲ追剝ギナド、其外種々侍ニ似合ザル所行ノ者モ有レ之由間々相唱候、乍レ然ケ樣ノ事ハ虛

說ニモ御座候ヤ、遠境相隔候ヘバハキト聞見不レ仕候、乍レ去右ノ唱等御座候モ、畢竟諸士文武ニ怠リ候ユヘノ事カニ奉レ存候、凡ソ民ハ其々ノ渡世產業御座候テ、日夜ノ働キ不レ仕候ヘバ飢寒ニ及ビ候ユヘ、怠リ者モ是非ナク多クハ働ラキ候故ニ、閑人ハ十ガ一二ニテ、其外ハ皆產業相ハタラキ申事御座候、諸士ハ當官ノ外ハ指タル渡世ノ生產無レ之、世々下シ賜ハル御俸祿ニテ、妻子眷屬無爲ニシテ安堵仕リ居候ユヘ、志ナキモノハ怠リ出來候モ可レ有レ之事カニ奉レ存候、サレバ諸士ノ勤候事百姓ノ產業ト同ク、日夜心ヲ相用ヒ可レ申儀ハ、彼ノ文武ノ修行カニ奉レ存候

一 醫師ハ御性命ニ與リ候由ヲ以、諸藝人ノ長トシテ御待遇不レ輕コニ承知仕候、依レ之一入學問療術熟鍊可レ仕所ニ、多ハ未鍊ノ樣ニ相聞得申候、近年時々醫按等仰付ラレ、廿五歲マデニ學療熟鍊醫按不レ宜候ヘバ、其知行三ヶ一トヤラヲ召上ラルヽノ由御餘儀ナキコトニ奉レ存候、乍レ然良醫ニモ至ラント仕ルニハ、中々二十五歲前後ニテハ熟鍊仕ルマジク候、醫ハ頗ル大業ニテ上素難ヨリ、漢晋諸名醫ノ病論方書熟覽仕リ、臟腑經絡骨度運氣草木等皆蠹ク熟讀洞通ノ上、自己ノ工夫ヲ以治療精ク相試ミ不レ申候テハ、良醫ニハ相成難キ事ニ承リ候、乍レ然醫ノ業ハ何レニ能ク病ヲ愈シ候ガ本分ニ候ヘバ、學問無レ之候トモ療治ダニ功者ニ御坐候ハヾ可レ然樣ニ相聞ヘ候ヘドモ、所謂君子ニシテ不仁ナル者アリ、未ダ小人ニシテ仁ナル者アラズ儀ニテ、學醫ト申中ニハ療治下手ナル往々御坐候ヘドモ、未ダ不學ニシテ上手ナルハ必ズ無レ之事ニ奉レ存候、古明醫ノ傳記ヲ承候ニ、皆學業精ク相聞ヘ申候、モシ不學ニシテ

モ自カラ能病ヲ治シ候ハ神醫ニテ候、當時無學ニシテハヤリ候ト申ハ神醫ニハ無之候、一時ノモテハヤシニテ俗ヅキ宜キ者ナドニ相聞ヘ申候、左候ヘバ藥貼服數ヲ以テ、工拙相改メラレ候儀ナド有之樣ニ承知仕リ候處、右ノ通ニテ其ハヤリ計リニテハ相知ザル事ニ奉存候、勿論京師遊學仰付ラレ候處、少年志ノ立不申者ハ、多クハ遊戯ノミニテ學問不仕金財相出シ候、假名筆記ヲ書セ候テ、其ヲ學問土產ニ仕ル樣ニ相聞ヘ申候、其上療治仕ルニモ俗ツキ宜キ者計リハヤリ候テ、醫學修業ニテモ仕ル者ハ世ノ用無之候ユヘ、マヽ志ノ有之者ニテ良醫マデ可相成才器ノ者モ、不及是非世ノハヤリヲ相勉メ、追從諂ヒノ風ニ陷リ候事ニ相聞ヘ申候、左候ヘバ何樣ニモ良醫相出可申樣無之儀ニ奉存候、偖又醫ノ工拙ニ指テ御政治ニ於テ得失無之樣ニ候ヘドモ、苟モ御性命ニ與リ候處、御不豫ノ事有セラルトキニ相至リ候テハ、萬一療術未錬ノ事モ御坐候テハ、甚以不輕御事ニ奉存候、左樣ノトキニハ縱ヒ千萬金ニテ求メサセ玉ヒ候トモ、良醫得難キコトニ御坐候ヘバ、乍恐明良醫ノ相出候樣爲玉ハンコトニ奉存候、依之愚按仕ルニ醫師上京相禁ゼラレ、御城下ニ於テ醫學校相立ラレ、御家中町醫ノ中、學業修錬ノ者ヲ召シ出サレ、會主先達ニ仰付ラレ候テ、相應ノ御合力下シ賜リ、諸官醫ヨリ町醫マデ出席許シ玉ハリ、醫書講說或ハ會讀等仕リ、時々醫按ヲ書シメ諸醫會席ニ於テ治療方論ノ工拙相正シ、町醫タリトモ修錬ノ者ニ相見ヘ候ハヾ、其年ギリニ難治ノ症幾人ヲ治シ候、品々病症治方鄉里人名トモニ委曲ニ按文ヲ書シメ、其ヲ以テ工拙相正サレ、愈々精錬ニ相見ヘ候ハヾ、其醫按偏官所ヘ

相違シ、文章顚倒錯置等モ相正サレ可ニ御用立一者ニ候ハヾ、召出サレ修業仰付ラレ可レ然奉レ存候、勿論官醫ノ內魯鈍或ハ怠リ者等ニテ、御用立マジキ者候ハヾ、委ク申合メ修業仕ラセ年三十ニ至リ候テモ、未熟御用立兼候ハヾ、其時三ケ二ヅヽモ其身一代召上ラレ、其子ニ至リ可ニ御用立一者ニ相見ヘ候ハヾ本地返シ下サレ候ハヾ、是又怠ナク相勵マシ可レ申候、尤モ壯年ニシテ廣ク治療不レ仕候トモ、俊秀ノ才器ニ候ハヾ、召出サレ相應ニ御合力下シ賜リ、書籍買調ヒ候ニモ衣服小遣ヒニモ十分相足候樣ニ爲玉ハリ、學問修業仕ラセ候ハヾ、純一ニ學業相琢キ、四十五十ニ至リ學熟シ術成可レ申候ヘバ、一世ノ明良醫ニハ可ニ相成一奉レ存候、勿論上京江戶遊學ノ儀ハ、右ノ通リ御城下ニ於テ數年御試ノ上天晴俊秀ニテ國手トモ可ニ相成一才器ニ候ハヾ、其時ニ至リ別テ御合力下シ賜リ、何方ヘナリトモ望次第相登サレ候ハヾ、憤悱啓發ニテ學業上達可レ仕奉レ存候、左樣ノ俊秀ノ者モ數百千人ノ中ニハ、只今以兩三人ヅヽハ有レ之者ニ御坐候ヘドモ、右ノ醫風ニ相成候ニテ學問等修業仕リ居候テハ、世ノ用無レ之衣食モ仕リ兼候體ユヘ、左樣ノ者モ是非ニ不レ及、志ヲ呑テ世ノ諂風ニ陷リ候事ニ相聞ヘ申候、惣ジテ有祿ノ人ハ衣服ニ滿足リ候ユヘ、秀才俊傑ノ者有レ之候トモ動モスレバ事業ニ怠リ申事ニ御座候處、困窮卑賤ノ者ニハ憤激仕リ候ニテ、一入秀俊モ多ク相出候モノヽ由、古ヨリ申傳候ヘドモ右ニ申上候通リニテ、其業熟候マデノ內衣食ニ給シ兼候ユヘ、無レ據宿志相ステ苗ニシテ不レ秀候カ秀デヽ不レ實候カ、大方天才ヲモ相トゲ不レ申コトニ相聞ヘ申候、依レ之醫術等ノ儀ハ最御穿鑿俊才ノ者召出サレ、衣食書籍

ニ不自由不ㇾ仕様ニ爲玉ハリ、學業純一ニ修練仕ラセ候ハヾ、御恩寵別テ難ㇾ有奉ㇾ存、マス／＼神力ヲ相盡シ可ㇾ申候、左候ハヾ庸醫ナルモ其儀ヲ羨シク切磋仕リ、明良醫モ可ニ相出一事ト存候

諸士御惠幷黜罰寛宥

一　竊ニ御家中ノ様子ヲ承リ候ニ、當時藝術怠リ候上甚ダ困窮ニテ、兵具等モ吟味不ㇾ仕不ㇾ調ガチノ様ニ相聞ヘ申候、聖人ノ言ニモ足ㇾ食足ㇾ兵ト見得候所、萬一ノ事有ㇾ之候トキハ、御用立兼可ㇾ申カト、乍ㇾ恐御心許ナク奉ㇾ存候、乍ㇾ然恒産ナキトキハ恒心モ無ㇾ之、禮儀藝術モ行ハレ難キ儀人情ノ常ニ御座候、左候ヘバマヅ食ヲ足シ候様ニナシ置レ候ハヾ、藝術修行モ相ナリ兵自カラ足ルベク奉ㇾ存候、當時諸士ノ困窮ニ相至候儀謹ンデ其所ㇾ由ヲ相考ヒ候ニ、唯家事不案内ト華奢外飾内侈ニ相費候コトニ奉ㇾ存候、大抵諸士身上三四十貫文ヨリ以上ノ人ハ、世々下シ賜ル御知行ヲ以衣食飽暖シ、家事ハ一向家來臺所持ニバカリ任セ置、家事節省ノ手段不心得ニテ、如何様ニ繰合候ヘバ宜キ者ト申ス事、合點無ㇾ之人多ク相聞ヘ申候、世々下シ賜ル處ニテ相應ニ御奉公仕來候處、其身ニ至リ困窮仕ルハ大方世事不案内ニテ諸費ヲ省ミズ候カ、奢侈ニテ財用相費候カノ二ツニ御座候、其外ト申候テハ或ハ其身指タル奢費無ㇾ之候トモ、家來之者不ㇾ宜シテ不ニ指繰仕一ルカ、或ハ家來ノ者主人ノ金財ヲ以テ、己ガ身上ノ貯ニ仕ルカ、或ハ知行不ㇾ宜ヲ父祖ノ節儉ヲ以テ間ヲ合候處、其ノ身通例ノ費用ニテ困窮仕ルカ、倍ハ

知行所惡作ニテ借金相始メ、其ヨリ相重リ候カ、疾病厄難ニ會候テ仕後レニ相成候カ父祖ノ讓リ借金有レ之返濟ナリ兼候カ、役目ニ付拜借等相重ルナドノ外ハ有レ之マジク奉レ存候、左候ハヾ無二餘儀一困究ノ者ヘハ、御吟味御惠ミナシ玉ハリ候、御尤至極ニ奉レ存候、其外ハ皆其世事不案內家來ニ計リ任置、深ク手入不レ仕ト奢費トノ二ツニ御座候ヘバ、御手入ナシ置レ其身ト家來ノ者ト深ク相責ラレ候儀、可レ然御事ニ奉レ存候、小進ノ困究仕ル儀ハ、元來下シ賜ハル所微少ノ上、人數不相應ニ御座候ガ少シ產事ニ怠リ候ヘバ、早速困究仕ル儀ニ御座候、小進ニテ困究不レ仕ハ其身世事ヌカラズ、節儉ニシテ怠リナク、妻子マデ何ゾ相應ノ內證イトナミ相勵ミ候者カ、偖ハ御村方役人賄賂ヲ取リタメ候カナドニテ、町屋敷等買置年々宿賃ヲ取候カ、扶持方判等質物ニ候ナドニ御座候、左ナキ者ハ皆困究仕ル儀ニ御座候、其始何ゾ災難ニ會ヒ候カ、偖ハ兩親老候テ營ノミニテ手少相成、人數ハアダニテ衣食給シ兼候ユヘ、無二是非一扶持方判等高利足ノ質物ニ指置キ、其レヨリ年々困究仕ル事ニ相聞ヘ申候、縱ヒ人數アマタ有レ之候ドモ、壯歳ノ者計ニ御座候ヘバ產事勵仕候ユヘ困究不レ仕候ヘドモ、老人アマタ有レ之候ヘバ、甚困究仕ル事ニ御座候、依レ之其窮ヲ救セラレン儀ヲ謹ンデ愚按仕ルニ、大番組以下侍分マデノ者御知行何貫文、以下御扶持方何人ブン以下ト申候御定例相立ラレ、小進困究者バカリ年六十以上ノ老人有レ之者ヘハ、老人一人ニ付一人扶持、七十以上ノ老人有レ之ニハ、一人ニ付二人分ヅヽモ、其老人存命中御扶持下シ賜リ候ハヽ、右困究モ老人ハウキ人ニ仕リ、少壯ノ者ドモハ面々內證營ミテ相續可レ仕

候、右ノ通リ行ハセラレ候ニハ、頗ル御扶持方相費候ヘドモ、諸士ハ君上ノ御手足ニ御座候ヘバ、乍レ恐ケ樣ノ困究ハ、固ヨリ救セラルベキ御事カニ奉レ存候、尤御家中ノ群臣不レ殘下シ賜ル儀ニモ無レ之、大番組ヨリ以下侍分マデノ內、小進困究者ヘ計リ惠ミ下サレ、六十七十以上ト申候トキハ、强テ十年十五年ノ間ニ御座候ヘバ、莫大ノ御費ニモ有レ之マジク奉レ存候、凡ソ困究者ハ右ニ申上候通老人有レ之ダケニ、諸物相費ヘ迷惑ニ相及候ユヘ、志士孝士ノ外ハ直ノ父母祖父母ニテモ年老候ヘバ、困窮迷惑ノ上カラハ多クハ倦キ氣相生ジ候コト人情ノ常ニ御座候、然ル處右ノ通老人御惠ニ成下サレ候ハヾ、縱ヒ昨日マデ取扱ヒ不行跡ノ者ニテモ、右ノ御扶持方下シ玉ハリ候儀ヲ、感悅仕ル理御座候ユヘ、父母祖父母ハ不レ及レ申添人タリトモ、老人ノ分ハ隨分大切ニ取扱ヒ仕リ、病氣其外トモニ心力ヲ盡シ、丁寧信切ニ倖養仕リ、何トゾ七十八十マデモ存命仕ラセ、御扶持方モ增シ下サル樣ニ仕リ度ト、兼テ孝心發起可レ仕候、左候ハヾ所謂先王禮樂ノ敎ニテ敎ルト申ニ無レ之、自然ト老人尊敬ノ心相生ジ、皆々感戴倖養可レ仕奉レ存候、此外老壯ニ拘ハラズ、窮士ヘ計リ御惠借金相行ハレ候ハヾ、可レ然奉レ存候儀御座候、因テ拙策下ノ長蓄倉ノ條ニ相記ルシ申上候、右ノ事ドモ行ハセラレ候バ困究頗ル相直リ、士風モ改リ、先王養老ノ政敎ニモ相協ヒ、群臣ノ骨髓御恩澤ヲ感徹仕ルコトモ益々深ク、禮義藝術ノ修行モ、御手入ニ從テ相勵ミ候ハヾ、百萬ノ忠臣義士圍饒シ奉リ、誠ニ萬歲金石ノ御固メト、乍レ恐拙存申上候

一　諸士ガタ何ゾ不屆越度ノ所行御座候ヘバ、罪ノ輕重ニ從ヒ半地改易等モ仰付ラレ候事ドモハ、御先例有セラル儀カニテ、堂上ノ沙汰淺者ノ不レ可レ知儀ニ御座候ヘドモ、恐懼至極ナガラ痛マシキ御事ニ奉レ存候、元來痛ク御手入ナシ玉ハズ候ユヘ、學文修行怠リ候テ過失仕出シ候所、其時ニ至リ右ノ通リ仰付ラレ候事ハ、乍レ恐如何シク奉レ存候、乍レ去世祿ヲ頂戴仕ル御恩ヲ忘レ、御手入無レ之トテ文武ノ術ニ怠リ候ハ、其罪遁レザルコトニテ御咎メ御尤至極ニ奉レ存候ヘドモ、偖又先祖勳功ノ上白刄ノ下ニテ頂戴仕ルカ、何ゾ度々ノ大功ヲ以テ下シ玉ハリ候御知行、子孫ノ一失ニテ永々召上ラレ候コトハ、乍レ恐痛マシク奉レ存候、先王ノ敎ニモ賞ハ子孫ニ及ボシ、罰ハ其身ニ止ルト見ヘ候テ、世祿ト申ハ子孫永々下シ玉ハリシ事ノ樣ニテ、一通リノ過失ニハ召上ラルベキ事ニハ不レ奉レ存候、何ゾ五倫ヲ犯シ候樣ナル罪科ハ、其品ニヨリ御知行ハサテオキ、三族ヲ夷シ玉フトモ理ノ當然ニ御座候ヘドモ、不忠不孝ナドノ大義ニ渉ラズ候過失ハ、其身ニ限リ候テ一生蟄居ト申カ、遠流切腹ト申カ其罪ニ隨ヒ仰付ラレ、跡式立下サレ候ハヾ誠ニ先王世祿ノ御政法ト尙々難レ有御事ニ可レ奉レ存候、凡ソ越度仕ルモ心付ザルヨリ仕出ス事カ、偖ハ急遽顚沛ノ場所ニテ急ニ其事ニ應兼、度ヲ失候儀ハ、成德ノ人ハ格別、左ナク候テハ面々誰ガ身ノ上ニモ可レ有レ之事ニ奉レ存候、勿論人ノ性質ニハ得手不得手御座候テ左ノミ器量無レ之モ速ギレ仕リ、急遽ニ應ズル事得手ナルモ有レ之、又遲ギレニテ急ニ應ズル事不得手ナルモ、遲クシテハ宜キ思慮仕ル者モ有レ之、何レモ一得一失ニ御座候、左候ヘバ心ヨリ不レ仕越度カ、不忠不

義ニ渉ラザル儀ハ、乍レ恐御宥免ナシ玉ハヾ可レ然カニ奉レ存候、ケ様ノ旨ハ尚書ニモ相見ヘ、又古傳ニモ社稷ノ固メニ與カル者ハ、十世マデ宥レ之トモ見ヘ候ヘバ、猶更御吟味ナシ玉ハンカニ奉レ存候、前段ニ申上候通リ藝術御試ノ上申含メ候ニモ、怠リ者カ愚昧ニテ御用立不レ申者ニ候ハヾ、其身一代御知行三箇二モ召上ラレ、御助ケ扶持下シ玉ハリ候ハバ、其子成長家督繼目仰付ラレ候節、本地相違ナク返シ玉ハリ候ハヾ、有レ才者ハ衆ニ拔ンデ候忠義ヲ盡シテ、父ノ恥ヲ雪メン事ヲ存ジ、其不才ナル者モ父ト同ジカラン事ヲ恐レ、相勵ミ候樣可二相成一奉レ存候、總ジテ半地改易等仰付ラル者ハ、右ニ申上候通リ愚昧怠リ者抔ニテ候ヘバ、其マヽ指置レ候トモ、終ニハ何ゾ過失仕出シ候事ニ御座候ヘバ、如レ此者ハ豫ジメ御取抑ヘ、惡事仕出シ永ク子孫滅却仕ラザル樣ニ爲玉ハン事、御上ノ御恩澤ニ奉レ存候、左候ヘバ平士以下本祿頂戴仕ルモノハ、皆盡ク藝術修行御用立者ノミニテ、怠リ者バカリ當座ニ御知行三箇二ツツモ召上ラレ候トキハ、御家中ニ於テ永々御知行召上ラレ候ハ、輙ク相出マジク奉レ存候、凡テ上ノ下ニ於ル徳ヲ以テ導クトキハ、下タル者其徳ニ感ジ威ヲ以テ從ガハシムルトキハ、下タル者妄リニ恐懼仕ルノミニテ、親睦ノ情薄クナリ候者ノ由、聖賢ノ敎ニモ相見ヘ候、サレバ古ヘ君臣ノ相會ニ、朝見ノ外ニ燕會ト申候テ、朝衣禮服ヲヌギ燕服ヲ着シ、内證ムキニテ酒宴ノ交驩時々相行ヒ、上下ノ情ヲ通ジ候ユヘ、親ミノ情常ニ離レズ、君臣睦マジク深ク恩義ニ感ジ候者ノ由、是先王禮樂ノ敎ト申ニモ相協フ事ニ奉レ存候、當時諸士黜罰ト申ハ、多クハ半地改易ト申樣ニ奉二承知一候、朝廷ノ御評議ハ如何

ナル者ニ御座候テ、群臣恐々トシテ安堵ナシ難ク候トキハ、限リナキ御損失ノ方カニ奉レ存候、今日大功有レ之御加増頂戴仕ルモ、明日ニ至リ誰レカ身ノ上心外ノ過失相出シ、又子孫ニ至リ何樣ノ事ニテ、半地改易仰付ラルベキモ不ニ相知一候トキハ、忠義ノ筋ト心付候事モ、萬一仕損ジ候ハヾト恐惧ノ情不レ已事ニ奉レ存候、依レ之御吟味ヲ以テ右ニ申上候通リ成玉ハル者ニモ御座候ハヾ、萬世御恩澤ヲ頂戴仕ル者ト、忠臣ノ心益々堅ク、且藝術ヲ怠リ悪事ヲ仕ルトキハ、蟄居切腹等仕ル事ト相心得候ハヾ、藝ヲ修メ身ヲ敬ム事モ、愈々深カランカニ奉レ存候、左候ハヾ群臣ノ心一ノ如ク、誠ニ國家ノ柱骨磐石ノ御固メニ奉レ存候、乍レ恐ケ樣ノ儀ハ東照宮御定例在マシ候カ、御先代樣御舊制有セラレ候御儀カ、敢テ此者ノ義論仕ル儀、恐惧至極戰慄ニ不レ堪奉レ存候

民間不レ可レ制ニ文武一

一　近年民間奢侈怠惰農桑疎カニ相成候ユヘ、文武術トモニ百姓不ニ似合一儀ノ由ニテ、御制禁仰出サレ候、御尤至極ニハ御座候ヘドモ、乍レ恐却テ不レ宜方カニ奉レ存候、凡ソ人ハ活物ニ候ヘバ、貴賤トモニ一日ニテモ徒然トシテ居レザル者ニテ候、サレバ聖人ノ敎ニモ可レ使レ由レ之、不レ可レ使レ知レ之トテ、盡ク道ヲ知セ候ハ成難ク候ヘ共、其レニ寄ソヒ居シムルハ如何ニモ相成由ニテ候、左候ヘバ何ゾ宜キ玩ビ物ニ趣ムカセ置カズ候ヘバ、種々ノ悪事ニ走リ候事ニ相見ヘ候、宜キ玩ビト申候テハ文武ノ外無ニ

御座ㇾ候、民ハ農事ノ外何ノ藝術モ入ヌ事ノ樣ニ相聞ヘ候ヘドモ、其ハ入ヌコトニ仕候テモ、何ゾ慰サミナク候テハ居ラレヌ事ニ御座候、日中ハ働ラキ候テモ、夜中ノ慰ミカ農ノ暇日カ、兎角ニ徒然トシテハ居ヌコトニテ候ユヘニ、弓ノハヤリ候里ニハ、弓ノ外玩ビ他ナク、小兒ニ至ルマデ其マネ仕リ候鎗長刀ノハヤリ候里ニハ、鎗長刀ノ外他ナク候、鞠楊弓ノハヤリ候里ニハ、又鞠楊弓ノ外ナク候、或ハ圍碁雙六俳諧謠ヒ三絃淨瑠璃、或ハ舞オドリ操ツリ歌舞伎角牴ナド、凡ソ其處ニハヤリ候事ハ其一里ギリニ替リ、大方其ハヤリ玩ビノ外無ニ御座ㇾ者ニテ候、其ユヘニ博奕ノハヤリ候處ニテハ、少長オシナベテ博奕ノ玩ビニテ他慰ミ無ㇾ之候、若又學問手習或ハ講釋等有ㇾ之里ハ、其鄕里ニテモ長シキ者カ富有ノ者ナドハ、十里十五里ノ所ハ日通ヒニテモ學ビ候コトニ御座候處、右ノ通リ學問武藝ソノ外トモニ相禁ゼラレ候ヘバ、內心ニ手習學問或ハ弓馬刀鎗等ノ國家ノ益ニ相成候、藝術ヲ心掛ケ申ス者モ世間遠慮仕リ、自然ト相ヤミ申候、サレバトテ慰ミ玩ビ無ㇾ之候テハ居ラズ候ユヘ、富有ノ者ハ酒宴遊興種々遠方ノ美味ヲ求メ、珍膳ヲ具ヘ碁會將戲會、サテハ博奕歌三絃座敷操ソリ芝居等、種々ノ娛樂仕候、富有ナラザル者ハ多クハ博奕好色酒食ノ寄合至ラス惡事仕ルコトニテ、凡ソ玩好ノ中博奕ハ十ガ七八ニ御座候ヘバ、何ニ程御制禁仰出サレ候トモ、博奕奢侈ノ類中々以テ相止事ニハ無ㇾ之候、譬ヘバ芭蕉ヲ剝ガ如クニテ、彼ヲ禁ズレバ此ヲ犯シ、兎角右ニ申上ル如ク、民モ活物ニテ御座候ヘバ、何ゾ玩ビノ事ナクシテハ、中々晝夜働キ候辛抱慰ミ可ㇾ申樣無ㇾ之事ニ御座候、當時御制禁ニテ棄オキ候

ヘドモ、近村ニテ及レ承候ニ困究細民ノ中ニモ、弓ハ一寸二三歩ノ強弓ヲ挽キ候者モ有レ之、槍ハ數人ノ敵ニ對シ候テモヤハカト存候モ有レ之、兵法撃劍修錬ノ者モ往々相聞ヘ、天晴御用立ベキ者ドモニ候ヘドモ、重ク御制禁故弓槍トモニ相棄、是ヨリハ座敷ノ博奕ト皆々惡事ニ趣キ候、ケ樣ノ事ハ何程御制禁ナシ置レ候トモ、表立ザル內々ノ惡事ユヘ可ニ相止一樣無レ之候、因テ恭ク其弊ヘヲ改メ候ハン事ヲ愚按仕ルニ無爲ノ御政ニ如クコト無レ之カニ奉レ存候、依テ大概御手入ナク、文學武術等ヲ以由ラシメ置レ時々唱ハセ玉ハバ餘玩相棄、文武ノ道ニ趣キ候樣ニ可ニ相成一カニ奉レ存候、偕又天下安ト云ヘドモ戰ヲ忘レザルハ、治國ノ干要ノ由ニモ相見得候處、他日萬一大事出來候トモ、當分ノ勢ヒニテハ御家中ハ格別ノ儀、百姓中ハ人足ニ召仕ハル、外ハ、一人モ御用立候者ハ有レ之マジク奉レ存候、兵ヲ農ニ寓ストモ申候間、時々武藝等ハ唱ナハセ玉ハヾ、萬一御家中ノ軍士困罷ニ及候トモ、御國幾百萬ノ凡民ノ內得手修錬ノ者皆盡ク堅甲利兵ニテ候ヘバ、無レ限御強ミト奉レ存候、シカシナガラ、如レ此コトハ豫シメ心係不レ申候トモ、其時ニ從ヒ御免許仰出サレ、稽古相成ベキ樣ニ相聞ヘ候トモ、中々以テ五年七年ニテ、修錬マカリナル儀ニ不レ奉レ存候、尤見ナレヌ大事出來候ハヾ、俄ニ戰慄仕リニゲ奔候トモ、武藝修錬ハ仕ルマジク候、如レ此太平ノ時慰ミニ稽古仕リ、段々修行ノ上精錬ニ相成候ヘバ技□ト相ナリ、自カライデ一ツ敵ニ對シ見タキト申ス氣ニ相成候ユヘ、名馬ノ驕逸ナル如クニテ、天晴御用ニ相立可レ申事ニ奉レ存候、右ニ申上候如ク文武トモニ相禁ゼラレズ、御國中盛ンニ唱ナハセラレ候

トキハ、迚モ惡事ヲ玩ビ候庶民ヲシテ文武ノ良藝ニ由ラシメ、修錬上達ノ上ハ一介ノ御物入ナク、數百千萬ノ精兵御養ヒ指置レ候同然ノ理ニテ、萬一ノ事出來候トキハ限リナキ御益カニ奉レ存候、乍レ然右ノ如ク唱ハセラレ候ハヾ、農事怠リ其ニ計係リ居可レ申樣ニ御探リモ可レ有レ之候ヘドモ、全ク左樣ニハ無レ之事ニ御座候、ケ樣ノ藝術ニ心係ケ申ス者ハ、大方繰リ合宜キ者カ、志ノ有レ之者ノ仕ルコトニ御座候、其内困究ニテ毎日農事ノ働キ仕リ、夜中カ暇日ナドニ心係候者ハ、何ニ程唱ハセラレ候トモ、今日其身ノ働キヲ以テ耕シ出シ、父母妻子ヲ養ヒ候者ニ御座候、大抵文武ニ意ヲヨセ候者ハ、困究ニテモ少シハ志アリテ、藝ヲ嗜ム者ノミ仕ルコトニテ候、ケ樣ノ者モ彼博奕酒色ノ徒ニ相入候ヘバ、大方怠リ出候コトニ御座候、因レ之常ニ玩ビ由ラシメ候處、不レ輕事ニ奉レ存候

忠孝選擧

一御郡方ヨリ時々忠孝貞烈ノ者申上候ヘバ、其品ニ從ヒ種々御褒美ナシ玉ハリ候事、誠ニ難レ有御仁政ト奉レ仰候、然レドモ其者ノ行跡委シク御撰ノ上、何ゾ盡サヌコト有レ之候ヘバ、御取上ナキコトモ御座候ヤウニ聞々申唱候、此儀乍レ恐餘儀ナキ事ニ奉レ存候ヘドモ、百行トヽノヒ人ハ聖賢君子ノ外有レ之マジク候、サレバ孔子ノ語ニモ有レ德者ハ必ズシモ才アラズ、有レ才者ハ必シモ德アラズト見ヘ候テ、才德兼備ノ人ハムザト得難キコトニ相見ヘ候、依レ之一事タリトモ庶民ノ内ナドニ、忠孝ラシキコトモ

御座候ハヾ、速カニ御取上御褒美下シ玉ハルベキコトカニ奉レ存候、尚書ニモ罪ノ疑ハシキヲバ惟レ輕クセヨ、賞ノ疑シキヲバ惟重クセヨト相見ヘ候、トカク御褒美爲シ過マリ玉フトモ、人ヲ勸ルノ道ニテ善ヲ愛スルノ情切ナルユヘ、仁者ノ過チト申ス由御座候、諸士ハ仁義忠孝ヲ業ト仕ル君子ニ候ヘバ忠孝ノ行ヒモ其常ト仕ル義カ、指テ珍シキ忠孝ノ人相出候儀承知不レ仕候、然レバケ樣ノ事ハ甚ダ難キコトカニ御座候、然ルニ民間凡下ノ者ニ忠孝ノ類有レ之候ヲ盡ク備ハラズ迚御取上ナク候ハ、乍レ恐如何シク奉レ存候、尤御褒美爲玉ハリ候モ、近年ハ輕薄ニテ民人感發仕リ兼候樣申唱候、　先年ハ不レ輕御恩賞ニテ、忠孝ノ者等ハ御番入侍ニ召出サレ候カ、或ハ其身一代御藏俵ナド下シ玉ハル者モ承知仕候、如此ニ爲玉ハリ候テコソ、民人興起難レ有感發可レ仕奉レ存候、當時近隣ニモ至極ノ窮民ニ、頗ル奇特ナル孝心者ナドモ相聞ヘ候ヘドモ、誰有テ申上ル者ニモ不レ仕樣ニ相成候、其外指テ忠孝ノ類ニハ無レ之候ヘドモ、御國ノ光輝ニモ可二相成一秀才ノ者モ往々承リ候、登米郡米谷邊困究、陪臣ノ者ニ十二三ノ娘ニ御座候所、生來ノ能書ト記憶ニテ、老成ノ書家モ成難キ程ノ能書有レ之由シ、又志田郡古川邊ニ是モ困窮者ノ兒ニ候處、四歳ヨリ書ヲ能シ候テ、五歳ニシテ五百字ホドヲ暗記仕リ候由シ、人皆神童ト申候、右二兒女書ヲ見申候處、何レモ天晴ノ能書ニテ稽古仕ラセ候ハヾ、誠ニ御國ノ光輝ニモ相成ベキ兒女ドモニ相聞ヘ申候、ケ樣ノ者モ申上ル者無レ之、皆天才ヲ不レ遂コトニ御座候、況ヤ忠孝ノ者ハ右ノ比ヒニハ無レ之候、財ヲ賤シミ善人ヲ愛スルハ、先王國家ヲ治ルノ道ニテ、忠臣ハ孝子ノ門ニ出ルト

モ相見ヘ候ヘバ、左樣ノ者ハ御取上ナシ置レ候ハヾ、其者ハ左ノミ御用立チ不レ申者ニテモ其風化セラレ、以後忠孝ノ者倍ヘ來リ候ハヾ、御仁政ノ御驗シ相見ヘ、忠孝貞烈ノ御用立候者多少出來可レ仕奉レ存候、昔千里ノ馬ヲ求メシ人有シニ、其馬死シタリトテ其骨ヲ五百金ニ買來リ候ヘバ、主人大ニ怒リ候ニ、其者申ケルハ、骨サヘ如レ此高金玉ハル由傳ヘ聞候ハヾ、活ル馬ハ尙々高金玉ハラント、馬サヘ有ナバ牽キ來ル理ニ候ユヘ、五百金ヲ棄ル也ト申ケルニ、果シテ其年ノ內ニ千里ノ馬數匹來リ候由シ相見ヘ候、聖賢ノ國ヲ治メ候モ賢ヲ尊ブト申ス事、第一ノ由承知仕候、サレバ東照宮御治世ノ時、大進ノ士御シカリノ次デニノ玉ヒケルハ、凡ソ文武ニ志深キ者ハ、家老權柄ノ家ニ諂ヒ追從セヌ者ナレ、其中ニコソ忠義ノ者ハ有モノゾカシ、其レヲ埋モレヌ樣ニト、常ニ氣ヲ付心ニ係ケ尋ネ求テコソ、君ノ爲ヲ思フトハ云ベケレ、刀劍茶具ノ類ナドニ名物埋レテ有ヲ聞テハ、何トゾ取出シテ我ニ見セント思フナルベシ、其レハ如何樣成物ニモアレ、國家ノ用ニ立ズ無テモ事闕ヌ者也、唯寳ノ內ノ寳ト云ハ、人ニ止リタリト仰ラレケル由、乍レ恐サスガニ創業ノ御聖慮ト可レ奉レ申候、嘗ツテ一隱士ノ談承候ニ、半地改易等ノ者多ク出テ、知行取上ラル丶ハ大ナル不吉ニテ、國ニ惡人多ク、風化ノ行レザル故也、又年々幾人トモナク召出サル者多ク出ルハ、其ニ與フル所ハ費ユル樣ナレドモ、是ハ大ナル吉事ニテ、國ニ善人多ク其政宜ク風化ノ及ブ驗ナリ、政治ノ綱領ヲ知ラヌ者ハ君ノ爲也ト思ヒ、與フルコトヲ惜シミ取上ルコトヲ欲ス、此等モ忠義ノ心ヨリ爲コトナレドモ、却テ不忠ノ甚シキニ至ルコトヲ不レ知モノ也ト申コ

ト抔承リ候、依レ之何トゾ善人ヲ多ク召出サレ候テ、諸役人モ宜ク相成候ハヾ、萬民快ク耕作仕リ、御物成十分御田地見等、相入不レ申様ニ罷成候トキハ、下シ玉ハル費ヘヨリ莫大ノ御利益ニテ、御仁政御風化ノ驗シモ相見ヘ可レ申候儀ト乍レ恐申上候

郡官曲直

一　御郡方ヘ相下サレ候諸官吏、汚辱不仁ノ所爲御座候テ、御仁政ニ相背キ候コト多ク相聞ヘ候、其中一二及レ承候清廉ノ士左ニ書記シ申上候

一　石川傳八郎伊藤甚兵衛事御代官ノ時勤仕承候處、清廉仁惠ノ士ニテ候、誠ニ其德掩ヒ難ク上聞ニ達シ、御選擧ノ由諸官吏ヲ勵マシ、鏡トナシ玉フコソ難レ有御仁政ト奉レ仰候、右傳八郎勤仕ノ郡中諸民、今ニ至ルマデ其德ヲ遙拜仕ル由ニテ候、其清廉ノ事ハ已ニ顯レ候上ハ申上ルニ及バズ候

一　橋本善太夫事ハ右石川傳八郎同鄕ノ由、其德ニ化シ候ニヤ、是亦清廉人ヲ感ゼシムル勤方ニテ候、先年田地見役人タリシトキ、諸御用相仕舞極月廿日過歸鄕仕ルノ由ノ處、貪汚ノ者ハ過分ノ金銀ヲ取ル役目ニ御座候ヘドモ、右善太夫事ハ一金モ帶ズ候ユヘ、其歲季ニ及ビ候テモ賑ハシキ用意モナク、大晦日ニ至リ候ニ、其夕膳大根ノ汁ニ鰯ノ炙物ニテ祝儀相催シ候ヘバ、其老母今夜ハ一年ノ終リトテ、細民ノ家ニテモ夫々賑ハシク、一種モ調ヒ年德ヘ供ルモノナルニ、年增困窮ニ至リ鰯ノ炙物ニテ越年

ヲ説ブ事ヤアル、凡テ御郡方ノ役人ハ品々土產ヲモ持來リ、衣服飮食トモニ華ヤカナリト聞ツルニ、如何ナル勤方ニテカ、ヽル憂目ヲ見ルヤト申ケレバ、善太夫答ケルハ、如何ニモ村方ノ肝煎組頭ナド、種々音物マヒナヒヲモ出シ候ヘドモ、苟モ士列ニ居ナガラ御上ヲ欺キ己レヲ汚シ候コトハ、カヽル困窮ヨリ心苦ク候ヘバ、一金ニテモ取不ㇾ申候、乍ㇾ然農家ニモ稀ナル歲暮ニテ、一老親ノ意ヲ慰メ兼ヌルコソ、身不肖モ顯レ據ナシトテ漣々涙下リケレバ、老母モ妻室モ掌ヲ拍テ申ケルハ、偖ハ左樣ニ有ケルカ、縱ヒ何程困窮タリトモ心中頼モシヽ、其淸廉ニテハ素膳ノ養ヒモ、却テ膏粱ノ滋味ヨリ猶甘美也ト、怡悅シテ越年ヲ祝シケルト及ㇾ承候

一　又其頃ニ候ヤ、右橋本善太夫迫マ方田地見出勤ノ時、其村々ニテ見マヒ物ト名ヅケ過分ノ金子ヲ相出シ候處、右善太夫ヘモ相出候ヘバ受納不ㇾ仕候、依ㇾ之其肝煎色々言ヲ盡シテ申ケレバ、偖モ〳〵深切ナリトテ受取置、其田地見仕舞後右肝煎ニ申ケルハ、汝ラ我貧困ヲ憐ミ且ハ田地見免ニ引クニモ意アレカシト慇懃ヲ致シツルナランガ、其志ハ辱シト云ドモ、吾君恩ニテ數口飢餓ナク養育スレバ、外ニ民家ノ財用ヲ得ベキノ理ナシ、此音物ヲ受納セヌトテ惡田ヲ免引セヌニモ非ズ、唯吾ガ眼目ノ見ニ任ス、ソレユヘ財幣最初ニ返シツレドモ、餘リニ兎ヤ角云ヘルユヘ其意ニ從ハズバ、免引モセヌヤラント思ハンコトノ如何シク、暫ク預リ置ヌレドモ、右ノ如キユヘニ返金スルトテ返シ候ヘバ、肝煎モ其淸操犯シ難ク持歸リ候ヘドモ、餘リニ其志ヲ感ジ善太夫歸鄕ノ後在所ヘ見マヒ、溫麪箱ノ中ヘ金

財ヲ隱シ入、進物ニ出シケレバ又受不レ申候、依レ之肝煎是ハ財用ノ重幣ニモ非ズ、能出候シホニ持參候ヘバ、此バカリハ受納シ玉ハレト申ケレバ、再三ノ心ヅカヒ辱キコトナレドモ、兼テ語リ聞スル如クニテ、一小物モ受納シ難シト受取不レ申、偖遠路悃意也トテ、夫婦手ヅカラ煮燒シ、人モ無レバトテ直ニ通ヒシテ饗應シ歸ケルト及レ承候

一 今泉七三郎事御代官ニテ迫方勤仕ノ節、兼テ別段ニ悃意ノ檢斷トヤラ、或日餅ツキ候由ニテ飯ビツヘ入持參申ケルハ、今夕ハ農家搗ナベテ祝儀ノ餅搗ニ候所、拙者處ニテモツキ候ユヘ、少シ進上候トテ相出シ候ヘバ、偖々念ノ入タル事ナレドモ、兼テ僅カナル物ニテモ受納セネバ、受難シトテ辭シ候ヘバ檢斷申ケルハ 嘗テ其儀ハ存ジ候ヘドモ、是ハ何ゾ賄ヒニ仕ルコトニモ無レ之、又態ト拵ヘ持參ノ物ニモ無レ之、兼テ懇意ヲ爲シ玉ハリ候ユヘ、拙者ドモタベ候内ヲ進上候ヘバ、指テ淸德ノ障ニモ相成マジキトテ進メ候ヘバ、ナル程僅カナル物ニテ汚穢ニモ成マジケレドモ、迚モ我ニ懇意シケル上ハ吾ガ志ヲ遂サシメズ、心中安カラシムルハ其ガ眞ノ悃意也、餅ハ我嘗テ好物ナレドモ今云聞カス通リナレバ、持歸リクレヨトテ返シ候ヘバ、サスガ其淸廉犯シ難ク持歸リシト承リ候

一 右今泉七三郎江刺郡岩谷堂方カ、勤仕ノ中惣毛ノ頃ニモ候ヤ始テ廻村ニ付、大肝煎案内ニテ肝入所ニ一宿仕候ニ、大肝入ニ申ケルハ、我々事ハ御役料ヲ賜リ勤仕ノユヘ、自分マカナヒカ偖テハ木賃ヲ相出シ候ヘバ、料理等必ズ致マジキ事兼テ云傳ヘツレドモ、尙更村々ヘ其旨相通ジ候ヘト申付候處、

甞テヨリ御代官ヘハ左樣ニ仕候ト相見得、結構ナル膳部ニテ相出シ候ヘパ、七三郎怒ル氣色モナク申ケルハ、偖々念ノ入タル事ニテ御城下ニ於テモ、ムザト食馴ヌ料理也トテ食シ候ヘバ、大肝煎肝煎首尾ハヨシトテ語リ候ヘシニ、翌日出立ノ時代一貫三百文相出サセ、召連レ候小者ニ申ケルハ、我ガ分ニ七百文其身ドモ兩人ノ分ニ六百文、ハタゴ相拂ヒ候ヘトテ遣シ候ヘバ、亭主ノ肝煎大ニ驚キ出ケルニ、七三郎如レ此ノ料理ハ食テハヨケレドモ、我ハ貧ナレバ旅籠代迷惑ユヘ、我等タメニハ素菜ホド宜ク候、向後如レ此ノ事相止哭ヨト申候ヘバ、肝煎愧色顯ハレ兎ヤ角申ツレドモ、此御郡ニ限ラズ勤仕ノ處ニテハ、段々其品ニ從ヒ拂ヒ來リタレバ、不足ニモ有ベケレドモ受取ベシトテ、其氣色凜然トシテ犯スベカラズ、肝煎是非ニ不レ及受取候テ、其ヨリサキ〴〵肝煎ドモヘ右ノ品々相通ジ候ユヘ、其後ハ料理不レ仕候由シ、カヽル清廉ノ士ニ候ヘバ、甚ダ困窮ノ由ニ候ヘドモ、勤方如レ此也ト承リ候右ニ申上候諸廉士イマダ一見モ不レ仕候ヘドモ、遙カニ其風裁ヲ承リ候ニ、天晴ノ志士ニ相聞ヘ申候、ケ樣ノ人ニ學問修德仕ラセ候ハヾ、美盡シ善盡シ如何サマ棟梁ノ材ニモ可ニ相成一人ニ奉レ存候、一二承リオヨビ候バカリニテモ、ケ樣ノコトニ御座候所、其他ノ善行清廉ノコトハ推テ相知ルベク候、如レ此人ハ數百千人ノ諸官吏ノ內、僅カ數人ノ外相聞ヘ不レ申候、誠ニ乍レ恐御褒美ナシ玉ハンコトニ奉レ存候、然ルニ右ニ申上候橋本善太夫、善行ドモ府下ノ好學ノ士ヘ語リ候者有レ之由ノ所ニ、一言ノ稱美ナク其ハ珍ラシカラヌコトニ候、賄ヒヲ取ルハ盜ミスル如クナレバ、此人盜セス迚譽ル同然稱スルニ足

ラズト申ケレバ、語リ候者モ本意ナク其席ヲ退キシト承リ候、此等ノ議論ハ畢竟埋窟ノ上計リニテ、人ノ善行ヲ忌ミ妬ミ、己ニ勝ル行儀ヲ嫌ヒ遠ザケ候コトニ相見得候、古ヘニモ清廉ハ珍シキコト、相見ヘ、羊興祖ガ懸魚、揚伯起ガ四知ナド、申テ傳記サセ、清廉トテ稱美申傳候、サレバ其稱言セザル人ノ操行ヲ承ルニ、左ノミ右廉士ニ勝ル行儀モ相聞ヘ不レ申由、所謂人ヲ責ルコトハ重シテ以テ偏ク、己ヲ待ツコトハ輕シテ以テ廉也ト申類ニ相聞ヘ申候

一 御郡方ヘ相下サレ候諸官吏ノ所行承リ候處、數百千人ノ内ニハ直不直種々ニ可レ有レ之候ヘドモ、其中汚穢苛刻ノ事ドモ相聞ヘ、乍レ恐御上ノ思召ニ相背キ御風化ノ害ニモ可ニ相成一奉レ存候、第一賄賂ヲ貪リ取候コト多少ハ可レ有レ之候ヘドモ、諸官吏ノ内何ニ役ニテモ不レ取ハナク候、其内田地見役人ト申ハ賄ヒノ多少ニテ免引ノ利害有レ之候ユヘ、年々賄賂相增候テ一村ニテモ音物金ニ計リ四兩五兩、大村ニテハ十兩以上モ相出シ候由、音物輕少ニ御座候ヘバ痛ク手入仕リ、歩刈等ノ時何ニカ指ツカヘ候由ユヘ、隣村ニテ兩人ノ御役人ヘ三兩ヅヽ進物仕ルノ由承リ候ヘバ、ハヤ四兩ヅヽ相出シ候樣ニ相ナリ其ニ準ジ酒食菓子肴等ノ結構年增ニ相ツノリ申候、近年ハ御郡司村々歩刈ノ時、百姓ドモ隱シ籾シ抔ウロンノ事仕ル由ニテ、足輕兩人ヅヽ相附ラレ歩刈ノ目附ニ相見得候處、是ヘモ相應ニ鳥目ナド相贈リ候ヘバ、却テ其隱シゴトノ手傳等仕樣ニ相成、肝煎組頭ドモノ氣ニ入、尙々幣物ノ多キヲ心係ケ候樣ニ相聞ヘ候ヘバ、ケ樣ノ儀モ一向無益ノ儀ニテ、ソレダケ諸入料歩夫マデ民家ノ相痛ムコトニ御座

候、ソレユヘ田地見ツナルギト申スハ、一村ニテモ五十貫文七十貫文、大村ハ百貫文以上ヲ相集メ候ヲ以テ、幣物酒食數人ノ饗應仕ルユヘ、甚ダ結構成コトニテ候、仍レ之引方不足ノ御百姓ハツナルギニ仕候代物ホド引方無レ之抔モ御座候、右ノ通リ一村兩人ヅヽニテ御役人田地見仕候所、品ニヨリ四五ケ村モ見分仕候、役人抔ハ過分ノ幣金取候由承知仕候、右田地見歩刈、合付キハ田ノ面ニテ見渡折入候ヘバ、一坪何合付キト申候コトヽ、御代官定役人ナドハ大抵覺悟仕コトニテ候ユヘ、隱シ籾ノ御手人ニ不レ及事ニ御座候御手入委シク候ヘバ組頭肝煎ドモヽ、益精シク奸計相行ヒ候ユヘ、其詮無レ之事ニ奉レ存候、右ニ申上候今泉七三郎見分仕候ハヽ、歩刈籾ハ三合ニテモ四合ニテモ其ニ相構ハス、田ノ面稻カブ折入見分定役人ナドヘ相謀リ、六合トカ七合トカ自分見詰メ仕リ候ニ、五勺トモ相違不レ仕候ユヘ其ニテ見スミ申由、肝煎組頭ドモヽ其日ガネニ相服シ候カ、七三郎勤仕ノ村々ハ奸計大方相止申候由承リ候

一 御代官先年ト違ヒ當賄賂ト申モ相聞ヘ不レ申候ヘドモ、追マ方ニテ役所勤仕中會所ニテ卯時召使候處、小者ニテ相辨ジ候由ニテ其代リニ卯時金ト申ヲ、大肝煎方ニテ郡中ノツナルキニ取立、御代官方ヘ金子□□前後宛モ相出シ候由及レ承候、御代官ハ小役人トハ格別ノ御役料下賜ハル由ニ候ヘバ、召使小者ニテ用事相辨候テハ、縱ヒ御下知有レ之迚モ民ヲ惠ムノ志シ有レ之者ハ、小者召使ヒ候代リノ金代受納仕ルニ不レ及儀ニテ、其サヘ承リ苦シク相聞ヘ候、小者ヲバ召使ヒ不レ申甚夜其町ヨリ卯時召使ヒ、其上ニ卯時取立候由、此儀一向非義ノ取立ニ相聞ヘ申候、乍レ然右ノ卯時召使候コトハ御代官ハ相心得

不レ申、奴僕ドモ自分ニ大肝煎方へ相頼ミ召使候コトニモ御座候ヤ、此所不ニ相知一儀ニ不レ存候、尤春秋ノ上下、先年ハ肝煎組頭ドモ送迎ノ謝禮トテ、品々音物相出候由、當時ノ儀ハ相止候カ承不レ及候

一　上廻リ役目ノ者水繩間竿持夫料トテ、其ノ役所ヨリ金財取立候由、是又右御代官ノ卯時代ト同ク二重ニ相開へ申候、其上上廻リ役ハ村々普請所見分ノ上、人足ワリ方相出シ候ユヘ人足ノワリ方多少有レ之、其上普請所ノ願ヒ取上候ト不ニ取上一候ト、村方甚ダ以損益有レ之事ニ御座候へバ、競テ幣物相行ヒ候、依レ之諸役人中ニ於テ最重幣ヲ得候由承リ候、普請諸役人モ上廻リノ下役ニテ村々人足召使候へバ、普請肝煎ト申合奸曲有レ之由承知仕候

一　去秋中唱承候ニ迫方橋普請有レ之候所、人足ハ渡リ役ト申ニテ、近村十ヶ村餘へ四五十人割付普請取付候所、秋收最中ニテ遠方ノ人足出兼候迚、定出人足日用ヲ以召仕ヒ出來仕候由、其橋見申候他村ノ人足肝煎唱シ承候ニ、大抵千四五百人ニテ惣入料人足方ドモニ出來可レ仕見當ニ見へ候由、然ル所ニ四五千人ノソリ付人足ニテ日用代取立、右橋役人所務仕ルノ由相唱申候、千五百人ノ出來ニ仕候テモ、殘ル三千五百人此日用代百七十五貫文ニテ候上、廻リ人足肝煎ナドモ配分所務仕ル由申唱候、當時此風大ニ行ハレ、不直ノ役ノ役人ドモ請普請ヤウノ事有レ之候へバ、右ノ奸計ニテ三十兩五十兩ヅヽ所務ノ由所々ニテ相唱候、百姓ドモ困窮ノ者ハ代物迷惑ニ存ジ、人足ニ相出候へバ東西ト取違ヒ、遠方ノ働キ申所候カ、或ハ人數不相應ノ運ビ方等申付候カニテ、何樣ニモ勤リ兼候ユヘ、無ニ是非一日用代ニ

テ指遣シ候樣ニ仕ル由、尤往還街道土橋等ノ請ケ普請ハ、ウケ人ドモヨリ高金ノ賄ヒ指遣シ候ユヘ、請ノ人足計リニテ利德不足ニ候ヘバ、追割ヲ相願ヒ又以日用代相集メ、十分ノ利德所務仕ル由相唱ヒ候

一 去々年中カ御郡御カコヒ籾挽キ方仰付ラレ候節、村々人足ヲ以挽キ方仕リ候所、是亦右橋普請同前ニ、遠方ヨリ日用代相出サセ候手段仕リ、近所ノ者ドモ定出人足相雇ヒ、日用代取立御買人御藏守等ニ相謀リ、奸曲品々有レ之、挽方籾ノ多少ニ從ヒ、過分ノ金財所務仕ル由、其上挽方籾ノ方ニテ米相殘候奸曲ナド仕リ、米高直ノ時分ユヘ、一ケ所ニテモ百貫文以上ノ金錢貪リ候者モ有レ之由申唱候

一 責付役人御買米方ハ、人足日用代ノ奸曲手品無レ之故、村々ノ幣物ヲ貪ル者多ク候由、甚キ者ハ其支配下ノ肝煎御買人ヘ、借金申カケ返金不レ仕、夫レヲイナミ申候ヘバ呵責嚴シク、御買人ハ米拵ヒナドニテ、其身ドモノ奸曲ノ障リニ成候ユヘ、是非ナク貸シ渡シ申候、如レ此ノ賄ヒ金モ其所ノツナルキニ相成モ有レ之由ニ候、去春承候ニ、御本金拜借ノ者難澁仕ルニ、其者ハ郡中ノ通リ者ニテ候處、在々博奕倡ヒ金代持不レ申者ニハ、駒ト申物ヲ借シ渡シ、金代ノ代リニ借カラズ博奕ニ打コミ候樣ニ仕ル者ノ所、去春中借コミ候者ノ內、十六七歲トヤラニ相成候者ニ、右ノ駒ニテ過分ノ借シ方拵ヒ出シ候ヘドモ、現ニ金代受取可レ申樣無レ之ユヘ、御買米金借用ノ始末墨付相出シ候樣ニ申候ヘドモ、右十七歲ノ者イナミ候ヘバ、山野ヘツレ行ウチ殺スナド、樣々打擲等ニテ異儀ナク其意ニ從ヒ、ソノ方御買米買金六兩トヤラ無二相違一受取候間、何時ニテモ申遣シ次第ニ米付ハコビ可レ申由、宿口入立合墨付請取

御買米上納ノ時ニ至リ、責付役人へ重幣ヲ以テ、右ノ墨付指副相出シ取立相願候ヘバ、右十七歳ノ借人遠方ヨリ口入組頭ナド召ヨセ候處、委細白狀仕候ヲ繩ナド相係候ナド、劫ヤカシ候テ、始末墨付ノ金子相出サセ候由ナド承候、其外ノ諸役人皆々賄ヒ取ノ風相行ハレ、甚シキハ御城下勤仕ノ諸官吏迄御郡方へ無心申遣候事抔有レ之由相唱申候

一　右賄取候外之事ハ御代官ヲ始酒宴遊興之時分ニハ、遠方ヨリ御用ニテ相詰候肝入組頭歩夫傳馬等ノ者モ、日暮迄モ待セ置候體故、其奴僕ニ相願候テモ奴僕迄モ權威相張、中々以ムザト御用不ニ相辨一樣ニ相成候由申唱候、或ハ花アル山魚アル川抔へ遊覽仕候ニハ、兼テ其處へ申遣シ掃除物置等ニ人足召仕、其日ニ至リ候テハ遠見相出シ、往來組頭案內ニテ終日ノ酒宴モ間々有レ之由、其レ計リニ無レ之、川アル所ニテハ漁ノ得手候者十五人モ二十人モ相出シ、其外諸道具辨當ナドノ持夫給仕料理人取持馳走ノ者迄相出シ候ヘバ、朝ヨリ夜中歸迄ハ數十人ノ人歩召仕候、右之入料飲食酒肴油蠟燭樣之物數十人之賄迄、皆以其處ノツナルキニ相成、其上漁者料理人抔ハ歩夫傳馬相除候故、甚相痛申事ニテ候、乍レ然近年ハ御代官間々清白ノ者相出候故、他村之遊宴賄賂等ハ頗ル相止候由ニ候故、其外ノ小役人ハ少年ヨリ其ヲ見習ヒ居候故、惡事相止不レ申花見川狩ハ不レ及レ申、カブキ芝居ニモ同役連立肝入方へ申遣シ、辨當仕度爲仕時々遊覽相唱ヒ候、最浮氣之少年ナルハ其後所之娼娘色メキ候ヲ承リ立テ、酒宴ヨリ相始メ後ニハ遊戲不義等モ相出、甚シキハ妻妾ノ如ク公然トシテ座臥候モ有レ之由、或ハ道中ソコニ

茶肆娘小宿等ヲ拵ヒ置、往來ニハ役前付キニ不レ仕直ニ其家ニ泊リ居、晝夜ノ遊戲日數延引ニ及候ヘバ病氣拵ニ仕リ、或ハ朔日ノ宿付ニ候ヘバ其處ニ檢所ニ相願、二十八日ノ宿證文ヲ取、或ハ一宿ニテモ三宿ノ宿證文ヲ取拵仕、勤仕日數ニ相立テ或ハ傳馬ヲ借候テ、餘町ヨリ役所ヘ通リ拵樣々ノ所行有レ之由ニテ候、左樣ノ役人ヘハ其所々ノ破家者共附添惡事ノ手引仕リ連アルキ、酒食ノ宴樂ヲ甘ジ、次ニハ氣ニ入居候テ請普請之請事相願大カタ入札ノ高下ニヨラズ、手段ヲ以テ此者共ヘ申付、ワケマヘ配分仕由ニテ候、依レ之惡者共隨分氣ニ入、惡事ヲ進メ候故止コトナク候、尤遊戲仕候ニモ金財ヲ取ラセ候故イナミ不レ申、其家内ノ者モ却テ榮耀ニ仕ル由、其內マヽ快カラズ存候者モ逆ヒ申候ヘバ、何ゾ仇ヲ報ゼラレンコトヲ恐レ、無ニ是非ニ取成居候ニ有レ之事モ相唱申候

一　山林役人モ右同然ニテ御林ヨリ御用木伐候時ニハ、其所ノ山守ヲ始何レモ申合過分ノ金子ヲ賄ニ指遣シ、時節ヲ幸ト大木小木伐出シ密賣仕ル由、依レ之右ノ橋普請等ノ大材木相出セン際、御林ノ村々ニテハ福德ノ三年目トテ悅居候由申唱候、右之如キ所行其由來ヲ考候ニ、畢竟學問不レ仕、苟クモ民ニ長タルノ趣意ヲ一向相心得不レ申、如何樣ノ無ニ理非ニ儀仕候共百姓ハ逆ヒ不レ申者ト心得居候、役人ハ時々權威ヲ許シ玉ハザ候故、動モスレバ慮外ヲ尤メ、片苗字ノ詮議拵計ニ仕リ、御仁政ノ思召ヲバ夢ニモ心得不レ申候故、樣々苛刻不廉ノ事モ相聞得候事カニ奉レ存候、依レ之謹デ其弊風ヲ正シ玉ハン儀ヲ愚按仕ルニ、總論儒業ノ所ニ申上候通リ、學問盛ニ倡ハセラレ、御城下ニ於テ大學校相立ラレ諸士學

間修德仕ラセ往クニハ、入學不レ仕者ハ治民ノ吏ニ相許サレズ候ハヾ、皆々學問仕リ吏風相直リ可レ申奉レ存候、尤御部方ヘ罷下リ候テモ、御用暇日ニハ請役人會交學問講釋等仕リ候樣ニ相成候ハヾ、連々禮義廉恥ヲモ相心得右ノ惡行等改リ可レ申奉レ存候、先年伊藤甚兵衞西岩井御代官トシテ山ノ日勤仕ノ時官暇ニハ肝入檢所或ハ醫師抔聚會、每夜小學孟子ナド講釋仕リ道理ニ倡ヒ候由、其風化ニテ候ヤ右ノ支配下ハ、訟獄不法ノ者モ多カラザリシト承リ候、左候ヘバ右ノ事共仕候共御用支ニモ相ナラズ、却而便利ニ相辨ジ可レ申候、前段ニ申上候通リ人ハ活物ニテ、何ゾ相應ノ玩好無レ之候テハ居レヌ者ニ御座候ヘバ、諸官吏モ右ノ惡行等モ有レ之事カニ奉レ存候、夫故基將棋俳諧抔ニテモ玩好之者ハ、餘リノ惡事モ相聞得不レ申候處、無學無藝ノ者ホド酒宴ヨリ相始段々惡行ニモ相趣クコトニ御座候、依レ之右ノ通リ學問僭ハセラレ候ハヾ、惡行慰ミノ代ニ御用暇ニハ詩文章諷詠贈答仕リ、夫ヲ慰ミニ仕候ハヾ、自然ト士風長ナシク可ニ相成ト奉レ存候、勿論詩賦文章ニハ古人ノ治民善惡ノ故事多ク有レ之候ヘバ、朝夕夫ヲ諷詠仕ルトキハ是亦先王禮樂ノ敎ニテ、汚穢不直ノ事モ互ニ恥カシク相成、無學ノ者自ヅカラ風化セラレ、法外ノ事モ相止可レ申候、左候ハヾ士風ノ行作玩好相分レ、士風改リ諸氏尊崇仕リ御風化ノ御助ニ相ナリ、誠ニ御仁政下民ニ相及シ可レ申奉レ存候

右七ヶ條ハ頗ル御政事ノ大事ニ御座候上ヘ、堂上ノ沙汰、諸官人ノ行事善惡ニ相及ビ、上言中ニ於モ賤者ノ議論仕候義最恐惧至極ニ奉レ存候、其上人ノ惡ヲ訐キ發シ候ㇷ゚ハ、君子ノ所レ惡ニテ申上候モ無レ據奉レ存

候ヘ共、不二申上一候ヘバ知セ上ベキ様無レ之候、知シ召ズ候ヘバ下民ノ痛苦ニ至リ候儀モ、御制戒行ハセラレ難ク御仁政モ下民ニ相及シ可レ申様無レ之儀ニ奉レ存候、依レ之無二本意一奉レ存候ヘ共、敢テ長者ノ罪ヲ避ズ書記シ申上候、尤此數條指タル御利益モ無レ之候ヘ共、申上候中ノ根本ノ事カニ奉レ存候、根本不レ治候テハ後條ニ書記候末事共不レ改儀ニ御座候故不レ堪二戰慄一奉レ存候得共、寸悃愚衷ヲ以敢テ上言仕候

郡鄕諸官吏

一御代官定役人ハ御郡方ニ於テハ、頗ル重任ニテ大綱ヲ申候ヘバ、御風化ヲ借ヒ人民ヲ撫育シ細目ヲ申候ヘバ、御田地見諸納取立訟獄ノ取サバキ御買米方抔ニテ有德ノ人ニ無レ之候ヘバ、甚ダ人民ノ安危ニ相預ルコトニ奉レ存候、先年ハ一鄕兩人ニテ金代取納仕候處、近年ハ右ノ取納大肝入ニ被二仰付一、御代官ハ二鄕兩人ニ相分リ候、依レ之其職分ヲ相考ヘ候ニ、左樣ニ御用繁多之理無レ之筈ニ候處、近年諸給人知行ノ田地見賴マレ候テ、御藏入田地見ノ序ニ見アルキ候處、數十人ヨリ賴マレ候由ユヘ、其身一人ニテ見果シ兼、御田地見役人ヘモ其村々請取ギリニ賴ミ見セ、兎用捨ノ引方仕リ、其知行ノ物成高小割帳ナドマデ仕出シ、其上ニハ年貢ノ勘定取納マデヲ綺ヒ候故八九月ヨリ歲ノ暮翌春マデ、其用事殊ノ外繁多仕リ、自己ノ職分訟獄取捌ニ暇ナク候ユヘ、責キ方別ニ役人ヲ相副ヒ、人間ノ諸難澁催促仕ルコトニテ候、且又大肝入方先年ト違ヒ御用多ニ相成候間、諸訟ヘ多クハ詮議一通リニテ折入

不レ申、御代官方ヘ相達シ候處、御代官ハ右ノ如ク御用之外諸士ノ頼マレ用事ニテ暇ナク候ユヘ、責キ役人ヘ相渡シ段々如レ此相傳ヘ候テ、諸事マハリ遠ク相成辨シ兼申候、尤モ右諸士ヨリ頼マレ用事御用ノ過半有レ之、自己ノ職分勤リ兼候ユヘ、御郡方償ニテ物書人相附加勢仕ル由ニテ候、偖テ又諸士ノ知行世話仕ルコト御免許モ有レ之、報禮金過分ニ相受候由、頗ル勝手ニハ可ニ相成一事ニハ御座候ヘドモ、其ユヘ御郡方ヨリ物書キ人相附諸御用モ不レ辨ノ儀、甚以不ニ取合一コトカニ奉レ存候、其内懇意ノ者ナド五人七人ハ御用相勤候内ニモ世話可レ仕處數十人ノ頼マレ事持チキリニテ、御用同然ニ相勤候由、イカホド其身勝手ニ相成候トモ、下ノ痛等ヲモ相考ヘ斟酌可レ仕事ニ奉レ存候、勿論タノミ申候諸士モ勝手ニ成候トテ、御上ノ官人ヲ煩ハシ第一御用不辨ニ仕ラセ、其上百姓ノ痛ニモ相成儀ヲ頼ミ候コト、不ニ取合一コトカニ奉レ存候、諸士ハ大小進トモニ家來シマリノ者可レ有レ之候ヘバ、自行ノ知行ハ面々手前ニテ首尾仕リ可レ然カニ奉レ仕候

一　先年ハ御代官上廻リ御村横目トモニ挾箱持セ不レ申由ノ處、近年何人相達シ候カ御免許ト相見得候、凡ソ如レ此モノハ無ヨリ有ハ其人ノ便ナルヿニ候ヘドモ、其ダケ下民ノ痛ハ相增ルコトニ御座候、其中ニ上廻リハ途中ノ御用數々ノ由ニテ候ヘバ挾箱便利ニ相見得候ヘドモ、小者召連候ユヘ何程ノ御物ニテモ書通ノ類ナドハ、其身ト小者ノ腰ニ附候御用袋ニテ事足リ候由、況ヤ御代官定役人鄉村横目ハ途中ノ御用ハ大方無レ之由ニ御座候ヘバ、何レモ先年ノ如ク相省キ候テモ可レ然奉レ存候、凡ケ様ノコトハ

其物入モ人脚モ御上ノ費ナク候儀ユヘ、下民ノ苦痛ヲ忘レ候ニモ無レ之心付キ不レ申コカニ相違シ、畢竟ハ諸官吏權威ヲ張リ下民ヲシテ恐レシメ候ヘバ、不法モ相止候抔ト申上ラレ候カニテ、勿論ノ樣ニ相聞ヘ候ヘドモ、乍レ恐時ニ當ラズ候樣ニ奉レ存候、亂世ニハ之ヲ威スニ武ヲ以シ、治世ニハ之ヲ導クニ文ヲ以スト申候ヘバ、如レ此治平ニハ德風ヲ以化セラレ候ハンコトコソ、御仁政ノ御教化ニモ相協可レ申候、妄ニ權威計ヲ逞マシク仕候トモ、段々申上ル通ノ行跡ニ候テハ、下民ノ心中ニモ不レ恐コニテ候、モシ德風ヲ以テ倡ヒ候ハヾ、假令葛ノ袴ニ藤布ヲ着シ候トモ、誠ニ衆星ノ北辰ニムカフカノ如ク感服可レ仕候、前段ニ申上候諸廉士如キハ、黃白織合セタル衣服ヲ着シ候由ニ御座候ヘドモ、民今ニ至ルマデ德風ヲ仰慕仕ルニテ相知候事ニ奉レ存候

一　御代官春秋役所下向ノ節ハ、御城下發足ノ日限申下シ候ユヘ、御役所村々境ギリニ組頭肝入ナド案內ニ相出候處、右案內ノ者遠見ト申候テ、境ヨリ十丁モ二十丁モ先キヘ步夫相出、組頭肝入ハ支度仕居、其者ノ告ゲヲ待候テ案內仕ル處ニ、右日限相違仕リ候ヘバ、下着ナキ內ハ每日案內遠見ノ者相出スコトニ御座候、夜中ニ及候テモ先々承リ配先ニテ退散不レ仕內ハ、路傍ニ蹲マリ居候、十數年前マデハ定役上廻ヘ、常ニハ案內相出シ不レ申處、近年ニ至リ御代官同然ニ遞村ノ村々ニテ案內相出シ候、是モ日限相違時々有レ之、近村ハ先キノ役所マデ步夫指遣シ承リ配候ヘバ、奴僕ドモ申候ニハ今日ハ酒ニ醉セラレ候ノ、或ハ不天氣ノ抔ト申候テ案內遠見空ク罷歸リ、其後罷通リ案內ノ者間違候得バ、

越度ニ相成ルコトモ有レ之由、如レ此儀ヲ見習居候ユヘカ、近年ハ小役人ニ至ルマデ宿案内ト申ヲ仕ラセ候、一兩年前マデハ御傳馬役前ヘ罷越候ヘバ、夫ヨリ馬指シノ者泊リ宿マデ案内仕ル處、近年ハ別段ニ案内ノ者相出シ、町頭カ村境ヘ相出待居リ、其ヨリ右ノ通リ泊リ宿案内仕ル由、ケ様ノ儀モ皆無益ノコトニテ、一人ヅヽノ様ニ御座候ヘドモ、通例ニ相成候由ニテ役所ニ皆左様仕ラセ候コトニ相聞ヘ申候、其外左モナキヲ急用ト申遣シ晝夜ノ分チナク奔走仕ラセ、或ハ自用ヲモ公用ニ托シ歩傳馬召仕ヒ候ナドモ有レ之由、其ニ準ジ面々權威ヲハリ不法ヲ仕リ、少シヅヽモ下民ノ相痛候コトノミ多ク相唱申候、凡テ此等ノ儀モ無用ヲ省キ歩傳馬妄リニ召使ヒ不レ申、民人ノ痛苦相考ヘ候様ニ仰付ラレ候ハバ可レ然奉レ存候

諸公事裁判 附 盗賊

一　御評方ヨリ犯科人或ハ諸出入ノ者、御評定所ヘ召登サレ候處、其ニ引張ノ者ドモ無レ殘召登サレ候ハ、無二餘儀一御事ニ奉レ存候ヘドモ、親類組合引張ノ者ドモ數々召登サレ日數滯留仕候ヘバ、農業ノ方頗指支申コトニ御座候、モシ不忠不孝殺害等ノ大罪ハ徒黨何十人召登サレ候トモ、御勿論ノ至リニ奉レ存候ヘドモ、左ナク候喧嘩口論博奕諸沙汰出入等ノ重科ニ無レ之分ハ、本人ノ外召登サレ候コト、御吟味ナシ玉ハンカニ奉レ存候、只今ノ如ク大勢召登サレ候ヘバ、盗賊ナドノ類ハ不レ及二申上一諸公事ノ類

マデ、不法ノ者結句相止ザルコト有レ之候、凡テ諸公事出入ニテモ上達ニ相成候ヘバ、右ノ大勢召登サレ候儀ヲ迷惑仕候ユヘ、無理ノ者アブレ者ニハ平生負ケ居穩便ニ仕候ユヘ、惡者ドモ恐ルヽコト無レ之、如何程モ無理非ノ道ノコトノミ仕リ候、其外壁キリ盜賊等ノ者ヲ見附達訴ニ仕候ヘバ、肝入檢斷方ヘ右訴人妻子家內、或ハ組合親類其外立廻リ候者ドモ召集メ、其々ノ口上書取候テ三日四日相カヽリ候上、筆紙ノ料マデ相ツグノヒ、其上ニ大肝入方ヘモ右ノ如ク召集メ、其ヨリ御代官ト段々ノ詮議ニテ、日數十日十五日モ農業ヲステオキ、其上ニモ右一卷御評定ヘ召登サレ候ヘバ、事ニヨリ日數滯留仕漸ク御聞屆相下リ候ヘバ、右入料其身ガ親類組合ノ償ヒニ仕候、依レ之夥シキ隙タハレ過分ノ金財相失ナヒ、大勢ノ世話ニ相成候ユヘ、如レ此類多クハ內々ニテ穩便仕盜物等少モ取返シナド仕ルヲ上策ト仕リ、或ハ右ノ盜賊惡黨ニ懇意ヲ結ビ以後ノ仇ヲ防ギ候ヤウニ罷リ成候、モシ稠シク吟味仕候ヘバ、火ヲ付候ノ闇討ヲ以テ仇ヲ報ルノ抔ト高聲ニ語リアルキ候體ユヘ、盜マレ候方ニテ恐惧仕候、此ニ準ジ萬事損失有レ之モ內々ニテ取靜メ候ヤウ相成候、左候ヘバ御上ノ御苦勞ヲモ相省キ、頗ル無爲ノ治法ニ似ヨリ候ヘドモ、畢竟ソレユヘ所々アブレ者盜賊ノ者ドモ恐レ候コト無レ之、惡行日々盛ニ相聞ヘ申候、右ノ者ドモ口外ニ相出シ語リ候ニモ、若見付ラレ候トキニハ盜物半分モ指遣シ候ヘバ、其マデノ事迚中カ〱以テ恐レ申サズ、村々町々ニ小宿ヲ拵ヘオキ、其者ニ過分ノ金財ヲ與ヘ己ガ手廻ハリ同前ニ仕リ、其邊ノ土藏家小屋ノ樣子ヲ承リ竊盜仕候ユヘ、近年ワル者ドモ甚ダ多ク相成、土藏等有レ之者

ハ、大方一二度ヅヽナハリヲ請ケ不レ申者無レ之樣ニ申唱候、如レ此ノ惡行ニ相交リ時ヲ得ホシキマヽニ横行仕候ヘバ、其レニ習ヒ博奕少壯ノノラ者ドモマデ、竊盜ノ惡行ニ相交ハリ惡事仕候、或ハ日中往還街道ニ相集リ町場遠ク引ハナシ、四五人ヅヽ路傍ニ寄合博奕相催シ、其徒黨ノ者往來ノ者ニマギレ、其場ヘ相臨ミ路人ヲ進メコミ金代ヲ取申候、博奕ウチ不レ申者ニハ無理ニ借金ヲ申カケ剝トリナド仕候、モシ重立候諸役人上下ノ節ハ、遠見案内ヲ見ツケ、山陰、或ハ橋ノ下ヘ隱レ居、又以相催シ申候、左ナク候ヘバ旅人ノ衣類ヲ剝ギ採、女世作ヲカドヒ、猿轡トヤラヲ相係ケツレ行、或ハ兩刀ヲ帶シ侍ノマネ仕リ、諸人ノ怪ミ無レ之樣ニ仕リ、右ノ事ドモ相行ヒ候由ナド時々申唱、往來指支候コトモ折々有レ之候、是畢竟皆々穩便ニ仕リ尤御仕置仰付ラルヽモ、其時早速ニ相開ヘ不レ申スギ候ユヘ、戒懲ノコト無レ之儀カニ奉レ存候、依レ之愚按仕ルニ盜賊ドモノ儀ハ左ニ相記候拙策ニテ、稍相止可レ申カニ奉レ存候、其外諸公事出入取サバキハ、御代官ニ仰付ラレ可レ然奉レ存候、御代官ハ鄉村ノ重任ニテ人才ヲモ相選マレ罷下居候ヘバ、左樣ノ諸掤等理非相分リ候、一通リノ犯科人ハ上達ニ及バス、同役定役人ナド吟味ノ上裁判決斷仕ラセ、凡ソ閉門繩カケ日數等ノ戒メハ、其所ノ遠近ニ隨ガヒ在鄉御牢ニテモ申付、早速ニ懲戒相行ハレ候ハヾ可レ然奉レ存候、其ノ內片付兼候分ハ、引張ノ者ドモ口上書相副本人バカリ相登サレ、若ソレニテ相分リ不レ申儀ハ、追々御代官ヘ仰付ラレ、親類組合再應承リ詰相答候、口上書相登セ候ハヾ其レニテ大抵ハ落着可レ仕候、モシ又大罪折入候事ニテ、右ノ通ニテハ落着仕兼候コトハ不レ及一

申上ニ、何ホド相登サレ候トモ勿論至極ニ奉レ存候、左ナク候コトハ右ノ通リ相行レ候ハヾ、御詳定所御用少ク相成農民ドモモ大勢相登候儀無レ之、第一御仕置即時ニ相行レ、惡者モド懲戒ニモ相成可レ申奉レ存候

一　前段ニ申上候通リ民間ツル者ドモ懲戒ノ事無レ之、日夜竊盜相行ヒ候ヘドモ、盜マレ人ノ方ニテ恐惧仕リ皆々見逃シ候テ詮議等仕ル者モ無レ之、ホシイマヽニ横行自由ノユヘニ御座候ヤ、近年夥シク盛ンニ相ナリ與通リノ盜賊ハ、他領ノ者多キ由申唱ヒ候、畢竟右ニ申上候通リニテ御領内住ヨリ相存ジ、如レ此横行仕ルカニ御座候、近年富民ドモ節々土藏物置等ヲ破ラレ候ニ付、用心仕候ユヘカ、當時ハ困窮者門戸不堅固ノ小家ヘ竊盜仕ルコト多ク相聞ヘ申候、此四五日前ノコトニ御座候、近隣ノ困究者ドモ兩人盜ニアヒ候テ、家内ノ衣類大カタ不レ殘トラレ候由、其内七十以上ノ老夫御座候處、去秋中ヨリ日々相ツトメ繩ナヒ、漸ク木綿ワタ入一ツ仕立候テ、其日出來仕リ重シ指置候由ノ所、其夜盜マレ候ヲ翌日承リ老夫申ケルハ、數年ノ惘望ニテ六七ケ月ノ手膏ヲ以、ヤウヽヽト拵出シ候キモノ、未ダ袖モサシ見ザルニ取ラレ候、再ビ拵ヘ候コト成難シトテ落涙ヲ催シ候由、誠ニ聞モ不便ナルコトニ御座候、當時ケ樣ノ類數々ニ相聞ヘ、甚シキハ火ヲ付候コトモ有レ之樣ニ申唱、時々出火モ仕リ民間甚相痛迷惑仕ル事ニ御座候、乍レ然諺ニモ盜賊博奕ハ國家ノ鳥鼠也トシテ、制シ難キコトニ申習ハシ候、依レ之竊カニ考候ニ如何ニモ天下ノ惡黨ヲ制シ候儀ハ相成マジク候ヘドモ、一國ヲ相制シ候儀ハ可二相成一カニ奉レ存候、其内博奕ノ者ハ皆御國出生妻子有レ之者ニテ、家々ニ相行ヒ候ヘバ頗ル制シ難ク候ヘドモ、

盗賊ノ儀ハ皆無頼ノ者ドモニテ、御領他領相通横行仕候ヘバ、御領内計リヲ相制シ候儀ハ可ニ相成一奉レ存候、民間ノ様子知シ召シ玉ハズ候テハ、其儀相成マジク聞セラルベク候ヘドモ、左ニ申上候措策行ハセラレ候ハヾ、金子僅カニ五六十両ヲ費ヤスニ不レ及候テ、永々御領内ニハ盗賊悪黨ノ者、一人モ有レ之マジク奉レ存候手段御座候、右御手段如何ニト申候ニ、御城下御町目明シノ者支配仕候乞食頭ト申者モ在々ニ御座候、右ノ者ハ民間少分ヅヽノ助力ヲ以テ、十村一軒ト申様ニ所々ニ小屋ヲ相掛ケ、乞食諸悪ル者ドモノ仕置候處、何ゾ盗賊翔落等御尋ノ者有レ之節ニハ、今以テ右目明シ方ヨリ段々支配下乞食頭ドモノ、大肝入組頭ト申附候ヘバ、御領内ハ不レ及レ申他領ヘ逃走リ候者ニテモ、大方見出シ申候、猶又其者其本來ヲ承リ候ニ、モト右ノ悪黨ドモノ内ヨリ立身仕候様ノ者ニ相成、民間ノ助力ヲ得テ妻子相續小カタ等召抱居候ユヘ、右ノ悪事ハ相改諸ワル者ドモ仕置仕リ居コトニ相聞ヘ申候、依レ之御領内ノ盗賊悪黨ドモノ儀ハ疾ト合點仕リ、何組ハ何人ニテ當時何方邊ニ居候ト申マデ、掌ヲ指ガ如ク心得居候之處、當時右ノ悪者ドモ盗ミノ爲ニ罷越往來仕候ヲ、眼前見居候トモ召捕ヒ候様申付ル者無レ之候ヘバ、其者盗ミ不レ仕内ハ相捕不レ申候、依レ之左様ノ者罷越候節ニハ、其段民間ヘ申通ジ候ニテ用心仕ル計ニ御座候、モハヤ其夜ニ至リ盗ミ仕候ヘバ、早速其所ヲ立除候ユヘ、其時ニナリ候テハ甚尋ネ難ク、遂ニ盗マレ物取返シ兼申候、モシ富有ノ者ナドハ右乞食頭ニ金財ヲ取ラセ、尋ネサセ候ヘバ早速ニ召捕ヒ盗物有切取返シ申候體ニテ、盗賊悪黨ヲ心得居候コト信ニ掌ヲ指ガ如クニ御座候、依レ之

相考候ニ、先御城下御目明ノ者へ仰付ラレ候ニハ、右ノ者支配下在々乞食頭ドモ盗賊人見アタリ候ハバ、盗ム盗マズノ時ニ拘ハラズ、何方成トモ見當次第召捕へ候ハヾ、右御褒美トシテ盗賊一人召捕ヒ候者ニハ、金二兩ヅヽ下シ賜リ、目明シノ者へハ是亦支配下ヨリ召捕へ相登セ候ゴトニ、金□歩ヅツ御褒美下シ賜ハリ候由仰付ラレ、目明ノ者ヨリ段々支配下へ申付サセ候ハヾ、乞食頭ドモハ困窮ニテ無慚強勢ノ者ニ候へバ、草ノ葉ヲ分テ穿鑿仕リ召捕候樣可レ仕候、尤何方ナリトモ召捕へ候ハバ、其者シマリ仕御傳馬ニテ相登セ、早速御糺問惡黨ニ無二相違一候ハヾ、直ニ右ノ通リ御褒美下シ賜リ候テ可レ然奉レ存候、左候ハヾ盗賊二十一人召捕へ候ニ過ズ候内、其儀ヲ及レ承候殘黨ドモ皆盡ク御領内ヲ立除候ヤウ可二相成一奉レ存候、尤其年ニ限ラズ年々右ノ事ドモ相觸レサセ候ハヾ、惡黨ドモモ其樣子及レ承永々右ノ儀相行ハレ候内ハ、御領内へ足ムケ仕ルマジク候、タトヒ間々罷越候カ御領内ノワル者ニテ一度竊盗仕候トモ、其コト相聞へ候ハヾ右ノ乞食頭ドモ爭テ穿鑿可レ仕候へバ、向後トモニ左樣ノワル者ドモハ他領へ罷越惡行仕候トモ、他領ノ惡黨ドモ御領内へ罷越候コト抔ハ、一人モ有レ之マジク奉レ存候、偖又御褒美等僅カニ取ラセ候テハ、乞食ドモ氣ヲイヅキ候コト薄相成、右ノ惡黨ドモヨリ賄ヒ可レ仕候へバ、相行ハレ難キコトニ奉レ存候所、右ノ通リ二兩ヅヽモ下シ玉ハリ候へバ、彼者ドモ身分ニハ大ナル儀ニ候ユへ、中々賄ヒ抔待居候ニ及バズ見當リ次第召捕可レ申候、尤目明ノ者ニ御褒美無レ之候テハ妬ミ氣相生ジ候コト難レ計奉レ存候、依レ之右ノ者ドモへモ下シ玉ハリ候ハヾ別テ難レ有感戴

仕候、御城下ノ悪者ドモ曲サニ穿鑿可レ仕候、其上支配ノ者一人ヅヽモ召捕候ホド御褒美有レ之ヿユヘ、怠リナク相觸可レ申候、右召捕者ドモハ御糺明ノ上、其罪ニ隨ヒ相行ハレ候ハヾ、縱ヒ御宥免追放仰付ラル者ニ候トモ、重テ御費ガ縱ヒ十分召捕候ニテモ百兩ニ過ズ候テ、永々御領內ヘ悪黨横行仕ルマジク奉レ存候、尤召捕候ニモ乞食頭ドモシマリ仕、段々其小宿〱ニ宿ト仕リ候ヘバ、御傳馬ノ外宿場人歩モ相費申マジク候、何トゾ御吟味ノ上此儀相行ハレ候ハバ、民間竊盜追剝人カドヒ等、白晝人ヲトヾメ候如キ諸迷惑相除キ、萬民安堵可レ仕奉レ存候、乍レ然幾者一人ノ愚案ニ候ヘバ、何カ指支候儀等有レ之相行ハレ申マジキ儀有レ之候ハンカ、不二相知一事ニ奉レ存候

大肝煎

一 大肝煎ハ士庶ノ間ニ居候任職ニテ郡中ノ支配仕リ、其者ノ德不德ニヨリテ甚ダ民ノ安危ニ預カリ候、當今ノ勤方承候ニ、御用多クハ手代等ニ任セ、其身ハ諸官吏ヘ追從諂ヒニテ公暇ヲ費シ、訟獄ノ諸出入ハ詮議ガチニテ御上下ノ損益ヲモ相辨ゼズ、先格ヲ楯ニ仕リ後難ヲ避ケ身ハレヲ專一ニ仕候ユヘ、諸出入十ガ七八達シ物ニ仕リ、民人ノ痛苦勘辨不レ仕樣ニ相聞ヘ申候、譬ヘバ一通ノ回文相出シ候ニ一鄕二十ケ村ニ候ヘバ、晝夜ニテ三十人ノ步夫ニテ相通ズベク候、一晝夜ニハ一村切ノ書通ト取合三十通相出シ候ツモリニテ、返書何ヤカヤト申候ハヾ一月五六千人程モ可二召使一候、御用ノ儀ニ御座

候ヘバ、何千人ニテモ無二余儀一コトニ奉レ存候ヘドモ、大肝入少シノ用心不用心或ハ遲速緩急ニヨツテ、數千萬ノ人脚損不損有レ之事ニ相見ヘ申候、畢竟御用座拂ヒニ相勤メ身バレ計リヲ相考ヘ、御上下ノ損益ヲモ相謀ラズ候、其上百姓ドモノ高分ケ願其外質物願ヒ、諸訴ヒ何ニヨラズ訴一通ニ付鳥目二百文三百文ヅヽ、音物受納ノ上願受取リ申候ナドモ有レ之由、或ハ村々肝入ドモヘ相タノミ頼母子無盡抔ト名ヅケ、過分ノ金財合力ヲ相受、又ハ諸渡シ方奸曲ノ者モ有レ之由相唱候、其風行ナハレ村々肝入ドモモ其支配下ヘ無心申カケ、下民ノ膏血ニテ身ヲ潤シ候者ドモ多ク相聞ヘ申候、如レ此コトモ畢竟ハ諸官吏ノ眞似ヲ仕リ、少ヅヽモ權威ヲ張リ候テ相行ヒ候故、果テリハ下民ノ痛苦ト相成候、依レ之大肝入肝入檢斷等ニ至ルマデ、一向道理ヲモ相心得不レ申、心ザマ不レ宜者ハ皆以テ下民ノ痛苦ニ相及候、大肝入一人ノ支配仕ルハ大抵數千人ヨリ數萬人ニ至リ、肝入檢斷ハ數百人ヨリ數千人マデノ司サ仕リ、頗ル民人ノ安危ニ相與リ候

一　質物男女身代金難澁ノ儀ハ御格式有レ之、御取立下シ玉ハルコトニ承候處、近年如何ナル事ニ候ヤ右難澁ノ取立不埒ニ付、質物召仕御百姓ドモ至テ迷惑仕ル由ニ御座候、内々ノ責キ埒明不レ申ユヘ大肝入方ヘ訴指出シ候ヘバ、余儀ナク一應モ二應モ承リ請日切等申付置候ヘドモ、日切相過候テモ追々詮議怠リ候ユヘ、又以テ願人追訴申出候ヘバ、又右ノ通リ申渡シ置候テ、五七年ニ至リ候テモ取立不レ申候、訴人モ二度三度ハ追訴モ申出候ヘドモ、肝入大肝入トモニ御上ノ官人ニ有レ之上、御用多ク申立候ユ

へ達テ訴ヒヲモ頻ニハ相出シ兼、是非ナク打捨損金仕事ニ相見得候、依レ之庭ヤス證文仕ッ金代請取候以後病氣ノ何ノト僞リヲ申出テ主人方ヨリマカリ歸リ、其後一向ニ不沙汰仕リ別段ニ一季等ニ居リ候テ、自分クリ合仕ル抔モ多ク相聞ヘ申候、右ノ通リ成行キ候ユヘ、當時質物召使ヒ候者ドモハ、其村ニテ心中存ジ候者カ、或ハ肝入檢斷大肝入ナド其支配下ノ者召使候外ハ、大方一季半季ノ日傭召使ヒ候樣ニテ農作ニモ實ヲ入不レ申、甚ダ迷惑仕コトニテ候、兼テ身上富有ノ者ハ前々召使候質物金、五人七人ヅヽ本金難澁ノ者モ有レ之、大方ハ右ノ難澁訴ヒ不ニ相出一者無レ之樣ニマカリ成、質物人指置兼候ユヘ田畠荒廢ニモ相至リ候ヤウニ承リ候

一 御百姓ノ中困究ニテ一季等モ召使兼、或ハ人數ヨリ大高ニテ手作ニ仕兼候者ハ、田畠他人ニ作ラセ其出物何程ト申合セ散田仕リ候所、其物成難澁ニ及ビ内々責キ候テ埒明不レ申ユヘ、肝入大肝入方ヘ訴申出候ヘドモ、右質物金同然ニテ埒明不レ申ユヘ、是非ナク地主方ニテ右散地ノ御年貢辨納仕リ候、依レ之不人數ニテモ手作ニ仕ル外無レ之迚荒シ作リニ仕リ、或ハ大高ノ散田難澁ハ地主困究相禿レ候コト抔有レ之、頗ル相痛事ニテ候、ケ樣ノコト抔ハ細事ニ御座候ヘドモ、畢竟ハ大肝煎ドモ怠リ候方ヨリ、田畠荒廢ノ基ニモ相成事故申上候

御田地見

一　豐凶ハ年ノ氣候水旱蝗災ニ由テ均シカラズ候ユヘニ、不熟ノ歳ハ百姓一人前、田ノ面御田地見ノ上、御引方爲シ玉ハリ候所、諸役人取扱ヒ様ニテ間々不ㇾ宜事ドモ相聞ヘ申候、大抵彼岸過候ヘバ惣毛ト申候テ、御郡司村々見合ノ節、御代官定役人同作ニテ何村ハ何免何分ト、惣毛一見ノ上村々ノ免モリ附置キ候ヲ、本則ト仕リ御代官定役人方ヘ請取、ソレヨリ村々見分ノ田地見役人ヘ書スキ相渡シ、其本則ヲ以テ引方ノ免相定ル由ニ候、因ㇾ之タトヒ其村惡作ニテ五免六免ニ可ㇾ相成、作毛ニテモ本則三免四免ニ御座候ヘバ、其本則ノ如ク引方相立申候由、如ㇾ此ニテハ百姓ノ相痛ム方ト心付候役人ナド間々有ㇾ之候トモ本則ノ外ヲ免相立候ヘバ役司自見惡シク、時ニヨリ役目ヲ放サレ候ハンカト恐レ候ユヘニヤ、本則ノ通相定ル由ニテ候、或ハ五分七分ノ免ニテ、可ㇾ然村ニテハ一免二免ニ有ㇾ之候トモ、是ハ御損失ノ方トテ本則ヲ不ㇾ用、見分ノ如ク五分七分ノ免相立候由、左候ヘバ役司ノ首尾ヨク稱美仕ル由、依ㇾ之競フテ本則ヲ引殘シ候様ニト出ルコトニ相聞得候、迚モ其見分ニテ善惡相分リ候ハヾ、本則三免ト御座候テモ五免ノ惡作ニ見得候ナラバ、其見分ノ通リニ免許仕候ハヾ御上下損益ナク平均ノ御田地見ト奉ㇾ存候、然ルニ右ノ如ク本則ヨリ引殘シ候ホド、役司ノ首尾宜ク候ユヘ、音物賄ヒ不足ノ村ハ至テ引方無ㇾ之候由、依ㇾ之村々ノ賄賂金年増ニ相カサミ申事ニ御座候、其中ニモ肝煎檢斷或ハ宿仕候者ナドハ、種々馳走追從仕リ候ユヘ、上作ニテモ過分ノ引方相受候、尤肝入等ハ困究百姓惡作ノ田ヲ借用、己レガ田ニ僞リ當座見分ノ間ヲ合セ抔仕候者モ有ㇾ之由ニテ、右ノ通ユヘニ困究惡作ノ者モ、

肝煎檢斷組頭等ノ外ハ馳走追從モ無レ之候ヘバ、引方至テ不足仕ルコト抔年々ノ樣ニ相聞ヘ申候、困究ノ百姓ハ五升一斗ノ米ヲ以テ飢寒ヲ凌ギ候處、ケ樣ノ不同ニテハ田地見ニハ無レ之、座上ノ引方同然ニ御座候、畢竟諸官吏不德ニテ利欲ニ觸ダサレ、自己ノ見分ノ通リ役司ヘ申出候コトモ仕リ兼、御仁政ニ相背キ下民ノ痛苦ニマカリ成コトニ御座候

米穀上納 幷船頭奸曲

一　米大豆トモニ四斗五升入ノ御定メニテ、右書附ノ木札相入外一升五合ノ口米相入、四斗六升五合ニテ俵仕、風袋トモニ重サ十八貫八百目トヤラニテ上納仕ル筈ノ由ニ候所、當時御藏升取リ不法ノ量リヤウ有レ之、宿元量リ立候ニハ米ハ四斗八升五合、九升、大豆ハ五斗マデ相入、重サ二十貫目前後有レ之候テモ、升取量リ立ニハ四斗六升五合ニ滿不レ申、時ニ欠(カン)ツキ申付ラレ候由、依レ之時ニヨリ五斗モ七斗モ不意ノ足米仕リ、困究ノ百姓甚相痛コトニ承候、尤百姓ドモヨリ上納仕ルハ四斗六升五合ノ積リニテ、御藏役人ヨリ船頭ドモ方ヘ相渡シ候ニハ、四斗七升五合ノ首尾ニ相渡シ候由、甚以不ニ取合一事ニ奉レ存候、船頭ドモヘ相渡シ候ニ四斗七升五合有レ之候ハヾヤハリ二升五合ノ口米ニテ、正シク四斗七升五合ニ相ハカリ可レ申事ニテ候所、一ツノ奸曲ヲ民人ヘ行ヒ見セ候、其外四斗八升五合九升五斗相入候殘米ト、右ノ欠ツギ米等ハ外ニ相入候儀モ、皆內川船頭盜ミ米ニ相成少シモ御益ニ不ニ罷成一候、依

レ之御藏役人升取ドモヘ船頭ヨリ賄ナヒ音物指遣シ、數十人ノ船頭ニテ過分ノ金財ニ相當リ候ユヘ、船頭勝手ニ相成候ヤウ量リ立ル由ニテ候、右四斗八九升五斗入ニテモ江戸深川御藏マハシ立ハ、四斗三四升ニテ五升ニ出候ハ稀ナル樣ニ承知仕候、左候ヘバ民家分外ノ升目過上仕ルモ、皆以途中ノ盜モノニ相聞ヘ申候、內川船頭ドモノ樣子承候ニ、石ノ卷マデ運漕ノヒラダ大抵四百俵積ニ候處、一艘ヨリ十二三俵位ヲ例ニ仕リ、盜ミ取上ハ俵相ハヅシ賣拂ヒ、右殘ル三百八十七八俵ヘ盜取候十二三俵ヲ、ワリナラシ俵ゴトニ何程ヅヽト拔キ取リ、船中ニテ俵仕拵ヒ仕リ、右四百俵ノ員數ニ間ヲ合セ候由、依レ之俵仕ユルマリ津方ノ役人不審不レ仕事ニ御座候ヘドモ、船頭方ヨリ是亦音物賄ヒ仕候ウヘ樣々ノ奸計ニテ相黑メ候由、或ハ御年貢御藏場ニテ請取船中ヘ積入候節、右四百俵ノ內ヨリ三十俵モ四十俵モ直ニ賣拂ヒ、金子自用ニ相辨ジ積下リ候、川通リノ途中ニテ商買米相トヽノヘ、殘ル三百六七十俵ノ口ヲ切リ、右相場米ヲ相交ヘ四百俵ニ拵ヘ員數ヲ相辨候由、其故津方役人見屆ノ節手入仕ル者ハ、米拵方不レ宜候ユヘ、其段御藏取納役人ヘ申來リ、上納俵ノ中札ヲ以テ村名本相改メ、津方ヘ引下シ米拵ニ直シ上納仕ルコトモ有レ之由、ソレニ付百姓ドモ升目拵ヒ方トモニ不レ宜トテ、益々嚴シク申來ル由ニテ、尤モ甚シキ者ハ五十俵モ七十俵モ賣拂ヒ、一俵ヨリ七八升ヅヽモ拔取四百俵ノ數ニ間ヲ合セ船底打放シ破船ニ仕リ、其ヨリ其所ノ人足ニテ取上候所、水中ニテ米ヌレフヘ候ユヘ俵仕緩マリ不レ申、四百俵相違ナク候ヘバ指タル御咎メモナク、右濡米拜借何樣ニモ可レ仕樣無レ之、其上極月返納ノ節ハ過

分ノ足米仕ルニテ、川通リノ御百姓至テ迷惑仕ル由ニ御座候、如ㇾ此ノ甚キ大悪事ハ船頭ドモ平生口外ニ語リ申候由、此等ノ奸曲ハ諸官吏モ承知ノ由ニ候ヘドモ、左ユク候テハ下シ賜ル運賃至テ不足ニテ運漕仕リ兼候ユヘ、諸官吏モ知ズ顔ニテ運賃ノ異名ニ仕ルコトノ様ニ申唱候、左候ヘバ盗ミ物ヘモ御上ヨリ御手入無ㇾ之コトニ相準ジ候、此等ノ儀甚以御仁政ニ相背キ候コトカニ奉ㇾ存候、名不ㇾ正トキハ事不ㇾ順、事不ㇾ順トキハ刑罰不ㇾ當ト見得候ヘバ、不正ノ名目相改メラレ運賃不足ノ分ハ御吟味ノ上相應ニ下シ玉ハリ、運漕相違ナク奸曲ノ事無ㇾ之様ニ稠シク仰付ラレ候ハヾ、御上下トモニ貞正ノ御政ニテ、百姓ドモヘモ非道ノ儀申付マジク奉ㇾ存候、海上運賃ハ相應ニ下シ玉ハルユヘ大方奸曲不ㇾ仕由、タトヒ有ㇾ之候トモ此者ドモハ死生不㆓相知㆒事ニ御座候ヘバ、如何サマ大抵ノコトハ御構ヒ無ㇾ之モ、乍ㇾ恐御尤至極ニ奉ㇾ存候、内川運賃ハ至テ小分ニ付、右ノ盗ミ米仕リ俵仕緩マリ居候故、深川着船ノ後御藏出入ニテ俵仕至テユルマリ、頗ル見分モ無ㇾ然、御拂方直段モ不ㇾ宜由承知候、仍ㇾ之右拔米ノ内ヲ以テ内川船頭共ニハ、金代ニテ正シク運賃相應ニ増下サレ、盗ミ米無ㇾ之様ニ成置レ候ハヾ可ㇾ然儀ニ奉ㇾ存候、尤右破損ノ濡米御カシ方ハ、百姓ドモ至テ相痛ム儀ニ御座候ヘドモ、御上ニテモ何様ニモ成サレ方無ㇾ之儀ニ御座候ヘバ、只今ノ通御借シ方申付候トモ、右濡米ノ内二俵モ三俵モ御役人方ニテ乾シ方仕リ、ソレヲ準則ニテ四斗七升五合ニ不足ノ分ハ右船頭欠ツキ申付候ハヾ、米拜借ノ者痛ミ相除キ可ㇾ申候、借又右ニ申上候御藏場上納ノ節、百姓共欠ツキノ儀ハ甚ダ相痛事ニ御座候、先年ハ四斗七升相入上納

仕リ來リ候由ニモ申傳候所、年々チギリノ日方相增候ト相見得、近歲ハ四斗八升五合九升大豆ハ五斗マデ相入候ヘドモ、其ニテモ時々欠ツキノ者相出申候、此儀何トゾ御吟味ノ上百姓相應ノ御仕置繩係等カ何ニカ申付、分外ノ痛無レ之樣ニナシ置レ候方可レ然奉レ存候、前條申上候通リ困窮者ハ僅カニ五升七升ヲ以テ、節季年始ノ飯米ニ心係ケ候者數々有レ之候所、右ノ如ク分外ノ過上其外ニモ欠ツキ抔ニ相當リ候トキハ、其暮何樣ニモ可レ仕手段無レ之御本金拜借仕リ候カ、一ト重ノ衣類鍋釜等質入ニ仕候カ抔仕リ、甚ダ相痛ムコトニ御座候、其上升取御藏守ナド煮賣等仕リ大勢ノ聚會ニ商買仕候處、遠方ノ者ナド鷄鳴ヨリ附運ビ未明ニ相詰候者モ、其日中過マデモ米見分無レ之、日暮夜中マデ御藏場ニ居候樣ニ仕ラセ、持參ノ喰物タベ盡シ煮賣ノ物商ヒ候樣ニ仕候、如レ此ノコトハ瑣細至極ニテ相記シ候ニ不レ及儀ニ御座候ヘドモ、民情トクト申上度、且窮民ハ少ノ事ニテモ頗ル痛苦仕候ユヘ申上候

諸物駄送

一　御方ヨリ駄送ノ物杉ノ櫛形杉皮唐竹シノ竹ワラ繩、或ハ漆ノ實上納錢等其外種々ノ物、歲中幾千駄御座候者カ、御城下マデ駄送仕ル處、其向々ノ諸官吏心ヲ用ヒ不レ申カニテ、甚ダ人民相痛申候、右諸駄送大方ハ春冬ノ內ニテ、耕作ノ妨害ニ相成マジキ樣ニ相間ヘ候得ドモ、附出シハ左樣ニテモ段段相重ナリ候ユヘカ、御城下ヘハ大方冬附出ノ物ハ翌春相到リ、春出シハ秋マデニモ駄送仕ル樣ニ及

レ承候、依レ之五月農事最中ニハ相開得不レ申候ヘドモ、其外ハ春秋トモニ駄送仕ルコトニ御座候、右クシカタ・リワラ繩ニ至ルマデ賣物ニ仕候ヘバ、甚ダ下直ノ物ニ御座候處、岩井郡東山邊ヨリ御城下マデノ駄賃代ハ、三四倍ヨリ十幾倍ノ入料相カサミ候ユヘ、商賣ニ仕ル者無レ之候、御用物ニ御座候ヘバ山中ヨリ伐リ出シ候物カ、村方ヨリ上納ノ者ニテ御買代相費不レ申、駄送ハ御傳馬ニテ御入料少シモ相費ヘ不レ申候ユヘ、民害ヲ上達不レ仕、御城下邊ニテ一駄ノ御買代六七十文ヅヽノ物ニテモ、十數ヶ所ノ御傳馬ヲ以テ數百千駄ノ駄送仕ル儀、甚ダ以痛マシク御仁政ヲ相害シ候コトニ奉レ存候、尤俵仕ニ仕ル物ハ道中ニテ俵仕緩マリ候ヘバ、其段先々役前ヨリ申下シ候ニ付、始テ附出シ候處ヘ相通ジ俵仕拵直シ拵仕ラセ候儀モ在レ之、或ハ道中ニテ風雨ノ爲ニ朽チ候ヘバ、不二御用立一由ニテ亦以右ノ宿々傳馬ニテ相返シ候抔モ有レ之由ニ御座候、奥通リヨリ春中駄送仕ル物モ、御城下近所ホド御傳馬カサミ候ユヘ、夏秋ニ至リ新町七北田邊ニ、ワラ繩竹カラノ類夥シク累リ居候モ相見得候、久シク風雨ニ晒シ置候ユヘ、右ノ内ニモソラ繩竹カラノ類ハ尤朽棄リ、中々御用立候物ドモ相見得不レ申候、依レ之右ノ弊ヲ相除候儀愚按仕リ候ニ、山出シノ者ハ其所近郷ニテ御拂方仰付ラレ、右拂代ヲ以御城下ニ於テ御買上御用立候方可レ然奉レ存候、作レ去御城下ハ在郷ト違ヒ諸物高物ニ御座候間、右ノ御拂代バカリニテハ不足可レ仕候ヘドモ、山出シ物ハ伐リ方運ビ方人足代御取立、其ヲ相加ヘラレ候ハヾ違テ御物入ナク、御城下ニテ可二相辨一奉レ存候、繩ワラ等ノ御百姓方ヨリ上納ノ物ハ、御城下ニテ御買物ニ成シ置レ候間、代ニテ上

納仕候様ニ仰付ラレ候ハヾ、民間甚以クツロギニ可ニ罷成一候、タトヒ高直ニ御買上ナシ玉フトモ、百姓大勢ヨリ少分ヅヽノ代上納仕リ候ヘバ少モ相痛ミ不レ申候、左候ヘバ朽不レ申宜キ物御入用次第御用立、宿場ニテハ夥シキ御傳馬相除、依仕拵ヘ隙タハレノ入料モ無レ之、御上下ノ御利益ニ奉レ存候

一　山里漆ノ實年々與通リヨリ相登サレ候所、諸駄送ノ内最夥シク、年ニヨリ幾千駄ト申程ノ御傳馬ニテ農事ノ妨ニ相成候間、其所々ニ於テ蠟シメ所仰付ラレ、蠟ニテ駄送仕リ候ハヾ莫大ノ御傳馬相除キ可レ申候、木ノ實ニテ相登サレ候テモ御城下ニ於テシメ方仰付ラルベク候間、タトヘ御物入ハ少々相增候トモ、右ノ通リ相行ハレ候ハヾ、民間大ニクツロギニ罷成コトニ御座候

一　上納幷ニ御渡シ方代先年ヨリ錢ニテ駄送仕リ候所、此儀御勘定所便利ノコトニ相見得候ヘドモ、右ノ諸駄送ト同ク宿場相痛候、一駄ニ錢四十貫文相付候處、其所々ニテ金ニ直シ御金ニテ上納仕候ヘバ、大抵三百駄ノ錢ハ馬一疋ニテ可ニ相辨一候、如レ此ノ御傳馬人脚相省候儀ニ御座候間、少々御勘定所不便ノ儀有レ之候トモ、金上納ニ仰付ラレ御渡シ方ハ御金ニテ、端代ノ所バカリ御買上ニテ渡シ下サル方可レ然奉レ存候、尤上納代ト申候ヘバ撰錢ニ仕候ヘバ納方ニハ御傳馬外ニ別段ノ人脚モ相痛ムコトニテ候

一　杉ノ椨形等右ニ申上候通リ、山本御拂代幷ニ伐方運ビ方人足代ニテ、御城下閖釜邊ニ於テ御買上御用可ニ相辨一カニ奉レ存候處、モシ左様ノ儀成セラレ難ク候ハヾ、右クシ形ハ杉コバニ御用立可レ申候

へバ、御城下細工人相下サレ其出所ニ於テ、コバニ相分ケ駄送仕ラセ候ハヾ、是亦莫大ノ御傳馬人歩相省キ可レ申候、御入料ハ僅カノ儀ユヘ、右クシ形ニ相成候枝末木不足ノ處ハ、御拂木仰付ラレ候テモ御間ニ合可レ申候

右ノ通リ諸送物御吟味ノ上相省カレ候ハヾ、御用モ無レ滞相辨ジソレ〳〵ノ役人モ相省カレ、民家ニテハ例年ノ十ガ一ニ御傳馬歩夫相ツトメ可レ申様、御百姓ノ内ニモ無人ニテ埒明キ不レ申至テ迷惑仕候、ケ様ノ時抔ニハ右ツラ繩竹カラ様ノ物ヲモ、縦ヘバ五七十文ノ場所ヲ百文以上ヅヽヲ以テ傳馬相雇ヒ駄送仕候コトニテ、困窮馬ナシノ者抔ハ別テ相痛ゴトニ御座候、依レ之右ノ通リ駄送相省ブカレ歩夫等相減候様諸役所ヘ仰付ラレ、前段申上候通リニ成下サレ候テ、御買上代モシ御拂代ニテ不足有レ之候ハバ、縦ヒ右駄送御傳馬代ト名ヅケ往還脇町トモニ、御傳馬仕者共ヘ代ニテ上納仕候様仰付ラレ候トモ、少分ヅヽノ代銭ニテ相痛ムコトニハ無ニ御座一候、依レ之少々御損失ノ方ニ御座候トモ、右ノ通リ相省カレ候ハバ御百姓夥シキクツロギニ相成、農事不レ失レ時心ノマヽニ耕作可レ仕候、左候テ秋収宜ク御田地見免引等莫大ニ相減候様罷成候トキハ不レ軽御利益ニ奉レ存候、右諸駄送百姓相痛候儀ハ、御代官御村横目ナド心付申候儀ニ候ヘドモ、皆以テ眼前ノ御益計リヲ存候ユヘ、民害甚シク候モ默止居候儀ニ相見得申候

御留野

一御郡方御留野仰付ラレ候所ハ、御出獵遊バサレズ候内ハ、鐵砲ナラシ候コト無二御座一候ユヘ、猪鹿鴻雁ノタメニ稻麥大豆損亡仕ルコト不レ少候、秋中田ノ實成熟ノ頃ハ實雁刈始メ候所ヨリ喙ミ入、段々刈シマヒマデ所々ニ五十七十ヨリ數百千マデ群集仕リ喙ミ入候ユヘニ、暫時ノ間ニモ夥シクハミ盡シ候、猪鹿ハ兒獸ヲ引ツレ夜中田畑ヘ亂レ入、刈シマヒ不レ申所ハ田ノ中ヘ込ミ入候テ立チ、稻泥ノ中ヘ込ミ入候テ踏ミ入レハミ亂シ、刈リ束ネ可レ申樣モ無レ之狼藉仕リ候、仍レ之所ニヨリ一反ニテモ二斗三斗モ取不レ申樣ニ相成コトニ御座候、刈稻ハ穗バカリヲ喰切ホシ置候稻杭ヲクツ返シ抔仕候、ケ樣ノコト有レ之候テモ大方御田地見以後ニ御座候ヘバ、御引方モ無レ之御年貢上納仕候、或ハ畑ヘ相入候テハ種大豆ヲ拾ヒ食シ候ユヘ、二度モ三度モ蒔直シ夜番抔仕リ漸ク生ヒ立候テモ、二ツ葉ノ内ハ畦並ニススリ食シ申候、雁菱喰ハ田ノ實喙盡シ候ヘバ、其レヨリ畑ヘ上リ仲春雪ノ消間〳〵ニヒシト群リ居、青芽立候麥苗根ボリノ樣ニ仕候、大麥ハ民家第一ノ常食ニ御座候處、右ノ通リ喙ミ盡シ候テモ大豆ノ如ク蒔直シ候コトハ不二相成一候ユヘ、喰殘リヲ漸々ト糞養手入仕候テモ、固ヨリ根ホリ又ハ芽葉殘ラズ喙ミ切候ヘバ、生育茂盛仕リ兼至テ惡作ニテ五箇一モ實取無レ之樣罷成候、仍レ之餘リ據ナク鴻雁多ク候年ハ、一村ギリ所々ニ小屋相係ケ、三四人ヅヽ廻番ニ相出シ追立候得ドモ、御留野ニ居ナレ人ヲ

不レ恐候ユヘ、彼處ヲ追バ此ニ集リ此ヲ追バ彼處ニ群リ候、其上畑ハ大方山澤所々區々ニ有レ之候ヘバ、何樣ニモ追立兼申コトニテ候、近年御留野ニモ猪威シノカラ鐵砲相許サル由ニ候ヘドモ、大抵秋夏內計リニテ麥ノ防ギニハ用立不レ申候。尤御留野ニハ獵師不自由ニ御座候ユヘ、他村ヨリ相雇ヒ候モ入料ノミニテ久シクモ相雇ヒ難ク、况ヤ何ノ獲モ無レ之殼鐵砲夜中ニ翔アルキ候儀ハ不レ仕候ユヘ、是以大豆ノ爲ニモ用立不レ申候、左候ヘバ何樣ニモ防ギ方無レ之候故、直ニ鴻雁猪ノ囿ノ如クニ御座候、先年ハ里前町場ニテ熊猪ナドハ甚ダ見馴ヌコトニ承リ及候所、近年ハ形ノ如ク所々猥藉、時ニヨリ町場ヲ翔步キ、或ハ人家ノ菜園ヲ喰ヒ亂シ、熊猪トモニ深山幽谷ノ如キコトモ時々有レ之候、其ニ準ジ田畠相荒シ申候猪ハ麥抔ヲバ食シ不レ申者ニ承リ候所、近年ハ鴻雁ノ如ク根ホリ仕其上フミ込候ユヘ、大ニ蹈荒シ喰亂シ申候テ民害夥シキコトニ御座候條、何トゾ御留野無レ殘相明ラレ、鐵炮持人多ク御免許猪雁トモニ討セラレ候ハヾ、御田地耕作快ク仕リ一入氣ヲイ付キ糞養可レ仕候、御出獵ノ節ハ其時ニ至リ、其所々一兩月前ニ御留仰付ラレ候テモ、他ノ明野ヨリ討立ラレ候鴻雁、不レ殘新御留野ヘ群集可レ仕候、左候ヘバ御狩ノ爲少シモ指支申マジキコトニ奉レ存候、且又御獻上御討セ候ニテ御留ノ儀ナドニ御座候ハヾ、御獻上過候ハヾ直ニ相明ラレ候カ、又ハ御留野ノ所ハ御年貢三箇一モ御宥免ナシ玉ハンコトニ奉レ存候、如レ此事ハ御上ノ御損益細民ノ飢寒ニ預リ候テ、不レ輕義ニ奉レ存候

御流木

一　御郡方里々へ山林ニ引隔候所ハ、近來薪不自由、年ヲ逐テ高直仕ル故、材木所持ノ者ハ、此節ト頻リニ賣拂候テ、林木伐リ盡シ候事ト相見得、里前薪甚ク不自由仕リ、直段貴ク細民迷惑仕候、依レ之深山ヨリ御流木時々相出サレ候ハヾ、市町ノ賣木モ下直可レ仕候、右ノ儀ヲ山林ノ役人へ相語リ候者有レ之由ノ處、御物入勝ニテ御損失ノ方ユヘ、御取上モ成ラセ難ノ由承リ候、尤ノ儀ニ相聞へ候共、如レ此コトハ民間ノ潤澤不レ少候へバ、幾重ニモ御吟味ナシ玉ハンコトカニ奉レ存候、深山幽谷人跡稀ナル所ノ木ハ、縱ヒ下シ玉ル迚モ、取運ビ不レ罷成ユヘ、取候者モ無レ之、良木大材年々朽棄リ、空ク土中ニ埋リ候、譬へバ一萬兩ノ御物入ニテ、深山ノ大材御流木ニ相出サレ、八千兩ニ御賣方成シ置レ候へバ、現ニ二千兩ノ御損失ニハ御座候へ共、右御損金他國へ拔ケ候コトニモ無レ之、民家雇ヒノ人歩日傭金ニ下シ玉ル時ハ、右金御國ニ止リ候ユへ、直キニ御上ノ御金同然ニ奉レ存候、次ニハ困窮百姓或ハ名子水呑ノ家業無レ之者ドモ、右人歩ニ召仕ハレ、其價ヒ下シ玉ル時ハ、右ノ者ドモ渡世相續仕候、勿論別段ノ薪木相出サレ候分ハ、民間ノ潤澤ニ相成市町ノ薪下直仕リ、所々ノ材木ヲモ伐盡シ不レ申、一山ヲ餘シ候へバ、一山又十山ヲ餘シ候時ハ、十山即御上ノ餘リ山ニテ候、昔青砥左衛門滑川ヲ渡ル時、青銅百文ヲ川中へ落シ候へシニ、二百錢ニテ水潜リヲ雇ヒ取上候テ、永ク天下ノ寶ト仕候ヲバ、治國

ノ大法ヲ知ケルトテ、世々ノ美談ニ仕候、况ンヤ流木等ノ儀ハ不㆑輕コトニテ、國家ノ大利益ニ奉㆑存
候、乍㆑然近年御流木相出サレ候賣リ方ヲ見聞仕リ候ニ、御損失有㆑之コソ勿論ニ御座候、タトヘバ始
メニハ金一歩ニ上木八十本、賣方ノ由相觸候所、市町賣木ヨリ高直ニ當リ候ユヘ、民家相トヽノヘ不
㆑申候、其後半年モ晒シ置候テ、金一歩ニ百本ノ直段ニ申渡候ヘドモ、風雨ニ晒サレ稍朽メ古候ユヘ、
町木ニ劣リ候迚、又相調不㆑申候、又其次ニハ百二十本ニ爲シ、百五十本ニ爲シ、朽ルニ從テ直段引下
ゲ候ヘドモ、兎角市町ノ木ヨリハ、不勝手ノ樣ニ計リ直段申渡候ユヘ、近村持運ビ勝手ノ者ノ外ニハ、
相調ヒ不㆑申候ユヘ、容ク詠メ居リ三四年モ晒シ候ヘバ、一二ノ見ワケモ無㆑之樣ニ朽サリ候時ニ、三
百本一歩ノ、五百本一歩ノト申渡シ候テモ、買人無㆑之ユヘ、山ノ如ク累ネ置候良薪、風雨ノ爲メニ朽
失ヒ申候、如㆑此ニテハ御物入勝コソ御尤モ至極奉㆑存候、如㆑此ノコトモ諸役人御利益ノ大綱ヲ存ゼ
ズ商賈ノ小利ヲ貪リ候如クニ御座候ユヘ、果ニハ過分ノ御損失ニ相至リ候、始メハ十本ニテ望ミ人無
㆑之候ハヾ、九十本ニカ、百本ニカ、市木ヨリ勝手ノ樣ニ申渡シ候ハヾ、細民ハ陋シキ者ニテ、僅カノ
高下ヨリ利ニ趨クコトニ候ヘバ、諸民相調ヒ可㆑申候、過半相拂候上ニ擇ラミ、殘シ候分ハ又其ホド直
段引下候ハヾ、旬月ノ內ニモ御拂ヒニ可㆓相成㆒候、左候ヘバ多クハ御損失モ無㆑之、甚ダ下民ノ潤澤ニ
相成事ニ奉㆑存候

御買米

一當時細民困窮ニ至リ、農業ノ妨ゲニ相成候儀ハ、御買米ニ御座候、乍レ去御買米相止メラレ候テハ、第一御繰合ノ御指支、次ニハ御領內ノ米穀賣所無レ之、諸上納可レ仕樣無レ之故、不レ得レ止ノ御事ニ奉レ存候、因テ乍レ恐御上下ノ障無レ之樣相考ヘ候處、細民諸上納繰合ノ儀ハ後條ニ申上候、一割御利足ノ質物金借下サレ、摺切困窮ニ無レ之民ハ當時ノ如ク御買米拜借諸上納クリ合可レ仕、左候テハ御買米金高常例ヨリハ莫大ニ相減可レ申候間、年々其村切リ分限宜キ百姓、又ハ大酒屋大商人共ヘ、分限相應ノ米賣上仰付ラレ候ハヾ、細民共拜借ノ高ニハ、優カニ可二罷成一奉レ存候、農家豪富ノ者鄕ノ大小ニ從ヒ、一鄕ニ三五七人ヅヽモ可レ有レ之候、此者共ハ大高ニテ、平民ノ十倍モ十五倍モ耕作仕リ、幾石モ夥シク所持仕候、大酒造リ候者ハ、石高ニ因テ酒役召上ラレ候ヘドモ、多クハ隱シ置、僅カニ四貫文ノ御役ニテ、五十石百石ノ造方仕ル由、其外二三百石以上ノ造リ方仕ル者ハ、其レニ從ヒ御役モ上納仕ル由ニ候ヘ共、是亦夥シキ密酒御座候樣ニ相聞ヘ申候、大商ハ一歩二歩ノ商ヒ御判ニテ、諸方ヘ手マハリ手代相廻シ諸物買、他領內數百千萬兩ノ商買仕候、右ノ豪富共モ何レモ、一鄕ニ三五人ヅヽハ相聞ヘ候所、其繰合分限トモニ村肝煎大肝入ノ者、大抵ハ心得居候間、實事申出サセ、五十兩百兩ヅヽノ御賣リ上仰付ラレ候テモ、少モ相痛不レ申事ニ御座候、其外ノ中商人中酒屋中分限、十兩二十兩ノ賣

上仕候者共數多可レ有レ之候、右三種ノ富有ノ民貴リ上ニテ困窮者共、拜借仕候御買米高ニハ可ニ罷成ー候、左候ヘバ御買高モ相減不レ申、細民拜借金モ不レ仕、御上下ノ益ニ奉レ存候、凡テ困窮百姓ハ米所持不レ仕候ユヘ、御買金拜借仕リ、米相調上納仕ル所、春ニ至リ米高直ニ相成候ニ付、歲ニヨリ過分ノ足米仕リ、元來ノ困乏ヘ右ノ利足金相賦リ申候ユヘ、所持ノ田地モ年々ニ宜キ所切リ渡シ、至テノ惡田計リ所持仕候上、御買米指賦リ申、セツキ役人ニ引出サレ候テ、農隙ヲ遮ギリ候儀春二月ヨリ相始マリ、近年ハ七月限リニ指賦リ候ユヘ、田畑何樣ニモ取扱ヒ仕兼候、甚シキ者ハ一圓田畑手付不レ仕、世上田植相シマヒ候時分、肝煎方ニテ村中ヨリ人足相出シ、田ウナヒ代ガキ田植マデ、一日ニ相仕舞候樣ニ仕候所、田ノ草時モ有責付賦リ方ニテ翔アルキ、田ノ草水ノカケ引モ不レ仕、秋收ニ至リ一反ニテ五斗入四五俵ヅヽモ出候田ヨリ、僅カニ二三斗モ、相出候カ、或ハ皆無ニ罷成候故、不レ得レ止身代引ツブレ、其身妻子賣人ニ相出候テモ不足仕リ候ヘバ、血スヂ有レ之遠親類共五十人モ百人モ、大肝煎御役人ヘ相願ヒ召集メ、甚ダ非義ノ合力相受、漸々上納相シマヒ候、如レ此ニ相成候共始マリハ、作毛不レ宜候カ病人御座候カ、何ゾ災難ニ相當リ候ヘバ、御惠金御買米金拜借諸上納仕候處、果テニハ右ノ通リ罷成リ候、ケ樣ノ者共ハ極々ノ摺切ニテ、一村ニ二人三人ト申程ニ御座候、其外ノ困窮者共モ其ニ準ジ、惡田計リ所持仕リ、御買米賦リ方セツキニ會申候ヘバ、右ノ通リ隙無レ之ユヘ、自然ト田畠モ作毛不熟仕ル事ニ御座候、依レ之右ノ通リ爲置レ候ハヾ、困窮者モ二月ヨリ六七月マデ、指賦リ責キ方

ヘ引立ラレ候、農業ノ隙タハレニモ無レ之候ヘバ、平民ニ相ツヾキ大抵ノ作毛ニモ可ニ相成ニ奉レ存候、偖又右ニ申上候富有ノ者共ヘ、賣上仰付ラレ候ハヾ、迷惑可レ仕樣ニ相聞ヘ候ヘドモ、歪ク相痛ミ不レ申事ニ御座候、豪富ノ者共ハ春ニ至リ御買米最中米高直ヲ待居、貯ヘ置候米ノ外買置等仕リ、富民共申合ムザト米相出シ不レ申候ユヘ、市中米無レ之大上ガリノ節ニ至リ、御買米上納ノ者共ヘ自分賣仕リ、窮民難儀ノ節ヲ待居リ、高利ヲ貪リ候事ニ御座候處、賣上ニテハ右ノ如キ自分賣ホドハ十分ニ利足取兼候ヘ共、別段分限ニ從ヒ所益仕ル事ニテ御座候間、相應ノ賣上少シモ相痛不レ申事ニテ候、右ノ通リ仰付ラレ候儀ハ、却テ多キニ取テ少キヲ助ケ、急ニ周シテ富ルニ不レ繼ノ御仁政トモ可ニ申上ニカニ奉レ存候、乍レ然大肝煎肝入共ハ、大方右富有ノ者ヨリ役介世話ヲ相受候カ、或ハ緣者親類ニ成居リ申者ニ御座候ヘバ、分限心得居リ候テモ、實義申上マジク候、御代官方ニテ其者共召ヨセ、御上ノ御用ニ相立從テ困窮摺ギリノ者共ヘ助力同然ノ儀ニテ、內々宜ク相暮シ候者共ノ本分ニ有レ之段、利害トクト申含メ候上、大肝煎肝入荷擔ヒイキ抔仕候樣子相知レ、賣上分限相應不レ仕ナド追々相知レ候ハヾ、肝入大肝煎召放サレ、御上ヲ欺キ候御咎仰付ラレ候ハバ、虛說申上マジク候

一　御買入富有ノ者ニ候ヘバ、至極ノ奸曲御座候由申唱候、其外肝煎仕ル者兼役ニ候ヘバ、是亦奸計相行ヒ候由、右ノ品ハ富有ニ候ヘバ、譬ヘバ其村ヘ御本金千切位可ニ相入ニ候ヘバ、六七百切モ受取、三百切モ四百切モ其時宜次第、己レガ金財ヲ御本金ト欺キ、御百姓ノ內ニテモ平民米難澁無レ之者共

へ、別帳ヲ仕立相渡シ、首尾ツクロイ指置申由、サテ翌春ニ至リ御買米上納ノ節ハ、金子指賦リ候ヲ御百姓ドモヨリ受取置、御買人方ニテ五十兩七十兩ヅヽ、一日ニ相調ヒ、直ニ吹拵ヒ仕候處、右奸曲ノ借シ金相渡シ置候者共ヨリモ、市中直段ヲ以テ相調ヒ、藏入仕ル名目ニテ右ノ元利金受取、直ニ所務仕リ候ユヘ、米高直ニテ時節宜ク候ヘバ、兩三年ノ内ニモ夥シキ分限ニ罷成候者數多御座候由申唱候、近年御買人暴富仕ル者ハ、皆以此奸曲相行ヒ候コトニ相聞ヘ申候、乍レ然御上ヲ欺キ候重罪ユヘ隱密ニ仕候ヘ共、數十人ノ内ニハ右ノ手段露顯ノ事モ御座候ト相見得、去々年中カ一二ノ迫マ方ニテ、右密計露顯仕リ候御買人有レ之、甚ダ以内々モメ合候テ、御買人退役ノ上、自分渡シ金皆以テ損亡ニテ、御沙汰ニ不レ及相スミ候由、右ノ通リ危キコトドモ開見仕候ヘドモ、利欲ニ耽リ候者共故、中々奸曲相止不レ申候、依レ之當時ノ御買人ドモ繰合宜キ者ハ不レ及レ申、不レ宜者モ兄弟近キ親類相意ノ内ニ富有ノ者有レ之候ヘバ、其者金本ト仕リ、利足相分ケ候由申唱候、總ジテ肝煎ハ其村ノ司ニ御座候ユヘ、御買人兼役ニ候ヘバ、右ノ奸計幾重ニモ自由仕候、或ハ至テ困究ノ肝煎兼役ニ候ヘバ、脇名代ヲカリ其身過分ノ御本金拜借仕リ、細民ニハ借シ渡不レ申、翌春ニ至リ候ヘバ、又種々ノ奸計相行ヒ首尾仕候、兎角御買人兼役相禁ゼラレ候方可レ然奉レ存候、偖又右ノ奸計相止ミ候儀ハ、其村ニテ一箇年中ノ御惠金御本金人高帳二冊ニ仕ラセ、一冊ハ御代官方へ取上置、翌春人高帳村村印形ノ定役人、其所々ニテ百姓一人前拜借ノ金高直ニ承リ屆、帳面ニ仕立置候帳面へ引合候ハバ、正直奸曲相見得可レ申候、左候

ハバ細民法外ノ痛無レ之、御買人共モ御上ヲ欺キ候罪犯モ自ラ相止可レ申事ニ奉レ存候

御買夫

一　御買夫一人ニテ金一兩二歩ヅヽ下シ玉ハリ、年々民家ヨリ召仕ハレ候處、御城下又ハ江戸ヘ罷登リ候ユヘ、衣服脇指雨具樣ノ物マデ支度仕候ニテ、下シ玉ハル一兩二歩ハ大方支度料ニ計リ相成候ユヘ、罷登ル者無レ之候、依レ之民家ツナルキヲ以テ增金相出シ、其年ニ因テ四兩前後ヨリ七八兩マデモ相雇候、五箇年夫ハ二十兩位ヨリ三十兩以上マデモ相雇候處、是又、下シ玉ハル一箇年六切ノ積リノ外ハ、皆以百姓ツナルキ高割等ニ仕リ候テ、至テ相痛ム事ニ御座候、偖又御買夫共勤方ノ儀承リ候ニ寬慢怠惰仕リ、在鄕ニ居候時ノ三箇一ヲモ相働キ不レ申、尤御大所ニテハ五年夫ノ者ハ不レ及レ申、一箇年夫トモニ種々ノ奸曲相行ヒ、其役付キニ因テ、一箇年中ニ五兩十兩五十兩以上モ盜ミ取候由ニ御座候、其奸曲ヲ承リ候ニ、第一油役共外炭薪米味噌酢醬油酒菓子何ニヨラズ、多少ハ可レ有レ之候ヘ共、種々ノ奸計ニテ盜ミ取申候由ニ御座候、何レモ奸曲有レ之中、荏油ハ別テ高直ノ物ユヘカニテ、大抵一月ニ五兩位ヨリ六七兩ヅヽニ相當リ候由、右ノ通リ金財涌ガ如クニ候故、前丁ニ小宿ヲ拵ヒ置、絹帛ノ衣服金拵ヘノ脇指シ諸道具右小宿ニ預ケ置、同役共ニ申合セ、惡所通ヒ杯仕リ、時々ノ遊戯仕ル由申唱候、如レ此ノ所行ニテ身ヲ侈シ居リ候ユヘ、季明キ罷下候テモ、至テノ者ニ相成、鄕里ノ少壯共寄

セ集メ江戸風流ノ物語仕リ、ビンヒゲヲナデ候計リニテ博奕師ニ相ナリ候、カサテハ商賈ニ相出候カニテ、本業ノ農事ツルサクムダ者ヲ心係ケ候、總ジテ季明キ罷リ下候者ニ、直グニ農業仕ルハ實體ナル者抔計リニテ、其外ハ日ヨリ見居リ、右ノ野良者ガ末業ニ趨リ候類ニテ、甚以民風ヲ相壞リ候、仍レ之愚按仕リ候ニ、御郡方ヘ御買夫仰付ラレ候ニハ、其年ノ高下ニ因テ、民家ニテ召使ヒ候一季直段ヨリ御抱金一倍モ相増シ、諸支度仕リ候テモ、民家ノ一季同然ノ價ヒ下シ玉ハリ、大肝煎方ニテ人柄急度相撰ミ、其レソレノ役人痛ク手入仕リ、奸曲無レ之様ニ相成候ハバ、御大所御物入莫大ニ可ニ相減一候、尤御買夫共召使ハレ候ニモ、三人ノ所二人、五人ノ所三人ニ相減ゼラレ候テ、在郷ニテ相働キ候様ニ委ク申含メサセ候ハバ、御夫共モ過分ノ御金頂戴仕リ候故相働キ可レ申候、左候ハバ御上ニテハ奸曲ノ密物ヌケ方無レ之、且人數モ相減ゼラレ、御物入過分ニ相減ジ、百姓共ハ分外ノツナルキ増金不レ仕御夫トモ奸曲ノ悪事不レ仕、身ヲ倦シ不レ申、在郷同然ニ相働キ候ヘバ、人柄ヲモソコネ不レ申、御上下ノ利益ニ奉レ存候、御譜代夫ノ者話シ承候ニ、御上ノ物ヲ味マシ候テ身上仕立候テモ、始終富有ニハ無レ之者ノ由段々相唱候テ、大カタ江戸御城下ニテ仕ヒ棄候ヨシニ御座候ヘ共、過分ノ奸曲仕ル者ハ乘掛ニテ罷下候、其中ニモ正路ノ者ハ大膽ノ奸曲ハ不レ仕由ニ候ヘ共、先役ヨリ段々仕リ來リ、踊金トテ五兩七兩、油役ハ十兩ヅヽノ金子先役ノ者ヘ相出シ、宜キ役所ナドヘ相付居候ヘバ、此コトヲ得ズシテ溢ミ仕ルモ有レ之由ニ御座候、去秋モ五年夫ノ者夥シキ金銀タメ置候テ、江戸ニ於テ妻子ヲ持罷下リ候時

ハ、乘掛三四駄ニテ妻子舅姑召ツレ罷下、在鄕ニ於テモ内川ヒラダヲ調ヒ、或ハ良田地ヲ買求メ、天晴レノ百姓ニ相出候由、ケ樣ノコト抔時々相唱候、仍レ之相考候ヘバ、右ノ通リ奸曲相違無レ之事ニ相聞得申候、此儀ハ前段ニ申上候船頭ドモ奸曲ト似寄候間、金代相應ニ下シ玉ハリ、奸曲モ無レ之、民情風俗モ相亂シ不レ申樣、御吟味爲玉ハンコトニ奉レ存候、乍レ然去年仰出サレ候御儉約ニ付、頗ル御手入有レ之、奸曲仕兼候由申唱候、尙更御吟味爲玉ハヾ可レ然奉レ存候

民害雜事

一　民間ニ於テ甚不便利迷惑仕リ、或ハ風俗ヲ亂シ、又ハ妨害ニ相成候コトモ御禁制無レ之儀ナド、前箇條ノ外數事書記申上候、畢竟下民ノ樣子不ニ申上一ハ、知ラセラルベキ樣無レ之候故、諸事思召ニ齟齬仕リ、頗ル下民ノ相痛候事等御座候、右箇條左ニ相記候

一　御郡方ヘ罷下候諸小吏ハ申ニ不レ及、御代官定役人上廻リ等モ、往來上下ノ御傳馬ハ、一疋ヅヽノ御定ノ樣ニ承知仕リ候所、御城下ヨリ罷下リ候節ニハ、一疋ニ御座候ヘ共御用相シマヒ罷登候節ニハ、十ガ七八ハ皆二疋ヅヽニテ候、右ノ品ハ勤仕ノ役所邊ヨリ、何カ土產ノ物等種々買調候由ニテ、荷物至テ重リ、何樣ニモ一疋ニテハ負兼候故、檢斷方ヨリ弱ハ馬ト申立テ相願候テ二疋ニ仕リ、懸荷一駄鞍馬一疋ニテ罷登候由、依レ之先々ヨリ右ノ通リニ二疋ニテ罷越候ユヘ、其儘ニテ二疋ヅヽ仕リ、自然

ト定例ノ如ク相聞ヘ申候、ケ様ノ儀モ増シ馬一疋ノ様ニ御座候ヘドモ、御郡方諸官吏大カタ左様ニ仕リ候ヘバ、現在一倍ノ御傳馬相カサミ申候、其外弱キ馬ハ右懸荷斗リモ負兼候故、荷物相分ケ二疋ニ仕候カ一疋ノ外ニ人歩相添、一駄ノ殘リヲ負セ候カナド仕ル計往々有レ之由、左様ノ者ハ一疋ノ御定ニテモ、都合三疋カ、サテハ二疋ト一人ヅヽ相立チ申候、依レ之萬事ニ相准ジ、御傳馬歩夫等繁多ニ相成、至テ相痛申事ニ御座候、兩三年以前新町邊罷通候節、老ヨリ馬追ドモ友ニ話シ仕ルヲ承リ候ノ所、十數年來御傳馬歩夫等年々ニ相カサミ、四五十年以前ニ比シ候ヘバ幾々倍トヤラニテ、一向其ニ計カヘリ居候テモ、晝夜ニ半軒ノ御役サヘ、一人ニテハ勤マリ兼候由話シ罷通ルヲ承候、右ノ實否ハ新町七北田邊ヘ仰付ラレ、先年ト只今ト何程相カサミ申候儀御尋成置レ候ヘバ、相違ナク相知可レ申候、右ニ準ジ臨町諸在郷共ニ諸役人足等マデ相カサミ候ニ付、何様ニモ御百姓相續仕リ兼、妻子引連家小屋ステ置、數軒地迯ナド仕候處モ有レ之由申唱候、當時何方ノ唱ヒ承候テモ、皆諸役繁多ニ相痛ミ候儀第一ニ相聞申候、何卒御吟味ヲ以歩馬相省候様、諸官吏ヘ仰付ラレ下シ玉ハリ候ハヾ可レ然奉レ存候

一　近年上札通用ノ書狀書物等、片苗氏ニ可レ仕ノ御觸有レ之由、民間頗ル不便利ニテ迷惑仕ル由ニ御座候、左様無レ之候テモ御政事ニ於テ妨ケ有ニ御座一マジク候ハヾ、ヤハリ先年ノ通リニ爲玉ハリ候ハヾ可レ然奉レ存候、數百千人ノ諸官吏先キヨリ申遣シ候モ、手前ヨリ遣シ候ニモ、片苗氏ニテ本苗相知不レ申甚マギラハシク、其上近來ハ御郡方役人ヘハ片苗氏、其外山林方抔ノ諸役人ヘハ無苗氏ニテ通用可レ仕ト申

來候由、元來兩方共ニ苗氏有レ之上ニテ、左樣ノ差別御座候ヘバ、互ニ禮節ニモ相成候、凡下ハ本無苗ニテ、士凡ノ書面相分リ候所、無苗氏凡下ヨリ片苗氏仕ラセ候トモ、指テ禮節ニモ相成マジク奉レ存候、其上無苗氏ニ可レ仕諸官吏モ有レ之、イヨ〳〵紛ラシク、歩夫體ノ者ハ本苗ヲモ覺ヘ居不レ申、甚ダ間違ヒ遲滯等仕リ、時々越度ニ相成、ソレニ付別テ歩夫相費ヘ候コトモ有レ之、頗不便利ノ由申唱候、此等ノ儀ハ甚瑣細ノ事ニテ、却テ士風淺々シキ樣ニ奉レ存候、仍レ之先年ノ通リ紛レ無レ之樣ニ仰付ラレ候ハヾ可レ然奉レ存候、惣ジテケ樣ノ權威、諸官吏相許サレ候事不レ宜儀ニ奉レ存候、其ダケ德風ヲ以テ導キ候コト無レ之、權威ヲ以テ挫キ候故、下民モ服シ不レ申事御坐候、民間ノ惡ル者ドモ諸官吏ヘ手向、諸官吏迷惑仕ル事ドモ有レ之候儀ハ、諸役人理不仁道理ニ當ラヌコトドモ有レ之、責付方ナド最モムゴク候事等御座候故、左樣ノ時ニハ一通リ善柔ノ民ハ其儘居候ヘ共、不善柔者ハ心中甚怒氣ヲ挾候故、憤怒ニ堪兼候者ハ、或ハ石礫ヲ打、又ハ指違ヒ死ント仕ル者モ間々有レ之樣ニ申唱候、其樣子承候テハ、信ニ禮儀ヲ不レ存候庶人ハ、憤激ノ餘リニハ何樣ノ儀モ可レ仕候、近年下民共氣風甚ダ惡ク相成候故、諸官吏權威ヲ以テ相制シ候テハ、却テ服シ不レ申樣ニ相聞得申候、仍レ之諸役人ノ權威相許サレズ、何卒德風ヲ以テ導キナダメ候樣仰付ラレ候ハヾ、下民共モ角折候テ、難レ有處服可レ仕候、前條ニ申上候諸廉士ノ類ヘハ、左樣ノ惡事不レ仕ニテ相知レ申事ニ奉レ存候

一　近年御郡方ヘ相トサレ候諸役人ノ内、二十二三ヨリ十七八歳マデノ人モ有レ之樣ニ相聞得申候、四

十五十ニ候テサヘ、不賢ナルハ下民ノ取扱ヒモ不心得ノ儀ニ可レ有レ之處、弱年前後ノ取都モ未ダ合點無レ之人ナド、民ノ長ニナリ治メシメ候事ハ甚無ニ心許一奉レ存候、仍レ之大方下民ノ樣子不心得ニテ取扱ヒ合點仕ラズ、妄リニ呵責ノミ仕候モ有レ之由故、下民敬尊ノ意相スケ、心中ニハ服シ不レ申由ニ候、譬ヘバ請取立ノ類ニテモ、スナホニ申宥メ候テ早速埒明キ可レ申ヲ、妄リニ呵リマハシ繩ナド相カケ候ニテ、一向埒明不レ申コトモ往々相聞得申候、仍レ之御郡方諸官吏ハ三十以下ノ者不ニ相下一候樣ニ爲玉ハンコトニ奉レ存候、乍レ然右ノ如キハ大方困究ニテ、生產ノタメニ罷下リ候モ多ク有レ之樣ニ申唱候、左候ハヾ生產ニハグレ迷惑可レ仕處、左樣ノ者ハ彼學校ヘ相入ラレ、學問武藝修行仕ラセ候ハヾ、生產ノ憂モ無レ之、御恩澤ヲ以テ文武ノ藝術相勵ミ、治民ノ事ヲモ學問可レ仕候、左候テノ後ハ御郡方役人ニ罷下候テモ、右體ノ事ドモ無レ之、下民モ尊仰仕リ、諸事相辨ジ可レ申奉レ存候

一 米大豆高直ノ節ハ、酒ノ直段豆腐ノ寸法等御觸有レ之由、御城下民間トモニ相唱候、畢竟高賣相制セラレ、諸民迷惑不レ仕樣ニトノ御事ニハ可レ有ニ御座一奉レ存候ヘドモ却テ不自由迷惑仕ル事ニ候、凡テ賣物ハ下直ホドウレ申者ユヘ、利足相應ニテ候ヘバ、御制令ヲ待タズ爭テ安賣仕リ、早ク賣拔キ候樣心係ケ候者ニ御座候ヘ共、間ニ合不レ申候ヘバ、無ニ是非一高直ニテモ賣方仕ル事ニ候、其レヲ買申者ハ自ラ儉省仕ルナレバ、是亦相痛不レ申候、御禁令有レ之候テモ、仰出サル直段ニテ間ニ合不レ申候故、酒ナレバ何程モ薄ク仕ルカ、豆腐ナレバ面向キ商買相止メ申候、乍レ然只今マデ通用ナレ來リ候モノヲ御制禁

ニテ、賣人モ買人モ不自由仕ルユヘ、内々ニテハ醇酒豆腐トモニ密賣買相始マリ候、依レ之犯罪ノ者モ相出候コトニ御座候、元來酒屋豆腐ノ類ハ、民ノ飢渇ニ與ル程ノ物ニモ無レ之、是非買調不レ申不レ叶物ニモ無レ之候ヘバ、御手入爲玉ハズ候トモ、甚ダ高直ニ候ハヾ、自ラ賣買トモニ相止可レ申候、モシ凶年ニテ米大豆相費候儀ニ候ハヾ、一向相禁ゼラレ可レ然奉レ存候、凡ソ人ノ飢寒ハ衣食ノ二ツニ御座候衣食ノ重キ物ハ、民間ニ於テハ布木綿米大豆ニ御座候處、布木綿ノ直段時々御定メノ儀モ承知不レ仕候ヘドモ、賣人買人共ニ相應ニ通用相辨ジ候、米大豆モ御買上直段相立ラレ候外、市中直段仰出サレズ候ヘ共、是亦相應ニ賣買ヒ通用仕候、左候ヘバ民間便利ニ通用仕候物ハ、ヤハリ其儘ニテ指置レ候テモ可レ然カニ奉レ存候、モシ又占メ買占メ賣仕ル儀カ、無テ不レ叶衣食樣ノ物直段不都合仕リ候コトハ、大ニ民ノ飢寒ニ與リ候ヘバ申上ルニ不レ及、直段均シク仕ラセ候儀、幾重ニモ御手入爲玉フベキ事ニ奉レ存候

一　近年民間奢リ候ニ付、木綿合羽等御制禁有レ之候、民人華奢ノ儀ハ畢竟時運ノ然ラシムル所ニテ、御國ニ限ラズ天下一般ニ相聞ヘ申候ヘバ、中々相止申間敷候、乍レ然不都合ノ儀ハ御取抑ヒナシ玉フコト乍レ恐御尤至極ニ奉レ存候、當時民間ニ相用ヒ候木綿合羽ト申ハ、本ヨリ木綿ニテ仕リ、指タル飾リ等無レ之ハ、達テ華奢ニモ相見得不レ申、第一儉約ノ爲ニ設ケ候物ニテ、歩行ノ者ハ荷擔ニ仕リ、或ハ風雨ノ節モ下着損ジ不レ申、頗ル便利ナル物ニ相見得申候、究民ハ御禁制無レ之候トモ、自ラ皆々蓑笠

ヲ相用ヒ候得ドモ、木綿合羽雨合羽等ヲ着シ候者ハ、中民以上纔合宜キ者計リ相用候處、去年中ヨリ別
テ嚴シク御制禁ニ付、木綿合羽ノ代リニ賤ビキ漆摺ノ羽織又ハ皮羽織等相用ヒ候者往々相見ヘ申候、
然ル時ハ此上ニハ羽織ヲ相禁セラレ候外有レ之マジク候ヘドモ、左候ハヾ又何樣ノコト可レ仕候ヤ、尤
農民ト申候テモ、袴ノ外一衣モ葬祭ノ禮服ト申モナク相成候ヘバ、是亦行セ難キ者カニ奉レ存候、御城
下ノ唱ヒ承リ候ニ、町人ハ御免許ノ由、行路中ナド商人カ農人カ相知レ申マジク候ヘバ、彼是紛レ有
レ之故、犯罪ノ者モ數々可ニ相出候、是等ハ木綿ニ仕立候ヘバ、民服ニ相應ノ物ニテ、指タル飾リ等相
制セラレ候ハヾ、御免許爲玉ハリ候テモ苦カルマジキカニ奉レ存候、惣ジテケ様ノコト等數々御禁有レ之
候ヘバ、其レニ付別テ民間歩傳馬相痛ムコトモ有レ之、隨テ御用モ相カサミ、　犯罪ノ者モ相出候事ニ
奉レ存候

一　御膳料糯米ノ由ニテ御郡方ヨリ上納仕候處、仰付ラレ候村々ニテハ、三四俵六七俵ヅヽ惣百姓高
割、或ハ一兩ナラニシテ一人五合七合ヨリ一二升四五升ヅヽ、撰リ方上納仕候處、右撰リ方ノ儀ハ御膳料ノ
外御公儀寺院料トヤラニ相成ル由ナド申唱候ニテ、御次ト申モ有レ之、是ハ至極ノ精撰ニハ無レ之儀ヘ
ドモ、ハゼ米撰ニテ候、御膳料ハ一粒エリニテ別テ吟味仕候處、節季ニテ短日寒氣ノ折ニ御座候故、
一升ノ米ハ早朝ヨリ日暮マデ、人數五六人ニテヤウヤウ撰リ出シ申候、依レ之四五升モ撰リ方仕ルニ
ハ、二三十人以上マデモ相カヽリ候コト故、一村ニテモ數百千人ノ手際マニテ三四俵出來仕候、根用

ノ儀ニ候ヘバ、御年貢諸上納取合、夜中ハ繩菰拵等、晝ハ米拵ヒユリフキ、其外種々手隙合兼候時節ノ處、右ノ通リ御膳料ノ外ニモ有レ之一升二升上納仕ルニモ、無人ノ者ハ餘事打捨置、日數ヲ以テ擇リ方仕リ、頗ル相痛ムコトニ御座候、御膳料ト御座候ヘバ、如何程モ吟味精密ニ可レ仕ノ所、右ノ通リニテハ却テ宜カルマジク奉レ存候儀御座候、凡ソ稻草ハ數十種有レ之者ニ候處、五合七合一升二升ヅヽノ擇米ニ候得バ、數十百軒ノ民家ニテ品々ノ稻草ヨリ寄セ合、一俵ニ相成上納仕候故、其米ノ性ニヨリ早ク蒸セ候モ有レ之、遲ク蒸セ候モ有レ之、又柔カナルモ有レ之、堅メナルモ有レ之候故、餅ニ仕リ堅柔不和有レ之儀ニ御座候、依レ之一村ニテモ御百姓二三人四五人ニモ、同性ノ稻草ニテ上納仰付ラレ、常例御年貢ノ如クフキ拵ヒ手入仕ラセ、一俵ヅヽモ二俵ヅヽモ、丸俵ニテ上納仕ラセ候ハヾ可レ然奉レ存候、右ノ通リ仰付ラレ候ハヾ、同性ノ稻草ニテ糯米ハ宜ク、諸民相痛候儀モ無レ之、尤一俵二俵ヅヽ上納仕ル者モ、常例御年貢ヨリ手入仕ル御用捨ニ、一俵ニ付五升七升ヅヽモ御褒美爲玉ハリ候ハヾ可レ然奉レ存候、唯今ノ通リ一粒エリニ仕リ候テモ、御菓子方ナドハ種々集メ米ニテ、無レ然候テノコトカ、奸曲ノ筋ニ候カ、ヤハリ商買米ニテ仕ル由ナド唱承リ候、尤右ニ申上候拵ヒ米ノ儀ハ、二品同ク御試ニナシ置レ候ヘバ相知申事ニ候

一　御郡方ヨリ上納ノ物カ、御買上ノ物等何カ不ニ御用立一コト有レ之候ヘバ、右ノ宿々駄送相返サレ候由、此儀宿々相痛ムコトニ御座候、依レ之左樣ノ物ハ何程ニテモ御拂ニ相立ラレ、代錢ニテ返シ下サレ

候ヘバ、右宿場ノ痛ミ相除可レ申奉レ存候、モシ買人無レ之候ハヾ、薬種草ノ根様ノ下直ノ物ハ、縦ヒ相棄ラレ候テモ、下民ノ痛無レ之候ヘバ相棄ラレ候間、別段ニ上納可レ仕由申付候テ、駄送宿場分外ニ相痛不レ申様ニ、諸官吏ヘ仰付ラレ候ハバ可レ然奉レ存候

一先年ヨリ他領商人罷越候處、其内近年甚盛ンニ高賣仕リ、頗ル民間ノ痛ミ候者ハ、江州邊ヨリ罷越候商人ドモニ御座候、合薬小間物ト取合セ、木綿紬ノ類持參仕リ、手代等ノ者ニ數十人ニ相分リ御領内在々大カタ不レ殘貸賣仕候儀ニ相聞得申候處、窮民商人モ翌年マデノカシ賣ヲ甘ジカリ調ヒ申候、翌年ニ至リ返濟可レ仕様無レ之候故、去年二兩ノ借リニ御座候ヘバ、當年ハ三兩四兩分モ借リ置勝賣仕リ、右借金相濟シ候カ、其年ノ指繰仕候、依レ之取立ノ節ニハ、指賦リ兼候ヘバ、御本金拜借返濟仕候體ニテ、果ニハ地形相渡シ、身上ツブシ候様ニ罷成候、近年右ノ貸賣大ニ盛ニ相成、一ヶ所ニテモ十兩二十兩、或ハ四五十兩ニ相至リ候處モ有レ之、夥シク金高相カサミ、頗ル相痛ミ申コトニ御座候、元來ケ様ノ物モ罷越不レ申候ヘバ、木綿ヤウノ物モ、面々拵ヒ出シ候テ着用仕リ候カ、買ヒ調候ニモ現金迷惑故、自カラ儉省仕候處、種々結構ナル物ヲ持參カシ渡シ候故、無用ノ物マデ借リ込ミ、十數人ノ手前ニテハ已ニ數千萬兩ノ金財ニモ可レ有レ之候處、皆以テ年々御國ノ拔金ニ相成申候、乍レ然右ノ者ドモ說話ノ由承リ候ニ、國初ヨリ諸國商ヒ御制禁爲ラセラレ難キ者ニモ御座候ヤ、左様候ハヾ現金商ヒ仕リ、一金ニテモカシ賣等仕ラセマジキ由、御領内ノ村肝煎ドモヘ稠ク仰付ラレ候ハヾ可レ然奉

レ存候、右ノ者ドモモ自分カシニテハ取立無ニ心許一候ヘバ、宿仕リ候者ヘ過分ニ金財等指遣シ、宿受合ニテ借シ方仕候ニテ、取立無二相違一諸上納金同前ニ御座候故、年々相カサミ候、依レ之右ノ通リニ仰付ラレ、若宿受合カシ貸仕ラセ候ハヾ、其者辨金仕ラセ候樣キット仰付ラレ候ハヾ、自然ト右ノ商ヒ有レ之間敷奉レ存候

一 在々一山ノ住僧行跡不レ宜候ニテ、大ニ風俗ヲ亂シ民害不レ少候、其所行ヲ承候ニ、大抵檀家ノムダ者、或ハ通リ者ヲ相會シ酒食ヲ備シ、日夜右ノ樂ミニテ相暮シ候カ、或ハ民家ヘ出入仕リ、三衣ヲ脱シ、酒宴ヲ催シ、金財ヲ取セ、其家ヲ役介仕リ、果ニハ其婦ニ奸通シ、折々ハ寓宿仕リ、已レガ家ノ如シ、兩三年モ過ギ候テ、厭氣出デ候ヘバ、又他家ヘ入魂ヲ結ビ、右ノ奸通仕リ近所ニ候ヘバ、寺ヘモ召連レ候テ寓宿仕ラセ、甚キハ魚鳥ヲ食シ、其婦ヲ召連出奔仕ル抔モ御座候由、右ノ穢風自然ト行ハレ、大抵十人ノ僧ハ七八人右ノ所行ニテ、其同志ニハ互ニ相談シ候コトカ、三四人ヅヽ會日ヲ定メ、民間酒宴ニ寄リ合、晝夜娛樂仕ルモ有レ之由、依レ之大方永住ノ僧ハ、五六人ヅヽ奸婦御座候コトニ相聞ヘ申候、如レ此ノ奸事相行ヒ候ニハ、皆金財ニテ役介仕候故、困窮者ハ心ナラズ其レニ從ヒ居候樣ニ相成候、凡テ一山ノ僧ハ、村ノ大小ニ依テ祭葬ノ布施物、一ケ年ニ四五兩ヨリ五七十兩モ取申候由、是ヲ以テ酒宴遊戲ノ入料ニ仕リ、殿堂破損ノ時ニハ山林ノ竹木ヲ賣拂ヒ、其上檀家ヘ申付ツナルキヲ以テ脩覆仕リ候、竊ニ其所レ由ヲ相察候ニ、住職ノ僧ハ弔祭葬迄ノ布施物ヲ得候テ、齋非時ニ飽滿ノ

外何ノ職事モ無レ之、閑暇ニテ暮シ兼候故、右ノ亂行モ相出候、仍レ之右ノ弊風ヲ改候ハンニハ、每月會日ヲ定メ、其本山觸頭方ヘ參會仕ラセ、佛說修多羅ノ難問ヲ解サシメ、或ハ坐禪觀法ノ工夫ヲ爲シメ候テ、其會說ノ答問ヲ書記シ、洞家ニ候ハヾ、府下ノ四箇寺ヘ贈達仕リ判斷ヲ得候テ、來會ノ時ニ能否ノ褒貶ヲ仕ラセ候ハヾ、頗ル慚愧ノ心情ヲモ相生ジ、穢行可レ相止カニ奉レ存候、尤右ノ通リ相行ハレ候テモ、其檀中ノ人步諸入料相費シ不レ申候面々、住僧モラヒ貯候布施物ヲ以テ、如何樣ノ諸入料ニモ有餘仕ル事ニ御座候ヘバ、其ヲ以テ相辨ジ候樣仰付ラレ可レ然奉レ存候、右ノ內ニモ修德ノ僧ハ是ニ反シ候テ、殿堂修理ニハ檀家ノ世話ヲ得不レ申、儲ヒ置候布施物ヲ以仕リ、其上ニモ良田ヲ買、或ハ資堂金ニ相殘シ、後代マデノ餘慶ヲ仕リ、檀家ノ助ケニ相成候、右ノ惡僧共トハ同山同住ニテモ、其僧ノ賢愚得失ニテ如レ此懸隔仕ル事御座候、仍レ之右ノ通リ仰付ラレ候テ、座禪讀經仕リ、穢風破戒モ相止ミ候ハヾ、民家ノ諸費モ相省キ、其身共ノ職事相勤メ、風俗ヲ亂シ候儀モ有レ之マジク奉レ存候

一　村々住職仕ル修驗山伏ト申候ハ、住山ノ僧トモ違ヒ、其格合モ相下リ、看經宗學ニモ相疎ミ、農家ニ近ク候テ、指テ下民ノ利害モ相見ヘ不レ申候處、是亦博奕盛ンニ相成コト御座候、羽黒本山トモニ權現行ト申候テ、百姓共時々其村々山伏宅ヘ相會シ、又ハ別宅ノ行屋ヲ營ミ、一七日潔齋仕候處、其中七月末ヨリ八九月マデ大會御座候、其行法ト申候テハ、行水仕リ火ヲ改メ、食飲朝夕權現ヲ拜シ候マデニ候所、其餘事ニハ唄三味線碁將棊博奕相催シ宴樂仕候、其內十ニ七八ハ皆博奕興行ニ御座候、

右行法中ノ入料ト申候ハ、飯米相出シ候マデニテ、野菜酒等ノ入リ目ハ、右博奕中ノ寺ト申ニテ優ニ相辨ジ候故、中民ハ不ㇾ及ㇾ申肝煎檢斷トモヲ始メ、彼ノ遊手通リ者ドモ相會シ申候、仍ㇾ之一會七日ヅヽ幾切ニモ仕リ、二三十人四五十人ヅヽモ相集リ、前後十日バカリ日夜酒食ニ飽滿仕リ、右ノ博奕慰ミ相催シ候、肝煎檢斷ヲ始メ憚ルコトナク候故、上モナキ慰ミニテ、盆前ヨリ會日ヲ待居相會シ申候、少年ヨリ博奕見ナレ不ㇾ申者モ、右會講ニテ見習面白ガリ候ユヘ、會行十日過候テモ、其節ノ勝負ヲ止メ兼、ソコ〳〵ニ相始メ候ユヘ、盆前マデ嗜ミ居候者モ、會行中ヨリウチ始メ、忽ニ農業ヲ怠リ通リ者ツキ合仕リ候、仍ㇾ之右弊ヲ正シ候ニハ、右ノ會行相禁ゼラレ候ハヾ、相止ミ可ㇾ申候ヘドモ、右ノ内ニモ博奕不ㇾ仕、信實ニ祈願仕ル者モ有ㇾ之、又山伏宜キ所ノ會行ニハ、左樣ノコトモ無ㇾ之由ノ處、農民ハ終年辛苦仕リ、盆正月ト申ニモ一日ノ休足モ仕兼、一生涯勤苦中ニ死ウセ候者ニ御座候ヘバ、博奕等ノ外ハ右慰ナド一年一度、九日十日ノ會集ニテ肩ヲ休メ候コト勿論宜ク奉ㇾ存候、殊ニ潔齋ニテ年中ノ息災安全ヲ祈ルト御座候所、御制禁仰付ラレ候テハ無ㇾ據可ㇾ存候、左候ヘバ山伏村肝煎檢斷ドモヘ博奕不ㇾ仕樣嚴ク仰付ラレ、若右ノ唱相聞ヘ候ハヾ、山伏幷ニ肝煎檢斷御咎メノ上、其所ノ行法相禁ゼラレ候由仰出サレ、其所ノ大肝入方ヨリ時々横目ノ者指遣シ、一二箇所モ見出シ、直ニ御代官方ニテ山伏閉門、肝煎檢斷役目召放サレ、其所ノ會行相禁ゼラレ候ハヾ可ㇾ然奉ㇾ存候、其ヲ傳ヒ聞候ハヾ、第一肝入檢斷共方ヨリ僉議仕、尤モ山伏方ニテモ、右ノ行講相禁ラレ候テハ、座鋪錢謝禮ヤ

ウノ物マデ頗ル不勝手ニ相成候上、御咎メヲ蒙リ外間相失ヒ候ユヘ、博奕仕ラセマジク候、左候ハヾ民人ノ新願モ相破ラズ、博奕仕事モ稍相止可レ申奉レ存候

一　民間博奕盛ニ相行ハレ、諸民ノ痛ミ農業ノ妨ゲニ相成候、其首長ノ者ハ郡郷翔アルキ、諸少年ヲ相倡ヒ博奕仕リ、其レヲ渡世ニ仕候、其者ヲ通リ者或ハ慰サミ師ナド丶申候、右ノ者ハ衣服身持トモニ華麗ニ仕リ、居家器翫マデ平民ト品相カハリ、風流ヲ事トシ博奕仕候、其折ニハ酒肴食味數ヲ盡シテ相モテナシ、凡テ大人富有ノ者ノ如クニ候テ、民間流輩ノカサヲ仕リ、其所ノ肝入檢斷ニモ時々音物美膳ノ振舞等ヲ仕リ、悃意ヲ結ビ諸事ノ肩持ニ相成候故、肝入檢斷共モ悃意仕リ、或ハ金錢ヲ借シ預ケ金ナ本ト相成利ヲ貪リ候由、其手段イカニト承候ニ、博奕仕候時ニハ借シ本ト申候テ、金錢ヲ持參不レ仕者ニカシ渡シ博奕仕ラセ候、其利足ト申ニハ、博奕一番ギリニ、勝カタヨリ代錢褒美仕候、是ヲ寺ト申候由、其外ニ駒本ト申者有レ之候、是ハ大駒小駒二品ニ相分チ、紙金札ノ如ク丁寧ニ拵ヒ賣物ニ御座候由ヲ、千枚モ二千枚モ持參、金銀ノ極印ノ如ク自分ニ印ヲ附ケ、一座ノ定メ次第直段相極メ、駒本方ヨリ博徒ドモニ賣渡シ、其ヲ以博奕相行候由、金錢ト違ヒ音ト響無レ之、尤困究ニテ金代持合不レ申者ヘ借カリ自由ニテ、僅ナル紙札ニ候故、惜カラズ討コマセ候手段ニ仕候コトニ相聞得申候、サテ一座ノ博奕相終リ候ヘバ、座中ノ駒數相改メ、駒本方ヘ指遣シ、金代ト兩替仕候、是亦寺ヲ利足ニ仕候由、如レ此事ハ過分ノ利潤有レ之候故、通リ者ノ仕ルコトニテ、右ノ金代肝煎檢斷ナドヘ利足指遣シ、金財

通用仕由ニ御座候、右通リ者身持ハ一貴一賤ニテ、討負候節ハ頗ル難儀仕ル由ニ候ヘ共、不錬ノ少年ドモヲ欺キ候故、多クハ繰合宜、遠方ノ遊行ニハ乘掛ニテ往來仕ル者モ有㆑之、左樣ノ者ハ平居ニモ紬帛ノ下着棧留靑梅島ノ上着ニテ、印籠巾着皆悉ク華ヤカニ仕リ、業ト仕ル博奕ノ外ハ、歌舞伎淨瑠理酒宴ノ歡樂計リ仕居候故、少年ドモ其ヲ羨ヤミ、何卒其下風ニ隨ヒ、餘澤ニ預リ候ヲ榮ニ仕リ候、仍㆑之群民盡ク其徒ヲ相慕ヒ、當時博奕心得不㆑由者ハ、百人ノ中十人マデモ有㆑之マジク候、日中ハ農業仕候テモ、夜中ハ其席ヘ相出、初心者ドモヲバ若生族（ワコウマケ）ト名ケ、通リ者ニテ酒食ヲ驅走仕リ、其類ヘ引コミ候故、暫時ニ相習ヒ、一村一町ニモ、幾箇所モ一黨ヲ結ビ會合仕候、右ノ宿仕ル者ニハ彼ノ寺ヲ取ラセ候ユヘ、困窮者ハ皆々宿仕候、偖又右ノ者ドモ討マケ候テ、過分ノ借金返金指支候ヘバ、繰合宜キ其身ノ者ハ、在金ニテ不足仕候ヘバ、地形家屋舖マデ賣渡シ、一兩年ノ內ニ相ツブレ申候、困究者ガ父母有㆑之少年共ハ、即坐ニ衣服持尻ハギ取レ仕候上ニモ、其家ノ餘糧ヲ盜ミ出シ相辨ジ候カ、甚シキハ他家ノ物置土藏ヲ破リ、或ハ田畑ノ物ヲ味マシ候モ數多御座候、日中ハ農業働キ、夜中ハ博奕ニテ臥シ不㆑申候ユヘ、日々ノ働キニ怠リ、父母長老ノ仕置ヲモ不㆓相用㆒樣ニ罷成候、右首長ノ者博奕討負手段盡候ヘバ、其郡村富有ノ者ヘ無心ノ申カケ借金仕候、其レヲイナミ候ヘバ、早速仇ヲ報ハレ候ユヘ、不㆑及㆓是非㆒用立申事ナドモ相聞得申候、其外少年初心ノ者共ヘハ、種々無法申係金錢欺キ取申候由、其ニ准ジ妻ニテモ無㆑之者ハ他ノ妻ヲ奪ヒ取、己ガ家ニ連參、或ハ其家ニ住居シテ、其夫ヲ追ヒ退

ケナド仕ルコト往々有レ之、甚ダ風俗ヲ亂シ、諸民ノ迷惑痛ミニ相成候、右ノ如ク博奕盛ニ相成候モ、畢竟前條諸公事ノ所ニ申上候通リ、諸事御沙汰ニ相及候テハ、殊ノ外ムツカシク、永々御城下ニ相留ラレ候カ、品ニヨリ年月御牢內ニ指置レ、諸親類組合マデ相痛ミ候故、ケ樣ノ儀モ何程無法ノ事仕候テモ、皆々堪忍損金仕リ、多クハ御沙汰ニ不レ仕候、惡ル者ドモハ其レヲ相心得居候テ、何樣ノ儀申係候共、御沙汰ニ相及不レ申儀ト種々無法申係候由ニ相聞ヘ申候、尤御仕置仰付ラレ候モ、近年ハ御寛宥ノ由故、首長通リ者ドモ少モ戒懲不レ仕、肝煎檢斷共ヘモ遠慮ノ意無レ之、肝煎宅ヘ罷越候テモ、平生右ノ談話ニテ居リ申候體ニテ、一向ソレヲ渡世ニ仕リ借ヒアルキ候ユヘ、尚々相止不レ申候、仍レ之此者ドモノ相除カレ候ハヾ可レ然奉レ存候、右ノ者ドモ御領內ニ相知レ、他領マデモ罷越候者ハ、一郡三四人ヅヽモ可レ有レ之候、其內ニモ大惡ノ張本ハ、一郡一人ト申樣ニ相唱ヒ申候、ケ樣ノ者ハ大方博奕ニテ御沙汰ニモ相及候ユヘ、何レトモ度々御評定ヘモ罷登リ、多クハ御牢ヘモ相入候者共ノ由ニテ候ヘバ、御仕置ハ日數ノ御牢過料ナドカ、サテハ御追放等仰付ラレ候テモ、五三日ヲ過不レ申ニ本所ヘ罷歸リ、牒面ハヅレニテ組合ノ世話不二相請一者トテ、愈惡行仕ル由ニ御座候、依レ之此者ドモ相除カレ候儀ツラ〳〵愚按仕候所、何方ニモ行ハレ候由、權道ノ一策嘗テ唱ヒ來候、此儀御吟味ヲ以テ行ハセラレ可レ然カニ奉レ存候、右御手段ハ博奕討負候者ハ何程ニテモ申出候ハヾ、負金御取返シ成下サレ候由民間ヘ仰渡サレ、其上肝煎共ヘモ博奕ノ沙汰カクシヲリ候カ、實義不二申出一候ハヾ役目召放サレ、急度

御咎メ仰付ラル由申渡シ候ハヾ、少年共欺カレ討負、無法ノコト迷惑仕者ハ皆々可二申出一候、左候ハバ其レヲ渡世ニ仕ル通リ者カ、左ナキ者カ、御代官方ニテ右ノ訴人ニ相尋ネ、其上其所肝煎組頭相糺サレ候ハヾ、實義可二申出一候間、指テ通リ者ニ無レ之候ハヾ其者ト右宿仕ル者ニ返辨申付、直ニ兩人共ニ日數ノ繩係ニテモ相戒ラレ、其申出候者ハ負金返シ下サレ候後、戸結ニテモ申付可レ然奉レ存候、モシ通リ者ニ候ハヾ、其段御代官方ヨリ添書、其者計リ御評定へ召登サレ、御糺明ノ上愈通リ者ニ極マリ候ハヾ遠島仰付ラレ、其者御闕所金ト宿人トヨリ右ノ如ク返シ下サレ、訴人御咎メ成置レ可レ然奉レ存候、若訴人ノ者嚴シク御仕置仰付ラレ候テハ申出マジク候ヘバ、權道ヲ以テ唯御制禁相犯シ博奕仕リ候御咎メ計リニテ、右ノ通リ仰付ケラレ候ハヾ、惡黨首長ノ者共段々相除レ候ニ可二相成一カニ奉レ存候、左候ハヾ右ノ如ク欺キ取候トモ、勝金召返サレ渡世ニ不二相成一候ノミナラズ、遠島等仰付ラレ候ヲ承知仕リ候ハヾ、右ノ渡世相改メ候カ、左ナキ者ハ他領へ相出可レ申候、尤何程申出候トモ、通リ者ノ外ハ皆御代官所ニテ裁判仕、直々仕置申付候へバ、御評定所御用込候儀モ有レ之マジク奉レ存候、右ノ通リ御吟味ヲ以相行ハレ、通リ者ノ首長共相除レ候ハヾ其レニ恐惧仕リ、只今ノ通リ盛ンニ相倡ヒ夫レヲ業ニ仕リ、人民迷惑仕ル儀稍々可二相止一カニ奉レ存候

一　謹デ相考ヒ候ニ、前段申上候十數箇條ノ中一事ニテモ若可二御用立一儀御座候トモ、其事御舊制ニ相違ヒ候樣ニテ、御取上成セラレ難キ者ニモ御座候カ、此儀申上候モ恐惧至極ニ奉レ存候ヘドモ、退テ

愚按仕ルニ、昔漢ノ武帝即位シ玉ヒテ、賢良直諫ノ士ヲ擧ラルヽニ親カラ策問シ玉ヒシ時、董仲舒對ケルニ、凡ソ教化ノ不レ立萬民ノ不レ正コトハ、政治時ニ不レ協コト有ノ故也、譬ヘバ琴瑟ノ調子合ザルガ如クニテ候、張テ見テモ弛ヘテ見テモ調子ノ合ハザルハ、其ノ弦久シクシテ、或ハ摺レ或ハ節ナド出ル故也、夫レヲバ解テ別ニ更メ張テ可レ鼓也、政ヲ爲モ其如クニテ候、始メニ宜クシテモ年久シクシテ時ニ不レ協ヲバ、必ズ變ジ更メテ理メ玉フベシ、又士ヲ養フ事ハ學問ヨリ宜キハナク候、大學ハ賢士ノ所レ關、教化ノ本原ニテ候ヘバ、願クハ大學ヲ興シ明師ヲ置テ天下ノ士ヲ養ヒ、郡主一人ノ治ヨリ年々賢良二人ヅツヲ貢サシメ、六藝ノ科孔子ノ道ニアラザルヲバ、皆除キ去玉ヘト申ケレバ、武帝尤ト思召、多ク舊例ノ今ニ不レ協ヲ更メ、大學ヲ興シ孝廉ヲ擧テ、學問盛ンニ教化大ニ行ハレ候由モ相見得候、左候ヘバ其レヲ更メ易ヘテ、國家富强萬民安堵可レ仕方ニ御座候ハヾ、乍レ恐只今迄モ更メサセラレ可レ然御事カニ奉レ存候

漆木

一 漆木先年ハ御役人始末ニテ、御直ガキ御買上ノ所、近年木主方ニテ自由仕候樣ニ仰出サレ候ヘドモ、御役人始末ノ儀ハ元來ノ如クニテ、時々漆ノ木見廻、搔キ木苗木ノ手入有レ之、下民迷惑仕ルコトニテ候、仍レ之御役人巡村ノ時ニハ、賄賂音物相出シ、手入無レ之樣ニ仕ル由ニ候、若越度ナド相出候ヘバ、

入寺繩係等モ相出諸入料隙費仕候、漆ノ木無レ之者ハ何ノ構ヒナク候處、漆所持仕ルニヨリ右ノ諸迷惑相係リ候ユヘ、何トゾ漆所持不レ仕候樣ニト心懸申事ニ罷成候、會津米澤方ノ樣子承知仕候處、漆ノ木一向ノ手入無レ之故、民間物入ムツカシキ儀モ無レ之面々夥シク植立、田地宜キ者ハ一人手前ニテモ、木ノ實二三十兩ノ賣上金ニ相當リ候程ヅヽ植立候テ、家々ニテシメ方仕リ、蠟ニテ賣上罷成候由、仍レ之右同所ニテハ御領內ノ百姓良田ヲ持候者ノ如ク、漆木員數ヲ以テ貧富ノ沙汰仕ル由ニ御座候、御領內ニテモ右ノ如ク一向御構ナク、御役人相下サレズ、自分支配仰渡サレ候ハヾ、繩係入寺幣物御傳馬步夫等ノ費ヘ無レ之、現在利益相見得候コト故、年々植立候ハヾ、會津米澤ノ如ク不レ輕御利益ニ可二罷成一候、漆ノ木ハ四木ノ內ニハ指タル世話モ無レ之、五穀ニ次デ夥シキ利潤有レ之物ニ相聞得申候、尤植立候ニモ、大方地堺ヒ堤土手ギハ畦尻筆等山畑物實不二相出一候處モ、土性相應次第成木仕ル者ニ御座候ヘバ、達テ田畑ノ障リニ不二相成一者ニテ候、右ノ通リ利潤相出候ヘバ、困窮者ハ御年貢諸色ニモ、利德ヲ以テ上納仕樣可二相成一候ヘバ、御領內中不レ輕ノ潤澤ニ奉レ存候

一　漆ノ木新植立ノ儀ハ、通例ノ如ク仰付ラレ候テハ、只今ノ通リ御役人手入有レ之儀ト相心得、植立仕ルマジク候間、高壹貫文所持ノ御百姓ハ、苗木百本ヅヽトカ、五十本ヅヽト申カニテ、一年何十本ヅヽ五三年ノ內ニ植立可レ申由、尤成木ノ上モ御役人相下サレズ、一向御手入ナク、末ニハ百姓ドモ無レ限利益ニ相成候由折入仰渡サレ、尤モ植立中ハ村肝入方ヨリ改メ書上候樣仕リ、何程モ漆ノ木倍合

其身共勝手ニ仕候樣仰付ラレ、當時御百姓共上納仕候漆御役代等モ御免爲玉ハリ、時々肝入相改メ候外、一向御役人相下サレズ、御構ナク指置レ、年々借合利德少ヅヽモ相得候ハヾ小高ノ者モ五十本ヤ百本ハ植立候樣可二相成一候、乍レ去過分ノ木數面々植立、以後亦以テ御役人改メニ相成候テハ、植立ノ百姓共却テ相痛ミ、ヒシト罷成儀ニ民詞ニテ申唱候ニ、先年自分植立御免許ノ節、何方ニカ大農家一人ニテ數千萬本植立候テ、成木ノ後御手入ニテ迷惑仕候由ナド承候、右ノ如ク御手入ニテハ諸民信服不レ仕、尤御制令モ虛實不二相分一候樣ニテハ如何ニ奉レ存候、左候ハヾ御領內夥シキ漆成木借合仕リ候テ、水漆木ノ實拂方自由仕リ御上下共ニ利益無レ限御事ニ奉レ存候

一 東山邊楮桑ノ木植立、所益有レ之儀ヲ承候ニ、面々所持仕ル畑ノ畦狹、人數ノ多少ニ從ヒ、楮カイコニテ五兩十兩二十兩程ヅヽ金代相出候テモ、頗ル相續ノ助ケニ相成樣ニ承リ候、右諸木植立可レ申儀ハ仰渡サレ有レ之候ヘドモ、百姓怠リトハ乍レ申、中奧通リヨリ上ハイヨ〳〵諸稼役多ク、實ハ諸方ヘ手賦リ可レ仕樣無レ之、御田地計モ漸ク仕付候儀ニ御座候、仍レ之前段申上通リ、諸御用步傳馬相省カレ候上ニハ、此等ノ儀御付ラレ可レ然奉レ存候、仕馴レ不レ申所ニテハ取仕舞モ不二心得一、尤苗木不自由仕候、楮ハ實モ無レ之、切指ニモ不二罷成一候ヘバ、楮澤山有レ之所ヨリ取分面々駄送仕リ候樣、兩所ヘ仰付ラレ候外有レ之マジク奉レ存候、無レ左候テハ五百株千株ノ儀ニ無レ之候ヘバ、中々以テ植立可レ申樣無二御座一候、近郡ノ山野ヲ見聞仕ルニ、畑境田堤土手脇等ノ處ハ、皆空地ニテ間々小柳荊萩ノ雜木ノ

ミニテ候、東山邊ノ畑山際ハ大方麻ヲ蒔キ候如ク、少モ空地無レ之、一人手前ニモ幾千萬株ト申儀量リ難キコトニ相聞ヘ候、乍レ去新植立候ニ左樣ニハ相成マジク、尤上畑ノ地ハ畑ノ實相減候故、右申上候畦堺墻添土手際等ノ空地ヘ計植立候、右漆ノ如ク高一貫文ノ者ニ、百株前後ハ植立指支申間敷候、何程ヅヽト申員數ヲ定メ仰付ラレ候ハヾ植立可レ申候、楮ハ漆ト格別ニテ、其歳ヨリモ少分ヅヽ利益相見得候ヘバ、是亦御手入無レ之候ハヾ段々無用ノ雜木伐ハラヒ、其代リニ植立ナド倍合可レ仕候、左候ハヾ頗ル潤澤ニ相成、紙モ下直可レ仕候、桑ハカイコ仕ルニハ人脚モ相掛候ヘドモ、一月前後ノ儀ニテ、手隙サヘ有レ之上ハ、賞伏セ等モ自由仕ル故、幾重ニモ相成儀ニ御座候、乍レ然右ニ申上候傳馬歩夫等只今ノ通リ相省カレズ候上ニ、此等ノ儀仰付ラレ候テハ、民間至テ相痛ム事ニ御座候、當時ハ御田地計リモ仕付兼居候ヘバ、只今ノ通リニテハ中々相行ハレ申儀ニ無レ之候

長蓄倉　附學校料拙策諸士御借金

一　御領内御圍ヒ籾所々ニ指置レ候上、江戸御登セ穀モ、秋作御見屆ノ上出船仰付ラレ候由、乍レ恐御尤モ至極奉レ存候、乍レ然御國中御圍ヒ物幾十萬石有レ之、幾十萬ノ四民幾年ノ御圍有レ之物ニ御座候ヤ、賤者ノ不レ可レ知儀ニハ候ヘドモ、近年御圍ノ內ヲモ時々御挽方等仰付ラレ、是亦乍レ恐無二御心許一奉レ存候、聖人ノ敎ニモ三年耕ス時ハ、必有二一歳食一九歳耕ス時ハ、必有二三歳食一三十歳ノ耕ヲ以テ十

歳ノ食ヲ有ツ時ハ、凶旱水溢アリトモ民無二菜色一ト相見得候、亦國九年ノ蓄ヒナキヲ曰二不足一ト、六年ノ蓄ヒナキヲ曰レ急、三年ノ蓄ナキヲ曰二國非一トモ相見ヘ候、サレバ堯王ノ洪水、湯王ノ旱魃有レ之候モ、數年ノ內天下ノ人民飢渇ヲ免レシメ玉フコトハ、理智不レ可レ度ト申ナガラ、所謂十年ノ食有リテノユヘト奉レ存候、古ヘノ言ニモ、民ヲ爲レ重、社稷次レ之ト有レ之候テ、今日人君安居シ玉フ衣食奉養萬品ノ器財、皆以テ民家ヨリ出ル所ニシテ、民無ケレバ君安居スルコト不レ能、君無レバ民亦安堵スルコト不レ能候テ、君民相持ノコト諸書典ニ相見得候、水旱疾疫ハ不レ可レ測事ニ御座候處、其時ニ至リ人民飢寒ニ逢ハシメ候樣成儀有レ之候テハ、如何ニ奉レ存候、三四歲以前、南部秋田飢歲相ツヾキ候由ニテ、御領內ヘ逃ケ來リ、奧通リヨリ罷登候老幼男女晝夜引モキラズ、數萬ヲ以テ計リ可レ申事ニテ候、其折リ秋田方ニハ所々路傍ニ大穴ヲ掘ラセ置キ、餓死ノ老幼岡ノ如ク投ゲコミ候テ、御領內ノ商人ドモ罷越候節、現ニ見アルキ寒心仕候由往々咄シ承リ候、是天災ニハ御座候ヘドモ、其罪イヅクニ歸シ可レ申ヤ、天道冥慮ノ程モ如何ニ奉レ存候、居レ安慮レ危ヲバ、人君大臣ノ思慮ニ承リ候處、左樣ノ事ニ至リ候モ、其蓄ヒナキ故カニ奉レ存候、仍レ之乍レ恐謹デ愚按仕リ候ニ、三年一歲ノ理策ハ、急ニハ行ハセラレ難カルベク奉レ存候ヘバ、先ヅ前漢ノ常平倉ノ策ニ習ハセラレ候ノ方可レ然奉レ存候、乍レ然當時諸民困究時勢異リ候故、古ヘノ如クニハ相成マジク候間、別策ヲ用ヒ玉ハンコト可レ然奉レ存候、民間ニテ奉二承知一候ニ、御上ニハ樣々御繰合外ノ御金有レ之者ノ由、左候ハヾ右御ウキ金十萬兩相出サレ、

御郡ニ何十箇所ト質屋ヲ相立ラレ、一割利足ヲ以テ困窮御百姓共ニ、代モノ受取御カシ渡シ爲玉ハヾ左ニ申上候御利益相見得申候、右御手段ハ蔵々御カシ金利足ノ分ハ、一割ノ勘定ニテ籾ヲ以テ御取立爲玉ハヾ、安ス利足ノ御金拜借仕リ、作リ出シノ籾ニテ少分ノ利足上納仕ル儀、大ナル御仁政ニテ、甚以テ窮民ノクツロギニ罷成候、右御本金十萬兩ニ候ヘバ、一割ノ利息ニテ一月千兩、一年一萬二千兩ニ候所、御藏諸入料相費候テ、一萬兩ヅヽニ見詰、大抵一兩ニ籾四石ニテ相出可レ申候、十箇年ニ候ヘバ、利足籾計リ四十萬石相出可レ申候、モシ豐饒ニテ民間米穀有餘、下直迷惑仕候節ハ、御本金ノ内ヲ以テ籾ニテ市中直段ナホリ候マデ、御買上爲玉ハリ候ハヾ米直段引上リ、民間大ニ喜ビ通用可レ宜候、若凶年ニテ米穀高直、民間至テ迷惑仕候ハヾ、市中直段ヨリ引下、右御買籾御拂方爲玉ハリ候ハバ、是又人民大ニ飢ヲツキ、市中ノ直段モ自ラ引下リ通用可レ宜候、左候ヘバ至テ下直ノ時御買上、高直ノ時御拂成置レ候ユヘ、是又利足不レ少奉レ存候、偖又右利足御圍籾ハ、萬一ノ時ノ御備ニ御座候ヘバ、譬ヘ何程ノ凶年高直ニテ過分ノ利有レ之候トモ、飢餓ニ及ビ不レ申内ハ、相出シ不レ申儀ニ奉レ存候、其年饑歳ノ上、又翌年モ益々饑饉相ツヾキ候時ハ、何樣ニモ餓死ヲ救ハセラルベキ樣無レ之儀ニ御座候、仍レ之歳ノ豐凶ニ従ヒ出入仕ルハ、御本金通リノ内計リニテ、利足籾ハ一向ノ御圍ニテ、所謂三十年ヲ經候ハヾ、百二十萬石ノ御圍ニ相成候間、只今マデノ御圍穀ニ取合セ候ハヾ、民ノ饑餓ヲ救セラレ御助ケニモ可二相成一カニ奉レ存候、右ニ申上候御利益ニ相記シ申候

一前段ニ申上候通リ、天災測リ難ク萬一饑饉相ツヾキ候トモ、南部秋田ノ如ク他邦ヘ逃ゲ走リ、或ハ溝壑ニ轉死仕候樣ナル儀無レ之、古聖王ノ政ノ如ク飢民救セラレ候御助ケニモ相成候ハヾ、乍レ恐御大國別段ノ御政事ニテ、御外聞マデ宜キ御儀カニ奉レ存候

一年ノ豐凶ニ從ヒ米穀直段高下有レ之、細民甚ダ迷惑仕候處、豐歳米穀有餘下直ノ年ニハ、御本金ヲ以テ御買上爲玉ハリ、凶年不作米穀高直ニテ、民間至テ迷惑仕候節ニハ、御拂ヒ方爲玉ハリ候ハヾ、大ニ窮民ノクツロギニ可二罷成一候

一富民トモ借シ金仕候ニハ、一月十兩一歩、五十切一歩ノ利足ニテ通用仕リ候ヘドモ、辨ジ借シ方不レ仕、多クハ田畠妻子等書入ニテ通用仕候故、宜キ田畑自然ト奪ハレ、惡田計リ所持仕候故年々困窮仕リ、諸上納難澁、上地沽却等モ時々相出候處、右一割ヲ以テ借シ下サレ候ヘバ、富民共高利シメ上可レ申樣無レ之、窮民自然ト繰合宜ク、諸上納等モ難澁仕マジク候

一居レ安不レ忘レ危ト相見得候處、萬一甲兵ノ事相出候トモ、萬民色ヲ直シ富強ニテ居リ候ウヘ、所所ノ兵粮年數ヲ逐テ幾百萬石ノ御圍穀有レ之、限リナキ御强ミカニ奉レ存候

右ノ良策相行ハレ候儀、頗ル大金ニテ成セラレ難キ者ニモ御座候ハヾ、御領內ヘ相渡サレ指置レ候工文屋無盡屋一向相留メラレ、右御金相マハサレ候方モ可レ然奉レ存候、工文屋ノ始末及レ承候ニ、甚ダ高利ニ候ユヘ、願主ノ者富有ニ御座候ヘバ、自分ノ金代相交ヘカシ渡シ、取立ノトキニハ御威勢ヲ以テ

御足輕ナド催促ニ付置取立候ヨシ、願主困窮ニ候ヘバ、相渡サレ候金代ニテ、己レガ指クリ仕ルナドニテ、願主ノ貧富ニヨラズ、皆以テ御仁政ノ妨ゲ、民ノ痛ミニ御座候間、相留ラレ候方可レ然奉レ存候、若シ又右金代少分ニテ、質物御カシ金不足ニ御座候ハヾ、左ニ申上候拙策相行ハレ候方可レ然カニ奉レ存候

一　御領内六七千兩ヨリ一二萬兩以上ノ金財所持仕候、富民共御城下ノ外ニモ御郡ノ大小ニ從ヒ、一郡ニ一兩人ヅヽモ可レ有レ之候、仍レ之御城下在々共ニ金子一萬兩指上候者ニハ、御番入侍ニ御取立、御知行何貫文、五千兩指上候者ニハ、何貫文ホドヅヽ下シ玉ル由ヲ仰出サレ候ハヾ、右不足ノ金子ハ可二相出一カニ奉レ存候、右ノ品ハ富民共ノ樣子ヲ承候處、金財有餘仕候テモ勢ヒ無レ之ユヘ、諸事甚グ不自由仕候ニテ、御家中ニ罷出度相計ル由ニ候ヘドモ、近年借シ上金御取上無レ之故、無二是非一御公族ヘ借上仕リ、御家中ニ罷成候樣ナド仕候處御直參侍ニ御取立爲玉ハリ候儀仰出サレ候ハヾ、多クハ御請ケ申上ル者可二相出一カニ奉レ存候、若ソレニテモ員數ニ滿不レ申候ハヾ、御家中幷ニ諸浪人陪臣マデモ仰出サレ、御家中ノ諸士ハ御知行加增階級相上サレ、陪臣ハ其主人〳〵ヘモ其儀仰渡サレ望ミ次第ニ御直參ニ御取立成玉ハリ候由仰出サル方可レ宜カニ奉レ存候、當時富有ノ者大方諸家中ニ罷成候樣ニ相聞ヘ申候間、此儀可レ然カニ奉レ存候、依レ之右ノ通リ御吟味相極マリ候ヘバ、御在合浮キ金ト取合、十萬兩ノ金子相出、前段ニ申上候無レ限御長策可二相行一奉レ存候、尤富民共モ如レ此ノ御用ニ相立候儀ハ、

有餘ノ者トハ作レ申、御國長ク富強ノ基御取立ノ御用ニ相立、頗ル忠義ノ者ニ御座候得バ、侍ニ御取立
爲玉ハリ候トモ、名義ニ於テ御指支モ有レ之マジク奉レ存候、尤金財ヲ以テ侍ニ取立候儀ハ、古來ノ謀
策ニモ相見得、御先代樣御格例モ有セラルベク候上ハ、可レ然御事カニ奉レ存候、右ノ長策相行ハレ候
ニハ一郡何箇所ト御藏相立ラレ、正直廉潔ノ者ニ御藏守諸事シマリ仰付ラレ、右御利足報ノ內ヲ以テ
相應ニ御合力下シ玉ハリ、御金ハ御代官所ヘ相預ケラレ、窮民望次第御藏守質物見屆、一村切ニ一紙
ニテ御藏守肝入副書ヲ以テ申出候ハヾ、肝煎方ヘ御金相渡可レ申候、大抵御領內ノ村數千ケ村ニ見詰
メ、大小ナラシ一村ニ百兩ヅヽ、十村一ケ所ニモ相立ラレ、御金借下サレ候ヘバ、御領內窮民無レ殘御
仁惠爲玉ハルベク候、乍レ然一割ノ御安利足ニ候ヘバ、窮民ニ無レ之商人共迄モクリ合ノタメ拜借可ニ
相願一候、左候テハ窮民ニカシ下サル所不足可レ仕候間、其村々肝入副書ヲ以テ窮民ニ計リカシ下サレ、
若殘金御座候ハヾ、商人ニ候モ質物相應ニ借下サレ候方可レ然奉レ存候、左候ヘバ一金モ不レ殘拜借可
レ仕候、尤質物ニカヘ置候ヘバ、難澁ト申モ有レ之マジク候、若質物請兼候ハヾ、直グ御拂ニ相立申候ヘ
バ、御損失無レ之儀ニ奉レ存候、御取立ノ儀モ六ケ月切ニ仕リ、年ノ十月中ニカシ渡シ、御年貢諸上納
ニ相辨ジサセ、翌年三月御取立、直々四月中ニ御カシ方九月御取立爲玉ハリ候ヘバ、米穀モ有レ之時
節、其上夏冬ノ衣類等タガヒニ指クリ、究民共質物等ニモ不ニ相惑一拜借可レ仕候

儒業附錄

一　前段學校ノ所ニ申上候手段ハ、右ノ拙策行ハセラレ、富民共ニ御知行何程ト申下シ玉ハリ、金一萬兩相出候ハヾ、右御借シ方ノ內へ別段ニ相出サレ、利足ハ金ニテ御取立成置レ候ヘバ、右一ヶ年ノ利足千二百兩ヅヽ相出候、其內右御藏等ノ諸入料五十兩ヅヽモ引候ヘバ、一ヶ年千百五十兩ヅヽ相出候間、三年分ニテ學校造營、且書籍等買調ヒ候マデニ相成可レ申候ヘバ、三年ノ後ハ書生ノ御扶持方下シ玉ハリ候外ハ、右利足バカリニテ、左ニ申上候學校惣入料ニ相辨可レ申候、右惣計ハ金千百五十兩相出候內、四百兩ハ書生三百人分衣類紙筆油樣ノ諸小遣、御切米一人ニ五切三分ヅヽ、二百兩ハ學校へ相詰メ、書生倡導支配仕リ候、儒官役料定數十人ニテ、一人ニ金二十兩ヅヽ、五十兩ハ大先生役料ニ下シ玉ハルベク候、三十兩ハ年々溜メ置、俊傑ノ者遊學入料ニ仕候、不斷ニ人ツモリ、四十兩ハ儒官一人ノ副官二人ヅヽ人數二十人、一人ニ付二兩ヅヽノ御合力、五十兩ハ學校脩理破損ノ爲ニ年々溜メ置キ申候、三百兩ハ學校諸雜用味噌炭薪人步召抱候マデニ相入候、八十兩ハ勘定外ニ相入候餘慶金、右金總計千百五十兩、其外書生三百人ニ滿不レ申候時ハ、其分年々溜置不虞ノ備ニ仕候

右ノ通リ行ハセラレ候ハヾ學校ノ所ニ申上候通リ、德行政事文學等ノ亭堂相立ラレ、三百人ノ書生十組ニ相分チ、儒官一人ニ三十人ヅヽ支配仕リ、右下役ノ長者ハ書生中ヨリ篤實ノ者相選ミ、一組ニ二

人ヅヽ相付、儒官ノ副官ニ仕リ書生倡導可レ爲レ仕候、一日六時ノ内、四時ハ讀書講禮、二時ハ武術稽古可レ爲レ仕候、尤大先生ノ儀ハ、右ノ惣支配仕リ候ヘバ、日々德行藝術修行ノ者ヲ撰ミ、時々相試ミ候テ褒貶相行ヒ、切瑳仕ラセ候ハヽ、文武共ニ修行可二相成一奉レ存候、左候ハヾ御知行僅ニ富民ニ下シ置レ候計ニテ、其外ハ書生有合次第御扶持方下シ玉ハリ候ヘバ、人數三百人ヅヽ相育セラレ候ユヘ、年々出入仕候ハヾ、御家中小進ノ諸士ハ、大抵不レ殘御教誨ナシ玉ハリ候ニ可二相成一奉レ存候、左様相成候ハバ、數年ノ後ハ御郡方諸役人、皆以入學不レ仕者ハ無レ之樣ニ相成、永々學校衰廢不レ仕、士風モ相直リ、諸官吏宜ク萬民快ク耕作可レ仕奉レ存候

一 前段諸士文武修行ノ所ニ申上候、困究ノ御家中ヘ借シ下サレ候儀ハ、金五萬兩ホドモ相出サレ、右長蓄倉ノ如ク、一割利足ヲ以テ御惠借金所ト申ヲ相立ラレ、清廉ノ士ヲシマリニ仰付ラレ、手代ヤウノ者ニ金代ノ諸指引仕ラセ、御家中ハ不レ殘大小進ヨリ足輕等マデモ、望次第夏冬ノ衣類ト扶持方判ト質物ノ如ク其物相應ニ借下サレ、六ケ月切ニモ御取立、右總高ノ利足金ハ大番組以下侍分マデノ困窮ノ者、前段老人御惠ノ定例ヲ以テ、質物受返シ候者ヘ計リ不レ殘配分仕、知行高ニ從ヒ小進窮士ホド多ク配分、一箇年切ニ御助力ニ下シ玉ハリ候ハバ、頗ル潤澤ニ可二相成一奉レ存候、偖又困窮者ハ質物ニ指置候物無レ之モノニ御座候ヘバ、右御助力金下シ置レ候者ノ分ヘハ、兵具タリトモ質物相應ニ御金カシ下サレ候ハバ可レ然奉レ存候、乍レ然當時相用ヒ申サザル兵具ニ御座候ヘバ、受返シ申マジク相開ヘ候ヘド

モ、其質物受返シ不レ申內ハ幾年モ相留ラレ、年々御助力金下シ賜ルマジク候、左候ハバ少シ不手繰ノ者モ御助力金拜領仕リ度、何樣ニカ指繰受返シ可レ申候、左候ヘバ至極ノ困究者モ、父祖ヨリ傳ハリ來リ候兵具皆他人ヘ賣拂ヒ可レ申、且質物ノ高御座候テ、御金拜借ニ自由可レ仕候、右ノ通リ借シ下サレ候ヲモ、金子餘リ可レ申見詰ニ御座候ハバ、大商人共ヘ望次第質ナシニ利足相下ラレ、一兩人ヘ一年切ニモ二年切ニモ借下サレ、利足金ハ年歲上納仕ラセ、諸士ヘ御配分下シ玉ハリ候ハバ可レ然奉レ存候、偖又右金子相出サレ候儀ハ、前段ニ申上候御在金ノ外、富民トモ指上候ト取合候ハバ、長蓄倉學校料ノ外四五萬兩ハ可レ有レ之奉レ存候、若相出不レ申候儀ハ、富民共侍ヲ望不レ申者有レ之、御請不ニ申出一事ニ相聞得申候、左候ハバヤハリ百姓ニテ持高素年貢ニ成下サレ候儀仰出サレ候ハバ、相出可レ申奉レ存候、大抵富民共御城下ノ者ハ、町屋舖ヲ買候テ利足マハリ仕候、濱方ノ者ハ、穀船持候テ利足マハリ仕候、其外ハ皆良田ヲ所持仕リ、作德ヲ取候者ニ御座候間、金一萬兩指上候ハバ、持高ニテ何程、五千兩指上候ハバ、何程ト素年貢ニ成サレ候由仰出サレ候ハバ、皆御請可ニ申出一カニ奉レ存候、其レニテモ不足ニ御座候ハバ、御上ノ御金相出サレ可レ然御事ニ奉レ存候、右ノ通リ相行ハレ候ハバ、大小進共御家中不レ殘足輕等マデ、安利足ノ御金拜借仕、頗ル潤澤ニ相成、有來リ候質屋共ヨリ高利奪ハレ候迷惑無レ之、其內大番組以下御助力金拜領仕ル者ハ、別シテ御特恩ニテ、大ニ相潤ヒ可レ申事ニ奉レ存候、右ノ通リ下シ玉ハリ候トモ、幾年マデモ御本金ハ其マヽニテ有レ之、窮士ハ永々御恩澤頂戴仕候ハバ、自然ト困究相直

リ可レ申カニ奉存候

一　右ニ申上候拙策行ハセラレ候時ハ、悉皆富民共ヨリ金子指上候トモ、御知行莫大ニモ相費不レ申候テ、後三ヶ條ノ長策行ハセラルベク候、左候ハバ御家中ハ御恵借金御助力金、年々拜借拜領仕リ窮色ヲ改メ、學校ニテハ諸士禮義藝術相勵マセ、周道大ニ東ニ行ハレ、諸役人モ入學仕リ、不仁不廉ノ事無レ之候ハバ、農民快ヨク耕作可レ仕候、御領内ノ群民ハ不レ殘長善倉ノ御恩澤ヲ蒙リ、御圍ヒ穀ハ所所ニ山ノ如ク相貯ヘラレ、千萬ノ後何ゾ別段ニ御金御用ノ儀御座候トモ、分外ノ御金十六萬兩ト申モノ有レ之候、因テ右三ヶ條行ハセラレ候時ハ、御上下ニ於テ御妨害ノ儀無レ之樣ニ相キコヘ申候、左樣御座候ヘバ、群臣萬民安堵仕リ、萬世不易ノ御長策カニテ、誠ニ御國富强ノ御基ヒニ奉レ存候

田畠興廢

一　國家ノ大本ハ民ニテ候、民ノ大本ハ農ニ御座候處、ツラ〱當時四民ノ所業愚按仕リ候ニ、士ハ不レ及レ論候、農工商ノ内ニ農ホド徳益少キハ無レ之候、當時ハ先年ヨリ願ル銘下等モ成下サレ候ヘドモ、農民年ヲ逐テ困窮仕ル儀ハ、前段ニ申上盡シ候通リ、上ハ諸官吏ヨリ下ハ肝入檢斷等ニ至ルマデ賄賂音物分外ノ人足代等奸曲諸ツナルキ夥シク、其上御傳馬歩夫御買米責付方人足ツカヒ捨リ、諸卯時種々農隙ヲ進ギリ候故、一ヶ年中大抵御傳馬丁ハ二百日、在々ハ諸ツナルキ相募リ候故、日數ハ百

五十日モ召仕ハルベク候、其外ソレ〴〵ノ私用、冠婚葬祭休日疾病ノ餘儀ナキ隙タハレヲ指引キ候ヘバ、農事一圓ノ働キ日ハ、僅カ百日ニ滿ヤ不レ滿ニ候、仍レ之農業心ノマヽテラズ、當時甚ダ疎略ニ相成候故、畢竟作德モ無レ之、多クハ工商ノ末業ニ走リ、或ハ惰氣ナド相出、本業ノ耕作歲月ニ相廢シ候、凡ソ稼穡ノ熟不熟ハ、其年ノ氣候ニ因ト申ナガラ、第一培養次第ニテ、時ヲ失ハズ耕作仕リ、糞水ノ養ヒ、心力ノ及ブ所手入仕候ヘバ、誠ニ實ノリ常例ノ一倍仕ルコトニ御座候、モシ其時ヲ失ヒ培養心ノマヽナラズ、其上ニモ相怠リ候ヘバ、又實ノリ常例ニ三減五減ニ相成候、當時ノ作業ハ右ニ申上候通リニテ培養甚疎略ニ候ユヘト相見得、三十年前マデ喩ヘバ十石ノ實採仕候所ニテ、當時ハ凶年ニ無レ之候トモ、六七石ノ外相出不レ申候、至極ノ豐歲ト申ニテ、氣候培養宜ク候テモ、八九石出候コトハ甚ダ以稀成儀ニ御座候、其內繰合宜ク候民ニテ、分外人數相雇ヒ、培養心ノ如ク仕候者ハ、又年々ノ實取十分仕リ、先年ニ相減ジ不レ申候、左候ヘバ唯培養ニ有レ之事ニ奉レ存候

一　耕作ノ內大ニ熟不熟ニ預リ候事ハ、糞養ト莠草ヲ取トノ二ツニテ御座候、糞養ト申ハ、人馬糞水ノ外、夏山ノ青葉ヲ刈伐揷田ノ中ヘ踏コミ朽ラカシ候ヲ、刈シキト申候、大ナル養ヒニテ候、然ル所里前ノ山林ニ隔チ候所ハ此儀仕リ兼、原野ノ草ヲ刈廐ノ內ヘ相入馬ゴヘニ仕リ候ヘドモ、是ハ又畑ノ養ニ相成候故、田ノ養ト申候テハ、糞水ノ外藁ゴヘ計リニテ候、仍レ之山林ハ大方田地不レ宜者ニ御座候ヘドモ、糞養宜ク候者ハ、常ニ里地ニ勝レ申候、里地ハ山林ヨリ田地宜ク候テモ、糞養疎略仕リ候

へバ、動モスレバ山林ノ實ノリニ劣リ申候、此外ニ日暇有餘ノ者ハ、幾度モ其田ヲ鋤キ返シ日々晒シ或ハ塊レヲ打コナシ水ヲ掛候ヘバ、自ラ崩シ泥ニナリ候樣ニ仕リ候ヘバ、是亦刈シキ等ニ劣ラズ大ニ土地肥立候テ養ニ罷成候、是ヲ農民ハ鐵糞ト申候、總シテ稼穡ハ手入次第ニ熟不熟仕ル者ニ御座候、少シク手入仕候ヘバ少シク勝レ、大ニ手入仕候ヘバ大ニ勝レ申候、乍レ然右鐵糞等ノ儀ハ、日暇無レ之候テハ不二罷成一コトユヘ、繰合宜シキ民モ大方十分仕兼、百家ノ農右ノ事等マデ仕ル者兩三人有ヤニテ候、仍レ之山里ドモニ究民糞養心ノマヽナラズ候者ハ、恃ム所ハ唯田ノ草取候計ニ御座候、田ノ草取候ニハ、土用前始テ拔候ヲ一番草ト申候、其後土用入拔捨候ヲ二番草ト申候、其後土用末ヨリ拔去候ヲ三番草ト申候テ、一田ノ草ヲ三度マデ拔去リ候ヲ常例ト仕候、右一番草土用前始テ拔取候ニハ、五俵タテ一反ノ田ニ兩三人ニテ可二相辨一候、二三日モ遲ナハリ候ヘバ、糞養著氣ニテ茂リ候ユヘ、五六人ニテ拔去リ申候、其時モ相後レ又三四日モ過候ヘバ、苗ト齊シク相茂リ候故、八九人十人以上モ相係リ、ヤウ〳〵ト拔斉テ申候、ケ樣ニ日數遲ハナリ候コト有レ之マジキ樣ニ相開得候所、大抵並百姓一人手前ニテ、兩親夫婦小作一兩人モ有レ之候テ、家内五六人ノ人數ニ御座候ヘバ五七反耕作仕リ、下人召仕ヒ候者ハ働キ男計リニ候ヘバ、町場諸役相勤メ候者ハ三人一丁、在々ハ二人一丁ノ積リニ候所、右申上候通リ一反一番草三人ヅヽ相掛リ候ヘバ、一丁ノ耕作仕ル者、三十人ノ手ニテ一通リ一番草相仕舞ヒ申候、家内六人ニテモ其身夫婦二人ノ外ハ、兩親ニテ一分ノ働キ仕候、倅成長仕候ヘバ兩親年老候故、

大抵働キ人男女三人、強テ四人御座候ヘバ、日數ハ九日十日迄、一丁ノ一番草取シマヒ候積リニ相開得申候所、其内三反ハ三人ヅヽニテ可ニ相辨一候ヘドモ、右三反ノ田ノ草取候内ニ日數延引仕リ、畑ノ麥刈取仕舞最中、大豆ノ培ヒ時ニ罷成候ユヘ、其ヲ取仕舞仕候間ニ田ノ草茂リ立、殘ル七反ノ内三反ハ五人ヅヽ、又殘ル四反ハ七八ヨリ十人以上ニテ取盡シ申候、仍レ之都合一丁ニ御座候ヘバ、六十人以上ニテ一番草相シマヒ申候、此時大豆ノ草茂リ立、麻ヒキ時ナドマデ相後レ候故、不レ得レ止田ノ草ハ指置畑ノ働キ仕候テ田畑ノ働キ一同ニ罷成候、仍レ之始ニ拔盡シ三反ノ二番田ノ草大ニ茂盛仕ル内、其次ノ三反四反ノ莠モハヤ相茂リ、前後ニ茂リ立ラレ、畑草ハ大豆ト齊ク相成、何樣ニモ取盡シ可レ申樣無レ之成來リ、七月末マデ相係リ、ヤウ〳〵ト二番田ノ草マデ取盡シ候カ、偖ハ一番ノ儘ニテ指置申候、田ノ草二番マデ取候者ハ、大豆ノ草一番モ取盡シ不レ申、大豆ノ草ヲ取申候ヘバ、田ノ草一番モ取ヤ不レ取ニテ候、右ニ申上候通リ、土用前ニ一番田ノ草取盡シ候ヘバ、其苗肥太リ甚茂盛仕リ莖數相倍シ、三本植候苗ハ十四五本ヨリ二十本餘ニモ罷成候、是ヲ苗モテ候トテ、農民悅申候、如レ此時ヲ不レ失、二番三番取盡シ候ヘバ、稻勢大ニ盛ンニ、秋收ノ實ノリ十分仕ルコトニ御座候、乍レ然右ノ通ニテ取盡シ兼候ユヘ、當時大抵百人ノ民家御座候ヘバ、四十人ノ一番草ノ儘ニテ候、又四十人ハ二番草マデ取盡シ候、殘ル二十人ノ内十人ハ繰合宜キ民ニテ、其時々人數大勢相雇ヒ、三番マデ取盡シ申候ユヘ秋收十分仕候、又殘ル十人ハ至テノ究民或ハ怠リ者等ニテ一番草モ取仕舞不レ申、秋ニ至リ一圓ノ不熟

仕候、ケ様ノ稲ハ植立ノマヽニテ、三本植候苗五本トモ不ニ罷成一候、老農共申傳候モ、三四十年前ハ大方三番マデ取盡シ候由、其上ニモ七番マデ拔取候ヘバ、米圓大ニシテ目口ノ缺ケメ無レ之者ノ由申事ニ御座候ヘドモ、ケ様ノ事ハ不ニ罷成一儀ニテ、仕ル者モ無レ之候間、試ノ爲ニ二畝三畝マデ拔取見候者ノ咄シ承候所、目口ノ缺ハ有レ之候ヘ共、甚圓大ニシテ大サ常米ニハ遥ニ勝レ候テ、穗様鼬尾ノ如ク相成、實取二三倍仕ル由ニ御座候、左候ヘバ耕作中第一ニ相勵ミ可レ申ハ、培養ノ外ハ田ノ草取ルニテ候、然ル所苗ノ麥刈取シマヒ、大豆ノ草最中大根蒔下地拵ヒ等ニテ、イトド田作怠リ勝ニ相成候上ニ、前段申上候通リノ諸役甚ダ以テ繁多ニ御座候故、段々仕オクレニ相成候、一日半日ノ前後ヲ爭ヒ候所、ケ様ノ時二三日モ相後レ申候ヘバ、惣ジテノ仕オクレニ相成、日數延引仕ルホド取仕舞兼申候、仍レ之多クハ一番草ノマヽニテ指置候カ、少シ田ノ草片付候者ハ大豆ノ草一向手入仕兼、秋ニ至リ大豆引ニ先立草取候ヘバ、其長四五尺ニテ麻ノ如キ草ヲ拔取申候、仍レ之大豆ハ下草ノ如ク相成、實ノリ至テ不レ宜候、秋收ノ宜キヲ祈候儀ハ、人々ノ願ヒニ御座候ヘドモ、右ノ通ニテ何様ニモ相辨兼候ヘバ、荒廢ヲ存ジナガラ不レ及ニ是非一取盡シ兼申事ニ御座候

一　中民以下一通リノ御百姓一家ノ田畑高一貫文耕作仕候、損益有増シ左ニ申上候、國家ノ大本ニ御座候ヘバ、御條目明白ニ有レ之候ハン儀ニ奉レ存候ヘドモ、民間ノ勘定開セ上申度相記シ申候

高一貫文

内田代八百文　畑代二百文

此作德

田代八百文田六反歩ヨリ

一　米十二石九斗六升　但シ高田代一貫文七反五畝ナラシ、六反歩ノ坪數千八百坪、其年ノ作毛中ヨリ上ニテ一坪ヨリ籾一升二合付此籾廿一石六斗ヨリ出ル六合挽ノ積リ、右ノ外苗代並糯苗植候分見コミニ仕候

畑代二百文畑四反歩ヨリ

一　大豆四石也　但シ大豆ノ外麥大根葉粟稗蕎麥麻、其外ノ物蒔付申候ヘドモ、大麥大根其外共ニ扶持方不足ニツキ、米ニ取合ヒ飯料ニ相成候故、勘定ニ相加ヘ不レ申候、葉大豆ハ馬カヒ料ニ仕候

右ノ内

一貫文六石七斗五升銘

一　米五石四斗也　此俵四斗五升入十二俵、相場米ニテ六石七斗二升

但シ御年貢米一俵四斗五升入ノ名目ニテ、四斗八九升マデ上々ミガキ米上納仕候ニ付、四斗五升入御年貢一俵ハ相場米五斗六升程ヅヽニテ出來仕候、吹拵繩俵上納御藏入料トモニ

四分一大豆

一　大豆八斗七升　此俵一俵ト四斗二升相場大豆ニテ一石二斗

但シ品々右米拵ヒ方同斷ニ御座候

指シ引殘米大豆

一　米六石二斗四升、此賣金九切六分也、相場米一切ニ付六斗五升

一　大豆二石八斗　此賣代四貫二百文、同五斗入一俵ニ付七百五十文

右ノ二品賣拂候代金、九切六分ト四貫二百文

右金代ニ直シ、米大豆賣立代拾四貫二百八十文　代相場一貫五十文

右代ノ内

一　今代七百七十二文　畑方

一　今代九百五十文　四色小役

一　今代五十文　一錢カケ代

一　今代五百文　小役人足代高一貫文十人ヅヽ

四口合今代二貫四百二十三文

此今代ヘ相場相掛ニ貫五百四十四文、但シ小割帳御年貢ニ上納仕ル分

一　代一貫三百文　但シ大肝入村肝入方諸ツナルキ大數

一　代百八十九文　百貫夫代百貫文一人此金十八切ニ見詰

一　代五百六十七文　御貫夫代百貫文三人見詰直段右ニ同

一　代二百文　村肝入給分四錢掛

右四口合代二貫二百五十六文　但シ肝入方ヘ相納候分

一 代二百十二文　種子籾買代二斗五升分

一 代四貫八百四十五文
但シ一貫文ノ田畑耕業仕候百姓一家ノ人數老幼五人ニ仕リ、右扶持米一人ニ付一日玄米二合四勺ヅツ一日三度食シ候分一度ニ八勺積リ、五人ニテ一日一升二合、正月朔日ヨリ九月十日マデ日數百二十日分、此米三石、買代米代相場右ニ同ジ、一升ニ付十六文一分五厘、九月十一日ヨリ十二月晦日マデハ、新米御年貢引拵ヒ仕候シヒナ、クダケ等ノ殘リ物飯米ニ仕リ如レ此

一 代六百文
味噌大豆四斗買代、一升十五文ヅヽ、一人ニ付一ケ年八升ツモリ五人分

一 代二百三十二文
鹽一斗六升買代、一升二十九文ヅヽ、右味噌大豆四斗ヘ相加ヘ候分四合アハセ

一 代百二十九文
麹米八升買代、右味噌大豆ヘ相加ヘ候分二合アハセ

一 代二百九十文
鹽一斗買代、年中ナメ鹽ヒシホ菜ヅケ等色々相用候分

一 代一貫文

年中五人分薪代、春秋五百文ヅヽ、右ノ外ハ木ノ葉枯枝等手ビロヒ候

一　代一貫五百文

同諸方付屆、寺法事、諸初穗、染賃、醫者拂ヒ、婚禮、葬祭、歳暮、年始等諸祝儀、見舞代

一　代三百二十三文

米二斗買代、年中乞食頭、非人諸勸進ニ相用候分、大麥等ヘ取合如レ此

一　代一貫文

年中鍬、鎌、山刀、鉞、其外笊、畚、桶、ハチ樣ノ物買代、古物仕直シ共ニ

一　代一貫文

同茶、酒、酢、小肴、燃シ松等買代

一　代五貫文

同五人分衣類、襦袢、帷子、洗濯入方、蓑笠、ユグ、下帶等ノ布木綿買代、一人ニ付一貫文ヅヽ

此十三口合代十六貫二百五十一文

右三口合代二十一貫五十一文

內
一　十四貫二百八十文
一　二百五十二文

但シ高一貫文耕作仕候テ、米大豆上納ノ外殘米大豆拂物ニ仕リ、前ニ相記申分、百貫夫御買夫代一

人六切ヅヽ下シ玉ハリ候、代高一貫文ニ割返シ請取申分

指引六貫五百十九文不足

但シ寶暦三年暮ノ諸相場ヲ以相記シ申候、豐凶ニヨリ高直下直仕リ候得共、貫トリ損益有レ之候故、

大抵相積リ如レ此

右ノ如ク田畑高一貫文ノ耕作御年貢諸色上納仕リ候殘リ物、僅カニ代十四貫二百八十文御座候處、右五人ニテ一箇年中諸入料カツ〱ニ儉約仕リ候テ、一人ニ付代四貫二百十文ヅヽノ入目ニテ、五人分惣高二十一貫五十一文程ニ相見得申候、右作徳米大豆相拂ヒ、引殘代六貫五百十九文程不足ニ御座候所、何樣ニ仕リ候テ相續仕ルナレバ、右ノ大麥米ノ内へ、菜大根粟稗等相交ヘ食物ニ仕リ、農業ノ内ニモ駄賃、或ハ遊手通リ者等ノ夜歩夫傳馬等ニ雇ハレ、其外里々仕來候渡世勵ミヲ以渇々間ヲ合セ、御百姓相續罷リ有候故、夏ハ短帷子ト申テ腰切ノ大布ヲ相用、寒氣ニ至リ候テハ妻子夜々働キ置候帷子へ苧カスヲ綿ニ相入横ザシワンバリト名付寒氣ヲ相防ギ候、右ノ如キ御百姓ハ中ヨリ以下ノ者ニ候、其レヨリ中上ト區々ニ御座候へ共、大抵右ノ通リガ一通リ農人一家持高一貫ヨリ働キ出シ候分量ニ御座候、左候ヘバ御田地耕業仕ル者ハ却テ損失ノ方ニ相心得候故、猿ガシコキ者ハ段々末業ニ相ヌケ申候、右ノ通ノ勘定ニ候所、當時一坪六合以上ヘハ、御田地見御引方無レ之御定メノ由ニ御座候、何樣ノ御勘定ニ御座候者ニ候ヤ、不ニ相知レ事ニ奉レ存候

右ノ通リ耕作一品ニテハ、何樣ニモ相續可レ仕樣無レ之候ヘドモ、元來百姓之儀ハ、出生以來耕作ニ計
リ相ヒタリ居候ユヘ、假令何程ノ損失有レ之候テモ、ヨノ渡世ニ仕カヘ可レ申樣モ無レ之、一生田畑ニス
ガリ居候儀ニ御座候、產業ヌバコ、楮、莞坐、莚簑、笠、或ハ紙、綿、紅花、カヒコ、布木綿、或ハ茶、酒、油、
蠟燭、八百屋、魚、鹽ノ營ナミ、或ハ山林ノ炭、薪、曲ゲ物、指物、千物細工、或ハ織物、編物等町場ニ御座
候ヘバ、賣買人宿菓子、沓、草鞋ノ小商ヒ、種々ノ產業耕作中ニ取マゼ、相勵ミ相續仕ルニテ候、偖又
四民ノ怠惰ヲ相考ヒ候ニ、大抵働キニ隨テ利益相見得候者ハ、其勞ヲ忘レテ不レ怠相勤メ候、働キ候
テモ利益無レ之者ハ、倦レ候ユヘ惰氣ヲ生ジ候、又勤ズシテ自ラ利益有レ之者モ怠リ候、依レ之恒產有
レ之御俸祿ヲ賜ハリ、飲食衣服相足候者ハ、不レ勤候テモ事タリ候ユヘ、多クハ其業ニ怠リ申候、大農大
商ノ類富有ノ者モ、又同ク怠リ申候、右ノ外農工商ノ平民一通リノ者ノ所業ノ内ニテ、農ホド利益少
キハ無レ之候、工商ノ二民ハ其業一品ニテ、妻子十分ニ養育仕リ、其業ヲツトムルニ隨テ利益相見得候ユ
ヘ、其勞ヲ忘レ自ラ相勵ミ候、農業ハ其一品ニテハ何樣ニモ相續可レ仕樣無レ之ユヘ、右ノ兼業種々相
勵ミ候處、其ニテモ得益無レ之候ヘバ、身上働キニ倦レ候ユヘ惰氣ヲ生ジ、博奕組ヘ相入カ、又ハ商工
ノ末業ニ奔リ候、其內モ緣合宜キ民田畑相應ニテ、召仕ヲモ扶持仕リ、農ノ所益相見得候者ハ、又其
勞ヲ忘レテ不レ怠シテ相勵ミ候、大抵工商ノ田畑無レ之者ハ、御判紙役僅カ上納仕ル計リニテ、諸郡役諸
ツナルキ一圓相出シ申儀無レ之候所、御百姓ノ銘ニテ僅カ五文ノ畑高所持ノ者ニテモ、高ノ大小ニ隨

ヒ、其村ヘ割來候諸役ツナガズキ相出シ申候、依レ之農作ノ所徳甚ダ無レ之故、十ニ八九ハ困窮仕ルコトニ御座候、田畑荒廢ノ所由カニ奉レ存候事共左ニ相記申候

一　先年ハ御本地ノ外有リ來ル新田計リニ可レ有レ之所ニ、二三年以來所々新田開發御免許ノ由故、御本地ノ耕民自然ト新田ヘ相ウツリ候事ニ奉レ存候、喩ヘバ一丁ノ田地四五人ガヽリニ仕リ、百丁ニテ四五百人、一萬丁ニテ四五萬人　耕民、御本地ヨリ引ウツサレ候ヘバ、今新田相倍シ候ホド人數不足仕リ、從テ草飼ヒ相失ヒ、御本地ノ荒廢カニ奉レ存候

一　先年ハ商工ノ者一村幾人ト承リ傳候處、當時農作ノ本業年増不利ニテ、商工ハ日々ノ利徳相見得候ユヘ、皆以末業ニ奔リ候、百人ノ民ニ御座候ヘバ、農事ハ妻子ニ相任セ、其身ニハ商工ノ渡世仕ル者凡ソ五十人モ可レ有レ之候、殘ル五十人ハ右ニ申上候種々ノ渡世ト、耕作ト相雜ヘ相續仕ルニテ候、其内一向農業ニ計片付候者ハ、一兩人モ無レ之候

一　五六十年以前マデ、御百姓子共生育仕ルニハ、一夫一婦ニテ、男女五六人モ七八人モ生育仕ル所近年不相續仕ル故カ、又世上奢リ候故ニヤ、一兩人ノ外ハ多クハ生育不レ仕、モドス返スト申候テ、出生イナヤ其父母直キニ殘害仕候、其仁ト不仁トハ愚民ノ儀ニテ不レ及レ論奉レ存候ヘドモ、君子ヨリ是ヲ觀候時ニハ、甚ダ以テ不レ忍事ニ可レ有ニ御座一候、乍レ然畢竟困窮ヨリ起リ、數人ノ兒子ヲ饑寒セシメンヨリハ、己レガ生ヲ遂ンニハ不レ如ト申候テ、強ヒテ兩三人ノ生育ニ不レ過候、此弊風ニ習ヒ候テ、

富民共モ多子ヨリ少子ノ勞ナキガ勝リ候トテ、是亦三四人ニ不レ過候、右ノ不育モ田畠荒廢ノ所由カニ奉レ存候

右ニ申上候事ドモ、皆以農業荒廢ノ基ヒニ奉レ存候、前年ハ當時ヨリ御田地ノ方、高銘ニテモ御百姓相續仕候、況ヤ當今銘下等成下ナル事ニ候ヘバ、十分ノ相續可レ仕所、年増困窮仕候ハ、前段委シク申上候通リ、御傳馬步夫諸駄賃御留野博奕、其外御買夫御買米責キ方、分外ノ人足諸役諸ツナルキ、御役人遠見案內ノ送迎、或ハ挾箱夫樣ノ者マデ、先年ヨリハ幾倍ト申程ノ繁多ニ相聞ヘ申候、依レ之農業心ノ儘可レ仕樣無レ之ユヘ、如レ此ニ相至リ候カニ奉レ存候、五六十年以前ノ御物成高、近年ノ出方トハ何如仕リ候ヤ、御本地計リノ御留帳ヲ以テ相改メラレ候ハヾ可ニ相知一奉レ存候、惣ジテ諸官吏ノ召仕ヒ候ニハ、一人ゴトニテ僅カノ樣ニ御座候ヘドモ、窪ニ水ノ溜リ候如ノ、日ヲ積ミ月ヲ累ネ候ヘバ、皆以テ農事ノ働キヲ缺シメ召使ヒ候ニテ、秋收ノ不熟ニ相成候間、前段申上候事トモ御吟味ノ上相省カレ、諸役人ヘモ委ク仰付ラレ、仁惠ノ情ヲ以テ役使仕ル樣ニ相成候ハヾ、銘下等成下サレ候ヨリ、甚以テ民間ノ寛(ユルヤカ)ニ相成候、左候テ時ヲ不レ失、耕作心ノ儘ニ培養仕リ、秋收年々宜ク相出候ハヾ所謂穀不レ可ニ勝食一ニテ、御上下長久ノ御利益ニ奉レ存候

儉省

一　治二國家一ノ本ハ、先民ヲ富シムル由ニ御座候、不レ富ハ禮義藝術モ敎ヘ難キ由ナレバ、聖人ノ敎ニモ先ヅ富サントノ玉ヘリ、已ニ富ル時ハ敎ントノ玉ヘリ、當時御家中ヨリ下民ニ至ルマデ甚困窮仕候故、藝術モ怠リ、士風モ落チ下ダリ候ヿニ奉レ存候、諸士ノ困窮仕ル儀ハ前段ニ申上候通リニテ、大進ハ産事不案內ト、華美外飾內侈ニ相費申候、小進ハ人數不相應、或ハ災難ノ仕後レ、營ナミ怠リ等ニテ困窮仕ルコトカニ御座候、下民ノ困窮仕ル儀ハ、前段中委シク申上候通リ、農業ニ精力ヲ盡シ兼候故、如レ此ニ相至リ候コトニ奉レ存候、仍レ之前條ニ申上候長策三箇條ト、老人御惠ミ等ノ儀行ハセラレ、大進ノ諸士無二餘儀一困窮ハ、御吟味ノ上御惠ミ成置レ、其外ハ深ク御手入相尋ネラレ候ハヾ、諸費相除可レ申候、小進ハ御惠金ト御扶持方ト下シ玉ハリ候ハヾ、是又窮色相直リ可レ申候、下民ヘハ長蓄倉御借金成玉ハリ、學校ノ德風行ナハレ、諸官吏有德ノ者相下サレ、汚穢苛刻賄賂等相除キ、步夫傳馬等マデ相省キ候ハヾ、萬民快ク耕作可レ仕候、左候ヘバ諸士百姓共ニ困窮相直リ可レ申奉レ存候、近年於二御上一モ一入御儉約遊バサレ候由下々マデ仰出サレ、難レ有感服仕ルコトニ御座候、仍レ之尙更儉省ノ儀仰付ラレ可レ然奉レ存候、御家中ニテ召仕ヒ候男女モ、其數御條例有セラル者ニ可レ有レ之候ヘドモ、通例ノ通リ仰出サレ候テハ、相省クマジキカニ奉レ存候間、御儉省ノ御指積リニテ、大抵其レニテ間ニ合可レ申程ト、百貫文ノ身分ノ者ハ何人ヅヽト申儀定數仰付ラレ、相省キ候樣爲サシメ、其外ニモ相應ニ御指積リ、定數仰出サレズ候テハ、相省クマジク奉レ存候、尤モ衣服ノ儀ハ朝覲、冠婚、葬祭或ハ士相見

燕享外出等ノ外、平居常服ニハ、大進ニテモ男女共ニ表着ニハ皆綿服ニ仕候ヤウ仰出サレ可レ然奉レ存候、服ハ尊卑ノ禮ヲ制スル者ニ御座候ヘバ、内外トモニ綿服ニテハ、貴賤尊卑ノ分モ相知レ不レ申儀ニ御座候間、右ニ由上候通リ朝覲六禮外出ニハ、ヤハリ勝手次第絹帛織物ニテモ、御舊例ノ通リ身分ニ隨ヒ、着服仕儀御尤至極奉レ存候、無ニ左樣一内證無事ノ平居ニハ、大小進共ニ男女殘ラズ綿服ニ仰付ラレ候ハヾ、尊卑ノ禮服モ相分リ、サテ儉省ノ方ニハ、共ニ應ジテ萬事ニ相通ジ、莫大ノ費ヘ省約可レ仕奉レ存候、其上學問不レ仕候テハ、古今ノ事變禮儀省節ノコトニモ疎ク御座候ヘバ、學問盛ンニ倡セラレ、藝術修行ノ儀相正サレ候ハヾ、士風自然ト改マリ、質素ノ古風ニモ近ク可ニ相成一カニ奉レ存候、當今世上一般ノ華奢ハ、昇平時運ノ然ラシムルコトヽハ乍レ申、國初ノ士風ヲ承候ニ、今ニ異ナリ儉素ニテ、行儀繁ハシカリシ由ニテ候、大坂ノ御陣ニ、東照宮惣陣御見覽ノトキ、本多佐渡公灑帷子ヲ着シ甲バカリニテ御供ナリシ由、又加州ノ家臣ニ山崎長門守ト申シヽ名高キ武功ノ者ナル由、大坂在陣ノ着物トテ、紙子ノ羽織ニ銃丸ノ中リタル迹候ヲ其家ニ藏メ置候由、或ハ何方トヤラノ家老萬石以上ナルカ、其國ニテ登城ノ時、茜ネノ木綿羽織ヲ着シ候ヘシニ、路次ニテ雨ニ會テ濡レ候ヲ、玄關ノ扉ニ掛テ乾シケル折ニ、其主君鷹野歸リニ之ヲ見テ、茜ハ日ニ乾セバ色變ル者ゾ、取入サセヨト在シ由承候、如レ此大人ニテモ百年前ハ、委ク世事ニ立入候コトト相見得申候、又秀吉公朝鮮攻ノ時ニ、其使者ニ命ゼランシニ、小進ニテ財用不足トテ、紹介ヲ以テ黑田公ヨリ金子三百兩借用有テ、使者ヲ勤メ歸

國シテ、返金ノ爲メニ紹介人ヲ誘ヒテ黑田公ヘ相見有ケルニ、黑田公家宰ヲ呼デ先刻モラヒタル鯛ヲ二枚オロシニシテ、其中ザシヲ吸物ニシテ出スベシト有ケレバ、兩人ノ客ハ心苦シキ仕方カナト思ハレ、倩返金ノ語ニ及ビケレバ、黑田公ノ言ニハ、其ハ返金ニ不レ及、其許ノ小進ナレバ其折ヨリ合力ニ存ジ居シ也、我ハ其許ニ比シテハ大進也、必ズ心遣ヒ不レ可レ有トテ、中々受ル氣象ナケレバ、井上某ハ不レ及レ力其金ヲモラハレシ由、如レ此事モ亦時運ニヨリ候故カ、甚ハシキ風俗也迚賞美シテ相見ヘ候、當時民間ノ風ヲ觀候ニ、富有ノ者ハ貪吝華奢ニシテ、禮儀ト申ヲ知者モ無レ之、細民ヲ苦メテ利ヲ貪リ、己ガ誇奢ニ爲ンコトヲ謀リ候、或ハ質素節儉ニシテ禮儀ヲ守ル者ハ、年々困究ニ相及ビ候故ニ、乞食體ニ見ナシ却テ侮辱ヲ得候コト、是古今ノ通情ニ御座候、然ルニ民間文武ノ諸藝相禁ゼラレ候ユヘ、宜キ玩ビノコト無レ之、富有ノ者ハ唯奢侈ヲ仕リ、諸民ニ誇リ候外ノ慰ミ無ニ御座ニ候、近郡ニテ承候ニ、嫁入木綿一反ノ染代二貫文ニテ染候者御座候由、イカナル染ト承候ヘバ、下繪十日ヲ經候由、左候ハバ有染賃モ勿論ナルコト相語リ候、ケ樣ノ者ハ郡中ニ於テモ一兩人ト申程ノ富有ノ者ニテ、御制禁ナケレバ絹帛織物モ着用仕ル者ニ御座候ヘドモ、表着ノ爲メトテ如レ此染ナシ候由、嫁入ノ席上ニテハ、ヤハリ紗綾縮緬相着シ申由、其ニ准ジ家居器物トモニ華美ヲ盡シ、其レヲ以相誇リ候、依レ之同座ノ者モサナガラ綿布ハ着シ惡ク相成タリ、合宜キ者ハ吾劣ラジト華美ヲ仕ルコトニ御座候、其内有同郷ニテ是モ同ジク富有ニテ、彼レニ比肩ノ者ニテ候所、志有レ之者ニテ御政事ヲ相守、質素儉約ニシテ禮儀ヲ本トシ、

子弟親類ノ子共ナド相集メ、孝悌忠信四書六經ノ道ヲ說キキカセ、或ハ弓馬刀鎗ノ兵術等稽古仕ラセ、或ハ志アル困窮者抔ニハ、己ガ入用ヲ以テ學問諸藝仕ラセ、或ハ農隙ノ業ニハ己レガ閑ヒ銀ヲ出シ、貧窮ヲ賑ハシナド仕リ、天晴文武修行ノ者ニテ、然モ郡中ニ隱レナキ孝行ノ者ニテ候由、ケ樣ノ者ハ右ノ木綿染候者ニ比スレバ、雲泥ノ違ニ御座候、此儀唯々學問仕ルト不仕トノ二ツニ御座候、乍然右ノ者モ近年學問諸藝御制禁ノ後、御上世間トモニ遠慮仕リ、大方相止候由ニテ候ヘドモ、內々ニテハ孝悌忠信ノ事モ間々說キ聞セ候樣ニ及承候、脩々如此者ハ如何サマ御用ニモ相立可申者ニテ御稱美ナシ玉ハリ、鄙里ノ風俗ヲモ相正サルベキ御事ノ樣ニ奉存候ヘドモ、右ノ通リ御制禁ニ候ユヘ、右事ヲ仕ル者モ却テ潜マリ居候ヤウニ相成申候、古ヘ秦ノ丞相李斯ト申者諸民學問シテ政ノ善惡ヲ沙汰スルコトヲ惡ミ候テ、天下ノ人ヲ愚昧ニ爲ント上表シテ、天下ノ經書ヲヤキ、サテ諸書ヲ偶語スル者ハ、市ニ殺シ、古ヲ以テ今ヲ非ル者ヲバ三族ヲ滅ボサント令シ、其上有學ノ士數百人ヲ捕ヘテ、坑之ナド種種ノ暴惡無道ヲナシ候テ、己レガ惡事ヲ心ノ儘ニ爲ント、[illegible]ノ所ナノ相行ヒ候ヘドモ、果ニハ其身三族ヲ夷セラレ候由ニ御座候、サレバ聖人ノ言ニモ、大罪ニ五ツアリト申候內、天地ニ逆フ者ハ罪五世ニ及ブ、文武ヲ誣ル者ハ罪四世ニ及ブト相見ヘ候ヘバ、李斯ガ如ク文武ヲ誣ヒミダシ、人民ヲ文盲無智ニ仕ルハ、誠ニ天地ニ逆ヒ、文武ヲ誣ルニテ、聖人ノ大罪人ニ御座候、如此者ハ人世始マリヨリ今ニ至ルマデ、和漢ノ草紙ニモ不及承候、孔子曾テ治國ノコトヲ子游ニ敎ヘ玉ヒ候ニモ、一君子學道則愛人、

小人學レ道則易レ使」トモ仰付ラレ候ヘバ、上下共ニ學問仕リ不レ宜コトニハ相見得不レ申候、然ル所近年百姓不ニ似合一事トテ、文武共ニ稽古仕ルマジキ由御制禁有レ之候、堂上ノ御事ハ如何ナル者ニ御座候ヤ、賤者ノ不レ可レ知事ニ奉レ存候ヘドモ、恭ク其所レ由ヲ相考候ニ、無學ノ諸吏民間ナマナカ詩文章ヲ玩ビ、人ニ誇リ抔仕候ヲ惡ミ候餘リニ、惣ジテ百姓ハ耕作ノ何事ニテモ無用ノコトナド、申達シ、實學德行ノ者マデ如レ此御制禁有レ之者ニモ御座候ヤ、此儀恐惧至極ニテ不ニ相知一御事ニ奉レ存候、乍レ然左樣ノ者ハ固ヨリ學問中ノ虫喰ヒニテ、何ノ藝術ヲ仕リ候テモ事ヲ成ザル者ニ御座候處、ソレトモニ博奕酒色ノ遊戲ニ比シ候テハ、宜キ方ニ御座候ヘバ、是ハ相禁ゼラルヽニ及ブマジキ御事ニ奉レ存候、凡ソ人ハ貴賤共ニ皆天ノ明德ヲ相受出生仕リ候處、御領內ノ廣大無限人民御座候テ、其內ニハ文武術相勵マセ候ハバ、幾バクノ君子モ英雄モ相出、幾バクノ御用ニ相立可レ申ヲ、皆盡ク文盲愚昧ニ仕候儀ハ、乍レ恐甚以テ痛マシク奉レ存候、諺ニ有レ田不レ耕ト申如ク、御領內數百萬ノ人民不學盲昧ニ仕リ置候儀ハ、畢竟御上ノ御損失ノミト奉レ存候、前段ニ委曲申上候諸吏汚穢奢華困究仕ル儀モ、唯學問不レ仕候テ、聖賢君子ノ質素節用、古今ノ事變ヲモ相心得不レ申候故ノ儀カニ御座候得バ、士凡共ニ學問武藝盛ンニ倡ハセラレ、諸士奢侈ノ事モ、產事不案內モ、儉省手入仕リ候上、前段ノ御恩惠トモ行ハセラレ候ハバ困究相直リ、華奢ニ相費シ候ヲ以テ、武具等取調ヒ置候樣可ニ相成一奉レ存候ハバ、誠ニ御家中ハ不レ及ニ申上一、幾百萬ノ民人明德ヲモ盲昧不レ仕、藝術相心係候者ハ皆以テ御用ニ相立申樣可ニ罷成一、恐惧至極不レ堪ニ戰栗一

奉レ存候得共、敢以申上候

後序

恭シク惟ルニ、古ヘヨリ聖王賢君ノ治二國家一玉フニ、君主大臣ハ生レナガラ廟堂ノ高ニ坐シ玉ヒ、下民ノ情態ヲ知コト難レ成ニヨツテ、大方下民卑賤ノ中ヨリ賢者ヲ擧テ輔佐トシ、或ハ諫鼓謗木ヲ建テ、下情ヲ通ジ候由ニテ候、然ル所當時諸有司ヨリ以下諸官吏ノ所爲、皆御上ノ思召ニ背キ候様ニモ知玉フベキ様無二御座一、上下相隔リ候テ、如レ此御仁政下民ニ及シ兼候コトニ奉レ存候、仍レ之何トゾ民家ノ様子聞セ上タク、此度存ジ立乍レ恐奉二上言一候、然シナガラ別口上書ニ委曲申上候通リ、八箇歳以前暗ニ指上候處、御取上ゲ成玉ハリ候カ、相棄ラレ候カ、一向明ニモ仰渡サル、御用方ニモ其様子相知不レ申候故、萬一御咎メノ事ニテ、如レ此ニモ御座候者カト深ク恐懼仕リ、草稿等モ燒棄テ、唯今マデ潜マリ罷在候、然ル所去秋中カ、存寄申上ル者有レ之候ヲ、御取上成置レ候由明承リ候、依レ之相考候得バ、前歳指上候モ、必シモ御尤メノ筋ニハ無レ之、相棄ラレ候コトカ、偖ハ取次ノ者方ニ留置候コトカニ奉レ存候、數十歳心附候事共、至愚ノ寸悃ヲ凝シ書記シ指上候所、御用不レ立バ固ヨリ不レ及二是非一事ニ

奉レ存候得共、一タビ御大老ノ耳目ニダニ相觸不レ申、途中ニテ打棄置レ候儀何共無レ據奉レ存候、乍レ然共事上朝廷ヨリ下諸官吏ニ至ルマデノ儀聞見、拙存申上ル御事ニ御座候得バ、萬一御咎メヲ得候ハバ何如可レ仕ヤト且恐レ且憚リ、其上毎條士人ノ惡事ヲ訐キ發シ候儀、君子ノ所レ惡ニ御座候故戰慄已ムコトナク、シバ〳〵猶豫仕リ、心中不ニ相定一候、尤年增老衰仕候上、甚ダ究厄ニ相及ビ、工夫仕ルニモ、書調ヒ候ニモ、紙筆ヤウノ物マデ不自由、眼目心ガ不束ニ御座候ヘバ、愈々企テ難ク指扣ヒ罷在候所、退イテ相考ヒ候ニ、申上ル品々ハ下民ノ情態殘リナク相知候コトニ御座候ヘバ、若右ニ申上候通リ下民ノ様子聞セ上ル者無レ之、民情知ラレ難キニ於テハ、ケ様ノ儀申上、萬一ニモ御政治ノ御助ケニモ相成、一事タリトモ御用立候ハバ、老病至愚ノ寸悃空ク不レ仕、八年來ノ恐惧隱鬱モ相開キ、賤者ノ本懐不レ過レ之儀ト、此度存ジ立敢以申上候、尤右箇條中御政事ヲ誹議仕ルニ相准ジ候事御座候共、皆以乍レ恐御國萬世富强ニシテ御上下イヨ〳〵和睦安堵ナシ奉リタキ寸悃ヨリ申上ル御事ニテ、一言ナリトモ口外他人ノ耳目ニ觸不レ申候ヘバ、毫ク御政事ヲ誹議仕ル心底存慮ニハ無ニ御座一候、尤凡例ニ相記シ候通リ、直キニ指上候ハバ、御尋ノ上ニテ申上ル事共多ク御座候ヘドモ、睹上仕候故、若シ申上ル箇條ノ內、一事ナリトモ行ハセラルベキ儀御座候トキハ、御不審ノ御答可ニ申上一樣無ニ御座一候故、乍ニ恐惧至極一拙存不レ殘申上候、ナニトゾ御上ヲ度リ奉リ候トノ御咎メ成下サレマジク候ハバ、冥加至極難レ有仕合奉レ存候、猶恐惧已ムコトナク候ハ、淺サ〳〵シキ賤者ノ所存グド〳〵書記シ候儀、不都合ノ餘リ

御捧腹ナシ玉ハンノミニ御座候、其上老衰仕リ眼目甚ダ不憚ニテ、恭敬仕リ候ヘバ益々誤マリ、殊更筆墨不敬、土貢見苦シク御座候ヘドモ、此儀不敬ト思召下サルマジク奉レ存候、ケ樣ノコト抔不二申上一候モ、存寄可二申上一御渡サレ有レ之由承知仕居候テ、心付候コトヲ不二申上一候モ、心中無二本意一奉レ存候故、カク書記シ指上申候、昔東照宮遠州濱松ニ御座ノ時、御外樣ノ士存寄トテ一通ノ筆記ヲ捧ゲシヲ、讀セテ聞シ召レ、一條ヲ讀終ルゴトニ、尤ナルコトト御賞言マシマシ、偖テ御懇意ノ上意ニテ退出仕リケルガ、其跡ニテ本多佐渡公サテモ此者卒爾ナルコトニテ候、一條モ御益ノコトハ不二相聞一ト申上ラレシカバ、御手ヲ掉セ玉ヒテ、何如ニモ指テ所益ト云ハ無レドモ、彼ガ分量ノ慮リヲ書付置テ、我ニ見セント思ヒヨルハ、甚ダ奇特ト云ツベシ、其言ノ用捨ハ我ニアリ、卒爾ナドヽ云ベキヿニ非ズ、惣ジテ上モ下モ我ガ過チハ知レヌ者也、サレドモ小進ナル者ハ知音懇意モアレバ、互ニ責善シテ身ノ過差ヲ改ルコト多シ、是ハ小進ノ益也、大進ナルハ是ニ反シ、出デ合テ心安ク説話スルサヘ無レバ常ニ談笑ノ友トテハ家臣所徒バカリ也、其者共ハ大方ハ御尤トナラデハ云ヌ程ニ、我過失ヲ知ルベキ樣ナシ、知ラネバ改ムル心モ付ズシテ過ヌ、又是ハ大進ノ損ト云ベシ、然レバ何ニモセヨ、我爲トテ告知スル者アラバ、忠直ト思ハザランヤト仰ラレケル由、サレバ此上言モ指タル御益モ無レ之ヲ賤者トシテ卒爾ノ至リ恐懼至極ニ奉レ存候ヘドモ、賤者ノ分量ヲ盡シ書記シ指上候ヘバ、冀クハ何トゾ非禮僭上ノ御尤メヲ爲玉ハズ、至愚ノ寸悃ヲ憐レマセ候テ、御用捨成下サレ候ハバ、本懷至極奉レ存候、誠恐誠惶。

稽首頓首、敢テ上言

一　此上言副口上書ニ申上候通リ、草稿ニ御座候所、元來淸書ノ心係ケニテ書調候得共、餘リニ恐敬仕候得バ相誤リ、字體字行甚ダ見苦シク、却テ不敬至極ニ奉レ存候故、別段本淸書相認タメ、指上可レ申ト、其ヨリ所々拔サシ仕リ、略字誤字等モ不二相改一□字注字等モカズノ〳〵有レ之候上、紙筆モ種々相異リ至テ不レ宜、ハナハダ鄙陋ニ御座候所、委曲副書ニ申上候通リニテ、重テ書調ヒ指上候儀難レ圖事ドモ御座候故、土貢見苦シク不敬至極、背二本意一奉レ存候得共、草稿ノマヽニテ此度指上申候、何トゾ右ノ所ハ不敬ノ御咎メ不レ被二成下一様、乍レ恐伏テ奉レ存候

上言　終

民間備荒錄

建部清庵著

建部清庵先生著

民間備荒録 貳册

清庵先生選此篇非有意徧救世之蒼生唯爲其閤境窮民已而書肆中椒堂請上梓辭因請乃謀之藤松臺相與請之先生鋟槧經年既而校讎成矣於是乎刻之以布其仁術於海内云

江都官醫　渡邊蕃主法眼

門人　衣關敬貫甫軒書

民間備荒錄序

上古神聖之昉於醫也、首憂生民之疾苦、一出於懣〻悶〻之衷、而未始爲售技衒術矣、惟夫炎帝敎耒耜、而民變飮血之俗、遂本草與也、良毒始判、而人知生養之道、然後伊尹之湯液、張長沙之方法、亦皆祖述往聖之道者也、知此之謂醫之本分、行此之謂仁術、嗚呼世之澆漓、末流分派、紫朱紛雜、在乎其間、而不投時好、言己之所欲言、爲己之所欲爲、確乎卓立者、自非豪傑之資、固所不克也、古語云、上醫醫國、是豈採草根、剝樹皮、揮刀圭、以治一病之謂哉、上以輔贊明王、下以發濟黎元、與良相同其功非者、此之謂乎、奥之一關、有建部淸菴者、世以醫仕于本藩、聞著一書、命曰民間備荒錄、介於正山伴氏需序於予、閲之、首演救荒之術、敎民以充膓之方、且擇之品味也、精而有據、於其備用也、要而易得、實是壽民之偉畧、經濟之要簡哉、是豈一邑圖境之事乎哉、自邑及國、推而達諸天下、則斯民之蒙恩賚、不可勝紀、是豈一時之爲乎哉、筆諸書、以傳後昆、則不亦萬世不朽之寶耶、抑稱之曰一緡雨粟書、亦可也、今若建氏者、其功德斯民、比諸彼世醫區〻著局方之書、務炫燿於世者、天壤相懸、亦如何耶、蓋國醫之實、予於淸菴者觀焉

維時寶曆庚辰二月既望

前典藥頭延壽院道三橋壽國撰

民間備荒錄序

醫之療疾也、七方十劑、以爲之方法、君臣佐使以爲之藥法、而收蓄百藥、以豫備施濟、而至于其所以虛實補瀉之得宜、緩急標本之異治者、則得之於其心、而應其變、猶良將之臨敵善制其兵也、然不得之於法、則無以致其巧、而不得之於心、則無以造其妙、其得之於法者既熟、得之於心者亦精、而後得爲良醫矣、奧關侍醫清菴建部翁、科兼內外、志存廣濟、博觀載籍、記誦不倦、專攻術業、其法既熟、其心亦精、而强恕求躋生民于仁壽、非特如世之與巫覡賤工共伍、意氣揭々者比、寶曆乙亥、奧關大饑、翁憫黎民之死亡、如痛在己也、乃捜取其平日所考驗、山木野草、凡可救凶荒者若干種、詳其事實、考其修治、提綱臚列、筆以國字、名曰民間備荒錄、凡二卷編成、眞之邑長保正、以頒行于邦內、救濟多效、飢民遂來蘇之望云、蓋翁之作斯書、其心在救黎民、而仁術明矣、其法在贊化育、而生道備矣、嗚呼醫之於心法也、至矣盡矣、凡志於治國安民之道者、欲豫備荒政者、宜先取法于斯書、且就是感激、不可不知常修明先王之道、不使黎民死於飢寒困窮也、可不戒哉、頃翁俾門人晉根生齎到東都、請余書其事、余讀之、大嘉翁之用力於仁者、因題數言、此爲序云

寶暦七年丁丑夏五月

常州小田侯孫誠菴源成朝題二于東都芝街旅寓一

民間備荒錄序

元策建君上二民間備荒錄一也、執事大夫深嘉二納之一、不レ俟二公命一、謄二寫數十本一、以頒二行郡邑一、且每レ邑選下識二文字一熟二農事一者一人上、使下レ之督二其事一、教中導庶民上、百姓於レ是有二更生之望一云、逸峯曰、余於二此擧一也、有二大喜三一、民之免二飢餓一則不レ與焉、夫明君之治二國家一也、不三必親二庶政一、必能信二任長臣一、使レ得レ竭二其所一レ能、故長臣亦以二社稷一爲二己任一、進忠退補、無二危懼之心一、苟有四嘉謀徽猷足三以裨二益國家之治一者、則便宜從レ事、唯告二其成功一、事々不三必待レ報而後敢行一也、故政令速行、膏澤下二於民一、衆庶說豫、上下無レ怨、太平之化、於レ是乎成、方今君侯嗣立之初、百度草創、庶績未レ熙、加レ之以二飢饉一、當二此時一、諸執事大夫、自レ非レ如二蕭曹諸葛得二其君一、孰不下懷二危懼之心一、承レ意希レ旨、唯命是從上者哉、而今執事大夫、一聞二建君之說一、上不レ及レ請レ命、下不レ詢二於衆一、即日發レ令、宣二布邦內一、非下君侯之信任素得二其人一、而諸執事大夫亦得中能竭二其忠誠一上、焉能如レ是哉、於レ是乎足レ知下君臣不二相疑一、而治道日彰上矣、此一喜也、夫人臣得レ遇二時君之知一、而任二尊官一受二厚祿一者、豈不レ欲三竭レ忠盡レ誠、以報二所天一乎、然忠臣義士、古今不二多有一者、

蓋以乘貴自用不務開言路也、言路不開、則直言規諫無由入耳、獨師私心、不知其過、是以其所爲忠未必忠、而所爲善未必善也、故以周公之才之美、猶且躬吐握、以招賢者、務開言路也、今執事大夫深納建君之言、以宣布其書於邦內、則巖穴之士聞之必曰、方今相輔好善能納忠言、是吾人盡言之秋也、遂以其所畜積、進諸執事大夫、執事大夫亦盡納其說、而不拒其人、則日開其所不聞、知其所不知、內足以自誠、而外可以通庶民之情、夫如是則言路開賢士進、而執事大夫之所以竭忠報國者至其極也、長臣竭忠而國不治者、未之有也、此二喜也、夫士君子有意于憂世拯民、而立言著書者、皆無不欲言聽說行、民被其澤者矣、然時有可否、命有窮達、其不幸而上拂人主之心、下所斥有司、不得達其意行其道者、自古而然、雖曰俟知己於千載之下、亦不得已云爾、豈如於其身親見之爲幸哉、今建君上此書也、長臣嘉納焉、庶民欽戴焉、可謂言聽說行、民被其澤者也、而建君得於其身親見之、則豈唯人事哉、天將繼之使建君行其志施其德也、厚乎哉、天之報施善人也、是建君之大幸、而余所深以爲喜者也、若夫至於飢民得之有更生之望、則人人得而喜之、非余之所得而獨也、故曰、不與焉、書既成而請序於余、固辭不得命、於是乎書其所獨喜者以贈

寶曆丙子春三月望

同邑後學志茂逸犖玄壽甫拜題

民間備荒錄序

王者以レ民爲レ天、民以レ食爲レ天、其天とする所、同じからざるがごとくなれども、農を以て本とし、重んずるは異なることなし、農は天下の本也、本固ければ國安し、吾人小祿あるもの、平生勤芸の勞なく、生涯をやすんずるも、亦農夫の力、吾人の天にあらずや、しかるに今茲霖雨破レ稼、米粟不レ登、農夫菜色あり、予これを見るに忍びず、みづから才の拙をはからず、民間備レ荒の術を錄し、邑長保正にあたへて、彼の天恩に報んとほつするのみ

寶曆乙亥孟冬日

民間備荒錄凡例

寶曆五年、乙亥五月中旬より、寒令行れ、八月のすゑまで、雨ふりつゞき、其間五日七日、雨歇といへども、寒氣は初冬の頃のごとく、三伏の暑日も、布子を襲し、水田に入て芸る者は、手足ひへ僵手(こゞえ)

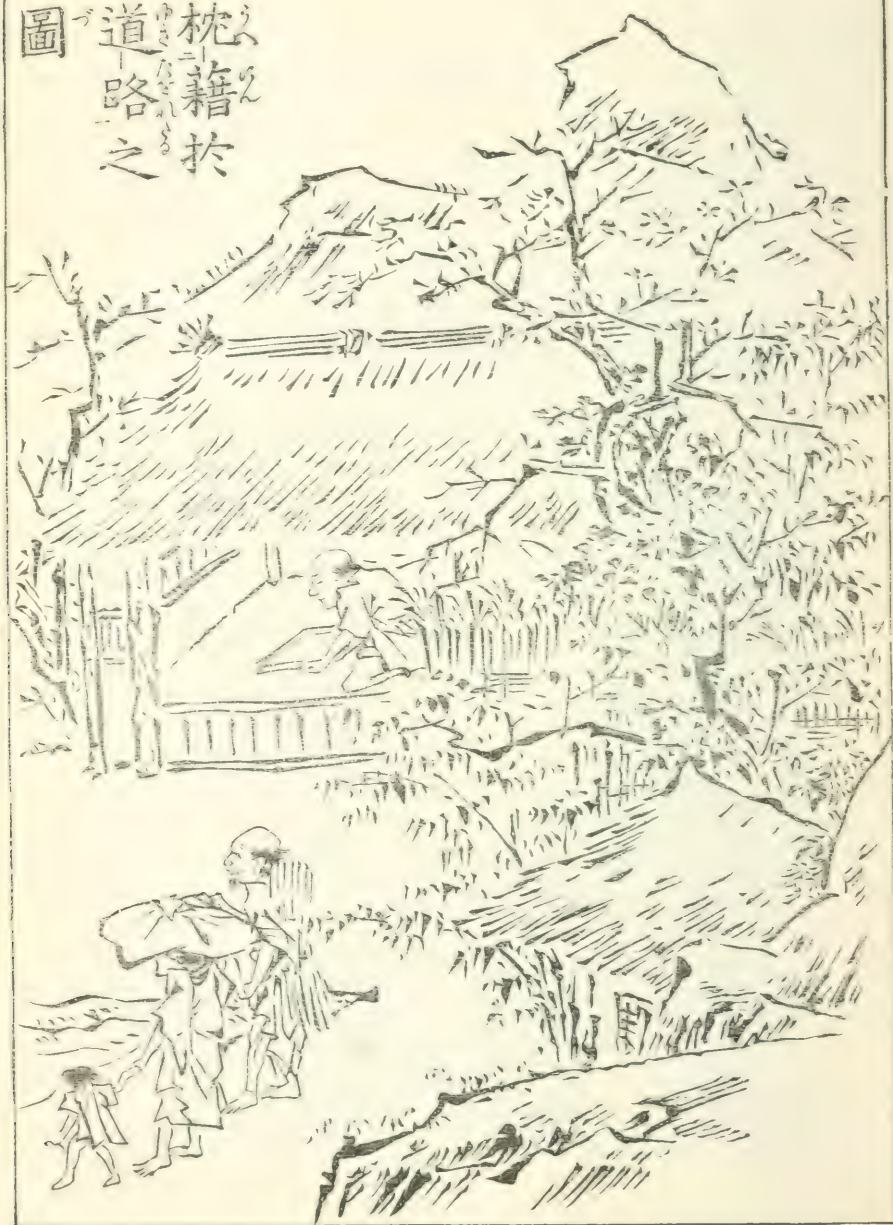
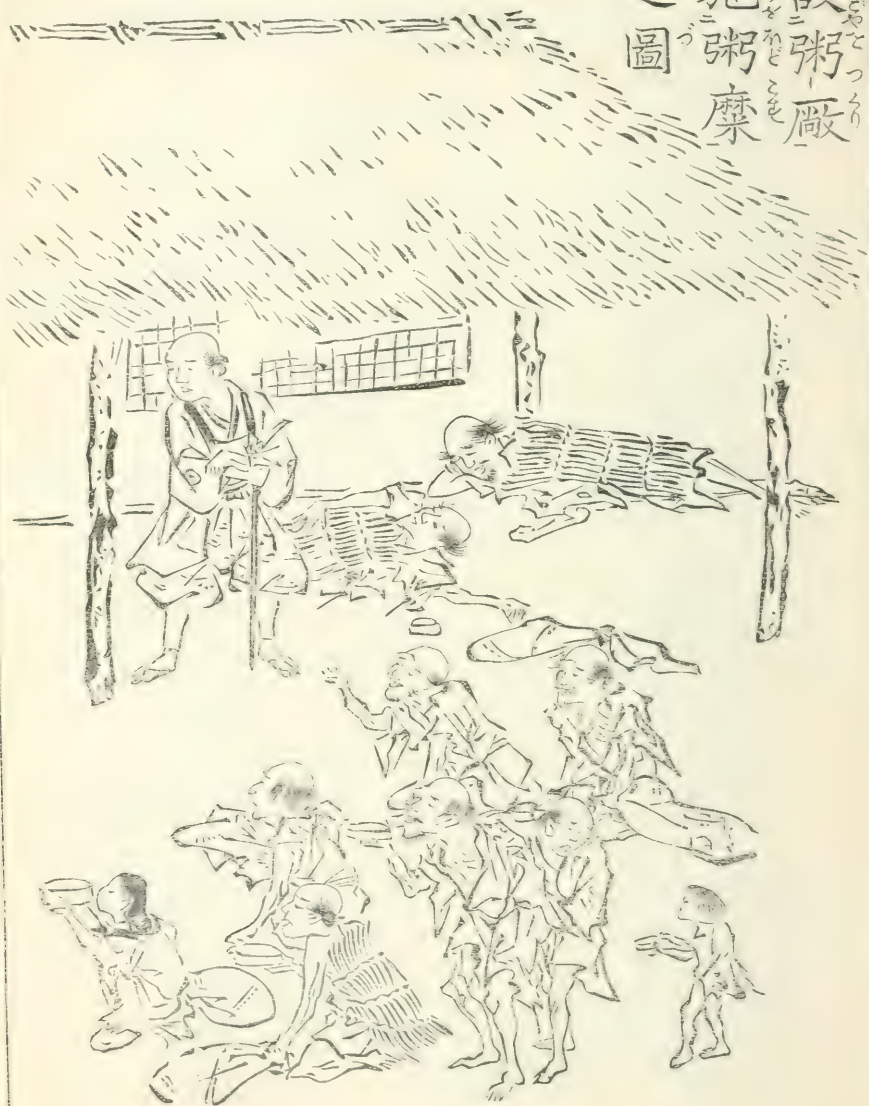
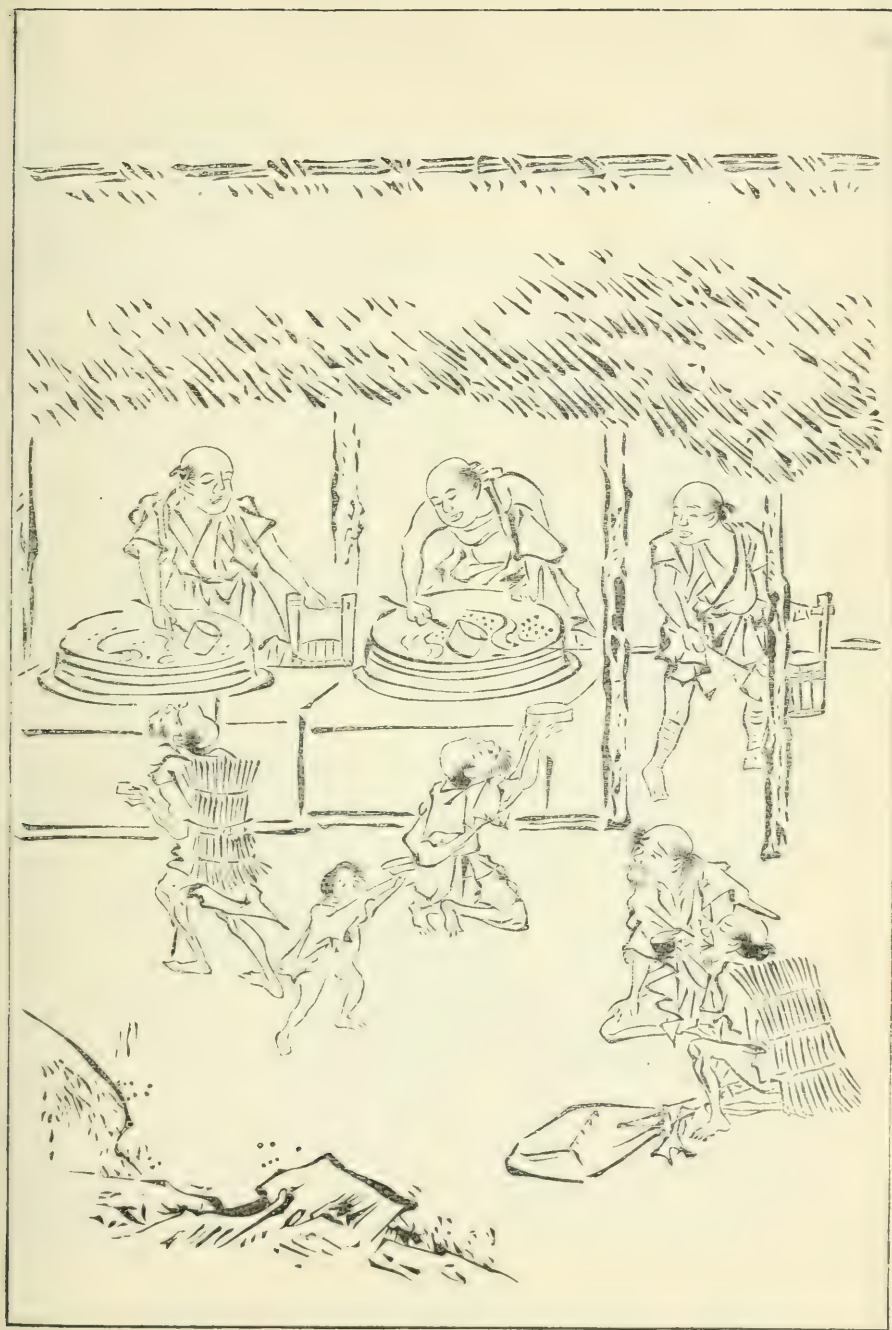
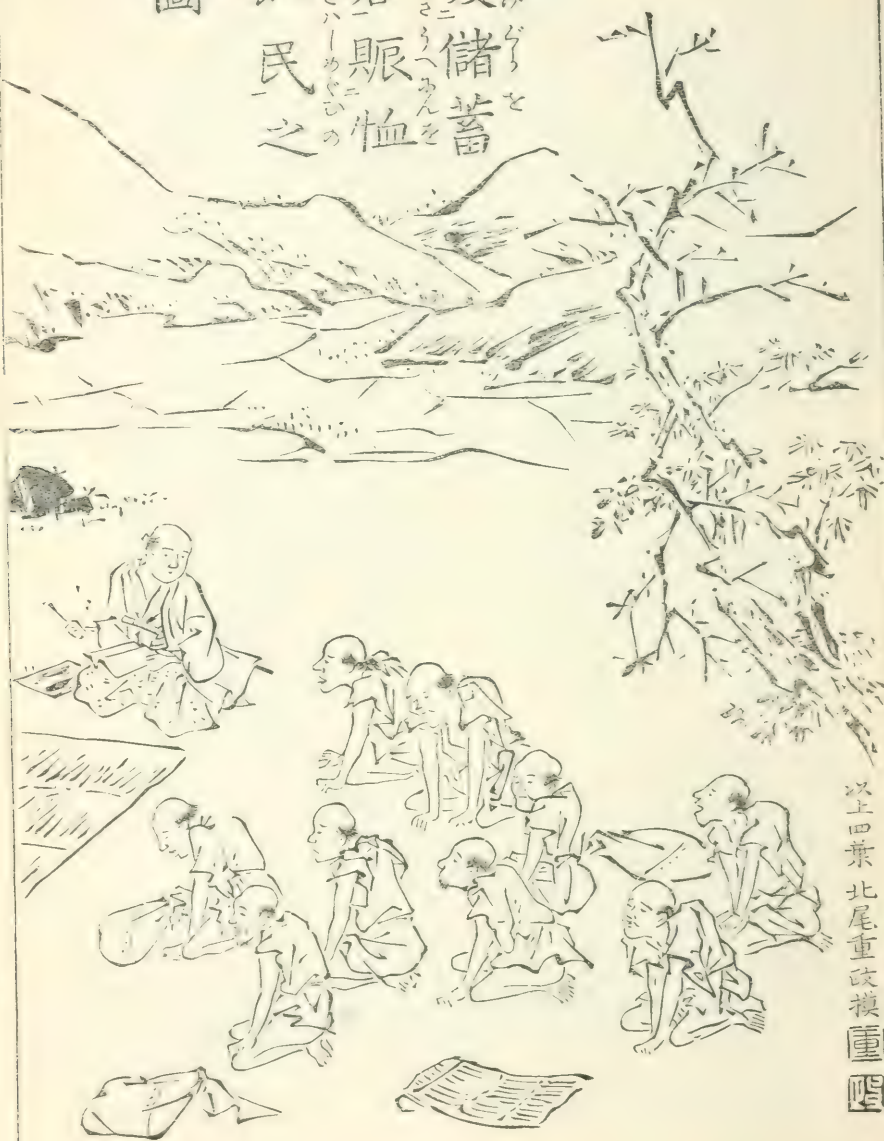
ぬる程の寒氣なりければ、稲は植たるまゝにて長ぜず、漸く穂は出たれども、みのらずして枯れぬる故、奥羽おほいに飢饉し、諸民の歎いふばかりなし、我一闔には、備蓄倉をひらかせたまひ、大夫司農の侶、心を盡し救はせられけるゆゑ、餓莩の患はあらざれども、他郷より來る流民、鵠形鳥面の老弱男女、蟻のごとく群來るは、目もあてられぬことどもなり、予孟冬晦日、大慈山先人の墓所へ詣ける往還、この形勢を見て、憫然として悲しみ思ひぬれども、身貧ければ救ふべき力なく、家に歸りて熟思に、吾人平日農夫の力にて、安樂に歳月を送りし、恩の萬分の一をも報なんは、憖て此時なるべしと、晝夜あんじ煩らひしかども、素より不學不才なれば施すべき術なかりしに、一日我友鄕內勝清の廬を訪ひ、荒政の談におよびければ、机上に有りし荒政要覽を出し見せられけるより、慨然として草根木葉、須臾の死を緩すべきことを悟り、此書を編て邑長保正にあたへ、又解毒の二方を調合し、同鄕の民に施し、平日の恩に報ふ、此書十二月に編たれども、自序に孟冬日と記せるは、不忍之情發するの日なればなり、因てこれを編るゆへんの意を叙て、凡例を挈ること左の如し

一此書專ら邑長保正に教へ、飢民を救はしめ、果木を栽置、後の飢饉に備へしめんとす、又此書草木の部をわけて、冬食ふべき物を前にしるし、春にいたりて食ふべき物を後に記す、飢民の見やすからんためなり

一　此書はじめ草木の和名を右に注け、方言を左りより注けたり、今改て方言を本文に書入れたるは、

見やすからんためなり

一　乙亥の飢饉に、民間にて親ら製し用ゐ、糧として益多かりし草木若干種、邑長保正老農に問ひ、書集め置たるを編て、後日後編に出さんとす、唯恨らくは予が不學のみならず、寒郷書に乏しければ、廣く校正すべきやうなく、愚心の什一をも盡すことあたはず、後の君子予が不才にして、他の術をしらず、草根木葉を以て、須臾の死を緩せんと謀りし、愚なる眞心を憐み、なほ又救荒の良法を增補し、永く飢饉の患なからしめんことを希ふ所なり

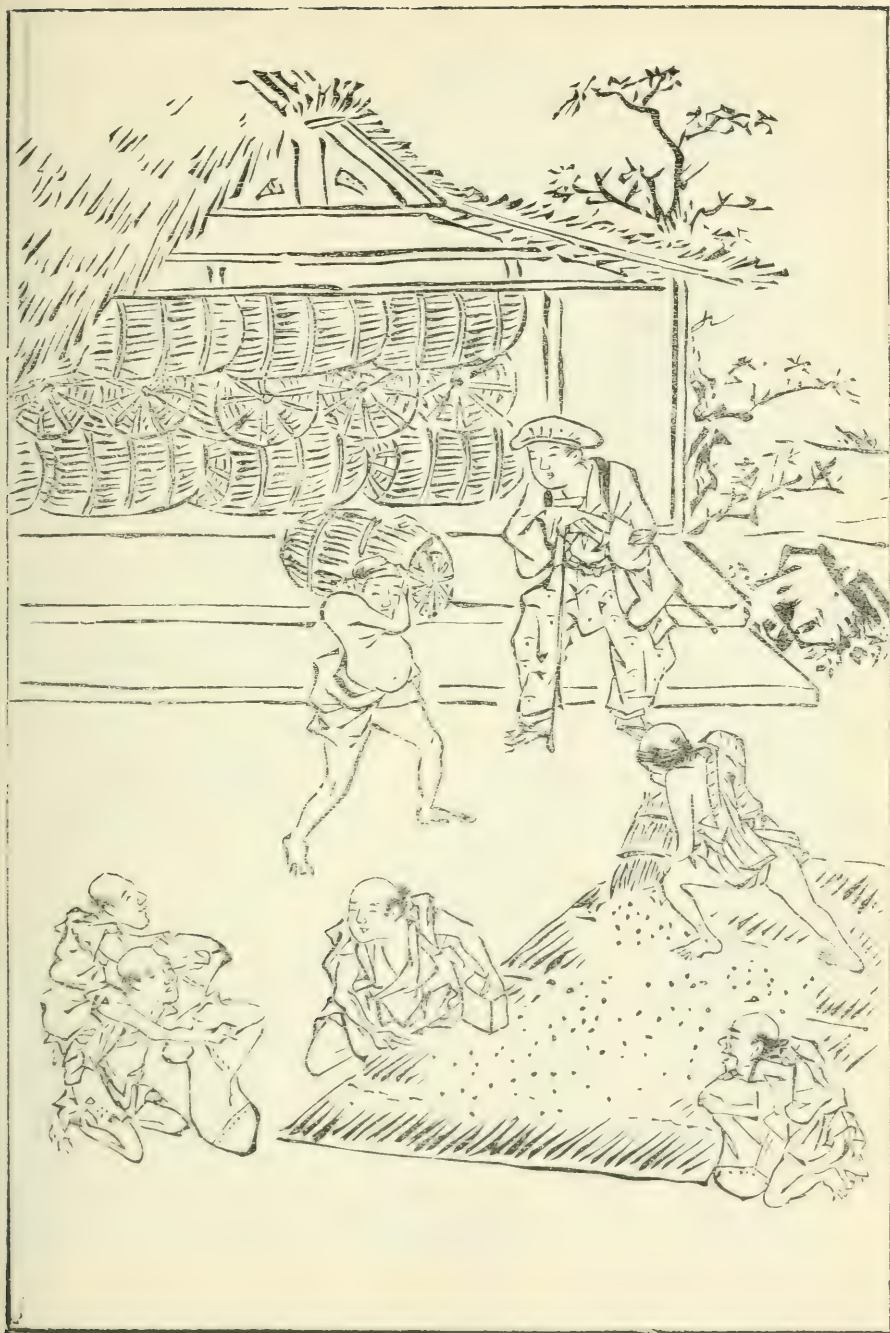
流民之圖

枕藉於道路之圖

設粥厰施粥糜之圖

發儲蓄倉賑恤飢民之圖
以上四葉　北尾重政摸

民間備荒錄目錄

卷之上

卷之下

民間備荒錄卷之上

奥州一關侍醫　清庵建部由正元策甫　著

備荒樹藝之法

天地の間、生民一日もかけてならぬは、衣食住の三なり、其うち尤大切なるは食なり、禮記の王制には九年三年の蓄をする法あり、日本にも、上古は救急料とて、飢饉の備ありしよし、今は絶てなし、我が一關には、古來より救荒の御備とて、所々に儲粟倉建おかれ、飢民を救せたまふゆゑ、諸民各私の貯をなさず、只御救を仰ぎ、今茲のごとき凶年には、茫然として計なきに至る、信也哉、沃土之民は材ならず淫也、他郷にもかくのごとき御救はあるべけれども、即今登り來る飢民を見るに、老弱轉二乎溝壑一、壯者散而之二四方一、孟子の說のごとし、是皆平日邑長保正心を不レ盡ゆゑなり、愚民はただ金銀を貯ることのみを好ども、飢ても不レ可レ食、寒うして不レ可レ衣、一旦卒に遇二凶年一凍餒を不レ能レ免ことを不レ知、又五穀を蓄ことを知る者は、我一人の利欲のみをはかりて、衆と共にせず、桑棗柿栗を栽るの、荒歲にたすけあることを知らず、甚哀べし、明の太祖深く念二民之一食たまひて、洪武二十

年、令陽風徐州和州每戶種桑二百株、種柿二百株、種棗二百株、用防饑歳、至二十七年、復命戶部、行文書、偏敎天下百姓、務要多種桑棗、每戶初年二百株、次四百株、三年共六百株、栽種過數目、造冊周知、違者全家發遣充軍、諭工部臣曰、人之常情安於所忽、飽即忘饑、暖即忘寒、不思爲備、一旦卒遇凶荒、則茫然無措也、深知民艱、百計以勸督之、俾其咸得飽暖、近年以來、時豐、民庶給足、田里皆安者、可以無憂也、然豫防之計、不可一日而忘、爾工部其諭民間、但有隙地、皆令種桑棗、或遇凶歉、可爲衣食之助、との詔あり、九重の內に御座御身にて、民の凶年に苦事を哀みたまひ、豫防の法を敎へたまふこと、誠にありがたき御事なり、況同村に生一村の內より、撰出され、肝入組頭となり（民間呼邑長保正曰肝入組頭、故從通稱用之、後皆倣此）步役を除き、給分を受ながら一村を救ふの備を不思、何事ぞや、韓信曰、乘人之車者、載人之患、衣人之衣者、懷人之憂、食人之食者、死人之事、今一村にて頭立役を勤め、一村より給分を受くるは、即ち衣食を受くるにあらずや、然れば懷其憂死其事の職分なり、救荒不患無奇策、只患無眞心、眞心即奇策也といへる、古人の言のごとく、眞實に村朋輩の飢渇に及ぶを哀れみおもふ心さへあれば、救凶年の備は有ることとなるに、他鄕より數百人の飢民群り來るを見れば、彼の地にも能き肝入組頭なきと見えたり、かれを見るにつけても、凶年續きぬれば、吾れも人もかくなるものなりと、よく／＼分別了簡して、菓木の凶年に食となるべきものを多く植ゑおき、これより十年後の凶年をふせぐべし、譬へば七

年の病、三年の艾を求るの類にして、今より心を盡しなば後の憂なきことなり、七年以前の巳の年の凶年より心を用ゐなば、今かほどの難儀はなかるべきに、飽ば饑を忘れ、暖かなれば、寒をわするゝゆゑ、其の備を不レ爲なり、予愚民の其の術を不レ知して、飢渇に不レ堪をみるに不レ忍、「庖人雖レ不レ治レ庖、尸祝不下越ニ樽爼一而代上レ之矣」と莊子の戒めたるを不レ顧備レ荒樹藝の術を上卷に記るし、即令可レ食草木の良毒制法を下卷に記るす、先づ植物は棗を第一とす若し棗土地に相應せざるか、又は種もとめがたきか、又栽やう不案內ならば、其代りに栗を其數栽か、又は壙土隙地を見たて油菜を蒔べし

一　棗味甘辛平無レ毒、多食令下レ人寒熱上、腹脹羸瘦不レ可レ食○惟蒸煑食、補ニ腸胃一、肥レ中益レ氣○不レ宜ニ合レ葱食ニ○救レ荒作ニ酸棗麪一法、紅軟なる棗を、箔の上にて日に曝してよくと乾かし、大釜の中に入れ煑る也、煑水うへまで沸あがりたらば、棗を取出し、布の袋へ入れ、絞りて濃汁をとり、盆の中に盛り、暑日に曝し乾し、以レ手摩て粉とし、米の粉に和て、食すれば、飢渇を救ふと云へり○春は採ニ嫩葉一煠熟(ゆびきじくし)、水に浸し、黄色になるとき、淘淨醬油又は味噌にて調食(あへて)、又は飯に雜へ食するもよし○棗紅熟時は摘取食レ之、其結生硬未レ紅時、煑て食ふ亦可なりといへり○栽レ棗法、三月棗芽發時、栽ニ棗樹一、每ニ坡陡地一畝一、各栽ニ棗樹八十株一、齊民要術曰、旱勞之地不レ任ニ耕稼一者、歷落種レ棗、則任矣、棗性燥故、又曰常選ニ好味者一、留栽レ之、候ニ棗葉始生一而移レ之、三步一樹、行欲ニ相當一、欲ニ令下ニ牛馬一踐履上令甲レ淨、正月一日、日出時、反レ斧班駁推レ之、名曰ニ嫁棗一にては總じて草木をかくの如くするを嫁菓といふ、奥州の民間にては、正月十四日の夜、もち切とて、草木を打つ、い

つの頃よりか始りけるにや、智ある農夫の實の害を考へ、其用の益て偏意なる時節を心得けるかと見えたり、今は小兒の戯のやうにおもひてせざるもの多し、小智偏才なる者は、おのれが思見を以て萬事をはかるゆゑ、古來の良法をも、おのれがしらぬことは、用ざる事多きなり、よく／＼昔の事を推て考ふべし、かくすれば實よくなるものと見えたり傚ニ大富人ノ策一、以ㇾ杖撃ニ其枝間一、振ニ去狂花一、令ニ赤肌收一、收法、日日栽而落ㇾ之爲ㇾ上これは中華にての栽やうなればいちがいもあるべし

一　大和本草云、栗樹の根繁延す、其根の到る處より苗生ず、掘取て可ㇾ植ㇾ之、其根繁茂する事、方六七間に至る、與ニ他木一異なるゆゑ、其實年々豐饒にして、年切せず、貧家多く栽て、飢を助くべし○七月紅熟する時、收て日に曝し、よく乾きる時、よく蒸熟し、又日に乾し、壺に收て、爲ㇾ藥なり、樹にありて熟したるを、逐日に追々にとるべし、雨久ければ朽るといへり、如ㇾ此するは藥に用る實を取る法なり、荒歲に飢を助くるには、青紅の差別を不ㇾ論、蒸煮て食ふべし、豐年にて食たり糧とせざる時は、右藥に用るやうに蒸熟し、藥店へ賣り、年貢諸納のたすけとすれば、栗稗大豆の類を賣る事すくなく、自然に農家の賦食殘り、貯へとなるゆゑ、凶年食乏の憂なかるべし

一　栗味鹹、性溫、無ㇾ毒、益ㇾ氣、厚ニ腸胃一、補ㇾ腎、令ニ人耐一ㇾ飢、本草圖經曰、果中最有ㇾ益、治ニ腰脚之疾一、性味共によく、五穀に劣らぬ物なり、史記秦饑應侯請發ニ五苑之棗栗一とあり、又燕秦千樹栗其人與ニ千戶侯一等、栗之利盖不ㇾ減ニ於棗一矣、荒政要覽に見えたり、一木奴千無ニ凶年一といふこと非ニ虛語一

一　栽ㇾ栗法、宮崎氏農業全書云、栗に大小あり、丹波の大栗を勝れたりとす、三ッ有いがのうち、中

なるをゑり取て、濕地に埋め置、春芽少出んとする時、肥地に底は堅く立根のながく入ぬ所をゑらびて五七寸間を置てならべうゑ、中一年して移し栽べし、二三年にして必實るものなり、又是を所をゑらびてうゑ置、杖ほどになりたる時、だい木にして、大栗の穗を接たるもしるし速なり、二年の後は必實るべし○又山にて柴栗のだい木を掘うゑおきて接たるもよし○又一說に栗はうゑ付にして、移しうゑべからずともいへり、木ふとりてうゑかゆれば久しくならぬ物なり、少き時は移しうゑてもかはる事なし○又栗をうゑる事木より落るを其まゝ拾ひ、わらなどに包み深く埋、春二月の頃芽少出るを見て、とがりたる方を下にして、深さ二三寸に種べし、若たねを遠方より取るならば、桶か箱に砂土を入れ、其中にいけ風日にあつべからず、惣じて木となりても、手風の觸る事を忌む物なるゆゑ、うゑおきて盛長の後まで木に手を觸るべからず、手風切々觸るればならぬ物なり○又丹波にても、一さかりなりては、木に蟲付て中を通ふし、痛みて實らぬ物なり、十月に入りて草を以て幹を包み、下にも木の葉をかきあつめ、火を付燒べし、蟲の穴にけぶり入、朽たる所に火入てこがれ、蟲も死し、其後木わかへてよくなる物なり、丹波にても大栗は大かた屋敷廻り、山畠などの畦々ばかりにうゑて、山中には大栗はまれなりと言なり、丹波の土は大概赤土なり、種る所は南向取分よし、又はあらき白沙の地も、栗によしと云なり、北向の肥て深き地は宜しからず、あわぬ地にても一端はふとりさかゆれども、やがて蟲付てたふるゝ物なり、土地風氣をよくゑらびてうゑる事肝要なり○同じく丹波にて栗を取りて收

る事は、よく熟しおのづから口をひらきたるばかりを拾ひて、一日乾かし其後かまけに入れ、他所へ賣出すなり○又かち栗は、わらの灰のあくに、一夜漬置て明る日日出て取出し、さらし乾し、肉よくかわきて、堅く成たる時、皮をうち去べし、臼にてつきて去たるものよし○生栗を來年まで納置事は、箱か桶壺にても沙を入れ栗の芽の所をやきかねにて燒、段々沙に埋み置けば、夏までも新しきがごとし○又栗の芽の所を右に云ごとく燒て、土にてぬり、ざつと干し、日のあたらぬ緣の下に散らしおきたるは、くさらずして久しくたもつ物なり、但じねんと口ひらき落たるがよく熟せざるはこたへずO又栗實のらざるを、下枝を多く切捨て、梢の枝をとめ置ば、かならずみのるといへり、右は農業全書に載する所也、其書卷數あるものにて、貧民急に求て見る事かたかるべきをはかりて、栗柿桑油菜の栽やうばかりを抄出す、扨又栗を收置く法品々ありといへども、荒歲を防ぐにはかち栗にして收置にしくことなし、米麥にまじへ、炊飯とすれば、食して味能く、又豐年には食餘りある時は、遠國他鄕へ出して賣り、其價を年貢上納の助とすれば、栗稗の類を貢の憂なきゆゑ、民間の賦食、自然に餘りあるべし、栗は大栗は利すくなく、中栗小栗利多し、鵠栗になるほどの栗を栽べし、栗に次ぐ物は柿なり、澁柿を多く栽べし

一 柿味甘、性平澁無レ毒、補ニ虛勞不足一、消ニ腹中宿血一、澁レ中厚レ腸、健ニ脾胃氣一、烏柿性溫、殺レ蟲療ニ金瘡一、生レ肉、止レ痛、治ニ狗齧瘡一、醂柿は性不レ好、民間饑を助るには、柿饉をよしとす、乾柿

（核を去り）糯米粉と同じく搗蒸して食ふ、これは極上の製法なり、貧民の食には、大麥を炒粉にして搗合たるがよし○生柿のときは、能煮て臼へ入搗き、粳米大麥をいづれにても、炒粉にして搗合、蒸食すればよしといへり○又串柿を作る時、いろ付たる柿の皮を剥たるを集め煮て、臼へ入れ能搗き、粳米又は大麥の炒て粉にしたるを搗合たるも、貧民の食には能といへり○生柿と蟹を合せ食すれば、腹痛み瀉る、禁ずべし

一 栽レ柿法、農業全書云、よく熟したる太きしぶ柿の核子を多く取置、濕氣心の地にひろげ、土を薄くかけ置、其後肥地に埋み春芽出る時、うゑべき所に穴をほり、肥たる土に糞をも合せ入て、核子を一ツづゝおしこみ、少おし付置、生出て旱せば、泔水をそゝぎ、三四年の後、正月中旬、（奧州にては二月中旬）其地に相應する接穗をえらびて接べし、さかへふとる事、山林より掘取たるだい木に接たるより速かにして、よく實る事其類なし、山林より取たるだい木は生付事は、かはる事なしといへども、後々に至りて、おもひのまゝにさかへず、必根に疵あるゆゑ、其所より朽り入痛み、子うゑの木の後ほど能さかえふとるにしかず、心ながき計りの樣なれども、後年におゐて、利潤多きは子うへの苗木の後まで難なきにはしかずと記しおけり、今心むるも又しかり○又子うゑの物をそのまゝ生立置たるは、たねがはりせざるも、自然は有といへども稀なる事にて、御所柿などのたねをうゑても、多くはしぶがきに變ずる事あり、接木の三年過ずして、さかえ實るを勝れりとすべし、殊に其木の性も、接木に宜しき物と

見えて、正二月のあいだ、（奥州にては二月中旬より下旬まで）念を入接たるは、百株も誤らず、よくつく物なり〇澁柿を調る法あまたあり、先皮をけづり、火にて烘べ乾すを、烏柿といふ也、黒きゆゑに名付る成るべし〇又柿搗は糯米五升中ほどの澁柿五十（よくいろづきたるを）わりて核子を去り、米の粉と同じくつき合て食ふ、味ありてめづらし、又蒸ても食すべし（これは上品の柿もちなり、貧民は大麦の炒粉と柿を等分に入れてつき合食べし）〇又串柿つり柿は、澁多き太き柿の熟し、いろ付一霜二霜にもあひて、青み少もなく成たりたるを、つり柿には蔕のもとの枝を一二寸付け折取り、皮をむき縄にはさみ、日に乾し夜露もとり、四五日してしゝ干の時、さねくばりとて指にて柿をつまみひねり、幾度も此のごとくして、やがて菓子に用ゆるは、七八分干たる時、籠に入れおくか、又東南の日の少し當る所に、竿をわたしかけておくもよし、是廿干とて、極て甜く賞翫なり、久しくおくは少堅過るまでほしあげて、箱にても壷にても、切わらを敷ならべ、つきあわぬ様にして收置ば、内にて白粉自然に出て、味ひ猶よく成ものなり、是を白柿とも柿花ともいふ也、串柿をば大かた干たる時、先かりに串を削り、一くしに十づつさし、一れんに十串、是を縄にてあみほし、さねくばりして干あげ、其後上柿は別に能串を削りさしかへ、色よきわら又は藺にても、二所手ざわよく卷、箱に入おく事前におなじ〇又柿に七絶ありとて、他の樹木に勝れたる事七ッあり、一には久しくいのちながし、二には日かげ多し、三には鳥の巣なし、四には虫の付事なし、五には霜葉愛しつべし、六には實すぐれてよき菓子なり、七には落葉田畠に入て、却て肥るものなり、色々功能有て損なき物なり、

屋敷廻り餘地あらば、必らず植置べし〇又柿澁になる山澁柿をもうゑ置て、家事の助とすべし、木練其外菓子に成る柿は、人煙のかゝる所ならでは實る事なし、山澁柿は人家をはなれても、肥地にてもよくなる物なり、穀田のさはりにならざる所を見合て、かならずうゑべし〇柿の製法品々有といへども、飢饉を防ぐには串柿にしかず、尤數多く栽るには、澁柿にあらねば、山野に栽ることならぬゆゑ益なし、澁柿の大きなるを接木にして、數多く栽置、凶年には右之製法にして食し、豊年には串柿とし、他國へ出し賣りて、年貢上納の助とし、前に記するごとく賦食に成る雜穀を賣らぬ計をすべし、棗栗柿に次ぎて飢を助る物は桑椹なり

一　桑椹(くはのみ)味甘、性寒、無レ毒、利ニ五藏關節痛血氣一、安ニ神魂一

桑椹のくろきを日に晒し、乾し粉とし、水にて三合づつ、日々に三度服すればうゑずと、月令廣義に出たり（唐の三合は日本の一合五勺なり）

能熟し黑きをよしとす、飢を助くるには、赤黑をえらばず淘淨蒸熟して、飯にまじへ煮て食すべし、蟲付てあるものなれば、たび〳〵よく淨ひて、のち蒸し食すべし、後漢の蔡順字は君仲といへる人、王莽が末に、天下大飢饉にて食物なく、拾レ椹養ニ老母一、孝行をあらはしたるよし、然ば老人食しても害なしと見えたり、葉は蠶を飼絲とし、綿とし衣服を作る、民間の利益甚多き物なり〇農業全書に云く、桑は四木の一ツにて、取分貴き物なり、凡て人世の重き物は、衣食に過る事なし、しかれば五穀

に次で必うゑべき物なり、古は人家ごとに、やしき廻りに、桑をうへて應じ〳〵に絲綿を取て、衣服の儲としたりと見えたり、殊に一度うゑおきては、女功ばかりにて、農事の妨ともさのみはならず、草木こそ多き中に、靑葉より絲綿の出る事、實に奇妙の靈木なり、近來木綿を廣く作りて、其しるし速かにして、下賤のために便りよきを專として、名所の外は、桑のしたて疎かになりたると見えたり、されど木綿も土地所によりて、おしなべて作る物にあらず、山中雨露のふかき所、其外作りて利なき所多し、此等の處にては桑に宜し、土地をゑらび、やしき廻り、牛馬のふせぎなど、無益の雜木を除き、專らうゑべき物也、是に先二色あり、一色は木立のびやかに肥て、葉丸く廣く厚し、葉の切め少しありて、實多くならず、是を唐の書には魯桑と云て、桑の上とするし置り、今一色みき枝まで細く堅く見えて、葉の切めふかく、菊の葉のごとし、椹多くなりて、木のかたちふくやかならず、是を荊桑と云なり、魯桑は蠶にかひて糸綿多く、荊桑は葉うすく堅きゆゑ、其利劣れり、糸はつよし、魯桑は木やわらかなれば、久しくこたへず、荊桑は幹木より枝葉まで堅きゆゑ、久しくさかへてつよき物なり、然るゆゑに荊桑をだい木にして、魯桑の穗を接たるがよしと、唐の書にはしるし置り、尤さもあるべき事なれども、桑は生じ安く、さかへやすき物にて、接木さし木取木などするにも及ばず、よきたねを年々まき、苗を多く生立おき、古木のかわりにうへつぐべし○苗を仕立る事、椹黑く熟したる時、其まゝもみつぶし、水にてゆり乾しおき、苗地をいかにも細かにこなし、糞をいかほども多くうちちらし

置て、畦作り、栗をうゆるごとくし、横に筋をかき、たねを蠶の糞其外糞土灰をも合せて、うすくむらなくまき、土をいかにもうすくおほひ、うるほひなき時ならば、少し踏付置べし、旱せば泔水をそゝぎ、草あらばぬきさり、厚く生たる所をば、間引すて、其後も糞水を度々かけ生立おき、もし寒氣つよき所ならば、牛馬の糞又は糠を以ておほひ置、あけて正二月移しうゆべし（奥州にては二月中旬より下旬の間よし）○又桑の實を取て、其まゝなはにすりつけて、がんぎのはゞに合せて、繩を切てうへ、土をおほひしかとふみ付おくも、よく生る物也、少くさりたる繩よし○移しうゆる地の事、畠にうゆるは間を四五尺もおきて、一本づゝもしくは二三本、一所にうゑたるも、つみ取しるし早し、通りをすぐにはたのかつかう次第に筋と〳〵の間、麥畦二ッ三ッも、土地と其人の勝手にまかせてうゆべし、其外畦きし川の邊り、水に近き所、よくさかゆる物也、殊に水をそゝぐに便もよし、扨有付て後は、廻りをうちかじり、草を削り根の廻りに埋みおき、綠豆小豆などを蒔、二年の間は葉をとらず、其まゝおきて、三年めよりつみとるべし、但土地の肥やせによるべし、よく肥てさかへうるわしきは、明るとしよりもつみとるべし○又楮をうゆる法、黑く能熟したるをとりて乾しおき、南方の端を切去て、中ばかりを種とすれば、木となりてよくさかへ太る物なり、柴の灰とたねをしめしもみ合、明る日水にてゆり、粃など浮ぶ物をさりさらし、乾してうゆれば生安し○又あれたる畠を耕してなし、糞をうちさらし置たるに、黍たねと楮を等分に合せてまき、沙にてうすく種子をおほひをし、生て後折々中うちし、草かじめして、

桑苗の生たるを二三寸に一本あて生立おき、黍實りて穂をかり取、其後からをかり干し、火を付風上より燒置ば、春になりては桑生じさかへて、其年はや蠶に飼ほど有物なり〇又云屋敷廻り、其外平地の和らかなる所は、魯桑も荊桑も皆よし、若高き岡又は山畠など、性のつよき地、風當の所などは、荊桑をうゆべし〇又南西の方の畦に蘽を蒔、東北の方の畦に桑の子ときびたねを合せ蒔べし、旱りして地乾きたらば、日おほひをし、桶を作り水をもそゝぐべし、是も黍とともに刈たをし、順風に燒べし、其後糞灰を用ひ手入をしおけば、春になりてさかゆるを移しうゆるもよし、子をうへ付にし、其まゝ生立るも本よりよし、接木取木さし木何れもよし、中にも下枝の根に近きをおしをかけ、糞を以て培ひとり、たにして根よく出たるを見て切はなし、移しうゆる事しるし速かなり〇又地桑を作る法あり、高き木は葉をつむに便りよからず、其上高木ばかりにては事たらぬ時もあり、又勝れて蠶の利潤多く、上地の餘計ある所などは專ら是を作るべし、畠の中に芳野うるしうゆるごとく、四五尺間を置て、桑苗一かぶに二三本穴を掘、糞を入てうゑおき、ふとりたるとき、土際一尺ばかりおき、鎌にて引切口を削り、松脂か蠟をぬり、火にてやき付おき、來春芽立少出る時、ふとくさかゆべきを、二三本或は四五本おきて、其餘は皆かき去べし、小枝多ければ葉うすく細くして、蠶に飼て益少し、桑は生じ安き物にて、十一月より寒中の外は、何れの月うゑてもよく活る物也、苗を仕立る所も、又移しうゆる所も、麻かいちび粟黍にても、日のあたる方にうゑて、其かけをとるべし〇

又葉をつみ蠶に飼んとする前つかた、淸水をうちてつみとるべし、雨の後はくるしからず（桑の葉に水けあれはかいこのどく也と云）○三月三日晴れば、桑よくさかゆる物也、此日雨ふれば桑の葉價ひ高く綿も高し○又桑久しくさかへて、後はとなりの根とからみ合て、根上りもし、榮へかぬる物なり、其時は中うちをあらくし、悪き根の上へあがりてあるをば切去べし○畠に地桑を專らうゆる數は、凡一段に六七百科(かぶ)うゆる積りと唐の書にはしるせり、尤土地の肥磽にはよるべし、とかく大かたの地にては、中に物を作りて、其間々端々畦きし見合うゑたるは、桑計うゑたるにおとらずさかへ、葉も肥るものなり○又桑苗を仕立るに、去年のたねも少々生るといへども、當年の椹を取て、極熱前に蒔たるは殘らず生る物なり、椹をとりおきて、器物に入置か、其外いきるゝ樣にはをさめおくべからず、ことの外熱氣のつよき物にて、いきれ損ね、又鼠のよく食する物なり、其心得をすべし○又柘榴の木を多くうへおきて、若葉を蠶に飼へば、桑とおなじく絲を生ず、此糸は琴の糸にして、其音淸く響きて、つねの糸よりは甚勝れり、されども糸はすくなし、是を蠶に飼んとならば、前年葉を殘らず切はらひ去べし、其まゝ置ば、春の若葉も、毒ありて蠶に忌なり、柘榴を子うゑとり木にする事も、桑と大かたおなじ事なり、此二木取分用材なり、細き時は馬の鞭にし、杖にもよし、十五年廿年に及べば、きやうそく腰かけ、又は弓にも作る、又わかき直なる四五尺ばかりもあるをたはめて、弓のごとく、繩にてはりおき、後々大木となりて、馬の鞍にうちては上もなきものなり、されども平地に生たるはよからず、山中岩間より生て久しき曲

りを重寶とはする也、桑槐楡柳楮五木是なり、此中にて取分桑を貴しとするとしるせり、又四木は桑漆楮茶是なり

凡桑は大木をよしとす、わか木の枝を刈て用ゐるは、たやすきやうなれども、葉すくなし、殊に蠶の小き時は、柔なる葉よけれども、少ふとりて後は、老木の厚き葉を飼ざれば、蟲ふとらず、糸多く生ぜず、蠶小きうちばかり、若木の葉を用る事となり、又山邊の木には葉にさまざまの病を生ずる事多し、唯大河ばたの桑尤よし、蠶も疾なくよくそだち、種子よく出るとなり、蠶のたねは高直なる物となり、抑桑を多く仕立る事、西國ならば丹後但馬邊にて、委しく其製法をならひ、木多くなりたらば、名所より男女を雇ひよせて、委しく其術を盡すべし、蠶を飼ふ事、さまざま手入れのしだいある事なり、又東國の方ならば、武藏上野などにて、萬の仕立、其法を詳に聞ならひ、よく得心して、後廣く仕立る事肝要なり、近來中國邊にて、楮の利多き事を國々に聞傳へ、委しく其術をまなばず、能其地味を辨へずして、妄にひろく楮を種て、多くの人民を苦しめ、莫大の財を費せし所おほしとかや、是皆大事を作すに、能其始を謀らざるゆゑ、其終りに失多き事かぎりなし、都てかゝる類ひは尤其始を謀るに心を用うべきものなり

一　右農業全書に載するところを熟讀して、土地相應の術を用うべし、丹波但馬にては、桑楮栗を栽、莫大の利潤ありて、國富ぬると見えたり、近くは桑折福島にて桑柿を栽絹と串柿とを多く賣出し、其

地富饒なり、彼地にて桑柿を栽る法を能ならひ學びて後遠大の計をなすべし、先墝土隙地にのみ栽ても、利潤多かるべし、譬ば山畠にて粟稗の類を蒔ぬれば、野猪多き故、穫收の利なしとて捨置、荒地となりぬる地幾所もあり、かくのごとき地に桑柿をうへなば、野猪の憂もなかるべきに、愚民は唯目前の利欲にのみ心を付永き損を不レ考なり、川堤又は用水堤其外馬草飼場の邊なども、桑柿を栽てよかるべき地なり、然るに永き計をなさず、速に利を求るゆゑ、田畠次第に荒地となり、凶年あれば防ぐべきの術なし、前にもいふごとく飢饉のときは、桑椹を取りて食とし、豐年には蠶をして糸綿絹紬の類を賣り、夏の年貢を納れは、農夫のちからを費さず、女功ばかりにて年貢を納め、麥を賣る事なきゆゑ、夏より秋までの賦食餘りあることとなり、士大夫五貫三貫も采地ある人は、其の采地の内、墝地隙地あらば桑柿栗を多く栽ゑさすれば、三貫文の采地の士は、四貫にも又其餘にも當る利潤出る事なれども、民間のことにあづからねば、こゝに略す、扨又田地ひらけ、柿栗を多く栽れば、田畠の害になる所にては、桑を麥畠の間に栽、居宅の邊り、屋敷廻りの垣にも、桑をすればよし、其上へ油菜を蒔て宜しき地を見立、屋敷廻りの餘地に蒔べし

一　油菜即蕓薹又胡菜、莖葉味苦辛、性溫、破ニ癥瘕結血一、煮食治ニ腰脚痺一、胡臭人不レ可レ食、又多食生ニ腹中諸蟲一」といへり、しかれども山野の毒草を食するには、甚まされる事なり、蟲を食しなば、諸蟲を生ずるの害なかるべし

一 農業全書云、油菜一名芸薹又韃菜と云（其種たつたんより来るゆへに韃菜と云也）其茎葉かぶらな水なに同じ、能こやしても、其根大きにはならず、又其味もおとれり、されども田圃に蒔て榮え安く、蟲も食せず、子多し、油を搾に利多き故、農民多く作る、三月黄花をひらき、さながら廣き田野に黄なる絹をしけるがごとし、其實のり麦に先立て熟し、跡の地早くあき、藍其外夏物を作るに便よし、惣じて麦ばかり多く作りぬれば、刈取事一度につどひ、跡のこなしも一同に往廻なりがたき考をなし、油菜を作るは一ッの手立なり、在のゆゑ所により麦の三ヶ一は、油菜を種る里もあり、是を作る法かぶなに同じ、但秋より地をこしらへ、糞して苗をしたて置、十月頃別の田畠に移し種たるは、よくさかえて子多し、されども農人いとまなくして、苗種ならざるは蒔付にすべし、しかれども苗種の利多き事を考しるべし

一 かぶらな水なも皆其子（み）に油あり、されども油菜の榮安くして、子おほきにしかず

一 一閭の近村にては、荏種を蒔きて油菜を蒔ず、荏は飢饉の食とならず、霖雨旱魃にいたみやすく油菜は霖雨旱魃の憂なく、飢饉には茎葉根共に食するの益あり、豊年には實を油屋へ賣りて、夏の年貢を納ぬれば、麦を賣らぬゆゑ、夏より秋までの賦食あるとなり

在郷桑楮菓ならびに油菜の種子を多く求め、肝入組頭平日心を盡しなば、年は豊凶によらず、国の利潤となり、いかほどの大凶年にても、饑死の憂なく、四民富榮る事なり、農は天下の本なり、本固ければ国安しといへば、大切至極なるは農事にしくはなし、故に智ある人は、此の種藝の術、甚

國家の利潤なる事を知るべけれども、愚民は目前の利のみ好むゆゑ、遠くはかり永く勤る事は、必ず心をよせぬものなれば、其利潤の出る所を、近くたとへて諭すべし

備荒儲蓄之法

一　譬へば二百五十貫文の村にて、此術を行ば土地の廣狹、田畠の良薄、山谷の違ひにて、其品品かわりあるべけれども、田畠各百廿五貫文づゝある地にてのつもりにして說くなり、人々我が住居する村の土地相應に、此術を省略增補して行ふべし、先百姓五貫文づゝの高を一保とさだめ これは田地を割合するため計に組合なり、あり來る組合を仕直す事にはあらず、 五十文や百文の百姓を合せて、五貫文の高になるやうにする也、其五貫文の高に三ケ年に棗二百株 棗種子なくば、其代りに桑を二百株うゆべし 桑二百株 屋敷廻りの垣を雜木を切りて、桑をうゆべし、地桑をこしらへ麥畑の間へうゆべし 柿二百株 柿は串柿になるべきを栽ゆべし、御所柿木練の類は、飢饉の助とならず、遠國他鄕へ出し賣益なし、うゆべからず 栗二百株 栗は中栗小栗益多し、棗たねなくば桑を一倍うゆべし、又栗うゆる事ならぬ地には油菜をうゆべし 五貫文高にて右四木の數凡て八百株なり、二百五十貫文の村にて、四木惣數四萬株を栽べし、油斷なく心を盡しぬれば、栗と桑は四五年過れば、利益見ゆるなり、棗柿も七八年めには子を結ぶべし、十ケ年後には四木ともに利潤有なり、其時肝入組頭相談して、右四木より年貢を出さしむべし これは凶年の備の穀食を買ため也 栗一株より一升、棗は四株より一升、柿は一株より串柿一連 壹連は柿百也 桑は一株より課錢五文を出さしめよ、

如レ此すれば、二百五十貫文の村より、出る所の、栗一株より一升づゝを積ば百石、棗四株より一升づつを積ば二十五石、柿一株より一連づゝを積ば一萬連、桑一株より課錢五文づゝを積ば五十貫文となる、右棗柿栗を集て賣るに、棗は五升にて二十錢づつ賣るつもりにすれば、二十五石にては錢十貫文となる、栗も五升にて二十錢に賣れば、四十貫文なり、柿壹連五錢づゝ賣れば五十貫文、それに桑の課錢五十貫文を合せ、四木より出る錢惣數百五十貫文となる、其錢を肝入組頭方へ集め、內二十貫文殘し置、外百三十貫文にて、麥粟稗の類を買置、肝入方に藏に入れ置べし、譬麥粟稗壹俵入五斗錢壹貫文づつ買ふつもりにして、百三十俵の貯へ出る年の豊凶によりて賣買高下あるべければ、賣る物は下直につもり、買ふ物は高直につもりぬれば、年によりて増減あるべし十一年めより二十年まで通じて、十年貯はふれば、千三百俵となるなり積蓄は久しく時へがたき物なれば、年々村の內の貧民に利なしに借し、其年貧しきを補置がよし、若穀にて償ふ者には、一分用捨するがよし如レ此するにも、村により奸曲成る、肝入組頭のみに任置なば、私して賦食買置かず、凶年の備へをせざる輩もあるべければ、春秋彼岸のころは、耕作穫收の取り立時なれば、彼岸の頃、一村の會日は、其地の產神祭の日とさだむべし、其日には老農を先として、惣村の農夫一戶より壹人づつ肝入方へ會し、前の百五十貫文の錢の內より二十貫文殘し置たるを、春秋二度、惣村會日に壹度に十貫文づゝにて酒肴を調へ、壹ヶ年の辛苦を忘るの樂とすべし、惣村殘なく會するには、酒なければことごとく來らざる物なり、ことごとく來るされば、人々の貧富見わたし、聞たる計にて眼前に見ざれば、貧民を救ふ心もいでぬものなれば、惣村殘なく來るやうに酒肴調ふるがよし此日に惣村の者立合て、貯置たる賦食高並各納たる棗柿栗の高簿書に合せ改め置べし、猶又惣村百姓談合して、曠野際地もあらば桑柿栗を多く栽る了簡すべ

し、尤村の內に甚貧窮して竈をたをす程の難儀なる者あらば、これも又飢饉におなじ理なれば、肝入組頭老農ともに吟味して、右其者の納置たる高に應じ、貯置ぬる賦食の內にて救ふべし、如ㇾ是の益あることなれば、平日心を盡し、漆桑楮栗を栽置て、肝入組頭方へ納ぬるにも、隨分多く納ぬれば、其者の貧窮になりたる時、納高の多少に應じ、多く救るゝの理を考へ、一村互に衣食の憂なきやうにすべし、惣村寄合たる時、たゞ酒を飮み樂む事のみ專一とせず、其年の氣候を考へ、老農のむかし物語を能聞て、農事を工夫了簡し、各土地良薄、種子糞壤の有無を相談し、餘りある者はなき者へ借し、なき者も自力にてなる程ははたらき、其上にてもたらずんば、肝入組頭に談合し、餘り有る方より借りて耕作し、各栽置たる四木より年貢を出しぬる外に、過分の餘りあるなれば、それにて償へかへすべし、かくすれば一村皆富饒になることなり、扨又此術を行んとならば、先肝入組頭相談して、他國の物を求めず、其地の產物にて、衣食事たるやうにするが肝要の計なり、士農工商の四民は、天地同胞のものなれども、士は肝入組頭の沙汰するものにあらず、農工商は皆農より出るものなれば、肝入組頭其土地の產物を考へ、木綿を多く產する地ならば、四民ともに常服に木綿を着するは益なり、これは公務の時も着するといふ事にはあらず、平日ふだん着の事なり寒國又は山谷に近き所、雨霧のふかき地にては、木綿を產せず、左樣の地には必桑麻出るもの也、これ天地よりその土地に生ずる、人民の衣服すべきために產する也、然るに諸民其考へなく、木綿は便利成るを好み、我が國の產物を妄に下直に賣捨他國より木綿を求め、常服とする

ゆゑ、我國の金銀皆他國の利潤となり、國の衰微と成べきことをはからず、農夫五十以下の者は、麻を常服にすれば其妻は紡績を勤め、士大夫の婦も、績ニ朝服一、衣ニ其夫一理をも知ぬべし、五十者可ニ以衣ニ帛とあれども、諸家ともに御國法ありて、農夫は帛を着ことならねば、五十以上の者は木綿を着ることよかるべし、工は田畠を作らず、工傭錢をもつて衣食とする者なれば、木綿にても麻にても、勝手能を着るがよし、商も又耕作せず貨財を通じ、他國へ我國の産物を出し、又他國の産物を求めきたりて、通用をなしぬるものなれば、いづれを着しても、其國の損にはならざるべし、如ㇾ此事までも心を用ゐ、其地より出る物にて事たり、藥種刀劔の外は、他國より求めざる樣にすれば、國の産物價貴く民の利十倍すべし、士は絹紬を常服にすれば是又國に益あり、いかんとなれば、農家にて桑を多く栽蠶を飼、繭を過分に出しても、其地の士大夫求めざれば、桑の利潤薄くなりぬるゆゑ、農夫こゝろを盡さず、士大夫の婦人も、蠶ㇾ繅以爲ニ衣服一道をも知らぬ樣になりなば、桑田變じて壙野となり、國の金銀皆他國の利となりて、國より出る物は、只米穀の外はなき樣に成行、妄に米穀を賣出し、人々貯をせず、一旦偶ニ荒歳一、無ㇾ所ㇾ錯ニ手足一に至るべし、士たる者も其地より出る物を常服にすれば、第一便利なり、其價も賤しくして、寒士も求め安し、たとへ其價貴きとても、利潤皆農家へ入るゆゑ、凶年にても、農家富饒なれば、年貢滯ることなく上納するゆゑ、上下ともに富饒に成る理あれども、此書は專ら民間の事を說ゆゑ、肝入組頭のあづからざる事は略すなり、然れども四民一同に不ㇾ論、桑麻の

利潤を說がたきゆゑ、こゝに言およぼしぬるのみ、肝入組頭はたゞ農工商の事のみにこゝろを盡すべし、前にも云ふごとく、近は福島邊の桑柿の利にて、彼地の富饒なるをもつてかんがふれば、其利潤能見ゆる事なり、土色を見たるに、沃土とも見えねども桑を多く栽、蠶繰絹紬を遠國他鄕まで賣り出すゆゑ、遠國他鄕の金銀、皆國の利となり、其地より出る麥粟稗を賣ことなきゆゑ、年々貯となる、其上柿の大きなるを栽置、串柿にして賣る、これも伊達柿とて遠國まで出し賣るゆゑ、其地富饒成ること、彼地往來する輩、皆人々知ることとなれども、心を寄ねば、我鄕にて此術を行はんとおもふこゝろも付かざる成り、惣じて肝入組頭、公務多きとて常に苦ぬるは、其村に貧民多きゆゑ也、人無ニ恒產一、因無ニ恒心一、貧窮になりぬれば、自然に盜賊の所行もあり、又は不忠不孝の者も出で、公務ますます多く、春宵一刻價千金と謠ひて、世間の人の樂む時にも、疾ㇾ首蹙ㇾ額己を勞して人に益なき事を一生の務と心得ぬるゆゑ、近き所に如ㇾ此の利潤あるを見ながら心も付ぬ也、「倉廩實乃知ニ禮節一、衣食足乃知ニ榮辱一、禮生ニ於有一而廢ニ於無一」と云へば、一村皆富饒にさへすれば、非義無道の輩もなく、公務おのづから閑暇無事にして、漢汲黯淮陽郡にて、眠ㇾ閣たるごとくの風俗と成るべし、其村々の廣狹によるべければ、五貫文の高に、四木ともに八百株栽る事ならぬ地にては、十株二十株より一百二百株にても、其地相應に壙地隙地を見立栽置なば、多ければ多く利あり、すくなければ少く利あり、桑栗は五年程過れば、利潤出るものなり、柿は十年程にして利あるものゆゑ、桑栗柿ともに十ヶ年迄は、栽立る手間

もかゝることなれば、年貢を取らず、十一年めより年貢を出さしめ、廿年に至るまで、勤謹則益ありて、二百五十貫の村より、收納する所千五百貫文、其内年々春秋二度、會日の料二百貫文を除く外、千三百貫文の貯へ出る、五百貫の村にては二千六百貫文の益出るなり、此術を不レ勤則損亦如レ此、能この理を考へ心を盡しなば、三四十年に至りては、其利潤はかるべからず、「臨レ淵而羨レ魚、不レ如ニ退而結一レ網、」今より桑柿栗を種藝しなば、農家は麥粟稗を賣る難儀なく、有司は年貢不納の憂なく、上下ともに富饒にして、菽粟水火のごとくならば前に云へるごとく、いか成大凶年ありとも、凍餒の難なかるべし

凡て世間の人情、古代と事かはり、金銀米穀の事に付ては、親疎の差別なく疑心多くなりぬれば、此種藝の術成就したる村にて、過分の金銀肝入組頭のみにて截判しなば、必邪曲成る農夫ありて、圄獄の基となりぬべし、又肝入組頭も、棗桑柿栗よりの年貢を納ざる農夫ありとても、嚴重に糺明もなりがたき事なるゆゑ、惣農夫談合して、年貢を出し、雑石を買ふ時節になりなば、上へ願ひ奉り、壹ヶ年に一度づゝ、御役人の御見屆を得て、不埒にならぬ様にして、肝入組頭預り置なば、萬代の計なるべし

民間備荒錄巻之上終

民間備荒錄卷之下

療二垂レ死饑人一法（しにそうなるうえにんをりやうじするほう）

饑て死せんとする者に、急に食を與ふべからず、往々猥呑（いちがひにくひ）て死する者也、先づ稀粥（おもゆ）を煮て汁椀にもり、卓のうへにのせ、飢人の前へ置、口を付てそろ〳〵吮（すは）せ、漸々に吮盡させよ、如レ此して氣力調へて後、飯を少づゝ喰せよ、惣じて飢人は腸細くなるものなれば、不レ堪二頓食一ものなり

救二水中凍死人一法（みづに入り又は寒にあひてこゞへ死したるをすくふほう）

凡隆冬大雪あるひは水中へ入りなどして、凍死したるものは、急に木綿わた入れの類を以ておほひあたゝめ、其上より熱灰を心臍の間へ度々置べし、尤直に膚に置べからず、わた入の上より置べし、如レ此して活なば、そろ〳〵藁の火を燒て、遠く溫煖を得るやうにすべし、若遽火を用ゐて炙れば冷氣內へせまり入りて、多は不レ能レ生也

食㆓草木葉㆒法（くさのはをくひやう）

一葛粉　民間云、くぞふじのねのこ也、味甘辛、氣平、性溫、無㆑毒、冬月根を掘、搗くだき、汁を取り水飛す、十餘へんして餈餻とし、飢を助る事五穀に次げり〇其葉も嫩き時は煠（ゆびき）熟し食とする也、老たるは干して多く收置き、馬に飼べし〇或說野葛毒有、食㆑之狂氣すといへり、野葛は和名うるしつた、形狀異なれども、葛と同字なれば、愚民誤り食せんことを恐る、能ゑらび用べし

一蕨粉　性極寒損㆓胃氣㆒、須㆘雜㆓米粉㆒食㆖㆑之、否則病㆑黄」と、荒政要覽に見えたり、米の粉か麥粉又米粃（こぬか）を雜へ食すれば害なし、雜食物不㆑宜ば甚害あり、又蕨粉ばかりをひさしく食へば、目晴み髮落る、小兒多食すれば、脚弱く行不㆑能と云へり〇もし毒にあたらば、白米を挽わり、粥に煮て湯のごとくし、鹽か燒味噌を雜へ、度々吮せよ、惣じて飢饉の時人の死するは、食物なきゆゑ死するばかりにはあらず、數日鹽を食せず、脾胃に鹽と穀氣と共に絕えたる所へ、山野の草根木葉を、鹽をも加へずして食するゆゑ、毒にあたり死するなり、鹽をさへ不㆑絕食すれば、草根木葉ばかり食しても死せぬものと見えたり、然れば荒歳第一の毒けしなり、肝入組頭よく心を盡し、其村々に鹽の貯を心を付、數日鹽を食せざるものには、鹽をあたふる了簡すれば、餓死人なかるべし

一　爪樓根（カラスウリノネ）　一名天花粉、味苦、性寒、無ㇾ毒、根を採て削ㇾ皮至極白きところ寸々に切り、水に浸す事一日に一度づゝ、水を換て浸し、四五日へて取出し、搗爛かし、絹か布の袋に盛て、澄し濾して極て細にし、粉のごとくし、或は根を採り晒し、搗麪となし、水に浸し、澄澱こと十餘へん、膩粉のごとくならしむべし、如ㇾ此水飛せざれば害あり、或は燒餅とし、或は煎餅に作り、切細にし麪にす、皆食べし、蕨粉と雜へ食すべからず○もし毒にあたりたらば、前に記せるごとくして解すべし

一　止知乃美（トチノミ）　香月牛山翁曰、倭俗以二橡實一訓二登知一、非也、山野民俗以二此實一、和二米粉一、爲ㇾ糕食、能殺二蛔蟲一、小兒宜ㇾ食」といへり、性大寒なり、換ㇾ水煮ること十五次、淘二去毒一蒸し熟して食へ、流水につけて、一宿（ひとよ）おけば、一度煮てもよしといへり、能煮て流水につけなば、猶以よかるべし

一　橡子樹（イチヰノミ）　本草橡實、櫟木子也、味苦澁、性微溫、無ㇾ毒、製法前のごとくし、食すべし

一　槲實（ドングリ）　民間云したみ、味澁、性大寒、虛人老人小兒食ふこと勿れ、水を換浸し、煮ること十四五度、澁味を淘り去り、蒸し極め熟して米粉に和へ糕として食ふ、飢を助くべし○又流水有る所にては、能く煮、笊籬（ざる）へ入れ、流水へ二三宿も浸しおけば、澁味も毒も能去るといへり○解毒の法前のごとし

一　榧子（カヤノミ）　味甘濇、性平、無ㇾ毒、常食治二五痔一、去二三蟲蠱毒鬼疰惡氣一、療二寸白蟲一、常に人々食する物ゆゑ製法をのするにおよばず、香煎にし食する法あり、それへ麥の炒粉を合食しなば、飢を防ぐべし○本草に云、榧子（かやのみ）皮反二菉豆（やゑなり）一、能殺ㇾ人也と見えたり

一　かたかこ　一名かたくり又かたこ、漢字未ㇾ詳、若水曰、旱藕なるべし、其粉如ㇾ米、味甘し、食して人を補益すと云へり、製法天花粉のごとし○解毒の法前に同じ

一　薏苡仁（ヅヽダマ）　味甘、性寒、無ㇾ毒、殼あつく、聞きものにあらず、其形尖りて殼うすきもの也、其米白色にして、糯米のごとし、粥にし飯にし、又麵にして食すべし、或は米と同じく酒に作るべし、飯にし麵とし食すれば飢ず、然ども煮くだけがたき物なれば、粉にして餻餌に作るをよしとす

一　蓮藕（ハスノ子）　味甘、性平、無ㇾ毒、煮るに鐵器を忌む、銅器を用うべし、醋を少加へて煮れば、黒色に變ぜず○又生藕を搗碎き、汁を取水飛し、陰乾にし、餻餌（だんごもち）とす○葉は爆熟して粮とすべし○又生藕（なまはす）を煮るにわら灰汁にて煮るをよしとす、又けし炭を入れて煮たるもよしといへり

一　藕蔤（ハスノワカバ）　五六月取る嫩葉なり、前のごとくして食すべし、性味同じ

一　蓮實　味甘、性平、濇毒なし、補ㇾ中益ㇾ氣、蒸食甚良　、搗碎て米に和し、粥又は飯に雑へ、食すれば飢を助く○又米粉を和へ餻餌として食するもよし

一　芡實（ミヅブキノミ）　民間に云おにばすのみ、味甘、性平濇、無ㇾ毒、葉は三月生ず、莖葉みな刺あり、實を取り、莖は皮を剝ぎて食すべし、五六月に紫花開きて日にむかふ、苞をむすぶ外に、青刺栗毬のごとし、剝きひらけば、内に斑なる軟肉あり、みをつゝみ果々珠のごとし、殼の内の白米は魚目のごとし、七八月收とりて、荒歉に備ふべし、其根は煮食ふべし、芋のごとし、實を粉にして、蓮實米粉に和へて餌に作

り、食すれば中を補ひ甚益あり、莖葉は三四月食すべし、其後は刺こわくして食しがたし、刺やわらかなる時、灰湯にて能く煠き熟食すべし、毒なく性もよし、凶年飢を助く池塘ある所には、多植おくべし

一　芰實（ヒシ）　味甘、性寒、無毒、其色嫩きときは青く、老ては黑し、嫩きときは剝て食す、甘美也、老ては蒸煮食す、野人は暴らし乾し皮を去り、粉にして、餌餻に作り、又は粥となす、皆糧に代ふべし、其莖も亦嫩きを採り、曝收て米麥に雜へ飯に炊ぎ食し、荒歉を助くべし、澤農有利之物也、性蓮實芡實に劣れりといへども、凶年貧民飢を救ふにたれり、古人これを用ゐて、飢饉を救ひし事多し〇右の類を多食するには鹽を缺べからず

一　鼓子花（ヒルガホ）　民間に云あわめふりはな、又からまりはな、三才圖會云、根蒸煮堪噉、甚甘美也」と見えたり、花は牽牛花に似て淡紅也、又白色あり、晝しぼまず、故にひるがほと云ふ「救荒本草曰、採根蒸食之、或晒乾、杵碎炊飯、食亦好、或磨作麪、作燒餠、蒸食」〇凶年には貧民根を掘り、鹽を和へ煮て食べし、飢を助く、去皮剉能煮てさわし、麥に和へ粥に煮食もよし、葉もまた煠熟し粮とすべし、久食すれば、頭暈破腹、間食則宜と云へり

一　榛（ハシバミ）、味甘、性平、無毒、益氣力、實腸胃、唐にては榛栗とて飢饉を助くると、栗と同じき物と云り

一　椎實　味甘、性平、無毒、貧民の飢を助く、山果の中にて其味五穀に近きアと、栗に次り、されども性は栗に劣り、病人は食ふべからず、傷脾胃氣」〇老人小兒多勿食解毒の法前のごとし

一　萆薢（トコロ）　味苦、性平、無レ毒、山野近き所の貧民に益あり、飢饉を救ふには、萆薢（ところ）を横に剉、よく煮て、流水に一夜浸せば、苦味よく去る、又灰湯にて能く煮熟し、換レ水二宿ほど浸し、さわして後、麥米の類ひへ合せ、炊レ飯食すれば、飢を助るといへり、然れども性冷利なる物なれば、病人虛人不レ可レ食〇若久しく食して、大便秘結せば白米を挽割、稀粥に煮て度々飲せよ泄瀉て其毒解する也

一　百合　味甘、性平、無レ毒、採レ根煮熟し、鹽を加へ食すべし

一　卷丹（オニユリ）　味甘、微苦、無レ毒、和二豆油一、酒煮て、食味最好

一　山丹（ヒメユリ）　味甘、性涼、無レ毒、根を食ふ法如レ前、葉亦煠熟食べし

一　土圞兒（ホド）　味甘、採レ根煮熟食レ之、鹽を加へ食すれば害なし

一　慈姑（シロクワヰ）　味甘、性寒、無レ毒、李時珍曰、灰湯に煮て熟し、皮を去り食すれば、麻澁なく、人の咽を戟ことなし、嫩葉も煠て食すべし、此物百毒を主とる、産後血悶死せんとし、産難胞衣出ざるに、搗しぼり汁を用ゐてよしと云へり

一　烏芋（クログワヰ）　味甘、性微寒、無レ毒、煮て食すべし

一　山藥（ヤマイモ）　味甘、性平、無レ毒、煮て食すべし

一　黄獨（カシユウ）　民間に云、けいも味苦澁、性微温、無レ毒、皮を去り、能煮て、苦味を去り食べし

一　商陸（ヤマゴボウ）　民間に云、とうごぼう味辛酸、性平、有レ毒、一に云苦性冷、白根を取り、切て作レ片煠熟

水を換浸し洗淨す、此物を製するには、薄く切、流水に二宿（ふたよ）浸し取り出し、豆葉を甑にして、段々隔に入れて、蒸こと六時程にして、取り上げ食す、豆葉なくば豆を用ひてもよしと、荒政要覽に見えたり○又灰湯にて能煮、度々水を換、二三宿浸し、さわしたるもよしと云へり、葉も亦灰湯にて煮熟して、粮とすべし

一　菖蒲　一名二昌陽一、味辛、性温、無レ毒、採二根肥大節稀一、水に浸し、邪味を去り、煮て食す○不レ可レ犯レ鐵、令二レ人吐逆一○救レ飢鐵刀にて切り、灰湯にて煮熟し、水を換へ二三宿浸せば害なし

一　蒼朮（オケラ）　味苦甘、性温、無レ毒、採レ根黑皮を去、薄切二三宿水に浸し、苦味を去、煮熟して食すべし

一　黄精苗（ナカコユリノワカナヘ）　採二嫩葉一煠熟換レ水浸、去二苦味一、淘洗淨鹽醬油にて調食す、根は九蒸九暴、令二極熟一、不レ熟則刺二人喉咽一難レ食と云へり

一　蒲筍（ガマヅノ）　民間に云がばのわかめ、味甘、性平、無レ毒、蒲の初生なり、近レ根白筍を採、揀剝煠熟、醬油味噌にて調食す、蒸食するもよし、或採レ根剝二去麁皺一、晒干麪に磨き、打レ餅食するも皆よし

一　菰首（コモヅノ）　民間云がつごのめ也、一名二菰筍一、味甘寒、無レ毒、即菰の根より生ずる芽なり、飢饉の時には採りて糧とすべし、煠き熟し味噌醬油にて調食す、或は採レ子舂て爲レ米、合二米麥一炊レ粥食レ之、甚濟レ飢と云へり

一　蘆筍（アシヅノ）　民間に云よしのめ、又よしのこ也、春月に土をほりて採る肉厚して柔なり、他種にすぐれた

り、味甘、性寒、無レ毒、露出浮レ水者不レ堪レ食、採二嫩筍一煠熟、味噌醤油にて調食す、其根甘し、生にて煠て食もよし、水中より初めて生ずるものゝよし

一　芣苢（オホバコ）　民間に云、まりこは又かいるは、本草云、一名車前子、一名車輪菜、味甘、鹹、性寒、無レ毒、葉及根味甘、性寒、採二嫩葉一煠熟、水に浸し一宿さわし、涎沫を能淘淨去り、味噌醤油の類にて、調食ふ、又粮となすには、性寒なるものなれば能煑て後、麥米の類へ合せ、炊しぎ食ふべし、稷又は蕎粉などへ雜へ食べからず、兩品ともに、性寒なる物ゆゑ、脾胃虚弱（よわき）人は大食傷すべし、流水ある地ならば煮て流水へ一宿浸せば、毒も涎沫も能く去るといへり○久しく食し、惣身浮腫、顏色青、或泄瀉、或大便秘結することあらば、上白米を稀粥に煑て、燒鹽を加へ、度々吮せぬれば、腫消大便常のごとくになりて治する也

一　款冬（フキ）　民間に云わたぶき、又山のふき、葉及莖味甘温、無レ毒、花も糧とすべし、花は苦辛し、煠熟て煑、水に漬さわし置て後、流水へ一宿浸せば、苦味を去る、葉莖は食煠熟食すれば、苦味なし、解毒法前のごとし

一　蕨萁　味甘、性寒滑、無レ毒、其莖嫩時採り、細に剉み灰湯にて、能煑て後、換レ水二三宿浸し淘淨し涎滑を去り、麥米の類に合せ、炊ぎて食す、又流水ある地ならば、二三宿流水へ浸せば、食しやすしと云へり、此物を粮とする法、山野近所の貧民、能知ることとなるゆゑ略す

一　紫萁（ゼンマイ）　初生食べし、性味功能禁忌同二蕨萁一、調食解毒の法も亦同し、根を掘たゝき、蕨粉を取る法のごとく、水飛して、粉をとりて餅に作り、粮とし食べし、味能蕨粉にまされりと云へり

一　槖吾（ツワ）、味苦、性寒、莖葉欵冬に似たり、冬も莖葉ありて、不レ枯、其莖を食するに、味ふきのごとし、皮を去りて、欵冬を食するごとくすべし、又煮乾して收置食べし、一切の毒を解し、功能すぐれたり、就レ中よく魚毒を解す、河豚の毒をも解す、凶年の粮とするには、欵冬のごとく調食す

一　接續草（スギナ）　味淡甘而微苦、無レ毒、病人無レ妨、其性主二生發一、同二羌活一、患二瘡疥一人勿レ食、此物よく煠熟て、淘淨、麥米に雜へ、炊しぎ粮とすべし、荒歲可レ救レ飢

一　艾葉　味苦、性微溫、無レ毒、嫩艾餻治二一切惡鬼氣一、久服止二冷痢一、灰湯にて能煠熟（ユデ）、麥の類に合せ、炊しぎ粮とするもよしと云へり

一　蕺菜（ドクダミ）　貧民根を掘り、蒸し熟し、飯の上へ置き蒸して食す、味甘しと云ふ、飢歲やむことをえざるの食なるべし、鹽を食せば害もなかるべし

一　水芹（セリ）　味甘、性平、無レ毒、本經曰、止レ血養レ精、保二血脈一、益レ氣、令二人肥健一、李延飛曰、赤芹害レ人不レ可レ食、諸芹三月已後、以レ有二蛭遺子一害レ人、能々淨て後煮食べし

一　蜀漆（コクサキノハ）　民間に云、とうのきのは、卽常山也、其葉似二臭梧桐一、味辛、性平、甄權曰、苦小毒あり、脾胃虛の人食ふ勿れ、煮て一宿水に浸し、さわし食すべし、流水に浸せばなほよし　蜀漆はこくさぎ茶葉の如し、臭梧桐はくさぎ葉大也二物別也

一大薊 民間に云、のみとりばな、又やまあざみ、味甘、性溫、無毒、風熱を除き、女子の赤白沃によし、安胎の功あり、灰湯にて煮熟し、水を換へさわして後食べし

一小薊 味性とも前のごとし、調食の法も亦同じ

一苦芙 多生水澤、味微苦、性微寒、無毒、調食の法前のごとし

一紅藍苗 性同紅花、煠熟食法艾葉の如し、破血もの也、妊婦産後及金瘡脾胃虛の人食こと勿れ

一繁縷 味酸、性平、無毒、作菜益人、藏器曰、破血下乳汁、産婦宜食之、煠熟食べし

一蒲公英 民間に云、ぐじな又てヽつぽう、味苦、寒無毒、東垣曰、婦人乳癰水腫には、煮て汁を飲ば立消、丹溪曰、解食毒、散滯氣、化熱毒、煮食法前のごとし

一黄瓜菜 味甘、微苦、性微寒、無毒、煠熟食べし

一虎杖 味甘、性平、無毒、治産後惡血不下、妊婦不可食、右の數種を食に必鹽を欠べからず

一地膚 民間に云、ほうきヽのは、苗葉味苦、性寒、無毒、煠熟さわし食べし

一藜 味甘、性平、有微毒、向井元升庖厨倭名本草曰、補益調養の性なし、一本堂藥選には、適勝於芎歸勺芐四物湯と云へり、いづれか是なるや、各試可用、煠熟て飯或粥に雜煮て食べし、飢饉の時のみならず、常にも乾して蓄置き粮とすべし、葉大而赤者爲藜藿、葉小而青者名灰條、救荒野譜曰、灰條復灰條、采采何辭勞、野人當年飽藜藿、凶歳得此爲嘉穀、唐にては常に蓄置き貧民の食とす

ること見るべし

一　莧菜（アチヒユ）　民間に云、あをひやう、味甘、性冷利、無ㇾ毒、補ㇾ氣除ㇾ熱煠熟食べし、麥禾に合せ飯に炊しぎ、又粥に雜へ煮て食もよし、不ㇾ可二與ㇾ鼈同食一〇莧の類數種あり、白莧、赤莧、斑莧、野莧也、共可ㇾ食

一　馬齒莧（スベリヒユ）　味酸、性寒滑、無ㇾ毒、節葉間有二水銀一〇香月牛山翁曰、倭俗謂有二水銀一、妊婦及婦人小兒禁制而不ㇾ用、救荒野譜曰、食二莖葉一、有二紅白二種一、入ㇾ夏采、沸湯淪過、曝乾、冬用、旋食亦可、楚俗元旦食ㇾ之〇救ㇾ飢には煠熟、味噌なくば鹽を加へ食べし、蕨粉と同食すべからず

一　薺（ナヅナ）　味甘、性溫、無ㇾ毒、利二五臟一、根治二目痛一、春月采二莖葉一、生熟皆可ㇾ食、詩曰、誰謂二荼苦一、其甘如ㇾ薺、東坡云、天生二此物一、爲二幽人山居之福一」これみな味の甘美なるを云ふ、菥蓂は薺に似て毛あり、葶藶も薺類也、共可ㇾ食と、貝原翁云へり〇江薺（いぬなづな）食二莖葉一、生二臘月一、生熟皆可ㇾ用、花時不ㇾ宜、但可ㇾ作ㇾ虀」と、救荒野譜に見えたり、煠熟食べし

一　獨活（ウド）　味甘、性平、無ㇾ毒、莖葉根共皆煠熟食べし

一　稀蘞苗（メナモミノナヘ）　味苦、性寒、有二小毒一、採二嫩苗葉一、煠熟水に浸し、苦味を去り、淘淨、鹽醬油にて調食す、流水ある所ならば、一宿浸せば、苦味も毒もよく去ると云へり

一　茅芽根（ツバナノネ）　本草名二茅根一、至潔白、亦甚甘美、根性寒、茅針性平、花性溫、倶味甘、無ㇾ毒、嫩芽を

採、うは皮を剝取りて食、甚小兒に益あり

一 藤蒿(タイハギ) 味辛、性溫、無レ毒、破レ血下レ氣、煠熟食へし

一 萱草 苗花俱味甘、性涼、無レ毒、根亦同、救荒本草曰、俗名二川草花一、本草一名鹿葱、謂レ生二山野一、花名二宜男一、風土記云、懷妊婦人、佩二其花一生レ男故也、救レ飢採二嫩苗葉一、煠熟、水浸、淘淨、油鹽にて調食○玄扈先生曰、花葉芽俱嘉蔬、不二必救一レ荒、根亦可レ作レ粉、如二治レ蕨法一、近歲洊飢、山民多賴レ之」わらびの粉をとるごとくして、餅に作り粮とし、味よしと云へり

一 野蜀葵(ミツバゼリ) 味甘、微苦、無レ毒、病人にも不レ忌レ之、菜中の佳品也、葉及根亦煠熟粮とすべし

一 防風(ヤマニンジン) 救荒本草云、一名屛風、味甘辛、性溫、無レ毒、又有二叉頭一者、令二レ人發一レ狂、叉尾者發二痼疾一○救レ飢採二嫩苗葉一、作レ菜茹、煠熟極爽レ口

一 菊 葉花共味苦、性平、久食利二血氣一、煠熟食べし

一 鷄冠苗(ケイトウノナ) 味甘、性涼、無レ毒、時珍曰、治二痔及血病一、煠熟食す

一 紫蘇 味辛、性溫、無レ毒、煠熟食す○鯉魚と同食すべからず、生二毒瘡一

一 鼠麴草(ハハコグサ) 又名二五行蒿一、味甘、性平、無レ毒、採二莖葉一和二米粉一、餻とし食す、艾を製する法のごとし

一 耳菜 貝原翁曰、葉如二佛耳草一、莖長くして如二蔓草一、就レ地延生る、冬春繁茂、開二白花一、俚民爲

蔬而食レ之、如ニ蘩蔞ノ未レ知ニ漢名ノ、煠熟食て、味あしからず、飢を救ふべし

一 桔梗苗　根葉味辛苦、性微溫、有ニ小毒ノ、一云、味苦、性平、無レ毒、採レ葉煠熟、換レ水浸、去ニ苦味ノ、淘淨、味噌醬油にて調食す

一 羊蹄苗（シフクサノナヘ）　民間に云、しのは又わだいわう、味苦、性寒、無レ毒、救荒本草曰、採ニ嫩苗葉ノ煠熟、水浸淘ニ淨苦味ノ、油鹽調食、其子熟時、打レ子搗爲レ米、以ニ滾水湯ノ、三五次淘淨、下レ鍋作ニ水飯ノ食、微破レ腹○今試に、葉味微酸、根味苦、何ほどさわしても食がたし、葉は煠熟たるばかりにてもよし

一 夏枯草（ウツボクサ）　民間に云、うばのち、味辛苦、性微寒、採ニ嫩葉ノ煠熟、換レ水浸、淘ニ去苦味ノ○又灰湯にて能煮、二宿ほど水に漬置て後食べし、秋に至り枯葉になりたるも、粮とし食するによしと云へり、山居貧民の傳なり、試用べし（惣じて草根木葉木實かるい、小毒ある物といへども、灰湯にて煮、二三宿水を換浸さわして後食すれば害なし、灰湯には雜木の堅木を燒たる灰よし、松杉を燒たる灰は功なしと云へり）

一 枸杞苗（クコノナヘ）　味苦、性寒、除レ煩、益レ氣、煠熟食す

一 木通嫩芽（アケビノワカセヘ）　味甘淡、性微寒、無レ毒、煠熟食す

一 皂莢樹嫩芽（サイカチノワカバ）　無レ毒、煠熟、換レ水浸洗、淘淨、鹽味噌にて調食

一 忍冬葉（スイカヅラノハ）　味甘、性溫、無レ毒、嫩葉及花を採、煠熟、水を換浸して、邪氣を去り、淘淨如レ前調食

一 木天蓼葉（マタヽビノハ）　味辛、性溫有ニ小毒ノ、煠熟食す、鹽にて毒を解するなり、鹽なくば食ふべからず

一 藤嫩芽　無レ毒、灰湯にて煮、換水二三宿浸、淘淨して後食べし、破レ血もの也、産婦禁制して食こと

勿れ、常人は麥米に合せ、飯に炊しぎ食もよし、鹽よく其毒を解す、味噌鹽なくば食ふこと勿れ

一　五加苗（うこぎ）　味苦、性温、無毒、煠熟食べし、去皮膚風濕性よきもの也、飢民草根木葉を食へ、其毒にあたり、總身浮腫たるものは、根を掘り、水煎して飲ば、腫消なり

○寶暦六年丙子の春、飢民蔓菁車前草を久しく食たるもの、總身青色になり水腫のごとくはれたるものに、救荒解毒丹を四五貼、白湯にて飲しめければ、腫消全快したり、荒歳なくんばあるべからざる神妙の奇方なり、後篇に出す

一　野胡蘿蔔（ノニンジン）　救荒本草曰、生荒野中、苗葉似家胡蘿蔔、俱細小、其根味甘、生食蒸食皆宜、救飢洗淨去皮、生食亦可

一　鴨跖草（ツユクサ）　和名月草露草、救荒本草曰、竹節菜、其葉甜、救飢採嫩苗葉、煠熟油鹽調食、玄扈先生曰、南方名淡竹葉、箐過、本草曰、苗氣味苦、大寒、無毒、治蛇犬咬○愚按、治蛇咬には、莖葉ともに搗て、嚙口の四邊へ敷、嚙口をば、厚朴葉（ほゝのきのは）にて、風の入らざるやうに掩ひ置て、嚙口より脂水流れ出て、痛去り腫ひかば、厚朴葉を去り、鴨跖草ばかり敷、掩ひおけば治するなり、犬咬は後に記せる瘋犬咬傷治方を用ふべし、疵小さしとて油斷すべからず、必死の病と心得べし

一　酸漿（ほゝづき）　救荒本草曰、姑娘菜、俗名燈籠兒、又名掛金燈、本艸名酸漿、一名醋漿、味酸、性平寒、無毒、葉味微苦し、葉を採り煠熟、水に浸しさわし、苦味を去、油鹽（しやうゆにあひてくろふ）調食、子熟し摘取食之

一 鳳仙花 和俗つまくれなゐと云、救荒本草曰、小桃紅、一名夾竹桃、俗名染指甲艸、葉味苦微澁、採苗葉煠熟、水浸一宿、做菜油鹽調食、本艸に有小毒と云ふ、然れども能煮、水を換、一宿さわせば害なし○子は咽中に魚骨のたちたるに、研(こにし)末、水にて呑、或竹筒にて吹入れば、即ぬくることと妙なり

一 蘿摩(かゞいも) 民間に云、こがみ、味甘辛、温、無毒、葉味甘微苦、採嫩葉ゆびき水を換ひたし、苦味邪氣を去り、淘淨、油鹽調食、此草葉を煮て食す、味よし、園籬にうへて食品とすべし、虚を補ひ精氣を益し、陰道を強くす、性好し、葉は腫毒を消し、綿は金瘡の血を止む、汁は赤腫につけ、蛇の咬たるに敷(ツク)、其外功能委く大和本草に見えたり、民間園籬に常に植おくべきもの也

一 後庭花(ハゲイトウ) 一名鴈來紅、味甜微澁、性涼、苗葉をとり煠熟、水にひたし、淘淨、油鹽調食、晒乾、煠食尤佳

一 竹筍 味甘、性微寒、無毒、鹽味噌の類にて能煮て食べし、煮こと熟せざれば難化○其毒にあらば、姜汁を飲解すべし

一 雀麥(チヤヒキグサ) 味甘、性平、無毒、時珍曰、此野麥也、燕雀所食故名、救荒本草曰、舂て皮を去り、搗て麪に作り蒸食ふ、又餅に作りて食ふもよし、荒歉を救ふべし、向井元升曰、二月頃、初生の青葉を、採汁を搗て米粉に和し、餅に作り、蒸食すれば、香味甚よし、本草曰、女人產不出を治す、煮て汁を飲むべし

一 澤瀉味苦、性温、有小毒、又云無有毒、採苗根葉蒸、味噌醤にて調食すべし、上州七日市の人語りけるは、上野の方言にうしびるといふ、凶年飢を救ふに甚宜しきもの也、我國にては邑長毎年に豊凶を考へ、凶年には各我支配へ觸れて、農夫貧富ともに山野に出てうしびるを掘、煮て食はしむ、昔し富民うしびるを食せず、掘に出ざる者あれば、邑長其者を諭し教へ、今汝幸にして食有餘とも、萬年飢饉ならば、汝とても餓死をのがるべからず、今より食物を儉約し、變熟するまでは、山野に出、うしびるを掘り食せよとて、惣村一同に出で、うしびるを掘り、釜に入れ煮るなり、富民は一人づゝの手前にて煮、貧民は君の野へ少きゆゑ、二人三人或は五六人寄合て、大釜にて煮なり、此物久しく煮熟されば、鹽醬噌を戴す、六時ほど煮れば、食しやすしと云へり、他國にては飢饉の兆あれば、早其備をなし、山野の木葉草根を採り貯し、米麥の類を貯る計をなし、常にもかくのごとき物を食すると見えたり、然るにうしびるのごとき物をば、毒物のやうに覺へ、山野の物は食ざるものと心得ぬるゆゑ、米麥を貯る術を知らざるなり、愚民は元より云ふにたらず、邑長保正常々心を盡しなば、濟有餘学而罪歳ことなかるべし

一 救民急務曰、嘗聞近代爲饑者、教民種薯蕷、掘其根以爲糧、大者三四斤、乾而備之、後値凶年、蒸以食飢民、味甘且美、賴以全活者甚衆と見えたり、惣じて凶年には、諸民木葉草根のみを食するゆゑ、顏色青くなり、草の色のごとくなるゆゑ、民菜色ありと云ふなり、只薯蕷を食する者

は、色青くならぬと云へり、蔓菁種子は、農家多く貯へ置、飢饉の兆見へば、田にても畠にても、少しも、隙地あらば種置て、麥の熟するまでの賦食にすべし、又種置たる蔓菁あらば、搗て餅となし、儲おき冬の飢を防べし、凶年の時のみならず、豐年にも常々心を用うべし

一　蘿蔔、野蘿蔔、胡蘿蔔、菘、牛蒡、其外家園に種る物は、民間常に食するものにて、調食の法も人々よく知る事なるゆゑ不レ載、芋は飢饉を救ふに能き物なり、多く種べし、列仙傳云、酒客爲レ梁、使下烝民一益上レ種レ芋、三年當二大饑一、卒如二其言一、而梁民得レ不レ死」と見えたり、多く種べきものなり

一　生黄豆と欅樹葉と、一同に嚼レ之、味不レ作レ嘔、可二以下一レ咽、毎日二三合にして、可レ度二一日一

唐の三合は日本の一合五勺にあたるなり

一　生松栢葉を食するには、用二茯苓骨碎補杏仁甘草一、搗羅爲レ末、取二生葉一、蘸二水袋一藥末一同、香美ありと云り

如レ此のるいはよく〱試て用うべし、今年西國にて松皮を食せし事を聞傳へ、飢民とも製して食しけるに、製法よからざるか、又松ノ木西國とちがいあるか、吐瀉腹痛して死する者多きよし、この生松葉を食する法我いまだ試ざれば、若し其毒にあたりて死するものあらんことを恐る、能試て後用べし

一　辟穀方　用二黄蠟炒粳米一、充レ饑、食二胡桃肉一即解

一　千金方　蜜二斤、白麪六斤、香油二斤、茯苓四兩、甘草二兩、生薑四兩去レ皮、乾薑二兩、炮爲レ末、

拌勻搗爲二塊子一、蒸熟陰乾爲レ末、絹袋盛、毎服一匙、冷水調下、可レ待二百日一

右四方荒政要覧に見えたり、辟穀二方は貧民の力にて調合なるべきにはあらざれども、好事の人のために載す

一　貧民大豆麹を求ることならぬゆゑ、味噌を不レ食して、本草草根のみ食ゆゑ、多其毒にあたる者あり、故貧民のために、米糀味噌の法を載するなり

一　米糀味噌の法　米糀一石、大豆二斗或は一斗　鹽二斗或は一斗五升　大豆を釜にて醬油豆程に煮て、其釜へ米糀を水にてしめり合程にねりて入、大豆の汁にて蒸して、とくと能蒸せたる時、火を止め、能搗き、鹽大豆米糀おもひ合やうに搗合せ、桶へ入置、三十日程過きて、又搗合收置程へて用る也、ひさしく置程味よし、寒中の水にて製すれば、ひさしく置て損せず、消レ食除二積滯一、膏梁人時々食レ之可也

又方　米糀一石、大豆一斗、酒糟一斗、鹽二斗

右製法のごとし

又方　米糀一石、酒糟一斗、醬油滓一斗、米糀を釜にて能蒸て搗合する也、酒糟なくば入れず共よし

一　五斗味噌の法　大豆一斗、麹一斗、酒糟一斗、米糀一斗挽りて入る　鹽一斗

右一同に搗合置きて用、甘美なり、貧民は麹を不レ入もよかるべし

一　飛驒味噌の法　大豆一斗、鹽三升

右常の味噌のごとく製し用る也、飛騨信濃の邊にては常々用る味噌也

一　末醬(タマミソ)の法　大豆能煮熟し一斗、臼にて搗、泥のごとくにし、餅子(タマ)となし、數日を經て、上に黄色出たる時、水にて洗ひ、臼に入れ搗碎、羅(フルヒ)て細末にし、鹽三升を入れ水を合せ、臼の内にてねり合せ、下にてすくひ上れば、どろ／＼とする程にして、桶に入置き、數日を經て用ゐれば、色能出味もよしといへり、上野邊にては民間常々用るよし、如ㇾ此の類は、飢饉の時のみならず、平日心を用ひ製し用ふべし、これも亦君子養ㇾ德の一端なり

風犬(ヤマヒイヌ)の患　日本には往昔その沙汰なし、享保元文の比より多くありて、人を咬、其患にかゝる者は必死す、千金方古今醫統瘍科準繩等の諸書に、治方詳なれども、其術をしらず、必死の病なりとて捨て不ㇾ治、束ㇾ手その待ㇾ死、甚哀べし、饑饉にはあづからざることなれども、人命にかゝり、民間の煩すくなからねば、予が數十人を治して、試効ある術を記す

一　風犬咬傷治方　風犬に咬れたる者あらば、急に鍼を用ひて、其瘡口の四邊を刺て血を出し、人二三人も呼集め、手先ならば肘、足先ならば膝の邊より、熱人尿をもつて、上より下の方へ尿し淋がしめ、瘡口の邊へかわる／＼尿し、淋ぎ洗ひ後、胡桃か桃核を二ツにわり、うちの肉を去り、半邊を取り、其内へ人糞を一ぱいに入れ、瘡口へ人糞の方を付ておほひふせ、殼の上より、艾をもつて、大灸百壯すべし、もし人糞かわき、殼も焦れば、又別に右のごとくし、百壯までする也、かくのごとくす

れば、瘡口より血水又あぶらのやうなるもの流出るもの也、其血水出る程は五三日も、一日に百壯づゝ毎日すべし、其あとを酒にて洗ひて後能のごひ、瘡口へは膽礬を細末にして塗付、布か木綿にてくゝり置べし、灸する時には、又酒にて膽礬を洗ひ落し、血水出るうちは灸すべし、血水止りたらば、膽礬雄黄等分にして付おくべし、又天南星防風等分細末にして付るもよし、内服には韮を搗き、しぼり汁を取り、一盞づゝ七日〳〵に飲、七々四十九日までに、七盞を飲ば毒内へ入ることなし

一　又醫者を頼み、升麻葛根湯を調合してもらい飲ば尤よし、韮汁を飲におよばず○又頭面などにて、熱人尿を用ひがたき所ならば、味噌汁を口に含み、度々吐かけ洗ひて後、葱の白を嚼み爛付、又は杏仁を嚼て塗たるもよし、然ども人糞熱人尿の妙効におよばず○もし又初誤り治して其毒内へ攻侵、百日程にして發するものは難治の患なり、然ども良醫をたのみ、舟車丸方は古今醫統痰飲門に見えたりを用ゐ、血尿を十四五度も下せば、毒盡て全活すべし、これ必死の病にあらず、唐には往古よりある事也、其治方諸書に詳に載すれども、民間にて其術をしらざるゆゑ、必死とこゝろへぬる事、不便の事なり

寶暦十二年の秋より、風犬また行はれ、咬傷せらるゝ者甚多く、予治レ之に前に記するごとくし、却よく毒氣を拔出し去れば、再發の患なし、萬全の術也、しかれども膽礬瘡口にしみ、痛甚しく、小兒婦人其痛に堪がたく、治療を憚り、禍をかうふるもの有り、仍而思ふ風犬本非時不正之氣に感じてなる病なり、其人毒に犯され、苦にたへず、狂ひ走り人を咬む、犬牙の熱毒、瘡口より襲ひ入經

絡一、客毒火熱生レ風、逐レ經入レ裏、攻二臟腑一、寒熱交作、口禁咬牙角弓反張、或口吐二涎沫一、身凉自汗、畢丸內吊、便溺閉結、舌縮飮食咽に下らずして死す、其症破傷風に異ことなし、先賢治レ之、定風散の類を以てする尤理ある事を悟り、升麻葛根湯に、南星防風を加味煎服せしめ、前に記するごとく、瘡口の四邊を三稜鍼にて刺し、熱人尿を上より下の方へ尿し、淋洗ひ、胡桃殼半邊へ、人糞を塡滿、瘡口へおほひふせ、殼の上より大灸百壯すへ、其跡を酒にて洗ひ、南星防風雄黃、各等分細末し、瘡口に敷（ツケ）、其上へ草麻子を搗爛し、餠子のごとくし蓋ひ、又其上へ何膏藥にても貼り、風寒を防ぎ、布木綿にてくゝり置、血脂黃水流出る內は、每日人糞の灸、五六日施し、其後は灸を止め、竹篦にて瘡口の腐肉を去り、腐肉去り盡る時、南星、防風、雄黃の細末ばかり敷（ツケ）、布木綿にてくゝり置也、每日愈るまで如レ此すれば、再發することなし、療治する時、かならず風にあたらざるやうにすべし、瘡口に風いれば、乍ち破傷風となり、急變出るものなり、此法小兒婦人といへども、瘡口しみ痛ことなく、再發の患なし、百發百中の妙法也、牛馬の風犬に咬れたるも如レ此に療治しなば必死の患をのがるべし

一　庸醫誤治し、後再發するに二症有り、瘡口未レ愈に、乍發汗甚しく、亡陽して死する有り、多くは救ひがたし、委中の穴を三稜鍼にて刺し血を出し、天南星、防風、等分細末、童便にて飮しめよ、童便なくば、大人の小便にてもよし、効なくば韮汁姜汁等分にし、大茶碗にて壹盃、白芷蟬退、等分

細末、毎服二三匁入二三盃用ひよ、又舟車丸百粒、冷水にて用うべし、又一症有、瘡口閉合し、四十八九日或七八十日に至り、少く惡寒し、睾丸小腹へ引あげ、便溺閉結し、歩行すれば呼吸を引つめ、三四日を歴て、口禁咬牙角弓反張、口吐涎沫、舌縮飲食咽に下らずして、死もの有り、其患甚しきにいたりては、良醫といへども救ひがたし、初少しく惡寒し、睾丸内吊し、便溺閉結を覺へば即ち導水丸、禹功散を用ゐ小便を利せよ、効なくして、角弓反張せんとするやうすならば、委中尺澤を刺し、血を出し、舟車丸百餘粒、冷水にて用ゐ、血尿を下すべし、此術庸醫の能する所にあらず、一器量ある良醫を頼なば、破傷風の治例によりて、千變萬化の妙術を施し、必死を救ふ奇策あるべし、最初症少しなりとて、夢々庸醫をたのむことなかれ、かならず死すること疑ひなし

一　食毒にて再發するものあり、禁宜を辨ぜずんばあるべからず

犬の肉、（終身食ふべからず）胡麻、麻仁（アサノミ）、赤小豆、油あげ類、芋（さといも）、素麪、大蒜（にんにく）、葱、野びる、胡葱（あさつき）、小胡葱、ちもと、かりひる、わけぎ

惣じてねぎあさつきに類したる臭氣ある物、百日食べからず、只韮ばかり食ふて害なし、生魚類惡しし、別て川魚惡し、酒は一ヶ年禁ずべし、右の諸禁を犯し、再發するものは救ひがたし、可レ愼

一　蛇咬傷治方　山中などにて、毒蛇に手か足を咬れば、急に地を掘り、咬れたる手足をその内へ入、上より土をかけ、かたく押付、其上より熱人尿を尿し淋ぎ、蛇の咬たる口より、毒氣を洩して土を去

り、瘡口へ人尿をしかけ、後人糞を厚く塗り、布か木綿にてくゝり、宿に歸り後冷酒にて人糞を洗去り、雄黄乾姜、等分細末し、馬歯莧(スベリヒユ)汁に調へ、瘡口計り明け、四邊へ敷、そのうへを布にてくゝり置くべし、内服には、紫莧(アカヒユ)の汁を取、一二盞飲べし、若其村に醫者あらば、升麻葛根湯をもらひ飲べし

一 蛇人の口並に、陰門肛門へ入ることあらば、蛇半分も外へ出てゝある處を、細糸にてくゝり置、能きれる小刀又は剃刀にて尾を破、其内へ胡椒二三粒入れ、强くくゝり置、白芷、細辛、雄黄、五靈脂各等分細末し、冷酒にて調服すれば、蛇死して出るなり、上々の麝香少加ふればなほよし

一 蛇に咬れたる人、川を渡るべからず、惣て水にて手足を洗ふべからず、痛强く、毒氣のぼるもの也

一 蛇に咬れたる人、酸物を喰ふべからず、梅子梅漬梅ぼしの類よろしからず、おほきに痛出毒のぼるものなり

一 蜂蜈蚣其外毒蟲に螫れたるには、雄黄の細末、水に調敷べし、痛つよくば酒にて飲むべし

一 馬に咬れ、痛强く皮肉破れざるには、蘿蔔の絞汁を塗べし、若咬傷れば、生栗を嚼で付よ、乾栗を細末して、胡麻油にて調敷もよし

一 猫の咬たるに、薄荷汁を塗べし、又犬の毛を燒て傅たるも妙也、又犬糞を塗もよし

一 鼠の咬たるには、猫の涎を塗るべし、猫の毛を傅るもよし、それにて効なくば、上々の麝香の末

を井唾にて調塗るべし、麝香にあらざれば効なし、うつし麝香は赤小豆の粉なり、用うべからず

一　熊に傷られたるには、葛根を搗爛かし敷べし、内服にも葛根の汁を一二盞飲べし

一　凡一切蟲獸に咬傷られ、痛甚しく、毒内へ入るべきやうすならば、良醫を頼、導水丸、禹功散の類を用ゐて下すべし、其外にも數多の妙術もあるべし、前にもいふごとく庸醫をたのむべからず

食二草木葉一解毒法(くさきのはをくらふどくけしのはう)

荒政要覽云、嘗見下苦行僧人入レ山耽レ靜、必以レ鹽入二竹筒一携往上、云、食二草葉一有レ毒、唯鹽可レ解、しかれば荒歳第一の解毒は鹽にしくはなし、飢民の死するは、鹽の貯へ盡て後、毒草を食するゆゑ死するよし、今こゝろむるに皆しかり、鹽にて解せざるは、救荒解毒丹を用うべし、もし毒つよくして解せずんは、辟穢廣濟丹をかね用うべし、此薬は四五十ヶ村へ施薬したるなり、もしつよく毒にあたりたるものは、求め用ゆべし、又惣身浮腫水腫のごとくなるのみにて、腫症なきものは、五加木の根を煎じ飲ば、腫ひくものなり

牧民忠告云、災異之生、常出二於人所一レ不レ意、凡素有二其備一、雖レ甚レ災不レ足レ爲レ憂也、今民間多無二委積一、水旱の災あれば、茫無レ所レ措レ手、因荒天札之變は、天災にして、人力のおよばざる事なれ

ども、至誠動ニ天地一、感ニ鬼神一しめし事、古今歷々としてある事なれば、水旱の災、凶荒天札の變あらば、必ず祈禱すべき事也、祈禱といへば巫姬神巫にのみまかせ置き、貧民を苦しめ、莫太の米錢を費すゆゑ、却て水旱の災より甚し、何ぞ動ニ天地一、感ニ鬼神一むる事あらんや、元代に關陝の地、六年大旱、饑人相食の時、張希孟至ニ華山下一、爲レ民祈レ雨、雨大行るがごときは、以ニ惻怛之誠一、一夕感ニ天雨一也、肝入組頭たるものも、至誠にして祈らば、何ぞ其感應なからんや

祈禱

張希孟云、凡有ニ祈禱一、不ニ必勞一レ衆、齋居三日、以思ニ己愆一、民有レ寃歟、己有レ贓歟、政事有レ未レ善歟、報レ國之心有レ未レ誠歟、無則如レ儀行レ事、有則必俟ニ追改一、而後禱焉、夫動ニ天地一、感ニ鬼神一、非ニ至誠一不可、纖毫之愿未レ除、則彼此邈然矣」かくのごとき道理を考へ、衆農を勞せしむることなく、齋戒沐浴して、己が愆を改め、至誠惻怛之心を以て、祈禱しなば、張希孟感ニ天雨一のしるしも、などかなかるべけん、「宋均立レ德、猛虎渡レ河、卓茂行レ化、蝗不レ入レ境」虎蝗すら德化に感ずることかくのごとし、况於ニ天地鬼神一乎

牧民忠告は、元の西臺中丞張養浩字希孟といふ人の作るところ也、同じ代の彭炳と云へる人、其書に序して曰、「高唐鄒從吉爲ニ崇安令一、得ニ其書一推ニ行之一、崇邑大治、自ニ垂白之老一、皆言、生未ニ嘗見ニ此賢令一也、深山窮谷之民、皆設ニ主生祠一、令ニ以祝ニ其眉壽一、忠告之明効有レ是哉、他日從吉謂レ炳曰、愚得ニ中丞一二言一、而幸不ニ多得一、雖ニ於民一、皆中丞賜也」と記せり、日本にても、土津靈神（會津の城主肥後守正之公）御在世の御時、板倉公（防州公弟內膳正重矩公）京都より牧民忠告一部を贈りたまひたりければ、靈神御覽ありて、有司たる者讀ずんばあるべからざるの書なりとて、再數部を乞せたまひしかば、板倉公又二部を贈らる、靈神甚悅せたまひ、一部は御國元の有司へ賜り、一部をば賀州公（賀州大守綱利公土津靈神御聟也）へ贈らせられ、一部は常々御側にて讀しめ聞たまひ、御政務に御心を盡され、御國に社倉を建られ、四民を惠ませたまふゆゑ、御國能治り、四民安堵の思ひをなしけるとかや、御賢德天下にあらはれさせたまひ、土津靈神と祝はれさせたまひたるも、亦忠告のこゝろを得させたまふしるしなるべし、これは國の大守の御事にてわたらせたまふに、賤しき一村の長たる身にて、學びたてまつらんこと、いと恐多き御事也といはん人もあるべけれど左にはあらず、「天下之本在レ國、國之本在レ家、家之本在レ身」大なれば天下、小なれば一村を治るに、其理何ぞたがふ事あらんや、一村の長となり、一村の民の飢寒を救ふ事も、常々かくのごとく心を盡しなば、其術のなき事やあるべき、上卷に述たる樹藝の術も、勤ておこたらずんば、十年の後には、必ず僻村の小社倉となりなん、尚又文字知れる人にた

よりて、其法を問ひはかり牧民の道を學び、忠告のこゝろを推行事、土津靈神鄒從吉二公のごとくならば、後來設主生祠、令以祝其眉壽の明効あらんこと、指掌がごとくならん

書備荒錄後

淸庵建氏者、夫尙古之人乎、其作備荒錄、而拯茲䘨於凋瘵、治其人於未病、其憂國憫民之深、何爲至於此耶、世人開口、輒云仁云醫、何其言之易々也、蓋仁之爲仁、醫之爲醫、既有其實、而後名或由之焉、抑淸庵者、儒乎醫乎、觀其爲書、則理民經國之本、王道仁者之事備矣、且其於演明本草性味、教民豫免茜毒者、則醫家之業盡矣、可謂勗矣、請嘗論之、夫古者儒醫不有二名、儒則未不爲醫、而醫固未不儒也、自黃岐氏以降、史策所載、歷々可觀也、從有專門、而岐而爲二、爲三、爲八家九流、嗟鹵莽杜撰、未有甚於此時者也、是何則爲藝爲技、以爲活計之媒也、入苟計活己、則何暇而活人之爲耶、其於仁者之心、實天淵耳、蓋若淸庵之爲、於今則如迂、雖然於仁者務本之心、亦氷鑑玉臺哉、故予以尙古之君子望之、退而省之、亦以足大發彼醫

之爲書之道矣、吁我復何加焉哉、由而思之、固自有土宜、天下之地產不可一律、則奚止此書之所載耳乎哉、然則公之梓之、以傳布四方、廣與天下共焉、則必也、將有感起貂續者、庶幾無虛田道珠之櫝、詩曰、倡之和之、善哉建氏既唱之、自今之後、又和之、以成其美者誰耶

時寶曆庚辰三月朔日

前典藥頭延壽院講學　土州　井戶　某　識于江都中橋之通齋

中椒堂之刻茲書也、非爲奇貨居之、出于深感吾先生博濟之念也、先生業外科、而非世俗所謂外科者流之比、至湯液鍼灸之術、活人無算、若夫黴瘡癩風、醫家所難、嘗論之曰、黴瘡是傷濕、癩風概多傷寒、乃處剤投藥、奇驗隨手、故疲癃殘疾者、無日不至、如是編蓋其緒餘云

明和辛卯之春　門人　曾根　希方　意　頓首拜書

民間備荒錄卷下終

寛政八丙辰歳三月

大坂書林

河内屋八兵衛

丹波屋助七

宮崎幸麿

小西武治

校

大正四年一月十七日印刷
大正四年一月二十日發行

日本經濟叢書
卷八
非賣品

不許複製

編者　瀧本誠一

發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　日本經濟叢書刊行會
東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
電話本局三一八五・振替口座東京二六八一〇

理事　高木[illegible]之丞
鹽谷壽作
佐藤卯兵衛

6. **JŌGEN,** *or a memorial presented to the Lord of Sendai on political matters* 1754

by **AN ANONYMOUS**

7. **MINKAN BIKWŌROKU,** *or considerations on the means of providing for famine* 1755

by **TATEBE SEI-AN**

CONTENTS

of the eighth volume

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. VIII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1915.